

水泡の夢

Memories at Past

Part1. 赤い格子の町・上

彼には最初から父親がいなかった。彼はそれを多少寂しく思ったり、お父さんが欲しいなどと他愛のないことも考えたりしていたが、本心のところ、切実に父親たる存在が欲しいかどうかは分からなかった。誰かの家に行くと、夕方になれば帰ってくる父がいる。単純に他人と比べて足りないものが欲しかっただけなのかも知れない。

（お父さんが、欲しいよう）

勇気を絞り起こして彼が言うと、母親はひっそり笑った。

（愛しているわ、私の可愛い子……）

母の顔を見た時、多分父に関する事柄全ては口にしてはいけないのだと彼は知った。現実彼には母親しかいなかったし、母は彼を育てていくことで必死であったから、そのことも心に掛かっていたのだろう。

生活はまるきり平穏とはいえなかった。母は時折、何かに追い立てられるように、全てを放擲して彼の手を引き、住む町を変えた。どこかに向かっているということではなく、それはまるで出鱈目な転居の軌跡であった。だが生活がそれほど苦しくなかったのは、母が隠し持っていた幾つかの宝石と、母自身の手から紡がれる美しい模様の功績といえた。糸細工と呼ばれている手刺しの美しい刺繍の技術を身につけている者は珍しく、母の織りなす綾はよい値段で金に換わった。裕福というわけにはいかないが、不足はなかった。

――それは彼にしてみれば唐突に始まった物語であった。それを彼は、5才になったばかりの冬だと記憶している。突然の転居の数は多すぎて、それに対する感覚は完全に麻痺していたといってもいい。その晩彼が夜中にふと目を醒ましたのは、偶然という天の好意だったのかも知れなかった。隣室から押し殺した声がする。その声に籠もった緊張感に、彼は母親の異変を感じて寝台を滑り降りた。

「帰って下さい」

寝室の扉のすぐ外で、母の声がする。彼は出ていこうか否かを迷って一瞬立ちつくした。子供ながらに刷り込まれてきたことは足かせになる。

（髪を染めていないときは、絶対に外に出ては駄目よ）

彼の髪は瑠璃石のような、純粹で鮮やかな青をしていた。母はそれを隠蔽した。髪はいつでも黒に染められて、少しでも青い色が覗くときは、決して外へ出しては貰えなかった。彼がそれを押して外へ行きたいと泣いてだだをこねる日は、寝室に閉じこめまで母は彼を外に出さなかった。そのために寝室には外側からかかる鍵が取り付けられていた。母の頑なさを不思議に思っても、彼は何故かを聞いたりしなかった。彼は年齢に似合わず聡い部分があった。

髪をどうしよう、と彼は自分の肩の辺りで揃えた部分に触れながら考え込む。今夜は風呂を使ったから、染め粉は全部落ちてしまっている。明日の朝にまた染め直すことになるはずだったが、今は地毛の青い髪そのものだ。外に出ては駄目、というのは他人に姿を見せてはいけないという言葉そのものだったし、彼はそれくらいなら理解していた。それに、どうやら自分が無戸籍児であることも。

年齢の同じ子供たちは昼間学校へ行っている。満で5才になれば誰でも迎え入れてくれる公立学校から、彼は招かれていない。書類がないのだ。無戸籍の子供はそうした国からの保養一切合

切を受け取る権利がない。何もかもは戸籍証明と引き替えで、彼にはそれがなかった。だから、彼は自分がどうやらこの国の制度から浮いた存在であると感じていたし、髪のことその一部なのだと考えていた。

「あの子は、私の子です……」

母の声が、一層低くなる。扉の向こうで誰かが吐息で笑った気配がした。

「あの子は私の子です、私の大切な子なんです、お願い、許して……」

お母さん。彼は呟く。これほど切羽詰まった母の声を聞くのは初めてだった。どうしようか逡巡のままに立ちつくしていると、突然扉が開いた。薄い闇に慣れた目には光は強烈で、思わず彼は手で眩しさを遮る。かすれた吐息がした。

「これは……」

知らない男の声で、まだ光に馴染まない目を懸命に睨めて彼は自分の前に立つ影を見上げる。目があつたような気がした瞬間、影はふっと下へ沈んだ。それが自分に膝をついているのだと分かるまで、ほんの少しの時間が必要だった。

「カーズ様でいらっしゃいますね？ ああ、本当によく似ておられる……」

彼は後じさる。明らかに自分に向けた言葉であっても、その名には聞き覚えがなかったからだ。

困惑して母を見ると、そこにあつたのは淡く歪んだ表情だった。お母さん、とそちらへ行こうとすると、男がその身体で遮った。

「いけません。あれのことは、マリアとお呼びになりますよう」

彼は明らかに蒼白となった母を見、そして男を見た。多少の時間を混乱に過ごし、彼はやや俯く。考え込むような顔になってしまった彼に気遣ったのか、男が再び、彼を聞いたことのない名で呼んだ。彼はぴくりと聡明な額を上げた。まっすぐに向かう視線のしなやかさに、男は僅かに居心地悪く背を正した。あるいは、怯んだとも言えた。

「どうして？」

彼は男を見つめながら言った。男は何度も頷いて見せた。

「それが身分というものであるからです。あれのことは、母とお呼びになりませんよう。母君が悲しまれます」

言葉の意味が彼にはよく分からなかった。黙っていると、男は練れた笑みを浮かべた。その表情に浮かんでいる優しさだけを鵜呑みにするのが危険だという、本能のようなものが、彼の内側で叫び始める。

駄目だ。彼は見切る。こいつを信じては、いけない。

「お探しいたしました。どうか、非才と共に帝都へご帰還を。お父上も、兄君も弟君も、カーズ様のお姿を見る日を心待ちにしておりますよ」

信じてはいけない、といい聞かせていた彼にとっても、父、そして兄弟という言葉は十分に不意打ちだった。

「――いるの……？」

思わず呟いた言葉に、彼は自分で驚愕していた。父。兄。弟。この母以外に自分に連なる者がいたということが、処理できなくて混乱している。駄目、と彼は首を振る。

男の口調からは甘く誘う、そんな執拗さが感じられた。例えば甘いものをくれるとか、高価なものを買って上げるとか、そんな囁きに負けて暗い路地へ消えていった子供の話を彼は母から執拗に聞かされていた。母は半ば神経質ともいえるしつこさで、彼にそれを刷り込んだのだ。知っている人からでも、声をかけられてついていっては駄目よ。どんなにいい話でも、お母さんに話してくれなくては駄目。いいわね、約束できるわね？ 何を言っても、絶対に、ついていっては駄目よ……

そう、多分今考えなくてはいけないのは、この言葉の方だ。彼は鼓動が上擦ってきた胸を押さえる。目を逸らさなくてはと思う傍らから、男の囁いた単語がぐるぐると脳裏を回った。

父？ 兄？ 弟？ ——それは一体、何の話なのだろう？ 男の言葉は更にそれをあおるものであった。

「ええ、勿論。皆様お元気ですとも」

更に男が何かをいおうとするのを、彼は片手を上げて遮った。待って、というと男は穏やかに黙り込んだ。

「僕は、お父さんに会えるのかな？」

男は破顔する。これはまさしく、歓喜の顔であった。

彼は思う、後10年経ってこの笑顔を見ればきっと自分はこう名付けただろう——舌なめずり。このときの彼はそれを表現する言葉を知らなかったが、男の見せようとしないう部分が酷く混濁した闇であることを、肌を感じていた。だから殊更笑って見せた。彼の顔立ちは同年代の子供たち、更にいうなら少女たちの中に混じってさえ、輝くように美しく、くっきりと整っていた。それまで満面の笑顔を向けて彼への矛先をゆるめなかったのは、母だけだったのだ。

案の定、男は呆気にとられたような顔をした。僅かに頬に血の気が上がってくる。彼の笑みは、長じて大人と呼ばれる年齢に入った後でも万人を動かす最大の魅惑であった。

「僕……お父さんに会いたい」

彼はそう絞り出した。声が若干震えていたのを、子供なりの幼い惑乱のせいだと思った男が、満面の笑みで頷く。視界の隅で母が両手で顔を覆ったのが見えた。男が自分を抱き上げる。母の脇をすり抜けて外へ出ようとした時、彼は待って、と言った。

「リーリーを連れて行かなきゃ。僕がいてやらないと、あいつ、眠れないんだ」

「リーリー？」

「猫だよ。黒いの」

男は軽く頷き、彼を一端腕から下ろして奥の寝室へ入っていく。その姿が寝室の闇に紛れた瞬間、彼は母親を見上げてお母さん、と囁いた。その一言で母の目つきに炎がともったように見えた。陰しく真剣な母の顔を見るのは初めてで、彼は多少それに感嘆を覚える。半ば表情は怒りに似ており、それが自分を連れていこうとした事実に対するものであることを、彼は感覚で読みとっていた。

母は素早く部屋を横切り、寝室の扉を閉めた。外側から鍵を回す。彼に謹慎を矯正するためにつけられていた鍵だから、内側からでは開かないようになっている。それまで散々嫌な思いをさせられてきた外鍵に助けられて彼は少し口元を歪めた。寝室の扉は激しく叩かれて、中から何か

を吠えている男の声がする。意味はよく分からなかったが、籠もる声音が良くない種類であることが感じ取れれば十分といえた。

母はぼんやりなどしていなかった。彼に沢山の服を着せて髪をスカーフで捲いて中に完全に押し込み、自分もまた最低限の荷物を作った。この街を出ていくのだと彼は悟った。今までも、こんな事はたくさんあった。だから、彼はそれには驚かない。母がいつものように宝石と現金を小さな鞆に押し込むのも、自分の手を引いて足早に階段を駆け下りるのも、いつものことだ。

外に出ると、きんと冷えた夜だった。下には男が乗ってきたらしい馬が繋がれている。母は手綱を解くと鞆で思い切り馬の尻を叩いた。驚いた馬が一声いなないて、街のどこかへ野放図にかけ去っていく。

それを終えると母は家から離れた場所で辻馬車を拾った。夜明けの船という単語が聞こえたから、少し離れた河岸の街からは乗船するようだった。大河ユーエリを下る船は3日に1便、乗り込んでしまえば取りあえずは追っ手を振りきることが出来る。御者が急ぎだねと暗に小金を要求してきたから、それも母の思惑の範疇であった。

ただ、彼がこの辺りの事情を理解したのはもう少し先のことだ。この時、彼は馬車の窓から遠くなる街を眺めてこみ上げてくる涙をこらえるので精一杯だった。

リーリー。僕の黒猫。

それはあまり外に出して貰えず、転居が多く、学校へ行けなかった彼の唯一の話し相手であり、友達であったぬいぐるみに彼が与えた名前だった。それを置いて行かなくてはならなかった悲しみが、彼の全てだった。街の明かりが闇に消えて、彼は窓から離れた。諦めなくてはいけないことが、それまでも沢山あった。置いて行くしかなかった友達のことも、きっとその中の一つになってしまった。

彼が黙って俯いていると、母が自分を抱き寄せたのが分かった。豊かな胸に顔を寄せて啜り泣いていると、ごめんね、という声が聞こえた。彼は首を振り、そしてお母さん、と泣きくれた後特有のかすれた声で言った。

「お父さんとか、お兄ちゃんとかって、なんのこと……？」

母はじっと彼を見つめた。

……長い、長い時間が流れた。

「……ごめんね、今はまだ、あなたは知るべきじゃないのよ。でも、15才になったらね。そうしたら教えてあげる。だから、それまではいい子にして、お母さんの言うことを聞いて頂戴」

彼はもっと何かを聞きたいのをこらえて頷く。母の身体が小刻みに震えているのに気付いたからだ。馬車の中は温められていて寒くはなかった。

「でも、覚えておいて。お前の母親は私よ。私一人よ。お前は私の子よ、私の子なのよ……」

母の声音には反駁を許さないような逼迫があり、彼はそれに頷くしかできなかった。そうだよ、と囁くと、母が彼の小さな身体をきつく抱きしめた。その腕がまだ痙攣するようにぶれていること、私の子なのよとひたすら繰り返す細い声、その2つが延々と彼の周囲を取り巻いていた。

それはもう、8年も前の物語。

彼が初めて、失うことを悲しんだ夜。

それから3年が平穏に過ぎた。それまでの流転の生活からすれば、文字通り平穏であった。男の来訪から逃れた母は、腹を据えたようだった。船を下りた街で彼は服を買い換えた。

黒や青の動きやすく遊びやすい服から、レースのついたブラウスや小花の柄の散ったスカートへ。髪を丁寧に梳いてリボンを結ぶと鏡の中にいるのはどこから見ても幼い少女であった。

いやだと彼はごねてみせたが、母親の顔にしばらく出てこなかった焦燥と苦悩が現れてきて、それを言うのを飲み込んだ。目立たない方がいいのだということを、彼はそれとなく理解していた。

長い旅程の後にたどり着いたのは帝都ザクリアであった。女の子のふりを出来るなら学校に行ってもいいという母の許しが出て、彼はそれに飛びついた。彼は真実、寂しかった。

.....それが戸籍の記載にあわせた擬態であることを彼が知ったのはもう少し後だ。母は自分の持てる殆どの金を注ぎ込んで戸籍を買ったのだった。勿論正規の取引ではないが、無戸籍家庭であることと非常に整った顔立ちの息子がいるという二つの特定条件をやりすごしてしまえば、年月はなるほど無事に過ぎていくものであった。

彼は黒く染めた髪を伸ばし、眼鏡をかけた。美少女ということになってしまうと少年たちがそれはそれは煩わしかったからだ。彼のその態度が「男嫌い」と映ったのだろう、少女たちとはそれなりにうまく運ぶことが出来た。淡い恋心を抱いた相手もいたが、かなわない望みでもあった。

女として生きていく不都合は次第に彼に蓄積されていった。少年たちからは相変わらず絶賛を受けた。華奢な体つき、優しい笑顔、どんなに必死で隠そうとしても零れるような美貌は幼いながらに姫君のように崇拝されるに十分だった。

少年たちの視線に次第に過敏になっていく彼を、少女たちは守ろうとしてくれた。だが、少女たちの中にも彼の居場所はなかった。元々、かけ離れた思考癖の生き物なのだということが次第に理解されて行くばかりであった。彼女たちはいつでも笑いあいお喋りに熱中していたが、内容は恋愛のことばかりで正直辟易した。

彼がその話に決して加わろうとしないのは、すぐに知れた。少女たちはそれが原因で彼を苛めたりはしなかったが、有る意味で彼には辛い居場所を与えた。――よそよそしくするわけでもなく冷たくするわけでもなく、ただ完全には立ち入らせない賓客としての扱い。

成績は良かった。それも飛び抜けて良くできた。大抵のことは一度目にすれば理解できたし、すんなり覚えることも難しくなかった。彼にとっては何もかも、立ち上がって歩くほど簡単なことだったのだ。

最初の飛び級の試験を満点で通過し、彼は特待で優等校へ進んだ。学費は全て免除だった。本も、制服も、全てが支給された。その学校でも難なく学年主席を飾り一年で飛び級の試験に2つ通ると、帝立の学舎へ飛び級での入学試験招致を受けた。

中央中等学院と呼ばれるそこは、成人前の子供たちのための、国で最高の学び家であった。本来皇族と貴族のための教育を引き受ける機関だが、同時に将来のために優秀な子供たちの育成も行っており、入学した子供は自動的に国の最高学府である中央高等学院への進学が保証される。

だが、母の顔は彼が難しいとされる試験を楽々と突破していくに従って曇っていった。素直に喜べない理由を彼は薄く察してはいたが、何故という疑問に答えて貰えない苛立ちも事実であった。

（答えを間違えるのよ）

母は悲愴という目つきで彼にそう言った。

（お願い、分かる答えでもわからないと書いて頂戴。あの学校に行っては駄目。ねえ、勉強が出来たって……お前はちゃんとしたお役人になれるわけではないのよ……）

彼はじっと俯いた。母の言うことも分かった。彼は真実男であるが、戸籍は女として記載されている。学家の中ではどうにか過ごしていけることも、外へ出れば違うかも知れない。買い取った戸籍は綻びなく彼と母を守ってくれたが、事実が頑として異なっていることが知れたら。彼はじいっとお願いだからと繰り返す母の、粗末な靴を見つめる。

けれど、自分の力でこの母に安穩とした暮らし、朝から晩まで働かなくてもいいような暮らしを与えてやりたかった。友達を部屋に捨ててきた夜のようなことが再び起こるのは避けなくてはいいけない、でも。

僕は、僕だ。

幼い矜持は理屈と納得の間に均衡点を見つけられない。

彼は母の言葉に曖昧に頷いて試験会場へ向かった。試験を休むことは無意味だった。後日再試験となるのに決まっているからだ。

試験会場には彼より年上の子供たちばかりだった。彼はこの場でも、そして記録の上でも最年少の受験者であった。最初の一年を殆ど留年していることを考えると驚異的だと大人は誰でもそう言った。

試験は簡単だった。少なくとも彼にはそう思えた。開始してそれほど経たない内に全ての解答の記入を終えて、彼はそっと周囲を見回す。

――多分、合格してしまうだろう。周囲の少年や少女たちの様子を見てみると必然に思われた。彼は自分がびっしり書き込んだ解答用紙に目を落とす。

数学。古典。次元換算。化学。歴史。魔導。

馬鹿馬鹿しいほど、簡単な問題ばかり。ちょっと本を読んで考えればすぐに導き出せる答えばかりだ……僕にとっては。

彼は目を閉じて、この学校に入学する自分、を考えてみる。

中等学院は修了年限6年となっている。今8才だから、順当にいけば14才でここを卒業し、中央高等学院へ進むことになるだろう。多分、それは最年少の記録になる。中等学院には飛び級の制度がない。単位を取って上級課程に進むことは可能だが、全ての学課を履修して年限が残っていれば新入生への簡単な講義や自主履修の手伝いをすることになる。

彼は、そうなったときのことを正確に思い描くことが出来た。新入生といってもその時の自分と同じ年齢が中心だ。妬み、やっかみ、そんなものと同時に降り注がれる感嘆と賞賛と……憧憬の視線。

彼は少し、溜息をつく。それは今までの経緯の忠実な複写であった。

彼の吐息に、隣の席に座った少年がちらりと彼を見た。彼は少年の手元へ視線を動かす。解答

用紙は3科目目の半ばから以降が白紙のままだった。時間はそう残っていない。落伍するのを覚悟したのか、少年は彼にそっと笑い、溜息をついて解答用紙に戻った。

彼はつま先で、少年の足をつついた。自分の答案用紙をわし掴み、試験官の目が逸れた隙に机の下からそれを押しつける。同情に対する怒りと、刹那的な希望が少年の顔に相互によぎった。彼は首を振る。一瞬目があって、少年は次の瞬間に自分の答案用紙を彼と同じようにして渡してきた。

名前をお互いに書き直し、素知らぬ顔で提出すると、彼は逃げるように家に戻った。不合格は決まっているようなものだったが、それでもあの少年がどうなったかも気になる。だから、不合格の通知が学校に来たときに彼は教師に聞いてみた。今年の主席だという少年の名は、自分が書き直す前に答案に書かれていた名前であった。

（満点だそうだよ。前代未聞だとすごい騒ぎになっている）

彼は一瞬を置いて、頷いた。

そして逆転の運命はすぐに訪れた。不合格通知から3日目、彼は教師に呼び出され、何故不正をしたのかと尋ねられた。

「不正なんか、してません」

彼は呟くように答えた。教師はゆるく首を振った。

「字が全く違うそうだよ。私もあちらに呼び出されて解答用紙をみたが、あれは君の字ではないね。満点を取った方の解答用紙が君の字に見える」

「……不正は、してません……」

「君と彼は席が隣同士だったそうだね。君は割に早く答えを書き終わったようだったと試験管の方も言っていた」

「本当に、わたし……」

「相手の子も認めているんだよ。自分の点数が満点だったと知って、泣きながら謝ってきたそうだ」

「……」

「教えてくれないか。何故、答案をすり替えるようなことをしたのかな？ 君は主席で、前代未聞の満点で、史上最年少で、記録づくめで合格したのに？」

「……」

彼は俯いた。事情は何一つ、口に出来なかった。口惜しさと諦めなければいけないのだという飲み込めなさが、涙になって落ちた。嗚咽になってしまった彼から事情を聞くのを諦めて、教師は母親を呼びだした。

母は教師からおおよその説明を受けて、彼を見た。彼は涙でしゃくり上げながら母親を見上げた。

家に戻ると母親はぐったりと椅子に座り込んだ。彼はごめんなさいと呟いた。母はゆるく首を振ると、彼を手で招いた。母の側によると、温かでふんわりとした匂いがした。

「あの学校は駄目。あそこでなかったら、どこでも好きなところへ行っていていいから、中央中等学院だけはやめてちょうだい。お願いよ……」

頷こうとしたとき、先にその言葉が唇から零れた。

「いやだ」

彼は自分の言葉に今更気付かされたようにはっとし、それから毅然として首をもたげた。

「僕は、学校に行きたい。早く大人になりたいんだ」

「駄目よ……中央中等だけは、行っては駄目。お願い、そこだけは、本当に諦めて頂戴、お願いだから」

「いやだ！」

彼は首を振る。今まで仕方ないと飲み込んできたことや、我慢してきた不都合が一気に喉を逆流して駆け上がってくる。

「僕は学校に行きたい！僕は本当は女の格好するのだって、女言葉つかうのだって、全部、全部いやなんだ！でもちゃんと女の子のふりだってしてるじゃないか！髪だって毎日染めてるじゃないか！僕は学校に行きたい！中央中等から中央高院へ行って、そこでだって絶対に一番になってみせる！そしたら学者にだって偉い役人にだって、僕がやりたい事を選べるんだ！」

母親は怯えたように首を振るばかりだった。どうして、と彼は怒りのままに自分の髪に手を入れて、ぐしゃぐしゃにかき乱す。母が丁寧に編み上げた髪が乱れてまとまりなく崩れた。

「どうしてだよ！僕は、学校に行きたいんだ！」

それだけを叫んで彼は自分の部屋に駆け込む。着ていた少女の服装を全て脱ぎ散らかして毛布をかぶり、わあわあ泣いていると、母が寝台に腰を下ろす気配がした。優しく、背中を撫でてくれる手。その手に宥められて収まっていく涙が悔しくもあった。

「中央中等に行きたいのね……お前はもっと、沢山のことをしなくてはいけないし、決して学者や役人になんかなれないわ。分かる？戸籍はちゃんとしているけど、学者にも役人にも、身元の保証人が必要なの。私たちにはそんな人はいないの、分かるでしょう？」

彼は遅れて頷いた。そう、と呟くと何かが急激に落胆に変わった。

「でも学校に行きたいのね……そうね、でも、お前にはこれ以上は負担だと思うのよ。お前もすぐに大きくなるわ。男の子だから、声が変わる」

彼は毛布の下から顔を出して、母親を覗いた。声、と聞き返すと、母は苦笑した。

「男の子は12、3才くらいから声が低くなって、身体もどんどん男っぽくなっていくわ。喉のこの部分が出て、一目で男だって分かるようになるの。だから、女の子の姿でいられるのもその頃までね……そうしたらいずれ、辞めなくてはいけないわ……」

彼は母さん、と強い声を出した。

「声が変わるのなら、最初から喋らない。太らないようにする。化粧して学校に行けば誤魔化せる。制服のブラウスは普通の形だけど……」

彼は寝台の上に起き上がり、教師から押しつけられた入学手続きの書類を鞆から抜き出した。「ブラウスと制服は、全国の中等学院の共通だけど、中央中等だけは特別の学生ばかりだから、目印にスカーフを巻くんだ。首の所に」

一瞬、母が返答を見つけられないのに便乗して、彼は強く言った。

「だから僕は、中等へ行くからね。学者や役人になれなくても、他にも沢山やれることはあるは

ずだから。僕は、学校に行けるならどんなことでもする。将来きっと役にたつからね。それが母さんと、僕のためなんだ」

――一口がきけなくなってしまったんです。

母は周囲の人々と学院の関係者にそう説明して回った。

不正だとか、不合格の撤回だとか、そんなことで暫く塞ぎ込んでいたら、喋り方を忘れてしまったみたいで。ええ、ええ、精神的なものなので、好転することもあると思いますし、魔導の研究の実地や古典の朗読などを配慮していただければ十分だと思います。身体が少し弱めなので、出来れば運動科目は見学ということに……

そしてそれを学院側は承知した。彼の優秀すぎるほどの成績はそれらを一介の塵にしてしまう力があつた。

彼が最初に教室に入っていくと、ざわめきがやんだ。天才少女という言葉は既に流布していたし、そうでなくても彼はこの沈黙に慣れていた。実年齢よりも少し年上に見える顔立ちに、淡い色の口紅を差して眉を整えた彼の美貌は、その場の全員に一瞬言葉を忘却させるのに十分であつた。

以前の学校にいた頃はかけていた眼鏡は捨て、彼は久しぶりに素顔で他人の前に立っている。

自分はどうせ、違和感になる。年齢も飛び抜けて若いし、試験の時の成績は自分の点数だけで平均点を6点上昇させたという噂付きだ。それ以上にこの顔立ちは以前も韜晦しきれなかったほどの麗質で、いずれ少年たちが自分を見る視線に熱がこもっていくのは自明に見える。

ならば、最初から君臨してやろうではないか。少年たちのあしらい方は既に知っていたし、少女たちの扱いはよく分かつていた。彼は自分を見つめて啞然としている級友たちに悠然と微笑むと、割り当てられた席に着いた。

彼の目論見は当たった。一月もしない内に彼は学年の象徴として扱われるようになった。誰もが自分に一目置き、丁寧に接し、決して無理や難題を言わなかった。礼儀正しい少年たちと少女たち、彼らの崇拝を受け取る資格となる成績も、まるで比較にならなかった。

特に魔導は講師たる魔導士までが彼の別解や呪文構成を聞いたがつた。

彼は決しておごることなく、誰に対しても謙虚に振る舞い、優しく、柔らかく微笑みながらそれらをこなしていった。

降るように来る、告白の手紙。

窒息するほど注がれる、憧憬の視線。

薄く微笑むだけで、淡く目を伏せるだけで、どんなことでも通つた。

やがて2年が経過した。戸籍の上で彼はその初夏に10才になり、秋になった頃に真実その年齢に達した。彼は天才を通り越して神童という称号を得ており、彼は一層厚みを増した庇護の情と取り巻きに囲まれて幸福であった。不足が無いという意味に置いては。

――馬鹿馬鹿しい。

全ては彼の思うままに進んでいた。成績は危なげなく学年主席を通し、運動系と魔導の実践科目の代わりに魔導理論の研究をと促されて書いた論文が賞を取る。実績を積み上げればますます周囲は彼を丁重に扱い、更に高度な課題が現れ、それを片づけ、更に前へ先へと進まされた。

6年の年限分の履修科目の内の中級までを取り終えて上級課程に混じると、そこは彼よりも7、8才は年上の連中が殆どだった。そこでも同じように彼は神童たり続けた。彼の足下をすくおうとしたり、意味のない嫉妬の視線をぶつけられるのも最初のうちだけで、彼が微笑むと日向の氷のように、それはぬるく溶けていった。

――馬鹿馬鹿しい。

魔導と次元換算は既に履修する科目が残っていないことを理由に特例として高等学院の講義の聴講が許された。行ってみれば更に年齢の離れた青年期の学生ばかりだった。彼はその学生たちと対等に講義の内容を検討することが出来た。青年たちはまず最初呆気にとられ、感嘆と僅かな奇異の混じった目で彼を見、そして年齢を尋ねて一様に複雑な顔をした。彼は、そこに学ぶ彼らの半分も生きていなかったのだ。

――馬鹿馬鹿しい。

大人たちはこぞって絶賛した。賞賛と特例が彼に夕立のように降った。特賞金、奨学金、奨励金、論文の賞金。降り積もる金と記念品と賞と名誉。中等学院長の自慢げな笑み。級友たちは揃って崇拜した。思慕と渴仰が夕立のように降った。手紙、贈り物、花束。降り積もる憧憬の証。彼と近しくしようとする者たちの、奇妙なほど、媚びを含んだ笑み。

――馬鹿馬鹿しい。

嫉妬ややっかみもまた存在したが、それを排除するほどの分厚い庇護がいつでも与えられた。中等学院では彼は既に絶対存在であり、高等学院では保護対象者であった。悪意はそれらの濃厚な取り巻きで遮られ、彼を直接傷つけなかった。彼を包む大人たちも子供たちも、彼の周囲に群がっては彼の美貌と叡智を賞賛した。

全ては上手く回っていた。

誰も彼を傷つけなかった。

誰からも特別に愛された。

辛い事など何もなかった。

――なんて、馬鹿馬鹿しい！

彼はいつも穏やかな笑みを絶やさないでいる内に、その形に凍えてしまったような頬を思い切り不機嫌に歪める。自分がまだ、他の表情が出来るのを確かめるように。苛立ちのままに唇を軽く噛むと、血の味がする。級友たちが見たこともないほど険しい表情で俯いたまま、彼は足早にタリアと呼ばれている一角へ入っていくのが最近になりつつあった。貴族の子弟が中等学院の生徒には多い。級友たちはそもそも、タリアのかなり手前の、下町と呼ばれている辺りから先は貧

民窟だと思っているらしい。見咎められる可能性はなかったし、この街の外郭をぐるりと回ると家に戻るための近道にもなった。

タリアは色町であると同時に、この国の闇の部分を引き受ける者たちの巢でもあった。表通りには妓楼、飲み屋、連れ出し用の貸し部屋などが並び、裏通りには非合法のものを含めて何でも揃う闇の市場がある。金さえ積めば自分の楽しみのために他人を殺めることも出来る。猥雑でどこか危うい空気は、日暮れが近くなると一層強まった。通りに並ぶ妓楼に一齐に火が入ると、妓楼の目印である朱色が照らされて、落日よりも尚赤く染まった。大通りを歩いているだけで、彼を娼婦だと思ったのか声をかけてくる男たちは数え切れないほどいた。じろりと睨むと彼らは怯んだが、そんな反応でさえ面白かった。

学院の大人しい羊の群たちに囲まれて、壊れ物のように大切に扱われて、それでも足りない、満たされないものがどこかにある。優しい人々。愛情に満たされた日々。そこへ美しく自分をはめ込むことだけに執心した。他人の目にどう映っているのかだけに腐心した。彼はひたすら可憐で聡明な少女を演じることだけを考え、――そして多分、考えすぎたのだ。

この街に身を置くとほっとするのは何故だろう。美しくも清潔でもなく、安全でもなく、平穩でもない街にいて、気の抜けるほど楽なのは何故。

それを思うと彼はひどく悲しく、そして自棄ばちな気分になった。繕った表面などよりも、遙かにタリアの方が自分に近い気がした。内面に巣くう魂は、享楽と隣り合わせの地獄との微妙な均衡を感じて高鳴る。彼はこの街の徘徊によって、自分の中にある、飢えるものを満たしたかった。

それはあるいは無防備とも言って良かった。彼はそれでも慎重にタリアの奥には近寄らず、安全ともいえる大通りの周辺ばかりをうろついていたが、背後から軽くぶつかってきた少年が彼の鞆を持って逃げたことで、かあとなったのは事実であった。鞆の中には身分証明書やら財布やら本やらの、大切ではないが失うと困るものが入っている。……ただの掏摸かと思ったのだ。

彼は全力で少年を追いかける。運動能力の差異が明らかになる前にと母は中等学院へ運動科目の見学を承知させていたが、中身は少年だった。普通の少女より、余程足は速い。路地を回ったところで少年に追いつき、鞆を掴む。返せと言う代わりに強く鞆を取り上げようとする、そちらも渾身で引きかえしてきた。この、と彼は膝で回し蹴りを食らわそうとした。

何が起こったのか、一瞬理解できなかった。相手の身体に当たるはずだった足が見事に空中を蹴ったのと同時に、ふわっと身体が浮いた。次の瞬間、まともに後頭部を打ち付けて彼は喉で呻いた。周囲でせわしなく、囁いている言葉がある。

美人だぜ。処女かな。売り物だろ。遊ぼうぜ。金に……女の……薬が……

それらが目眩と混沌の中でぐるぐる回っている。小さな羽虫のようでうるさい……

僅かな時間、彼は意識を閉ざしていた。気付いたのは、なま暖かい吐息が、頬にかかったからだ。

悲鳴は喉で凍ったが、それは習性だったかもしれない。制服の上着は前がはだけられ、引き出されたブラウスの下から手が潜り込んでいる。自分に被さろうとしていた少年の肩を思い切り突き飛ばして立ち上がると、酷い目眩がした。よろめいた彼の制服の襟が捕まれて、乱暴に後ろへ引き倒される。一瞬目の前が暗くなるほどの恐怖を感じ、そしてそれはすぐに怒りに替わった。

彼は自分の意志を通すことに慣れており、それを無視されることは屈辱的な出来事といえた。

身をよじり、彼らの手をすり抜けて壁際へ立つ。

――全員、焼き殺してやる。

魔導は彼の得意だった。それほど長い詠唱がいるわけでもない炎の誕生を促す呪文を口にしようとして、彼ははたと止まる。口をきいてもいいだろうか。

炎の誕生自体は難しい呪文構成をしていない。最初の義務教育の際に、魔導の例示として教えるくらいだ。攻撃をするための手段としては他に沢山の稼働が必要になるから上級となって構成も緻密になって行くが、炎を呼ぶことは難しくはない。

だが、一辺に多人数を相手にすることは難しい。自分が話せることをこの連中に教えていいのだろうか。

それは一瞬の躊躇であり、十分な間であった。上着の袖が掴まれる。乱暴にふりほどこうとすると、更に乱暴に引き倒された。袖がちぎれた音がした。彼はそれでも必死でもがく。万一のことを恐れて言葉は喉の奥に引き込んだまま、遂に出そうになかった。

何とかしなきゃ。家へ帰らなきゃ。それだけが脳裏を渦巻いている。

自分の呼吸が大分上がってくるまでさほどかからなかった。元々彼は、母親が言ったとおりに虚弱な部分があった。体力もない。動きが止まったときが、全部が終わるときだという思いが彼をひたすら突き動かしていたが、じりじりと身体から力が失われていくのは分かった。

空気がふと変わったのは、そんなときだった。自分を押さえつける少年たちが一斉に沈静した。何か話し声がある。それに耳を傾けるほどの余裕はなく、転がったままで体力を少しでも回復させるために何度も深く呼吸をする。そうしていると、誰かが自分の頬を掴んで強引に正面を向かせた。意地でも顔を見てやるものかと彼は目を伏せる。煙草の匂いがするから男だろう。なるほど、というかすれた声は、男が自分の美しさに興味を持った証拠のような韻であった。彼はあざ笑ってやろうかと目を上げる。非難というなら罵倒でぶつけてやりたいし、他人を連れ込んで強姦するような連中に掛けてやる情けもなかった。どれだけの者かを試すように、彼は目の前の男を睨んだ。

彼の前にいたのは、顔立ちの整った、だがひどく陰気な空気をちらつかせる男だった。年齢は分からないが、二十歳には届いていないだろう。男の言葉を僅かな仕種を、この場の少年たちが息を潜めて見守っている。これが「頭」なのだと理解したのは早かった。存在感が確かに違うのだ。手はつけるな、と男が言い置いて出ていこうとする。歓声があがり、自分を押さえいていた手が再び肌に潜り込んでこようとする。

彼は身体をよじってうつぶせた。スカートの中に入った手が、違和感にぴたりと止まった。あ、というぽかんとした声がした。彼は思い切り足を跳ね上げた。少年の横面を強かに撲った感触がして、一瞬手が動く。彼を脅すつもりだったのか抜き身になったままのナイフが、置き捨てられている。素早くそれを拾って、「頭」の方へ突進した。

男は自分の所作に僅かに後ろへ下がった。彼は男の喉へナイフを押しつけながらその背に素早く回る。勝った、と思った。これで自分が優位に立てるのだといく確信が、次第に誇らしく上がってくる。鞆と上着をよこすように彼は言った。正体が知れてしまえば後は失うものなど無かつ

たのだ。

だが彼の優位は長く続かなかった。男は落ち着いていた。命の危機などまるで感じていなかったのだろう。男の背中越しに簡単に投げ落とされたのは、実戦の経験の違いでもあったし、そもそも持っている力量の、明らかに広大な差でもあった。

男は少年たちのように彼を襲いはしなかった。子供には興味がないという顔をしている。あしらわれたのは悔しいが、この男に頼む以外にこの少年窟から帰還できる方策を、彼は思いつかなかった。別部屋へ隔離された彼の様子を見に顔を出した男に、彼は言った。

「俺を家へ帰してくれ」

口にすると、失笑と言うべき表情を男が浮かべた。それは当然だった。彼をどうするかはこの男の胸一つだが、逃げないようにと肌を傷つけない帯で縛られ、丁寧に扱うところを見ると、自分はどうかや誰かの愛玩物に売られるらしい。それくらいは想像が出来た。彼は自分の顔立ちに絶対の自信を持っていたし、そうした陰惨な話ならタリアの中で幾らでも耳にすることが出来たのだ。

そんなことをちらつかせると、男は沈黙へ戻った。男は口数が少なく、黙りこくと頑として全てを受け付けないような空気を放っていた。どうやら男から何かを聞き出すことは出来ないようだった。雑談のふりで言葉を振りまいてみても、ぶつりと途中で途切れてしまう。多少の知識と知恵を総動員して取引をしようという思惑はどうやら使えそうにない。適当なことを喋りながらそんなことを思っていると、男が不意に言った。

「思いついたことをべらべら喋るうちは、お前もまだ子供だということだ」

彼は一瞬言葉を失う。怒りなのか悔しさなのか、こみ上げてくるもので口がきけない。

「俺がさっきの言葉に食いついてきたら、適当に翻弄して取り引きして自由にしてもらおうと思っていたな」

これはまさしく凶星というものであった。男は何故か不機嫌だった。家に帰りたいか、とからかわれる。彼は頷く。それだけが今の望みであり、その為には何を差し出しても良いような気にもなっていた。

暫くは雑談のような、微妙な会話になった。何故男がそれで自分を解放する気になってくれたのか、正直なところ、彼には分からなかった。本当に良いのかと聞き返して藪蛇になるのもおかしい話であるため素直に好意に甘えることにしたが、それが何故であったのか、彼には今でも分からない。

だが、男のくれた通行証代わりの細刃刀は役に立った。男は徒党を組む少年たちの上にいる立場のようで、男の名と、細刃刀をちらつかせればどんな少年たちでも怯んだのだ。彼は殆ど毎日のように、タリアの間奥、深淵に近い路地へ足を向けた。男の周辺には彼と同じくらいの年の少年もあり、彼とは妙に気があった。お互いに言葉数が多く、よく喋り、よく笑うたちであったのが良かったらしい。一度自分が男であることが知れてしまった以上、ここで口をきかないで微笑むことは無意味であり、彼にとっては愚劣ともいえた。学院を出てから家に戻るまでのほんの短い間、チェインと呼ばれている少年たちの巣窟にいる時間だけ、彼は思うままに言葉をふるい、悪態をつき、大声を上げて笑っては下らない話に熱中した。

楽しかった。本当に、楽しかった。そして彼は自分を幸福だと思った。

例えば、不意打ちの言葉が。例えば、何気ない日常が。そんなありふれたものたちの無意識の悪意を感じる瞬間は、ひどく無口になる……――

彼は黙って雨を見つめる。いつもじゃれつくように遊んでいた少年がどうしたんだよと不思議そうに、雨の中を数歩先へ行きかけて戻ってくる。

「どうしたんだよ、傘、持ってないならさっさと帰ろうぜ？ トリュウムへ戻って何か喰おうよ。俺、腹減ったし」

彼は黙って首を振る。分かっている。これは神の悪意で自分のせいなのだ。少年から貸してもらった服の肩口にぽつんと黒い染みが出来ている。それが見えないように首を傾げて殊更俯いた。

「なあ、そんなに酷い雨じゃないじゃん。走っていけばすぐだよ、すぐ」

更に彼は首を振る。顔が強ばっているのが分かる。

「なあ、俺の鞆に傘が入ってるんだ。それ、取ってきてくれないか。頼むよ」

彼が言うと、少年は不機嫌そうに顔を歪める。頼むよ、と彼は繰り返す。そうしてしばらく見つめ合ってから、少年が貸しだからな、と叫んで雨幕に霞む路地へ消えていった。

彼はほうっと溜息をついた。雨。雨。これほど、憎らしい。

彼は濡れないようにと身を寄せた軒先で、更に身体を壁に押しあてる。水滴から、彼から全てを剥がすものから身を守るように。

黒い髪は彼を安全に保つ魔法であった。その下に隠れた真実がさらけ出さないように、彼を守ってくれる。青い髪が持つ意味を、彼は既に知っている。学院にも沢山いる。――沢山、いるのだ。

記録は既に千年以上前のことになるらしい。魔導革命の頃とほぼ時期的に一致するからそのせいだというものもいるが、確証ではない。確かなことは誰にも分からない。ただ、皇族を筆頭とした貴族たちに青い髪を持つ者が頻出する事が事実だった。地位がすりあがるほど、青みは濃く深くなっていく。

彼は雨を見上げる。魔導は今では使えない。呪文の詠唱には音律を刻む時間の長さ速さも関係するため、指針となる特殊な振り子か時計がないと効果が期待できず、それは鞆の中にあるのだった。

髪。俯いたまま、彼は首から下げた細刃刀を、これをくれた男が無意識のうちにかいつもしているように弄り回す。

……男は死にたがっている。それは男が文字通り全身全霊をかけて崇拝していたチェインの先の少年王が暗殺されたのを自分のせいだと思っているから、らしい。そしてその後継争いでチェインの少年たちはひどく殺気だってもいたし、浮かれてもいる。そわそわとして落ち着かないのだ。

男がいなくなれば、彼はこの街に出入りする口実ときっかけを失う。それだけはどうしても承諾できなかった。だから彼は男にこの街を支配するための手段を吹き込んだ。それで少年たちの抗争に弾みがついて死人も出ているようだったが、そんなこともどうでも良かった。

この街にいたい。自分が自分として在り得る場所に。その為には何でもする。どんな事でも、

自分の身に危険が及ばない限りは首を突っ込むし、口を出した。

そしてそれは成功しているようだった。男は彼にあからさまに感謝を唱えたり礼をしたりはしなかったが、彼を保護する意志は見せてくれた。男の体面にかけても守ってくれるだろう。

……けれど、髪。自分の話していない秘密、話す気さえない秘密が知れたらここも出て行かなくてはならない。青い髪は貴族の血を引く証明だ。彼を庇護する男が最終的に少年たちの王として君臨すれば問題はないが、現実、男はそれらの8割程度を統率しているに過ぎない。大勢は決定しているともいえるが、堅固な組織だとか成文化された規範がない故に個人の技量でそれは大きく左右される。

簡単に言えば、男に従わない勢力の頭たる少年が、男を殺すことに成功すれば再び大きく勢力図が変わってしまう。確定がしていないということは、未来に渡って絶対保護があるか否かがまだ分からないということだ。

彼は大勢を決めるために幾つかの助言をして効果を得ているが、結局のところ、男の器量次第であった。他の勢力が自分を歓迎してくれるかどうかなど、今は考えたくない。が、男に入れ知恵をしていたのが知れたら今度こそ稚児に売られるに決まっている……

彼は大きく溜息をつく。男のことも、いつも一緒に遊んでいる少年のことも彼は気に入っていた。失いたくなかった。何があっても。

だから、男にもう来るなと言われたとき、彼は最初ぽかんとした。自分は何か失態をしたんだろうかと考えて、それが遂に見つからなかったとき、脳天から血が引いていく音が聞こえた。

「なんで。俺の言うとおりにしてうまくいったじゃないか。それとももう俺には用がないって訳？」

「俺は死ぬかも知れない」

男は淡々と言った。どんな事態であれ状況であれ、男の声には極端に抑揚が少なく、感情もあまり波立たない平板さばかりだったが、死を覚悟していると言うにはあまりにも静かだった。男の言う意味は分かっていた。結局、抗争中のもう一派閥の主と直接対決することになったことは、少年から聞いている。

男はどちらでもいいのだろう。死ぬのも、生き残るのも。そんなことを思うと苛立ちのようなものと諦めが同時に沸いてきて、彼は無口になる。

食い下がってみても結果は同じだった。男は自分の意志を通すとき、頑として譲らない。一歩もそこから動こうとしない。それまでの経験で彼は男の頑なさを知ってもいたが、納得出来なかった。

「俺、あんたに必要とされているんだと思ってた」

悔し紛れにそんなことを言うと、男はそうだな、と頷いた。男が自分に掛けている希望の種類を、彼は知っていた。彼の助言も意見も考察も、男にとっては付属物だ。男が欲しかったのは男が守るべき対象であって、それは先に死んだ少年王の身代わりという意味でもあった。

彼は不愉快だった。自分が誰かの代わりだという侮辱など、受けたことがなかった。少年王のことに關しては男は酷く衝動的で、いつにも増して頑なになる。死人に心を連れて行かれがちにか男の彷徨う視線が、いつでも面影と幻影を探しているのは知っていた。不愉快だった。とても。会ったこともない死者を嫌うのも馬鹿馬鹿しいとも思うが、彼にとっては不機嫌きわまること

でもあった。

そして、それにも縋り付くほど自分は動揺している。

離れたくない。ようやく見つけた呼吸の楽に出来る場所。生まれて初めての男同士の連帯感や共通を感じられる友達。笑い合ってふざけあった、ぬるく柔らかな日々がこれからも欲しい。どうしても欲しいのだ。

何をどう言っているのか分からないまま、彼は唇を噛みしめて俯く。考えろ、と叫ぶ声が胸の奥から聞こえてくる。考えろ、考えろ、首から上は他の奴らの観賞物じゃないんだろう！

だが、その声がふっと消えた。彼は顔を上げる。彼は信じられない言葉を聞いたのだ。

「お前、髪、青いんだろう」

例えば、不意打ちの言葉が。例えば、何気ない日常が。

そんなありふれたものたちの無意識の悪意を感じる瞬間は、ひどく無口になる……――

どれくらい呆然としてしまったのか、彼には分からなかった。あるいは、そう長い間でなかったかも知れない。だが、自失というものを味わうのに時間は関係なかった。

「違う……」

呻いた声が、低い。彼は膝が微かに笑い出しているのに気付く。いきなり胸の真奥を強かに撲たれて倒れそうだ……

男はどこまでも淡々とした声で言った。

「違うなら水をかぶって見せろ」

答える言葉を、持っていない。何故、いつ、どこで、どのようにして、男がこれを勘付いたのかまるで分からない。だが男がそれを知っていることだけが重い事実であった。

彼は黙りこくる。他にする事を思いつかなかった。男は彼の様子に構わずに続けた。

「俺は今貴族と事を構える気はない。俺は俺たちのことで手が塞がっている。他のことをしている余裕はない。これ以上余計な因子を抱え込むのは御免こうむる」

彼は半ば白く塗りつぶされてしまった思考の片隅が、そうだろうね、と皮肉に頷くのを聞いている。貴族の落胤であると知れたらそれはそれで面倒なことになる。男の口調からして、この秘密を勘付いたのは男一人なのだろう。だからわざわざ人払いまでしてくれたのだと、彼はやっと気付いた。男の周囲にはいつも他人がいる。仲良くしている少年もしかりだが、男が少年王の系譜を継ぐ手足となるべき少年たちがたむろしているのだ。

「あんたに迷惑かけてたのかな、俺」

彼は呟く。男の周囲にいる少年たちに悟らせないように気を配られてきたのだとすると、自分に何か大きな失態があったのだろう。男がそれを否定したことで、彼はようやく多少楽になる。呼吸がふうッと通った瞬間に、喉で凍り付いていたような言葉が零れた。

縋りついて頼み込んでも、男は一向に彼の要求を飲もうとしなかった。彼は言葉を連ねながら、その無駄さ加減を思う。無理かも知れない。駄目かも知れない。可能性のない時、自分は諦めてしまう。諦めなくてはならないことが、沢山あった。それと同じように、いつか置き捨ててきた猫のぬいぐるみのように、大切であったものを簡単に手放す時は目をつぶって一息にしくは。駄目だという証拠が見つかってしまえば、放り出すしかない。今までのように、簡単に。

それだけは嫌だ……

彼は泣き出しそうになっていることに不意に気付く。

リーリー。お前を置いていったときも、俺は泣いてた。

あの猫のぬいぐるみは、それがなくなかなか寝付けなかった彼にいつでも添い寝するように枕元へいたはずだ。主人のいなくなった、明かりの灯らない部屋にころんと転がる姿が目につく。それはいつか、誰かの手によって片づけられただろうか。捨てられてしまったろうか。自分が置いてきたのを分かっている、それを思うと胸が苦しい……

「そうだよ、確かに俺の髪は青いよ。この瞳と同じ色だ。それがどういうことか分かるよな」

否、分かるからこそ男は彼に来るなと言う。それも分かっている、彼は更に言い募る。

追われて流れてきたことを。夜の中から現れた恐怖の話を。必死で逃げ、どんな擬態でもして

きた過去を。誰かに訴えたかったのかも知れないし、同情をひこうとしたのかも知れない。そして効果のほどを一番信じていないのは、自分だ。だから多弁になる。これが最後になるかも、知れなかったから。

男は大半を聞き流しているようだった。悔しくて涙になる。それが死んだ少年王であれば、きっと一言も漏らさず聞き入っているだろうと思うだけに尚更だった。彼は誰からも一番に愛されるのになれていた。男が自分に過剰な興味と関心を抱かないことが、自身を全部否定されたような気持ちを連れてくる。

だからだろうか。俺は追い出されるのか。そんなはずはないと理性が言うのも分かる。そして感情的なものが怒りで荒れているのも。

男は彼の言葉が途切れるのを待っていたようだった。

「俺が勝てばいいが、そうでなかったときはお前はまたどこかへ売られるはめになる」

彼は一瞬をおいて頷きかけ、慌ててそれをとめる。それは道理だった。その危険は既に分かっている。結局のところ、彼の秘密を知った上で彼を守り、彼に居場所を与えてくれるのは男一人だろう。他の連中は殆ど例外なく彼を余所者として扱っている。支配者が変わればきつとろくな目には遭わない……

彼は微かに震える唇で、長く溜息を吐く。ぬるい吐息が痺れたような唇を温めて動くようにしてくれた気がした。

「……今まで楽しかった。ありがとう」

諦める。理性の音がするうちに手を引く時間だった。確定できない未来に全てを賭ける事は出来ない。母の為にも。

母さん。彼は胸で呟く。母のことはいつでも彼にとっては最優先だった。意志を通しきる形で中央中等に入学したが、それでもいざとなれば母の忠告を受けて辞めても良かった。学院に入っても何にもなれないという母の言葉の正しさを次第に理解できるようにもなっていたし、何よりも、学校という閉鎖された学舎の空気に既に飽き飽きしていたからかも知れない。

男は彼の決別の言葉に頷いた。懐から男がいつも使っている煙草入れを取り出して、彼に放り投げる。餞別というわけであった。

形見を渡しておきたいのだろうかと思いは思い、男の死をどこことなく予感している自分に気付いて苦笑になりかける。漢氏竜の浮き彫りのある銀の箱は、その重み以上にずっしりした感触を手を与えた。

これは男の命そのものに思えた。男が地上から消えたときに、その生きていた証拠を残しておきたいのだろうか。そんなことを思えば尚更悔しい。

いなくなった少年王の後を追って行きたがっている。男の頭の中は結局死者のことで占められていて、自分は入り込めなかったのだから。

馬鹿だと言ってやりたい気もするし、形見を預けてもらったことを感謝したい気もする。だからどちらでもなく、彼はありがとうといった。男は微かに笑った。嫌な笑顔だ、と彼は思った。

死ぬことも覚悟してしまったから、突き抜けたように穏やかだ。

馬鹿野郎。腹が立って仕方なかった。

彼はだから自分の心残りだけを満たすことにした。もういい。関係ない。だから最後は自分の

好きなように利用するだけでも良いんだ。偽悪だったのかどうか、判別はしがたい。

.....先の少年王を暗殺した相手は不明であった。男も手を尽くしたようだったが結局分からないらしい。その時の様子は他の少年たちから小耳に挟んでもいるが、男は犯人を断定できないまま勝負へと踏み込もうとしている。犯人というのが誰であるか、興味がなくもない。男からは何かを聞き出すことが非常に困難.....と言うより気骨の折れる作業だったが、別れの際に隠し事もすまい。

少年王が死んだとき、まず最初に疑いの目を向けたのはタリア王であったと男は言った。状況が示唆していたのもそうだし、決闘をすると決まった相手もそう強く主張していたようだ。

ああ、そいつか。彼は思う。何かを強く言い募るときは、それを頑なに信じているときか、そうでなければ他人の目を違う方向に向けておきたいときだ。その相手が何故、という動機の部分は残っているが、身内であるからには降り積もるものもあったのだろう。血縁はないようだから、手に掛けるのに躊躇う理由は殆ど存在しなくなる――本人の、自覚と自戒以外には。そして聞くだけでもあるが、その相手にはそうした部分が欠けているようだった。

大まか真実を得て、彼は男に背を向けた。もう会うまい。自分を棄てた相手にしがみつくなんて、女じゃあるまいし。刷りこもうとする傍らから、この場所が好きだったのだという思いがこみ上げてくる。彼はまっすぐに男に視線を向ける。これが最後になるのか否かは分からないが、死に行くつもりであるならば手向けに、そしていつか再会することがあるならば小綺麗に飾りたかった。

「俺、あんたのこと、好きだった。本当だぜ。助けてもらったことは忘れない。どこにいても何をしても、あんたの為に幸運を祈ってやるよ」

「そいつはどうも」

他愛なく男は返答し、やや間をおいて元気でなと付け足した。男が自分を気遣うのを何故か誇らしく受け止めながら、彼はあんたもね、と返して背を向けた。

多分、もう会わない。それが良かった。

彼は不機嫌だった。今日から再び、刺激も何もない退屈きわまる日常が始まる。学舎の中では「可憐で華奢で聡明な美少女」となっているから一挙手一投足まで気を遣いひたすらに少女らしい仕種や表情を心がけているが、それも裏町で奔放に楽しんでいたときに比べれば味気ない、砂のようなものだ。身に染みついている動作だからそう違和感はないだろうが、どんな時にも自分のまとう表面が気になる辺り、習慣というのは恐ろしいものだった。

そんなことを思って微かに溜息になる。そうすると、隣に座っていた少年が彼を見た。何でも無いわと笑ってみせると微かに頬を赤らめて俯く。

——あー……やってらんねー……

うんざりという表情を今ここで出来ればどれだけ爽快だろうかと、彼はそんなことを考える。また面白くもない一日が始まるのだと思いながら鞆の中から本やノートを取りだしていた彼の耳に、教室の扉が開く音が聞こえた。

各科目は運動科目以外は個人の進行の度合いによって特科・上級・中級・初級に分かれているが、同じ学年ごとの行事などもあるために朝の最初の時間は学年講義ということになっている。ほとんどは、教師の訓示やら成績の伝達やらに使われているが。

ざわめきが聞こえたときも、そう気にせずに彼は本の背表紙についた汚れを取ることに熱中していた。どうやら新入生らしい。年次の途中での新入生は非常に珍しかったが、そういうこともあるだろう。

だが、級友たちのさざ波は少しも収まらなかった。肌にちくりちくりと突き刺さるように視線が向いてきて、彼は居心地悪く顔を上げる。級友たちのほぼ半数は彼を見て、残りの半数は教師の方を向いていた。

彼は怪訝に横を見る。隣の級友はぽかんとした顔で前を見ており、彼の視線に気付いたらしくふと横を向いた。

深い井戸に投げた石の音が、数瞬遅れて響くように。級友の顔に驚愕と呆然の混濁された色が立ち現れてくる。その視線が吸われるように前へ戻ったことで、つられて彼も教壇を見た。

まず目に入ったのは、射し込む日に輝き返す瑠璃色だった。僅かに遅れてそれが他人の髪であることに気付く。

心臓が僅かに……止、ま、る——

彼は唇を僅かに開き、そして身動きをやめた。同じ顔。

自分と、全く同じ顔をした少年が、そこにいた。髪を染める前に鏡を覗けば現れる自分と、全く同じ顔立ち、同じ髪色、同じ瞳色。頬の形や肌の色味、背格好までほぼ同じだ。

教室全体が揺らめくように囁きが行き交うのも無理はなかった。彼は髪を黒く染めて化粧をし、やや眉の形や睫の長さなどをいじって少女に近く自分を擬態しているが、鏡に映したように自分たちは似ている。染め粉を落として衣装を変えれば、誰も気付かないかもしれない。

そうでなくても彼も、そしてこの少年も類い希な美貌の持ち主であった。似通った系統の正統派の麗質が2人もいるならば、確かに話題には十分といえた。

「リユースといいます。よろしく」

やや平板な声は多少違って聞こえるが、自分の声というものは案外自身では認識しにくいとい

うことは知っている。彼の声聞いたことのある人間なら声も同じだということかも知れない。少なくとも、骨格が似ていることで、ある程度の近似はあると予想は出来た。

スカートの下で震えている膝に彼は不意に気付く、片手でそれを押さえ込んだ。

なんだ、これは。

(中央中等だけは駄目)

母さん、どういうことだよ？

(あそこでなかったら、どこでも好きなところへ行っていればいいから)

こういうことなのか？ だから駄目なのか？

教師の指示で彼の隣に腰を下ろした少年は、教室内の私語の波など聞こえないように平然とノートを取りだしている。整いすぎるほど端正な横顔。一瞬目を奪うような美貌。こんなものが、自分以外にいたなんて……！

彼の視線に少年は気付いたようだった。ふと顔を向けて灰かに笑う。こうした他人の反応になっている笑みだった。

彼はそれに気の抜けるような安堵を感じてゆるく笑った。気を揉んでも仕方がない。それよりも少年に近付けば、自分の知らなかった回答が沢山転がっているかも知れない……その考えが彼を更に笑みにした。母は15才になったらと期限をつけてしまったが、それ以前に彼が真実にたどり着くことが出来れば尚更だった。

ノートの端に(よろしく)と書き付けると、少年が微笑みながら頷いた。

(珍しいわね、中途学年に編入するなんて)

教室の中のさざめきは収まっていない。彼が声を発しないことで、少年は口がきけないのだと了承したようだった。悪戯っぽく笑って彼の手口を真似、彼の落書きの下に書き連ねる。

(典礼行事が重なって、入学試験を受けられなかったから。でも10才になったらここへ行くように、父上からも言われていたし。本当は初学年からなんだけど試験の成績が良かったらしくて、この級でいいだろうって)

(同じ年なのね)

何か、ぞろりざわめくものに手が触れたように、心が粟立つ。

(そうなの？ 君は少し年上かと思った)

(誕生日は？)

(秋の初め頃)

爆弾だった。

目の前が白くなった気がした。一瞬焦点が戻らない。彼は目を押さえた。痛い。頭が痛い。亀裂が入って割れていきそうだ。

「大丈夫？」

のぞき込んでくる少年に首を振り、ふらりと彼は立ち上がった。気分が悪い。彼が思わずよろめいたのを、少年が腕を掴んで座らせる。青ざめているのも確かなのだろう、級友たちが彼を見て救護室へと付き添った。

救護室の簡易寝台の上で毛布にくるまりながら、彼は目を閉じる。寒い。とても。

誕生日は近い。もしかしたら、それも同一かも知れなかった。

それに……名前。リユースと聞こえた。それが確かなら、更に眩暈のするような事実に向き合わざるを得ない。名前の最初の綴りを一文字変えるだけで、その名は別の響きに生まれ変わるのだ。

一度だけ呼ばれた、あの名前。

(カース様でいらっしゃるんですね？ ああ、本当によく似ておられる……)

多分。何かがある。

彼は毛布をかぶったままで必死に考える。まずは少年に近しくなることからで、今まで以上に全てに置いて完璧に少女たらないといけない。顔立ちは誤魔化せる。戸籍上の誕生日は重なっていないし、名前も少女らしい偽名だから問題ない。学年講義以外の授業は重ならないだろうからそれも安全弁の一つになるだろう。

必死で自分の足下を確かめる作業をしているのが可笑しかった。彼が皮肉に頬を歪めながら考えに耽っていると、救護室の扉が軋んだ。級友が彼の鞆に荷物をまとめてきてくれたのだった。

虚弱と言うほど弱くもないが、壮健といってしまうには根が弱い彼の体質のせいで、これまでも何度か早退している。珍しいことではなかったのだ。口々に彼を気遣う言葉も慣れている。適当にあしらいながら、彼は額に浮いた汗を丁寧にぬぐって笑って見せた。

(少し気分が落ち着いたら自分で判断するから。ありがとう、みんな)

彼の申し出に級友たちはほっとしたように一様に頷く。

「殿下となにか喋ってたと思ったら急に倒れるからびっくりしたよ」

彼が落書きのように筆記で雑談することをみな、「喋る」と表現しているのだった。

(殿下？)

彼は怪訝に聞き返す。

「さっきの彼だよ。本当はほら、初学年への編入のはずだったけど、編入試験が満点で…
…一一」

彼は目を閉じる。他の言葉は耳に入らない。殿下。それは皇族に与えられる呼称だったからだ。

麻痺したように、呼吸が出来ない。沢山の情報を一息に手に入れてどうにかなってしまったのだろう。無口になってしまった彼が、まだ本調子でないと思ったのだろう。級友たちはゆっくり寝ていればいいといたわって出ていく。そろそろ授業が始まることもあるだろう。

彼は静かになった救護室で、深く、呼吸をする。

皇族の構成などそれまで興味がなかったから、最低限のことしか彼は知らない。皇族と呼ばれる範囲は非常に狭い。今上帝を中心にして下は孫まで、女性は降嫁が前提となり、男性は特殊な場合を除いて臣籍降下が当然だ。今上皇帝の2人の正妃とその子供たちくらいしか今はいなかったはずだと彼は一人頷く。

皇子たちは4人。2人の正妃から謀ったように2人ずつだ。正妃が2人いるのは慣例で、ここ100年ほどは国の重鎮である2大公家から排出されている。誰がどうというのは分からないが、これはいくらでも調べる方法があるだろう。昔と違って今は皇室も民衆の前に出るようになってきているから、写真くらいはあるかもしれない。

彼はうっすらと笑う。そう、自分を皇帝の落胤で5人目の皇子だと考えると全ての辻褃はぴたりと合うのだ。

（あれのことはマリアとお呼びになりますよう）

（それが身分というものであるからです）

この言葉も、そして今彼の前に現れた皇子と自分がうり二つであることも。

（お前の母親は私よ。私一人よ。お前は私の子よ、私の子なのよ……）

あの母の言葉は虚偽か。真実か。

多分、……嘘だ。彼は顔を歪める。

何故なら皇帝の庶子であるなら皇族とはいえず、継承権なども発生しないからだ。自分が真実母マリアの実子であるなら皇帝の庶子であり、これは母親の出自に準じることになっている。あの夜彼を連れにきた男の主人が誰であったのかはまだ分からないが、彼に皇族としての価値がなければ追っ手もかからないし、これほど何かを警戒しながら暮らさなくても良いはずなのだ。

彼は毛布の下で涙をかみ殺した。これは母にはいえないことであった。自分を真実産んだか否かはさておいて、今まで自分を守り、十分に愛し慈しんでくれたという意味に置いて、母親でなくとも母は彼女一人だった。

彼は溜息になった。

今日は母の顔を、見たくない。ひどく、心苦しくて……悲しかった。ほんの一日前から、沢山の物がまた自分の手から零れて、深淵の闇の中へ落ちていくのが見えた気がした。

翌日寝不足のままで中等学舎へ行くと、例の殿下は既に来ていた。挨拶代わりに微笑んでみせると、そちらも頷く。他愛なくノートの端で雑談を交わしながら2人で微笑み合っていると、級友たちの目がこちらへちらちらと向いているのが分かった。

皇子はその生まれと年齢の若さ故に孤独たることをある程度覚悟していたのだろう。同じ年齢の子供がいるとは思っていなかったようで、それが嬉しかったようだった。崇められる孤独というものを彼が感じているのも皇子は分かったらしかった。それは恐らく、皇子も身に覚えのあることなのだろう。

皇子がこの学年に編入してきたのはどうやら偶然ではなかった。皇子の孤独というものに学院が配慮し成績の良さも加味した上で、彼と競わせあるいは共同で魔導の研究にいそませるつもりがあるのだろう。

彼と同じく皇子も魔導にはよく通じていた。体力の問題があって詠唱は殆ど行わないようだが、皇子はその気になれば魔導士を借り出すことが出来る。

殆どの科目を皇子は中級から始めるようだった。恐らく、すぐに自分に追いついてくるだろうと彼はほくそ笑んでいる。接する機会が多くなればそれだけ皇子の周辺について知る機会が増えるからだ。雑談の端々から皇子が後宮でそれなりに教育されてきたことが窺えた。

まるきりの他人ではない。自分たちは似すぎているし、魔導の資質は遺伝する。皇族を中心とした筆頭の貴族たちはそれが不得手ではないのだ。兄弟であることは間違いないだろうと彼は思っている。

問題は自分が何故今まで放り出されていなくてはならなかったのかということだ。その疑問が解けるまでは様子を見なくてはいけない。何よりも、母があれだけ怯えているのだから。

午前中の科目が全て終わり、昼食の時間になると再び皇子と同じ教室になった。本当に仲の良い兄妹のようによりそう自分たちを見て、全員が溜息になっている。絵になるのだろう。

ノートの端の雑談。本当に、何の変哲もない光景に見えているだろうか。彼は既にそれが癖になりつつある、「他人から見た自分」の検証に余念がない。ほころびがないかどうかをいつでも確かめているのは最早習性に近かった。

午後に入って最初の科目は運動で、これは彼は免除されている。いつものように魔導論文の続きでもと彼は図書館へ向かった。司書も心得ていて、彼の来る時間にはいつもの籍に、魔導呪文用のタイプを置いてくれているのだった。呪文用の記号は日常の言語とは全く異なる字体を使用するため、専用のタイプがある。

秋も少しづつ深まっており、所々に落葉が彩る中庭を彼は図書館へ急ぐ。今手に掛けている論文が当選すれば、賞金が出る。金は幾らあっても邪魔にはならないものな、と内心で皮肉に笑っていたとき、後ろから呼ぶ声が聞こえた。皇子の声だとすぐに分かった。

「私も運動は免除で。昔から、身体が弱くてね」

だろうね、と彼は心で深く納得する。自分もそれほど強い方ではない。体質も似ているのだ。自分はそれでも環境で鍛えられた部分を持っているが、皇子の場合は国で最高の医師団がおくるみにについている。耐性がついていないのだった。

図書館はいつものように司書以外は誰もいなかった。ここが学生でにぎわうのは基本的に放課

後のことだ。司書は彼と皇子を認めて頷き、いつもと同じように何かあったら呼ぶようにと言いついて奥の司書室へ消えた。本の整理や管理は彼女の仕事だったし、彼がいつもここで魔導論文を書いているのを知っていたから配慮でもあろう。タイプはいつものようにいつもの場所へ置いてある。

彼は前回の続きをタイプに差し込み、資料を揃えて普段と同じくそれを打ち始めた。

静かな図書館に、彼の打つタイプの音だけが響く。必要な資料を取りに行き戻ると、離れた席で進級試験のための参考書を読んでいたはずの皇子が自分の打ちかけのタイプを覗き込んでいた。

どうしたの、と彼は皇子の肩をつつく。皇子は少し笑い、そして司書室の方を見、図書館全体を見回した。彼は曖昧に首を傾げて微笑んでみせる。資料の本を机に置こうとしたとき、皇子の声が細く言った。

「一つ聞いてもいいかな」

魔導の話だろうかとは彼は頷く。自分の椅子に腰掛けながら隣を勧めると、皇子は素直に従った。筆談を、と雑記用のノートを取りだしていると、その手を皇子が押しとどめた。彼は怪訝な顔で皇子を見た。皇子は苦笑していた。

「何故、女の子の格好をしているの？」

――息が、止まる。

彼はしばらく皇子の顔を見つめていた。指がゆるんでノートが床に落ちる。軽い音が僅かに広がった後は、静寂になった。皇子は彼と同じに美しく瑕疵のない顔でゆるく笑った。

「女の子のふりをしているのは何故？ 喋らないのはそのせいだね？」

微かに唇が震え出すのが分かった。

今、貧血で倒れてしまえば全部聞かなかったことに出来るかも知れないのに。彼はそんなことを思ったが、僥倖は訪れそうになかった。凍り付いたように身体全てが動かない。

彼が黙っていると、皇子は微かに、彼を宥めるように笑った。

「誰にも喋らないと約束する。何か事情があるんだろう？ 私は立場上、魔導士を借り出すこともできるし軍務と王宮に関することならどうにかなることも多い。このままでは君は、とてつもなく不幸になるよ」

彼はぎこちなく首を振る。皇子の最初の言葉だけがぐるぐると渦を巻きながら胸に落ちてくる。胸内の深淵にそれが沈んだとき、彼は喉をならした。身体中の血液が冷えたようだった。

この皇子は一体何をどこまで知っているのだろう。どこで、いつ、どうして勘付いたのか。そんな疑問と、この言葉自体が何かの罨ではないのかという疑念がせめぎあって、瞬き一つできない。

彼が痺れたように硬直したままで震えているのを見て、皇子はますます柔らかに笑った。多分それは自分が他人に向けていた笑顔そのままだった。自分のしてきたことを正確に打ち返されて、彼はすっと観念する。一番深い場所に覚悟が座ってしまうと、ひどく気が抜けた。

「……何故……」

皇子以外には絶対に聞こえないほどの小さな声で、彼は呻く。皇子はそうだね、と笑うと彼が取り出しかけて床に落としたままのノートを拾い上げた。

「君の魔導論文、昨日おおまか読ませてもらった。とてもいい論文だと思う。特に新機軸といわれている時間の生成は面白かった。実に興味深い。あれを読めば誰でもそちらへ目がいくと思うけどね」

通常、時間というのは等しく流れていくものだ。魔導もそれを歪めることは出来ないとされる。彼の論文というのは層次元換算の数値をあらかじめ導いた上で次元軸に理論上存在するといわれている時間軸を融合させて魔導に組み込む、というものだ。

魔導士はおしなべて身が軽いが、これは身を軽くするための沢山の魔導の力と本人たちの鍛錬の成果で、同じ一瞬でも動作をより多くこなすことによって、常人からは驚異的に見える身体能力を生み出している。

彼の唱える理論は時間軸を魔導の力で調整するもので、簡単に言うなら時間を無理矢理個人の裁量で引き延ばすことが可能であるとするものだ。数字的には未知数が多いとしながらも実験の価値はあるとまとめられたそれは、魔導理論の中では数十年ぶりに出てきた新理論であった。

「でも、あれはいくら優秀でも女の子の書く論文ではないよ」

皇子は呆然としたままの彼の肩を軽く叩き、魔導理論の最新の本を広げた。

「男性と女性では詠唱可能な呪文の範囲が違うよね」

魔導とは音階と韻律で自然界との契約を為し、力を自分なりに組み合わせて使用するものだ。呪文は知識のないものが聞けば歌に近く聞こえるはずであり、音域の幅に関わらず一つの効果を生むための絶対音階が存在するため、男性と女性では明確に得手と不得手があった。子供でもまた少し違う。

「――君の論文は明らかに男性向けだ。低い音が沢山出てくる。女性向けの呪文でも構成さえ変われば同じ事が出来るはずなのに、それには一言も触れていないよね。自分で使うことをまるで想定していない術者って、いるものなのかな？ それに魔導の呪文を構成するときって、無意識に自分の性別に沿うものだ。本能に近い部分で、自分に出来る方を選ぶんだよ。私は最初にこの論文を見たときとても面白いと思った。そして読み返して呪文の構成を見たときに、男性向けだなと思った。でも本当は」

皇子は苦笑する。

「昨日君の腕を掴んだとき、少し変だなって思った。だって、君は細くて痩せている割に腕にちゃんと筋肉がついているから……女の子の腕はもっと柔らかい。力のある女の子であるなら、もう少し大柄だ。だから君の魔導論文を読んだとき、この子は男の子じゃないのかと思った。喋らないのも、運動に出ないのも、全部それで分かった気がした。喋らないのは声が変わるからで、運動に出ないのは女の子とは明らかに記録が違うのが分かっているからだ。君は……」

皇子は彼が打ちかけて止まったままになっているタイプに視線をやる。彼は喘いで額を指で押さえた。

そこにあるのも、隠しようもなく男性向けの呪文構成であった。人は呪文の構成をするとき、誰でも自分の性別に添う。絶対音階に照らして少しでも自分の楽になるように、頭の中で詠唱しては無意識に調節しているのだ。

「君は、徹底して男性向けの呪文しか書かないんだね」

彼は立ち上がる。もう駄目だ。

この皇子が気付いたことを他の誰かが気付かないと言う保証はどこにもない。彼の論文がひどく複雑な呪文の構成と長い詠唱と、煩雑な次元換算の知識があることがどうやら幸いして今まで論文の理論を確かめるような実験は行われていない。

だが、それもいつかはやってくる。論文の筆者が女性なら、最初の実験に選定される詠唱者は女性の魔導士になるだろう。そして、それはこの疑問の露呈だ。似たような疑いを持つ人間が必ず現れる。

母さん。終わりだ。

襲撃者たちがそれを見過ごしてくれると言う甘い期待を彼は抱いていない。皇子に接近して自分の身の上を知ること、その上で自分の選択を決めることも、全ては身の安全の確保が前提だ。自分の命と母の平穏を賭けてまで欲しい答えではなかった。

諦める。この、理性の音がするうちに。今までのように。鮮やかに。

彼はゆるく首を振り、それまで打っていたタイプから用紙を引き抜いた。皇子が彼を見上げた。

「逃げるんだね」

皇子の声が言った。彼は皇子を見る。同じ顔の、同じ色の瞳に映るのは哀れみだった。彼は顔を歪める。憐憫など欲しくなかった。皇子もまた立ち上がった。背丈はほぼ同じくらいだった。真向かって立っていると、まるで鏡に映ったようだと彼は思った。

「私は君が可哀相だと思った。君はこのままでは一生日の当たる場所に出ることが出来ない。公職はもちろん、まともな仕事にだって怪しい。君には沢山の才能があるはずで、それを自分でも知っていると思うのに君には何一つ、正当なものは手に入らないだろう」

「……うる、さい」

「そうだね。これは余計な世話というものだ。だから私は君が逃げていくことを知らないふりをしよう。君は少し気分が悪くなったから早退するんだ」

「……あんた、」

彼は声を絞り出す。押し殺した声は緊張で震え、自分でもおかしいほどかすれて男らしい声に仕上がっていた。

「俺を強請っても何も、出ない、ぜ……」

「ああ、そんな風に喋るんだね」

「うるさい」

「ごめんよ。私はそんなに大ごとだと思っていなかったのかな。でも私のせいで逃げていくというのなら、謝ろう。これを」

皇子は自分の髪を留めていた金のピンを抜いた。さらりと瑠璃色の見事な髪が肩を覆ったように落ちた。

「地金の純金と、ついている石は本物の紅玉だから」

彼は泣きそうになる。皇子は確かに善意で言っているのだ。彼の正体を暴いてやろうという気はなかったのには違いない。だから餞別を躊躇いなく受け取るには抵抗があった。

「いない」

彼は皇子の憐憫を払いのけ、図書館の出口に向かって歩き出した。数歩行って振り返り、掴んだままだった書きかけの論文を机に置く。

「殿下の指摘してくれたことは、俺には救いだった。礼を言っておくよ。気付かなかっただけに合わなかったかも知れないから……でも、何かをしてくれるというならこの論文を、処分してくれたら嬉しい」

皇子は頷く。ありがとうと彼は呟き、まっすぐに出口へ、再びの迷走の中へ、流転の旅へと向かうためにその場から立ち去った。

.....母に皇子の話は出来なかった。ただ、彼は魔導の一件を掻い摘んで説明し、未来に渡って危険の目があることだけを母に告げた。母の決断はそれまでと同じく早い。制服や鞆や本などの日常使っていた品は殆どそのままに、身の回りの最低限のものだけを鞆に詰め込んでいく。

5年前のあの夜よりは時間に余裕があるのは確かだった。母は預けて置いた現金と宝石を引き出しに出かけていく。この戸籍ももう、使えない。この国を離れた方が良さそうだと母は言っていたし、それには彼も賛同した。他国へ紛れ込んでしまえば少しはましだろう。夕暮れの中を女装のままで彼は母の帰ってくるのをぼんやりと待つ。駄目だと思った瞬間に諦めてしまう自分の性癖を、少しばかり悲しいと思いながら。

彼は張り出し窓にもたれながら、次第に暗くなってくる路地を見つめる。――裏町の少年王を決めるための勝負はそろそろ刻限のはずだ。本当ならどこかで自分はそれを見物していただろうに。奴に教えてやろうか。そんな考えが彼の脳裏に浮かんでくるのを沈め、沈めてはまた発見し、それを繰り返して彼は溜息になった。鏡に映る自分はやはり女装姿、これから先の町々でもこんな事に繰り返しになるのだろう。

（このままでは君は、とてつもなく不幸になるよ）

皇子の言いたいことは分かる。どんなに親しくても自分自身を全て預ける相手を持てなければ、それは不幸だ。他人の好意という海の中で、信頼が掴めなくて溺れ死ぬ。彼はまた溜息になる。あの男に話した以上の秘密を抱え込んでしまったとはいえ、彼にとっては男こそが信頼を預けた相手といえるのかも知れなかった。多量に結果論的なものを含んではいても、自分の秘密を見せたのは事実だ。

男は.....死ぬだろうか。どちらでもいいと言うような投げやりさだった男の態度を思い返すにつけ、そうなるだろうという確信が上がってくる。男の一番の従者だった少年も、そうなれば生きていられないかも知れない。少年たちは徒党を組んで相争うことに血道を上げており、人を殺すことなど少しも躊躇わない。男の寵臣であった者たちは揃って死を迎えるだろう。残酷で激しい死を。

彼は顔を歪める。裏町での日々は楽しかった。彼にとっていつか再び会いたいと思う相手がいるとすればあの連中だ。学院の級友たちでも、優しい皇子でもない。還る場所をみすみす失うのか、俺は。窓の外は、次第に濃い夕闇。彼は目をすがめる。藍色の空に消えていく、日の名残.....

彼は跳ねるように背を起こした。飛ぶようにアパートの螺旋階段を駆け下り、表へ飛び出す。間に合うだろうか。男に怒りと、決闘の相手に対する憎悪を呼び、ひいては勝利を確約する魔法を、彼は知っているのだった。

裏町の根城へ近付いていくと、通りは静かだった。不気味なほどの静寂が汚い町並みに沈殿している。いつもここを通過して男の根城へ行くとき感じた刺さるような視線もない。全員が息を潜めて成り行きを待っているのだ。彼は男が根城にしていた古い屋敷へ駆け込む。丁度顔見知りの少年が、廊下を歩いてくるのが見えた。

「あれ、どうしたんだよ？ 出入り禁止って言われたんじゃないっけ？」

不思議そうな少年に構わず、彼は男の足取りを聞く。回答だけを頭に叩き込んで、来たときと

同じくらい迅速に、全力で駆け出した。背後で少年がどうしたんだよと叫んでいるが、子細を話している時間も、少年に構っている時間もなかった。少年に教えられた道筋を駆けていくと、やがて見慣れた背中が見えた。男の名を呼びながら彼は男を追う。振り返ってくれないのは男が無視を決め込んでいるからだ。畜生、と顔を歪めるが、それは苦笑に似ていた。

「もう来るなと言ったはずだ」

男の声は僅かに低い。彼は少し笑って苦しい呼吸を整えるために膝に手を当てた。その脇を男がすり抜けていく。慌てて前に回り込むと、男が心底つまらなそうな顔をした。

「もう来るな」

「分かってるよ」

男は眉を寄せる。分かっているものかという言葉が出る前に、彼は自分の切り札を示す。――即ち、少年王の死の真相を。

男の反応は顕著だった。僅かな時間の呆然を抜けると、そこにあったのは全てを焼き尽くすような怒りだった。肌は夕暮れの中でも分かるほど青白い。怒りのあまりに青ざめているのだ。彼は男の端整な顔立ちを見つめる。今まで彼が接してきた無気力感や厭世観などは剥げ落ちて、男の煮える憎悪が青白い燐光になる気さえした。背が冷える。圧倒的な威圧の前に、彼は暫くそれを見つめていた。

男は目を閉じる。何か呟いたが分からない。喉が干上がったように痛くて、どうしたのかは聞けなかった。男は笑っているようだった。嬉しくてたまらないというように喉を鳴らし、それが声になって溢れてくるまで幾らもなかった。真実男は歓喜している。自分の手で、崇拝していた少年王の敵を殺し、八つ裂き、死と、死より深い苦痛を与えることが出来るのだと狂喜しているのだ。

「礼を言う」

男が笑いながら言った。彼の秘密の代わりに俺の勝つところを見せてやろうとも言い、陶然と笑っている。出入り禁止も同時に解かれた。男は自分の勝利を信じている。彼が男の元にこれからも通うことが出来るということは、男がこの決闘に勝つということであった。

彼は寂しく笑った。欲しかったものが手にはいるのに、それを棄てて行かなくてはいけないから。けれど、それはいつかまたこの街に足を踏み入れても良いのだという希望にすぐ替えようと思いながら彼は淡々と、転居することを伝えた。もう家に帰らなくてはいけない時間だった。母もそろそろ戻ってくる。自分が家にいなければそれは心配するだろうから。

「そうか、だが、何かあって俺の力が借りたいときは必ず俺を呼べ。借りは必ず清算する」

男の言葉が沁みるほど、嬉しかった。

「また、いつかね」

それを言えるということも、何より貴重だった。

「俺、あんたたちといて楽しかった。本当に、楽しかった。とても」

彼は言って、手を差し出した。握り返された手のぬくみ。それが手から消えない内に彼は背を返し、未練と過去となるべきものから走り去った。

――男の名はライアン・ロウ。彼の人生の中において、避けては通れない共棲者であり罪の理解者であり、最大の敵と最良の下僕の全てを兼ねる男、……いずれ。

そしてそれから3年を、流浪しながら彼はほぼ平穏に過ごす。簡単な魔導を施した硝子玉や母の手刺繍などを売りながら旅を歩き、その時の売り物によって性別を適当に振り替えた。

背が伸び、声が低くなってもそれは続いた。魔導の修練を続けていた彼は声音を使うことが難しくなかった。襟の詰まった服を着て薄化粧をして微笑みながら男相手に飾り釦を、化粧を落としてすらりとした体格のままに人懐こく笑いながら女相手に小物を売っていくことが、彼は決して嫌いでなかった。

永遠にこんな日々が続くと思っていたのは幼い証拠なのだろうか。母が倒れたとき、彼はそんなことを思った。

夜の闇がざわめいている。祝祭の日はこんなそぞろな空気が帝都ザクリアのどこへ行っても感じられた。

6月は祭事が多い。シタルキア皇国は大海を挟んで二つに分かれた両大陸の内の北側、北部大陸の中でもやや北よりに位置する国だ。夏の始まりはその年の眩しく希望に満ちた季節の幕開けでもあったから、自然そうした行事の先駆けが増えたのだろう。

この日は皇帝の誕生日であった。帝都のいたる箇所では振舞酒が出、宮城から続く大路には国旗がはためき、灯火が明るく享楽を謳歌している。帝都中が浮ついた雰囲気と手を取りあって軽やかに踊っているようだ。

大路から伸びる主幹路にはぎっしりと縁日屋台が立ち、呼び込みをする威勢の良い声が溢れ、それだけでなく雑踏を行き交う人々の朗らかな笑顔が充満している。

シタルキアの治世は民草に関わる範囲では上手く回っていた。これは為政者の功績ではなく、機構の手柄である。皇帝リシャーク3世は際だった辣腕でも呆れるような暗愚でもなく、既に完成された立憲君主制度を踏み外すことなく歩いており、また、歩き終えるだろうと言われていた。

宮廷へ入ればそれなりに主導権の引き合いなどもなくはない。だがそれも2大公家の専任であり、膠着とも陰険な和解ともいえる状態が続いていて、安定している。

世の中は平和で、これからもそれが続いていく。それを信じ切っているからこそ、祝祭の日にはこうして沢山の人が休日と愉楽を楽しむことが出来ているのだ。

華やかな音楽。どこかで鳴らされる爆竹。笑い声。

母親の手を離れて子供が一人、屋台の方へ駆け寄っていく。並ぶ駄菓子に目をきらきらさせていた子供は、心と顔を上げた。どうしたの、と母親が聞く。

「お母さん、誰かいるみたい？」

子供が指さす路地は、大通りから漏れる明かりで多少は奥まで見える。はっきりしない人影のようなものが確かにあるから、誰かがいるという子供の指摘は正しい。だが、母親は顔をしかめた。

「人様を見るんじゃないやありません——行くわよ、お父さんと待ち合わせでしょ？ 何か美味しいものでも食べましょうね」

母は子供の手を引いてそそくさと立ち去る。客を逃がした屋台主の男が路地を振り返り、影に目をすがめ、溜息をついた。

「どうしたい」

隣で蜜氷を売る店主の言葉に、男はふん、と鼻を鳴らした。

「全く、やるなら余所でやれってんだ」

顎をしゃくる仕種につられて覗き込んだ側も、闇に目が慣れると同時に苦笑した。

「追っばらちまえよ、営業妨害だってな——おい！」

路地の奥を怒鳴りつけると蠢いていた影がふと動きを止めた。一瞬の躊躇を置いて、ずるり、と影が更に路地の奥へ光の射さない場所へ移動する。

「——もう、やめて、よ……」

引きずられて呻いた少年の肌を直接まさぐりながら、男は低く、少年にしか聞こえないような小さな声で笑う。

「向こうからは見えないぜ——なあ、幾らでも出すって言ってンだろ？」

「身体、触るだけって、最初に言っただろ……お前となんか誰がやるかよ」

「ふ、ん……男娼のくせに……」

違う、と少年は否定し、男の肩を押しつけようとする。だがその抵抗は弱く、男は薄く笑いながら少年の顎を捉えて自分の方を向かせた。ここが暗い路地で残念だと呟く。もっと明るい場所か貸し部屋あたりなら、この顔をゆっくり拝めるのに。

薄暗い闇の中でも、それはくっきりとした美貌であった。冴え冴えと輝く青い瞳に、どこまでも完璧で繊細な顔立ち。自分の愛撫にゆるくこたえて喘いだ唇の可憐さ、淫蕩さ。全てが夢の中から抜け出てきたような美しさだ。

どこか危うい足取りで歩いていたのを捕まえたのは幸運だった。路地へ連れ込んで金を握らせると、戸惑ったような沈黙と共に抵抗がゆるんだ。身体を触るだけだからと口説き、それだけに少し多めの額を懐に押し込めて男は少年へ戯れる。少しずつ熱を付帯させながら。

「もう、やだ……よ、やめてよ……」

身をよじろうとするのを男は片手で難なく押さえ込み、再び顔を自分の方へ向けさせた。

「お前、キスは幾らだ」

形の良い唇が吐息に微かに湿り気を帯びているのがたまらなく扇情的で蠱惑的だ。

「そんなもん、売らない……」

言いかけた少年の手に、男は硬貨を落とす。金属の鳴り音がかちりといった。少年がいらない、と突き返そうとする手を無理矢理こじ開けて、降り注ぐように硬貨を押しつける。

少年は俯いた。自分の手に落ちる金額に、この話を突き放すかどうかを考えているのだ。……考えている、ということが分かれば十分だった。

「もっとか？ 幾ら欲しい」

「——いや……」

力無く首を振る仕種で、肩を過ぎた辺りの長さの髪がゆらゆら揺れる。そこからちらちら覗く白いものは少年の肌の色だ。年齢の若さゆえのなめらかさに男は喉を鳴らす。

男は素早く金を握らせ、少年の喉顎を捉えて唇を押しあてる。少年は微かに身じろぎしたが、男を振りきるほど強く抵抗しようとはしなかった。

すべらかな肌と同じように、やわやわとした唇の感触は素晴らしく美味だった。髪に手を差し入れ、かき回しながら男は貪るようにそれを味わう。角度を変えて何度も繰り返すと、少年が息苦しく喘いだ。

ゆるく開いた唇から強引に舌を口腔へ押し込む。少年の身体が一瞬跳ねる。無理矢理押さえ込む。首を振ろうとするのをしっかり顎を掴んで阻止する。逃げ回る舌を追いかけて回していると、突然強烈な痛みが唇にした。

男は反射的に身体を離す。一瞬の間をおいて、じんわりと鉄の匂いが口に広がった。噛まれたのだ。

「やめろ、って、言っただろ……」

苦しそうな呼吸のままで少年が吐き捨てた。男は頬にかあっと血が昇るのを感じた。狩人は自分で、獲物がこの少年だったはずだ。逆ではなかった。不意をつかれた衝撃が、怒りに変わる。「お前……！」

振り上げた手が、容赦なく美しい顔に降り落ちる。少年が悲鳴をあげてよろめき、ずるずると座り込んだ。

男はその腕を掴む。どこでもいい、転がり込める暗がりへ行って懲罰を与えてやろう、そんなことを思いながら男が少年を引きずろうとしたとき、路地の向こう側からどうした、という声が聞こえた。

「おい、あんまり乱暴はいけねえぞ！」

男は舌打ちをする。少年がさっと顔を上げ、助けを求める声を出した。路地を抜ければそこは縁日の人の海だ。男は顔を歪め、一瞬の躊躇いの後にそこから走り去る。

少年は身体を起こした。殴られた箇所がしびれるように痛んだ。手を当てるとぴりりと痛みが走る。少年は顔を歪め、自分の手に残った金を見つめた。

握りしめると硬貨のこすれ合う音がした。少年は腕を振り上げ、……そのまま力無く下ろした。投げつけるはずだった硬貨の代わりに零れていったのは幽かな嗚咽だった。殆ど一瞬と言える短い間、少年は涙を形の良い指で押さえ、ゆるゆる溜息をついた。

吐息が唇を撫でると、先ほどまでの男の感触が蘇ってきて、吐きそうになる。男がかき回して乱れた髪を手で簡単に整え、少年はよろよろ立ち上がった。

路地から大通りに出ると、そこにいた屋台の主が振り返った。

「おう、無事だったか、兄ちゃ……」

店主の言葉が止まる。少年は凍えたような顔をどうにか動かして、微笑んでみせる。自分の顔立ちには昔から絶対の自信があった。誰であれ、微笑みを向けて買えない同情などなかったのだ。

「ありがとう。助かりました」

かすれた声で呟くと、店主は頷く。隣で蜜氷をさばいていた男も振り返り、彼の尋常でない美貌に目を奪われて沈黙した。

「……災難、だったな」

ぼんやりした声に少年は僅かに頷く。売り物の筍の氷を男は手早く麻袋に入れて少年に放り投げた。

「頬、冷やした方がいい。せっかくの美形なのに台無しだ」

ははは、と作ったように明るい声を上げて笑う男に、駄菓子屋の店主も弾かれたように倣った。

「まあ、そこ、座んなよ……あんた、どこの子だい？ この辺じゃちょっと見かけない顔だね」

「この辺じゃなくてもなかなか拝めない顔だよなあ」

「違えねえ」

笑い合う2人の男に少年は困ったように笑い、もらった氷袋を自分の頬にあてた。屋台の後ろへ座り込む。仕種の鈍重さから、少年が衰弱しているのが分かった店主がやはり売り物の中から

蜂蜜飴をつまんで少年に握らせる。ぺこりと会釈をして少年はそれを口に放り込んだ。

「さっきのは何だったんだい、兄ちゃん」

「.....路地を歩いてたら、いきなり腕を掴まれて.....」

ふうん、と店主たちは少年を見、懐から覗く10ジルの紙幣を見た。男娼にしては慣れていないことこの上ない。恐らく、あれは男が無理矢理押し込んだのだろうと推測して苦笑になった。何かがあったときに「こいつだって金を受け取った」と主張するための所作だ。

無理もなかろうと彼らは目を合わせて頷き合う。

濡れたように輝く漆黒の髪によく映える白い肌、そこに配置された宝玉のような瑠璃色の瞳。一瞬目を疑うような造形美。端麗というにはあまりに言葉が足りない。一度見たら忘れ得ぬ、そんな美貌であった。年齢は14、5というあたりだろうか。目を伏せると少女めいた儚さが、視線を向ければ少年特有の透明さが視界に入ってくる。誰であれ、この美貌を目にすればもっと触れたいと望むだろう。その相手が悪いとああいうことになるのだった。

「少し息が落ち着いたら、ちゃんと人の通りがある道を選んで帰りなよ。あんた、なんだか頼りなさげだから変なのにつけ込まれるんだからな」

触れなば落ちん、という表現を思い出すほどに。

少年は僅かに頷き、頬にあてていた氷袋を返した。撲たれた箇所のはれはそうひどくなかった。指でつついて僅かに顔をしかめているが、耐えられない痛みではなさそうだ。大丈夫かいと声を掛けてみると、案の定少年は頷いた。

「氷、ありがとう、ございました.....」

声はまだかすれている。蜜氷の店主はああ、と頷いた。

少年は彼らに軽く会釈をすると、再び歩き出した――暗がりの、薄闇の彼方へ。

慌てて店主たちは声を掛けようとした。今忠告してやったばかりなのに、聞いていなかったのだろうか。だが、少年が振り返るほうが早かった。

「ありがとうございました。俺のことは気にしないで下さい。俺は人に酔うので、人混みはどうして歩けないんです.....」

そうしてもう一度、深く頭を下げると少年は背を向けた。

2人は顔を見合わせて同時に肩をすくめた。半ばは呆れたのかもしれない。だが、長い時間少年の行く先へ思いを馳せることは出来なかった。6月は祝祭日が多いとはいえ、今日の祭りは既に終幕へ向かっている。稼ぎ時も、あとわずかだった。

少年はぼんやりした感覚の中を歩いていた。足をすすめる度に脳天から何かが抜けていきそうな、そんな頼りない眩暈がする。原因は分かっている。単に貧血なのだ。

人通りの多い場所へ、という屋台の店主たちの言葉の正しさは理解していた。そんなことは、言われるまでもなく分かっている。だが、どうしても人通りの多い場所は嫌だ。とても怖いから。

人混みに酔う訳ではない。他人の目が怖いからだ。いつ、誰がどこで自分を見ているか、分からないから。

彼は物心ついたときから追われる者であり、3年前からは逃亡者だった。母と2人でこの国を離れ、生活の道もどうにか見付き、2人で支え合って生きていけるとそう思っていたのに。

甘いのだ、という自嘲を彼は自分の中で何度聞いただろう。自分は甘い。詰めが甘く、予測が甘い。同じ轍は二度と踏むまいと思う側から現実は怒濤のようにやってきて、少年をいつも翻弄した。

――溜息が、漏れる。母が何を考えていたのか分からない。ただ、自分を守ろうとしたその意志だけを信じている。だから、母の守護に返すのはやはり守護だ。自分の力で今度は母親を守り抜かなくてはならない。

そう思うとその困難な道に彼は顔を歪めざるを得ない。金。金さえ、あれば……――

それを思うことだけでは何も進まないことを承知の上で、考えてしまうのは何故だろう。こんな事、一つも自分の前進に役立たないのに、もし、とか例えば、という冠詞のついた夢がひどく心地よくて逃げ込んでしまいそうだ。

胸がきりきりと痛んで、彼は自分の胸倉を思わず縋るように掴んだ。ぐしゃりという紙の潰れる音がして、そこに押し込まれた10ジルの札のことを思い出す。口の中が急激に苦くなってきて、唾を吐いた。

路地には人手を見越して集まってきた娼婦たちや男娼たちがうろついている。彼はそれに間違えられたのだった。少しの嫌悪と金の重みを図りかねているうちに更に奥へ連れ込まれて悪戯された。それは初めての経験ではなかった。完璧な美貌とも、完全な麗玉ともいうべき彼の容貌は沢山の光と濃い影を呼んだ。それをいつでも鼻で笑い、強かに頬を打ち、時には急所を蹴り上げるなり罵倒するなりで寄せ付けなかった過去が、遙かに遠いことのような気がした。

彼は、片手で顔の半分を覆う。突き放せなかったのではなく、そうしなかった。端金とも言うべき額を押し込まれて、それに迷い迷いながらも抵抗を放棄した。屈服したのだ。怒りは自分に向けたものであり、苛立ちは今の事情へ向かうものであった。

彼は襟の隙間から札を抜き出し、握りしめていた硬貨と合わせて額を数える。小銭は額面がバラバラだったが、全部合わせると18ジルになった。

18、と彼は暗澹とした気分になる。身体中を取り巻いている絶望感や疲弊感と引き換えにしたのが、この額。一晚の安い宿を探すのさえ困難な金と自分の矜持を引き換えにしたのかと思うと目が眩みそうだ。悔しくて。

彼はそれを暫く見つめていたが、やがてゆるく頭を振った。どんな手段で手に入れたとしても金は金だと呟いてみる。自分に刷り込む作業はそう上手くはいきそうになかったが、いつまでも

拘泥しているわけにもいかなかった。

人通りの少ない広路へ出て、彼は自分の来た方向を振り返った。夜の闇に煌々と月が落ちたように、遙か遠い場所が真白く光っているのが見える。今日は祝祭の日、きっと更に遅くまでそこは光の溢れる場所なのだろう。歩いてきた距離を思い、彼はぼんやりと光を見つめた。

朝の鐘が帝都に鳴ると、城塞都市ザクリアの城壁門が開く。すると前夜の閉門に間に合わずにその場で屯していた旅人達が帝都の中へ消え、城壁の中からも旅立つ人々が流れ出てくる。人の流れに添うようにしてザクリアへ入ったとき、自分は何を考えていただろうか。

母の安否か。それともこれから先のことか。否、底をついた所持金のことだったろうか。実際ここ3日ほどはまともなものは口に出来ていなかった。水だけは街道沿いの村や都市の井戸を使うことが出来たが、その他には金がかかる。

それまでも節制ばかりだったから、元から豊かと言えなかった体力は目に見えて落ちていき、それに伴って視野が狭まっていくのが自分で分かった。未来のことや将来のことなどよりも、その日の食事の方が気にかかるのだ。

それでも自分は還ってきた――最も古い血を誇る皇帝の下繁栄と豊穡を遍く享受する都、美しく整えられ拡張を繰り返してきた歴史と文明の息づく都、そして彼自身の血の根元の回答が秘められている都、

――シタルキア王国、帝都ザクリアへ。

そして、これからいくべき場所も決まっている。それは3年前に彼の秘密を見抜いた上で力になろうとってくれた優しい皇子の下ではなく、勿論世話になった学校の関係者でもない。

ザクリアの暗部、国家の闇と快楽を引き受ける赤い格子の町、タリアヘ――

まだ奴は生きているだろうかと彼は目を閉じる。面影は3年前で止まっている。

(何かあって俺の力が借りたいときは必ず俺を呼べ。借りは必ず清算する)

この言葉に縋りたいのは自分だ。奴は覚えているだろうか。自分が一時保護していた子供のことを。言質といえる言葉を与えたことを。生きて、覚えていてくれるだろうか……

もし男が既に世を去っているのなら、自分とはとんでもなく間違っていたことになる。だが、他に頼っていく人間を思いつかなかったのだ。

生きていてくれ。そう願う自分の思いが全く利己主義から発しているのを承知の上で、彼は強く念じた。

どうか、お願いだから。希望と呼ぶには余りにか細い糸を切らないで。

そんなことを強く祈り、そして彼は固まったような頬で無理矢理笑おうとした。殴られた跡が引きつって痛んだ。そしてその後は？ 奴が生きていて、再会した後は……

頬が歪んだのと同時にそこが激しく痛みを訴えた。だが彼はそこに手をやらない。彼の手は、自分の胸の前で祈りをするときにのように組まれたまま、微かに震えている。

本当にこれしかないのかは母を連れて海を渡る間中、ずっと考えていた。きらめく波間の美しい水影を睨み据えながら、ずっとずっと、考え続けた。

自分たちに頼れる身内は存在しない。追っ手のことも怖い。帝都から逃げ出したときに持っていた現金も宝石類も、殆ど使い果たしてしまった。

皇子の下へはいけない。そこへ顔を出すことは藪蛇になる。襲撃者達の雇い主に、自分の帝都

への帰還をわざわざ教えてやることは愚かというものだ。いっそ魔導士となって魔導の塔に身売りしようかとも思ったが、国家の奴隷となることは即ち母に会えなくなるということだ。

だが金は必要だ。それも早急に、莫大な額が。

彼は唇をやわく噛む。まるきりの八方塞がりというわけではないのだ。道はある。ただ、それにどれだけの覚悟がいるのかというだけの話だった。……胸が痛む。

母さん。

母さん、俺は間違っているのだろうか？ でもこの場合は正しい答えなど何の価値もないんだ。要するに結果なんだ。自分を折る相手は自分で選ぶ。それが俺の結論だから……

だが、それでも泣きたくなる。屠所に引かれる羊の心境というのはこうしたものかもしれない。神妙に項垂れて目線だけをあげながら、落ちつきなく周囲を見回している受刑者のようなものだ。

そしてどれもこれも、あの男が生きていなければ水泡になって消えていく夢のようなものではない。生きていてくれ、と願うこの言葉があまりに切羽詰まっているのが自分でも悲しかった。

タリアは帝都ザクリアの中心から南西に下った辺りに位置する。城壁門は北と西の2ヶ所にあり、彼は西の門をくぐって帝都に入った。一日歩き詰めてどうやら皇宮から続く大路に出た。距離に直してようやく半分に足りないほどというべきだろうか。

彼は痛む足をじっと見下ろす。半ば機械的に足を動かしてきたが、もうこの辺りが限界というものだった。18ジルで宿を探すとすると、安宿の集中するあたりまで行かなくてはならないが、それはタリアの近辺だった。食事をしてもいいが、今夜の安全を確保することと一体どちらが大切だろうか。

そんなことを考えていると、視界の端に馬車が見えた。彼はそれを見つめる。御者の方も彼に気づき、近く寄ってきた。

「乗るかい、兄ちゃん？」

首を振りかけて、彼はふと思う。この金でタリアまで行くというのも悪くなかった。タリアについた挙げ句に自分の望みが叶わなければ、それはその時考えても良い。空腹と疲労は思考力を奪い、刹那的な未来しか考えられなくなる。彼はとにかく疲れていたし、動けなくなる寸前であった。

「……タリアまで、いくら？」

御者はなんだ、という顔をした。先ほどの男と同じように彼を男娼だと思ったのだろう。

「25」

ぶっきらぼうに返してきた。25、と彼は繰り返して呟く。手の中で彼の全財産がこすれあい、音を立てた。

「乗らないのかい？」

せかすような調子で御者が言った。彼はゆるく首を振る。御者は彼の様子がしおらしかったのを哀れに思ったのだろう。幾ら持ってる、と聞いた。

「今、これしか……」

彼は自分の手を広げる。御者が唸る。彼は半ば祈るような気持ちで御者を見上げ、彼の行く先を照らすランプの近くへ出た。目があって、御者が微かに息を呑んだ気配がした。彼は縋り付く顔をする。今は誇りだの矜持だのと理屈を並べるときではなかった。

やがて溜息がした。

「……いいだろう、乗りなよ。今日はお祭りだからまけといてやるさ」

彼は頷く。金を全部御者に渡すと馬車へ乗り込む。一瞬の間をおいて走り出した馬車の出立を祝砲するように、どこか遠くで爆竹の音が聞こえた。

しばらく馬車の中で、彼はまどろんでいた。訳の分からない色味と暗闇が混じり合って、ひどく気疲れした。御者が彼を揺すって到着を告げたとき、目覚めは明らかに安堵だった。

去っていく馬車の轍の音をぼんやり耳に拾いながら、彼は赤く塗られた柱を見上げた。その柱から先の町は、今までの青黒い石の町とは明らかに違っていた。

びっしりと通りを埋め尽くす赤い格子。華やかな音楽が微かに聞こえ、猥雑なさざめきと女達の嬌声、そして甘い化粧の香りが満ち満ちている。決して狭くはない道の両側に焚かれる篝火が朱塗りに金泥の模様の店棚に照り映えて、通りごと燃えるような色に染めている。

懐かしく、変わらぬ光景であった。3年前に帝都から逃げ出す前と、何一つ変わっていない。人の欲望を満たすための町は、欲望の本質が変わらないことには変化などないのだろう。

彼はその中へふらふらと足を入れていく。振り返る人々の、強烈に突き刺さってくる視線が肌に痛かった。彼は娼家の赤い格子にはめられた飾り硝子をちらりと見る。

黒い髪は魔導の効果だ。本来の髪の色を変えることは出来ないが、幻術という形で違う色に見せることは出来る。染め粉を買えなくなってからはずっと魔導の力だった。

ただ、魔導による幻術で姿を変えても魔導禁止結界に触れるとか、施術時の体温と著しく離れたとかですぐに効果がなくなる。だから一番確実なのは今でも染め粉を使った上で傘を持つこと、なのだった。

髪の色がまだ気になる辺り、自分も3年でそう変わったわけでもないな、と彼は自嘲する。男に殴りつけられた顔は押さえるとまだ痛んだが、青くなっているはいなかったから痣にはならないだろうが、それにしても頬の痛む箇所の痕跡が目立った。

人の視線はこれだろうかと思いながら、彼は路地へ入っていく。3年前の秋の日に、毎日のように通った道も変わらない。どこもかしこも昔のままに薄汚れた町並みだった。

細い路地に入っても、暫くは安い娼家や貸し部屋などが並び、やがて更に怪しげな雰囲気漂わせる店が続き、それがぱったりなくなると今度は非合法のものばかりを扱う闇の市場になる。市場といっても店があるわけではない。たむろしている男達が大抵仲介屋で、欲しいものを告げれば元締めの所へ連れていくという段取りだった。

そうした路地を抜けた先に、チェーンはある。少年達が巣くう、タリアで最も危険な場所の一つだ。

昔出入りしていた屋敷はトリュウムと呼ばれていた。チェーンの中程にある、大きな石のアパートだ。馬車の中で少しまどろんだせいで、足取りは以前よりは少しまじだった。どうにかトリュウムの黒々した影姿が目に入るようになって、彼はほっと息を吐く。男が生きているか否かという賭はともかく、ここへ辿り着いた旅路の終焉が見えて、少し楽な気分になった。

トリウムに近付いていくと、門のところで雑談に興じていた少年達が顔を上げ、彼を認めて一斉に凄む目つきになった。明確な味方か明らかな身内でないときに身構える彼らの反応がやはり同じで、彼は思わずゆるく唇で笑う。自分たちに対する嘲弄だと思ったのか、一番身体の大きな少年が何がおかしいのだと低い声で聞いた。

「あんまり無遠慮だと知らねえぞ」

ああ、と彼は微笑みながら頷く。変わっていない。ここの少年たちの気質は昔のままだ。余所者を嫌い、自分たちと違う境遇の子供を憎しむ。彼がそんなことを思っていると、急に胸倉が掴まれた。抵抗する体力は殆ど残っていない。彼はそのまま引き寄せられ、咳き込んだ。

「随分楽しそうだな、お前、酔っぱらってんのか？ それとも――」

「ねえ」

彼はその言葉の終わるのを待たずに呟く。

「あんたたちの頭って、まだ、ライアン？」

一瞬の沈黙の後、不意に空気が戸惑いへ変わった。

そうか。彼は破顔する。

生きているのだ、彼を保護し彼に居場所をくれると約束したあの男は。少年達の戸惑いと、その眷属である沈黙は彼らが支配者の機嫌を損ねやしないかと考えている証拠だ。

「.....ライアンに何の用だ」

掴まれていた部分が急に楽になって、彼は呼吸を整える。自分の周りを少年達がぐるりと囲んだ。彼は薄く笑いながら、俺は奴に話があるんだと言った。少年達がお互いに視線を交わし合いながら、口にしない会話をした。

「―― お前には会う資格がない。俺達は何も聞いていないし、お前がライアンの知り合いだという証拠もないからな」

そう言われて彼はゆるく首を振った。腰のベルトに繋いであった漢氏竜の煙草入れを抜き出して、彼らに見えるように掲げる。

「ライアンから貰った。3年前だ。.....信じなくてもいいけど、もし俺が本当にライアンの知り合いで、ライアンが俺にいつでも訪ねて来いとこれを寄越したのも本当だったらあんた達、ただじゃ済まないんじゃない？」

この恫喝は効いた。僅かなざわめきがして、少年達は沈黙へ還った。先ほどの大柄な少年が取り巻きの一人に何かを言いつける。暫くにらみ合っていると、やがて軽い足音が聞こえた。

彼はそちらをちらりと見る。自分を取り囲む少年達の姿に隠れて顔はよく分からないが、飛び抜けて背が高い。ライアンではないのがすぐに分かった。彼の記憶の中にあるライアンの背格好とは似ていなかったし、3年前ライアンは既に外的成長は終えた年齢だった。

少年達が割れる。ある程度を束ねている幹部と言うところだろうかとは彼は顔を上げてまじまじと相手を見つめ、.....そして首をかしげた。面差しを知っている。すぐに分からないのは余りに成長が著しくて、一瞬目を疑うほどだからだ。

「.....チアロ？」

呟いた自分の声に触発されるように、相手の顔がぱっと明るくなった。

「クイン！」

久しぶりに呼ばれた名前に彼は微かに震える。最後にその名を呼ばれたのは一体いつのことだったろうか。抱きついてきた身体は温かで、背を抱き返しながら、彼はうん、と頷いた。

「ああ、久しぶりだな、クイン、お前元気？　なあ、今までどこで何を？　ライアンもお前のこと懐かしがってさあ、あ、ライアンに会うだろ？　今ちょっと忙しいけど、お前が戻ってきたって言ったら飛んでくるよ！　ライアンには俺から連絡するからさ、ライアン今王屋敷の方にいるから、多分ね、でもすぐには無理かもしれないけど、会いたいだろ？　懐かしいなあ、なあ、本当に何年ぶりだっけ？」

3年だよ、とクインはゆるく笑った。3年前このチェーンに出入りしていた頃、ライアンの弟分としていつもその側にいた子供だったチアロは、子供を脱して既に少年から大人への階段に足をかけようとしていた。少い日の年月は余りに多くのものを変える。

「知り合いですか」

チアロの後ろから先ほどの少年が声を掛けた。チアロは振り返り、軽く頷いてみせる。

「お前ら、余計なことはしなかつただろうな」

クインは微かに眉をあげる。この3年でチアロの身に加わったものは、どうやら背丈だけではなさそうだった。今でも明るく人好きのする性質は変わっていないが、それと同時に、他人を従える威圧感のようなものを備えつつある。少年達に下す言葉の一つ一つが小気味よいほどはっきりしていた。

少年達を手で追い払い、チアロは彼の顔を覗き込んでくる。何、と聞き返すとチアロは自分の頬を軽く指で叩いた。ああ、とクインは苦笑になり、そしてまだ痛むそこに片頬を引きつらせた。

「何でもないよ。ちょっと揉めて殴られたただだから……それより、ライアンは……」

言いかけた言葉を、チアロが手で制した。そうした仕種の中にも、チアロが少年達の上に立つ身である空気があった。

「ライアンは少し、忙しいんだ。もちろんお前が帰ってきたことを知らせるけど、いつとは約束できない。配慮はしてくれると思うけど……ああ、立ち話なんかするもんじゃないな。食事は？

もしまだなら、近くに軽く飲み食い出来る所があるけど」

クインは一瞬返答につまる。馬車代で所持金は使い果たしてしまい、無一文だった。彼が返答を躊躇った僅かな時間は、チアロの気安い、朗らかな声ですぐにかき消された。

「久しぶりの再会なんだから、俺がおごるよーさ、行こう」

明るく笑ったチアロの顔が、クインの視界で歪んだ。

ライアンの生存。チアロとの再会。希望が潰えていなかったことに対する安堵。ようやく呼ばれた自分の名。帰ってきた、自分の巢。

それがないまぜになって喉からこみ上がってくる。チアロがそれに素知らぬ顔をしてくれるのが嬉しかった。

祝祭を鮮やかに彩る光の花が夜空に咲いた。火薬は貴重品だが、それを一瞬の見物に費やすことが出来ることこそを奢侈と呼び、富貴という。こうして自分たちが贅沢を享受できるのも安定した宮廷と安泰な国家の成せるものだと思いながら、皇子はそれを見上げた。弟のはしゃいだ声がする。

「母上、ほら、また違うのがあがりました！　すごいなあ」

皇子はちらりと視線を隣へ座る同母弟の皇子へ向けた。母親譲りの菫色の髪が、花火の明るく刹那的な光の下でなめらかに輝いている。父の誕生日の園遊会は晴天であれば城の広大な中庭で行うのが慣例であった。

弟を挟んで母がゆったりと座り、更にその隣に父が居る。両親は祝辞を受け取るので忙しいが、自分や弟はまださほど構われなかった。

「ライン、母上はお客様のお相手で忙しいのだから煩わすのでないよ」

弟の手を軽くたしなめるように叩くと、弟はぺろりと舌を出して笑った。屈託ない笑顔、明るくて人懐こい性質、そんなものをこの弟はきっと父親から譲り受けたに相違ない。外見は母によく似ているが、中身は父とそっくりだ。――だから、だろうか。

皇子は微かに目を伏せる。自分もまた、母と似ている。表面ではなく、内面が。神経が細く、苛立ちやすく、そしてそれを口に出せない性質が。母も自分も絶対に口にしないだろうが、お互いに似過ぎたせいで、2人きりになると妙に気まずい。親子だからという括りを取り除いてしまえば単に気が合わないで済むことも、母と子であるから複雑であった。

母であるイリーナ正妃は明らかに弟を溺愛しており、愛情の取り分の比率だというようにか、彼には弟に対するような関心を持たなかった。

もちろん親子であるから普段の生活の中で情愛を感じないことはない。母は自分を理解するように努めようとしているし、彼の生来の病弱さを気に掛け、それと引き換えにしたような聡明さを喜んで沢山の教師をつけてくれた。

ただ、と皇子は花火を見上げながら思う。

そうやって母と離れて過ごした時間の長さが、きっと今のぎこちなさの原因なのだろうな、と。

教師たちが皇子を褒め称えたと母はとても喜んでくれた。だから努力もしたし、そもそも皇子にとっては勉強などはとても簡単な事に思われた。道ばたの花を手折るほどのことにしか思えなかった。

それに勉強というものはどんなに複雑でも煩雑でも、そこには必ず答えがある。明確な回答がある。本当に分からなくて難しいのは他人だ。母とはいえそれは他人、他人のことは分からない。

そっと皇子が溜息を落とすと、兄上、と小さな声がした。弟が少し心配そうな顔つきで彼を見上げている。

「どこか具合でも？　僕、お部屋までお送りしましょうか？」

いや、と彼は微笑む。弟を愛しているのは母だけではなく、それは自分も同じ事であった。ラインという4才年下の弟の一番良いところは、こうして何の見返りや算段などもなく他人に優し

く振る舞えるところだろう。意識して出来る年齢ではないから、これが本質なのだ。

愛されやすい気質というものがある。それは確かに弟に宿り、自分には欠けているものなのかもしれない。

3年前から通っている中央中等学院でも皇子は完全に周囲から浮き上がっていた。自分はどうかや近寄りがたいらしい。そう級友を邪険にしているつもりはないのだが、他人とつき合うのが苦手なのだ。

成績は飛び抜けており、身分と、そして級友と呼ぶべき同学年の在籍者達が自分よりも5、6才は年上な事もあって皇子は大抵一人だった。

そして自分を遠巻きにする級友達に囲まれて、彼は時折「彼女」のことを思い出した。正確に言うならば、少女に擬態して中等へ通ってきていた、あの少年のことを。

彼が何を考えていたのかは分からないが、彼は自分の顔立ちの麗しさと、飛び抜けて年少であることを上手く利用して立場を作っていた。共に過ごしたというほどの時間さえ共有できなかったが、彼の意図したことは分かる。年齢と成績と美貌が揃うことで孤立するなら、崇められる孤独を選んだ者の微笑みだった。

彼とならば少しは共感を持てただろうという感慨は、年月を経るごとに深くなっていった。彼もまた、孤独を知っていたから。

それはよく分かる。「彼女」が突然学院から去ったとき、驚愕と疑問の嵐が通り過ぎていったが、それはまさしく一過性のものだった。2ヶ月もすると、そんな少女などいなかったように級友達の環は閉じた。幻のような少女だったという言い方を皆がした。

いつでも微笑みを絶やさずに、誰に対しても誠実で優しい。誰とも上手くやっている――それは誰にも都合が良かったということだ。

人は自分の都合で生きているが、友人は友人なりの、教師は教師なりの都合がある。他人である以上、それを受け入れろと押しつけてくる。級友たちもそうだったろう。「彼女」に対して聡明で大人しい美少女の役を与えて、そこから逸脱することは歓迎しなかったに違いないし、何を言っても微笑む「彼女」はある面、確かに好都合なのだ。

「彼女」がよく告白を受けていたと後に聞いたが、その理由も分かる。美しく聡明な少女が自分の言うことを否定せずにいちいち頷いてくれる、その満足感はどれだけだろう。自分を全肯定してもらえることほど、心地の良いこともないだろうから。

そして友人や教師の、全員の望みが一致することなどあるはずがない。だが、現実「彼女」はみなとうまくやっているように見えた。誰ともうまくやっていて、そして誰とも特別親しくなかった。誰にとっても都合の良い少女ではあったが、それ以上ではなかった。

それを虚しいと思っていなかったはずはないだろうと皇子は思う。それが分からないというような鈍感さは持ち合わせていなかったように思われた。

あの子は、と皇子はその面影を目の裏に描こうとしてみるが上手くいかなかった。非常に整った顔立ちであったことは覚えているのだが、何故か記憶が薄い。級友達も似たようなことを言っていたから、これは恐らく印象の問題なのだろう。

だから「彼女」は幻になってしまったのだ。本当にそこにいたのかどうか分からないような、曖昧な存在感しか残さなかったから。

皇子とてそれは同じだった。「彼女」のことは、曖昧な色のような印象でしか記憶に残っていない。

だから彼と話した時の記憶は鮮明で、輪郭もくっきりと鮮烈だった。あれが彼の本質なのだ。

動揺して青ざめた後、自分を強請っても何も出ないと呟いた声。いつか彼が少年であることが露見する可能性があると思った瞬間の、諦めの早さと見切りの鋭さ。逃げていくのだと悟った皇子が差し出した餞別を撥ねつけた潔癖さときつさ。

彼とだったら、少しは話が出来たかも知れない。皇子はそんなことを思う。

自分の疑問を優先させてしまった幼さを今更後悔しても取り返せないが、孤独を知る者同士の共通が自分たちを結んでくれただろうか。

もう一度会いたい。皇子は時々、そんなことを考えている。今度は少年として生きている、素の彼に会いたいものだ。

あの時彼が処分してくれと言った魔導論文は、先に賞を取った時間の生成に冠する魔導理論の発展と展開だった。

論旨を大まか記憶し、皇子はそれを自分で書き直して提出した。「彼女」の論文の抜けた部分や補足の足らなかった部分を説明し、半ば引き継いだような皇子のその論文は、やはり賞を取った。

去年その検証実験が行われたが、呪文構成は皇子の論文に基づいて書かれたため、術者の魔導士は男性であった。「彼女」の足跡を消すことが出来て、皇子は真実、彼との約束を果たしたような気になった。賞金は使わずに残してある。会えたら渡してやりたかったから。

皇子はいつしか、「彼女」と似たような場所にいた。

飛び抜けて若く、魔導に才能があり計算に強く、虚弱な体質のせいで運動を休み、他人を寄せ付けない空気をまとって教室に座っている――

「彼女」と自分は同じなのだ。

「彼女」として生きていた少年が中庸の孤独を選んだように、皇子は孤高であることを選んだ。いずれにしろ、級友と呼ばれる者たちと話が合うとも思えない。

ラインだったら、と皇子は思う。この弟であればそんなことはないだろう。きっと友人という輪の中に入って楽しく明るく生活を始めるに違いない。

第4皇子という生まれなど感じさせないような気安さと、身分高く大切に育てられた者特有のまっすぐな愛らしさ、屈託なく他人を信じる人の良さがある。

自分にはとても出来そうにないけれど、と皇子は内心で苦笑し、まだ心配そうにしている弟の肩を叩いた。

「大丈夫だよ、ライン。……向こうで雑技が始まるから見に行こうか。私たちがここにいてもすることもないしね」

弟はこっくりと頷き、母にそこを離れる旨を告げて立ち上がる。その手を引いてやりながら皇子はまだ続いている花火を見上げた。

彼は今どこで何をしているだろう。

逃亡生活を続けているのだろうか、まだ少女として生きているのだろうか。だが、それは彼の

ためにはならないはずだ。いずれ大きな齟齬が生まれるだろうし、そうでなくても秘密が多いと呼吸をするのも苦しい。

だが、彼が今を幸福だと感じていればそれでもいいことかもしれなかった。

また会えるかどうかは分からない。魔導士を使って足取りを追ってもいいしそれは不可能なことではなかったが、皇子はそれをする気はないのだった。

ゆるやかな覚醒であった。目を開けても暫く動けないほどの疲労が身体を低く押し込めていて、溜息一つ付くのにひどく毛布が重い。軽く漏らした吐息が自分のものではないように沈んで、彼は瞬きをした。ぼんやりした遠景は最初、暗い色にしか見えなかった。目に映る濁った色の物が薄汚い天井板だということを理解するまでにややあって、彼はやっとここが何処であるのかを納得した。

自分は戻ってきた。戻ってきたのだということを先にも思ったはずであったが、昨晚の記憶が次第に蘇ってくるのと同時に、それが強烈な実感になって自分の中に根を張っていくのが分かった。3年前に帝都から逃げ出す直前まで、自分の一番の居場所であったはずの街は、相変わらずだった。巨大な歓楽地を回遊する男達の顔付きも、女達の振りまく華やかな光彩も、そこにいる人々の顔ぶれは変わっても、色味は何も変わらない。3年前に自分と同じようにどうしようもなく子供であったはずのチアロが、少年という年代の階段を歩み上がってはいても、彼特有の明るい空気がそのままであったように。

ライアンも同じだろうかクインは思いながら、ゆっくり起きあがった。

最初に感じたのは酷い眩暈だった。体が重い。食事をしながらチアロと近況の話などをしていたような記憶があるが、それも途中から急速に不明瞭になっていく。酒だろうか、それとも疲労だろうか。どちらにしろ、自分でこの部屋に転がり込んだというわけではなさそうだ。

3年前に出入りしていた古屋敷の内装とはやや違う。あちらもこの場所とそう変わらぬ汚さであったが、それでも部屋の造りの雰囲気が違うことだけは分かる。寝台の横の窓から外を眺めると、やや離れた場所に煤けた赤い色にぼんやりと染まる地域があった。あれがタリアの境界門から続く大通りであるはずだった。その遙か向こう側に、魔導の塔の威容が霞んで見えている。距離感と方向から自分がいるのがやはりタリアの中であることは分かった。

クインは再び溜息をつく。物音が殆どしないから、人が少ないのだろう。チアロと行動を共にしていればその内に昨晚のような余所者への干渉は減っていくだろうが、今はさほど期待できない。自分の顔立ちはひどく目立つはずだったが、期待しすぎるのは間違っていた。

だが、この部屋はチアロの自由になる内の一つに違いなかった。タリアには無数の覇権や利権を巡る派閥がある。大人達にもそれがあつた、少年達にもそれがあつた。どちらにしろ頂点に立つ者は存在するが、だからといって下位の派閥が解消するわけでもない。チアロがここへ自分を連れてきたというならば、この場所はチアロにとっては安全地帯であるということだ。ならば、まだこの建物の中にいるかもしれない。もしくは、信頼できる配下に何か言い残しているかどうかだ。とにかく他人を捜さなくてはならないとクインは結論をつけ、寝台から滑るように下りた。

立ち上がろうとした瞬間、鈍い痛みと共に膝がぐんと抜けた。思わず前のめりに倒れて手をつく。足裏がじりつくように痛い。クインは床に手をついたまま怪訝に振り返り、両足首から下に捲かれた包帯に目を留めて眉を寄せた。

床に座り直して足を引き寄せてみれば、包帯の巻き方はいい加減で適当ではあつたが強い消毒薬の臭いがした。おそろおそろ包帯の上から足を触ると、全体が軋むように痛むのと同時に、足裏が痺れたようにずきずきと脈打っているのが分かる。

この所ずっと歩き詰めだったからなとクインは苦笑した。それでもどうにか帝都の門を潜りタリアまで辿り着けたのは他のことで飽和していて痛みなど感じている余裕がなかったからなのだろう。これは呼吸が落ち着いてから魔導で多少癒してやれば良いように思われた。旅を重ねながらもクインは魔導の鍛錬だけは続けていたし、どうやら自分にそちらの方面に置いて突出した才能があることも知っている。魔導は才能の要る科学であるということはよく言われているが、その才能は遺伝する。魔導士は出自の秘匿が義務であるが、優秀な魔導士のごく近い血縁者を半ば強制的に入塔させているという噂も昔から存在するほどだ。

他人を呼んだ方が良いという結論は変わらないから、クインは扉まで這って進んだ。扉に手を掛けようとしたとき、だがそれは外側へ逃げるように開いてクインは再び手をついた。軽くあげた驚声が可笑しかったのか、朗らかに頭上で声が笑った。

「悪い悪い、お前が絶対に自分で何でも解決したがる奴だって事は知ってたつもりなんだけどな」

昨晚と変わらない明るい笑顔でそんなことを言い、チアロは手にしていた盆を寝台に素早く置くとクインの肩を支えた。半ば担ぎ上げられるようにしてよろよろ寝台に戻ると、クインは肩で呼吸をしている自分によく気付いた。

「大丈夫かよ、本当に。お前さ、どこから歩いてきたんだよ。普通に歩いてみたいに見えたから構わなかったけど、かつぎ込んでからびっくりしたんだぜ。一応手当はしといたけど、ちゃんとした医者を知ってるならそっちに行った方がいいかも知れないってライアンも言ってたからな」

軽く頷き、クインはライアン、と聞き返した。自分は彼に会いに来たのだった。どうやら眠っている間に一度、彼は自分の顔を見ているらしい。

「ライアンは？ あいつ、来てるの」

「いるよ。今ちょっと出ていったけど、煙草じゃないかな。すぐ戻ってくるさ。そんなことより、取り合えず何か食えよ。お前、しばらく殆ど食べてないだろ？ ちょっとは顔色も戻ってきてるけど、酷いもんだぜ」

クインはやや頬が紅潮するのを感じた。返す言葉は何もなかった。それが事実であるからだ。彼の決まり悪そうな顔付きにチアロは笑い、食えよ、と先程彼が寝台に置いたままになっていた盆をクインに押し出した。クインは簡単な礼を言って盆の上のパンに手を伸ばした。どう繕っても金がないことは変化しなかったからだ。口を動かしていると頬が鈍く引きつった。

祝祭の夜に通りすがりの男に殴られたことを、クインはようやく思い出した。そっと指先で触れてみると、既に痛みは引き始めていた。痣にはなっていないだろうか。胃に物が入る度に、押し上げられるように思考力が戻ってくる。痣になっていたら困る。自分の価値も財産も、今はこの顔一つであるのだから。

クインの様子で何を思っているのかを察したのだろう、チアロが洗面所から小さな鏡を取ってきて差し出してくれる。中を覗き込むとまず頬の痣が気になったが、そちらは既に肌の上には殆ど痕跡を残していなかった。この様子では明日には殆ど分からなくなるだろう。

だがもっと衝撃的な物を見つけてクインははっと顔を上げる。思わずわし掴むようにして目の前に引き寄せたのは、髪。

幻術が解けて、元の瑠璃石色に戻っている髪であった。

「髪だろ」

彼が何か口にする前に、チアロが素早く言った。クインはごくりと生唾を飲み込みながらチアロを見た。

「チアロ、これは」

あてもなく言い訳を探してクインは唇を開き、そのまま沈黙した。何から、どうやって説明すれば誤魔化せるのか、それとも自分の知っている事実を話す方がいいのか、どうすれば一番良いのか、沢山の言葉や方策がぐるぐる脳裏を巡って收拾がつかない。

チアロはライアンが一番の配下だ。ライアンと自分が顔見知りであるか否かの判別をさせるのに少年達がチアロを呼ばせたほどに。ライアンと自分の間の話は彼に筒抜けしていく可能性も大きい。ライアンが忙しいというのが本当だとするのなら、自分とライアンを繋ぐ役割を負うてくれるのはチアロだろうから――

自分の顔から血の気が引いていくのがはっきり分かった。自分の目立つ顔立ちに更に目立つ髪の色はきっと何処かで極悪な外札を掴ませるための罠だという囁きが、ぐるぐる、めまぐるしく、ひっきりなしに、自分の中を動いている……

「クイン」

呼ばれるのに続いて肩が揺すられ、クインはやっと返事代わりに一つ頷いた。チアロの目は優しく笑っていた。

「ライアンの言うとおりに、お前には秘密が多い。だから俺は、お前が自分で判断するまではお前を目立つように振り回したりはしない、これは約束だ。ここに押し込んで次の朝に様子を見に来たときには変わってたけど、俺以外は誰もいないから少しは落ち着け」

クインはややあってから今度ははっきり頷いた。その言葉よりも、彼の目の柔らかさに安堵したのかも知れなかった。ごめん、と呟くと真実それに近い申し訳なさが胸に興ってきた。話せないことも多く、秘密にしておくことも多い。悔しいのはそれをどれだけチアロに話していいのか、今の時点ではまるきり見当が付かないことだ。謝るしか出来なかった。いいって、とチアロは重ねて笑い、そしてずっと立ち上がった。この3年で見違えるほど伸びた背丈が見上げるほどすらりと高かった。

彼の視線が滑るように部屋の扉に動いたのが合図だったように、音もなく扉が開いた。入ってきた男にクインは目を細めた。男もまたクインを見た。彼の淡い緑色をした瞳が迷い無く、適格に自分を射抜いていくのが分かった。クインは痛む頬に構わず、笑って見せた。

「久しぶり、元気そうだね」

クインの目の前で、ライアンはやや苦みの混じったような笑みになった。大げさに表情が変わらない辺りは3年前と大差ない。

「お前もな、と言ってやりたいところだが、何日かは派手に出歩かない方がいいだろうな。必要な物は全て揃えてやるからそうしておけ」

ライアンの声は低く落ち着いて、3年前最後に彼が見た、怒りと憎悪で煮えたぎるような熱は既になかった。彼が今生きているということは、あの決闘に勝ち、それから沢山の物に勝ち、

これからも勝ち続けて行かなくてはいけないのだろう。

——多分、それは都合の良いことなのだ。ライアン自身の負担や重苦などとはまるで別の観
点の、例えばクインが彼に寄生する条件としては。

それを思うと自嘲の苦い潮が口の中へ上がってきそうだった。クインは重苦しい空気を無理に
喉奥に沈めて、今度は持ちうる限りの虚栄をかけて華やかに微笑んで見せた。ライアンは僅かに
すがめになり、そして苦笑した。

「……済まないが、これから王屋敷へ行かなくてはならなくなった、お前の話は今夜にでも聞いて
やるから——チアロ、クインを地下水路の俺の部屋に移せ」

「でも足が、ライアン」

「お前はこれをどうやってここまで連れてきたと言った」

チアロがくしゃりと顔を歪めて、ふてくされたように唇を尖らせた。不承諾であるというよりは
明るい不満顔というところであろう。後でな、と言い残してライアンはそれ以上二人に口を挟
ませずに出ていった。相変わらずライアンの行動律に一葉も噛みつかない苛立ちが持ち上がって
きそうになる。それが表情に出る前にクインは大仰に溜息をつき、チアロに向かって肩をすくめ
て笑った。

「全くお忙しいことで」

からかうなよ、とチアロは今度はやや真面目な表情になった。

「去年タリア王の交代があって、ライアンはもうチェインだけのことに関わってられない——
って、昨日その話もしたはずだけど、お前、綺麗に忘れてるだろ？ ライアンは今のタリア王
アルードの気に入りだから、細々したことが沢山有るんだよ」

クインは曖昧に頷いた。チアロが説明したというならそれは本当のことだろう。結局のところ
、途中で意識を見失った方が悪い。クインはばつの悪そうな顔をするよりも謝るよりも、もっと
自分らしいとチアロが笑うであろう方を取った。

「で？ 連れていってくれるんだよな？」

チアロは一瞬を置いて、予想の通りに笑い出した。

チアロがぶつぶつ軽口を叩きながら彼を連れていったのは、迷路のように入り組んだ地下水路の奥の、深淵といって良い位置にある小さな部屋だった。

目覚めたアパートの地下室から潜り込めるようになっている辺りは、チアロもこの街の住人なのだとクインは奇妙なところで合点した。人目に付かない通路を幾つも使っていることが、彼の立場の高さを教えてくれる。用心を知っているのだ。

地下は土と黴の独特の臭い同士が入り交じって、胸が悪くなりそうな空気が充満していた。地下水路に下りて部屋に辿り着くまでクインはずっと顔をしかめ通しであったが、部屋の方はかなりましであった。若干空気の匂いは残っているものの、気にしないように努めることが出来る。

ライアンが姿を現したのは、暫く雑談に費やしていた時間を次第に退屈に感じ始めた頃だった。地下水路を巡るための通路際にある部屋のこと、窓はない。通気口らしき古びた配管が通っているが、そこからでは外の様子も分からないから、尚更時間も長く感じるのだろう。

待たせたな、と呟きながら薄い上着を脱ぐライアンの表情には特別な感慨や感情は読みとれない。3年前に知り合ったときから変わらぬ、ライアンの性質の癖という物であった。クインは次第に上がってきた呼吸を落ち着けようと、帰還の理由となったはずの男を見つめた。

顔立ちはそもそも悪くない。華やかさや明朗さという色相には決定的に見放されてはいるが、端正と言うべき整った顔立ちである。線が細く、どこことなく女性にも共通する美形なりのきつさがあるが、彼の身に付いた空気は女性的なものとは隔絶した厳しさだった。

体軀は3年前とほぼ変わらない。多少肌がくすむように色濃くなった気はするが、向き合っている場が光の少ない地下だということも加味されているだろう。

じっと見つめていると、ライアンは素っ気なく視線をクインに与えた。

「俺に話があるようだな、だから戻ってきた……違うか」

上着を適当に椅子に掛け、卓の上の水差しを手繰り寄せながらライアンが言った。クインの様子から、単に懐かしさで戻ってきたわけではないと察しているようだった。

それはすぐに分かるだろうとクインは納得する。無理を言うけど無茶はしない、とチアロが次分を評するように、自分は自分の限界を超えることには手を出さない。出来ることと出来ないことの見極めくらいは出来る。

そして限界を超えながら戻ってきた事実が、何よりもこの場合は雄弁だった。

クインは僅かに俯く。

ライアンしか頼って行ける相手を思いつかなかった、それは確かだ。これから自分が切り出す話はライアンの掌握するこの地域には向いた話だし、何かあれば自分を頼って良いのだという言質を与えてくれたのは彼だ――

だが、理屈よりも何よりも、怯懦が言葉をせき止めてなかなか唇が動かなかった。未知の物に対する恐れ、結論は出したはずなのに抜け道を必死で捜し続けている事実、その事実を自分で認識する度に苦く胸に捲く自嘲と、諦観と、ないまぜになった混乱。そんなものが唇を開こうとする度に、クインの身体を酷く硬直させた。

自分は怯えているのだ。敢えていうなら、自分自身を排除させようとする全ての世界に。

クインが言いよどんでいる空気をライアンは何と思ったのか、微かに頷いた。チアロ、とライ

アンが呼ぶと、それまで二人のやり取りと空気を眺めていた少年は心底はっとしたように彼の主君を見た。

「奴らの残党の根城の一つが見つかった。案内の男がもうすぐ煉瓦屋敷の方へ行くから、チェインからも数名出して繋ぎに使い。動向と、出入りしている連中を逐一報せろ」

仕事を命じた上での退去令だった。チアロは素直に頷いた。ライアンの意志に添うことはチアロの中では至上であるらしかった。

連絡の段取りを簡単に打ち合わせてチアロが消えると、ライアンは慣れた仕種で煙管を取り出した。自分がライアンとの繋がりを証明するために差し出した煙草入れがその腰にぶら下がっているのを見て、クインは不意に安堵のような軽い吐息をついた。

ライアンはそれに構わず深く一服を入れてから呟いた。

「俺もお前に聞きたいことがあった。お前が俺に頼み事というなら、他人には話せない上に俺にも切り出しにくい話だろう。どちらが先がいい」

「……あんたの質問から先に聞くよ」

持ち出す一瞬が僅かに先にずれただけで浮かぶ大量の安堵感に辟易しながらクインは言った。幾つかの会話を重ねていれば切り出すきっかけも掴めるかも知れないと、そんな思考に逃げ出しそうになる自分の臆病さが鬱陶しかった。

そうかとライアンは軽く頷き、おもむろに口を開いた。

「あの皇子はお前の何だ」

クインはゆっくりと視線をあげた。

驚愕は緩やかだった。ライアンはいつも俺の足下をいきなりすくう、という囁きが唐突に浮かんできて、クインはつい苦笑になりかけた。思えば髪の色を指摘された時も、相当に突然であったはずだ。

この国には現在リュース皇子を筆頭に4人の皇子を持っているが、他の皇子達はさほど自分と似ているわけではない。一番下のライン皇子だけが、どちらかというなら女性的という意味に於いて顔立ちの系統が似ている程度だ。皇族の写真は公開されているから顔を知ることは難しいことではなかった。

あの、とライアンが言うのならリュース皇子に間違いないだろう。鏡に映し込んだように、自分と同じ姿形をした皇子。

皇子のことを思えば、懐かしさがまず先に來た。ライアンがあの皇子と言った相手とほんの2日間机を並べていたことがあった。彼の正体を見抜き、その上で手を貸しても良いと言った皇子。恐らくは、推測に過ぎないが自分自身の濃い血縁に連なる相手。

クインは不意に自分が薄く笑っているのに気付いた。

「……そう……、見たんだ、あの人」

胸に上がる感慨はそう暖かみのある物ではなかった。あのまま知らぬふりをして皇子の庇護を受け入れ中等学院へ居残っていれば、もう少しはましな親しみを感じることが出来ただろうか。推測は出来なかったし、第一それには意味がなかった。

いつ、とクインが視線で問うと、ライアンは僅かに眉を寄せて記憶を探すために宙を見上げた。

「お前が帝都から出て行って、すぐの新年の園遊会で。……意外か？　タリア王は特殊とはいえ官吏の端だからな。カレルの供でアルードと共に王城へ行った時に、あの皇子を見た——お前かと、最初は思った」

「声をかけた？」

いや、とライアンは首を振った。

「同じ顔と同じ声をしているが空気が違ったからな、お前ではないと思ったが……あれが他人だという方が今更驚きだな、全く。園遊会が終わって戻ってきたときに、お前ではないのだと確信した。お前であれば俺に分かるように合図を寄越すだろう、そういう奴だ」

まあね、とクインは苦笑して頷いた。ライアンをからかう絶好の機会を見逃すはずもなかった。そうだろうとライアンもまた薄く笑った。３年前の、長くはない期間でも二人はお互いの性質を飲み込むことは終えていた。

「年齢は１０才だとカレルに聞いた。お前も確か同じ年だったはずだ、あの年の秋には」

クインは頷く。ライアンが一呼吸を置いて、最初の質問を重ねた。

「——あの皇子は、お前の、何だ」

視線をまっすぐにあげてクインはライアンを見た。ライアンの緑色の瞳に僅かにかかった熱の影が、逸るほどに心臓を打った。

彼が自分に興味を示すことがひどく誇らしかった。３年前にはライアンは崇拝していた少年王の死だけを見つめて生きており、彼に視線を向けることが殆どなかったからだ。３年を経てようやく勝ったような、何か取り戻したような気持ちになる。だから自分でも驚くほど素直に言葉が出た。

「双子の、……多分、兄だ」

一瞬開けてライアンが頷いた。クインがずっと放浪者であった理由をそれなりに見出したのだろう。全く予測していなかったという顔付きではなかったから、ライアンなりに推論は出来上がっていたようであった。

「多分というのは」

「どっちが兄かっていうのはもう母親でないと分からないからさ。ただ、俺の方が後宮を出されていることを思えば俺が弟なんだろうし、何かの具合で正式に皇族の列に加わることになっても俺を『兄』にはしないだろうね」

皇位継承権が発生するとしても、場を混乱させないために弟とするのが普通であろう。だからどちらに転んでも弟である、としか言いようがないのだった。そんなことを説明すると、ライアンは深く頷いた。彼の質問はそれで終わりだった。

「では、お前の話というのを聞こう。俺と昔の話をするために戻ってきたということではないなら用件を言え。……金か？」

クインはぴくりと頬を引きつらせながら顔を上げた。最初から焦点に分厚い鈍を下ろす辺りは直裁であった。金とライアンが総括したことで自分が情けない生き物であると念を押された気になる。

生きていくために必要だと知っているし、それを無視して世間を渡っていけるとも思っていな

いが、やはり矮小感はあった。返答が鈍いことでライアンは何事かを察したらしく、更に深く頷いた。

「幾ら要る？ 3年前よりは多少俺にも余裕がある、額を言え」

「.....いいよ。昔のことを種にして強請るにはいい額だから」

ライアンは苦笑し、吸いかけだった煙草を一口吸った。

「だが、金に困っているのは本当だろう。.....俺は3年前にお前に礼を言った。借りは必ず清算するとも。だからその清算をしてやりたいと思っている。額をいえ、クイン。俺は今、幾ら欲しいのかと聞いている」

クインはぎこちなく笑った。

「——取りあえず、2万.....」

ライアンが煙管を弄る手を止めた。ゆっくり彼の整った顔が自分の方へ向けられるのを見て、クインは自棄気味に更に笑顔になってみせた。

「2万だけじゃどうにもならないから、あと2千.....それと、毎月500.....」

呟く声が次第に小さくなっていくのが自分で分かった。声音が低くなるに連れてそれは暗く強張っていく。視線が下がって行ってやがて完全に俯くと、黙り込んだライアンの呼吸と合って、部屋は完全に静寂となった。

「.....ジルで？」

問い返すライアンの語尾に、たちまち苦い自嘲が混じった。当然のことだったからだ。だが通貨の単位を思わず確認させたくなるほど、それは途方もない額であった。慎ましく生活するならば一人が3年間は働かずに暮らすことが出来る額だ。田舎に行けばその金額で手に入る家と門地くらいはあるだろうか。

2万か、と呟くライアンの声が耳に入った。煙管から上る薄い煙にも気付かぬように、ライアンは無表情に俯いていた。彼が何かめまぐるしく考えている時の顔だった。

「——1万ならすぐに.....そうだな5、6日で揃えてやれるが、2万となると.....」

その後をライアンは口の中で濁した。

1万であればすぐに出せるというのも多少豪気といえた。ライアンはチェーンにたむろする行きはぐれの少年達の王だ。チェーンの中に細かい派閥もあるがその全てに共通の自治律を布き、彼らからの上納金を得る代わりに彼らの行動の自由と背反時の懲罰を引き受けている。彼が現在タリア王の配下となって大人達の組織の末端に食い込んでいる以上は自治の統制と懲罰の実施は配下に委ねられているのだろうが、彼は金は持っていると言っていた。

そして、それをライアンは自分の為だけに使うわけにいかないことも。金だけでも信義だけでも、他人を動かす事は出来る。だがその二つが上手く噛み合ったときほど強いものもない。時折は彼の下にいる子供達に甘い汁を吸わせてやらなくてはならないのだ。

そして1万というのは彼がそうした報償に取り分けて置いた分を放出する額であり、2万というならその他の全てまでもなげうたせる額だ。ライアンは金の力を知っている。知っていて彼が考え込んでいるのは、その額と自分の地盤を支えている彼らという重みの均衡点を探してくれているからだろう。

クインはいいよ、と再び言った。ライアンに全てを援助して貰うつもりは最初から無かった。

「強請るには額が大きいって言ったろ？ あんたを破産させる気はないよ」

ライアンはちらりとクインを見た。微かに頬にかかる影の具合が彼の戸惑いを素直に教えてくれた。

「7千までならすぐに出せる。後でチアロに金を届けさせてもいい。1万であるなら1週間待ってもらえればどうにかしよう。……だが、2万は無理だ、済まないが」

「いいって。ライアンから金をむしりとるつもりは、本当にないんだ」

「……何があったか話せと言ったら答えるか？ すぐに出せるといっても、何も聞かずに払ってやれる額じゃない」

うん、とクインは唇端をゆっくりつりあげた——笑おうとした。だがそれは上手くいかない。途中で奇妙に凍えたときのようにぎこちなく固まってしまって、それ以上は動かせそうになかった。

暫くライアンの顔を見つめたまま何かを言おうとしていると、不意にライアンが表情をゆるめてクインの頬に触れた。

「どうした」

彼の声はいつもの通りの低さであったが、声音に籠もった温もりは確かだった。うん、と意味のない返答を喉で鳴らすと、そこが空気で震えたような気がした。

ライアンの指が丁寧に、ひどく優しく自分の頬をなぞっている。子供を慰めるような仕種だと思ひ、思いながらクインはゆるく首を振った。ぽろぽろ涙が落ちていった。思わず目を閉じると双眸の流滴が転がる。

「どうした、大丈夫か」

ライアンの声が優しい。宥めるような低い声が、何故だか染みしてくる。クインは再び首を振り、自分を落ち着けるために何度か呼吸を整えてライアンに頷いて見せた。

「大丈夫だよ、ごめん、ちょっと……混乱してるのかも知れない……ごめん、大丈夫だから……」

言い訳に似たような口調でクインは呟き、手で涙をこそぐように拭った。

「か——母さんが……」

絞り出すように呟いた言葉に、ライアンが小さく頷いた。3年前に彼を一度だけ、自宅であったアパートに泊めた事がある。だから母のことを彼は知っていた。

「かあ、さんが、……倒れて……し、死ぬ、かも……しれな……」

死を口にするとその言葉が急に現実味を帯びて底光りした気がした。

クインは身震いした。いつでも自分の手を引いてくれたあの温かな人がいなくなると考えるだけでも恐ろしかった。

いつでも自分たちは二人きりだった。父が欲しいと言ってみたこともあるし、そんなことをあれこれ空想していたこともある。けれど、最終的に自分の側にいるのは母一人であり、真逆、母の側にいるのは自分一人だった。母に再婚の話が全くなかった訳でもないだろう。息子の目から見ても、十分に美しい母であった。流石に年齢だけは下げることが出来ないが、整った目鼻立ちは誰かの気を惹くには不足ないはずだ。

だが、現実そんなことは起こらなかった。時折親切そうに近付いてくる男もいなくはなかったが、母は彼らをやんわりと押し返した。それが自分のためであることを、クインはかなり早い頃から気付いていた。戸籍の擬態や幼い頃の転居の出鱈目な履歴を思えば推測は難しくなかった。正体は分からなかったが、何かがあるという感触ならば容易に得ることが出来る。

自分と皇子の間に血縁を確信してからは沢山の疑問が一息に溶解していった。自分を守るために母は誰も寄せ付けるわけにはいかなかったのだ。何故母が自分を連れているのか、そこまでして自分を養護するのか、不思議に思ったことはあるが聞くだけの勇氣はなかった。

.....不思議というなら、何故自分だけが王宮を出されたのかも分からない。あるいは最も理屈の通らない選定である呪占だろうか。血の繋がりのない女に皇子を預けたというのも不可解だ――将来に渡って不都合があるなら殺してしまうか、魔導の塔にでも送ってしまうのが普通だろうから。

自分が市井で生きていることは事実だから過去を今更まさぐっても仕方がないと理解しつつ、クインはそれらを思う度に母へ降り積む感謝が増えていくのを感じていた。

長い月日の内に情が移ったということならあるだろう。あるいは、何かの事情でいなくなってしまった母自身の子の代理なのかも知れぬ。

それが始まった理由はともかく、マリア・エディアルといった彼女が自分を半ば身をすり減らすように庇護しようと努めたことは確かだ。そのありがたみが胸に詰まる。

だから自分の母はあの人一人だ。他の誰でもない。今更、どんな保護も父親からなど欲しくない。母が必死で逃亡を続けていたことを考えると、追っ手であった連中は父のあずかり知らぬ場所からの使者なのだろう。

相手が父であるならそれほど怯えなくてもよいはずなのだ。父――今上帝、リシャーク3世なら。

クインは母との行程をぐるりと思いめぐらす。

早く大人になりたかった。一瞬でも早く成長して、自分の手で自分と、母を守りたかった。優しく大丈夫よと微笑む優しい空気の裏で、決して自分に悟らせないように気を向けながらも母が怯えているのは分かっていた。

自分の手をひいて母が沢山の物を繋ぎ与えてくれたように、同じ事を返してやりたかった。怖がらなくても良いのだと、母がそうしてくれたように相手を安心させるためだけに微笑みかけた。.....それら全て不確かで楽観的な未来予測の上に成り立っていることなど、現実になるまで理解できなかったのだ。

そして母の病によって初めて守護者となったとき、クインは自分たちの孤独についてやっと思い知った。

母は自分の実家さえ口にしなかった。そこへクインが顔を出すことが連鎖的に自分達を追いつめるだろうという恐怖が母の口を異様に重くしていると察することは出来た。帰る場所も、頼る他人も血縁さえも、何もない。無いのだ、ということを理解するしかなく、クインが出来たのは母をどうにか説得してシタルキアへ連れ戻すことだけであつた。

それさえも母は渋ったが、医療技術に限らず学術研究に於いてはシタルキアが突出して高水準を誇っている。全ては長い歴史と安定した政権による安定した環境の提供がもたらしたもののだが、施設も薬剤も、シタルキアに戻らなくては手に入らない物の方が多かった。

頼っても良い相手をライアンしか思いつかなかつたせいもあるだろう。いつでも自分たちは二人きりだった。二人きりであることが当然だった。母には自分だけしかないのだとクインは認識していたが、自分にもまた母一人だった。本当に、それしかなかつたのだ……

しばらく止まらない涙は何のせいだろうとクインは指先で拭いながら思う。母への思いだろうか。ようやく事情を話すことの出来る他人に出会えた事への安堵だろうか。涙と共に胸に支えていた物が剥落していくのが分かつた。

クイン、というライアンの声は自分が落ち着く頃だった。彼はクインの様子を見て話を繋ぐ瞬間を計らってくれたのだろう。

「……俺には医術のことは何も分からん。分からんが、馬鹿ほど金を食う病は一つしか知らない——黒死だな？」

具体的な病名が出てきてクインは微かに身を震わせ、頷いた。そうか、と呟くライアンの声も重い。死病だな、と更に続けたライアンの言葉が胸を射抜いて、クインは堅く目を閉じた。

黒死病と呼ばれているそれは奇病であつた。手足の末端から次第に肌が黒ずみ、やがて麻痺して動かなくなり、やがて肌から黒く濁った血胞が沸いては潰れていくのを繰り返しながら身体ごとが生きたまま腐敗していく。伝播力は弱いものの空気感染するため、医療施設に入れるとなると必ず個室を使うし、専属の看護人を数人つけなくてはならない上に薬が非常に高額であつた。

高額なのは魔導の力が施されているためであるが、薬を定期的に打てば進行を抑えることは可能である。治癒するわけではないのだが、進行をほぼ完全に止めることが出来るのだ。

そしてそれは中流階級以下の人々にとっては不治の病であることと同じ意味であつた。

寒村などでは隔離して見殺しにすることも珍しくはない。それは大勢の住人を救済するための措置ではあつたがまっとうに承認される質のものでもなかつた。故に、黒死の病とされる患者は殆どが帝都に在住している。

クインは帝都にまで母親を連れ戻すことは考えなかつた。シタルキア第2の都市であり南部海域との接点でもあるミシュアの街近くにも療養所がある。殆どの有り金をはたいて2ヶ月の約束でそこへ預けてきたが、もし期日までに金を用意できないとなれば容赦なく放り出されるだろう。……それは母の死の決定を意味する。

「……2ヶ月で2万か……べらぼうだな」

ライアンの声はどこまでも沈鬱だった。

診療所は基本的に年単位で患者を預かる。それに加えて年間の保証費や看護人の選定もあるから初期費用は更に跳ね上がるのだった。

そうだね、と軽く同意したのはクイン自身そう思っているからであつた。とても通常の手段で

は捻り出すことは出来ない額だ。――だから戻ってきたのだとクインは深く呼吸をした。

「ねえ、ライアン――昔、あんたが俺を捕まえたとき.....あんた、俺をタリア王の稚児にたたき売るつもりだったはずだね.....俺に、その価値は、まだあるかな？」

ライアンは怪訝な顔で眉を寄せた。クインの言おうとすることが掴めないといった顔付きであった。クインは泣いたせいで火照っている頬を無理に動かして笑った。

「客を取りたいんだ。俺のこの顔に、馬鹿ほど法外な金を払う連中を知らないか？」

ライアンが、不意をつかれたように瞬きをした。

奇妙な沈黙が暫く続いた後、自分の唇から最初に漏れてきたのが失笑だったことに、ライアンは一瞬置いてから気付いた。溜息であったはずのそれにクインがさっと頬を赤らめて彼を睨みあげたからだ。相変わらず、自身に対する故のない否定には過敏であった。

少なくともふざけているわけではなさそうだとライアンは思い直し、ゆるく首を振った。「お前は客を取るという意味を知っているのか」

我ながら馬鹿なことを聞くとライアンは思ったが、それは思わず確認したくなる事柄でもあった。

彼自身、稚児上がりであった。陰気だ鬱だと言われながらもライアンの顔立ちは整った部類に入り、普段さほど感情を表現しない彼の痴態を見たがる者も多かった。

ライアンの母はその日暮らしの街の娼婦であり、金に困って幼い彼を芸団に売った。顔立ちが良く運動の勤があったことで彼は殺陣を主体とした活劇に従事したが、どこかの公演で自分を見かけたらしい金満家の老人に稚児として転売された。それが最初だ。

老人の元から脱走してタリアに住みつくようになって、時折その手の暴力はあった。少年達ばかりの集団にいれば力は即ち存在の重さであり、最初に通る原始的な相克であった。

そして芸団から転売されたときと同じように、ライアンを欲しがった男もいた。それが先のタリア王カレルだった。だから今でもライアンのことを稚児上がりだというなら間違いでもない。その冷蔑があることをライアンは知っている。知っているが、事実であれば取り繕うこともなかった。確かに自分はカレルと寝て、チェーン地区に於ける自治を買っていたのだから。

そしてそのこと自体は彼には苦役としか表現できなかった。他に愛しい女がいるわけでも男と寝ることに抵抗があるわけでもなかったが、彼を求める者が彼をいたぶり踏みにじり、彼のあがる苦痛と懇願の悲鳴が聞きたいのは明白だったからだ。自分のこの陰鬱な無表情がそうした衝動を引き起こしているのだと臆に理解はしたがどうにかなるものでもなかった。

客を取りたいというクインの言葉は、ライアンには狂気の沙汰としか思えなかった。既にカレルが死に、現王アルードはライアンに対する性的興味を持たない。男娼まがいのことをする必要が消えた今となっては、ライアンは幾ら積まれてもそれをするつもりはなかった。

あの苦痛。無理矢理水の中を歩かされているような息苦しさと閉塞感。辛い苦しいと嘆くことをしない程にライアンは自分の心理に無頓着であったが、ねじ伏せられて一番痛かったのは矜持であった。その部分だけが血を流すほどに痛かった。

ライアンは苦い記憶を一通りめぐらして渋面になった。クインには分かっていない。寝る相手が男だろうが女だろうが、それは酷く自己を摩耗させる。肉体でなく、精神の方が。

何から言ってやろうかとライアンが僅かに思考する間に、クインの声が割って入った。

「……ライアンは俺がふざけてると思ってるんだ。こんな馬鹿馬鹿しい冗談を言うために俺は戻ってきたんじゃない」

一度は落ち着いたはずの彼の瑠璃玉石の瞳に、再びうっすらと涙が捌けたのが見えた。但しそれは懇願のためでなく、自分の言葉と真剣に向き合っていないと非難するためのものだとしてライアンは悟った。クインは本気なのだ。自分の身を切り売りして母親の死を回避することで躍起になっている。

今度唇から漏れたのは、真実溜息であった。

「……お前の現状は理解した。金が必要な理由も良く分かった。だが、客を取ることに賛成しない。現実男娼を買う客の9割が男だが、……男と寝たことは？」

クインは具体的な質問にやや怯んだようだった。僅かに目元が痙攣する。返答が一瞬遅れたことで、ライアンはその経験はないのだろうと見切りをつけた。クインが返答するよりも早く、無いんだな、と遮る。クインは曖昧に頷き、付け足した。

「でも、ちょっと……その……身体、触らせたり……キスくらいなら……」

口ごもる様子から、それが成り行きであったことくらいは分かった。キスカ、とライアンはまた溜息になる。クインは本当に何も知らないのだ。

「……遊女でも同じだが、キスは普通しないな。男娼でも娼婦でも、唇が貞操の代わりになるのはこの世界では常識だ」

「……そう……なの？」

ぽかんとしたクインの表情が全てだった。そうだ、とライアンは生真面目に頷いて見せた。「特別高値をつければ売る奴もいるかも知れないが。客もそもそもそれを要求しないのが暗黙の了承になっている——お前は舐められたんだ。素人だと知れて好き勝手なことをされたな」

クインはそう、と呟いて俯いた。翳っていても輝いていても、その顔立ちはなお華やかに美しかった。そうだと念を押し、ライアンは再び溜息になった。何度目のそれであるかは数える気にもならなかった。

自分は困惑している。クインの母を知らないことはなかったし境遇については不幸だとも思うが、彼に今出来ることは限られていて、しかも自分の助力では足りないのは明らかだった。

それでもクインの話を簡単に了承して客を探してやろうという気は起きなかった。ライアンはそれが何故のものか自分の内をまさぐり、やがて苦笑した。結局自分はこの少年を好きなのだ。3年前、まだ子供だったクインが自分の身边を回遊するに任せていたのも彼を決して憎くは思わなかったからだ。

——自分は力弱い者が好きだった。自分の庇護なくしては生きていけないような、か弱い存在が好きだった。闇雲に誰かをを守りたかった。

それが何であるかをライアンは既に正確に捉えている。

ずっと昔、老人の所から逃げ出したライアンを拾い、それまで彼が知らなかった他人の明るさと温もりを教えてくれた相手がいた。彼を守るため、彼を喜ばせる為だけにライアンは強くなった。彼の為に生きて、彼のために死にたかった。

3年以上の年月をかけて彼とほぼ同等に至るほどに強くなれたのも、兄のように父のように慕った彼への憧憬の結果だった。彼を自分が守るのだという高揚はいつでも自分の中にあった。彼のために身をなげうち死ぬことこそ、その頃のライアンの全てだった。

そして彼は死んだ。ライアンの目の届かない場所で、唐突に。

守るべき者を失って茫然としていた頃、クインはライアンの前に姿を現した。この子供に構うのが満たしきれなかった庇護欲を補う行為だと薄く承知していたが、どうしてもなく、止めることは出来なかった。

クイン自身も死んだ男と多少似た、良く喋りよく笑う質だった。負けん気の強さも豊かな表

情も、年齢の離れた弟を構うような気持ちでライアンは庇護し、気を掛けた。クインの助言によって得た幾つかの結果もあるが、そんなことよりも存在自体が重要であったのだ。だから彼に身売りさせるのが気に入らない。身勝手な考えだと分かっているながら気が進まないのはそのせいだろう。

ライアンは一息呼吸を置いて諭すようにゆっくり、静かに言葉を紡いだ。

「やめておけ、と俺は言う。お前は本当に素人だし、そもそも俺達の世界に首を突っ込むのは大概にしておけ。俺が言うのもおかしい話だが、俺達にあまり深く関わらない方が本当はいいはずだ。俺はこの世界でしか生きていけないが、お前はもっと違う場所でもいいんだからな」

クインはじっと下を睨み据えたまま、ぴくりともしなかった。自分の言葉が表面を流れ落ちて行くだけなのを理解して、ライアンはそれ以上を言うのを止めた。頑なな表情は3年前と同じ、母のために全てを投げ出しても未来を掴もうとする顔だった。

「でも……他に、金を稼ぐ手段が、ないよ……」

「俺がどうにかしてやる。取りあえず1万用意してやるから、残りの1万をもう2ヶ月待って貰え」

言いながらライアンは脳裏で大まかな計算を始める。

チェインから毎月彼の元に上がってくる上納金がジルで8千余、そのうち2千5百はそのままタリア王へ渡る。残りの金でライアンは一月を過ごす配下の少年達にばらまく額も多い。全てがそのまま自分の金ということではなかった。

が、タリア王アルードから幾ばくかの金も出ているし、自分一人のことは困らない。適当に口実を見つけて2ヶ月ほど節制しても誰にも不服は言わせるつもりがなかった。

「駄目だよライアン、あんたが自分の足下を削ってまで俺に肩入れする話じゃないはずだ。それに俺はあんたに借りを作りにたくない。3年前の言質を楯にするにはちょっとたちの悪い強請だろ？」

ライアンは僅かに吐息で答えた。途方もない額であるのは確かだった。

「減額は出来ないのか」

クインに言っても仕方のない話であると思いながらもライアンは口にした。そうね、とクインは曖昧に笑った。

「無理だね、保証費がべらぼうなんだ。医療費だけならシタルキアの戸籍があれば少しはましだけど――」

「戸籍？」

ライアンはクインの言葉を途中で強く遮った。クインは軽く頷いた。

「一応医者ってのは国立の医学校を出ている官吏だからさ。戸籍証明があれば薬代と個室代は安くなるから……そうだね、1万2千ってところだけど。でも、戸籍は高いだろ？ どのみち金は持っていないから同じ事だよ」

肩をすくめるクインに、ライアンは少し笑って見せた。ようやく彼の手の届く範囲に話が転がってきたような感触があった。自分は明らかに安堵していると思いながら口を開く。

「戸籍であれば俺がどうにか出来るはずだ。戸籍の条件は？」

クインは多少面食らったような表情になった。曖昧に頷きながらライアンは事情の補足をしてやる。

戸籍の売買は元々がタリア王の掌握している事項の一つであった。取引は闇市場の連中に任されているが、元となる空籍を探してくるのは安い金で使える少年達が殆どだ。そして子供達の中のことであるならライアンの自由にならないことなど一つもない。

「戸籍の条件を、クイン。母と娘がいいか、それとも息子がいいのか。母子の大体の年齢と組み合わせの希望を言え」

クインはまだ少し、戸惑ったような顔付きであった。ライアンはゆっくりと頷いた。

「戸籍は俺が用意してやろう。なに、探す戸籍が一つくらい増えたところでどうということもない——少し、時間はかかるが.....猶予は2ヶ月だったな。それまでには間に合わせよう」

その上で1万2千ジルというなら、どうにか目処がつくだろう。その計算に一人深く頷いたのをクインがまだぼんやり見つめているのに気付く、ライアンは自分を頼って帝都へ帰還した少年へ向き合った。

「だから、男娼になりたいなどと二度と言うな。俺はお前にそんなことをさせたいとは思っていない」

クインは何か言いたげにしていたが、唇は遂に開かれなかった。それをなし崩しに了承の証とするためにライアンは素早く立ち上がった。

「俺はもう行かなくてはいけない。この部屋にあるものは好きにしろ。チアロがじきに来るだろう」

「ライアン、俺」

「俺に3年前の清算をさせろ、クイン。.....お前一人が全部背負い込むことはない」

そのことばにクインは微かに顔を歪めた。人一倍麗しい面差しが翳り、淡い影が差した。

「.....甘えても、いいかな.....」

掠れた呟きにライアンは深く頷いた。クインの表情に立ち現れては消える安堵と、依存に対する不服を何故か微笑ましく見つめている自分にライアンは気付いた。

「いいと言った。言ったことは守る」

何かに負けたように、クインの首がこくと項垂れた。控えめな謝意にライアンは唇だけで笑い、背を返した。

扉を抜ける瞬間にありがとうと聞こえた気がした。

皇子がフォークを置くと、その眼前で口直しのための氷菓を口にしていた皇妃は微かに眉をひそめた。口に運びかけていた銀の匙が下りて、形の良い唇から微かに溜息の混じった声が零れる。

「……もうお終いにするの、リュース？」

言葉に混じった僅かな非難に、皇子は俯いた。

食が細く体力がないのは昔からのことだが、立太子の話がちらほら見え隠れし始めた頃から母は自分に足りないものを付け足そうと必死になっている。体が弱いこと、他人と合わせて生きていくのが苦手なこと、その二つが酷く重大な欠陥のような気が自分自身の中に芽生えてくるのが分かって、皇子はどこか心重い。

が、母との食事を避けようとは思わなかった。中等学院という、王宮の外の学舎に通い始めたことで日中殆どお互いを見かけなくなっている。せめて共にいられる時間である夕餐を大切にするのが彼に出来る最大限でもあった。

「済みません、母上」

視線を下にやったまま呟くと、母は困ったような溜息をついた。

「いいのよ、謝らなくても……そうね、適量ということもあるのだから」

そして、ぎこちない沈黙になった。

何故こんな風なのだろうと皇子はいつも思う。今日は実弟のラインが剣の稽古で倒れるように眠ってしまったせいで母と二人の夕食なのだが、明らかに弟がいるとしないでは会話の滑らかに差があった。お互いに接点を探り合っているような不思議な長さの沈黙や唐突な話題の転換など、もう珍しくもない。

自分は確かに他人が苦手で、母も同じくだからだろうか。弟が楽に母と言葉を重ねていられるのは弟の特性である人懐こさのせいだろうか。

何故、自分は駄目なのだろう。気安い方がいいのは確かだから、弟を母が溺愛するのは当然にしても。愛される気質でないのだと無理に結論づけてはあるが、皇子はどことなく納得できなかった。

理屈ばかりで引っ込み思案なのは、昔からだ。他人と上手く手を取り合うことが出来ないのも、友人を作るのが苦手なのも、それはずっと子供の頃からの自分の性質だ。中等に上がる以前、父が大人しい自分を心配してつけてくれた学友たちとも微妙な距離感しか築けなかった。

唯一の例外といえるのはさらにそれ以前からの、幼なじみと言って良い少女だけだ。彼女エリゼテールは皇子より1才の年長で、異母弟たちの母方の従姉ということにもなるが、物心つく頃から共に王宮で育ってきたという心安さが相当大きいことは自分でも分かっていた。

皇子は溜息はつかない。僅かな呼吸が自分と母の間にかかるかぼそい何かを吹き飛ばしてしまいたいそうだから。

「そうそう、そう言えば」

氷菓を匙で崩しながら母がようやく見つけた糸口を話し出した。

皇子は何です、と微笑む。空気の流れが気分を酷く楽にした。大体何の話であるかは予測できたがそれは勿論言わなかった。

「ラインがね、あの子、剣の才能があるって――」

弟の話に皇子は儚い少女のようだと喻えられる美貌を淡くほころばせながら頷いている。胸の奥にほんの僅か、苛立ちが揺らぐのを皇子は知っていて、それを見ない振りをする事さえ出来た。

母上と言葉を遮ることが出来たらどれだけ爽快だろうかと皇子は脳裏でちらと考え、すぐに自分でそのことを忘れようとした。

弟のラインを可愛いと思うのは母だけでなく、自分だけでもなく、家族のみではない。天真爛漫を実体として表現するなら自分ではなく弟なのだ。同じ両親の血を引きながら性質の差で全てが変化するのもまた、人間であった。

ラインに剣術の天与があるらしいことはここ暫くで明らかになりつつある。

ライン皇子は彼よりも4才半下であるが、身体は丈夫で運動勘が目立って良かった。弓も悪くないが運動能力に比して目がさほど良くない。が、剣術は砂地に水をまくように飲み込みが早いようだった。

末々剣士として身を立てるなどということは起こらないし、ライン以外の二人の異母弟を含めて兄弟の誰が将来皇帝となってもラインは宰相か大元帥あたりの要職へ座らなくてはならない。個人としての剣の技量など何の意味も価値もないのだ――ということは自明ではあったが、母に指摘したことはなかった。弟の才能というものを素直に喜び楽しんでいる母にそれを言うのは残酷であろう。

「.....私は身体が弱いので、母上」

皇妃の話が一段落付いた辺りで皇子は使用人達に聞こえないよう、小さな声で言った。

「ラインと将来、多方面で助け合っていけるならとてもいいことだと思います。.....近衛に任せてみるのもいいのじゃありませんか」

皇帝の私兵とされる近衛には、戦場での皇帝警護という性質上良い指導者がいる。皇族も護身術の一環として武術を一通り教えられるが、護衛のために魔導士をつける方が一般化しており、自分で剣を取るなどは非常に珍しい部類に入った。その為に良い指導者は近衛に多いのが現状である。

母は思案気味に微笑んだ。いいのよ、と優しく言われて皇子は頷く。そうしたことで気を回す必要はないという母の気遣いであった。

空気が一段落したのをきっかけにして皇子は食堂を辞した。食事が進まないことであまり母に心配をかけたくなかった。

皇子の夜は大抵読書で更けていく。皇子は自分の身体が他人と比べて頑健でないことを、知識の補充でまかなおうとしているのだとはっきり認識していた。追い立てられるような焦燥も、立太子への重圧も、既に肌に馴染んでしまった。自分こそが次代の皇帝たらんというような強烈な自負は胸にない。ただ.....――

皇子はふと頁をめくる指を止めて唇だけで笑った。立太子されたら、母は喜んでくれるだろうか？　ラインが去年、少年剣術会で圧勝した時のように？　もしかしたらそれ以上に。

立太子されるということは将来皇帝として即位するということになるが、皇帝の地位というものに希望も絶望も皇子は抱いていない。立憲君主制度という頑とした機構が先にあり、法律でそ

れを更に強固にしているこの世の中で、至高の位置にあること自体にどれだけの意味があるのだろうか。

皇帝親政を布いた者はシタルキアの長い歴史の中でも僅かに10数名を数えるのみ、その半数はごく初期に集中する。太祖皇帝時代の慣習を受け継いだような形だ。

皇帝に実権は既になく、それは慣習と慣例と過去の遺産の継承程度の意味になり果てている。だが、皇子はそれにも悪い感情を持っていない。皇帝という個人の器量に大きく左右されるよりも、それは世界にとって健全なはずだから。

皇帝となるというのは、そうした機構の頂点で儀式を執り行うための派手な冠となることと意味が変わらない。個人の實力や資質などまるで無関係なのを承知の上で皇子は自分に立太子の目標を与えている。

その人の言葉が眼差しが欲しいから。多分この世の何よりも。微かに自分が溜息をついたことに皇子は一瞬後から気付いた。

試着室の野暮く分厚い布がさっとひかれ中から颯爽という空気と共に少女が出現すると、狭くはない店内に溜息が漏れた。待合いの椅子で暇を噛み潰しながら自分の爪に溜まった埃を取ることに熱中していたチア口は若干首をもたげ、その姿に周囲とは少し毛色の変った吐息になった。

少女はまっすぐに彼の元に歩いてくる。人の視線がそれに伴って自分に動いてくるのを知覚することが出来た。尋常でないものに対する好奇の目は、だがそれだけでもない。

誰もが目を疑い、奪われるほどの美貌というものがそこに現実存在する、その驚愕。

少女が自分の前で立ち止まるときに一斉に集中する意識の、突き刺さるような感覚が肌に痛い。

「どう？ さっきのとどっちが似合う？」

ご丁寧にスカートをつまみ片足をちゃんとたててみせる仕種が華奢な体格とよく似合っている。どっちでも、とぶっきらぼうに答えたのは女の服の善し悪しなど全く分からないからだ。似合うか否かという問題に関しては、チア口は考えることを放棄している。似合わない服というものが存在するならば、それはこうした小綺麗な店では売られていないものに違いないから。

「無愛想なんだから。ねえ、さっきの服とこれと、ブラウスと靴と帽子と手袋、いい？」

「あーあー、もう欲しいもの何でも買えたら」

少女はくすくすと声を立てて笑う。明るく華やかな笑顔にチア口は薄い苦笑になって椅子に座り直した。店主だろうか小柄な中年男が少女に飛んできて、新しい服を勧めている。服に合わせた帽子に髪飾り、レースの手袋、刺繍の入った靴、夏用の薄いカーディガン、ワンピースと共布で作られた鞆、そんなものを携えては鏡の前であて、外し、組み合わせを変えるという作業に熱心だ。

上機嫌に笑う少女の視線がちらと自分に向いてきてチア口はむくれてそっぽを向く。中流といわれるよりは上の生活階級者のための服飾店は彼には上品すぎて居心地が悪い。

もういい加減にしろと言ってやるつもりでチア口は鏡の前でぐるりと回ってみせる少女に近付いていくと、店主の声が聞こえた。

「……鞆まで全部差し上げますから、うちの服を幾つか着ていただいて、写真を撮らせて貰えないでしょうか、お嬢様」

あら、と笑う声はひどく機嫌がいい。再会した瞬間の疲れ果てたような土気色の顔を見ている身としては、それは喜ぶべき事であるはずだった。白い肌に血の気が戻り、初夏の薔薇の色が頬に彩りを添えている。

店主の申し出はあるいは当然かも知れなかった。この少女の美貌というもののだけで十分に人目を引く写真になるはずで、宣伝としては申し分ないだろう。おい、と言いかけたとき、少女は微笑んで手にした帽子を店主に柔らかく押し返した。

「申し訳ないのですが、父から禁じられておりますの。私もあまり人前に出るのが好きではありませんし」

さらりとあしらい、後を言わせないのはさすがであるかも知れなかった。あるいは慣れているのだろう。店主は残念そうだったが、チア口の清算をせかす声に頭を下げた金額の計算のために

場を離れた。

「お前も大概化けるなあ」

誰にも聞こえないようにこっそり耳元に呟くと、少女の方は小さく笑って同じように耳元へ返してきた。

「俺くらい完璧な美人だと男とか女とか、関係ねえんだよ」

声は少年のものへ戻っている。声色の方は気味が悪くなるほど少女少女していたから、この落差もまた激しかった。

金のやり取りをしながらチアロは棚の帽子をいじっているクインに目をやる。完璧と言うしかない擬態であった。

元々の美貌もさることながら、ほんのわずかに眉を整えて薄い口紅を差しただけで完全に女として通用する繊細な空気は特筆かも知れなかった。

華奢な体格もいい。細い体躯が幸いして腰の部分をきゅっと締めた服を着て下半身を膨らむスカートに隠してしまえば、同じくらいの身長と体重の女性に比して直線的な体の線が目立たない。咽喉部はさほど目立たないから襟元の詰まった服かスカーフで対応できる。

こうして化けた挙げ句に更に完璧を期すために洋服や靴などを買い出しに来ているが、やはりというべきかひどく目立つ上に、本人がその擬態を面白がって楽しんでいるのがよくわかる。

再会してすぐやその翌朝などは余裕のなさがそのまま表情に出ていたほどに目つきが暗く、凄まじく重かったが、ライアンと話をして何かから解放されたのかここ暫くは3年前と同じような明るさを取り戻していた。それをクインのために良かったとチアロは安堵で眺めていた。

チアロは閉塞した空気がひどく苦手だ。彼の死んだ父親は良く喋る明るいたちで、悪い人間では決してなかった。ただ、子供一人を連れて法螺なのか詐欺なのか良く分からないことを繰り返した挙げ句に流れていく生活しかできなかったのは、地道な生活を営む能力が欠けていたとしか言いようがない。けれど何もなくても父と2人、そうやって生きていくことが苦痛だと思ったこともなかったのは確かだ。

父の姿を思い出すときは、大抵のんびりした声音で危機感なく笑っている。喩えそれが土地のならず者たちに手荒く暴行された後でも、死ななくて良かったな生きてるかと思う父の声が耳に遠くまだ残っている気がした。

そんな風に2人明るく楽しく世の中をやっていた時代の名残なのか、チアロはタリアの中に住みつき悪童たちの仲間に入り、やがて小さな派閥の頭になっても、のびやかで明るい空気が好きだ。自分も軽やかでありたいし、自分についてくる少年たちにもそうであって欲しいと思っている。

逆から言えば、そうでないときの空気というのはチアロはどんなに他人が表面を繕っても本能に近い部分で嗅ぎ取ることが出来た。どんなに激しい状況であっても、他人の余裕の幅を感じ、それによって自身の余裕を作り出す部分がチアロにはある。長く、そして深く馴染んでいるという慣れにおいてその同調が一番高いのはライアンであるが、クインについても同じ事が言えた。

.....再会したときの、切羽詰まった空気。良くないことがあるのだと、その空気に触れた瞬間に分かった。

目を見たときにそれは確信になった。傲慢と呼んで良かった3年前の姿を眩しく思い返すなら

、それは一瞬胸を衝かれるほど必死で縋り付くものを探している目だったからだ。咄嗟にライアンに会うだろうと言ったのも、それを自分が救うことが出来ないと直感したせいでもあった。

適当に移動する間も食事をする間も、チアロは殆ど一人で喋った。クインの目つきはやや怪しげで、暫くまともなものを口に入れていないことが推測できた。目の焦点がどこかぼんやりしているからだ。

そう時間も経たない内にクインが昏倒してしまうと、明らかにチアロは安堵した。何か言いたいことも訴えたいこともあるだろうに、それを喉の奥に押し込んで表面を賑やかな自分に合わせようとするクインを直視するのはひどく辛いことであった。

同情だとか憐憫だとか、そんな名を付ける気はない。クインは何の打算も駆け引きもなくチアロの前に現れた、大切な友人であるということだけだ。

だから今クインが本来の享樂的な部分を取り戻していることが嬉しい。気楽な笑みを悪戯気味の仕種を見るにつけ、クインの負荷を恐らくライアンが取り除いてやったことが自分の仕業ほどに誇らしかった。

靴や鞆や小物を大量に買い込み、更にクインは彼の先に立って歩いていく。以前帝都にいたときに黒髪であったことを受けて今日は彼は金髪のかつらを被っているが、女装は久しぶりだと笑う割には堂に入ったものだった。

「お前、歩き方まで女になるんだな」

一つ一つの仕種まで、完全に切り替わる。これに神経を使いすぎて気が尖っていることはなかったから、擬態になれているのだと察しはついた。

「つまらないことでばれちゃうより全然ましでしょ？」

声も、上目に軽く睨む目つきさえ、少女のものだ。頭おかしくなりそう、とチアロが呟くとクインは朗らかに笑い、化粧品店の扉に手をかけた。今度はこれであるらしかった。必要性は理解できるが、正直なところチアロは服と小物だけで既に食傷気味だ。うんざりという心象がそのまま表情に出たのだろう、クインは小さく笑った。

「……ここが終わったら、本屋へ寄ってそれで終わりにするから」

「まだあるのかよ」

「ちょっとね。お小遣いのある内に欲しいものがあるの」

小遣いね、とチアロはゆるい溜息をつく。実際ライアンから渡されているクインの生活費とやらは、真絹に包んで大切にするつもりかと聞きたくなるほどだ。ただ、ライアンがそこまでのからには好意だけではない理由も在ろう。

3年前、チェインの少年たちの王であった男が死んでからの激烈な派閥抗争は今思い返しても震えが来るが、それを優位に勝ち抜いていった背景にクインの的確な助言があったことは後にライアンに聞いて知った。

当時のチアロはまだライアンの周囲を回遊する被保護者程度のものであって、抗争にもその結果である殺戮にも殆ど関わらなかった。クインが何故口を出しライアンがそれを受け入れたのかは分からないが、最終的に少年たちの派閥の熾烈な競争をライアンが収束したのは事実だ。

その恩義もライアンは感じているだろう。他にも何かあるかもしれないが、それはいずれ必要

となればライアンから話があるに違いなかった。今の自分はライアンの役に立つ存在であり、自惚れることが許されるなら殆ど唯一ライアンが心から信頼している相手であるのだから——それが何に起因するのかも、知っているけれど。

「金だけ食う女囲ってるみたいだ……」

クインは店の扉から手を離してチアロを振り返り、彼の手を軽く叩いた。

「私、ちゃんと彼に助力したもの。３年前の、これはお給料」

「いつまで給料もらうつもりだよ」

「例の書類が見つかるまでよ。だ、か、ら、頑張って、ねー」

チアロはふんと鼻を鳴らす。

戸籍の搜索はライアンから彼に伝わり、彼から更に下の子供たちに委譲されている。ライアンがタリア全般に関わる自警で引き回されているのと同じように、チアロは自らの派閥の保持で忙しい。

チアロの背後にライアンがいるのは皆知っているから立場は強いが、チアロが少年たちの王として君臨するライアンの後継者となってチェーン地区の王となるには何かが足りないと思っている連中も多く、チアロも気を抜くわけには行かないのだ。自由に使える配下たちに仕事を回すのには他にも沢山の理由があるが、その辺りをチアロは抜け目なく立ち回っていた。

「お前の条件が結構狭いから苦労してんだよ」

チアロは不機嫌に唇を尖らせる。

クインが出した戸籍の条件は確かに厳しい。母と娘一人で父親は不明もしくは１０年以上前に他界しており現実その母娘の周辺に父の影がないこと——つまり母と娘以外には全くの天涯孤独であること——に加えて母の年齢と娘の年齢の両方に制限がある。

条件が狭い、という言葉にクインの秀麗な顔がやや曇った。クインとて、それは承知しているようだった。

「……仕方ないじゃない、あんまり書類と実物が違うのもまずいんだから」

戸籍の取引は非合法だから、自然町中では声が小さくなる。戸籍ではなく書類と呼ぶのもその係累だ。無論タリアの内側ではそれは罪ではない。だからこうした非合法の取引は大概タリアへ流れてくる。

「ま、その内に条件にあった親子が見つかると思うよ。帝都も広いしね」

クインの僅かに重い顔を払拭したくて口にした言葉に、ふとクインが首をかしげた。ちょっと、と袖を掴まれて路地の端へ寄っていく。人の気配のない場所まで来て、クインは彼に顔を寄せるようにして低く聞いた。

「——親子が見つかるってどういう意味だ」

どんな意図の質問か分からなくてチアロはぼかんとする。クインは確かに複雑な思考を巡らすのに向くが、その過程を説明されないと分からないことも多い。

「いや、別に、その言葉の通りだけど？」

分からないまま返答すると、クインは軽くチアロを睨んだ。表情から先程までの甘さがすっかり抜けて、素の少年の顔が覗いている。

「……チアロ、戸籍って……どうやって探してる？」

先程よりは分かりやすい質問にチアロはだから、と言いかけて口をつぐんだ。

反射的にしまった、と思った。結局この子共は自分たちの仲間ではないという基本を忘れていたのだ。

戸籍記載者がいなくなって抹消される前の戸籍を買うこともあるが、それは役府の戸籍係を買収して行うものであり、自分たち子供の手には余る。それは大人たちが取り引きすることだし、そうして取引に出てくる戸籍は条件を選べない。

条件を付ける戸籍は、それを求める者たちのために特別に探すものだ。この場合、探すのは戸籍ではない。条件にぴたりと添う上で、突然消えても周囲がわざわざ探さない戸籍保持者を探すのだ。

――記載者を全て葬り去り、戸籍を完全に乗っ取るために。

クインの場合は母娘の組み合わせと年齢のくくりがあるから多少難しい。女だけの家庭だと往々にして男が入り込んでいたり親や兄弟と密な連絡があることも珍しくはない。戸籍のない女であれば探すのは難しくないが、なまじ戸籍保持者であればこの条件はひどく狭い部類に入る。

……そしてそれは結局クインの求める戸籍のために、運の悪い母娘がいなくなるということでもあった。

ライアンはその辺りの情状に全く関心がない。チアロとて、不幸だとも哀れだともさほどは思わない。ライアンはクインの要望を優先するのに他のことは関係ないと言うだろうし、チアロもそれは同じだ。世の中には運の悪い家族もいる、その程度だ。

だがクインは違う。これはどんなに斜な口をきいていてもチェインの子供ではない。自分のために見知らぬ他人が消えるという現実には激しい拒否反応を起こすだろうと危惧したのだろう、ライアンは彼に何も教えていないのだ。

何でそれを俺にも言ってくれないんだよ！

心中で八つ当たりしてチアロは黙り込んでしまったクインを見る。先程まで上機嫌に楽しげだった顔から既に血の気が引いているのが見えた。

「――帰ろう、チアロ」

くるりと背を返しかけた華奢な手首を、チアロは反射的に掴んだ。

「化粧道具と本を買うんだろ？ ……戸籍のことはあんまり深く考えるなって。必要だから頼んだんじゃないか。だったらよけいなことに気を回すなよ」

「……余計なこと、か」

苦く低くクインが呟いた。彼は今何を思っているのだろうとチアロは俯く細い首を眺める。覚悟が足らないと怒鳴ってもいいが、自分たちの価値観を押し付けるには酷な相手だとチアロはそれを飲み込んだ。

育った環境は、金が無いという点に関しては自分たちはあまり変わらない。違うのは境遇だ。クインには正しくまっとうとされる道へ導く母親がいた。タリアの中で成長したチアロには、善悪という基準がない。あるとするなら自分やライアンの派閥に対する義理という物差しだけだ。

クインが何を考えているのかは分かる。戸籍を探すのを中止しても更に切り抜けていく道があるかどうかを思考しているのに違いない。戻ってきたときからクインは追い立てられて必死だ

った。知り合ったときから自負の塊のような子供だった。それがただ縋り付くために戻ってきたらしいことで、それがクインにとって酷く重く切実な事情であることも肌を感じた。

だからライアンに言われたままに戸籍を探している。クインのために割けるだけの人数を回しているというのに、本人が要らないと言い出すならこちらの気分を傷つけた。

「お前が欲しいっていうから探してるんだろ？　気分でいい加減なこと言うなよ」

苛立つ気持ちのまま吐き捨てると、クインが凄まじい勢いで顔を上げた。

「何にも教えないのは公平じゃない！」

思わず声を荒げてからクインははっとしたように唇を押さえ、囁き声で続けた。

「お前もライアンも、肝心なことは何一つ俺に教えないんだな。どうせ俺は余所者だよ、理解なんかできっこないって思ってるんだろ」

「思ってるさ」

チアロは軽く返答し、下に置いたままだった服や靴の袋を取った。

「化粧道具、買えよ。本屋にも付き合ってやる。それ以上の話はライアンにしろ、俺は知らない……2、3日中にライアンと会えるように伝えておいてやるから」

クインはもの言いたげに唇を結んでいたが、やがてチアロの言葉に頷いた。戸籍のことに関してはチアロに言うよりもライアンと直接話さなくてはいけないことを納得したらしい。

クインは振り切るように一つ首を振ると路地を出て、化粧道具を揃えるために店の扉に手をかけた。白粉と香水の匂いは苦手だとチアロは外に残り、クインがまたしても人目を華やかに惹きつけているのを硝子越しに見つめる。

明るい笑顔。新しい口紅を試すのか、差し出した小指の切なくなるほどの細さ。

あれは確かに愛でられるべきものだ。愛される対象としては申し分のない麗しさだ。その為にだけ生まれてきたかのように、利口ぶる口調も押さえればたわむ気の強さも、全てが彼を生きたまま宝石にしている。

けれど、それは自分たちの仲間には決してなれないということだ。彼にはその覚悟もない。ない、というよりはタリアの外の世界の規範に既に染まっている。

ライアンが言っていたことが今更身に染みた。

（クインは俺たちに染まるには完成している。あれは俺たちとは全く違う生き物だ。友人として仲良くしていても、理解しあえるわけではないことは知っておけ）

その通りだとチアロは目を伏せた。

自分たちは何かを見るときも考えるときも、立つ地平が違う。戸籍の件にしても、自分なら躊躇わない。どうしても欲しいものがある時に、何故、立ち止まる必要があるのだ。

理解できない――ライアンの言ったとおりだ。

チアロは軽い溜息になる。戸籍の調査は順調で、既に幾つかの候補はあがっている。これを今更中止するとなると、不満だけが残った。

タリア王屋敷の門をくぐるとまず目に入るのは美しく整えられた前庭と馬車寄せだ。タリア王というのは通称で、タリアの支配者は系譜上、国の末端にいる。官位は下端であったが、実状は悪くない程度の影響力を持っていた。治外法権ともいえる自治制度を許されているのは、タリアから回る献金が国を実際に利しているからだ。逆に返せばその金があるからこそ、自治が認められている。

官位がありその公邸であるならば、馬車寄せは必須だ。皇城、つまり国府との行き来は馬車に決まっている。実際は殆ど使われていないにしろ、それは様式であった。

馬車寄せから扉を抜けて吹き抜けの玄関ホールになめらかに降りている螺旋階段を上り、左へ行けばタリア王の執務室ということになる。

執務室といっても大抵はタリア王の側近たちがたむろしている。タリア王自身はいないこともあるが、これは個人の資質に寄るところが大きいだろう。

先のタリア王であったカレル＝コリーグは外へ出ることが多く、そして彼を駆逐してその座についた現王アルード＝クールは屋敷にすることが多い。カレルは高官との接触が多かったが、それを国からの過干渉と捉えて不満に思う者も多く、カレルを葬ってタリア王となったアルードはまずはタリア内の方向の統一を強いられている。故に、あまりタリアを離れることがなかった。

ライアンが執務室へ入っていくと、側近の男たちがちらりと彼を見た。男たちと同じようにライアンもまた、アルードの配下といわれる立場にある。

「お前の陰気な顔を見るのは久しぶりだな」

そんなことを言ってアルードの隣に佇む男が笑った。彼も側近の一人だ。

久しぶりというのは単なる嫌味で、ライアンは2日と続けてアルードの側を離れたことが殆どない。

「例の連中の残党がほぼ掴めたので、その報告を」

抑揚なく呟くと、ライアンはここ数日かけて集めた情報を口頭で伝えていく。ライアンは字が読めないから自身で告げるくらいしか方法がなかった。それにアルードから次の指示があるだろうから、代理を立てるくらいなら自分でこなした方が早い。

例の連中というのはタリアの中の不穏分子だ。前王カレルの派閥は首塊が倒れた後に徹底した残党狩りに遭った。宗旨替えした者もいるが、前王の頃よりは明らかに遠ざけられている。タリア王に近い位置にいるほど旨い汁を吸うことが出来るゆえに、放逐と呼んで差し支えない扱いだった。

彼らにとってはアルードは元の主人の仇であるという単純な理由だけでなく憎むべき相手であった。そしてアルードがカレルを暗殺したとき、それに積極的に協力したのがライアンであったせいで、ライアンもまた、その連中には敵視されている。

ライアンの報告が終わるのを待って、アルードは呼び鈴を取った。その音に反応してすぐに現れたのは魔導士であった。国から借り受けているのだろう。

「カノン、連中の根城の座標を取れ。場所はこれが案内する」

はい、と返答する魔導士の顔は銀の仮面に覆われて見えない。カノンというのも魔導士としての名であって本名ではない。だが背格好や声からさほど年齢のいかない、まだ少年という範囲に

属することはわかった。

それ以上の指示はなかった。戻ってこいとは言わなかったから、今日はどうやら好きにしてい
らしい。ライアンは内心でやっと呼吸をした気分になった。

アルードがライアンを側に置きたがるというのは事実だ。それを気に入っている、と表現する
なら現実にはいるのだろう。が、ライアンはそんな単純な話ではないことを知っている。
アルードもライアンと2人の時はそれを隠さない。

前王カレルの死に関わる幾つかの謎とされている部分の殆どをライアンが引き受けたのは事
実だ。アルードはライアンもいずれ始末する気である、その秘密を共有する者として、生存さ
えも気に入らないから。

アルードがライアンを側近として年齢若い割に厚遇するのは秘密の保持料だ。能力がないとは
思われていないらしく、いくつかの末端的な仕事は任されているがそんなことであれば幾らでも
代わりはいる。ライアンを近くにおくのはその方が言行や挙動を監視しやすいという理由であ
ろう。

ライアンは前王カレルが嫌いだった。もしくは憎んでいた。

カレルはライアンをチェインの自治と引き換えに愛人になるように強要した。まだ彼が少年だ
った頃に、当時のチェインの王であったリァン・ロウがカレルの望みに応じてライアンを差し出
したときには死の影さえ見た。

カレルの目を引いたのが自分の顔であるのなら傷つけて焼いてしまいたいと思ったこともある
。

だからアルードがカレルを暗殺する計画を持ちかけてきた時、若干の勿体はつけてみせたもの
の承知した。それはライアンにとっては解放を意味したからだ。

そしてそれが済み、ライアンは別のものに縛られることになった。アルードとの共棲は悪くは
ない。少なくともカレルのようにライアンは神経を逆立てなくて済む。

だが、危機感カレルの時よりも数段上だった。カレルの場合はライアンをそれでも単純な意
味で気に入ってもいたから、チェインの自治を買うために彼と寝ていても以前のような恐ろしさ
は感じなかった。

だがアルードは違う。アルードとの間にある緊張はカレルの時よりも増していた。

そしてそれでもお互いに離れていかないのは、お互いの利用価値を良く知っているからでも
ある。

2人とも相手に決して好かれていないことを承知の上で共に在るのはタリアの自治のために必
要なことを知っているからだ。力は正義であり、正義は力ある者のものだ。タリアの中の法律を
究極に簡略するということでもあった。

だから力無い者たちは排除され、敗者となり、更に踏みにじられる。カレルの残した残党を狩
るのも当然の成り行きだった。

魔導士に座標をとらせる、ということはそのうち建物ごと始末するつもりだからだろうか。魔
導というものにライアンは詳しくないが、それを扱うのにかなり細かい計算や座標の把握が必要
なことは見て知っている。

少年魔導士を根城になっているアパートまで連れて行った帰りにライアンは自身の本拠であ

るチェーンの「煉瓦屋敷」と通称されるアパートへ入った。ここは建物ごと、丸ごとがライアンのための要塞だ。彼の手足となるべき少年たちが常時たむろしているし、彼らをまとめる幹部たちも半数程度は残っている。

幹部という扱いをしているのは現在6名。一人はチアロだがこれが一番年齢が下で、残り5人の内3名はライアンがチェーンを完全に掌握した頃からの配下である。チェーン自体の人数は2千人見当といったあたりだが、派閥は100以上あった。彼らの棲み分けから小さな抗争などに至るまでライアンが全て面倒を見ているわけではないが、起こったことの報告は受ける。

1階の広間の隅にライアンの席はある。北側の窓の側に置かれた椅子、脇の小卓とその上の灰皿と火種箱。いつもの場所で煙管に火を入れるライアンに幹部たちが大体の事を告げていると、視界の隅に一番の側近が入ってきたのが映った。

こちらへ来るように軽く手で合図すると、頷いて寄ってくる表情がいつもより暗い。普段は多少あてられるほど明るく振る舞う少年である。それは他の幹部たちにも分かるのだろう。

「どうしたチアロ、悪いもんでも食ったか」

軽口にチアロはやや憤然という調子で違うよ、と切り返したがあまり表情の色調は変わらない。煙草を続けながらライアンは手振りでチアロに側にいるように指示する。どんなに配下が増えて幹部が彼に忠誠を誓っていても、ライアンが最も心許しているのはこの少年だった。……それが何のためでありどれだけ下らないことか分かっているながらも。

チェーンの中の報告が済むとライアンはそれに指示を出す。例えば規律を破ったものには制裁を、派閥同士の抗争にはある程度の決着を。

タリア王の元では手駒の一つに過ぎないライアンでも、チェーンに戻れば確かに年若い者たちの王であるのだった。

それも一段落ついた頃、ライアンは他の連中を追い払ってチアロの手を軽く叩いた。何か言いたそうにしていたが口を開かないのは、他人に聞かせたくない話だからだろう。

チアロとの連絡は密で、お互いに相手がどんな出来事を抱えているかは知っている。チアロが人前で自分に話せないというならば、クインのことだろうと察しはついた。

ライアンは食事にでも行くかと腰を上げた。チェーンにいるときに彼の身辺を守る役目の男が合わせて立ち上がるが、ライアンはそれには首を振る。

護身役は万一の時のライアンの身代わりになる役目だが、今は必要ない。ライアンは殆ど酒を飲まない上、体調も悪くなかったから、自分の身を守ることくらいは不足ないであろう。警護を連れていくときは人死が出ると分かっている時と、酒が入ると分かっている時だった。酒は元々体質に合わない。有り体にいうなら弱いのだ。

「あれがどうかしたのか。小遣いが足りないと言うなら馬鹿とでも言ってやれ」

煉瓦屋敷の廊下を歩きながらライアンは言う。クインの身辺を整え、不自由な生活をさせてやるには十分な額を既にチアロに渡してある。それ以上というなら浪費の限度というものであった。

「そのことなんだけどさ……」

チアロがぼそぼそと、申し訳なさそうに呟いた。

「ごめん、俺、つい戸籍の話しちゃって……そしたらあいつ、戸籍いらないって言うんだ。あと、ライアンと話がしたいって……痛っ」

考えるより先に出てしまった手を軽くうち振り、ライアンは溜息になった。

「奴は俺たちとは考え方が違うと言っただろう。迂闊にも程が過ぎる」

チアロは打たれた首を片手で押さえながらごめん、ともう一度言った。ライアンは舌打ちをした。今更取り返しようもなかった。

クインが何を言い出すかは分かっている。戸籍の拒否ともう一つ、最初の話へまた立ち戻るのだ。一度は言いくるめたはずの話を蒸し返されてはライアンも面白くない。

奴の誇り高さは本物だとライアンは溜息になった。売春などは自分の身の上に起こる出来事であると見切っている。

出来事は波だ。荒いものもあればゆるやかなものもあり、そして自分自身が硬く砕けない岩であると自負するなら、波は自分を妙な形に変えたり削ったりはしない。長い時間にそんなことにならないように波打ち際を駆けていく気である。

不意に最初の夜のことが蘇ってきて、ライアンは苦い顔になった。老人に稚児に売られたことさえ知らなくて、彼にしてみれば突然の出来事に驚愕と恐怖で動けなかったあの日のことを。

あんな風になりたいのかと思うと怒りさえ沸いた。

ライアンは苛立ちのまま何度か溜息をついた。チアロが重ねて謝罪の言葉を吐いた。ライアンはそれに頷き、腹心に言った。

「で、戸籍の調査の方はどうした。止めたのか」

「いや。俺の主人は奴じゃなくてライアンだからね」

それでライアンは僅かに機嫌を直した。戸籍の調査までをクインの言葉に付随して止めたなら、チアロに更にもう1発くれてやるどころだ。それはそれでいい、と呟き、ライアンは煉瓦屋敷を出た。

外は既に夕暮れの気配であった。

「食事が終わったらお前は奴の所へ行け。明日の昼過ぎに行くと言えろ」

「ライアンは？」

「……あの女の所へ」

分かったとチアロは頷いた。明日は昼からまた同じ話の繰り返しになるかと思えば気が滅入る。その前に考える時間も欲しかったし、何も考えない時間も欲しい。

そして何よりも、芯からの休息が欲しかった。そんなときに行く場所をライアンはあまり持っていない。

が、あるだけましというものかも知れなかった。

食事が済んでチア口と別れると、ライアンはタリアの大通りの方へ足を向けた。境界門から続く妓楼の赤い格子が日暮れと共に一斉に燃えるような色に変わる。

篝火が照らす通りから僅かに奥へ行ったところにその妓楼はあった。柱や格子の塗りはそう新しくはないが、まめに磨いているのか小綺麗だ。他の娼家とおなじように1階は食事や酒を楽しめる場所であり、身の空いている遊女や遊女の見習いの少女たちなどが忙しく華やかに立ち働いている。

看板は余所の店に負けじと盛大に焚かれている篝火の煤で黒ずみが既に取りれないが、駒鳥と桜桃の浮き彫りが見えた。それがこの妓楼の屋号である。識字しない連中のためにこうした看板は必ずどの妓楼にもあった。

ライアンは慣れた足取りでその中へ入る。女たちの視線が一瞬向き、それからやはり慣れた笑みになった。軽い挨拶に素っ気なく応じてライアンは食堂の奥、遊女たちの部屋へ通じる回廊の前の女将の陣取る帳面台の前に立ち、それを軽く指で叩いた。帳簿に没頭していた女将はやっと顔を上げ、ああ、と練れた笑みになる。

「今、空いてるよ——今日は泊まりで？」

ライアンは頷き、いつもと同じだけの金をそこへ置いた。一瞥で金額を確かめた女将が小間使いの少女を呼ぶ。もう何度も上がっている部屋であるから案内は必要ないが、これは妓楼の方の都合である。

タリアが男たちの王国であるなら妓楼は女たちの国だ。女たちには女たちの、沢山の見栄も思惑も打算もあろう。そこに口を挟むのは愚か者のすることだった。

案内の少女が連れていった先の部屋はこの妓楼では悪くない方に属する。遊女の部屋の格というのは即ち指名の多さと揚げ代の額を示すものだ。この部屋の主が最初に貰った部屋はもっと小さく、狭かった。これが昇格したのに一端噛んでいるほどに注ぎ込んでいる自覚はある。

小間使いの少女が姐さん、と扉を叩くと返答があった。細く扉が開いて、ライアンを認めた瞳がぱっと明るくなる。白い腕が伸びてライアンの袖を掴まえ、軽く抓った。

「久しぶり、ライアン、全然来てくれないからあたしのこと忘れちゃったのかと思った」

端からそんな明るい怨み事を言い、遊女はライアンをそそくさと部屋に引っ張り込む。彼女もまだ少女と呼ばれる程度の年齢だ。翡翠色の瞳と薄い茶色の髪がライアンと共通していた。

「しばらくだったな、元気か」

ひどく月並みなことを口にしながらライアンは薄い外套を脱ぎ、彼女に渡した。それを受け取って客用のクロゼットにしまいながら、まだ扉の外に控えている小間使いに酒とあて水を言いつけ、遊女は元気じゃないわよ、と軽やかに笑った。

「ライアンが来てくれないと寂しくて死んじゃうって、この前も言ったのに。ホントに死んじゃったのかと思って、滅茶苦茶、心配するんだからね」

唇をつんと尖らせて不満不平を鳴らす様子も、さほど嫌味ではなかった。どうこう言いながらもまっすぐにライアンを見る瞳が嬉しさを輝いていることが大きいだろう。

ライアンはゆるく笑った。神経ごと羽を伸ばしている彼のこれほど明るい表情を、恐らくはこの女以外の誰も知らない。

シャラ、とライアンは彼女の名を呼んだ。うん、と笑う少女が飛びきりに嬉しそうだ。まだ少女の範疇に入る年齢特有の顔立ちの定まらなさではあるが、目鼻立ちは整った部類にはいるだろう。

少し彫りの深い、冷淡にも一瞬見える顔貌はライアン自身に似ている。シャラと自分が並んでいるところを見たことがある人間は限られているが、彼らは総じて自分たちを似ていると言った。そもそもどこことなく特徴のない美女系であるのだ。

「俺の心配はいい、俺は俺で適当にやっている」

シャラは僅かに首をかしげた。

「うん、でも、今日はちょっと機嫌が悪いね。何かあった？」

「……よく分かるな」

「ライアンのことだから分かるの。他の客の機嫌なんか知ったこっちゃないわよ」

ちょこんと舌を出して肩をすくめる仕様に、彼女が遊女として自然に身につけている媚態があった。彼女と知り合い指名するようになってから既に3年が経過しているが、少しずつこうして経験を重ねていく様子をどこか複雑な思いで眺めている。

かといって妓楼から出すにはタリアの様子は自分に有利すぎない。チェーンの子供たちは自分の女だと興味で見ると、タリアの大人たちはこの女を自分との取引の材料にしたがるだろう。この中が一番安全というのは微妙な事情であった。

酒が来るとシャラはついてきた水に自分の砂糖菓子を取り出して放り込んだ。ライアンが酒の新しい瓶を開けてやると、瓶首を掴んで洗面所へ立っていく。中身は捨ててしまうのだ。

「いつものことだけど、勿体ないわよね」

シャラは苦笑している。

ライアンは酒を殆ど飲まない。酔いが欲しいときは少しだけ分けておくこともあるが、それは珍しい出来事に属した。それでもライアンが酒を頼むのはそれについてくるあて水と、酒代に含まれている遊女への見返りの金銭のためだ。何かを頼むのはシャラの体面を優先してやるためでもある。

いいさ、とライアンは気楽に言い、シャラの作った砂糖水を含んだ。彼女の所に来るときは大抵日の終わりだ。好きで甘いものを食べるわけではないが、疲労が溜まってくると欲しくなった。

シャラは大体ライアンの顔色を見ながらそれを作るべき時に作る。自分に関する限り、シャラは敏で聡い女であった。そしてそれ以外、全く無頓着な女でもある。

その現金な好悪を、ライアンは憎くは思えなかった。この中途半端な感情がこの3年でねじれて奇妙なことになりつつある。多分それは自分が悪いのだろう。悪いと分かっている胸にあるのは罪悪感ではなく、諦めに似た怯みであった。

「ねえ、機嫌悪いの、どうして？」

シャラは無邪気を装い、ソファに身を預けながら水を舐めているライアンに身を摺り寄せてくる。肌の熱が触れる。まだ子供に近い身体は、体温が高い。

それをさりげなく押し戻し、ライアンは曖昧な返事をした。遠ざかった身体を更に寄せるようにシャラはライアンの膝にもたれ、上目遣いに彼を見た。微かに開いた唇と吐息が、既に十分す

ぎるほどに男を知っていることを伺わせる。

ねえ、と甘えた声を出すシャラの頬を指先でなぞりながら、ライアンはじっと自分の思考に沈んでいく。シャラを構っているときは寂しがる猫を撫でているような気分であった。

クインの申し出の内容は推察している。恐らく外れはないだろう。嫌だと言い出したら絶対に聞かないだろうとライアンは半ば諦めている。クインに男娼としての価値があるかと聞かれれば大いにあると答えるところだ。

自分で客を探すことをしないとやるなら賢い選択であるとも言える。街角にそれと分かる格好で立とうものならすぐに食べ物にされて終わりだ。クインは自分が素人であることを理解はしている。だからこそライアンに上客を知らないかと聞くのだ。

女衞のような真似をしろというからにはその見返りも考えているだろう。高級娼婦たちの相場からすれば取り分は娼婦が8の雇主が2程度だが、9をやってもいい。高額であるならその一割だとしても悪い商売にはならない。

実際自分が手がけるには細かい仕事だし、クインの事情から鑑みてそもそも客として扱えない人種を取り除くこともしなくては。その辺りはチアロを通じてもっと下層の、チェーンの子供たちにさせてもいいが、決して駄目な商売であるとは思えなかった。

クインの切った期限まで、正味1ヶ月と3週間。

女のように休養をとらなくてはならない期間がない分、彼の望む金額までは決して無理ではないだろう。一晩で――500から600、というところだろうか.....

具体的な計算はもっと得意な者にさせるとしても、概容はすぐに弾き出せた。

無理はない。ほころびはない。クインには確かに万人に君臨するような美貌が備わり、自分にはそれを最も効果的に売りさばく為の方策がある。

だから躊躇う気持ちの中核が自分自身の嫌悪であることは余計に鮮明であった。ライアンは溜息をつき、構ってくれないとふくれている少女の頬をゆっくりさすった。

「.....知り合いが、体売りたいと言っていてな。俺は賛成しないが本気らしい.....」

相談というよりは愚痴であった。ライアンはそれだけ口にするると再び溜息になった。

クインの主張も戸籍の入手に関わる事柄の秘匿に対する怒りも、全てを容易く想像できるだけに気が重い。

乗り気でない自分の側の理由というのが結局自分の感情論であるから尚更だ。きっと話がもつればクインはそのことも指摘するだろう。彼は容赦がない。

と、不意に手が叩かれる。ライアンは何故か一瞬にして不機嫌になった少女の顔をまじまじと見た。

「何よ、それってライアンに抱いて欲しいって事じゃない。やだやだやだやだ、絶対に駄目っ」

ぷいとその場を立ってシャラは寝台に転がり込み、ふてくされたままで毛布を被って何か意味の通らないことをわめいている。

ライアンは一瞬呆気にとられ、それから軽く声を立てて笑った。彼もまた席を立ち、寝台に座り込みながら毛布の下で丸くなるシャラの背を撫でてやる。猫を宥めるときのように。

「相手は男だ、変な気を回すな」

ひょこんと毛布から顔だけが出る。

「……ほんと？」

ライアンが頷くと、したり顔で毛布から出てきて柔らかに腕を彼の首に巻き付ける。シャラの吐息が耳に掛かってライアンはそれを押し戻した。

シャラの表情に僅かに陰りが差す。その翳りの濃さを暗さを、次第に重くしつつあるのが自分であるという認識はある。あるが——ライアンもまた、生きていくのに他人が必要な類であった。

絶対数は少ないが、彼にも守り庇護したいものがある。

その内の一人、シャラ＝クルーエル。

彼の中では妹として知覚される存在。

肉体関係がない故に、いつまでも特別であり続けるであろう女。

妹だと思う心が少女を容易く自分のものに出来る状況においてもそれを押しとどめている。時折この少女の顔を見て、下らない話をする為だけにライアンは妓楼へ通ってくる。

それももう3年になった。最初の頃ライアンに身の回りの出来事や不平や不満を洪水のように話すことで満足していた少女もあと数ヶ月で成人である15才を迎える。加齢と共に次第に彼女の瞳にむら立ち上る思慕も濃く深くなっていった。

ライアンもそれにはとうに気付いている。気付いていて、それでも通うことをやめないのは多分、シャラが記憶に遠く薄い陽炎だけを残す、母と似ている気がするからかも知れない。

下らないということは承知している。以前からもライアンはそうした感傷に足を取られて身動きできないことがあった。その時も自分のいたらなさを痛感したが、人はそうそう変わらない。

シャラの思いを知っていてなお、それを無視してまでライアンはシャラに会いたい。似た顔立ちも、同じような色の瞳や髪も、全てが系譜としてつながる気がするから。

シャラはしばらく不機嫌に黙っていたが、やがて気を取り直したように煙草を吸うかと聞いた。

ライアンが彼女に会いたい理由とは全く違う次元で、シャラはライアンに愛想を尽かされることを心から怖れている。臆病な素振りは見せないが、やけに明るいきや不意に今までのことを知らないふりで他のことをするとき、彼女が自分の機嫌を損ねたのではないかと怯えているのは感じていた。

それも哀れでライアンは余計にこの女を突き放せない。

「こんなもの、どこがいいんだか」

憎まれ口を聞きながら、シャラはライアンの煙草を鏡台の引き出しから取り出した。多少の量は部屋においてあるのだ。

癖だからなとライアンもまた、それまでの会話など忘れたように応じた。

ライアンはタリアに来てから煙草を覚えた。彼を拾い、兄のように父のようにいてくれた前チェイン王リァン・ロウが大変な愛煙家で、ライアンが彼の真似をして煙だけを口の中で転がしてはむせ返るのを面白がって幾らでも与えてくれたのだ。

リァンの行動を通して彼を知りたい一心でライアンは煙草に手を出したのだが、結局習慣になって根付いてしまった。今更手放せなかったが、最初にリァンから貰ったときはこんなもののど

こがいいのか理解に苦しむと思ったのも事実だったから、シャラの感想も身にしみる。

ソファに戻って一服を始めると、シャラがふと、呟いた。

「――やりたきゃ、やらしてあげればいいじゃない」

一瞬おいて、それが先程の自分の呟きに関するシャラの回答であるとライアンは気付いた。視線が自分に動いてきたのを分かったのか、シャラはライアンの飲み残した砂糖水をすすっては自分の言葉に頷いている。

「いいじゃない、自分からやりたいって言ってんだから。馬鹿だなんて思うけど。それにただ寝転がってるだけじゃ駄目だって事ぐらいすぐに分かるわよ。それから後のことは本人に決めさせたら？ 大体ライアンが心配したって、切羽詰まったらおんなじことすると思うわ」

ライアンは僅かに眉をひそめた。確かにシャラの言うことは正しかった。

クインに金が必要なのは動かせない事実だ。金が用意できなければ、クインの母親は死ぬだろう。それが十分に分かっているのだから、ライアンが断って戸籍を突きつけても話がこじれて行くだけだ。

クインの価値を知り、それを効果的に使うという意味に於いて自分は適任だ。クインもそう思ったからこそこの話を持ちかけているのだ。ライアンは深く頷き、そして煙草を深く飲んだ。

クインを説得して戸籍の譲渡を受けさせることがまずは優先であろうが、それは断固として拒否されるという未来を、既に彼は脳裏で確定にしていた。

太陽が中天を回ったと時計が示す頃から明らかに呼吸と鼓動が落ち着かない。頻繁に時刻を確かめながら、クインは昨晚から少しも重たくなならない瞼を遂に諦めて起きあがった。少しは落ち着かなくてはいけないと目を閉じ横たわると、自分の心臓の音が耳を打つ。それが酷く激しく主張する気がしてどうにもならない。

今日の昼過ぎに、とチアロが連絡してきたのは昨晚だ。頷いた時、自分の首の付け根は軋まなかったろうか。分かったと答えた声は掠れなかったろうか。

結局こういうことになるのだ、といい聞かせてみても一度知った安堵感が後ろ髪を引く。帝都に帰還した祝祭の日、見知らぬ男に悪戯されたときの嫌悪が肌に蘇ってきてクインは思わず顔をしかめた。

気分が悪い。口の中に酸い味が広がっていくのを止めようと舌打ちをすれば、また同じ記憶が戻ってきては更に不機嫌になった。

知らないふりをしてしまえという声は実はそう小さくない。それでもライアンと話をしたいと告げたのは、全てにけりをつけて後の時間が気になるからだ。ほんの数日とはいえ、まるきり無駄にしてしまったことが、心の隅から重く増殖していく。肝心なところで道を間違えたような居心地の悪い焦燥であった。

(条件にあった親子が見つかる)

何気ない言葉だったからこそ、真実を知ってしまった。自分の要求に応じて、何の罪科もない母娘がこの世から消える。他人、といってしまえばそれだけのこともかもしれなかったが、それは即ち帝都で暮らしていた頃の自分たちの姿そのものだった。

消えても構わない母と娘、ということはそう裕福ではあるまい。父に限らず母親に恋人はおらず誰の妾でもないだろう。そうやって地道に生活を営んでいることが裏目になる。

――帝都にいた頃、自分たちは幸福だった。沢山の忍耐も苛立ちも飲み込まなくてはいけなかったが、静かで落ち着いた、明るい生活だった。母と自分、2人だけの生活はその時間に美しく完全に固定している。消えていく親子の幻はいつの間にか自分たちの過去にすり替わりつつあった。

それと、とクインは顔を歪める。3年前から自分は賓客だった。ライアンは決してクインを自分たちの仲間であると認めなかった。それが悔しくもあったし、寂しくもあったし、逆にライアンの配慮であることも分かっていて嬉しくもあったが、3年が経過してなお、自分は同じ扱いにしかされていない。俺達のことなど分からないだろうとチアロでさえ思っている。

チアロは余計なことといった。詰まらないことであると言わんばかりだった。彼らにとっては比較するのも馬鹿馬鹿しいほどのことなのだろう。

それを非難するのは簡単だ。倫理や道德などを持ち出すまでもなく、明らかに非道と言われる種類である。だがライアンやチアロが辿ってきた道筋を考えると、あからさまに言うのは気が引けた。

ライアンは昔、稚児として飼われていた屋敷を自力で抜け出してこの町に転がり込んだといい、チアロは父の死後に食い詰めて流れてきたという。彼らはその話を被害者のようには語らない。そんな話は珍しくはないからだ。

それに僅かに胸を衝かれる気がするの自分甘いだろうか。この世界の水を飲めないと念を押されている気がして、尚更クインは不機嫌になった。やらなくてはいけないことははっきりしている。自分の力で母を救い、どうにか今後の目処をつけること。出来なければ母の死を見ることになるだろう。後1、2年の内に残酷な死を。

黒死は死病だとライアンでさえ知っている。金のない者には容赦がない。だが金さえあれば違う。進行を食い止め、療養所の中では普通に生活することさえ出来るのだ。薬に施されている魔導の構成さえ分かれば自分で試してみてもいいが、母の身体で実験するわけにも行かないし、第一医療に関してはクインは素人であった。今から必死でその方面を勉強したところで通常10年以上掛かると言われる医学の修得を2ヶ月で成し遂げることは出来ない。

金さえあれば。それだけが懸案だった。だから戻ってきた。最後に残る身一つでも、まだ価値のつくものが自分自身に残っているかどうかを確かめに。

ライアンの反応は困惑と淡い怒りであり、それも予想は出来ていた。彼が昔男に飼われていた身であることも無関係ではないだろう。ライアンはそれを屈辱的な過去だと思っている。だから自分が同じ事をしたいというのが信じられないという目をした。

馬鹿な奴、とクインは唇を無理矢理に笑顔の形にする。

そんなことは出来事だ。自分の身体の上を通り過ぎて行くだけの通り雨だ。そんなものに撲たれて自分を変えることなどあり得ない。それに嫌悪感が伴うのは仕方ない。通り雨だとしても濡れたら気持ちが悪いのは当たり前だから。

だが、手段を既に選ぶ時間ではない。自分の力でどうにかしてみせると確かに自身に誓ったはずだ。

戻ってくる間、ずっと考えていたことだ。元に戻るだけなのだ――そしてクインは思い切り苦い顔になった。一度安堵を覚えてしまったつけを今、一息に払わされている気分だ.....

クインが何回目かも分からないような溜息になったとき、軽く扉が叩かれてすぐに開いた。入ってきたライアンはいつもと全く変わらぬ無表情だ。やあ、と軽く挨拶をするとただ頷いた。表情が読めないのは普段と同じだが、それさえ当てつけかと思えてくる自分にクインはようやく苦笑した。

「――話があると聞いた」

やはりライアンの切り出しは単刀直入であった。適当に座って煙草を始める彼の仕種を暫く眺めていると、最初の一杯を終えたライアンの目が自分にまっすぐに向いた。

「.....チアロから何も聞いてない？」

「お前が話があるとしか言っていなかったが」

チアロは余程腹に据えかねたのだろう。クインが切り出し難かろうと知っていて説明してないのは微かな抵抗といえた。もしくはライアンは知っていてしらを切っていることもあり得る。どちらにしろ、彼を呼びつけた理由を口にしなければならぬことは変わりなかった。

「――ライアン、戸籍のことなんだけど」

そう口にさせるとライアンはちらりと彼を見て、再び煙管に口を付けた。僅かに頷いたのは促してくれているのだろう。クインはあの、といいかけて乾いていた唇を舐めた。

心臓の音が激しい。血潮の登る感触がこめかみ辺りを酷く叩いている。

「戸籍……戸籍を、探すのは……条件に合う相手を探すことだっていうのは本当に……」

呟いた言葉に呆気なくライアンが頷いた。そう、とクインは一瞬痙攣した頬を隠すために俯く。自分の推測は正しかった。チアロがしまったという顔をしていたのも自分がこれに抱く嫌悪感の種類を察したからだ。

そしてライアンは恐らくそれを知っていてクインには言わなかった。内実を知れば拒否するだろうと思っていたから。

「戸籍のことは俺に任せろと言ったはずだ。今更要らないというのじゃないだろうな」

ぴしりと釘を差されてクインはいや、と苦笑に見えるような顔を作る。ライアンが一瞬それを目に留めて、やや温い吐息をついた。

「要らないか……」

ライアンの言葉にクインは頷こうとし、そしてぎこちなくしか動かなくなっている体に気付いた。痺れたように、顎を引くことだけが出来ない。

微かに震えている彼に気付いたのか、ライアンは一服を長く吸った。吐き出されるほの青い煙がそのままライアンの溜息に見えた。

「理由を言え、クイン。俺は命じるだけで済むが、実際戸籍を探しているのはチアロとその下の連中だ。連中に何と言いつればいいのかを教えろ」

ライアンの物言いで、彼が戸籍の拒否を不愉快に思っているのは分かった。そうだろうとクインも思う。自分とて是非にと頼まれて引き受けたことをそうそう撤回されては面白くもない。

「……俺は、戸籍は空いたのを探すんだと思ってた。条件に合うのを探すんだと。でも、違うんだろ？ 戸籍じゃなくて、戸籍を持っていて条件に合う人間を探すんだ……乗っ取るために」

ライアンは一瞬おいてから頷き、それで、とつまらなそうに促した。クインは苦い顔をして見せた。チアロの反応よりもライアンの方が数段冷徹であった。余計なこととチアロが表現した感覚を、ライアンは更に際だった形で持っている。

「俺はそんなことだって知らなかった。最初に言ってくれなかったのは不公平だ。俺が……俺が余所者であんたたちの世界に馴染めないし付いていけないと思ったから？ でも、それは不公平だ、ライアン、そんな事だって知ってたら最初から頼まなかった」

ライアンは黙ったままクインを見つめた。視線には特別な力みがなかった。クインはそれを殆ど睨むようにして返した。ライアンの緑の瞳の中にいる自分の顔がひどく強張っていて、しかも泣き出しそうな顔付きをしている。

泣いて嫌だと言えばライアンは折れるだろうかとクインはちらと思い、そして強烈な嫌気に関を歪めた。そんなのは泣き落とした。それでは全く自分はライアンの荷物でしかない。

自分は彼と対等になりたいのだ。彼に保護を求めることがどれだけ自分の負荷であるかを噛みしめているのも、彼に頼ることに居心地の悪さを感じるのも、その係累の感情だった。

「俺には価値があると、あんたが昔そう言った。もう一度、同じ事を聞きたい。俺には価値があるか」

ライアンは黙っていた。沈黙は長く続いた。煙管を持つ指が何度も柄の部分で撫でるのを見ると、やがて低い声が言った。

「ある」

クインは大きく頷いた。だから、と言いかけたとき、ライアンが素早く遮った。

「だが、俺は賛成しないと言ったはずだ。クイン、お前が何も娼婦のような真似をしなくても俺が出来ることはしてやる、それで何故いけない」

「俺が望んでいたのは、無関係の他人を殺すことなんかじゃない！ そんなのはいやだ、俺に価値があるっていうならそれで済むじゃないか！」

「――誰かを犠牲にしながらでないと生きていけないのは当たり前だ、自分の見えない範囲のことなど考えるな」

「へえ？　じゃああんたが犠牲にして踏み台にしたのはリアン・ロウってわけ？」

口にした瞬間にしまったとクインは顔を引きつらせた。それとライアンが思い切り側の小卓の足を蹴ったのが殆ど同時だった。大きな音にクインは一瞬身を強張らせ、そして怯んだことへの反射的な嫌悪でさっとあらぬ方向を見た。

「……リアンのことは、口出し無用だと、何度言ったら分かる……」

ライアンの声は一層低く、掠れて途切れるようだった。これがライアンの胸奥に深くえぐり残る傷であると、知っていたはずなのに咄嗟に出るのは何故だろう。ライアンがリアンの死に深く傷付き、自分の追憶と胸に流した血の涙で溺れて死にたがっていたことさえ、見ていたはずなのに。

3年前に同じようなことを何気に口にしたときは手加減なしに殴られているのだから、ライアンの反応はましになった方であるかも知れない。だが、未だに先のチェインの少年王の死をライアンが後生大事に抱えていることが癪に障る……

「ライアンは死んだ人間のことばかり見てる……」

独り言のような呟きに、ライアンの方は黙り込むことで対話を拒否した。クインは暫くライアンの顔を見つめていたが、そこにあったのは普段と同じ無表情であった――が、煙管をいじる指が、せわしない。

自分の言葉は確実にライアンを強かに撲ったのだということは分かった。分かったからこそ、苛立ちも募る。3年前からそれは同じだった。誰からも特別に扱われることに慣れていたクインにとって、そうでない者もいるということが驚愕であり、侮辱でもあった。

ライアンは彼が庇護し、庇う相手が欲しかった。それは自分でなくても良かった。ライアンにとってそれは誰であっても少年王の身代わりであって、それ以外の意味などなかった。

だからあんなに苛立ちを覚えたのだろうかクインは今更思い、唇を噛んだ。

「……いいよ、あんたは俺のことを好き勝手に守りたいってやつなんだ。俺はそんなのはいやだ。俺はあんたの付属物じゃないし手下でもない。俺は取り引きしたいと言ってるんだ、あんたにだって損な話じゃないのに」

ライアンは返答をしない。黙って煙管の柄をいじり回している指先が、先程よりは落ち着いているのは彼も冷静に立ち返ってきているということであった。自分の言葉を吟味しているのだろうかクインは時間を待ち、軽い溜息をついて寝台にぼんと座った。

地下のじめついた空気がこんな時は溜まらなく煩わしかった。地下に潜るという言葉のいかかわしさを、文字通りに湿度の高さで肌に感じている。それが我慢ならないと思った頃に、ようや

くライアンが重い口を開いた。

「何故、戸籍ではいけない——かつてはお前の母親だってそうしたはずだ」

クインは虚を突かれて目をしばたいた。

それは、と呟いた瞬間に冷たい汗が駆け上がってくる。それきり言葉を見失ってクインは凍えたように固まった。

自分が性別を偽りながらも学校へ行くことが出来たのは戸籍の賜物だった。母と自分を平穏に守ってくれたあの戸籍。偽名に使っていた少女の名が噴き上がってくる。その少女は一体どうしたのだろう……

母さん、と低く呟いた言葉に自分でもはっとするほどの苦みが混じっていた。クインは意味もなく首を振り、そして長い溜息になった。母は戸籍の取引の内実を知っていたのだろうか。そんなはずはないと思いたいのは自分の感傷で、実際がどうであったか分からない。だが、知っていたとしても買ったかも知れないと思うと、胸が重い。

母は疲れていたはずだ。流転の続く幼い日々に、母の恐れと怯えを敏に感じ取って自分でさえ酷く神経質だった。今でも根幹は変わっていない。自分の真実の姿がさらけ出されていないかどうか、どんな時でも冷めた意識が検証している。

追われて流れて辿り着いた帝都は自分が皇帝の落胤であることを思えば敵中に飛び込むのとあまり変わらない。その時に自分たちを安全に守ってくれる戸籍がどれだけ眩しく見えただろう。田舎に行けば無戸籍は目立つ。帝都であるならさほどではないが、個人を特定する条件に無戸籍があるのならば、戸籍はどれだけ役に立ただろう。

母は戸籍を買った。意味を知っていたかどうかはもう分からない——聞くのも怖かった。

長い時間をやりすごし、クインはようやく顔を上げた。ライアンは目を逸らさずに彼をじっと見ていた。その視線を正面から見るのが酷く辛く、クインは視線を下へやった。

「……でも、あの戸籍は……もう……撤回するわけに行かないじゃないか……」

これが単に論旨のすり替えであり、言い訳であることをクインは承知していた。

ライアンは黙っていた。それが彼の気遣いであることを承知して、クインは再び俯いた。それは哀れみとさほど意味が変わらなかったからだ。

過去のことはいい、とクインは自分に刷り込もうと躍起になった。今優先しなくてはいけないのは他のことだ。誰かを犠牲にしながら生きて行くしかないのだというライアンの言葉も一面においては正しく、このタリアではより真実に近かろう。倫理観や世界観というものの認識の深い溝を埋めるべきは今ではなかった。

苦い残滓を胸に噛みしめながらも、それを思考の隅へ追いやろうとクインは深く呼吸をし、ふり起こすように首をもたげた。

「だから、戸籍は要らない。何にしろライアンの負担になるのは分かってるけど、俺に価値があるというなら、少しは返せるはずだ。そうだろ、違う？」

一瞬おいてライアンは違わないな、と苦笑し、煙草を吸った。

「……俺は賛成しない、と何度も言っているな。同じ事を今俺が言ったらどうする」

クインはその質問に首をかしげ、ややあってから肩をすくめた。

「そしたら皇城で一騒動起こすしかないね……でもそこから足がついて母さんに何かあったら、俺は首を吊りたくなる」

自分とよく似たあの皇子のふりをして中に潜入し、めばしいものでも盗んでくるしかない。皇城の内部に関しては全く未知であったから、これは危険が酷く大きいとしか言いようがなかった。

クインは自分がこの一点に関して酷く神経質だということを承知しながらも、自分を追っていた者たちの影をみすみす踏む気がしてならない。皇位継承だとか立太子だとか、そんなことに興味はない。だがそれは自分の気を惹かないだけであって他人には違うのだろう。だからずっと追われていた。立太子が済むまでは安楽に構えたくないのだ。

ライアンはそうかと頷き、煙管の灰を小皿に落とした。

「いいだろう。取り分は経費を引いた後の9と1だ。細かいことは俺に任せろ」

それがあまりに唐突だったのと抑揚のない呟きだったことで、クインは僅かの間ぼかんとした。ライアンが煙管をいじりながら続けた。

「お前の事情は先に聞いている。最大限、出来る限りの配慮をしよう——いつから出来る」

最後の質問でようやくクインは顔を上げた。ライアンはいつもと同じように静かであった。いつでも、と返答したのはひどく長い一瞬の後であったようにクインは思った。微かに呼吸が乱れた後で強烈に喉が渴いてきて、唇をゆっくり舐めた。

「なん……だよ、急に反転しやがってさ」

自分の動揺を苦く思う気持ちが責める言葉になってこぼれたことを、クインは自分で嫌悪した。ライアンはぬるい吐息を落とした。

「俺が幾ら嫌だ駄目だと言ったところで実際客と寝るのはお前だからな。それにお前の母親には多少借りがある。お前がそうしたいと言って俺が出来ることというならそれくらいしかないのも本当だろう」

一宿一飯の恩ってやつ、と混ぜ返すとライアンは彼には珍しい温かな笑みを浮かべて曖昧に首を振った。それ以上を聞ける雰囲気ではなかった。クインがそれを混ぜ返さなかったことで話は終了したと取ったのか、ライアンは一際大きく煙管を叩いて立ち上がった。

「後のことは話が付いたら連絡しよう」

話の時間は終わりのようだった。時計を見るとライアンが来てからまだ半刻もしていない。ライアンは大体の道筋の整理をつけてきたのだろう。

結局ライアンが手を貸さないと言い張ったところで、自分も意固地に戸籍は要らない自分で金は稼いでみせると主張したに違いない。手間を省かれたのだとも思われたが、さほど駆け引きを好まないライアンの性質に照らせばそれも頷けた。

火の消えた煙管を腰のベルトに差し込み、ライアンが椅子から立ち上がった。帰るつもりなのだと考えるまでもなかった。やや長身に属する身体が扉の前まで歩くのを見送りかけたとき、やっと声が出た。

———大切な話は、実はもう一つある。

「頼みがあるんだ」

絞り出したような声に、ライアンは視線だけを振り向けさせた。僅かに寄せた眉の隙間から、怪訝といった表情が見えた気がした。

「1万、俺にくれるんだろ？だったら.....」

そこまで口にしかけてクインは羞恥と気後れのためにずっと顔をライアンから背けた。

「だったら、何だ」

ライアンの声が僅かに低く促した。うん、と頷くと耳朶がひどく熱い。かあっと血の気が上がってくるのが分かる。クインと更に要請されて、もう一度クインはうんと頷いた。

「だったら、その.....あんた、ひ、暇な時でいいんだけど———あ、いや、割とすぐにがいいんだけどさ.....」

言いよどみ、口ごもりながらクインは視界の端にライアンの姿を入れて、彼が煮え切らないことに痺れを切らして出ていこうとしていないかを確認めた。ライアンは僅かに彼に向き直ったようだった。そんなことくらいなら分かる。その仕種で続きをせかされていることも。

クインはあのさ、と意味のない言葉を連ねて舌打ちをした。踏切が甘いのは覚悟が足りないからだ、という非難が跳ね上がってきそうになる。

どうした、という声が程近くでしたことで、クインははっと顔を上げた。出ていこうとしていたライアンは今は彼の側にいて、彼の顔を覗き込んでいる。端正な顔が殆ど眼前にあるようで、クインは僅かに後ずさった。

ライアンは彼の仕種が子供を怯えさせてしまったと気付いたのだろう、唇をゆるめて彼から離れた。ほんの少しだけ喉を空気が通るようになった気がして、クインは長い溜息をついた。溜息の最後にくぐられていたように、するりと最初の言葉が出た。

「.....あんたは俺が素人だって言ったよね———俺もそう思う。キスのことだって、言われなけ

れば多分今でも知らなかった……」

あの瞬間の苦い怒りが微かに遠く、届かないところで海鳴りのように轟いている。それは何のためであつたろうか。自分の幼さに嫌気がさしたのか、何も知らないのだとたかを括られていたことが腹立たしいのか、それとも――

クインは内側に閉じこもっていきそうな思考を振り切るように首を振った。

「だから、その……何ていうのかな、さ、最初の客になんないか？」

死ぬような思いで吐きだした言葉の後、クインは俯いたまま目を閉じてはそっぽを向いた。ライアンの返答を待つ。

彼の顔など見られない。

たっぷりした、間があった。

「……何て？」

ライアンの返答には肯定も否定も載っていない。どれかというなら呆気にとられているというのが正しいだろう。

「だからその1万で俺を買わないかって言ってんの！」

吐き捨てるように叫ぶと、ぱあっと血の気が更に上がってきたのが分かった。ライアンの回答はない。面食らい、戸惑っているのだろう。それくらいなら分かる。何故、と聞く声も詰問ではなかった。まるで子供のように、ライアンは素直な疑問を口にしている。

「だから……俺が素人だって分かってる奴に、その……色々、教えて欲しいこともあるんだってば……べ、別にあんたじゃなくたっていいんだけど……」

「お前の秘密を知っている俺に秘密の分の担保にしろと？」

思っていたことの大まかを指摘されてクインは頷くが、ライアンの顔はまだ直視できなかった。暫くして聞こえた溜息は長い。多分に呆れたような空気が含まれているのも錯覚ではあるまい。

「――必要なことは客の方が面白がって教えるだろう。それでいいじゃないか」

「俺が嫌なんだよ！」

叫んでからクインは顔を上げてライアンを睨むように見据えた。クインの突然の反目に彼は驚いたようにぴくりと眉を動かした。

「俺が嫌なんだよ、そんなのは！ 素人だって分かってなめられるのも、面白がられるのも、全部全部嫌だ！ 俺は主導権を取りたい、ライアン、どんな奴だったとしても俺が絶対に優位にいなきゃ嫌なんだよ！」

誰かが自分を優位に操るなどということを考えただけでも胸が烧けるほど苦しい。それは屈辱ではなく、怒りのためだ。自分の心の作用は刺々しくなる方に突き抜けている。思い通りにならない苦しみや不快は苛立ちになり怒りに変わる。

それは最終的に他人に投げた罵詈雑言が自分に返ってくるように、明確な作用といえた。クインは自分の心理について、根元は理解している。誰に対しても主導権を握りたい、好意を持った相手とは対等でいたい。その根は不安だ。いつでも傍らにあった、ひっそりと生活に影を落としていた、見えないためになお暗い闇。

それはどれだけ自分の神経を細く、そして過敏にしていることだろう。クインはいつでも思考を重ねることで不安から逃れようとした。大丈夫だ絶対に平気だと熟慮の末に辿り着いた結論でも、それをひっきりなしに検証しようとしているのは確かだ。

誰かが自分を好きなようにするのかと思うだけで、まともに立ってられないほどの不安に駆られる。その逆であれば自分は落ち着いていられる。誰であれ、自分を手玉に取ろうとするなら許さない……

許さないと口の中で呟いた瞬間に、脳裏で逆巻いていた沢山のうねりがぼろりと頬を伝ったのが分かった。悔しくて。

クインはそれを急いで拭う。泣き落としなどと思われるのは心底腹に据えかねた。

ライアンは黙っていた。彼は元から無口だが、こんな時は何か言ってくれないだろうかと焦れたものを感じる。だが今、口を開くと何が飛び出してくるか自分でも良く分からない。分からないままにクインもまた沈黙するしかなかったが、ライアンが涙のことについて何も触れないことに安堵を覚えた。彼は自分を理解しようと努めてはいるのだとクインは思い、その思考でようやく溜まっていたものを飲み下すことに成功した。

「……あんたは、俺が、あんたたちのことなんか分からないだろうって思ってる……」

涙の余韻で震える語尾を無理に押さえながら言うと、ライアンは一瞬おいて頷いた。それは自明だった。3年前から一切変わらぬ態度も同じ事を教えてくれる。

クインは睫に溜まった残りの水滴を指で拭い、唇を笑うような形にゆるめて見せた。

「そして俺も思ってる、俺のことなんか分からないくせにつてさ……ライアン、俺は、誰かが俺をいようにしようとするのが嫌だ。他人の思惑に乗せられるのは絶対に嫌なんだ。身体を売ることなんてどうとも思っちゃいない、とは言わない……これでも一応高等教育ってやつを受けてるんでね、ある程度のことは刷り込まれてるからさ——でも、嫌なことにも順位がある。俺が一番嫌なのは、俺の意志を無視して俺を好きにしようとする事だから……」

ライアンは身動きせず、じっと彼を見つめていた。自分の奥を透かされるような気後れと怯みにクインは一瞬目を閉じ、怯んだことを自分で苦く感じて視線をライアンに戻した。

「だから、俺は——俺は割とあんたを信用してる。3年前に俺を何故助けてくれたのかは知らないけど、その事実だけで、その後のことも含めて十分だったから……だから、俺はあんたに頼みたいんだ」

言葉をようやく切って、クインはライアンを見つめた。

ライアンはやはり瞬きもせずに彼を見ていた。緑の瞳の奥に自分が映っているのは見える。だがその更に奥で彼が何を考えているのかは計り知れなかった。突飛な言いだしだと分かっているけど、結局クインの要求を満たす相手として資格があるのは事情を知っているものだけだ。

ライアンは担保という言い方でそれを表現した。説明しなくてもいいことが少ないとほっとする。必要だとしても口に出すことに踏ん切りがいくこともあった。

「……俺が拒否したら？」

ライアンの声が低く尋ねた。クインはさあ、と首を振った。

「分からない。でも……」

未知の物に対する恐れも、怯えも、否定はしない。ただそれを見知らぬ他人に見透かされるの

が嫌なのだ。帝都へ帰還したあの晩に、路地裏でされたような屈辱はもう沢山だった。

クインが口ごもりながら語尾を濁したことで、ライアンは溜息になった。だがそれはそう長いものではなかった。彼は一瞬ぎゅっと眉を寄せて渋面を作ったが、呆気なく頷いた。

「分かった。ではお前の担保というのをもらっておこうか」

「―――いいの？」

クインは不思議にライアンの面持ちを眺めあげる。暗い地下の部屋で、灯りから遠い位置にあっては微妙なところは良く分からなかった。

「お前を暫くは飼わなくてはならない。躰は飼い主の義務―――というところだろう。いい、俺も……そうだな、客の下で泣きわめくお前よりはその方がいいと思う」

クインはゆっくり頷き、言うべきことを全て終えた安堵のための眩暈に僅かに均衡を崩した。半歩下がって長い吐息を捨てていると、ライアンがまた、と出ていこうとした。クインは顔を上げる。まだ具体的な話は一言も進んでいないのだ。

それを言おうとした瞬間、ライアンが振り返った。

「戸籍の撤回のこともあるし、上客の選別もある。2、3日は何もしなくていいから身体を休めておけ。……長く暮らすにはここは環境が悪い、新しい部屋へ移る用意をしておくように」

クインは頷いた。それに素っ気なく頷き返してライアンが出ていくと、部屋はやっと静寂になった。

膝から力が抜ける。その場に座り込みながらクインは僅かに身震いし、そして自分の身をしっかりと両腕で抱きしめた。

あの晩の男の執拗な愛撫が払っても払っても蘇ってくる。意識が半ば朦朧としていたせいだろうか、肌に直接ねじ込まれたような刻印は記憶の底に沈めようとする度一層鮮やかであった。

ライアン、と呟く。信用だとか、そんな話ではない。結局自分にとって心許せるといっている人間は母と、チアロと、彼しかいない。それしかないのだと、分かっているからこそライアンを無理矢理巻き込もうとする自己がひどく厭らしい生き物だと思った。

帝都の夜空に花火が咲いている。6月は祭事が多い。北寄りの国々では待ちかねた、短い夏を楽しみ昇華するために沢山の祭事がおかれている。初夏シタルキアにおいて最大の祝祭は始祖大帝の生誕祭であろう。始祖大帝の生誕の日付は実は不明なのだが、6月の末日を最終日として3日間帝都を華やけてくれる。

縁日、見せ物、それに滅多にはない皇族の臨席、貴族の子弟達の仮装行列――
「聖祖大帝ってどんな方だったんでしょうね？」

山車の上に座りながら、きつい帯のせいで苦しく先程から呼吸をしている弟にリュース皇子はさあ、とゆるく笑った。

「記録はあんまり信用できないからね……知りたければ父上の跡を継いだらどう？」

皇帝にしか代々伝授されていない秘密もある。それがどんなものか想像もつかないが、大量に神秘的なものも混じり込んで、一種嫌悪さえ抱くようなおどろしさを醸していた。秘伝、秘宝、秘画に儀式。

皇子の返答に弟は途端に厭な顔をした。

「僕、勉強ってからきしだから……兄上の方が絶対向いてると思うんですよね」

弟の言葉にリュース皇子は苦笑した。自分が立太子に一番近いことは知っているが、母の違う弟が2人いる。第1皇子は自分だが体の弱さを引き合いに出されれば苦しいだろう。

が、異母弟たちとて憎くはない。彼らの母は宮廷の華やかさが苦手で、次男を出産した頃から帝都郊外の静養地、ロリスに引き込んでいる。帝都よりは遙かに自然の豊富な環境でのびのび育ったせいなのか、2人とも非常に素直で明るい性質だ。

ライン皇子がまたふう、と苦しい呼吸をついた。もう千年以上も昔に滅びた漢氏という少数民族の民族衣装は裾が長く、帯がきつく、それを幾重にも捲くために傍目にも苦しげだ。リュース皇子も同じような格好であるが、明確に2人の衣装には差があった。

自分の衣装は右肩を脱いでその上から漢氏様の甲冑を被せてある。刺繍も縫いの糸も全てが燃えるように赤い。これは建国の功臣、イダルガーンの扮装である。

そしてラインの方は同じような赤い衣に金糸銀糸で細かく刺繍の入った打ち掛け、沢山のかんざし、施された化粧、刺繍は蘭の花の図案。これは始祖大帝の皇后であったラファーナ妃を模している。ラファーナ皇后の逸話として最も有名なのは「オレセアルの緋天使」としての救世伝説で、剣の名手として名高い。ラインは先の少年剣術会での優勝を受けて、この仮装行列の後の剣の模範演武までを担当するのだ。

同じ漢氏の衣装でも、女物の方が格段に身体にはきつかり。そんな状態で剣の型の披露をするということで、ライン皇子はここ暫くそれに引き合わされていたが、天性の勘があるのか昨日最後の練習を覗いたときは流麗な動きであった。

ふう、とまた同じような溜息を弟がついた。リュース皇子は小さく笑い、弟の胴をきつく締める帯の隙間から、数本隠し紐を抜いてやった。抜いても差し支えない部分の紐だから構わないだろう。少しは楽になったのか、ライン皇子はにこりと笑う。そうすると扮装のせいもあってか少女のようだった。

その笑顔に見せられたのか、歓声が上がった。適当に曖昧で反感を持たれない程度の微笑みを

振り分けながら、リューズ皇子は弟に手を振ってやるように囁く。他の高位の貴族の子弟達も華やかに笑顔を振りまき、聖祖大帝とも呼ばれる建国者の時代を模した仮装行列を盛り上げることで熱心だ。

頭上で光の花の咲く音がする。つられたようにライン皇子が見上げ、素直に笑顔になった。刹那炸裂する光に照らされて、弟の頬が微かに反射する。

花のようだと讃えられる自身の美貌とは少し異なるが、同じような女性系の顔立ちは似たところがなくもなかった。今の自分の年齢と同じくらいになればきりりとした少年のようになり、いずれは瀟洒で華やかな宮廷貴公子となるだろう。その時自分が皇帝であろうがなかろうが、こうして幼い日々の密な閉鎖空間を持つことがきっと良い方に作用する。弟の気性からしてそれは確定に思われた。

仲の良い兄弟であることはいずれ、何かの武器にもなろう。ましてリューズ皇子は元来が虚弱で、戦向きのことが出来にくい。軍学として用兵や戦略を学ぶことが出来ても、実際戦場にたてるかどうかは微妙なところだ。ライン皇子はそれを補完してくれる存在となるに違いなかった。

ライン皇子は花火に見とれたり沿道に詰めかけた群衆に手を振ったりで忙しい。それを微笑ましく見守りながら、リューズ皇子は自分も同じように軽く手をあげて愛想を振りまいた。

視線を投げかける度にその周辺が熱を持つのが嬉しいようでもあり、それが自分という個人へ向けるものでないと知っているから複雑でもあり、だがあまり小難しく考えることでもないと思うこともあり、リューズ皇子はただ意味のない笑顔だけを零すことに専念している。

沿道の人群れをさらりと流した視線が、ふっと引っかかるように戻った。何かを見た気がしたのだ。とても懐かしい、何か大切なものを。

その感触を確かめるように、ゆっくり進む山車の上から皇子は視線を流し返した。ふと何かを掠め、気付いて戻り、そうして焦点を絞ったその瞬間。

「あ……！」

皇子は思わず腰を浮かせて振り返った。彼の珍しい動揺に、周囲の人垣が触りと蠢く。それが決定的な違和感になろうとした刹那、人々の波間からくるりと背を返す細い身体があった。

待って、と叫ぼうとしてそれを思いとどまったのは3年前の苦い記憶が蘇ったからだ。

(逃げるんだね)

自分の不用意な言葉で蒼白となったあの顔。間違いがない。人目を引かないように髪を……染めているのかかつらなのか良く分からないが金色にして編み上げ、当時と変わらぬ少女の様式に身を擬態しながらこちらを見ていた。

名前も知らぬ、あの「少女」。帝都にまだいたのか、それともどこから戻ってきたのだろうか。いずれにしろ、間違いなく自分を見に来たのだと皇子は確信した。自分や弟がこの仮装行列に参加することは前もって告知されている。そのせいもあって沿道は凄まじい人だかりだ。

その中から見つけた奇跡に皇子は笑った。これは本心からこぼれてくる、安堵と嬉しさのためのものであった。皇子の晴れやかな笑みに一層周囲が歓声を上げる。それに上の空で手を振りながら、皇子は群れを抜けて流れに逆らって泳いでいく、美しく伸びた背筋を見つめた。

背は良く伸びている。以前から背格好は同じ程度であったが、今もそれは変わらないだろう。

少女としては既に長身という部類にはいるほどに背丈はあるが、細身の印象が強いためにすらりとしたしなやかさだけが目に残る。

3年前に見失ったときにも卓越した美貌であったはずが、再び目にすれば一層鮮やかであった。その場だけ、空気が色が変わるほどに。多分彼は自由に生きているのだろうと皇子は悟った。一目見たときの印象があまりにも違う。

良かったと僅かに唇を綻ばせていると、ようやく人垣を抜けた彼が振り返った。皇子はそっと視線を彼にまっすぐあてた。彼もじっとこちらを見ている。

まさぐりあうようなもどかしい一瞬の後に、瞳がかち合った。夜といっても沿道の灯りで昼間ほどに明るい大路では、全く同じ色の瞳が見て取れた。

皇子は彼に笑いかける。単純に、皇子は再会が嬉しかったのだ。だが彼の方は反応が違った。一瞬何かに撃たれたように頬を痙攣させ、そして顔を歪めて隣の男に何かを言った。

それで初めて連れがいることに皇子は気付いた。年齢の頃はそう変わらないだろう少年が一緒だ。背は随分と高いが顔立ちが幼さの片鱗を残している。

少年が「彼」の肩をぽんと叩いて背を返す。それを追うように身を返して、彼は振り返った。こちらを見つめてくる眼差しは、色味が複雑すぎて明確な名を付けられない。

憧憬でもない。再会の喜びでもない。帝都から追い出したのだという元凶を憎しむ目でもない。

どれかというなら、と皇子は路地に紛れて消えていく背を見送りながら思った。あの僅かに痙攣した頬の種類は、切なさだったかもしれない。哀しげであったかもしれない。それは単純な理屈ではなく、彼が皇子に対して複雑な思いを抱いていることの証明の気がした。

……だが、何のための？ 皇子は僅かに顔を曇らせる。兄上、というライン皇子の声に気付いたのはその時のことだった。

「そろそろ城へ入りますから、立って歓呼を、って」

仮装行列もそろそろ終幕というわけであった。山車の上で皇国万歳を叫ぶ民衆に応えながら、皇子は彼の消えた方角を目で追っている。帝都にいと分かっただけで胸が温かになった。

探そうという気はなかった。彼が皇子を恐らくは自分の意志で見に来たことで、そして憎まれていなかっただけで十分であった。皇子と話がしたいと思うなら、幾らでも方法はあるはずだ。例えば中等学院だとか。今年の冬には卒業ということになっているが、自分がまだ在籍していることは知っているはずだから。

やがて山車が完全に城の内部へ入ってしまうと、皇子は弟と共にそれを降りた。ライン皇子はすぐに演武が始まるため、簡単に着付けを直して最後の練習にと借り出されていく。皇子は着替えをするために、控え室の方へ足を向けた。

皇族用の控え室には皇子の母がいた。父帝は見えない。他の儀式があるのだろう。始祖大帝の遺産と呼ばれるものは沢山ある。それらをいちいち確認するような儀式はうんざりするほどあった。

「あら、終わったのね、リュース」

母が微笑む。ええ、と頷いて衣装の裾を踏まないように気をつけながら皇子は母の隣へ座った

。侍従がすぐにやってきて、彼の衣装をいくつか手早く見せていく。その内の一つを適当に指定し、合わせた他の衣装や装身具を揃えるために侍従が下がると彼は甲冑の紐を解いた。本物ではないからそれは殆ど繊維で出来ていて身体に負担はないのだが、やはり開放感があった。

「ラインの演武が始まる前に着替えますから、一緒に行きましょう、母上」

そうね、と母妃は笑って頷き、皇子の頬をゆっくり撫でた。そんな風に母に触れられるのは本当に久しぶりで、皇子は嬉しくなって俯く。ラインのように満面で表現できないのは性分であったが、それでも彼の顔がほころんだことで母もまた、にこりと笑った。

「演武が終わったら花火のいいところが残っているから、高演台にでも行きましょうね」

皇子は他愛ない約束に微笑んで頷く。母と持てるゆっくりした時間を、皇子はとても貴重に感じていた。

やがて侍従が戻ってくると、先に結い上げて飾り羽をさしてあった髪を解きほぐした。きつくあげられていた髪の根本が弛むと同時に痛む。微かに顔をしかめてこめかみを押していると、母が隣で呼吸を呑んだのが分かった。

「……母上？」

皇子は不思議に母を見つめる。母妃は一瞬泣き出しそうな顔で頬を歪めたが、すぐにそれを取り繕った。が、慌てて浮かべた微笑はぎこちない。何か、信じられないものを見てしまったという顔をしている。

母上、ともう一度皇子は呼びかけた。皇妃は僅かに首を振り、何でもないのよと笑ったが、それが嘘であることは考えなくても良かった。怪訝な感触に皇子が戸惑っているのを配慮したのか、母はいいのよと重ねて笑い、皇子の手を取った。

「妹の子供の頃に似ていたから吃驚したのよ。あの子もとても美人だったから……」

そうですか、と皇子はそれに異論を唱えなかった。母方の叔母は十九の時に亡くなっている。写真を見たことがあるが、確かに母や自分と共通する繊細で端麗な美貌の持ち主であった。

ともかくお召し替えをといわれ、皇子は控え室を出る。衣装室で漢氏様の仮装を脱いで新しい衣装に袖を通して、目の前に鏡がおかれた。髪の手入れを始めるのだろう。

視線を鏡の中の自分に与え、そして皇子もまた驚愕して声を挙げた。どうしました、と侍従が聞くのに首を振り、今度はゆっくりと鏡に映る姿に目を走らせた。

髪は漢氏の扮装用に黒く染めてある。きつく高めに結い上げられていたせいで、下ろされた髪は僅かに波打ち、皇子の形の良い頬を縁取っては流れ落ちている。仮装の際の見栄えを考慮して、ラインほどではないにしる施されていた化粧が唇に華やかな色として残っている。

まるで少女のような姿。

3年を経て見失った少女が鏡の中から戻ってくるようだ。

皇子は他人がひっきりなしに賞賛することに殆ど無関心で、自分の容姿には無頓着であった。3年前も美しい少女だと思った。だが、それは印象だけで顔立ちの明確な刻印ではなかったのだ。

だが、今ならはっきり分かる。自分が最初に中等の教室に入っていたとき、教室を包んで鳴り止まなかったざわめきの意味でさえ。

「似てる……」

皇子は呟いた。似ている。自分たちは鏡に真向かうようにそっくりだ。髪を黒く染めて印象が変わったことで初めて気付いた――

そして皇子は僅かに振り返り、いや、とすぐに首を振った。自分を見つめる視線に何が籠もっていたのかは分からない。……彼の方は自分たちの相似について知っているのだろうか。

探したい、と皇子は思った。今までの何よりも強く、そう思った。

水滴が跳ねた音が、狭い浴室に響いた。浴槽の中で膝を抱えていたクインは物憂く顔を上げ、完全には閉まっていなかったらしい蛇口をぎゅっとひねった。金属のこすれる感触が、手の平に痛い。

のろのろした仕種でその手を浴槽に戻し、再び同じ姿勢に戻る。前と違うのは顎を膝に乗せたことだけだ。張った湯は既に熱を失いかけ、出ていくのに勇気がいる。

.....クインは微かな溜息をもらして瞬きし、浴室の換気窓を見た。一瞬の閃光が窓を光らせているのは城を中心にあがる花火だろう。

クインは城か、と呟いてゆるく首を振った。何故見に行ったのだろう。.....行きたいなどと言ってしまったのだろう。後悔ばかりだ。

埋もれるほどに花を飾り、美しいリボンを結び、静やかに進む始祖帝の故事に倣った仮装行列は馬鹿馬鹿しくなるほど豪勢だった。一際歓声の上がる山車は遠目からもすぐに分かった。近づききれず、遠くなり過ぎるほどに離れられず、中途半端な距離の人垣の中でじっと山車を見ていた時、自分は何を考えていたのだろう。

漢氏の扮装のせいで黒く染めた髪は、いつか自分がしていたのと同じような艶やかさだった。大衆に合わせたような微笑みも、きっと過去の自分とよく似ている。改めて見つめれば、似通った部分ばかりが発見できた。

きっと入れ替わったって誰も気付かないだろうに。あそこにいるのが何故自分でないのだろう.....

妬みというわけでもなく、憧憬というものでもない。ただ自分がきっと永久に手にしない、だが権利はあったはずの輝きを見せられては胸が痛かった。

皇子は相変わらず彼と同じ顔立ちをして、そしてずっと無垢に美しかった。手入れされた肌やよく磨かれた爪などは付属物に過ぎない。誰をも寄せ付けない輝きを、本人は殆ど意識しないままに放っていることがたまに眩しい。涙が出る。

皇子が自分を見つけて笑ったことも、一瞬巻き起こった激しい怯みのために思わず逃げてしまったことも、全てが哀しく思われた。皇子は悪くない。いつか彼が逃げていくのを見ないふりをしようといってくれた言葉の通り、今でも彼を庇ってくれるつもりでいる。

その慈悲。憐れみ。そんな言葉を思う度に腹の底から噴き上がってくるようなものがある。双子でありながら片方は城で大切に跪かれ、片方はタリアの奥の汚いアパートで子供自体との永訣を決める瞬間をどうしていいのか測りかねて震えている.....

クインは顔を歪めた。誰が悪いと声高に訴えることが出来れば楽だったのに。あの皇子の微笑みさえ辛い。同情なんか欲しくないのだと斬り捨てることは簡単なのに、理性はそれを捉えているはずなのに、納得させきれないものが残る。

過去にどんな理由があったかは知らない。だが今自分がここに、皇子が城にいることは確かだった。山車の上で隣にいた蘭芳皇后の扮装の少女は弟のライン皇子だろう。皇族の隣に同位置で座ることが出来るなら限られてくる。

あそこにて、弟皇子と微笑みを交わしていたのは自分だったかも知れないのにとすることを止められない。

何故、何故、自分ばかりが不幸の籤を引くのかと何かにたたきつけたい衝動を止められない。

そして、それは誰のせいにも出来ないからこそ、自分の中に跳ね返ってくる。

(誰かを犠牲にしなくては生きていけない)

ライアンの言葉に反発を覚えたことさえ巧妙な偽善に思えてくる。

クインは舌打ちした。狭い浴室にそれが殷々と響いた。また一瞬の閃光が窓の向こうで輝き、やがて遠雷に似た音が微かにした。それが合図だったかのようにクインは身震いをした。肩の辺りまで深く温い水に浸かった肌は既に水気でふくらと柔らかになっている。いい加減にここから出て、寝室に行かなくてははいけないと分かっている、足が竦む。

水から上がりかけては寒いと呟いて戻ることを繰り返している。陥没にはまって上がれなくなった獣みたいな真似だとクインは皮肉ぽく口元を歪めてみるが、あまり面白くなかった。

長い溜息を落としながら、クインは浴室の窓をずっと見ている。花火が断続的に初夏の夜空を照らしているのをここで見終えるほど時間を潰す気はないが、だが現実、湯から抜けて部屋へ行くだけの勇気がない――寒いから、とクインは呟き、唇を軽く噛んで額を膝に押しあてた。目の裏が熱い。

いっそ、早くしろと呼んでくれたらいいのに。クインは歯を食いしばって嗚咽を飲み込みながら、ライアンの冷淡さについて一瞬激しく憎み、そして彼の正しさに苛立った。まだ機会はあるのだとライアンは言外に告げている。彼が自分の言った担保を受け取ると承諾したのには、この最後の機会を与えることも含まれていたのだろう。

ライアンの考えは分かっている。彼は自分を手持ちの男娼にすることには乗り気でない。今でも。クインが怖じ気づいてやめるというのを待っているのだ。頭でしか痛みを想像できない他人のことよりも自分に起こる出来事の痛みを優先しろと、言っても分からないなら感覚で判断しろと迫る、そういうやり方だ。

ライアンは正しい。クインは温い水で目元を微かに洗いながらそれを思い知る。

自分がまだ子供で攻撃的なのは不安だからということさえも見抜いている。不安でなくなれば少しはましになるだろうか。……子供でなくなれば、もう少しはましになれるだろうか。

無垢という言葉の意味をさほど深く考えたことはなかったが、この夜を境にして別のものになるということは永遠の無垢からは見放されるということなのだ。

そしてあの城に入るには、無垢であることが相応しく、そして絶対条件であるように思われた。

もう二度とあの場所に行く資格さえなくすような気がしてたまらない。来るなと言われているようで居たたまれない。自分の帰る場所を、最後に行き着くべき場所を、その門を潜る資格を自分で手放そうとしている。

クインは顔を歪めた。

何故という憎しみだけが、誰に向けても間違いだと分かっている憎悪が、頭の中を散々走り回っている。

美しい扮装。綺麗に整えられた衣装、染められた髪、磨き抜かれた爪の淡い色。

その全てが、憎い。憎い。憎い。

何故。何故。何故。

何故、俺なんだろう。何故、皇子ではないのだろう。何故、俺じゃなくちゃいけないんだろう。何故、何故――

僅かに首を振ると、水面に映る花火が目の奥を焼いた。

憎んでやりたい、呪ってやりたい、口汚く罵り引き据えて、自分をいずれ買うだろう客達の前に放り出して目の眩むような絶望に食らいつくされてしまえ――それが何故、俺でなくてはいけない！

何故、と呟くと一度は沈んでいった涙がまたこぼれ、顎から落ちた。僅かな波紋がゆらりとたたうつ。

自分は汚い。自分の不服従を誰かのせいにしたくてその相手が見つからないのを、皇子に被せて憎しむことで釣り合いを取りたがっている。必要なのだと分かっている、身体が動かない怯懦をも、憎い。それも皇子のせいにしたいのだ。

どれだけ理不尽かも知っている。

皇子は十分自分に優しくした。事情など何も知らなかった故に、あれほど直截な聞き方をした。それを憎いと思ったことは今までなかった。皇子の指摘がなければ気付かなかった瑕疵がある。あのまま魔導実験にまで進んでいれば、破滅は明らかであった。

理性では分かる。十分に。だが、今自分を支配しようとしているのは衝動であり、衝動は感情の突端、心の真奥の反射だ。嫌だ嫌だと泣き叫びながら、他人が自分のために苦難を浴びることを肯定したくなる。

そしてそれは完全に自己の言葉と矛盾であった。取るべき道が一つであることは帝都に戻ってきたときから分かっていた。自分で考え、自分で決めたことを守れないなら、自分の意志なんてないのと同じだ、とクインは僅かに頷く。その新しい考えは、やっと自分を納得させうるものに近かったのだ。

ぴちゃんという音が、もう一度した。蛇口はやはりよく閉まってなかったらしい。クインはゆっくり腰を上げ、きつく蛇口をひねった。僅かに軋む音がして、水はどうやら完全に止まったようだった。

それをきっかけにしたようにやっと足が出た。長く、もう殆ど水と言っていい温度になっている湯の中にいたことで、やはり肌がいっぺんに冷える。反射的に身震いし、クインは浴室から出て手早く身体の水気を布で拭くと、一瞬迷ってから夜着の長衣を被った。釦を止める指先が細かく震えている。

その作用を、もうどうこう誤魔化す気はなかった。クインは眉をひそめて笑い、やはりライアンに頼んで良かったと自嘲と共に安堵した。怯えている自分を知るのは彼だけだ。彼が黙ってくればそれで済む。それにライアンはチア口のように喋り回るのが得意ではないのだから。

ライアンは寝台に登って高い位置の窓を開けていた。何かと思えばそれは煙草の煙を逃がすためであるらしい。初夏の夜はさほど寒くないのだろう、上半身は既に全て脱ぎ捨てて、ゆるいズボンだけだ。

右肩に、一目で分かる深い傷の痕跡があった。クインがそれに目を留めたのに気付いたのか、3年前にな、と薄く笑う。

「完全に直っているから気にするな。目に触るようなら見ないほうがいい」

「直ってる割には傷は残ってるんだね」

驚くほどすんなり声が出た。さほど声が強張ったりしていないことにクインは強く安堵した。

ああ、とライアンは軽く頷く。カレルが面白がって傷をいじり回したからな、と前タリア王の名をあげながらの彼の声は苦笑気味だ。

そう、とクインは微笑み、寝台にすんと座った。彼が引かない姿勢なのを見て取ったのかライアンは微かに眉を寄せ、すぐに元の無表情に戻って煙管を窓枠に軽く打った。灰を切るのだ。

「写真、そこにある内から好きなのを選べ」

ライアンが軽く顎で示す小卓に、幾枚かの写真があった。

少女の扮装と少年の格好の2種で一昨日チアロが撮ったものだ。写真という容姿を形残すものへの反射的な嫌悪はあったものの、客に見せるのに必要だからといわれれば頷くしかない。後はライアンやチアロが写真を他人の手には絶対に渡さないといってくれた言葉を信じるしかなかった。

どれもそう写りは良くないが、ライアンに言わせるならその方がいいらしい。チアロが客の約束を取り付ける時に有利に運べるからと言われて良く分からないまま頷いた。いずれにしろ、クインはそちらには疎いことを自分で承知している。

ライアンがようやく煙草を終えて窓を閉めた。

10日ほど前にライアンが宣言したように、クインはチェインよりはやや外れた場所のアパートにいる。周辺は安い飲み屋や賭場などがぼつりぼつりとあるような、タリアの中では閑散とした地区だ。

チェインに置くとライアンの目が届く代わり、少年達の目に付くと敬遠された。ライアンは堂々たる少年達の王だが、彼の特別扱いという位置は諸刃の剣だ。厚遇もされるだろうが危険も増える。

このアパートには他の住人がいないのもよかった。前タリア王の残党の根城であったというここを、彼らを狩った報酬にライアンがアルードにねだったのだとチアロが言っていた。後でライアンも似たようなことを言っていたから、多分それは本当だろう。

地下から例の地下水路へ降りることが出来るし、水路はタリア中へつながっている。ライアンがアルード王にねだったというならその辺りを考えているのだ。

好きな部屋を選べと言われて最上階にしたのは、今し方ライアンが喫煙のために開けていた窓から遠く魔導の塔と、その更に向こうに皇城が見えるからかもしれない。白く輝く光の色のような城壁を見た瞬間に、この部屋がいいと口にしていたのだから。

選別した写真を渡すとライアンは頷き、他の写真に火をつけた。灰皿の上で身をよじるようにめくれ、瞬く間に黒い塊になっていくそれをクインはじっと見つめる。写真に対する嫌悪を考えてくれることを有り難く受け止めながら。

「……やめるかと思ったが」

ライアンの方も何かを思ったようで、そんなことを言った。クインは僅かに笑ってみせる。それは思っていたよりもずっと晴れやかであったように思われた。

「止めたって何も変わらないよ……」

口にしながらそれが真実であるようにクインは思った。

ライアンは僅かに首をかしげ、それから水差しを傾けて灰皿の上に残る僅かな火種を完全に消した。水差しを戻すそのままの手で、クインの手首を掴んで寝台の上に引き倒す。

それがいかにも唐突で、クインは慌てて待って、と遮った。ライアンは少し笑った。

「止めるか？」

からかうような素振りが滲む口調にクインはライアンを軽く睨みあげ、そして違う、と首を振った。

「そうじゃなくて……あ、灯り、消してよ……」

何か理由に見えるものを探して口走った言葉に、ライアンはああ、と素っ気なく応じた。自分の手首を掴んでいた手が離れ、寝台のすぐ脇に置かれていたランプの灯火が簡単に消える。

ふっと夜に沈んだ部屋で、クインは微かなライアンの吐息を聞いたように思った。

店の少ない路地近いアパートでは、窓からの明かりは殆どない。月はあるだろうが、今は建物の影になっていて光は射さない。いくら目を凝らしても、ライアンの表情はだから読みとれなかった。

寝台に引き倒されたままの姿勢で背を預けていたクインは、居心地悪く身体をずらした。どうしていいのかわからない。何か言うと支離滅裂になるのは自明に思われたから殊更、黙り込んだ。

ライアンが今度は正真正銘の溜息をついた。何を待たれていたのかを知っても、声高に非難する気にはならなかった。それが非難に値することなのかどうか、クインには判断が付かない。

身体の方は既に震えが止まっていた。深いところで観念してしまったのか、すんとした脱力で湯船の中にいたときより余程呼吸が正しい。あとはライアンがしたいようにすればいいのだという諦観と、彼ならそう酷いことは強いまいという安堵がやや自分を落ち着けている。

ライアンが唇を開いたような気配がした。黒い空間の中で、全ては気配であった。クインがじっと彼の顔の辺りを見上げると、ライアンは僅かに首を振り、そして頷いたようだった。

ライアンの影が動き、彼の指が自分の頬に触れた瞬間、撥ねるように迫り上がった動悸をクインは聞いた。自分の耳元で、自分の心臓の音が激しく聞こえる。

それに追い立てられるようにクインは目を閉じ、深く呼吸をした。その音と鼓動だけが世界に満ち満ちていく。閉じた瞼が痙攣している。噛みしめた唇を呼吸のために僅かに開き、長い溜息が震えていたような気がして左手で口元を押さえた。

そのまま呼吸を整えようと何度か肩でそれを均していると、他人の指が自分の胸の位置にある釦を外すのが分かった。微かに肌に触れる衣の動きさえ、いちいち気に掛かる。

鳩尾のあたりまでをはだけ終えた指が、何かを辿るように探すように、ゆっくり上がってくる。喉に指が触れる。込み上がってきた吐息を逃がそうと背をよじると、ぽろりと頬を伝うものがあった。

それを空いていた右手でそっと拭い、クインはその右手をライアンの方へ伸ばした。何かに闇雲に縋りたい瞬間であったかも知れなかった。指先に、彼の体温が近くなる。だが、それを感じた瞬間にクインは手を引いた。そんなことをして得られるのはライアンの同情だけであると思っ

たのだ。

どこへやるか困惑した手を迷っていると、指の間にすりと彼の指が入り、組合わさるようにして頬の横の辺りへ落とされた。

掌の熱。体温と、微かに感じる脈。

「ライ……」

クインは何かを言いかけた。何を言おうとしたのか、良く分からない。

——その瞬間、不意に白い光が部屋を照らした。驚愕でクインは反射的に跳ね起きた。何があったのか、理解できなかったのだ。

一瞬の後、低い轟音が遠くから聞こえた。花火だ、と理解するのに少しかかった。この祝祭の日の終わりを告げるべく、皇城からあげられていた花火の最終幕が始まるらしい。最初の閃光を皮切りにしたように、次々と光の花が空に咲いては消えていく。

ライアンがすりと重ね合わせた手を離し、花火だな、と呟いた。そうだね、とクインは淡く返答し、寝台の上に起きあがった。前だけが空いた衣の隙間から入る夜気が肌を僅かに冷やす。

そしてそのまま2人、黙ったまま夜空を見上げた。

窓の向こうに鮮やかに展開する明るい世界を眺めている間、決別の言葉をそれに投げかけている間、クインはじっと花火のちょうど真下辺りにいるはずの、兄のことを思った。

兄のことを思い、見知らぬ母のことを思い、そして自分を連れていた母のことを思った。

「……綺麗だね」

クインの呟きに、ライアンの吐息のような肯定が返った。

視界の中に四角く切り取られた窓、窓の向こうの夜、夜の上に乱舞する光たち。瞬き、消え、開き、名残と残像を残し、再び上がっては黒空に描き出される沢山の花。あの下にいる彼らと今、同じものを見ている。いる場所は違っても。

そんなことを思うと泣き笑いのような、微妙な表情になった。ライアンの方を横目で窺うと、彼はそんなクインの様子を知らぬふりでじっと夜空を見上げていた。

……あるいはそのふりをしてくれていた。どちらでも良かった。今、声をかけられたら、浴室で憶えた憎悪のことを、思い出してしまいそうだったから。

クインは視線を花火に戻した。美しいものを見ているときだけは、全てを忘れて没頭していられた。何故自分がここにいるのかという疑問も、取り返しのつかないことへ踏み出そうとしている恐怖も、全てが光の中に紛れて消えてしまう気がした。

次々と連続して打ち上げが続くならば、幕切れは近い。今頃帝都は祝祭の歓喜の中にあって一際華やかな熱狂を享受しているだろう。明日の朝になればその余韻だけが残っている一過性の、だが確実な快樂が皇城の下から広がり、道と人々を満たしている。

そして自分もまた、闇という部類の祝祭を通過しようとしている。熱と痛みを享受しながら。

クインは軽く頭をうち振り、ライアン、と呼んだ。花火をじっと見つめていた男はクインを見返した。それは彼が見た中で一番落ち着いて穏やかな表情であった。それに酷く強い安堵を覚えながら、クインはもう一度ライアンと言った。

「……花火が終わったら……さっきみたいに、手……重ねてて……」

体温があるだけで随分と鼓動の早さが違う気がした。本当は手ではなくて唇の方がいいのだと

言いかけ、クインは自分の感傷気味なことを苦く笑った。ただ、最後に唇に残っている記憶があの男のものであることが、気に入らない。が、ライアンに告げてもしそれは是と言わないだろうと分かっていた。

クインの言葉にライアンは頷き、どうしても変わらないか、と尋ねた。クインはうん、と僅かに微笑んで返答し、花火へ視線を戻した。

光花の饗宴は一層たけなわで、夜空全体が太陽に煌めく海のようにさえ見える。

「クイン」

ライアンが唐突に言った。

「お前が担保にしたものの代わりに、俺の真実をやろう。お前には嘘をつかないと誓う」

クインはライアンを見、そして破顔した。炸裂する光に明滅するライアンの緑色の瞳の奥の自分が、晴れやかに、嬉しそうに笑っていた。

やがて花火が終わり、部屋と夜は闇に戻った。そこで行われたことは、それまでクインが知識としてだけ知っていたことであつた。

彼女は生まれたときから奴隷だった。奴隷の子は奴隷と決まっている。無戸籍の連中が彼女の父を金に困って下働きとしてこの貴族の荘園屋敷へ売り、母も同じように売られてきた。その二人の間に生まれた娘であれば最初からいないも同然で、だから養ってもらい、一人前の仕事が出来なくても置いてもらえるだけで幸福だった。

彼女の記憶には父の姿はない。父は彼女が2才の時に病で死んだのだ。彼女が生まれたときに主人が祝賀として撮ってくれた記念写真の微笑みだけが、彼女の知る父であった。ぎこちなくゆるめようとしている口元とそれに比して柔和な目が、父の優しい不器用な性質を教えてくれる気がした。隣に自分を抱いて映る母も若い。10才の時に母親も事故で亡くなってからはこの写真が殆ど唯一の形見だった。

母を失ったとき、彼女はまだ子供と呼ぶべき年齢であったが、物心つく頃から下働きとして体を動かしてきたことを主人は評価してくれたらしい。荘園に残ることを許されてからは彼女は誰よりも一所懸命に働いた。

明け方には起き出して、まずは厨房の掃除から。専任の料理人がやってくるまでにはそれを済ませ、指示されていたことをおおかた終えておかななくてははいけない。少し早めの朝食を簡単に摂ると主人とその家族が起き出す時間になるから身支度を手伝い、後始末をする。その後はいいつつあったことがあればそちらをし、なければ広い屋敷の手入れなどに日々を過ごしていく。

けれど彼女はそのどれもが嫌いではなかった。例えば硝子一つにしても丁寧に、丹念に磨けば拭く前よりももっときらきらと光を通して廊下に美しい模様を作ってくれる。馬だって愛情を込めて世話をしてやればどれだけ優しい目をするか。

掃除一つ、洗濯一つ、手を抜いては自分が本当にいいと思う状態になどなりはしない。無心にただひたすらに働いた時だけ、神様はご褒美のように綺麗なものを見せてくれる。

神様、と彼女はその存在についてぼんやりと思う。彼女は勿論学校になど縁はなかったし、時々主人達に通っている教会というものに足を運んだこともない。

だが主人の家族のうち一番年齢の近い少年が神様と言うとき、その口調には冒しがたい尊崇と温かな憧憬が潜んでいるようで、それを発音する唇の動きごとに彼女は胸が膨らむような気がした。

雨上がりの雲の切れ間から細く差し込む光の糸々。朝露に輝く花壇の薔薇と飛び交う蝶の羽音。沢山の幸福に美しいものは皆、自分たちの手の届かないところからの贈り物だ。目で見て肌で感じて受け取ることの出来る幸福は、沢山ある。主人達のような上等の服や豪華な食事など欲しくないと言うなら嘘になろうが、彼女は自らの範囲で幸福を数えるのになれていた。

神様。

時折彼女は眠りの前に屋根裏の自室で少年がするように手を胸の前に組み、そっとうなだれる。他愛ない祈りは聖句も良く知らない彼女の精一杯の夢想ともいえた。

どうかもう少しだけ背を伸ばして下さい。もう少しだけ美人にして下さい。ほんのちょっとだけでいいんです。沢山働いて、一所懸命何でもしますから――

そして横の鏡をちらっと見て、首をかしげて苦笑するのだ。

父も母も美形ではなかった。それは自分にも受け継がれている。人より少し大きい黒目がちの

瞳が可愛いと女中頭は誉めてくれるが、これは他に目立ったところのない平凡な顔立ちの中では却って違和感に思えてならない。真っ黒でたっぷりした髪も何だか鴉のようで悲しい。色白なのもよりけりで、日に当たるとすぐにそばかすが浮いてしまう。家の中の仕事だけではないのだ。

時折化粧品を女中頭やこの屋敷の女主人が使い残したからとくれることがあるが、勿体なくて使えない。特別なときに特別に使いたいと引き出しの奥に仕舞ったままで、鏡の中に一瞬でも少しましな自分を見つけないとき、彼女はきゅっと唇を結んだ。そうすると僅かな間だけ、唇はほんのりと赤くなる。

けれどそれも一瞬の魔法。次に気付いて鏡を見るときにはもう、少し怯えたような目つきの少女に戻っている。

彼女はそれをねじ回して悲観はしない。美人でなくても財産などなくても、健康で良く働く身体があればきっと生きていけるから。

生きていける、という自負がこの屋敷の中という狭い世界に限定されていたのを、勿論彼女は気付かなかった。彼女にとって人生は日常の延長であり、日常はただ無心に働くことだった。

余計な望みは抱かないこと、自分が今持っているものに満ちていればいいということ、その二つをしっかりと胸に刻んだ上で彼女は毎日を仕事の中に埋めることに腐心した。それ以外考えられなかったし、他のことを覚えることも考えることも必要でなかった。

貴族荘園といってもこんな田舎で麦や綿花をするのは下位貴族だ。本当の大貴族は荘園など持たない。彼らは債権証書の売買や貸付やらで莫大な利益を上げる。荘園などと呼ぶのも苦笑するような、主人一家と使用人全部を含めて20名もいない小さな農園だったが、それだけに関係は密だった。真面目でよく働く彼女を屋敷の人々は慈しんでくれた。

化粧品もそうだが、少し生地がよれて薄くなっているコートや意匠が古くて着られなくなった服などを女主人は彼女にくれた。他の奴隷達も親を亡くした彼女をよく構ってくれた。主人がかつかつと奴隷達を扱わないことで、奴隷と言っても鞭打たれたり過酷すぎる労働に無理に従事させられることもなかった。それを語る他の農場から売られてきた奴隷達の話から比較して、自分は運がいいのだと彼女は知っていた。

屋敷には彼女より一つ年上の少年がいた。主人譲りの明るい金髪と優しい青灰色の瞳が自分を見て微笑むと、誰に笑いかけてもらうよりも気後れがした。

それは何故だろうと彼女は思う。向こうがいずれ自分の主人になる身で、自分が奴隷だから？
いいえ、と彼女は床を磨く手をしばし止めて顔を歪める。

少年が自分に笑みを与えてくれたその瞬間に、そんな身分差など考えているほどの余裕はないのだ。ただ怖じて、どんな顔をすればいいか分からなくて、困惑した挙げ句に目線と頭を下げる
ことしかできない。

少年が笑うと何か透明な、硝子で出来た石のようなものが心の中で僅かに転がる音がする。それは勿論空耳なのだが、その音を聞いたと思った瞬間に何故か恥ずかしくて居たたまれなくなるのだ。

彼女は微かに溜息をついて床磨きを再会する。考え事をするときは大抵床磨きだ。屋敷の古い木の回廊は、年代を経た木材だけが放つまろやかな光を保つために時折は専用の薬剤で力一杯磨

かなくてはいけない。両膝をついて雑巾でごしごし擦る姿勢は表情を隠してくれる。

少年の笑みを今更脳裏に呼び戻して、彼女は僅かに今度は赤面する。今自分がとてつもなく不埒なことをしているような気がしたからだ。

彼女がそれを躍起になって頭から追い出そうと床を磨く手に力を込めていると、足音が聞こえた。視線をあげすぎないようにそちらを見ると、上等の靴が見えた。靴の刺繍でそれが少年であることが分かった。

彼女は廊下の端へ寄って深く叩頭する。すぐに行きすぎるだろうと思っていた靴は、だが彼女の目の前で止まった。

顔を上げるように言われて彼女は恐る恐る少年を見上げる。例の音が耳から遙か遠くで続いている。名前を呼ばれて、はい、と返事をした声は凍えた小鳥のように密やかだった。

「13の誕生日、おめでとう」

誕生日、と彼女はぽかんとした声で聞き返した。少年は一瞬美しい青灰の瞳を見開き、違った？と小声で言った。彼女は首を振る。ただ、誕生日を祝うという習慣が身に付いていないだけで、この日が生まれた日であることは知っていた。

上手く返答もできない彼女に少年はそっと笑い、小さなりボンの掛かった包みを差し出した。胸がどくんと鳴る。今までのさやかな音など吹き飛ばすような大きな音が耳を打ち、うち続けているのが痛い。

「.....いいから、取っておくれ。大したものじゃないけど、僕はお前にやりたいんだ」

彼女は動けなかった。現実でないことが起こっているような、白昼夢の中に彷徨い込んでしまったような、恐れと怯えで身体が固まってしまったようだ。どうしていいのか分からないまま膝をついて震えていると少年は遂に苦笑し、手にしていた包みを彼女に握らせた。

手が触れた瞬間に、彼女は微かに吐息を漏らした。自分の指を開く手の温かさに惑乱して、泣き出しそうになる。心臓の音だけが世界に飽和していて、他のことなど何も考えられない。

少年はじゃあねと柔らかに言い、回廊を戻っていく。その後ろ姿が遠くなって行って、ようやく彼女は落ち着きを取り戻した。

.....まだ心臓が大きく波打った余韻は引かない。それを宥めるために彼女は大きく呼吸をし、それから少年の指の触れた辺りをそっと撫でた。胸の中にこぼれてくる温かな湯のようなものを、何と表現していいのか分からない。ようやく胸を押さえると、そこが痛いほど波打っているのが分かった。

夜、仕事を終えてから彼女は自室で包みを解いた。中身は硝子の小鳥だった。掌に乗る程度の大きさで、色の付いていない透明な硝子が蠟燭の光をゆらゆら通して仄かに耀いている。

彼女はじっとそれを見つめる。それは生まれて初めて彼女に与えられた、世の中で一番美しく可愛らしいものであったかも知れなかった。

その晩彼女はいつもより長く、名も知らぬ神に祈った。

もう少しだけ睫を長くして下さい。

もう少しだけそばかすを消して下さい。

神様、あともう少しだけでいいから、あの人の目に映る瞬間だけでいいから、私が綺麗に見え

る魔法を下さい――

神様と、呟きながら眠りに落ちていったその夜。彼女は人より遅めの初潮を迎えた。

日常はたゆまず流れていった。少年は時折彼女に珍しい茶や砂糖菓子をくれた。それにリボンや派手すぎない髪留めなども。何を貰っても彼女は嬉しかった。少年がほんの少し自分に心を選び分けておいてくれることが、暖かく、幸福な気持ちにさせてくれた。

それに、物を渡すときに一瞬触れる手が、手の温もりが。それが何よりも彼女に熱を与えてくれる。

彼女の部屋は屋根裏で、傾いた屋根の斜傾を切り取るように窓と腰台がある。腰台には鏡と両親の写真が飾っており、それが彼女の部屋で一番良い場所だった。光が射し込むとそこだけぽっかり明るくなる。

硝子の小鳥が部屋の一番良い場所に飾られるようになってから半年で、少年からの贈り物はその場所を占領するようになった。リボンだけは色褪せてしまうのが怖くて、やはり彼から貰った小さな疑似宝石の付いた小箱に仕舞ってある。少年が持ってくる品物は大概日常には身につけられない物ばかりであったが、それでも譬えようもなく嬉しかった。

彼女が自分の供物を使えないことに少年が気付くのが遅れたのは、彼と彼女の決定的な生活の差であった。少年は末端とはいえ貴族の範疇にあり、働いたことなどは皆無であった。

少年の仕事は今も勉学であり、そうでなければ収穫時の収益の計算を手伝う程度のことだ。長じて家の仕事と名の付くものをするとなれば、それは肉体労働ではなく、奴隷達を監督しきちんと利益を上げることなのだ。

ごめんよ、と少年はそれをすまなそうに言った。彼女は激しく首を振った。少年の持ってくる物はどれも繊細で美しく、砂糖菓子一つにしても壊したくないと思えるほどに上等だった。それらを見ているだけで、彼女は自分の手の届かない遠い世界を夢想することができた。きらびやかで華やかな夢を描いているときだけは、彼女は完全に幸福であったのだ。

つかえながらどうにかそんなことを説明すると、少年は苦笑したようだった。

「……お前がそれでいいというならいいんだけど」

それでも少年は自分の気持ちを何かに託したいと思ったのだろう。やや思案の後に、自分の襟元から銀の細い鎖を指で引き出した。その先に揺れる複雑な紋様板と中央に埋まった真珠で、これが少年の祈る神の持ち物であることが分かった。

「じゃあ、これを持っておいで。神様のご加護がお前にあるように、僕も祈っておくから。首からかけて服の中へ入れてしまえば、誰の目にも付かないだろう？」

ほら、と手渡された銀の薄板にまだ少年の体温が残っていた。彼女はそれを握りしめた。神様、と呟くと少年は頷いて笑った。

「そのうち、聖句や祈りの作法も教えてあげるよ。信仰を馬鹿にする人もいるけど、僕は好きだな。心がとても落ち着くんだ」

彼女は深く頷き、促されるままに鎖を首に掛けた。微かにこすれる金属の高い音が、心の奥を高揚させる。

紋様板がちょうど胸の淡い谷間と鎖骨の中間辺りに止まったのを、彼女は服の上からそっと押さえた。その部分に泣きたいほど温かな物が宿った気がしたのだ。

それから彼女は顔を上げた。信仰の道具を簡単に他人に譲るとするのは如何にも不埒なことの

ような気がしてならなかった。

「あの……若様、こんな、頂いてしまったら、ご迷惑なのではないでしょうか……」

少年は軽く笑い、いいんだよと言った。

「来週は僕の誕生日だから、父上からまた新しいのを頂くことになっているんだよ。もうそれは要らなくなるし、引き出しに仕舞っておくよりはお前に持っていて欲しいんだ」

はい、と頷いた時に彼女の胸を占めていたのは圧倒的な幸福だった。

少年の眼差しや言葉が優しく自分をからめる度に、竦み上がってしまうほどに幸福な気持ちになる。他に何も要らないと思えるほど、この一瞬が永遠に続かないだろうかと思うほど。

嬉しくて嬉しくて、他には何も考えられない。

あまりに幸福で、それを逃がしたくない一心で彼女は目を閉じる。祈りをするようにうなだれていると、そっと頬に少年が触れたのが分かった。ふっと視線をあげると少年が自分の頬に指をまつろわせながら、じっと彼女を見ていた。

瞳があってしまえば、捕らわれたように動けない。少年がゆっくり顔を自分に寄せてきたとき、彼女は怯えるように目を閉じた。

初めて他人と交わす口付けは、ひどく長い時間のような気もした。彼の唇は少し乾いて暖かく、触れた箇所から全てが抜け落ちていきそうな安堵を彼女は覚えた。

唇が一瞬離れた瞬間、掠れた声が好きだよと囁くのを聞いた。彼女は頷き、僅かに涙ぐみ、もう一度頷いて少年が再び寄せる唇を受け止めるために目を閉じた。

2人で持った秘密は、秘密だと思うことで尚更大切なものになった。仕事の合間に時折彼女は少年と逢うようになった。抱きしめられれば嬉しく、口付けを受ければ嬉しかった。彼の胸に甘えていることも、彼の腕にまかれていることも、全てがきらめくような幸福だった。

少年はその年齢特有のまっすぐさと生真面目さでいつか彼女を妻としたいと誓ってくれた。無邪気が無垢な約束事を交わす度に彼女は悲しくなった。自分と少年では明らかに身分に差があった。奴隷から自由市民になるには沢山の金がいる。市民になったからといって、その先にはまだ騎士階級を越えた上で少年の家門が位置する下級貴族というものに辿り着くのだ。あり得ない。

だが、そうと分かっているからこそ少年の情熱も真摯な言葉も嬉しかった。嬉しくて悲しくて、その二つがいつもない交ぜになって、眠りに落ちる前はいつも惑乱の中だ。

夢を見ているときだけが彼女を癒してくれた。身分差など考えず、2人で微笑みあっていられさえすればそれで良かった。

だが現実はやはり悲しいことが多い。少年が沢山の物を彼女に降り注ぐように彼女はどうかして自分から何かを差し出したかったが、自分に持てるものは何もなかった。

庭の薔薇の世話の折りに拾っておいた花卉で作った香袋、女主人の使い残したレースで編んだ小さなタイ。でもそのどれもが彼が最初から持っている物に比べ、なんてみすぼらしくて見劣りがするんだろう。

何も持たないことがこれほど恥ずかしいと思ったことはなかった。少年が自分にしてくれるように、同じように気持ちを返したいのに何も出来ない。彼はいつでも優しくしてくれるのに、自分ときたら色々な思惑に足を取られてぎこちなく、彼の言葉に頷くしかできない気がする……

彼女はそんな自分が厭わしくなる。人を好きになればなるほど欲張りになる。物欲しがるようになる。少年を慕い見つめる気持ちが純粋であればあるほど、彼に似つかわしくないことが重くのし掛かってくるのだ。

せめて自分がもう少し美人であつたら良かったのに。奴隷じゃなければ良かったのに。

けれどそれを思っても何も変わらない。目覚めれば窓の外にはいつもと同じ夜明け前の紺青の空、薄汚い寝台の上――

悲しみは少年と逢う僅かな時間にだけ、姿を見せなかった。彼女はそれを念頭から追い払うことだけを考えた。その時間は確かに満ち足りていたから、余計なものを入れたくなかったのだ。

そしてなるべくそれを脳裏から追い払うために彼女は益々仕事に熱心になった。食器も調度品もいつでもきちんと磨き、丁寧に掃除をし、料理の手伝いをし、女主人のする糸細工と呼ばれる手刺しの刺繍絵の糸を紡いだ。働いて働いて、誰かの役に立ちたかった。

14になる頃には彼女は誰からも重宝される小間使いになっていた。特に女主人は彼女をよく可愛がった。糸細工には細かな神経を必要とするし、丁寧に紡いだ色糸の具合が出来を左右する。

時折配色の相談などを受けるようになり、女主人の手から彼女はそれを教えられた。貴族の女達の間では教養ともされているそれを自分の手が生み出すのは不思議な奇跡だった。

自由にして良いと与えられた絹地に、彼女は硝子の小鳥を刺繍した。それは人生で最初に目にした、何の混じりけもなく純粋に美しいものであった。小鳥を刺し終わった後で彼女は僅かに考えて、その横に一回り大きな小鳥を寄り添いあうように刺した。これが彼女に出来る、精一杯の表現であった。

刺繍の入った絹地を切り取り、縁を丁寧にかがってレースで装飾すると、みすぼらしくはない程度のタイにすることが出来た。彼女はほっと息を付く。ようやく何か返すことが出来るのだと思うと嬉しかった。

少年はそれをととても喜んでくれた。こんなものしか出来なくて、と俯く彼女に何度も首を振り、有り難うと言った。

「こんなものだなんて、あんまり自分を卑下するのはおやめ。今のままでいいんだよ」

「若様……」

言葉が詰まるときは、胸も詰まる。どう言葉にして良いか分からない。

いつの間にか定まった2人の密会場所は滅多に人の来ない機織り小屋だった。昔は織布もしていたが綿花を手広く始めたせいで手が回らず、いつの間にか止めてしまった家業だ。糸紡車や織機などはまだ残っているが使う者もない。

いつものように唇をよせ、彼の胸にじっと身を預けていると精神全体が弛緩するような安らぎを覚えた。彼の鼓動も息づかいも、全てが彼女を包む世界になってくれた。

何度目かの口付けを交わしていると、少年がふうっと溜息をついた。彼女はじっと、彼女の神様を見上げる。

少年は彼女の黒髪に手を差し入れて、ゆっくり愛撫しながら呟いた。

「……でも、何かをくれるというなら……少しの間目を閉じていてくれないか」

彼女は素直に従った。少年の腕が自分の肩を抱き寄せ、いつもよりも丁寧なキスをした。

何度も離れては重なる唇が、ついばむように自分の同じ箇所を撫でる。最初の頃のぎこちなさは既に抜けて、彼女は全く警戒心なく心を預けていた。

不意に唇を割って何かが入ってきたのが分かった。驚いた身体が一瞬、反射的に離れようとするのを少年の腕が押さえるようにして遮った。

それが彼の意志だということをはっきり悟って、彼女は微かに身を縮めた。不意打ちの荒々しい仕種はただ恐れに変わるものであった。

きつく目を閉じてなされるままにしていると、やがて唇が離れた。うっすらと目を開けると少年の唇が赤く、ぽってりと濡れているのが分かった。きっと自分も同じようだろうということに気づき、彼女は羞恥に俯いた。どんな顔をして良いのか分からない。

「——ごめん……」

少年の声は苦しげで、ひどく痛々しかった。わずかな間をおいて、彼女はいいえと細く答えた。

「あの、私……驚いただけで……」

言い訳がましく口にして、彼女は僅かに首を振った。少年の謝意が何に向けられたものかを理解したのだ。彼は自分が怯えていたのを分かったのだろう。だから謝っている。それが嬉しくて、彼女はようやく微笑んだ。

「若様、私、本当に驚いただけなんです……あの、わ、私に出来ることってこれくらいしかないのかもしれないですし……」

「そんなことない！」

反射的に少年が声を荒げ、彼女は微かに怯えて呼吸を止めた。自分の語気が彼女を怖れさせたのに気づき、少年はやや長い溜息をついて首を振った。

「ごめん、怒鳴るつもりじゃなかった……でもお前はいつもそんなことばかり言うんだね。僕はお前がお前の言うようにつまらないものだなって、思ったことはないよ」

彼女は俯いて首を振る。少年の周辺にあり集うものはみな繊細な技巧を凝らした優美さばかりで、そこに自分がぽつんと混じるのはどう考えても不自然だった。闇のように閉塞した重い色の髪、同じ色の瞳。頬にぽつぽつ散る淡いそばかす。全てが不調和なのだ。

彼と、彼の持つ世界の空気とは。

彼女が黙っていることで少年は再び溜息になったが、それ以上を続けようとしなかった。若い2人にも薄々分かりかけている。いずれにしろ、このままでは限界があることを。

ぎこちない空気を残しながら、彼女は夕方の仕事へ行かなくてはならなかった。仕事の最中は敢えて他のことは考えないようにしているが、この日は払っても払っても沢山の悲しみが沸いてきて手に負えなかった。

自分はこんなにも若主人を恋していると思うと息苦しくなる。

何が悲しくても切なくとも、その気持ちだけは持っていていいはずだ——と思う。明日逢ったら謝らなくてはと彼女は決意し、その晩、いつものように神様に少しでも祈りをして眠りについた。

それから時折、あの深い口付けを交わすようになった。最初あれだけ驚いたのに身体は順応

する。少年の望むようにすることが自分に出来る精一杯なのだと思います。後は彼の言うがままにするだけで良かった。

味わうように舌を絡ませ、吐息で呼吸する心地よさ。優しくて穏やかな海に投げ出されているようなゆらめく安堵感。縋り付いていられる安心感。そんなものの全てが好きだった。

彼の手が自分の薄い胸を服の上からそっと触るようになったのも、自然な成り行きだった。大切な、壊れやすい卵でも扱うようなやわい手の感触を彼女は目を閉じて受け入れた。心臓の音が掌から彼に伝わってしまうのだけが怖かった。

少年はそれから先には進もうとしなかった。いつか、その時がきたら僕に全てを預けて欲しいといわれてただ頷いた。自分は大切にされていたのだと、本当に彼女が思い知るのはこれから随分先のことだ。

その時は、彼の体温と呼吸を近く感じていられればそれで良かった。他のこと一切が自分に合わないと分かっている、いずれは住む世界が違うことを知らねばならないことも、全てを忘れていられた。幸福だった。

いつまでもそんな日々が続いて欲しいと願っていたのは幼い証拠だったろうか。彼女は主人の家業については全く知らなかった。綿花の不作や麦の不出来から重なった借財がかさみ、軋んでこの家を押潰してしまうまで、その暗い足音を聞くことなど出来なかったのだ。

ある朝に全ては消えていた。今までのことが夢のように。

最初に不審に思ったのは、いつもの時刻に料理人が来なかったことだ。料理人は几帳面な性格の初老の男で、時間には正確だった。準備が少しでも出来ていないと不機嫌になったから、彼女はいつでも彼よりも早く起き出して、厨房の掃除やら言いつかっている下準備やらをしておくのが日課だった。

主人達の起きてくる時間になっても、料理人はやってこなかった。彼女は迷いながら、それでも仕事を優先すべく厨房を出た。準備は整っているから自分がいなくても良いだろうと思ったのだ。

女主人の部屋の扉を叩いても、返答はなかった。まだ起きていないのだろうかと彼女は不安になる。が、絶対に起こせといわれていない日は主人達の眠りを妨げるべきではなかったから、彼女は首をかしげながらも馬小屋へまわる。餌をやりブラシをかけておくのも彼女の習慣だった。

馬達だけは相変わらずで、いつもの世話係が来たことを理解したようだった。獣特有の温かさに触れながらブラシを丁寧につけ、蹄鉄の具合を見、餌をやる。それが終わって館へ戻ると、先程まで誰の気配もしなかった屋敷の中に人の気配があって、彼女は心底から安堵しながらそちらへ歩いた。

だが、そこにいたのは見知らぬ男達だった。今まで彼女が触れたことのない、どこか薄暗い雰囲気を持っている。背負う空気が尋常でないことに、彼女は怯えて立ちつくした。

男達のうちの一人が彼女に気付いて振り返った。ああ、と軽く頷いて歩み寄ってくる。数歩あらずさって彼女は足を止めた。圧倒的なものに吞まれてしまったように、身体が動かない。

男は彼女を覗き込んでこの家の娘か、と聞いた。彼女は首を振った。家付きの奴隷かと聞かれてそれにはようやく頷く。男はそうかと頷き、来るように手招きした。

連れて行かれた先はこの家の一番に良い居間で、そこには自分と同じく奴隷階級の者たちが集められていた。どうやら自分が最後であるらしかった。一緒に座るように促されて彼女はいつも可愛がってくれた母親替わりの中年女の隣へ腰を下ろした。

「どうしたんでしょうか」

そっと聞くと、女はぎゅっと渋面を作って囁き返してきた。

「旦那様が、破産なさったらしい。夜のうちに現金と宝石だけ持って逃げたんだって」

「ハサ、ン……？」

ぽかんと彼女は聞き返した。耳慣れない言葉だった。そうだよ、と女は溜息になり、これからどうなるのかねえと呟いた。彼女はまだ良く分からなかった。

前の晩に眠るまでは特に変わったことなど何もなかった。主人一家はごく普通に過ごしており、ごく普通に就寝したはずだ。一夜が明けただけで劇的に何かが変わることなど感覚として馴染まなかった。

それに、と彼女はそっと周囲を見渡す。少年はどうしたのだろう。一緒に行ってしまったのだろうか――自分を置いて……置き捨てて。

それに気付いた瞬間、目の前が暗くなった気がした。同時に鼓動が大きく激しく打ち始める。主人の破産という事実よりも、少年に会えなくなったことの方が彼女にとっては重大だった。捨てて、と呟くと唇ごとが震えだした。ようやくその意味を全身で理解したのだ。

屋敷の中を我が物顔に検分している男達はどうやら債権者であった。主人一家が持ち去った軽量の宝石類などは諦めて、この館にある絵画や骨董、それに勿論土地と屋敷全て含めての金額の打算に余念がない。半日ほどかけてそれを終えるとそれぞれ荷造りをするように言われた。

この屋敷を出て行かなくてはならないのだと彼女は悟った。この屋敷に付随するものは全て処分して金に換えるのだろう。奴隷というのは物と同じだ。自分たちもどこかへ売られていくはずだった。

そのことに対する嫌悪や拒絶は、自分でも驚くほど少なかった。どこに行っても仕事の内容まではそう変わるまいという達観に似た諦めであったかも知れない。早朝から深夜まで、沢山の仕事に手を染めて身を粉にして働くことに今更抵抗はなく、だからどこへ売られていっても大丈夫だという確信のような物があつた。

荷造りをしに一度自室へ戻ると、夕日が丁度窓から腰台にまっすぐ差し込んでいた。落ちかけた西日の淡い灯火色が、硝子の小鳥に映えて切なくなるほど綺麗だった。

若様、と呟くと微かに嗚咽が上がってきた。住み慣れた屋敷を出ていくことよりも、どことも知らぬ土地へ行かされることも、そんなことはどうでも良かった。

自分をまっすぐに見て笑ってくれた優しい瞳が二度と得られないのだという悲しみだけが、彼女の全てだった。

僅かな時間を泣いた後、小さな袋に彼女は簡単な着替えと両親の写真と、硝子の小鳥を入れた。これに詰められるだけだと渡された袋は酷く小さくて、それだけを入れると他の物は諦めるしかなさそうだったのだ。

荷造りを終えて階下へ降りると、既に他の女達は馬車に乗り込んで行くところだった。その最後に加わろうとした腕を、債権者の男が掴んで首を振った。

「お前さんはこっちだ、いいな」

彼女は素直に頷いた。出ていく馬車に乗っていた女たちが彼女に向かって手を振り、何か叫んでいたがよく聞こえない。困惑したまま傍らの男を見上げると、男の方は彼女に何かを答える気はないのだろう、黙って首を振り、別の馬車に乗るように促した。

他の奴隷達と別れた先の旅路は、そう長くはなかった。

馬車で僅かに北へ2日、見えてきた巨大な城壁に彼女は目を見張った。遠くから見れば距離感さえ分からなくなりそうな、高く分厚い壁が街道筋の遙か先に立っている。呆然とそれを見つめていると、あれが帝都だと債権者の男がつまらなそうに言った。

「帝都……ザクリア、ですか……？」

それは何かの話にしか出てこない、華麗で風雅な幻であった。美しく着飾った人々が行き交い、目に美しい通りが並び、昼間の明るい光の下ではきらめき夜の淡い灯火の中では幻想に揺れるはずの、夢のような都。

だがそれを包むはずの城壁はあまりにもいかつい色をしていた。

中に入れば尚更落胆は激しくなった。確かに色を揃えたタイルや繁った街路樹などの優しい光景ではあるが、そこにいる人々はごく普通で、話に聞いていた華やぎとはまるで違うことを分からざるを得なかったのだ。

だが、流石に帝都というべきだろう。その人波も商店の数、通りの数さえも圧倒されるような奔流であった。それによく見れば歩いている人々の服装がどこことなく垢抜けているし、化粧も地味ではあるが上手い。少女達の明るい美しさは同性であっても目を奪われた。

馬車は蜘蛛の巣のように張り巡らされた街路を抜けて、迷わずにどこかへ向かっているようであった。窓から見るもの全てが珍しく、彼女はじっと外を見続けた。

やがて馬車が止まり、降りるように言われて彼女は従った。周囲の様子は最初に帝都に入ったときよりも格段に薄汚い。恐らく下町と呼ばれている区域であろうと察しは付いた。

男に手を引かれて街の一角のアパートに入っていく。誰かの家だろうかと思ったら中には帳簿を付けている男が一人いて、どうやらそれは事務所であるらしい。奥の部屋には更にもう一人男がいて、こちらはやはり書類の整理であるようだった。しばらく男達が話しているのを聞き流し、彼女は窓の外の帝都の光景を見つめる。季節は盛夏をようやく越したばかり、陽射しはまだきつい。光の反射が作る路地土の白い輝きと、建物の落とす濃い影がそれを能弁に語った。

小鳥が枝にとまり、枝がしなる。もう一羽が横へ並ぶ。ついばみかわす嘴の仕種に彼女はふと胸の辺りを押さえた。そこには少年から貰った銀の紋様版が下がっている。一所懸命に自分が刺繍した硝子の小鳥たちのタイは、一体どうしたのだろう。彼は持っていつてくれただろうか。私が、あの人の抛り所に小鳥を持ってきたように。そうでないなら悲しかったし、そうしてくれたならなお、悲しかった。

彼女が唇をきゅっと結んで下を向いたとき、男達がじゃあ、と別れの挨拶を交わしたのが聞こえた。一緒に出ていこうとした彼女の腕を、事務所の男が掴んだ。男の手は酷くひんやりしていた。

「お前は残るんだよ。……暑いかい？ 冷たい物でも飲むかね？ 少し休んだらお前の行く先を決めなくてはいけないが、なあに、今日の夜にはお前専用の寝台でぐっすり眠れるようになるともさ」

宥めるような声音が優しく聞こえた。債権者の男はぶっきらぼうで、彼女に対しても殆ど口を開こうとしなかったから、こうした何気ない会話で安堵もしたのである。彼女がほっと唇を綻ばせると、男は良いね、と笑った。

「お前は決して美人じゃないし、これから先飛びきりになる保証はないが、笑った顔がとてもいい。素直で素朴で、まっとうな感じがする。なに、化粧の方法さえ覚えればすぐに美人に化けられるようになるさ」

彼女はそれにも少し笑う。自分が人目を引く美人でないことは分かっている。女の子は残酷なほど、容姿の差は幼い頃から出てしまうものだ。当人の努力などで追いつく部分もあるという希望を与えようとする男の言葉はいたわりに満ちていた。

日が落ちる前に、と男に促されて彼女は事務所を出た。乗ってきた馬車の影はもうどこにもなかった。しばらく歩くと地面から生えたように立つ、二本の柱が見えた。そこを通過すると周囲の様子は切り替わるように変化した。

今までもそう美麗とは言えない町並みであったが、そこは更に汚かった。煤けた赤い格子の店棚と、やけに毒々しい色の金泥の紋様だけが目に付く。古びた塗りや剥げかけた模様がみすばら

しく、どこか生々しい。

これも帝都の一部なのだろうかと思うと足が竦んだ。怖かった。怯えた様子の彼女に男は宥めるように笑った。

「この町はお前と同じで、素顔はあんまり美人じゃないんだ———だけど、夜になってちゃんと化粧をすれば違う、すぐに分かるよ」

男の朗らかさに押し切られるように、彼女は頷いた。男はさあと殊更に明るい声を出して彼女の手を引き、柱をこえてまっすぐに続く通りに面した大きな格子棚の店に入っていった。

中は女達ばかりであった。美しく着飾った衣装は何故か揃ってみな赤い。意匠は少しづつ違うのか、金糸でかがられた刺繍の模様が多样だ。女達は一斉に彼女を見たが、誰も近寄ってこようとはしなかった。奥から中年よりも多少年齢のいった女が出てきて彼女をちらと見、そしてすぐに首を振った。

「駄目だよ、若い娘が欲しいとはいったけどね、もうちょっと見栄のするのでないとうちにも格ってものがあるんだから」

はっきりした拒絶に彼女は僅かに怯んだ。それに追い打ちをかけたのは、女達の一斉のささめきのような笑い声だった。男は舌打ちし、彼女の手を引いてその店を出た。

次に行った店でも、その次でも、殆ど異口同音に出てくるのはもっと綺麗な娘でないと駄目だという拒絶だった。彼女は次第に重くなってくる足を引きずるように、自分を連れて歩く男についていった。

5軒目に断られたとき、とうとう彼女は啜り泣き始めた。前から自分が美しくないことくらいは知っていた。人よりも少し大きい瞳だけが特徴の、何の取り柄もない平凡な顔立ち。あの少年の優美さに気圧され、今日出会った沢山の女達に圧倒されるだけの惨めさをなんと表現して良いかさえ、分からない。かぼそく泣き続けることだけが出来た。

男は足を止めて溜息になった。

「泣くな泣くな、あのかあさん方はちょっと見る目がないね。俺はお前さんがきつとよく稼ぐ娘になると思ったから良い所へ連れて行ったのに」

それでも嗚咽の止まらない彼女に、男は明るく笑いかけた。

「いいかい、確かにお前は目を引く美女じゃない。それは分かってるだろう？」

諭すような穏やかな声音に、彼女はこくりと頷いた。良い子だねと頭を撫でられて、自分がとても幼くなった気がする。

「だが、お前には何かがある。———自分の容姿が気になるかい？ そばかすがいやならあまり日に当たらないことだ。もう少しちゃんと肌をお磨き。お前は肌が白いし、白い肌に黒髪はよく映える。ねえさんたちに化粧の方法を教わって綺麗にして着飾れば、お前を気に入る客はたくさんいるだろうよ」

彼女は頷いた。男の言葉は慰め以外の何でもなかったが、自分の気を休めてくれることの方を優先したのだ。ぎゅっと唇を噛んで嗚咽をどうにか飲み込んでいると、男がやあ、と明るい声を出した。

「ほらごらん、タリアに灯りが入る」

言われて彼女は顔を上げ、微かに吐息を漏らした。

遠く晩鐘が響いている。それが合図なのだろう、通りに面した赤い格子の店棚に一斉に篝火が焚かれていく。

炎の色が街角に立ち始めた途端、先程まで汚らしく古びた色を呈していた赤い色が沸き上がるように濃厚になった。金泥がきらきら、灯りに映える。通りごと朱泥に浸かったように赤い。赤い中に黄金の川が流れるように、金色の沢山の紋様が踊る。

化粧を終えると先程男が表現した意味が分かった。

「すごい……」

思わず漏らした呟きに、男はそうだろうと満足そうに笑って彼女の手を引いた。大通りの店を諦めたのか、男は路地の方へ入っていく。路地といっても同じように明るく火が焚かれており、通りはやはり濃い赤に染まっているのだった。

最初に連れて行かれた店よりは小さめの店の扉を男は押した。今までと同じように奥から出てきた中年の女は彼女をじっと見つめ、ふうん、と首をかしげた。奥へ上がるように言われたのは初めてだった。個人の部屋というよりは応接室であろう。そのソファに座るように言われて従うと、女は改めて彼女をまじまじと見つめた。

先程の女達の淡い笑い声が耳に戻ってきて、彼女はつい俯く。女はすかさず、顔をお上げと言った。強い語調に僅かに身をひくと、女は今度は苦笑になった。

「……どうだいかあさん、悪くはないと思うんだが」

男の声に女はそうだねえとゆるく笑う。かちかちいうのは火種石だろう。この女は煙草のみらしい。

「悪くはないが。化粧しだいかね……ねえ、お前、名前は」

彼女はやっと顔を上げた。名を聞かれるのは元の屋敷を出てから初めてだった。

「……リィザ、です」

「ふうん、『矢車草』か。可愛い名前だ」

父の命名を誉められて、ようやく彼女は少し笑った。その控えめな笑みを見て、今度は女は大きく頷いた。

「なるほど、笑うとちょっと違うね……いいだろう、貰うよ」

男と共に彼女もまたほっと息をついた。男を帰した後で、女はこちらへおいで、と手招きした。彼女は素直に女の側に寄った。化粧の匂いがぬくやかで、安堵を呼び起こした。

「ここがどんな店だかは分かる？」

聞かれて彼女は首をかしげる。入ってきた一階には酒と料理の匂いが満ちていたから料理屋ですか、と聞くと女は困ったように笑った。

「違うよ。料理も酒も出すが、本当の売り物は娘達だね」

意味が良く分からない。彼女は急に不安になって、あの、と細い声を出した。女は軽く頷き、あたしのことはかあさんとお呼びと付け加えた。

「うちに限らずどの店でも、女将はかあさん、遊女は娘、先に入った方がねえさんで後から来たのがいもうとだよ、覚えておおき——で、何だっけね」

「あの……娘たちを売るって、どういう意味ですか……？」

女将はその質問に暫く考えていたようだった。彼女は首をかしげて自分の雇主となった女を見つめた。何だか、肝心の部分にもやが掛かったようになってしまって良く分からない。困惑しきって俯くと、女将の生温い吐息が聞こえた。

「.....お前は何も知らないんだね。男と女のことは分かる？」

微かに彼女は赤面しながら頷いた。一応のことは初潮を迎えたときに、女中頭から聞いている。ただそれはいつか結婚したらという注釈付きで、決して売り物になるようなことだとは思われなかったのだ。

少年のたどたどしい手の動きが不意に身体の奥から戻ってきて、彼女は震えた。あれだって怖かった。相手が彼だからじっと耐えていたというのに――

そこまできて、やっと彼女ははっとした。自分の仕事は何であるのかを理屈でなく悟ったのだ。

微かにあげたはずの悲鳴は喉で凍り付き、掠れた吐息にさえならなかった。

「わ、わ、私、私は、下働きだと.....」

言葉までが小刻みに震えていて、既に文脈にさえならない。女将は首を振り、やや困ったような表情で彼女の頬を撫でた。

「ここに来るまで誰もお前に説明しなかったと見えるね――まあいい。お前の仕事は客と寝ることだ。ここの仕組みなんかが分かるまでは暫く下働きの真似でもしてもらおうが、いずれ、そうしてもらおうからね」

言葉を誤魔化したりしないのが女将なりの優しさだと、彼女が気付いたのはずいぶん後のことだ。この時は女将の一言一言が突き刺さるように耳を打つだけ、ひどくそれが胸に痛いだけであった。

お願い、と彼女は女将の袖を掴む。その手はどうにもならないほど痙攣し、白く蠟けていた。

「それだけは、お願い、他のことなら何でもします、本当に何でも.....」

「何でもする、何てことを気軽に言うんじゃないよ。幾ら泣いてもこれは決まったことだからね、恨むならお前を売った相手にしな.....でもね、いくら恨んだところで何も変わりゃしないんだから、もっと他のことに頭を使う方が得だよ」

そんなことを言って女将は彼女の睫の辺りをそっと撫でた。押されるように目を閉じると、微かににじんできた涙が目の周辺を濡らした。女将の指がそれを丁寧にこそぐ。指先の熱が優しく思えて、彼女はお願いです、と胸の底から声を絞り出した。

「私、好きな人が.....」

「そんなのはどの娘も同じだよ」

「でも約束を.....」

「みんなそうだよ。お前だけ特別というわけにはいかないんだ、分かる？ あたしが今ここでお前を可哀相だと思って赦せば今まで同じ事を言った娘たちにどう言えば良いんだろうね？」

それは、と言ったきり彼女は黙った。女将の言葉に何かを返したいとは思うものの、何を言っても良いのか見当がつかない。たった一つ分かることは、自分の論理では女将に太刀打ちできないということだけだ。

彼女は俯いた。女将の袖を掴んでいた手がそっと外されて、しっかり握り込まれた。

「泣くんじゃない。いいかい、泣いてどうにかなることなんて、世の中には無いんだよ……」

それに頷いたかどうか、彼女ははっきりと覚えていない。顔を覆って泣き出したのは確かであったが、その後のことは曖昧なままだ。

女将がゆったりした優しい声で、気が済むまで泣けばいいかと言ってくれたのは呆れていたのかいたわりなのか、そんなことも判別する気力無く、彼女は泣いた。ひたすらに泣き続けた。

——これが彼女、リィザ＝ラグロウのタリアでの第1夜となった。

窓をいっぱいに開けると海からの風が入り、療養所の美しい緑の彼方に海が見えた。海の表面には沢山の船舶がある。

シタルキアの第2の都ミシュアは建国伝説の多く残る土地柄、それに付随して聖都の名称を与えられている美しい都市だが、沿海州を挟んで南部大陸との交易中継点として富を孕む場所としても有名だ。

行き交う船は貨物船か、それとも定期航路の客船か。窓から沢山入り込む明るい陽射し、遠く見える海、目の下の緑。

「いい部屋で良かったわ」

クインは明るい口調でそんなことを言い、寝台に半身を起こす母親を振り返って微笑んだ。介添えの看護婦が遮蔽幕から出て手を洗い、何かあれば呼ぶようにと言いついて残して消えていく。母親は遮蔽幕の向こう側で心配そうに目を伏せた。

「お前、お金はどうしたの……ねえ、怒らないからちゃんと説明して頂戴」

「お母さん」

クインは宥めるように笑って膝丈のスカートを揺らし、遮蔽幕のすぐ脇に出してある小さな椅子に座った。

そっと指先で触れる遮蔽幕は透明で、絹のような不思議にぬめらかな肌触りだ。黒死病は空気感染するため、患者の呼吸から発見される感染菌が一定値に下がるまでは遮蔽幕を取り去ることが出来ない。

だが、患者とふれあうことは出来た。遮蔽幕といっても殆どその存在は感じない。虹色の光沢を放つ薄い何かが寝台を中心にして蚊帳のように下がっているが、お互いに身体を寄せ合えば幕越しにでも体温を感じることも、勿論会話も出来た。

クインは母に手招きする。母の耳元でそっと囁く言葉は、最初から考えていた言い訳だ。「ちょっと魔導で幻覚作用をつけた酒を馬鹿みたいな値段で媚薬ですって売ったんだよ。詐欺だけど大丈夫、幻覚は見るように調整してあるから気付かないって」

くすくす、少女の声音に立ち返ってクインは笑い、肩をすくめて見せた。

母親はそれでもまだ不安そうに彼を見ている。いいのよ、とクインははっきり言った。部屋には音声官が通っているから、用心するにこしたことはなかった。

「いいのよ、本当に心配しないで、母さん。私は私で上手くやってるわ。今日だってちゃんと休暇で来てるんだから」

上級学校や中等学院を受験する子供達のための塾が帝都には幾つかある。その内の一つに教師として潜り込んだのだと母には説明してあった。全てを話す必要など、どこにもなかった。正直になれば、母親を嘆かせ悲しませるだけだから。

そう、と母はそれには頷いた。少し痩せてしまった首筋の細さにクインは痛みを覚えて目を細め、そして力無い自分を憎くさえ思った。もっと早く何とか出来たはずだという思いもあるし、どうにか間に合ったという安堵もある。何を引き換えにしたかなど、もうどうでもよかった。

ライオンに大半のことを教えられて初めて他の男と寝たのも、その時の僅かな嫌悪も最早遠い。身体は否応なしに慣れて行くし、心は最初から硬く目を閉じて気に入らない事実は見ないこと

にしまっている。

ただ、何か――とても重くて大切な何かが胸から欠け落ちてしまったように、落ち着かない。ライアンにもチアロにも、苛立っていると指摘されて尚更怒鳴り散らしてしまった……これは帰ったら謝らなくてははいけない。

僅かについた溜息に、母の視線が向いた。何でもないのとクインは殊更明るい笑顔を作り、本当にいい部屋ね、と話題を転じた。そうね、と母は笑った。

「夜になるとミシュアの都の灯りが綺麗よ。お前は今日は帰らなくてはいけないの？」

「ええ。あの……明日の朝早くから補講があるから……」

微笑みながらクインは返答し、今夜の仕事について内心で溜息になった。ライアンは夕方までには戻るようにと言った。魔導による空間移転だからゆっくり3数えるほどの時間があれば平気だが、空間移転はひどく消耗する。夜は夜で別の意味において消耗するのだから、そのための休養を入れるとするなら時間は残り少なくなっていた。

遮蔽幕越しに、クインは母の肩に頭をのせた。

「はやく、良くなってね……遮蔽幕が取れたら、散歩くらいなら出来るんでしょう？」

呟いた声は、ひどく寂しげだった。母の微笑む吐息が耳元でした。

「お前は昔から本当に寂しがる子だったわね……愛してるわ、私の可愛い子。寂しがらないで、私はいつでもお前を一番に思ってるから……」

幕越しに、頬に軽く唇が触れた。クインは頷き返し、母の頬に同じように返した。腕を伸ばして瘦せてしまった母の手に手を重ねると、母は頷いた。

言葉数を少なくしても通じ合うものはまだ残っているのだった。

「寂しいときは母さんを思って頂戴。きっとお前が想っている時間、私もお前を想っているから。でもね、可愛い子――」

母はクインの頬を愛しげに撫でながら切なげに笑った。

「いずれはお前も誰か大切な人を見つけなさいね……お前を心から愛してくれる人、お前が本当に愛する人に出会えば、きっと寂しさも消えるから」

クインは曖昧に笑った。愛という言葉は彼からは遠く隔たっていて、とても現実味のあるものではなかった。

「私には母さんだけよ」

クインは優しく頷きながら言った。

「母さん以外の誰のためでも死ねないし、生きていけな……」

そんなことを囁きかけて、クインは不意に喉を詰まらせた。

男達に身体を開くようになってから、確かに自分はおかしい。こんなこと、今までなかったのに。

肩を震わせていると母がごめんね、と呟くのが聞こえた。いいえ、とクインは首を振るが顔は上げられなかった。母の顔を見て甘えてしまえば一気に決壊してしまうものが怖い。

ごめんね、と母が同じ事を言った。

「寂しいのね、ごめんね、お前を本当は抱きしめてキスをしてあげたいのに」

「母さん……」

「心の傷にはキスの薬が一番効くのに、ごめんね、私の可愛い子……」

クインは唇を噛んだまま、首を振った。母の顔はまだ見られなかった。泣くな、と自分を叱咤する。

泣くな——化粧が崩れる、から。クインはのろのろした仕種で首を振り、何度も深呼吸をしてから目元を拭った。考えすぎるのは良くない。それは先日ライアンに指摘されたことでもあった。

（あまり自分の中を自分で探ろうとするな。お前は自分で苛立っている）

その時何と返事したかは忘れてしまった。多分、まともに答えていないだろう。苛立っている。それは分かっている。慰められるとするなら誰かの真剣な愛情でしかないことは薄々勘付いてはいたが、これほど自分でひどいものだと思っていたのかも知れない。

母の愛を疑ったことも信じなかったこともない——けれど。多分、身体を結ぶことを知ってしまったらそれだけでは最早足らないのだ……

黙っているクインの肩を、母が丁寧にさすった。それさえも全てが遮蔽幕を挟んでいて、切なかった。

「お前のことを愛してくれる誰かを見つけてね……いつか、きっとそれで良かったのだと思う日が来るから……」

「母さん」

クインは母にだけ聞こえるように、小さく低く呟いた。

「母さんのこと、本当に大切に思ってる。母さんが俺を愛していると言ってくれるように俺も母さんのことを愛してる。他に何も要らないから、だから早くよくなって、俺を一人にしないで……」

母はそっと笑ったようだった。クインは自分の言い草に曖昧に首を振った。苦笑がこぼれた。「……また来るわね。母さん、それまで元気でいてね。来月にはまたお休みがもらえると思うから」

少女の仕種に立ち返ってクインは窓際に置いた帽子と鞆を取った。長居しすぎると全てを母に告白したいような気分になってくる。罪悪感のようなものなのか、母が何も知らないと思うほどに背筋を嫌な汗が通っていく気がして居たたまれないのだ。

母の視線が無垢だからかもしれないとクインは思う。その無垢に耐えられないほど自分が情けなくて汚い生き物であると念を押されている気がしてたまらなかった。

母に飛びきりの笑顔を作って見せて、クインは廊下へ出た。やっと重たい溜息がこぼれた。

自分の嘘を母はどこまで信じているのだろう。疑われていないとするなら上首尾として良いはずだったが、素直に喜ぶ気にはならなかった。

唇をきゅっとしめて廊下を歩いていくと、丁度担当の医者と行き違ふことが出来た。母をよろしくお願ひしますと頭を下げると、医者は慣れた仕種で頷いた。患者の家族の言うことなど、みな同じだ。

「経過はいいようだから、来月の面会日には遮蔽幕は下ろせると言うからね」

はいと深く頭を下げると、医者は頷いて傍らを過ぎていこうとする。その背を先生と呼び止め

、クインは駆け寄って鞆の中から50ジルの金貨を3枚包んだひねりを引き出して医者の手にも素早く握り込ませた。

「治療費のこと、母にはくれぐれも内緒にしてくださいね」

医者は何事もなかったように、金貨を懐へ入れてそうだったねと返答した。

「君のような熱心な家族を持つと、お母さんも幸せだね」

それが嫌味かどうかは微妙なところだった。クインは苦笑し、くるりと踵を返して廊下を歩いていった。

転移してきた地点まで戻って、再びタリアまで空間転移を行わなくてはならない。詠唱の時間とその後の休養の時間を考え合わせれば、あまりゆっくりしている暇はなかった。

どれくらいの期間を泣き暮らしていたのか、リィザは数えていなかった。

悲しい、と思う。思えば涙が出る。切ないとも苦しいとも怖いとも思えば女将が呆れるほど容易く涙がこぼれてくる。自分はどこかがおかしくなってしまったのではないだろうかというリィザは泣きながら思い、でも、と強くその度に胸の間にひっそり収まる銀の紋様版を握りしめるのだ。

——会いたい。きつく目を閉じれば、瞼の裏には遠い面影が微笑んでいる。彼の優しい手がそっと触れた以上のことを、更に進んだことをこの身体に加えるのかと思うだけで、身体の本心から冷える。未だに知らぬ領域への本能的な恐れと共に、根深い嫌悪が身体を縛り上げてしまうようで動けない。凍り付いてしまった四肢の内側の、泣き続ける心にだけ、血が通っている。

リィザは自分の首から下がったままの紋様版を硬く握りしめる。これをくれたときの少年の微笑みや紋様版に漂っていた彼の気配を思い出したいと願いながら。

「——神様……」

喉哽れてしまったような声でひたむきに繰り返す言葉は同じだ。助けて欲しいとそれだけを願っている。いつもと同じ言葉を呟くと、また目の奥が熱く潤んできたのが分かった。

その前日まで、彼の様子に全く変化はなかった。リィザは予兆さえ感じることが出来なかった。どこへ行ってしまったのだろうか、何故だとか、そんな疑問は既に流されて見えなくなってしまう。

無事でいるだろうか。今、何をしているのだろうか。その二つばかりが交互に脳裏を浮かんでは沈んだ。

少年は両親と共に行ったのだろう。債権者が押し掛けることを思えば親戚筋は危険だし、親の元に子があるのが自然だ。それに、親を捨て家を失った上でリィザー人を連れて逃げおおせることは不可能だ。

もう会えないだろうと薄く感じていることを、リィザは自分で認めたくなかった。そう思ってしまったら最後、本当に再会できない気がして怖い。明るすぎる未来ばかりを描けたわけではないにしろ、少年との恋が彼女を支えていたのは確かだったから。

少年の名を呟き、リィザは自分の唇をそっとなぞった。そこにいつかあった優しい温もりを取り戻したかった。

微かに熱っぽい吐息を落としていると、与えられた小さな部屋の扉が叩かれた。外から呼ぶ声は女将の声であった。慌てて扉を内側に開くと、女将はリィザの顔をちらと見て大仰に肩をすくめた。

「また泣いていたと見えるね。よくもまあ、そんなに泣くことがあるものだ」

声音はさほど不機嫌でもなければ苛立ってもいない。呆れているのだ。リィザは俯き、小さく済みませんと呟いた。女将は溜息になったようだった。

「泣いてたって何も変わりゃしないんだって、何度言ったら分かるのかね、この子は」

リィザはそれには返答をせず、ただ更に深くうなだれた。女将はいいよいいよと軽く言い、彼女の肩を数回叩いた。

「それはいいから、今日こそはもう働いて貰うよ——そんな怯えた顔をおしでないよ、いきなり不意打ちで水揚げということは私は嫌いだからね。お前がちゃんと事情を飲み込んでくれるの

が一番いいんだ」

一瞬強張った表情をリィザはやっとゆるめ、黙って女将を見た。騙しうちにはしないという言葉の信じる程度には、女将の人為が飲み込めてきている。そうしない、と彼女がいったならそれは本当だろう。

「―――仕事……ですか」

遊女でない者の仕事というものが何であるのか良く分からない。リィザが困惑したように首をかしげたのを見て、女将は軽い溜息をついた。

「今日は若い連中の貸し切りになってる―――他の娘達のお使いと、下準備をね。字は大丈夫って言ってたから、宴会の給仕もしてもらうよ」

てきぱきと指示されて、リィザは頷いた。使役奴隷であったせいなのか、他人から指示を受けると無条件に頷いてしまうところが彼女にはあった。

遊女達から買い出しの希望を聞き、それを簡単な書き付けに起こしてリィザは妓楼を出た。一人でそこを出るのは初めてだった。泣き暮らして涸れて死んでしまいたいと思っていた頃に数度、女将が外へ行くときに同行している。

女物の小物や化粧品を扱う店はタリアの中に分散しているが、大抵は妓楼に出入りする特定の業者がいる。彼らの持ってくる見本帳をめくって遊女達は自分の欲しいものを指定するのだ。店の方には女将と共に足を運んでいるから地理は問題なかった。案内ということだけであれば。

店はタリアの最浅部周辺にある。頼まれた小物の名を店員に告げて店先の椅子に腰掛ける僅かな間、店の硝子窓から目をやればすぐそこにタリアと通常の世界の区切りである二本の柱が立っているのだ。

―――あそこを抜ければ。リィザは僅かに瞬きをする。

あの2本の柱を抜けてしまえばそこは彼女が以前住んでいた世界だ。僅かに息を潜めて駆け抜けてしまえばあの温かで幸福だった日々が待っているような錯覚さえ呼び興ってくる。それは幻覚だ。幻覚だと、自分の夢想だと、頭のどこかで弱々しく囁く声を聞くことが辛い。辛さはすぐに痛みが変わって胸を貫く。細く。

リィザは微かに唇を噛み、柱から視線をもぎはなしてじっと俯いた。帰りたかった。自分の帰還できる場所などもうどこにもないと知っていても、ここではないどこかへ帰りたかった。逃げ出したいという衝動が僅かに足下から忍び寄ってくる。

「……お嬢様？」

強く呼びかけられてリィザははっと我に返った。注文の品を入れた籠を持った店員が、所在なく立っている。お嬢様というのが自分のことであると気付かなかったのだ。慌てて立ち上がり、中身を確認して外へ出る。代金は商店から月末にまとめて請求が来るのだ。

外は薄暮にかかり始めていた。宴会は通常日が落ちてからだから、下準備をも手伝うならばもう帰らなくてはいけない時間だ。けれど、どこへ。

リィザはじっと柱を見つめる。あの向こう側、僅か数十歩の先に走り出せば助かるかも知れないという囁きは、先程よりも遙かに大きく、強かった。

帰りたい。呟いた瞬間に、脳裏に再び恋しい面影がよぎった。帰りたい。帰りたい、あのなだらかで平和だったあの日々へ。あの人の腕の中へ。身体の温度で癒されて幸福だと信じていられ

た遙か、――遙か、遠い過去へ。

帰りたいと繰り返して呟いたとき、自分の声が低く濡れているのに気付いた。逃げ出したいというよりは、それは遙かに回帰衝動に近かった。今居る場所がどうしても自分の身に合わない、その現実からも目を背けてしまいたい。

帰りたい。帰りたい。その言葉だけが胸の底から、心の奥から、ただひたすらに込みあげてくる……

ふらりと最初の一步が出た。いけない、とリィザは思う。だがその制止はひどく弱くて自分を止めてくれる力にはなり得なかった。

何かに酔ったようにふらふらと柱の方へ行こうとした、その時だった。

「――お前、見習いだろう？」

低い声と共に肩に置かれた手が、リィザの意識を現実へ引き戻した。ぎくりとして立ち止まり、それから恐る恐る振り返るとそこにいたのはまだ年若い男であった。左側の袖が肩から軽く風になびいている。そこに中身がないとすぐに分かった。

リィザの視線がそこへ行ったのに気付いたのか、男は苦笑した。

「左腕は2週間くらい前に無くしたんだ。生えてくるのを待ってる」

まるで財布を落としたのだというように軽く言い、男は右手でリィザの腕を掴んで僅かに自分の方へ引き寄せた。

「……どこかの妓楼の見習いなんだろう？ あの柱を越えたら酷いことになる、あまり遅くならないうちに自分の店へお帰り」

「あの……私」

何かの言い訳を探して唇を動かし、リィザは俯いた。ここから逃げ出したいという瞬間の思考を、まるで見透かされていたような男の口振りに微かに恐れが忍び寄ってくる。女将に知れてしまったらと思うと、叱られるという恐怖よりも信頼を裏切ってしまったという罪悪感の方が胸を刺した。

リィザが黙っているのに男はゆるく笑い、ちゃんと帰れよ、と念を押した。

「その白い衣装は妓楼の見習いの印だから、あそこを出て1日もたたないうちに掴まるよ。タリアの自警衛士ならいいけど、脱走した女を専門に狩る連中だっている。そんな連中に掴まったら終わりだ」

淡々と語られる内容に、過剰な恫喝は感じられなかった。だからこそそれは事実であると信じることが出来た。リィザは僅かに身震いし、尚更深く俯いた。

今リィザが着ているのは白い簡素なワンピースだ。遊女達の衣装は赤地に金と定まっており、いずれ遊女となるべき見習いは白となっている。それはタリアに店を構える妓楼全体に共通する規範であった。この衣装はそうしたときの目印でもあるのだ。いつか客を取る身であることを報せるための、どこかの妓楼の抱える身であることを教えるための。

リィザは男に深く頭を下げた。逃げられないのだと思った瞬間にまた、涙が上がってきそうになったからだ。それを無理矢理飲み込もうとしていると、男が大丈夫か、と宥めるような声を出した。

「道が分からなくなったのなら、送っていこう。お前はちょっとぼんやりだな」

こつんと額を指で叩かれて、リィザは首を振る。迷っていたのは道ではなかった。

「大丈夫です。あの……あ、ありがとう、ございました……」

それだけを言い捨てるようにして、リィザはくるりときびすを返した。早足だった歩調がすぐに小走りに変わった。

走りながら息苦しくリィザは目を細める。逃げたかった、帰りたいかった、どこでもいいから投げやりに全てを放擲したかった。それを見透かしていたように、男は自分を呼び止めた。多分、あれも運命だったと思えるほどに。

殆ど逃げ帰るようにして妓楼へ帰り着くと、女将がお帰りと微笑んだ。この場所こそが帰るべき所なのだと念を押されたような気持ちになり、リィザは僅かに切なく目を細めた。女将は籠の中身を簡単に確認するとさあ、と彼女の背をさすった。

「あっちで顔を洗ってあたしの部屋へおいで。化粧と髪を直してあげようね、ご褒美だよ」

「ご褒美……？」

そう、と女将は笑い、下働きの少女にリィザの持ってきた籠を渡して遊女達に中身を振り分けるように言いつけた。少女が頷いて消えるのを待って女将はリィザの頭を丁寧に、優しく撫でた。

「お前はちゃんと帰ってきた——ここへね。良く戻ってきたね。逃げ出したってすぐに掴まるんだってことを、10人に一人くらいは経験するんだよ。お前は逃げなかった。だから誉めているんだ。……お帰り、あたしの娘」

「……私……」

逃げようとはしたんです、という言葉は喉に引っかかって発することが出来なさそうだった。リィザの様子に女将は少し笑い、いいんだ、と簡単に流した。

「顔を洗っておいで。綺麗になれる魔法をかけてあげよう。——今日の宴席はタリアの裏のチェインって辺りに溜まっている若い連中のだから、年齢の近いのも沢山居るよ。気楽に話くらいしておいで」

僅かにリィザは怯む。既に店に上がり込む客としての彼らを見知ってはいたが、彼らは一様に年齢若い者特有の残酷さを持っているように思われた。この店に辿り着く以前に男に連れられて巡った妓楼で聞いた、微かに哀れむような女達のさわめきが耳の奥に蘇ってくる。

僅かに青ざめたのが分かったのか、女将はどうしたの、と彼女を覗き込んだ。

「そんな顔をするんじゃないよ。折角可愛い顔立ちだっていうのに、台無しじゃないか。お前はもうちょっと自信を持った方がいい。だから魔法をあげようと言っているんだから早いとこ顔を洗っておいで」

ほら、と背をつつかれてリィザは頷くが、不安は拭えない。丁寧に顔を洗ってふと鏡を見ても、そこにいるのはいつもと同じように怯えた目つきの痩せぎすな少女でしかない。

黒い髪。黒い瞳。少年はいつも黒曜石のようだとか夜闇の静かな美しさに譬えてくれていた…

…

いけない、と思ったときにはもう涙になっている。これほどまでに恋しい気持ちを抱えてこれから先、どうして生きていけばいいのかリィザには分からない。

だが、今すべきことは明らかであった。リィザは帰りたいという呪文が再び浮かんでこようとするのを押し込め、もう一度、今度は冷静になるために顔を洗った。

宴席というには無秩序な享楽であった。彼らのために用意されたたっぷりの食事や酒も、腹を空かせた獣が貪るように、あっという間になくなっていく。遊女達への戯れも直裁だ。元々遊女の服だから、その衣装は結び目を一つか二つほどただけで簡単に脱がせることが出来るようになっている。半裸に近く剥かれた遊女たちの、それでも華やかに笑い交わす声と相まって1階の食堂と待合室を全てつなげて作った即席の広間は酷い喧噪だ。

それでも彼らはましな方なのだ、と女将に言い含めてもらっていなければ怯えて広間に入ることさえ出来なかったろうとリィザは思う。それほど彼らは無遠慮で、粗野の塊のようにさえ見えた。

(あいつらはそれでも大分ましだよ。あの連中を締めてる頭がうちの馴染みだから、そう無体すぎることはしない――チェーンにもまあ沢山の派閥があるようだが、今日のは正真正銘、チェーン王の宴席だからね。連中も、自分たちの頭の機嫌を損ねることはしないから安心して行っておいで)

チェーン王、と聞き返すと女将は苦笑し、それを少年達の上に立つ少年王の呼び名だと教えてくれた。タリアを束ねているのがタリア王でこれが大人達の王であるとするなら、タリアの中の更に真奥に位置するチェーン地区にたむろする少年達の王はチェーン王であり、即ち少年王なのだ。少年王自らの臨席というのがどれほどの意味や価値を持つのか良く分からない。だが、この宴席に出入りしている少年達の数は一桁ではない。席を持ってくつろいでいるのが十数名いるがその下にもまだ配下がいるようで、おこぼれを貰いに入れ替わり立ち替わり目が回るような人数が行き来している。少年達数は全体で2000人を越す程度と聞いているが、それよりも遙かに多い気さえした。

酒や食事の追加を聞くだけでも目が回るほど忙しい。これが一体どれだけの金額の宴席なのかは知らないが、少年王の懐だとするなら感嘆するばかりだった。

言いつかった酒を持って広間に戻っていく度に、場は乱れていた。男女のことを一応程度に知っていたリィザには刺激の強い光景で、一体どこへどう視線をやったらいいか困惑することしきりだ。戯れ程度に身体をあちこちに手を伸ばしている者、泥酔している者、そして他人の目など気にならないというようにか遊女にのし掛かる者。普段外から内側の遊女達を観賞できるようにと作られている赤い格子には全て簾が降りてはいるが、声は漏れているはずだ。大分ましというのはどこがどう「まし」なのか、女将にもう一度聞いてみたくなる。

リィザはなるべくそうした連中に目をやらないように給仕に専念しようとした。そうやって忙しく立ち働いていれば目に留まらないと思ったのだ。が、それも甘い考えであった。女将が上機嫌に可愛くなったよと誉めてくれた鏡の中の自分は、いつもより更に目が大きく肌が美しく見えていた。魔法といった意味がそれで分かった気もしたが、目立たない方が良かったと少年が腕を掴んで無理矢理座らせたときに思った。

「新入り？　ねえ、水揚げはまだ？　なあ、座って酌くらいしてくれたっていいだろう？」

酔った吐息に思わず顔を曇らせると、少年の癪に障ったのか、いきなり引き倒される。悲鳴さえ出ない。怖くて怖くて、身体全体が凍ってしまったように固まっている。

怯えた獲物の様子に少年は意地悪く笑い、共にいた仲間達に目配せをした。あっという間に取

り囲まれてしまった輪を抜けようとしても、ぴったりと身体を寄せてきて尚更彼らの輪の奥へ押し込められる。

「いいじゃない、そのうち客になってやるからさ……」

そんな呟きが聞こえた瞬間に、腰がぐいと引き寄せられ、ワンピースの上から胸の膨らみが掴まれた。

一瞬走った電流のような痛みに思わずリィザは呻き、慌てて身体をひねった。やめて下さいとやっとの思いで絞り出した声は、彼らの奇妙にはしゃいだ声にかき消されて殆ど聞こえなかった。口を塞がれてがっちり押さえ込まれた身体を、幾本もの手が這い回る。やがてそれがスカートの中へ潜り込み、一番奥の部分をまさぐり始めてリィザは喉を鳴らした。嫌悪よりも遙かに強い恐怖が駆け上がってくる。

ふりほどこうと必死でもがいていると、突然それが止んだ。少年達の嬌声が一瞬止んで、すぐさま怒りの吼音に変わる。離れた手からやっとうすり抜け、リィザは服の裾を掴んでじりじりと後ずさりながら彼らを見つめた。

目に入ったのは少年達の周囲に散らばる氷と、そして遊女の証である赤い衣装の裾だった。

「あんたたち、適当も程が過ぎると良くないわよ」

声はまだ若い。リィザが視線をあげていくと、不機嫌な表情で佇んでいたのは先輩の遊女だった。源氏名はシアナという。きつめの線で構成された顔立ちの、美しい少女だ。シアナはリィザを見て、行きなさいと顎をしゃくった。助けてくれるのだと悟ってリィザはよろよろ立ち上がった。年齢は変わらないと知っているが、既に彼女の方は客を取り始めて3年ということもあって、少年達のあしらいも心得ているようだ。

「――一向こうへ行って、着付け直して、髪もほどいておいでよ。こんな連中に着飾るのも馬鹿馬鹿しいったらありゃしないわね」

斜な口でそんなことを言い、シアナはふん、と鼻を鳴らした。その言い草に少年達が殊更に怒り立てようとしたとき、更にその後ろから低い声がした。

「見習いに手を出すくらいなら、女を取れ。馬鹿だな、何のための妓楼だと思ってる」

新たに出現した男の声に、少年達が一斉に沈黙した。ちらちらとお互いを俯いた視線で見交わし合っていたが、やがて一人が済みませんでした、と呟いたのが聞こえた。男の声には自然な威圧が備わっていた。これがチェーンの王だろうかとリィザは声の主を目線をやり、軽い驚声をあげた。それはつい先程彼女の衝動を止めた男であったのだ。

男の方はそれでリィザに気付いたらしい。ああ、と小さく笑った。

「なんだ、お前か。……大丈夫か、とお前に言うのは二度目だな。ここの妓楼の見習いだったのか」

見習いかと問われれば頷くしかない。こくりとすると男は苦笑した。ねえさんにもお礼を言いなと付け加えられてリィザは助けてくれた遊女を見た。シアナの方はつまらなそうに肩をすくめると、ぼんやりしてるからよ、と口にして彼らにぶちまけてくれた氷桶を拾って戻っていかうとする。

リィザは男に軽く会釈してそれを追った。追いついてねえさんと呼ぶと、シアナはちらっとリィザを振り返り、溜息をついた。気に入らないことをしたのだろうかという反射的な怯えでリィ

ザは僅かに怯む。主人達の機嫌を敏感に察していた毎日の積み重ねが、他人の不機嫌にひどく鋭い反応を引き起こした。

「あの、私、何か……」

言いかけるとシアナは別に、とすらりと口にした。冷淡というよりは無関心であるような響きであった。リィザがそれにも過敏に反応すると、シアナの方はやや困ったような顔をしてリィザに向き直った。

「あんたね。びくびくするの止めてよ。あたしが何か悪いことでも言った？ 言っておくけどね、目を付けられたのは不運だったけどその後はあんたがびしっとしないからよ？ 若いほど歯止めが利かないんだから、最初にもっと適当にあしらうべきね」

忠告してくれているのか怒っているのか、その口調からは推し量れなかった。シアナの言葉はどれも鋭くて、はっきりとしている。それでも咄嗟に氷を彼らに浴びせてリィザを救ってくれたのは事実だったから礼を言うと、今度はシアナはくすりと笑った。

細い線で美しく構成された端正な顔立ちは、そうすると悪戯っぽくなって煌めきを増した。綺麗な人、とリィザは眩しくそれを見つめる。リィザは大きな目と素直な雰囲気を持っている、どちらかというなら純朴な可愛らしさの少女だったが、シアナの場合は逆だ。匂うように華やかで、揺らめくように美しい。少女である年齢を超えていけば、いずれ相当な美女になるだろうと思われた。

「……あんたはさ、周りを気にしすぎなの。お礼をしてくれるなら氷、取ってきてよ。その前に着替えて、髪をどうにかしといで。かあさんが折角してくれたんだらうに、馬鹿な奴らのせいであれ」

冗談なのだろうか、自分の言葉に小さく笑うとシアナはじゃあね、とリィザに背を向けた。彼女の侍る席を記憶につけて、リィザは一度自室へ戻った。彼らの仕業で髪は乱れ、衣装も滅茶苦茶になってしまっている。女将がしてくれたようには自分では出来ないから、髪はほどいて丁寧に櫛を入れてとき流すしかなかった。

新しい衣装に着替え、氷を持ってシアナの所へ行くと、ご苦労様、と先輩の少女はそれだけと言った。彼女の中では先ほどのことは全て終わっているようであった。彼女は同じ席に着いている少年と雑談に熱中している。馴染みなのだろう、その様子はとても気安く楽しげであった。邪魔をするつもりはなかったから、リィザはすぐにそこを離れる。目の端に誰か手招きしているのが入って視線をやれば、それはあの男であった。自由になる方の右手でリィザを招き、自分のグラスを軽く指で弾く。

「酒を作ってくれ……さっきの連中のことは気にするなよ」

穏やかに言われてリィザは頷く。恐怖と嫌悪でどうにも身体が動かなかったのは自分の臆病さのせいかもしれない。シアナはもっとしっかりしろという意味のことを言った。いつまでも泣き暮らしている自分を、遊女の側から見ればもどかしいのかも知れない。

男に酒を調合して出すと、男は少し笑って口を付けた。男には備わった風格のような気配がある。それに、リィザを側にとりとめのない話をしながら飲む男にはひっきりなしに少年達が挨拶に訪れた。その誰もが敬語を使い、この広間全体に満ちている野卑た空気など払拭した顔で現

れる。

男は大抵ディーと呼ばれていた。挨拶が一段落ついたあたりでリィザは男を見上げた。彼は体格が悪くはない。左腕がないことだけが欠陥のような、よく引き締まった、鍛えられた体つきをしている。美形というわけではないが精悍な空気がよく似合った。

チェイン王であるのかという質問に、ディーは一瞬面食らったように目をしばたき、そして笑い出した。その声は朗らか過ぎはしなかったが十分明るくて、リィザは安堵を覚えた。

「俺はただの幹部だ……ただの、といっても幹部は6人しかいないがな。だから俺の所に顔を繋ぎたい奴が来るのさ。俺についていけばライアンに近いと思うんだろう」

ディーはそんなことを呟いて皮肉げに頬で笑った。それに何と返していいのか分からずにリィザは俯く。沈黙をどう埋めていいのか見当がつかない。何か言った方がいいのだろうかと思わすわそんなことを考えていると、ディーの方はゆるく笑った。

「……お前は本当はこんな商売には向かないのかもしれないな。何も考えないのも時には手だが」

リィザは曖昧に返事をする。向かないというならば確かなことであるように思われた。自分に出来ることは主人の機嫌を窺うことであって、取り持つことではないのだ。主人の命じたことに素直に従っていればそれで良かったはずなのに、どこで何が狂ってしまったのか、まだ理解が出来ない。ディーはリィザが客慣れしていないのを分かったのだろう、それ以上は特に話しかけては来なかった。暫く俺の側にいればさっきみたいな馬鹿どもは減ると言われて彼の酒を作り足したりこまめに料理を取り分けたりだけをしていると、ふっと音がやんだ。

それは劇的な瞬間でもあった。今まで聞こえていた嬌声も、明るくも淫猥でもあった笑い声もがなり声も、何もかもが聞こえない。一瞬自分の耳が聞こえなくなったのかと思うほどに、しんと静まり返っている。

と、隣で酒を飲んでいたディーが立ち上がった。それを合図にしたようにか、全員がそれに倣っていく。今まで戯れに遊女達にしながらいた彼らの面差しから浮ついた気分も酒精さえも抜けて、緊張という糸に引かれるように誰もが背を伸ばして立ちつくしている。

ぱたん、という軽い音がした。静寂になってからそれが初めての物音であった。妓楼の扉が自然に閉まった音であろう。それが再びの沈黙に馴染んだ頃、足音がした。木張りの床を踏む足音は、ごく小さい。

だが、注視の塊がゆっくり歩いてくるのは分かった。

リィザは伏せた面輪をそっとあげて、その音の方向を見た。広間を奥へまっすぐに歩いてくる影は、まだ青年期の初端に連なる年齢の男だった。脇に何か大きな、細長い荷物を抱えている。薄い茶色の髪は首筋にまつろう辺りで乱雑に切られており、端正と言って良い整った顔立ちではあったが、底冷えするように重い視線だけが目に付いた。

――怖い。

リィザが感じたのは、ただ恐怖であった。表情が殆ど無いことも、少年達の息詰まるような注目を全く介さない無関心さも、その恐怖を煽った。何より、彼の身に付いている厳しく凍り付くような、壮絶な空気が怖い。迂闊に触れれば切れそうなほど。

微かに震えているリィザの前を通りかかったとき、男はふと視線を流した。ディーが会釈する

のが見えた。

「この前は災難だったな」

聞こえた声も低く、抑揚もほとんど無かった。ええ、と頷くディーの声音には一種の緊張と心酔の入り混じったものが紛れている。

「しかし、腕1本でどうにかなるなら安いものだ。そうでしょう、ライアン」

小さく男は笑ったようだった。

「お前の新しい腕だ、受け取れ」

男はそう言って抱えていた包みをディーへ投げ寄越した。一部が解けて中から人の手が覗く。女達の小さな悲鳴が上がったが、それを手で均して男はまっすぐに広間の最深部へと歩いていった。一番の上座が今まで空いていたことに、やっとリィザは気付いた。そこは王の席としてはあまりに小さく、ぽつんと一つだったからだ。

男がチアロ、と呼んでいる。それに応えるように先程までシアナと雑談に興じていた少年が彼に駆け寄っていくのが見えた。その途端にほうっと周囲が溜息をつき、以前のような雑多なざわめきへと急速に空気がぬるんでいったのが分かった。

リィザは再び座って先程の包みをディーが開けるのを手伝う。人の手だと思ったのは半分当たりだ。それは良くできた義手で、何のせいなのかひどく重かった。リィザがどうにか悲鳴をあげなかったのは、彼女が一番近くでそれを見ていたからであろう。さすがに人の肌であるか否かは分かる。

「あれがチェインの……俺達の王だ。ライアンという」

ディーが先程のリィザの誤解を丁寧にほどくように言った。リィザは頷いた。確かにそれは桁が違う。存在感も、空気の重さも、何もかもが誰よりも重い。王という古風な呼び方の意味さえ、身に感じるようだった。

ディーはライアンから渡された義手を検分していたが、やがて頷いた。いい手だな、と呟く声には仄かな感謝が滲んでいる。

「……生えてきた、んですか？」

リィザが囁くと、ディーは淡く笑った。

「そうだな。この腕のいいところは斬られても殴られても痛くないことと、駄目になったら生えてくるところだ——しかも大体はライアンの奢りときてる」

リィザはついくすりと喉を鳴らして笑った。彼の持つ空気はなだらかで、ようやく安堵できるほどの会話になった気がする。

——と、不意にディーの視線が自分に向いたのに気付いてリィザは不思議に目を瞬いた。お前、とディーは言いかけ、そして苦笑した。

「……お前、笑うと少し感じが変わるな。そう言われたことはないか」

この妓楼へ売られてきた初日に女将も、そして自分をここに連れてきた男も同じ事を言った。それを思い出してリィザは怪訝に思いながらもこくと頷く。そうか、とディーは唇で笑い、義手を彼女の目から隠すように押しやった。伸ばした指先が、リィザの頬に触れる。

源氏名は、と聞かれてリィザは首を振った。女将は考えておこうと言っていたが、それがつく

ということは即ち客を取るということだ。楽しみにしているとは言い難かった。名を名乗ろうとするとディーはいい、と苦笑して遮った。

「普通、遊女の名は源氏名でしか聞かない。源氏名がなければありませんと答えるのが普通だな.....気に入った相手には教えてもいいがそれは特別だ、そのうち源氏名がついたら教えて貰おうか」

リィザは首をかしげる。意味を測りかねたのだ。リィザの反応が薄いと見て取ったディーは再び苦笑になった。

「その内お前と寝てみたいという意味.....」

言いかけてディーは言葉を途切らせた。大丈夫かという3度目の言葉にリィザは頷こうとするがままならなかった。震えが止まらない。全身に打ち返ってくる、圧倒的な恐怖。先程の少年達の声がぐるぐると周囲を回っている。冷たい汗が吹き出てくるような怯えが遊女になるのだと聞かされたときの恐怖にまで遡って、目の前がちかちか点滅した。気分が悪い。胃の辺りが締まるような痛みにはリィザは喘ぎ、思わず両手で顔を覆った。大丈夫か、と自分の肩を揺する男の手の温度が熱い。その熱さも痺れるような痛みになる。

ずるずると彼の膝に縋るように身を崩すと、ディーが微かに舌打ちしたのが聞こえた。怒らせてしまったのだろうかというリィザは震えながら彼を見上げた。ディーはさほど不機嫌な顔付きはしていなかったが、困惑気味ではあった。

「ご、ごめ.....んなさ.....い.....」

呻くような声を絞り出すとディーは彼女を安心させる為だけの薄い笑みになり、いいからとリィザの背を軽く撫でた。

「――男は嫌いか？」

密やかに落とされたその声に、リィザはようよう首を振る。嫌いだというよりは遙かに恐怖に近いものであったし、怯えにも惑乱にも似ていて、自分で上手い言葉を見つけられない。

ディーは自分と寝たいと言った。それは実に簡単そうな響きだった。目に留まったから、気に入ったから、だからいつかお前を買うのだと。違うそうじゃない、という反発は強かったことで尚更自分を怖れさせた。

いつかと囁いたときの少年の声ばかり思い出された。それはこんなに簡単で呆気ないものであってはいけない。いつかという甘い響きに込められていた万感が、溢れてくるような思いが、いつかという夢に集約されて結実していくはずだった――そうなるはずだったのに。僅かにリィザは震え、胸の前で手を組み締めながらうなだれた。怖かった。

「.....怖い、か」

呟いたディーの声には苦笑のような響きがある。リィザはのろのろ首を振り、ごめんなさい、と小さく言った。いや、とディーは更に曖昧に笑い、傍らにあった彼のグラスに手を伸ばした。中で氷が高く澄んだ音を立てて回った。

「だが、いつかは水揚げもその後のこともやってくる。ここに来た以上は例外はない。.....さっきも言ったな、何も考えない方がいいこともあるんだ」

リィザはぎこちなく頷く。ディーの言葉の真意とそこに潜む気遣いは本当だ。言われていることもその理屈も正当性も理解できるのに、心だけが頑として折れない。ひたすらに懸命に、過ぎ

てしまった過去だけを探している。……帰りたい、と呟きながら。

帰りたいのだと思った瞬間に目が潤んできたのが分かった。いけないと慌てて手をそこへやるが、零れてくるものは止まらない。これをどうしていいのか分からずに唇を押さえて肩を震わせていると、ぐいと肩が掴まれてふり起こされた。リィザは振り返り、女将を見つけて反射的にごめんなさいと呟いた。

「ごめんで済むかどうか、自分で良く考えな。――奥へおゆき。今日はもういいよ」

明らかに含まれているのは怒りであった。リィザはごめんなさいと繰り返した。宴席で泣き出して、相手を不愉快にさせたというなら確かに罪であった。ほら、とせかされてリィザは立ち上がり深々と頭を下げて広間から走り出た。

帰りたい、とだけ脳裏を巡った。

「……本当に、ごめんなさいね」

改めて彼についての遊女が苦笑しながら作ってくれる酒を飲み干し、ディーはいやと曖昧に笑った。

怯えるばかり、震えるだけの小鳥。あの小鳥は一体どんな声で啼くだろう。そんなことを考えると笑みが零れてくる。遊女に向かない性質であろうことは分かったが、それに配慮しすぎるほどディーもまた、優しい男ではない。珍しい毛色の女であるとは思うが、尚更自分の腕の中で啼かせてみたいと思うのは性であろう。

それに、笑うとどこかが違う。含羞のような淡く大人しげな気配が立ち上ってきて、思わず抱きたいなどと言ってしまった。いずれ水揚げが終われば買ってみようという魂胆は既に出来上がったから、誰かが彼女の涙を謝ることではなかった。

「彼女は……いつもあんな調子で？」

遊女はそうね、と苦笑する。境界門の双柱をじっと見つめていたときの感触からも、その返答は外れていない。だろうな、とディーは苦笑した。

「そいつは先々苦労するだろうな」

そんなことを呟くと遊女はまたそうねと頷いた。妓楼へ来たからには、真実例外はない。女將とて客への供物としての査定に叶ったからこそ彼女を買ったのだから、その元は取ろうとするだろう。

それにしてもあの笑顔の心地よさは特別だった。あれは一体何だったのだろうとディーはふと思い、自分でゆるく笑った。性質も身体も、相性というものがある。話してみなくては分からないこともあるし、寝てみなくては知り得ないこともあるのだ。その点ライアンも同じようなことを言っていたから、自分だけが特別ではあるまい。

ちらとライアンを見ると、彼はこの宴席の喧噪など全く気に掛けず、いつものように煙草に執心していた。あれだけが彼の道楽なのだとディーは知っているから止めるでもない。恐らくはライアンの生涯ただ一人の主人であるリァン・ロウの仕種と似てきた気がするの自分の錯覚か、ライアンの無意識の故意か。

王として君臨し、他人からの崇拜を受け取り、自ら更に上を目指して力強く飛翔していくという王者としての器量の一点において、ライアンはリァンに遠く及ばない。リァンは明るく燃え輝く太陽そのもののような男だった。他人の下にいるのを潔しとしないきつい自尊心が誰をも惹きつけ、魅了した。

ライアンの寡黙な性質はその影響を殆ど受けていないように見える。だがいつでも心の底からそれを渴望し、焦がれ、欲しがっているのは知っていた。

――越えるべき者をいつまでも懐かしんでいては先はない。いつか彼にそう言ってやりたかったが、それをライアンが受け取ることが出来るようになるには、まだ時間がかかろう。何故なら、ライアンは未だに囚われているからだ。リァン・ロウの残像に。過去の幻に。過ぎ去ってしまった夢のような時代に。

リァンはまさしく夢であった。チェイン地区というのはタリアの中でも最も奥、殆ど日の射さない路地に嫌な臭いの充満した地下道の入り組む貧民窟だ。

それでも石造りのアパートに入り込めるならましな方で、冬にはそこからあぶれた大量の凍死者が出る。その死体から金に換わりそうなものを剥ぎ、服を、靴を盗り、用のない身体の方は裏手の運河へと捨てるから冬の川は亡霊の棲家――

リアンはそこに突然降臨した神であった。彼の指導のままに大人達から追いやられて条件の悪い場所へと吹き寄せられてきた子供達は結束しはじめた。ディーは少年時代の始まりにそれを目の当たりにした。

ディーの兄はリアンの幹部の一人、ディー自身も兄の派閥の下で少年窟を自分たちの王国にしようと指針するリアンの輝きに目を奪われた。まとまりなく派閥と縄張り争いに明け暮れていた子供達をあっという間にまとめ上げていく求心力、誰をも虜にする明るい笑顔と朗らかな性質。誰もがリアンを崇拜し、リアンの足下に平伏し、リアンの為にと誓っていた。

ディーの兄もリアンの腹心として上り詰めていった。リアンが幹部として認め、自身の元への直接の出入りを許していたのは当時2000人を越していた子供達の中で僅かに8名、兄はその内でも3幹部と呼ばれるほどにリアンの重鎮だった。――残りの2人は殺傷能力よりもその知力を買われたヴァシエル、そしてリアンの身辺を警護し命を盾とするべく育てられたライアンである。

兄もヴァシエルも既にこの世にいない。3年前にリアンが突然暗殺された後の、少年王の跡目争いの際に2人とも死んでいる。ヴァシエルは兄が、兄はライアンがそれぞれ手に掛けた。激烈な抗争を勝ち抜いて今のライアンがある。

ライアンの明るい笑顔は当時から珍しい部類ではあったが、リアンが死んでからは殆ど見られなくなった。気鬱に沈みがちな空気をディーにはどうすることもできなかった。自分がそれほど策略を巡らすのに向いていないのをライアンが理解してからは、彼は益々無口になった。一人で黙々と思考している姿を、ディーは半ば痛々しい思いで眺めていたことを覚えている。

抗争を勝ち上がり、チェインの王となってもライアンの顔は晴れなかった。その座に着くべきはリアンであって自分ではないとでも思っているのだろう。ライアンが今、チェイン王という力を背景にしてタリア王アルードと共に在るのもきっとリアンの為なのだ。

リアンはタリア王になるべき男だった。ディーでさえ、彼の死から3年を経てもそう思う。彼こそ真実、チェイン王に相応しくタリア王に手をかける資格のある男だった。

それが死によって閉ざされてしまったことを誰よりも理不尽に感じているのはライアンだ。彼はまだリアンの死を傷として抱えたままにいる。

彼がタリア王になるべく頭を上げているのは偏にリアンへの追悼だ。ただ一途に、彼が成し遂げるはずだった奇跡を実現するためにライアンは生きている。

――だがライアンは？

ディーは微かに苦い顔をする。兄の死は仕方がない。ディーはそれを自分でも驚くほど冷静に受け止めている。

ライアンはディーを身辺におき、継承戦争時に失ってしまった本来の左腕の代わりに惜しみなく信頼を注いでくれる。左腕の義手には沢山の仕掛けがあって単に見栄えや重心の問題ではないが、それでも長じていけばチアロの方がディーよりもずっと強い戦士となるだろう。自分は既に、頂点へ至る道は閉ざされているのだ。

だからこそ、ライアンが自分を未だに重鎮として扱ってくれることが誇りでもある。ライアンがリアンのために生きていきたいと願うように、自分は彼のために生きていたかった。

ふとそのライアンの視線がディーを見た。随分と自分は彼を見つめていたようであった。遊女にもういいからと言いつつ、ディーは席を立つ。ライアンは新しい一服の葉を煙管に詰めているところだった。

「腕をありがとうございます」

そんなことを言うと、ライアンは淡く唇だけで笑った。働けよ、というのは激励でもある。それに頷き、ディーはライアンの煙草の火石を打つ遊女へ視線をやった。この女はライアンの特別だ。3年前からずっと彼の指名を受けている。

2人はどこことなく似た顔立ちをしていた。目の流線や鼻筋の影が醸す雰囲気は特によく似ている。ライアンの方が奇妙に陰気な空気を背負い、対して遊女の方は化粧のせいなのか華やかな印象にまもまっているが、容貌には共通するものが多い。

「ねえ、ねえ、新しい服と髪飾り」

遊女がライアンの袖を引いて甘えた声を出している。

「この前やった髪留めでは足りないか」

「それとこれとは別だってば。それに紅玉は服に滲んじゃうからやだって言ったもん。ライアンあたしの話聞いてないでしょ。翡翠がいいの、ひ・す・い！　ライアンの目の色とお揃いの」

「贅沢な奴だな」

「何よ、あたしが綺麗にしてるほうが嬉しいくせに」

ライアンがそれに曖昧に笑って細かい希望を聞いているのは贈るつもりなのだ。

遊女の衣装も装身具も化粧品も彼女たちの自腹だから、少しでも貢いでくれる男を増やせばそれなりに彼女たちは潤うようになっている。やれやれだとディーが思っているのが顔に出たのか、遊女の方はきっと彼を睨みあげた。視線のきつさと瞳の色はライアンとそっくりだ。

正直なところ、ディーは彼女を好ましくは思っていない。ライアンは一度心許すと全力を以て守ろうとするところがある。この女が長じてライアンの足に絡みつくと網にならないと、誰が言えるのだろう。

今でさえ十分、ライアンは彼女に執着している。彼女に笑いかける空気は普段の凍てつくような厳しさとは全く違う温度だった。

「ライアン、話が」

ディーが遮ると、遊女の方は更に不機嫌な顔になった。それを宥めるようにライアンが彼女の頬を撫でる。あとで、と彼に言い含められて渋々頷き去っていく背を、ディーは溜息で見送った。

「.....彼女には随分とご執心で」

半ば嫌味のような口調になったのを、ライアンは苦笑めいた表情で流した。

「あれはあれでいい、お前には関係ないだろう」

そうですが、とディーは肩をすくめる。遊女の方はチア口をからかっているようだ。ライアンといるときとは一転して、明るいつい子供同士じゃれあうような笑顔が見える。

話とは、とライアンが呟いて、ディーは視線を主人に戻した。ディーは頷いて声を潜めた。ライアンの周囲には自分以外に人が居らず、話が聞こえる危惧はなかったが、それは十分に密やかな話なのだった。

「……クインが戻ってきたというのは本当ですか」

3年前にチェーンを吹き荒れた抗争に部外者ながら口を出し、ライアンに知恵を付けたあの子供のことを、ディーは忘れていない。一度目にすれば焼き付くような美形であったこともあり、噂を聞いたときにすぐに分かった。

ライアンの煙草入れを掲げて彼に会いたいと言った美少年の話。チアロが楽しそうに話しながら連れていったという目撃。チアロとクインは3年前から気の合う友人同士だった。

ディーはクインをも気に入らない。それは先程の遊女と同じくライアンの弱みにならないだろうかという懸念がそうさせている。3年前もライアンはクインを助け庇った。クインを当時のタリア王への貢ぎ物にしようとしていたのを撤回してまでそうしたのだ。

結果ライアン自身がタリア王と寝て自治を買うに至ったことを、ディーは怒りにさえ変えることが出来た。あの子供を差し出しておけば貴方の身は安全だったのにと。

ライアンはディーの質問に簡単に頷いた。それで彼の顔が曇ったのを見て取ったのか、曖昧に笑った。

「あれのことは内密にな。俺はクインをなるべく他人の目からは隠してやりたい——タリアに戻ってきた以上の噂になっているのか」

「いえ、チアロがどこかへ連れていったという辺りまでしか……」

ならいい、とライアンは深く煙草を飲んだ。

「……根城から出入りするときは女装だから目立たないんだろう。お前もあまり他人に話すな。噂が酷く頻繁になるようなら俺に報せろ」

ライアンの命令は絶対であった。ディーは軽く頭を下げる。ライアンは苦笑した。

「そんな顔をするな。お前は3年前からあれが気に食わないんだろう？　だが、あれのことは口出し無用だ。そのうち必要があればお前にも伝えるべきことを伝えなくてはいけないが、あれを保護することがいずれ俺の切り札になるかもしれん」

「切り札……ですか」

「そうだ」

ライアンは不意ににやりと笑った。不敵と表現すべき笑みは珍しく、それは滅多に表現しないライアンの自信の証明でもあった。

「あれは、俺の切り札になる——どう化けるかはまだ分からんが……そうだな、手なづけておけばどんな場合になっても損はしない」

そう言ってライアンは何かを思い定めたのか、深く頷いた。

「……ダルフォ」

低く呼ばれた自分の本名を、ディーは懐かしく聞いた。その名は3年前に彼自らが撤回したのだ、ライアンの元で生き直すために。わざわざ本名で呼ぶときは、だから重要な話であった。ええ、と返答する自分の声が更に低くなる。

「チアロはしばらくクインのことで忙しくなる。何しろクインのご機嫌を取っておくには奴が一

番良さそうだからな———チアロのことを頼めるか」

僅かにライアンが目が鈍く光った気がした。

「……正直、俺はいずれチアロにチェインをやりたい」

ライアンの口から後継の話が出たのは初めてのことであるかも知れなかった。ディーはどっしりした緊張感が腹に居座ったのを感じた。

ライアンの意向を薄々みな気付いているが、それを本人は公言したことはなかったはずだ。他の幹部達への示しや折り合いもあろうし、幹部として扱っている連中の中でチアロが一番年齢が下だ。ライアンの側小姓だからという冷笑も無くはない。

「本来ならお前だが」

ライアンの言いかけた先をディーは分かっていますと遮った。

「チェイン王はチェインの強者でなくてはいけない。一番分かりやすい支配は力です」

左腕の欠損は極みに到達するには決定的な瑕疵だった。ディーはそこには成り得ぬ現実を知っていた。ライアンは重く頷いた。

「チアロがクインのことで引き回されている間、チアロの後見として構えてやって欲しい。あれは……あれは、まだ甘い。甘いが見込める。今は奴をしてクインの機嫌を取らせておくのが優先だが、それでは足りない部分が出てくるだろう。支えてやってくれないか」

ディーはチェイン王たるライアンの、一番の腹心であると見なされている。それをディーも知っているし、ライアンも彼をそう扱ってきた。

それをしてチアロの後見たれというならば、ディーに自分を棄てろというのに等しい。命じるのではなく、頼めるかという言い方しかできないのだ。

ディーは頷いた。チェイン王の後継は自分でない場所へ行くのがいいと彼も思っていたのは確かだった。ライアンはほっとしたように温く笑った。

「……いずれ、お前はタリアの方へ関わって貰う。俺にもそこそこアルードが仕事を回すようになってきているからな」

ディーはまた頷いた。自身の足りない部分を承知しても使ってくれるライアンの意志に感謝さえ覚えた。いずれライアンがタリア王になる時に自分はまだ生きて、彼の側にいられるだろうか。そんなことを思えばゆるく笑みもこぼれてくるのだった。

ライアンは彼に軽く頷き、立ち上がった。重い存在感のある身体がそこから歩み去っていく。例の遊女がそれをめざとく見つけて彼の側に寄り、手を引いた。彼女の部屋へ上がるのだろう。

この後は正真正銘の無礼講だ。あの見習いの少女がこの場にいたら卒倒するだろうと思い、ディーは少年達の捌け口になるまえにと目についた女に声をかけるために歩き始めた。

「……さ、これで大体いいわ。やっぱりリュースちゃんってば美人ねえ」

ちゃんはやめてよ、とリュース皇子は照れついでに苦笑になる。エリゼテール大公女は彼の幼なじみだが、お互いに物心つく頃から共にいることもあって尚更砕けた呼び名になる。

彼女は皇子よりも1歳年長で、幼い頃はひどく苛められたものだ。母妃がいつもそれを思い出しては笑う。エリザちゃん came たわよっていうと、お前はいつも後ずさりして怯えて泣き出してたんだから――

皇子はそんな遠い話にまた苦笑した。何よ、と目の前の公女は彼の手を優しくつねる。彼女の淡い金髪が窓から注ぐ陽光にきらきら輝いて目に眩しい。緑柱石の色をした瞳の明るさも、そしてその顔立ちも美しいといってよい少女だ。彫りが深くくっきりした顔立ちはアイリュス大公家系の特徴だが、エリゼテール公女にはそれ以上の神の愛を感じるほどに麗しく華やかなものが備わっている。

――尤も、リュースがそれに気を向けるときは誰かの誉め言葉があったときだけだ。彼自身が神の愛し子であるような美貌の持ち主であり重要なのは中身だという倫理の信奉者でもあったから、なおさら他人の美醜には疎い。疎いというよりは単純に興味がないのだろう。

公女がほら、と差し出してくれた手鏡の中にあの日見かけた少女の面差しを見つけ、皇子は溜息になった。本当に似ている。こうしてほんの少し化粧して髪や眉を整えただけで「彼」が鏡の向こうにいるようだ。

「綺麗に出来たでしょ……ねえ、本当にこんなことしてどうするの？」

化粧道具一式を順序よく小箱にしまいながら公女が聞いた。皇子は鏡から視線を離して曖昧に笑った。彼の返答を諦めて公女が肩をすくめる。幼い頃からの日々の積み重ねが、言葉をさほど必要としない関係を作りだしていた。

「いろいろありがとう、エリザ」

鏡を机の上に伏せ、皇子は何か飲むかと公女に聞いたが、公女はいらないと首を振った。

皇子は顔を洗おうと席を外した。化粧した顔立ちを確認できればそれで良かったのだ。自分たちの相似を改めて見つめるために。

似ていると気付いたのは初夏の頃だったが、既に季節はゆっくり秋へ向かい始める残暑の中だ。皇室行事やら夏離宮への行幸など、国と家の用事が重なってなかなか検証する時間がなかったが、離宮での避暑生活でも皇子は彼のことを考えていた。

――あれは誰なんだろう？

最初、皇子はごく単純に自分に双子の兄がいるのだろうかと考えた。先に胎内から産み落とされた方が兄であるが、現実自分一人しか王宮にいない。自分が弟なのは、最初の一人を王宮外に出して後から生まれてきた方を手元に残すだろうからだ。

皇帝の嫡子であるならば、出生と同時に沢山の儀式がある。母親たる皇妃も同じだ。一人産んだ後でもう一人を極秘に出産するよりは兄の方を王宮から連れ出してから産気づいたと人と呼ぶ方が遙かに楽であるし、方法として自然だ。

だが、ここで皇子はふと深淵に気付かざるを得ない。子を授かったときから皇妃と胎内の子は国家のものだ。あらゆる意味で人の目がある。母胎に双子があるということを、誰も気付かなか

ったとするならそれは極め付きの不自然だった。

診療記録をこっそり盗み見ても、皇妃の腹には心音は一つとしか見えない。太古であるなら双子は国家の安泰を損ねるとして片方を――大抵は弟の方を――生まれ直後に水につけて葬ってしまうのだが、今は双子だからといって国家鎮護の妨げになることはない。それほど魅力が帝位にないのだ。記録は書き換えた後が見られない。だから13年と11ヶ月前に母後の腹にいた子供はやはり自分一人なのだ。

――では、あれは一体、誰なんだろう……？

血縁がまるでないと仮定した上での酷似であれば、祝祭の日に自分を見つめていた彼の複雑な目の色を説明する道が失われる。何かしらの血縁があるとするなら一体どこだろうか。自分たちの顔立ちの相似と特徴から、それは少なくとも母の実家であるアルカナ公系だろうと皇子は最初見当をつけてはみたが、その門閥家系は巨大だ。末端まで含めれば家名は200を越す。

数名の魔導士に命じてその中で行方不明になっている子供を捜してみたが、そんな子供は存在しなかった。

……それに戸籍はどう考えても偽造だったから、貴族の子弟が戸籍を偽ってまで中央中等へ通っていたというのなら、正直、訳が分からない。

皇子は首をかしげた。洗面所の鏡の中で、「彼」を模した姿が困惑した顔をしている。血縁がないならそれでも構わないのだが、祝祭の日の彼の表情が心のどこかに爪を立ててしがみついて、無視できない。

皇子は小さく溜息をもらし、エリザにしてもらった化粧を落とすために水をすくった。

部屋へ戻ると公女は露台へ通じる硝子戸を開け、手すりに腰掛けながら大きく伸びをしていた。しなやかに伸びた手足の形良さ、肌の白い美しさ。ずっと昔から知っていたはずなのに、彼女の仕種のの一つ一つに時折見知らぬ他人を見る気がする。

公女はすぐに彼に気付き、リュースと呼んだ。彼を呼び捨てにするのは両親と彼女くらいなものであった。

「こっちへ来なさいよ、やっぱりここが涼しいから」

夏の間はこの夏の居宮で過ごしているが、この宮は人工池の上に何本もの柱で支えられて建っている。晩夏の風が渡って吹き来れば、それは水面をさらって若干潤み、清涼で心地よい。

100年ほど前の皇帝が四季に合わせた居宮を建てたのだが、特にこの夏の居宮と冬の居宮は居心地が良かった。風に蓮の蕾が揺れている。

「落としちゃったんだ、せっかく可愛かったのに……」

エリゼテール公女は彼の頬を残念そうに撫でて呟いた。皇子は苦笑気味に微笑む。

彼の面影をもう一度見たくて化粧という方法を思いついたのはいいが、どうしていいのか見当もつかない。困った末に幼なじみの少女に頼んだのは、彼女くらいしか身近に頼める相手がいなかったからだ。皇子は自分が中等学院の仲間達から遠巻きに浮いていることを承知していたが、こんな時は微かな物寂しさを覚えた。

「来月はお誕生日ね、リュース。何か欲しいもの、ある？」

公女は明るく彼に話しかけた。皇子は首を振った。

「うん、別に……でもだからって、武器とかは嫌だ」

公女は片手間に弓を遊び馬を操る。身体も頑健と言って良いほど健康で、快活な性質であった。自分が大人すぎるきらいがあることを考えると、逆であれば良かったのかも知れないと、皇子はいつも思う。

「何か希望を言いなさいよ。先月の私の誕生日には、ちゃんとくれたじゃない」

この年中央中等へ入学した彼女に皇子は本とペンを贈っている。本はこれから履修する科目の参考書、ペンの方は軸が精緻な白金細工で出来た美しい品だ。いいよ、とリュースは仕方なく笑った。

「いずれ結婚するんだし……あまり気にしないで、受け取って置いてくれればいいから」

それは自明に思われた。エリゼテール公女は父帝の第2妃の姪、現アイリユス大公の一人娘だ。立太子されてもされなくても、いずれ門閥の提携のために彼女は自分の妻になるだろう。彼女の方が年齢が上ではあるが、彼より下となるとアイリユス大公本家とやや離れた血縁にしかない。シタルキアが婚姻政策によって他国と連帯しないことは常識であるため、公女と釣り合う縁となると限られてくるのだ。

婚約するのは数年先になるだろうが、彼女と睦まじいことを周囲に教えておくことは無意味ではない。婚約の形式というものもあってまずは数度こちらから尋ねて行って彼女に伺いを立てるという手順を踏むが、その前哨として申し分ないはずだった。

エリゼテールは一瞬眉をひそめ、それから長い溜息をついた。何か気に障ったのだろうか？と皇子は怪訝に将来の婚約者を見つめる。

「ねえリュース、好きな人はいないの？」

これには皇子は即答する。彼にとって、これは深く考えることではないのだ。

「エリザが好きだよ、どうして？」

公女は肩をすくめた。皇子はその仕種に不安を抱く。皇子にとって彼女は殆ど唯一の友人でもあり、恐らくは一生共にいることになる相手であった。彼女以外の女性と添うことなど出来ない以上、最初から目をやらない方が全てにとって上手く回る。よそ見した上での寄り道など、時間と手間の無駄だとしか思えなかった。

簡単にそんなことを説明すると、公女は不機嫌に顔をしかめてから苦笑した。やはり彼女の気に入らないらしい。エリザ、と皇子は少し強い声を出した。

「だって、どうせ君と結婚するんだからいいじゃないか」

「分かったわよ。もういいったら……」

うんざりという表情であった。公女の真意が分からず邪険にされて、皇子もやや不機嫌になる。公女は彼と並んで遜色無いほど整った形の頬を寄せて、密やかな声を出した。

「……ねえ、秘密よ？ ……私、付き合ってる人がいるの」

皇子は一瞬おいて頷いた。公女の悪戯っぽく笑う吐息が、喩えようもなく幸福そうな響きに聞こえた。

「そう……なんだ。じゃあ、こんな話不愉快だったね。いいよエリザ、私のことは気にしないで。うまくいくといいね」

公女は頷き、彼の頬に軽くキスをした。彼女の髪からほんのりと香料が薫った。

「でもね、リユース。あなた出来ればちゃんと恋愛くらいしたほうがいいわよ？ 私でよければいつでも相談に乗るから」

皇子はまた頷いた。エリザの言う内容の真意は何故か曖昧にぼやけて見えないのだが、彼女が自分を気遣っているのだと分かっていれば十分だった。

これから彼と会うのだと彼女が帰っていくのを後宮外まで送り、皇子は少し溜息をついて夏の宮の道までを戻り始めた。

鏡の中にいた自分はやはり、祝祭の日に見かけた彼の姿であった。本当に、自分たちはよく似ている。双子であるという結論は既に否定しているが、母方の縁を辿っていけばそのうちに巡り会えるだろうか。

皇子は曖昧に頷き、マルエスと呟いた。歩き続ける皇子の背後の空気がたわみ、彼の背後では、と返事がした。皇子は視線だけで振り返り、そこに彼の随従を見つけた。

マルエスは皇子の護衛の魔導士であった。魔導士の掟に従い、全身を覆う外衣と銀の仮面を身につけている。階級は第3位従、全階級の内中の上程度に属する位置である。魔導士の出自などは全て破棄されていて個人情報など知りようもないが、声や背格好からまだ若い年齢の男であることは知っていた。

「……マルエス、彼のことは何か分かったか」

皇子は呟くように小さく言った。魔導士はいえと即答する。あの仮装行列に参加する皇子の側に姿を隠して彼もいたから、皇子は彼を捜すと決めたとき、容貌を説明するよりはマルエスに命じた。

すぐに見つかると思ったのだ。魔導の力は一般の人々が思うよりも遙かに広くて深い。彼の気配や残像の足取りを追っていけば簡単に辿り着くだろうと思っていたのだが、あの彼が魔導論文の新旗手であったことを思い出す結果となってしまった――魔導によって痕跡を追うことが出来ないよう、路地に入ってすぐに簡単な結界罫を残し仕掛けていったのだ。

怪我をするほどの大仰なものではなかったから単なる警告であるとは思われたが、自らの足跡をひたすらに隠そうとする意志はやはり鮮明だった。

困難だな、と思ったのはその時のことだ。魔導によって過去の残像をどうにか捜しだし、他人の目の底に残る記憶をかき集めていけばどうにかなると思っていたのを修正しなくてはならない。

地道に血縁からだと結論してアルカナ大公系の家閥の子供達を捜し、失敗し、今はもう一つの大公家アイリユス系の子供達を辿っている。この二つの大公家は以前から姻戚関係を複雑に結んでいる。お互いに血が入り交じっているのだ。

「殿下、卑才思うところがございますが」

マルエスの声が囁く。皇子は許すと歩きながら呟いた。

「――ラウール大公という可能性はございませんでしょうか。……つい5年前に家門を取り潰されてございますが、当主は現在生きておれば殿下よりも一つ、年下であったように心得ます」

「……ラウール、か」

皇子はその可能性に気づき、大きく頷いた。それは確かにあり得る話だった。

ラウール大公家は5年前に当時の当主が死去し、その息子が幼くて家を後継できないことを理

由に完全に断絶を宣言され、全ての利権を取り上げられている。これは国政に深く関わるアルカナ、アイリユス両大公家の意向であった。

200年ほど前のラウル大公家系の高位貴族が乱心し、当時の皇帝を人質にとって籠城した事件を以てラウル大公家は凋落の道を辿り始めた。

この事件の真相は未だに闇の中であるが、どうやらアルカナ家の陰謀であったらしいことは当時から囁かれており、確証はないが皇子もそうであろうと考えている。

アイリユス大公家はラウルを蹴落とすことに関してアルカナと結託し、事件の後にはラウルという家名を貶め続けることに熱心だった。

アルカナもアイリユスもここ500年ほどの間に隆盛してきた比較的新しい血筋だ。この国で尤も古いのは勿論皇族であるエリエアルの姓を抱く一族だが、それと同じほどの古さを誇っていたのがラウル大公の血脈であった。その開祖は建国の功臣にして始祖大帝の寵臣であったケイ・ルーシェンである。

嫉妬と呼ぶには余りにも暗い情熱であったが、古い国の古い血筋を以て儀式や慣習に深く食い込んだ一族を追い落とさねば、アルカナもアイリユスも長く国の根幹に止まることは出来なかったであろう。貴族間の勢力の引き合いであるとは括出来る話であり、結果アルカナとアイリユスは勝って未来を手に入れ、ラウルは負けて遂に消えたということなのだ。

5年前に当主が死んだとき、アルカナもアイリユスもようやく時期だと思ったのだろう。既にラウルの閥閥の家門は散り散りになり、いくつか残ってはいても結託をしていない。

復興を目指す勢力がなくなるように両大公家は時間をかけてラウル大公家を腐らせていった。後継者が幼いのであれば同じ家門閥の中から後見人を立てて成人である15才を以て正式に襲名という手続きで十分であったはずだが、既にそれを幼い子供のために唱えてやる正論者はいなかったのだ。

ラウルか、と皇子は今度はやや低く呟いた。アルカナやアイリユスなどよりもラウルの方が血が古く、始祖大帝の頃から連綿と続く一族であるからには皇族との婚姻も両家とは比較にならないほど繰り返されている。似ているとしても不自然であるとは思えなかった。

なるほどね、と皇子は深く頷いた。その可能性は確かにあった。

「ラウルの子供は確か、行方不明だったね……」

極秘裏に暗殺されたのだという噂が一時流れていたと後で知ったが、誰もその生死の決着を知らない。逃げて今でも生きていたとしたら、それは確かに戸籍を偽るべきだし性別さえ誤魔化すべきだ。用心深くもなろう。何より、皇子へ向けた彼の視線の複雑そうな色を説明できそうだった。

「ラウル……確か、キエス……と言ったね、マルエス？」

「は、記録には確かにそのように」

「……探せるか、キエス・ラウル？」

恐らく、とマルエスが軽く腰を折る。皇子はほっと唇をほころばせた。

どこの誰かも分からなければ搜索はしらみ潰しというほどに労力を使うが、それが判明しているのならずっと作業は楽になるだろう。皇子は彼の正体を見つけた気持ちでどこことなく安堵を覚

えた。昔から分からないことがあるのが無性に不安なのだ。

それと、とマルエスが続けたのがだから皇子は意外であった。視線を向けるとマルエスは僅かに恐縮したように会釈をした。それを手で制して皇子は続けるように促す。

「それと殿下、子供一人では何かと出来ぬ事の方が多いと思われます。誰か大人が……恐らくお探しの相手には親と認識されている大人が共にいるのではないのでしょうか。行方不明者の搜索の年齢の幅をお広げになってみるのは如何でしょう」

「そうか———そうだね……マルエス、有り難う。そうしておくれ」

親という概念を全く失念していたのは自分の感覚に近くないからだろうか皇子は思い、苦笑になった。

「ならば学院に残る『彼女』の戸籍を調べてご覧。彼の方は性別は偽りだったけれど、保護者の方はそうはいかない。共にいる相手の性別が分かればお前たちも楽だろう———ああ、もういいよ」

目に夏宮の涼しげな姿が入ってきて、皇子は言った。魔導士の黒い衣は夏の光景の中では奇妙に浮き上がる違和感であった。

昔ながらの慣習に従い、魔導士を猟犬以下のように扱う人々もいる。会話が出来る相手を皇子は犬だとは思わないが嫌がる者もいたし、第一子供にはあまり受けが良くない。怖がらせてしまうからねと言うと、マルエスはそっと笑ったように空気をぬるませて消えた。姿を隠しただけで実際は側にいるのだが、それでも見えているよりはいいだろう。

そんなことを思いながら、皇子は露台から自分を見つけて手を振っている弟達に軽く手を挙げた。異母弟である第2妃腹の皇子二人が避暑地から一緒に王宮へ戻っているのだ。ラインも含めて3人で、どうやら自分を待っていたらしい。

何の遊びの相談だろうか皇子は思い、池での水泳だけは勘弁して貰おうと考えながら宮の扉に手をかけた。

昼間をようやく迎える妓楼の中は白けた明るさが漂っている。店棚の格子窓には全て簾が降り小間使たちが夕方からの営業に向けて立ち働いていて、活気はあるがからんとした空気が支配していた。

その合間を抜けて遊女たちは食堂や針部屋へてんで勝手に集まってくる。乾いた明るさは遊女たちが殆ど素顔で、化粧気も飾り気もない素のままの個人に戻っているからかも知れなかった。

食事は部屋で取っても勿論構わないが、気のあった女たちは大抵こうして食堂で一緒に昼食を取る。夕食は客から奢られるものであるから、実際何時になるかは分からない。

リィザが食堂で昼食を取るようになったのはごく最近のことだが、新しく遊女になる娘は今は彼女しかおらず、他の女たちは概ね彼女に優しかった。

同姓という気安さの連帯なのか、それとも自分たちが通ってきた苦悩の中に未だに住んでいる彼女を哀れんだのか、そのどちらだとしても、リィザは「ねえさん」たちからの細やかな愛情を感じるほどにはこの妓楼になじみ始めている。

一番彼女に口を開くのはシアナという少女であった。無論それは本名ではなく遊女としての源氏名だが、チェーン王の宴席の晩にリィザへ乱暴を働いた少年たちに氷をぶちまけて救ってくれた遊女だ。

シアナはリィザが来たのが単純に嬉しいのだろう、こと良く彼女を構った。口調は素っ気なくてきついが、さして嫌みであるつもりが無いを理解すれば、その裏の不器用でどこもないリィザへの興味に気付くことが出来る。

同年齢である共通に何かを見いだしたいのだろう。

薄茶色の髪は昼間の光の下では琥珀が輝くような色味に淡く煙り、翡翠をはめたような美しくまろい緑の瞳と整った輪郭線が同性であっても目を引きつける。

シアナには美貌の恩寵のままに既に複数の常連客がついていて、その中で最も彼女にとって重要で妓楼にとって上客と言うべきはチェーン王ライアンであるようだった。

あの宴席もライアンがシアナと馴染んでいるからこそこの妓楼を選んだようだ。妓楼はタリア内の組合の規定で客の個人情報を徹底的に秘匿するが、遊女たちの目にも明らかにライアンはシアナに3年通い続けている男であった。

自分の女の株を上げてやろうという彼の思惑なのだろう。

このところ、あの晩のことが縁でリィザはシアナと昼食が多い。シアナは更にミアというこの妓楼一番の娘によくついており、自然その集団に混じることが多くなった。

シアナはっつけんどんと言っても良いような口の悪さだが、ミアの方は柔らかに優しい。声音のとろけるような甘さが心地よかった。

「……この子は、本当にライアンばかりだから」

ミアの声が可笑しそうにころころと笑っている。シアナは端麗な頬の曲線を思い切りぷうと膨らませ、だって、と唇をとがらせた。

「だってねえさん、ライアンより綺麗な男なんか見たこと無いもの——ねえ？」

ふっとシアナの視線が自分に向いてきて、リィザは微かに笑って首を傾げた。

宴席で見かけたチェーン王だという青年の顔立ちは確かに小綺麗にまとまっていたが、それ

よりも圧倒さえ覚える存在の重圧感と痛みを覚えるほど冷えた視線、その二つが合わさって出来る永久凍土のような荒涼とした空気だけが吹き付けてきたことだけしか思い出せない。怖いというのがリィザの感じ取った全てであり、それ以上ではなかった。

それでもシアナの喜ぶ顔も見たくてリィザは記憶の中からライアン面の差しを恐る恐る引き出す。それは今まで見た誰よりも確かに整ってはいたが、陰鬱で、やはり瞬間的に目を閉じてしまいたくなるほどに恐怖を引き起こすものだった。

「……ライアン様、ええ、確かに綺麗な方ですね」

やっとそれだけを返答すると、シアナの方は得意そうな笑顔になった。彼女にはそうした自信に満ちた、ややもすると驕慢といって良いほどの傲岸な笑顔がよく似合った。華やかな顔立ちが一層際立つのだ。

「でしょ？　——ね、ほら、これ……ライアンに貰ったのよ」

シアナは一層得意満面という表情で自分の髪をまとめていたかんざしをすらりと抜いた。

それまで髪に隠れて見えなかった柄の部分は透かし抜きになった黄金の蔦唐草文様に縁取られた翡翠であった。飾りの部分はやはり翡翠、こちらは唐草とあわせた芙蓉花がくりぬかれた贅沢な品だ。

精緻な細工、おそらくは本物の金に翡翠、どれだけの品なのか見当がつかない。

リィザが見入っていると、シアナは得意そうに吐息で笑った。

「あたしの目の色が緑だからね、それで翡翠なの。柄の飾りは髪の色と合わせた琥珀がいいって言ったんだけど、それは細工がとても難しくて採せなかったんですって。でも黄金ならいいわ、——似合う？」

とりとめもないことを話しながらシアナは器用に髪を元のように結い上げて、かんざしで固定した。シアナの言うようにその翡翠は彼女の瞳から吸い出されてきたような美しい色合いであったから、リィザは深く頷いた。

自信に満ちた微笑みを浮かべているシアナは本当に美しく、同じ年齢であるとは信じられないほど大人びて華麗であるように思われた。

リィザの返答に満足したのだろうシアナはリィザの黒髪に手をやって、櫛を丁寧に通して頬の横側を軽く編んだだけの髪型を崩し、せっせとそこを編み始めた。

「……何が似合うかって難しいけど、あんたの場合は髪が黒いから真珠がいいわ。きっと黒髪に雪花がかぶるみたいに綺麗に映えると思う」

シアナが視線で同意を求めたのか、そうねとミアが優しく頷いた。

「私たちは衣装は決められているけど、髪や装身具は特に決まりがないから好きにしていいいのよ。リボンも花も、みんな大好きでしょう？」

はい、とリィザは頷く。

遊女たちの衣装は決まっている。いずれ遊女となる娘は白、体を提供しない下働きは黒、遊女たちは赤地に装飾は金糸、そして月が満ちる期間だけはくすんだ赤い絹地。身につける色が決まっているせいで、却って女たちは金糸の刺繍の具合に気を遣ったし、髪を飾るリボンや造花に熱中している。

シアナが今リィザの髪に編み込んだ造花もその内の一つだ。

リィザは水揚げを待つ身であることを示すために白以外の色は身につけることが許されていない。だから造花は白、優しく愛らしい鈴蘭に白いレースのリボンが絡んでいる。鏡の中の自分の髪には確かに彼女たちの言うように、白が良く映えた。

「だからお前にね、水揚げが済んだらみんなで髪飾りをわけてあげるわ。みんなから少しづつ贈ることになってるの。この店の習慣よ——覚えておいてね」

リィザは曖昧な返答をして俯いた。ミアの言葉もシアナの見立ても、自分の水揚げが近いせいなのだろうかという淡い恐れを連れてくる。

涙の一件を女将は殆ど叱らなかったが、その代わり娘たちからは一斉に呆れ加減の馬鹿ねという言葉聞いた。その大半には軽い哀れみも込められている。

リィザの顔が曇ったのにまず気付いたのはミアで、ミアの表情からシアナの方もそれを悟ったようだった。

あんたね、と髪を弄る手を止めて、ひょいと横からリィザの顔をのぞき込む。間近で見ても欠損一つ無いシアナの肌はなめらかに輝くようだった。

「いい加減、覚悟しちゃったら？　どんなに拗ねたって泣いたって、あんたはあたしたちの仲間になるんだからさ。……水揚げが済んだらあたしのリボンからあんたの好きなのをあげる。口紅と頬紅も、あたしたち肌の色が殆ど同じくらいだからきっとあんたにも似合うよ。ねえ、もっと楽しい方のこと考えよ？」

ね、と笑顔で念を押されてリィザはどうにか微笑んだ。シアナの意図もそれが気遣いだということも分かるのに、素直に頷いて流れに身を任せてしまうには覚悟が出来ない。最初の日ですくんだままになってしまった心が、どうしても折れないのだ。

自分がこんなにも彼を恋うていたのかと思うのはこんな時だ。せめて思い出になるようにと持ってきた硝子の小鳥を部屋の鏡台の脇に見つける度に泣きたくなる。それが美しい過去であればあるほど、哀しく見えてくるのが辛かった。

だが、黙り込んでしまったリィザに明らかにシアナは不機嫌になった。彼女は機嫌の善し悪しがすぐに顔に出る。リィザが自分の言葉に不承であることが氣にくわないのだ。

「何よ、すぐ浸っちゃってさ……本当の、本当に、抜け道はな、い、か、ら、ね！」

シアナはそう吐き捨てるように言い、編みかけていたリィザの髪を放り出した。ばらけた髪が頬にかかる。

リィザは振り返って面白くなさそうにつんと唇をつきだしているシアナを見つけた。目が合うとシアナは不機嫌そうに視線を逸らし、ことさら取り繕ったような無表情になった。その顔立ちに何処か見覚えがあるような気がしてリィザは目を細め、それから納得して微かに声を上げた。

彼女は似ているのだ。ライアンといったはずの、あのチェインの王に。

シアナの方が格段に表情が豊かで性別と年齢の差があるが、彫りが深くてくっきりした顔立ちや面輪全体に漂っている空気が酷似している。

髪の色が余り変わらないのもその印象を深める一因であろう。瞳の色まではリィザのいた位置からは見えなかったから、それは分からないが。

リィザは思わずじっとシアナに見入っていたようだった。同い年の遊女はその視線に居心地悪

そうに身じろぎし、何よ、と不満声で言った。

「いえ、あの―――」

何でもありませんと言い掛けてリィザは言葉を飲み込む。シアナが曖昧な誤魔化しを好かない性質であることは既に知っていたからだ。

あれほど好きな男に似ていると言われれば不機嫌にはならないだろうとリィザは思い直し、暗く凍えかけた頬を懸命に動かして微笑みを作った。

「ただ、シアナねえさん、ライアン様に似ているなって……」

それを言い終えない内に、シアナがいきなり口を歪めてうるさいと怒鳴った。驚愕で思わず固まってしまったリィザの髪から編み込んでいた白い造花をむしり取り、シアナはぎゅっと唇を噛んだ。

その顔色が怒りにか別のものにか赤く染まっていく。

自分がシアナのどの部分の急峻な激高に触れてしまったのか分からないままで、リィザは取り繕うためだけにごめんなさいと口にしかけた。

それをやんわり遮ったのは白い手だった。唇を塞いだ手がそのままずっと自分を抱き寄せ、香の種類でミアだと分かる。

ミアはリィザを包むように後ろから抱き、シアナ、と強い声を出した。

「―――いもうとを、理不尽に怒っては駄目よ。かあさんだっていつも言ってるでしょう、理由があって叱るのはいいけど、怒っては駄目、いいわね？」

シアナは頬を紅潮させたまま、じっとはたき落とした白い造花を睨んでいる。その時間が気の遠くなるほど流れた頃、やっそこくと一つシアナは頷いた。

「……ごめん」

低くそれだけ呟いて造花を拾いもせず、自分の部屋へ走り戻っていくシアナにリィザは何を言っているのか思いつかなかった。

シアナの姿が遊女部屋へ通じる回廊へ消えてしまうと、ミアは抱擁を解いた。彼女からはいつでもふんわりした香と化粧の混じった仄かな薫りがした。

ねえさん、とミアを不安に見やるとミアは仕方なさそうに微笑んで、首を振った。

「あの子には、ライアンと似ていると言っては駄目よ。それをとても気にしているからね。この前の宴席の時にでも教えてやれば良かったわ」

何故であるのかをミアは口にしなかった。それは彼女も知らないのか、それとも告げる気がないのかどちらであるかは推し量れないが、少なくとも誰かに聞くことの出来る種類でないことを理解すればそれで良かった。

「……シアナねえさん、いいんでしょうか……？」

ただ、自分が彼女を酷く傷つけてしまったのだろうかと思うと胸が痛い。

あれほど馴染ませようとし、可愛がろうとしてくれるシアナに対して申し開きの出来ない仕打ちをしてしまったような罪悪感が深く自分を刺し貫くようで、リィザは痛みのために深く呼吸をした。

ミアは再び困ったように笑い、周囲の女たちを見回した。

彼女たちもまた、シアナの怒りの顛末を息を潜めて見守っていたのだと分かったのはそのとき

のことだ。ミアの視線に重い空気がなぎ払われていくようにか、ようやく彼女たちから忍び笑いのような、微かな苦笑がこぼれ始めた。

「仕方ないわ、知らなかったんですもの」

「シアナはちょっとかあつとなる子なのよ、悪気はないから放っておきなさい」

「ライアンのことはあの子が言い出した時につき合ってあげたらいから」

一つ一つに頷きながら、リィザはやっと人心地ついたように体を楽にした。ぬくやかな女たちの言葉にも、シアナの怒りにも、女ばかりの格子の中の王国の、自然な流れがあった。

いつか自分もその中に入らなくてはいけないのだろうか。そんなことを思うとリィザは溜息がこぼれそうになる。

それを誤魔化すために身をかがめて鈴蘭の造花を拾っていると、ミアがいらっしゃいとリィザを手招いた。

「――シアナを許してやって、嫌わないでね.....あの子は言いたいことを言うけど、嘘をつくほど姑息じゃないの。それがとても良いところなのよ」

はい、と呟くとミアはほっとしたように笑い、シアナが滅茶苦茶に崩してしまったリィザの髪を改めて編み始めた。

他の遊女が自分の化粧箱の中から白堊の小花のついたリボンを、更に他の女は大輪の百合を彫り抜いた象牙の腕輪を、それぞれ貸してあげるわと寄越してくる。

そうやって飾り立てて化粧を薄くはたけば、鏡の中にいる自分はそれまでのどんなときよりもまじに見えた。

この姿を少年に見せることが出来なかったのが不幸なのか幸いなのかリィザは考えようとしたが、思うだけで哀しくなるのはいつもと同じだった。

彼にはもう会えないかも知れないという薄い恐怖は日ごとに重くなってきている。

否、それよりも.....遊女として帝都にいることを知ったら彼は一体どんな顔をして何と言うだろうか。

自分を蔑むなら辛いし、哀れむなら尚辛いし、それでも変わらず好きだと言ってくれたら――一多分、それが一番悲しいだろう。

いくら思考を重ねても、辿り着くはずだった幸福の彼岸は遠く、既に遙かに霞んで見えなくなっている。彼の手がそこへ導いてくれると信じていられた無邪気な未来への絶対信頼は、不意打ちに崩れてしまったのだった。

暗くなりがちな思考を、リィザはそれでも振り切ろうとする。遊女たちは優しく、女将は厳しいながらも情理の通る人柄で、自分は恵まれている方なのだ。

妓楼でも酷い場所になると部屋らしい部屋もなければ、日に幾人もの客を無理矢理取らせることもあるのだと他の遊女たちの眉をひそめた訳語りで学んでいる。更に女を道具としてしか扱わないような娼窟になると、薬を使って3年で廃人にして顧みないらしい。

タリアの大通りから1本入った辺りのこの妓楼は、遊女の揚げ代は大きな棚よりは手頃で娘たちの管理はしっかりしている。少なくとも、女将があたしの娘という時はきちんとした情を感じることが出来た。

だから、自分は運がいいのだ——恐らくは。

生きていけるだけで幸福だと素直に信じていられた日々、自分はきつととてつもなく稚なかつた。人生は連綿と続く日常そのものであって、それ以上のものではなかつたのだ。

首を傾げると、鏡の中の着飾った少女が同じ仕草をした。黒い髪にさやさやと触れて揺れる白堊の飾りが愛らしい。

それを愛でるのが永遠に少年ではないだろうと思うと、ひどく息苦しくなる——

リィザは首を振った。周りからこれほどに氣遣われて優しくされて、なお自分一人がかたくなに全てを拒否できるとは既に思うことが出来ない。足りないのは覚悟なのだ。

もう彼には会えないのだと認める覚悟、これから先しばらくをこの妓楼で過ごしていくための覚悟、そして未知なるものへ闇雲に身を任せてしまう覚悟、それとも全てを放擲して天窓からでも身投げしてしまうというような、思いに殉じる覚悟も。

じっと鏡を見据えたまま考え込んでいるリィザの頬を、そっと撫でた指先はミアだった。先輩の遊女を見上げると、彼女は淡く悲しげな陰をまつろわせて笑っていた。

「……また彼のこと、考えてる」

それはその通りで、リィザは氣恥ずかしさのために赤面して俯いた。いつまでも自分一人がぐずぐずと思いめぐらしても状況は変わらないのだから。

羞恥の仕草をミアは笑わない。ますます優しげに笑ってそっとリィザの手を握り、囁いた。

「忘れなさい」

きゅっとその瞬間にきつく握りしめられたやわい痛みを、リィザはきつと忘れないだろうと思った。

「忘れなさい、もう会えないわ——いいえ、会わない方がいいのよ」

頷きたい、とリィザは思った。

ここでひとつ、こくと首を動かして氣の済むまで泣いてしまえば何かが遠い河へ滑り落ちて涙の海へ落ち着くように、想いの漂う海へ還るように、きつと何かが軽くなるだろう。それが分かっている、どうしても、どうしても。

彼が好きだという気持ちが恋であるのか愛であつたのか、もう分からない。確かめるすべは残っていないのだから。

ずっと以前、もう殆ど思い出せないような昔に思える過去、リィザは名も知らぬ神へ祈っていた。他人に話せない大それた、密やかで重大な望みを口にする時にすぎるものはそれしかなかったのだ。

そしてその神への祈りは少年の名を呟く事へすり替わっている。

彼との恋だけが、彼女の希望だった。それが潰える瞬間さえ分からなかつた。

それが誰の罪なのかリィザには判断が出来ない。いっそ自分が全てを背負い込んで卵殻に籠もる雛のように、世界から巢籠もってしまえばいいのかもしれないが、それもまた覚悟が——性根が、足りない。

何もかも中途半端に足りない自分こそ、最も罪深いのかもしれない。

「……ねえさん、私……」

握られている手の暖かさに泣き出しそうになりながら、リィザはミアを見上げた。ミアは首を

振り、先ほどよりももっと優しい声を出した。

「会わない方がいいの。もう、忘れなさい。苦しいと思うなら心を眠らせて、綺麗な夢を見るといいわ。次の朝に目が覚めるまで、うんと綺麗で楽しい夢を」

ミアはそんなことを言って、リィザの目をじっとのぞき込んだ。

夢、とぼんやりリィザが繰り返すとミアはそうよと深く頷いた。

「私たちが夜眠るのは次の明日を生きていくためなのよ。そのために人は眠るの。どんなに辛い夜でも夢を見て癒されれば、きっと次の朝にはまた生きていけるから」

リィザにとって今が明けない夜であるならば、次の朝を目覚め生きていくために心の目を閉じて夢に遊んでも良いのだとミアは言い、そして囁きよりももっとさやかな声で呟いた。

「みんな、好きな人くらいならいるのよ……大好きな人がいるなら幸福よ。巡り会えただけでもいいんだって、そう思ってる……でも、もう会えない人を思うのはおよし。いつかきっと、これで良かったんだって思えるような恋をまた見つけれられる。そんなに好きな人に出会えて恋が出来たんだもの、あなたは幸福なのよ。過去だけは自分が幾らでも綺麗に繕える、誰にも持って行かれないものだもの」

「わたし……」

リィザは呻くように言った。

「私、若様に会いたい……会いたい、会いたい、会いたい……会いたい……」

繰り返して呟くと、一層それだけが全てであったのだと思い知った気分だった。

彼にもう一度だけ会いたい、会ってさよならを言いたい——いいえ、それよりも。

「私、若様のこと、大好きでした。本当に、好きだった……」

本当に言いたかったのはその感謝だったかもしれなかった。それを告げたいと思った時には既にこの赤い格子の中の小鳥として生きていくことが沢山の他人の思惑で決定してしまっていて、リィザにはどうする術もなかった。

「ありがとうって言いたかったんです……こんな私でも、好きになってくれて、嬉しかったって……本当に幸せだったって……」

そうね、とミアが握り込んだ手をさするように撫でた。

はい、とリィザは頷き、ねえさん、と顔を上げた。

「でも、もう、会えないんですね……？」

ミアはゆっくりと、しかし確実に深く頷いた。リィザもまた頷き返した。

誰かがはっきりと口にするまで、認めたくなかった。夢を見るような未来がまだあると信じていたかった。白昼にも目を開けてみる種類の夢を見続けたかった。

でも、それはもう自分の元には返らない未来なのだ。

「あの人に、もう、会えない……」

口にした瞬間に、それはざあっと流れ落ちてくるように身の周囲に現実として降った気がした。リィザは微かに肩を震わせて、きゅっと唇を噛んだ。遊女たちが丁寧に入れた紅のにおいだけが鼻についた。

不意にミアが彼女を抱きしめた。彼女の化粧の薫香に誘われるように最初の涙が落ちた瞬間に

、リィザは声を上げて身を崩しながら年上の女にすがりついた。

小間使いの少女が来客を告げた時、女将はちょうど帳簿をつけ終えて一服を始めるところだった。煙草は振り出しの妓楼にいた頃に覚えたが、悪い習慣だと思いつつも手放せない。来客といっても気兼ねするような仲ではなかったから、女将は煙草に火を入れながら、手振りで適当に座るように客に促した。

「かあさんが用事っていうのは珍しいね」

そんなことを笑いながら言って女将の前の椅子に腰を落とす男も煙草のみだ。暫く二人で向き合って黙りこくりながら煙管をいじりあっていたら、いつものようにぬるく空気はほどけていくものであった。

この男が自分を名で呼ばなくなったのはいつ頃だったろうと女将はふと思い、所々に白いものが混ざり始めた髪を見やる。

お互いに出会った頃は10代の若さであったが、年月の神というものは容赦がない。男からは脂気を、女からは水気を、それぞれ等しい量、奪っていく。

うんと遠い昔はこの男の肩に爪を立てたこともあった。けれど遠景の中の陽炎のように、それは既に霞んでいる。

一体それがどんな気持ちであったのかを説明することは難しかったが、自然と体が離れていくに従って、心は近くなっていくのは不思議だった。あるいは沢山の修羅場を同時に見た悔恨と歓喜が強く自分たちを結んでいるのかも知れない。

いずれにしろ、今は既に自分は瑞々しい奢りと華やかな驕慢の中にあった遊女ではなく、男もまた上だけを睨むようにしてぎらぎら輝いていたタリア王の若い幹部ではない。お互いに未来が自分の良い方に転がっていくと頑なに信じていた時代は終わったのだ。

そんなことを思って女将はふと鼻で笑った。自分もずいぶんと老けたものだと思ったのだ。

ほんの10年ほど前まで自身の馴染みの客とも時折寝るくらいはしていたはずなのに、まるですっかり干上がった年寄りみたいなことを。

けれど、店棚にいる年若い娘たちが繰り返す恋情沙汰の一つ一つがいつか自分が見ていた過去の光景と重なって、自分の経験からひいては年齢までを感じることも多い。

結果も結末も分かっているはずなのに娘たちの真剣な愛情を一息に切り捨てることが出来ずに却って苦しめてしまうこともあると、分かっているが自分の甘さに再び女将は苦笑になった。

「今日のご機嫌だね、かあさん」

男が煙管をいじりながら言った。女将はそうだねえと笑い、一服吸ってからあのね、と切り出した。

「あんたに見て欲しい娘がいるんだよ」

男は煙草を続けながらふん、と何度か頷く。あの白い衣装の子だねと言われれば頷いた。

見て欲しいという言葉には気に入ったかどうかを尋ねる意味が含まれている。だとするのならそれは水揚げ前の娘についての話である以外にはなく、今この妓楼には見習いは一人しかいない。この店の一番の揚げを誇っている娘の説得で、やっと客を取ることに同意してくれたばかりだ。

未だに痛々しく目を腫らしたまま起きてくるのも、仕方あるまい。いずれにしろ、何にでも人

は慣れていく動物だと信じる他はなかった。

だからそれには頓着しないふりでてきぱきと水揚げの準備を進めてきたが、肝心の入札が入らない。例えばシアナの時には数件の入札があって比較的高い値が付いたものだが、本人が人目を引く美少女というわけでもなく、明るく客に愛想を言うでもないのならば、これは諦めるしかなさそうだった。

「……若いよね。いくつ」

「14。男は知らないから、まあ、なるべく優しくしてくれるのをと思ってね」

タリアの男には奇妙にゆがんだ性癖を持っている者も珍しくない。外から来る客などはそうでもないが、タリアの内側の抗争に身を置いていれば緊張の解ける瞬間には何かがたわむのかも知れないと女将は思っている。

最初から娘たちにそんな応用問題を解かせるつもりがないのは確かだったし、この男がごく普通に女を扱うことも知っていた。

若い連中のうち宴席で親しげに話していた隻腕の男でも良かったが、後で他の娘に聞いたところによるならば、彼女は他の無軌道な少年たちの悪戯に衝撃を受けていたようだった。だから女将は彼女が宴席で泣き出してしまったことを殆ど叱ることが出来なかったが、若い男はこの際しばらくつけない方がいいかも知れない。

適度に油の抜けた優しげな中年男の方が、恐らくは彼女を安堵させるだろう。父親は記憶にないと言っていたから、いっそそんな風にでも慕ってくれさえしたら。

女は大切な商売道具であると同時に女将にとっては娘でもあるのだった。

「彼女ねえ……かあさん、どうしてあの娘を買ったんだい」

意外なことを聞かれた女将がどうして、と聞き返すと男はいや、と苦笑気味のような曖昧な顔になった。

「かあさんの好みじゃないからさ——あんたは昔から、明るい娘が好きだったろう。割とね。だからちょっとかあさんの趣味に合わないような気がしてさ」

別に彼女がどうこうじゃないよ、と付け加えて男は煙管をくわえた。

男の言いぐさに女将はそうかも知れないと何度か意味無く頷いた。

確かに女衞の男たちが連れてくる少女たちのなかから自分は明るくて快活な娘を取る傾向にある。というよりも、宴席の座持ちのことなどを考えていると自然とそんな娘が増えてきたという方がいいだろうか。

ただ、と女将はあの少女の笑顔の印象を思い出す。それまでは平凡といってよい顔立ちに見えていた少女が、微笑むと何かが切り替わったように愛らしく見えた。

笑顔が良いというのは女を口説く古典のような文句だが、その究極に強力な形を見た気がする。

大人しげな風情、大きな瞳、黒い髪。多分これらが全て完全に調和したならば、女神の如く崇められなくとも、天使のように愛されるに十分だと直感したのだ。

それに、連れてきた女衞の男は基本的には大通りのもっと大きな妓楼に出入りしている。時刻は既に夕方を過ぎて妓楼の長い夜が始まった後、女衞は本来客のいない時間に娘を連れて売り歩くものだから、自分の所へくるまでに大廻りを相当回ったに違いない。

女将は彼女をもっと大きな店へ入れようとした――それだけの価値がああ少女にあると踏んだのだ。その読みを、女将は信じている。

そんなことを女将は煙草の合間に説明した。男は既にタリアの住人ではないが、元はタリア王の配下であるから妓楼の仕組みや女将の勘は知っている。

女将の言葉が終わるのを待って、男は頷いた。

「まあ、いいさ。かあさんに貸しとくよ」

水揚げを引き受けたことを簡単に告げて、男は煙草の火種を灰皿に落とした。

男の年齢からして、怯える娘を宥めながらの破瓜の儀式はそろそろ気が重くなってくる頃だ。それには粗野な衝動が要るが、脂が抜けていくにしたがってそうした部分もまた、落ちていくものだ。

だがこの男に頼もうと思いついたのは決して間違いではないはずだと女将は考える。タリア王の元に出入りしていた頃の男にはなかった余裕と穏やかな優しさが、彼がタリアをでてから20年で身に付いた結果だとするならば信じるに足りた。

いつ、と聞かれて来月の頭にはと返答する。その直前に少女の月経が終わるから、それを待つつもりであった。

「……優しくしてやっておくれよ。無理はさせないで。最初の男で全てが決まるとは思っていないが、ある程度の価値観は決まるからね」

「分かっているとも。かあさんの信頼を裏切るようなまねはしないよ」

男は仄かに笑った。

灰を切った煙管を丁寧にぬぐい、腰のベルトから差し込むのは煙草をする男たちの大体の習慣だ。次の一服を始めないと言うならば、男はもう帰るつもりでいるのだろう。

場に現れてからさほど時間はたっていないが、男は忙しいのは知っているから引き留めるつもりはなかった。

女将は立ち上がって応接室の扉を開けてやった。昔はタリアの中でも修羅と呼ばれて憚らなかった男の背は同じような高い位置にあるが、以前のような体全体から発散されるような蒼い凄味は消えている。

20年前に彼は突然人の諍いに愛想を尽かして修道僧になってしまったのだ。その心境の変化を男は気が向いたのだと笑ったが、きっと何かがあったのだろう。

それが何かと聞かないのと言わないのも、自分たちの間にある信頼がそうさせている。僧職に水揚げを頼むというのも奇妙な話ではあるが、男が承知したならよいのだろう。

帰りしな、男は思いだしたように幾ら、と聞いた。女将は少し思案顔にしてから言った。

「200で全部揃うようにしておくよ」

水揚げには揚げ代の他にも祝儀や花や記念の衣装など、細かなものが沢山入り用になる。それを全部で200で揃えるというなら、こちらから頼んだ負い目を差し引いた程度の勉強はしたということになる。

だが、男は明るく笑った。彼の笑顔の嫌み無い朗らかさだけは、ずっと変わらないものであった。

「いいや、かあさん。後１００、出そう。それで少しは良い花と良い衣装を揃えてやっておくれ」

女将はありがとうと呟いた。男は軽く笑い、ふと真面目な顔つきで女将に向き合った。

「あんたとつるんでいられるのもそろそろ終わりかもしれないからね。どうやらこの秋には北部へ出向だ——やっと、正式な教師免許が降りたからね」

そう、と女将は頷いた。地方の教会は大概、子供たちのための初等学校を兼ねている。そこで教鞭を執るのは神職者であるのが普通だ。

男が以前から人生の最後をどこかの鄙村で穏やかに過ごしたいと望んでいたことを女将は知っている。教師免許を持って地方の教会へ出向するというのなら、望みが叶ったことになるのだろう。

だから女将はおめでとうと言った。男は軽く頷いた。

「だから、これがかあさんにしてやれる最後かも知れないと思ってね——どれ、娘はどこに？少し話をしていこうか……源氏名はなんと」

「リーナ。矢車草の淡い紫」

女将はゆっくり言った。本名が矢車草を意味するリィザであるなら、そこから派生する薄青紫の色名を与えるのがいいだろうとここしばらくで出した結論である。本名とさほど変わらない呼び名を与えるのも習慣であったし、その響きは彼女には似合っているように思われた。

リーナね、と男は繰り返して出ていった。残されて女将は新しい葉を煙管に詰め始める。この習慣だけはどうやら墓場まで持っていくことになりそうだった。男はきっと上手くあの娘を言い宥めてくれるだろう。あの娘が持っていた銀の板は神へ祈る時の道具だし、適当に威圧の抜けた年上の余裕に甘えさせるだけの、男には器量がある。

娘たちのことはいつでもそれなりに女将には気懸りだった。最初に入った妓楼から身請けされて出ていった先で女将は一人女の子を産んでいるが、実娘は３歳の誕生日を迎える直前に死んでしまった。

今いる娘たちは、だからみなあの子の代わりだ。死んだ子の年齢を数えるのが如何に馬鹿馬鹿しいかと思いつつも、それは今一番年齢が上の遊女と同じくらいだと知っている。

身請けされた先の主人が亡くなると保証もなしに屋敷を追い出されたから、タリアに戻ってきた。

主人の存命中に買い集めておいた宝石などを元手に、タリアのもっと奥の方に小さな妓楼を開いたのは、自分の知る世界があまりにも狭いのだと気付いたからだ。

娘たちは４人、その全員はもう妓楼にはいない。自分も彼女たちよりも１０ほど上であるだけだったから、時折は客も取った。

そうして生き抜いてきた挙げ句、やっとこの店にまでたどり着いたのが７年前のことだ。

タリアというのは不思議な町で、これほどの妓楼が建ち並び、女の美しさが一番にまず価値を持って品定めされるというのに、この町で勝ち抜いていく女たちはさほど美しくない。

無論何を以て勝利とするかで基準は違いうだろうが、女将は決して娘たちが夢見がちに語るように恋を得た相手に望まれて幸福な結婚のために出ていくこと、であるとは思っていなかった。

最初の妓楼を出ていく時には自分もそう信じていたが、普遍や永遠はこの世にない。男は確か

に自分の人生に豊かな色彩を与えてくれる。恋も愛も、どんな色であっても眩しく見せてくれる。

けれどそれは一瞬の所作、年月の大河の中で水泡になって弾け消える夢でしかない。どれだけ美しい色を添えてくれるとしても、その中核にいるのは自分自身であり、染められるのは自分の人生なのだ。相手の男ではない。

生き抜いていくのに必要なのは自分の意地と才覚で、それだけが娘を亡くしてタリアへ舞い戻らざるを得なかった女将を支えてくれた。女将は年齢を重ねた今でも整った容色を持っているが、自分の美しさになど何の価値も見いだしていない。

そうしてがむしゃらに生きていた日常の、ふっと空く陥没のような時間には、女将は今まで知ってきた沢山の女たちが押し流されていった赤い奔流を見る。その色が酷く暗く悲しげであればあるほど自分の正しさを確信できるのに、時折は全く反対のことを考えもするのは可能性をさぐる人の本能だろうか。

女将が思い出すのは決まってあの異国の女だ。南の国から連れてこられた、美しい女だった。最後までこの国の言葉が片言のあやしさのままで、だからこそ一層に可憐であった女。

恋をして舞い上がってつぎ込んで、裏切られては泣く事を繰り返して最後には運河に身を投げた、ずっと昔の妓楼で一番仲が良かった、あのいもうと。

彼女の華やかで寂しい人生を思う時、自分は明らかに勝利者であるという自負と共に一抹の羨望を飼う。それは自分が恋に遂に耽溺しきれなかった女であることと密着していることなのだろう。

あのいもうとの息子も娘も、母親によく似た線のきつい美しさを持っていた。息子の方は2度ほどしか見たことがないが人形のように凜と整った面差しをしており、娘の方は.....今は女将の娘だ。源氏名をシアナ、本名をシャラという。

女将が連れてきた中では久しぶりに極上の美人になるだろうと買ったのだが、身の上を聞いて不思議な縁に驚嘆した。似ているとは思っていたが、いもうとのようなやや冷たく見えがちな美女は多い。珍しい顔立ちではないのだ。

シアナか、と女将は深く煙を吸いながら、目をすがめた。リーナのことも確かに案じているが、シアナの先ゆきも別の意味で溜息をつきたくなる。

シアナもいもうとと同じく恋に身を滅ぼす種類の女だ。少なくとも、その素質はある。ライアンにひたすら入れあげて他のことを構わない狭窄を女将は何度も叱ったし、そのせいで他の客が疎かになりがちなのはすぐに指名の減少につながると他の遊女たちにも散々言われてなお、シアナの性癖はいっかな直りそうにない。

ライアンがその欠損を派手に埋めようとする結果が数度の宴席という形になって実際は潤っているのかも知れなかったが、女将はその方法も気に入らなかった。土台、それはライアンが彼女を身請けるか彼女を諭すのが一番良いのだ。それを金でうやむやにってしまう方策が癪に障る。

これまでも何度か女将はその話をライアンにしてみたことがあるが、彼は身請けに関しては素っ気なく断り、説得に関しては乗り気でなかった。

ライアンはシアナを自分の異父妹だと思っているのだろうかという疑問は、女将の中ではすぐ

に否定されるべきものだ。

確かにいもうとの最初の子はライアンと言ひ、後に生まれてくるシアナの7歳上の、暗い目つきの笑わない子供であった。いもうとがシアナを生む金ほしさにライアンをどこかの曲芸団に売り払った経緯や、シアナが日ごろ顔も知らない兄の話を聞かされて育っていたことをあわせれば、境遇や年齢の相似から兄妹であると考えすることは不自然であるとは思えない。

だが、ライアンは自分がシアナの兄ではないと知っているはずだ。シアナから聞いたのか女将と彼女の母が古い知己であると聞いて、自分に問うたではないか。

(シャラの兄を見たことがあるか)
と。

いもうとの息子が名をライアンと言ったことを女将は覚えていたから、そのときに彼がシアナを妹ではないのかと思っているのだと知った。

だが、自分はすぐに否定したはずだ。シアナの兄である子供を見たことはある、だが、その瞳の色はあの下らない父親と同じ琥珀色だったと返答した。ライアンはシアナと同じ緑色の瞳を僅かに歪め、すぐに分かったと言った。兄妹であることを否定した後にライアンはシアナに通うのをやめるのかと思ったが、そうではなかった。以前と変わらずに姿を見せるのが、不思議でたまらない。

一体二人はどうなっているのだろうと女将は思うことがある。

シアナがライアンと自分の面輪の相似を指摘されて怒るのは、それが彼女の胸奥に巣くう不安の根に近いからだ。兄妹だと本当に証明されてしまったらライアンは自分にますます遠くなるだろうという恐怖から、半ば反射のように反応してしまう少女を哀れにも思う。

ライアンは兄妹である可能性を否定する材料をシアナには一切伝えていないし、女将にもその口止めを頼んでいる。だから二人が馬鹿馬鹿しいことではあるが男女の関係を結んでいないのは女将から見れば明白であった。

シアナがライアンの特別な女だと吹聴するのは意地でもあろうし見栄でもあろう。

それに合わせている男の方がどちらかというなら悪いが、それでシアナの気が済むならば黙っていてやってもよかった。

可哀相だと思うのは、シアナのそうした性格の偏りや脆いくせに高い矜持ではない。人を形作る神というものがいるのなら、何故、丁寧に造形した美女たちに限って内部のねじをいい加減にするような真似をするのだろうということだ。

そんな女たちを厭と言うほど見てきた。

とてつもなく男にだらしない、絶句するほど金銭感覚が荒い、そして呆れるほど純情すぎて頭が悪い――

そのどれか一つでも内側に持った麗女は不幸になると決まっている。遊郭にくる男たちの戯れのような言葉に本気になって金がないと言えれば揚げ代を自分が肩代わりしたり小遣いをやったりする娘、男に与える金のために必死で他の客の気を惹こうとする娘、そんな娘たちを叱って良かったことなど一つもないが、それでも言わずにはいられなくなる。

それを言った時に娘たちがいう言葉も決まっている。愛しているのだとか身請けの約束をしたとか。愛している女から金をむしる男などいない、金も持っていないくせにどうやって身請け

するつもりなのか、そう言っても大概聞く耳を持たないものだ。

信じてはならないものを信じて身を持ち崩していった女たちの結末は、大抵聞かない。彼女たちは消えていくのだ。赤い河の先に待ち受ける、黒い闇の中へ。

シアナもそうやって消えていく運命にある女になるだろうか。女将はそれを思い、自分で否定したために首を振った。

少なくともライアンは金払いは悪くない。彼女を悪く利用していないだけでもまだましであると自分に言い聞かせ、それでも気に入らないと不満を呟く胸を宥めるために煙草を飲んで呼び鈴を取った。

リィザに与える水揚げのための衣装の採寸と生地を選定をしてやらなくてはならない。水揚げの衣装は特別なもの、一度袖を通してそれきりにするものだが、男が多少奮発してくれた分をそちらへ回してせめて飾ってやりたかった。

幾ら美しく着飾らせても、あの娘の心が晴れやかになるわけではないと分かっている、してやっても良いことというなら、女将にはそれくらいしか思いつかなかった。

貸し部屋の主人からの連絡で、チアロはタリアの最浅部付近にあるその場所へ顔を出した。彼とすっかり馴染みになった主人は最上階にある特別室の鍵を彼に放り投げる。それを手早く空中で捕まえて、チアロはありがと、と軽く笑って見せた。

「いいけどよ、チアロ。おまえさんたちがどんな商売しようが勝手だがね、それにしたって限度があらあな」

主人の言葉は半ば呆れたようでもあり、そして残りは本気での憂慮であった。無論その気遣いの中には上客に対するおもねりも入っている。チアロはその言葉に浅く肩をすくめ、そして苦笑になった。

「俺もそう思うんだけどね。でもまあ、本人がいいって言ってんだから」

「そりゃあ——そうかもしれねえけどよ。あんまり続くとあのお嬢ちゃん、あと3年で使いもんにならなくなるぜ？」

本当はお坊ちゃんなんだけどねとチアロは内心で補足し、そして大丈夫だよと明るい声を出した。

「本人は割り切ってる。だからいいのさ。ありがとうよ親父さん、あんたが心配してたって聞いたらあいつも喜ぶかもな」

チアロの言葉に主人はふんと照れ臭そうに鼻を鳴らし、もういけという合図に顎をしゃくった。深く追求しないのはこの街の住人の習性でもあった。それに今更に感謝しながら、チアロは階段を軽々と駆け上がった。特別室は最上階の全ての面積を使っている。そこは他の客とは絶対に顔を合わせなくても済むようにと配慮された、文字通りの特別な部屋だ。調度も、専用の廊下も、全てが。

チアロが部屋へ入っていくと、微かに奥から物音がした。いささかの用心のために腰に差した細刃刀に手をやりながら、チアロは寝室へ足を進める。恐らくは彼一人しかいないのだと分かっている、それは身に付いた慎重さの一端だった。

果たしてそこにいたのはクイン一人であった。生白い裸身を投げ出すように広い寝台の上うつぶせになり、じっと動かないでいる。呼吸を示す肩の上下がひどく弱い。意識はあるのだろうかといぶかりながら近寄っていても、彼はやはりぴくりともしなかった。

チアロは彼の名を優しく細く呼び、肩をゆすった。反応のなさには不安になる直前に、彼の瑠璃色の瞳がゆるく開いた。それがは僅かに不思議そうに瞬いた後によりやく具象を現実として認識したらしい。唇から掠れた吐息がもれた。

「ああ……ごめん……」

呟く声の掠れ具合から、彼の消耗の激しさが窺えた。無理もないとチアロは思う。客の具合が混んでいて、彼はこの4日ほどは仕事だけに時間を費やしている。明日は休みであったはずだが、最後の最後ではずれを引いたのだろう。大抵の客はクインの尋常ならざる美貌と啞然とするほど高い矜持に吞まれたようにか彼を大切に扱うが、逆にそれで暗い情熱を発見する者もいる、ということだ。彼は今回は運が悪かったのだろう。

体に傷がないのはそれをチアロが煩く騒ぎたてるためであって、その制約がなければどうなっていたらうかという想像を一巡まわし、チアロは苦い笑みになった。

それは自分が考えるだけでも偽善でなかっただろうか。結局、クインの望みであったとはいえず彼の身体を素通りしていく男たちから金を巻き上げる、女衞のような真似であることは確かなのだ。

クインは体を起こそうとしていたが、なかなか巧くはいきそうになかった。消耗しきった気だるさが全身から滲んでいて、半身をあげるのさえ辛そうだ。それを手伝おうと手を差し出すと、クインははっきりした声で遮った。

「自分です、から——放って、おいて……」

それを呟く声音のひどい無力さにチアロは肩をすくめた。それは到底無理だといわざるを得ないが、クインは自分の限界を知らないように試してみるつもりの方だった。好きにするがいいさと半ばは投げやりな気持ちになってそれを見つめていると、やがてクインのほうに仕方なさそうな溜息と共に折れた。

「……ごめん、やっぱり、手、貸して……」

軽い言い方の中にも滲んでいる口惜しさにチアロは微笑みそうになって、慌てて口の内側を軽く噛んだ。そんなことをしたら後でクインに散々噛み付かれるのに決まっている。気位が高いのは彼の長所でもあり短所でもあった。だから黙って手を貸してやると、クインはのろのろした仕草で体を預けてきた。元々隆とした筋肉がついているわけではないことは知っているが、こんな瞬間は、ぎくりとするほど軽い。自分が酷くむごい事をしているような気持ちになる。

「大丈夫か？」

思わず口にした言葉にクインはうなだれていた首をゆっくり動かした。

「——大丈夫、じゃねえから、呼んだんだってば……」

それはその通りであった。自分一人では家まで帰り着けないと判断したクインが貸し部屋の主人へ音声管でも連絡したのだろう。客はそこまで親切なものは滅多にいない。

「悪い、そうだな。あんまり喋るなよ、体力をやけに食うぜ」

クインはチアロの言葉に曖昧に喉を鳴らした。分かったという意味に思われた。

彼が湯を使いたいといったので、チアロは肩を貸して彼を風呂場へ行かせた。足取りは酷く重かったが、自分で行けるだけましというものかもしれない。最初にこんなことがあった時は彼は全身の血が抜けてしまったように真っ青で、目を閉じてじっと動かないままであったのだから。

客を何かで怒らせたのだというようなことを後から言っていた気がするが、それが何であったかは忘れてしまった。最近では立てなくなるまで相手をさせられることが減ってきたことで、客あしらいというものを覚えていっているのだろうとチアロは思ってきたが——それにしても。

チアロはそっと彼に捕まって歩く美貌の主を見る。雪のように白く抜ける肌にぽつぽつと散っている紅華が目につく。それは確かに好き勝手な陵辱の後でもあったし、愛された痕跡とも言えた。どちらにしろ、彼は愛でられるべき存在であることは確かなのだ。基礎体力の貧弱さとすぐにかあとなる熱しやすい性質がもう少し改められたなら、きっと今以上に寵児となっていくだろう。その資格はある。

今この現在にも、幾つか彼を引き取りたいという申し出があるくらいだ。絹と宝石に埋めて溺れるほどに愛しんでくれるという言葉は信じていないわけではないが、本人が是と言わないのだ

から仕方が無かった。クインの考えていることといえば母親のことばかりで、誰かの稚児になってしまえば母親に対しての面目も言い訳も立たなくなると恐れているのだ。

黒死病であるとライアンが口から聞いている。それが死病であることも。もう療養所から生きて出ることは無いだろうとライアンは言い、そしてそれをクインには言うなと付け加えた。チア口は頷いた。ライアンの言うことは完全に正しかった。黒死が死病でありなおかつ他人に感染するならば、症状が収まっても決して療養所の外へは出さないだろう。

そしてクインにそれを指摘するのは酷だ——気づいていないのかもしれないが、いずれ分かる時が来るだろう。その時どうするかは、彼が自分で決めることだ。

力が抜けているせいで重たい体を引きずるようにし、チア口はクインをようやく陶器の風呂桶の中へ放りこんだ。適当にお湯をかけてやると初めて目覚めたようにぶるりと体を震わせる。髪の毛の黒い染料が落ちて湯船の中はあっという間に黒くなった。

クインはそれをぼんやり見つめ、不思議そうにも見える顔つきで湯をかき回した。黒ずんだ液体が彼の雪色の肌に染みをつけるような錯覚に囚われてチア口はおい、とそれを制止した。それに素早く片手を挙げて合図した仕草は、いつもの通りの彼の知る小生意気な少年であった。

「——大丈夫」

先刻よりはよほどしっかりした声でクインは言い、ほうっと溜息になった。吐息はまだ掠れ気味に疲れているが、湯の感触でどうにか自分の位置や現実をつかめるようになったらしい。少なくとも、先ほどまでのような危うい感じはしなかった。自分でこの先を出来るかと聞くと、クインは彼を見上げて視線で頷いた。チア口はそれに頷き返して風呂場を出た。

彼の服は部屋のそこかしこにてんでに散らばっている。どんないきさつがあったかは聞かないが、ふざけて部屋中を転げまわったのでないとするなら狩られたのだろう。同じ客からの次の指名を受けるかどうか、落ち着いた頃を見てクインに聞かなくてはならない。彼が嫌だといえは次からはこの客はなし、ということになる。

服を拾い集めて適当に検分したが、ボタンが2ヶ所、ちぎれてどこかへ行ってしまっているだけで他に欠損はなかった。秋用の薄い外套は最初に脱いで扉の内側に掛けたままであったから、羽織らせればいい。飛んでしまったボタンを探してみたが、とうとう見つからなかった。

それにしても、とチア口は風呂場から時折聞こえてくる湯水の音が一定でないことを耳の端に挟みながら溜息をつく。クインのこの、ひたすらに噛みつき吠え立てて客をわざと怒らせるような真似は何だろう。大人しくひっそりと微笑んでいれば壊れてしまうのを恐れるように男たちが彼を扱うのは分かりきったことであるのに、彼は時折それに無理やり逆らうように毒づいて見せる——最初彼をこうして迎えに来たときは、彼でなく、客からの要請であったのだ。

ぴくりともしなくなってしまった、死んだかもしれない——.....

そんなことをいわれて慌てて駆け付けてみれば単に失神であったのだが、これはまさしく運がいいというものであった。そんなことは時折あった。珍しいという出来事ではなくなってきた頃、チア口はようやくそのきっかけの一端に気づいた。

鍵は、恐らくライアンだ。クインが自棄に荒れる日は、大抵ライアンと会った後だから。クインはひどく神経質で、心理の上下が激しい。機嫌の良い時は朗らかで明るい子供であるが、一旦

荒れ始めるとそれはどこまでも続いていくようだった。それを自分でも持て余している。何度かそれを注意してみたことがあったが、彼は大抵訳のわからないことを怒鳴り散らすか不機嫌に黙り込んでしまうかで、埒があかない。落ち着けば反省はするらしく照れ半分の謝罪を呟いたりもするが、それにしてもその回数は随分と多かった。

そしてライアンはクインの心理状態には頓着しなかった。うるさい、とはっきり口にしないまでも、ひそめた眉や殆ど彼の言葉を見もせずの挙句の勝手な呟きは言葉よりも雄弁に語っている。ライアンはクインを手駒のひとつとして扱うことに決めたようであったが、クインのほうはライアンと対等に在ることを望んでいる。

クインの不満は分かる。ライアンは自分ときちんと向き合っていないと考えているし、それはおおむね正しいだろう。ライアンの言い分があるとするなら、それがどんなであるかもチアロは理解できる。彼はクインの事にばかり関わりあっている訳にはいかないのだ。彼の仕事は今のところタリアの中に巣食っている不穏当な連中を狩りだし噛み破るための獵犬というものであって、他のことは彼にとっては小遣い稼ぎ程度の重要さしか持たない。

チェインのことは別であったが、それも大体をディーやノイエといった連中に任せてあって彼自身は週に二度チェインの彼の根城へ戻れば多いほうだ。忙しいという曖昧な単語でクインが納得しないゆえに、大体の事情は説明してみたのだが、クインのほうは昔のように嬉々として首を入れたがった。ライアンはそれをわずらわしく払いのけてしまい、クインはむくれて荒れる――

チアロは溜息になった。クインがライアンを何故かはしらないが特別視するように、ライアンも確かにクインのことは特別に考えている。ただ、その表現は天と地のように違う。クインは比較的素直にライアンに寄っていくが、ライアンのほうは気安いとはいえなかった。

いずれライアンはタリア王の継承争いに全面的に関わることになるだろう。周囲もそう見てゐるし、本人もどうやらそのつもりらしい。それを現王アルードも知っている。だからライアンは見捨てられるものしか身近にしない。彼の周辺にいて彼が自分にまわりつくことを許している者たちは、いずれ彼がその手で切り離しても構わない者たちだ――自分も含めて。

チアロはクインの服を揃えてやりながら、苦く笑う。そこから一段上ってライアンの特別に擦り上がるためにはチェインを実力で手中にするか、いっそライアンの敵に回るか、それとも――残りの一つはあまりにえげつない。チアロはそれを自分がしないだろうということは理解している。

だからライアンがクインを容易に身近に寄せ付け、またはあからさまに可愛がろうとしないのは彼に対する尋常ならざる拘りの証明だ。実際、ライアンの特別であると分かったら、どんな目に遭うか保証は出来ない。だからライアンは失って困るものは身近にしないが、肝心の望みは聞いてやる。他者に漏れる可能性が少なくなった時点で、ライアンは彼の望みをほぼ全面的に受け入れてやったではないか。

これ以上は彼は自分と関わらせたくないのだ。何より、深く絡み合うことで出来あがる強い絆を、失うことばかり考えてしまうのだから。リアンという奇跡を、見失ったときのように。

チアロが再び溜息になったとき、風呂場の扉が開いた音がした。振り返ると多少回復したらしいクインが、火照って血色よく見える肌色で立っている。立てるならとチアロは安堵し、笑って

頷いて見せた。クインは柔らかい絹地の長衣をかぶり、染め粉が落ちてすっかり地毛の色となった髪を適当に布でふきながらチア口の側の長椅子にどさりと座った。ましな気分になったとはいえ、まだ疲労はあるらしかった。

「——何か、飲むもん、ある？」

声はまだかすれ気味だ。チア口は頷いて客の残していった飲み掛けの葡萄酒の壺を傾けた。赤紫の濃い色がグラスにたまっていく。クインは部屋の保冷库から氷を取って放りこんだ。

「自分だけ飲みたいもの飲みやがって……」

呟いている口調はすでに普段どおりの偽悪調だ。いいじゃないか、とチア口は軽くそれを流した。

「残してってくれたんだから、もっと堪能しろよ。この部屋の客なら好い酒だろ？」

クインはまあね、と肩をすくめる。ちろちろとグラスの中の酒を舐めている仕草は猫のそれとそっくりだ。彼は酒にはどうやら素質があるらしく、飲み始めたのが最近だといいながらも良く飲んだ。酩酊してくるとまたやっかいなことを怒鳴ったり陽気に騒いだりと煩いのだが、酒の味を楽しんでいるならばまずは機嫌良く落ち着いているといえる。それを見計らってチア口はクインの名を呼んだ。

「今日の客はどうだった。また指名されたら断ろうか」

クインはグラスを唇にあてたまま、こぼれるように笑った。この笑顔になったときは彼本来の悪魔的な美しさが満開に開くような錯覚を見る。

「また、取ってよ。面白かったよ。あんまり馬鹿だから笑っちゃったらかっとなったらしくて酷い目に遭ったけど、次はさせないから。それにこいつ、酒の趣味はいい」

そう言ってクインは何かを思い出したらしく、くつくつと喉を鳴らして笑った。最初の頃のように一人終わるごとに真っ青になって延々洗面所で吐いていたのとは雲泥の差だ。一晩が終わるごとに彼は嬌態と華やぎを身につけていく。それが眩しいとは思わない。誤魔化し方だけを覚えているとするなら何かが悲しかった。

チア口は彼の瑠璃色の髪に手をやって撫で、クイン、と淡く言った。

「無理、するなよ」

「うん……ありがと」

クインは少し笑い、グラスの酒を一息に飲み干して、続きのために酒壺をつかんだ。

.....僅かな時間、夢を見ていたようであった。今日は眠っていてもいいのよという遊女たちに従うように、リィザはひとときを自室として与えられた小さな部屋でまどろんで過ごした。

部屋中を圧迫するように飾られた白い花の香りは甘く、神経の底を幽かにたゆむ。それが気詰まりなのか高揚なのか分からないままに、包まれていれば胸の奥がざわついて、まともに眠ることが出来るかどうかは怪しかった。

だが、目を閉じていれば少しの時間でも意識は無かったらしい。帝都の時間を打つ時刻点鐘にはっと起き上がれば、既に天窓の外の空は暮れ始めていた。

リィザは身を起こし、丁寧に髪を手櫛で整えると顔を洗った。鏡の中にいる少女はいつもと同じように脅えたような目つきをして、じっとこちらを見つめている。黒い瞳、白い肌に流れる黒い髪。美女ではないと誰もが言う、ほんの少し大きい目が不安げに瞬き、濡れたような黒い色を際立たせた。

「.....リーナ」

リィザは低く呟いた。女将は自分にそう源氏名をくれた。あまり本名から離れた名はつけないのがこの妓楼の慣習らしい。リィザの名前は矢車草を意味するが、色は数種類あって、大抵は白い花を指す言葉だ。リーナというのは亜種の淡薄な紫色の花を示すときの言葉であった。

(紫は夜明けの茜色だよ)

女将の優しげに寝る声が耳朶の奥から甦ってくる。

(一番空が綺麗な時の一つ。誰かが空を見て希望を思う時間。おまえも、誰かにとってそんな風になってくれたらいいだろうね)

リィザはさほど遠くない記憶の中のその声に、曖昧に頷いた。沢山いる姐たちも口を揃えて言った――いつか、必ずお前を本当に大切にしてくれる人がここから出して連れて行ってくれるからね。そうして妓楼を出ていった遊女は沢山いる。全員が幸福になっているというわけでもないだろうが、それは自分次第であると誰もがリィザに諭した。それを信じたふりで、ずっと頷いている。

逃げたい。忘れるように言われて押し込んできた言葉がこの日は朝から浮かんで消えることを繰り返している。目を閉じていても胸の中で騒いでいるのはこの言葉だけ、危うい明滅がちらちらと脳裏を瞬いて、少しも落ち着かない。

リィザはこの日何度目かも分からない溜息になった。溜息はほんの一瞬、胸の中にある不穏な痛みをぬるめてくれる気がしたが、それは確かに刹那の安堵であった。冷水を浴びた反動で火照っている顔にゆっくり白粉を馴染ませていく指先さえ、幽かに震えている。

自分は一体何のためにこんな事をしているのだろう――ということに気付いてしまうと全てを投げ出してしまいたくなる。

だからリィザはそれに目をくれず、頬に僅かに残っているそばかすを覆い隠すことに専念しようとした。

日に当たるなという女衞の男や女将の言葉は正しく、この妓楼で暫く見習いとして働いている内にそばかすは次第に消えていったのだ。まだ多少は残っているが、荘園屋敷で労働に精を出していた頃よりは遙かに肌は白く美しくなった。普段使う化粧水もいいのだろう。

白粉、口紅、多種多様の化粧品と装身具。髪に飾る造花にリボンに銀花板。花板は手で曲げることの出来る薄い金属の板で、大振りなりボンや結い上げた髪を捲くときの飾りとして用いられるものだ。大抵は透かし抜きの模様が入っている。

リィザに与えられた花板は銀、模様は蝶と矢車草。彼女の水揚げを買った男からの沢山の贈り物の内の一つだった。

女将が気を回してくれたのか、水揚げが決まってから数日に一度はリィザの顔を見に来てくれている。本業は神職であると言ったが、彼は出身はこの街だとも言って笑った。タリアから神へ仕える者への転身は並大抵のことではなかったはずだが、彼はそれについては余り話そうとしなかった。

その代わり、リィザの持っていた神への紋様板を褒め、若主人が切れ切れに教えてくれた祈りの聖句や神話や教義のことなどをかみ砕いてリィザに語ってくれた。

中年にさしかかった肌は流石に若い者とは違うが、彼の持っている雰囲気はとても落ち着いて穏やかで、恐怖や気後れを感じることがない。彼が決して嫌いではないのは実はそれが大きかった。包み込まれ守られているような感触が安堵に変わるのだ。

リィザはその男の顔立ちや僅かに肌から漂う香料のことを思い出そうとする。そうしてないと、他のことに心がおぼれてどこかへ沈んでいきそうだった。

天窓の外は、ぼんやりしている間にも秋の早足の落日が終わりかける証拠の金色の雲が見える。この場所がタリアの中で格子窓から外を覗けば雑多で猥雑な通りが見えるだけと知ってはいても、空だけは何処で見上げてても変わらなかった。

リィザは天窓をじっと見上げ、やがて目を細めた。

悲しい時も、寂しい時も、飼い葉桶や洗濯籠や刈り取った綿花の袋を抱えて、同じように黙って見つめた荘園の空も同じようだった。綺麗な空だった。綺麗なものが好きだった。見つめていれば時間を忘れていられるから。

何も持たなかった日々には、それは庭園の夏薔薇であったり小糠雨に煙る虹であったりした。

それはいつからか硝子で出来た小鳥になった。透明で、窓から降る太陽や星や月の光にきらきら光る小鳥を見ていると、自分にある不幸など忘れていられた。

あの人、とリィザは呟いた。

彼は今、どうしているだろう。元気でいるのだろうか。

幸福に――というのが無理でもせめて、不幸と呼ぶ境遇の中にいなければいい。彼の明るい笑顔と律儀で真面目な性格は、そんなものには相応しくないのだから。

出来ることなら幸福であって欲しいとリィザは空に浮かぶ、金から紺紫に色を変えていく雲を見つめながら思った。

幸福であって欲しい。

あの幸福だった日々の決算とその象徴である彼の優しい瞳が、どうか今も曇らず、元のままに明るく清潔でありますように。そしてかなうならば彼が幸福でありますように。私に出来ることは、空から一枚硝子を隔てた場所で祈ることしかなくなってしまったけれど――

リィザは幽かに潤んできた目元をゆっくり拭いた。あの日々はそれまで幸福の具体的な形を知らなかったリィザにとって、紛れもなくそうだと頷くことの出来る、貴重な時間であった。彼の

肌の暖かみを知り、心の熱を知っていった過去は今完全に閉じられた、思い出という籠の中の幸福な宇宙のようだ。

もう一度遭いたい、とはもう思わない。そう決めたのだ。

彼が過去を大切にしてくれるだろうということをリィザは何故か無条件に信じる事が出来た。信じる事が出来たからこそ、自分は幸福だった。誰かをこんなに信じて想う事が出来た。何も持っていない自分の胸にも美しいと思える花があったことが嬉しく、そして愛しかった。

彼にはもう会えないだろう。会わないほうがいい。

いつか自分がこうして彼を思って覚える胸の痛みさえ薄れ、消えていくだろう。それが時間という薬の作用だから。他に思う人が出来るかどうかは分からないが、目の前のことを少しづつやっていこう。お金を貯めれば自分の自由さえも買えるのだという女将の言葉を信じよう。この場所で、生きていくために。

リィザはじっと雲を見上げ、深く呼吸をした。彼のことを思うとやはり胸の奥が鈍く疼いたが、それを無視しなくてはいけない時間であった。

もう、無垢でいられる時間はそれほど残っていない。水揚げは今夜だ。あの聖職の男がやってくるまでにあと一刻か一刻半――

リィザが本能的な怖れのために身を僅かに震わせた時、裏廊下からの扉が叩かれた。遊女の部屋は客を連れて部屋へ案内する時の表廊下と裏方の者たちが使うための裏廊下に挟まれている。その構造上、窓は天窗だけであった。

裏廊下の方の扉ということは妓楼の者だ。果たしてリィザが扉を開けるとそこにいたのは黒服の小間使いの少女だった。黒い服の少女は単なる従業員で、身売りをしない。

「かあさんが部屋に来なさいって」

言われてリィザは頷いた。男が来るまでに時間はさほど残っていなかった。

リィザが裏廊下へ出ると少女は彼女に与えられた部屋に入っていき、彼女の装身具や衣装を抱えてきた。赤い絹地にたつぷりと金糸で刺された花の繡い、前の襟目に結ぶ縹子の金色のリボン。未だに無垢であることを示すための髪に挿す白い造花、矢車草の抜かれた花板。

衣装の後ろ側にも大きな結び目を作ることが出来るようにピンがついているし、水揚げを示すための沢山の装身具や髪挿花などもあって、一人では出来そうにない。時間が来たら手の空いている姐さんに手伝って貰って身につけようと思っていたそれを、女将は自分でしてくれるつもりがあるのだろう。

ゆっくり裏廊下を渡りながら、リィザは一足進むごとに全身の血が騒ぐような感覚にじっと耐えた。逃げ出したいというなら確かだった。

それは以前彼女の上に起こっていたような過去への闇雲な回帰や追憶のための衝動ではなく、逆らえない運命に直面した時の居竦みや怯えと同じものであった。怖いというなら確かだった。未知のものは、いつでも怖い。次第に俯いていく首筋の張りつめた筋肉の重さを、感じないわけにはいかなかった。

女将は自身の部屋で帳面をめくっていた。それがぼんやりする時の女将の癖であることを、リィザは既に知っている。小間使いの少女がかあさんと声をかけて下がっていくと、女将は少女の

置いていった衣装やらを抱えて自分の側に座るように手振りした。

リィザは素直にそれに従う。脳裏は次第に白くなりつつあって上の空ではあったが、命じられれば従ってしまうのは性質だった。

女将は言いつけた通りの位置に座ったリィザと目を合わせ、やがてゆったり頷いた。

「リーナ。もう誰もお前を本当の名前で呼ばないよ。いいね、自分も言ってはいけない。客の素性を知っても誰にも言うんじゃないよ。他の娘達にもだ。それと、他の娘に付いている客は盗らないこと。向こうから指名されたなら仕方がないが、決して自分から媚びを売ってはいけない――お前はそんなことをしそうな娘には見えないが、まれにそんなこともあるからね。他の娘達の言うことをよくお聞き。無論あたしの言うことも、だ。避妊薬は毎日タリアの火入れの鐘がなる時間に飲むこと。何か聞きたいことはあるかい？」

リィザは少し考えてからあの、と言った。一番聞きたいことは口に出来ない。だからそれに近いことを聞く。

「……私、お客さまと二人になったらどうしたらいいのか……」

女将はリィザにこの理を言い聞かせるために張っていた神経をふっと弛めたような、気の温んだ笑みを浮かべた。

「なあに、最初から気世話しく何でもしてやることはないよ。水揚げなんていうのはね、男になれてない娘の反応も好きで買うんだから、相手の好きなようにさせてればいいさ。お前が今からやきもきすることじゃないよ」

「でも、もし、つまらないって思われたら……」

リィザは細い声で呟いた。

女としての価値が自分にあるのかどうかさえ曖昧であるのに、誰かを楽しませることなど出来そうになかった。水揚げにと贈られた衣装も装飾品も、決して安いものではあるまい。新しく与えられた部屋に溢れるように飾られた花もそうだ。

その金を受け取るだけの価値が自分にあるのかどうか、それを査定されるような気がして溜まらなく落ち着かなかった。

水揚げの男は自分を買って失望しないだろうか。そうであって欲しい気もするし、それはひどく悲しいことのような気もした。

女将は喉を鳴らして笑った。猫が含み笑うような、上機嫌な声だった。

「大丈夫、お前がそういう娘だってことくらいは奴は分かっているだろうからね。あの男は女には優しい。安心して奴に任せていればいいさ」

女将はそう言って、リィザに今着ているものを脱ぐようにと付け足した。リィザは一瞬躊躇してからそれまで着ていた白い木綿のワンピースを脱ぎ捨てた。

それを女将はさっと遠い場所へ押しやり、化粧台の脇においてあった洗い桶を引き寄せた。

中には絹布が数枚、水に浸されている。引き寄せた時の反動で水がぱちゃんと跳ねると、ふわりと優しい薫りがした。水に花香が溶かされているのだろう。

女将は布を一枚固く絞ってから取り出すと、それでリィザの身体を丁寧に、清めるように拭き始めた。ひんやりした感触が肌を滑っていく度に淡香がたった。

「綺麗な肌だ、大切におし」

女将の呟きに、リィザはこくと頷いた。

体を拭き終わると次は髪だった。櫛に滑らせる梳水からも同じ香りがした。何の香ですか、と聞くと女将は淡々と蓮華だと答えた。

長い黒髪をまとめ、何度も細かく編み込みを繰り返して結い上げていく女将の手さばきは流石で、あれほどあった造花や花板も美しく飾られているのにすっきり見える。両方のこめかみの辺りから一房づつとった前髪を長く垂らし、その先に小さな造花を飾る。

「可愛いよ」

女将が深い満足を示すような声音で言い、リィザはそれにもこくりと頷いた。

途端、ぽろりと涙が落ちた。ここにいたって初めて、水揚げの実感が湧いてきたのだ。

リィザは声を上げて泣きはしない。妓楼に来たばかりの頃のように止めどもなく涙を流さない。それをするには諦めてしまったものが多く、無理矢理思い出にしてしまったものは更に多い。

けれど、自分の生きてきた今までとの完全な決別にはやはり、覚悟が要った。

黙ったまま僅かに涙をこぼしてリィザは唇を結んだ。その目端にそっと女将が指をそわせた。優しく丁寧にされる仕草が嬉しくて、リィザは目を閉じる。ぽろりとこぼれた流滴が最後の涙となった。

「――お前はきっと、好い娘になる」

女将の言葉はいよいよ優しく、囁くように甘い。

「客に気に入られようとか楽しませようとか、そんなことを気かけすぎるんじゃないよ。お前は多分、そのまま微笑んでいればいいんだ。あるがままに、愛される娘におなり。性根の優しい、声の可愛い、温かな腕を持つ娘に」

リィザはまた頷いた。先ほどから自分は頷いてばかりいる。

「そしていつかここを出ていく日がお前の幸福の最初の日になるといいね……」

その声には万感が籠もっているような気がした。リィザが目を開けて女将を見ると、中年の女は彼女を優しく見つめていた。視線にあるのはいたわりと、自分に向ける痛ましさと憐憫と、そして紛れもなく情愛であったように思われた。

かあさん、とリィザは呟いた。

「私……自分に出来ることは、してみたいと思ってます――かあさん、私を買ってくれてありがとう……」

女将の男に連れられてタリアの本店を巡っていた時の惨めさを払拭し、今リィザに真剣に娘としての愛情をかけようとしてくれている。

馬鹿だねと女将は呆れ半分のように笑うが、その目の奥が思わずというように嬉しく光ったのを見た気がした。

「私、何も出来ないですけど、せめてかあさんの言いつけをきく娘になりたいと思ってます……」

馬鹿、と女将は二度目を呟いた。

「あたしのことなんか、お構いでないよ。お前はお前に通ってくる男のことでも考えていればそれでいいんだから……」

照れのためにか尚更突き放したような物言いになり、女将は溜息になった。リィザはその表情に、やっと薄く微笑むことが出来た。落ち着きや余裕というものではないにしろ、誰かの確かな情によって足場があることを確認できたと感じたのだろう。

女将はリィザの涙の跡を丁寧に拭き、いいね、と念を押した。リィザが頷くのを見てほっと笑い、良くできた人形に魂を入れる職人のような神妙で真剣な顔つきで、彼女の顔に化粧を入れ始めた。

薄く真珠粉を肌にはたき、大きな目を際だたせるために僅かに睫を上向きにし、頬紅をひとはけする。その作業を鏡の中に見ながら、リィザは次第に匂うように変わっていく顔立ちを見つめた。自分ではないように見える。

と、女将が不意に呟いた。

「――あたしを信じてくれるというのは結構。でもね、お前に信じていて欲しいのは、男ってものが決して不純で裏切るばかりの生き物じゃないって事だ」

リィザは一瞬を置いて頷いた。これは女将の感慨のようなものであろう。それに口を挟むことなど出来るはずがなかった。

「この商売をしていると沢山の男に会う。騙されることも、裏切られることも、あるかも知れない。でもね、それで誰も信じない女にだけはなるんじゃないよ。一人去ってもまた必ずお前を見つめてお前に愛を囁く男が現れる。その男の言葉を疑いだけで眺め回さないでおくれ……忘れることが出来るから、幸福にもなれるんだからね……」

リィザは何かを返答しようとしたが、出来なかった。彼女が唇を開く前に女将は紅筆を執り、唇に丁寧に色を付け始めたからだ。返答は要らないという態度が女将の言葉の真実さなのだろう。

口紅を終えて軽く薄紙を噛む耳に、タリアの火入れの時刻を告げる晩鐘が聞こえた。もうそんな時間であるようだった。一瞬震えた肩に女将がそっと赤い絹の衣装を着せかけて、大丈夫だからね、と囁いた。

リィザは深く頷き、かあさん、と呟いた。

「……ありがとうございます」

女将は吐息で頷いたようだった。

リィザは小さく頷き、大丈夫ですと低く言った。実際心臓は壊れてしまいそうなほど音を立てているし身体中の血は逆巻いているようで自分がどうにかなってしまいそうだったが、それを誰かに訴えても仕方のないことのように思われた。

支度を終えて一度部屋に戻ると、日がすっかり暮れて灯りのない部屋はにぶい暗闇の中にあった。天窓から注ぐ光は僅かに赤い。通巷に溢れる篝火と塗紅の朱が反射して、タリアはこの時間には赤い光と熱の中にある。

灯りを入れようとリィザは部屋の隅にあるランプに近寄りかけて足を止めた。鏡台の前に置き放してあった硝子の小鳥が、天窓から落ちる赤光に薄ぼんやりと光っている。透明で淡い色だったそれにタリアの赤が灯り、奇妙なほどに赤い。

胸を突かれる赤にリィザは暫く佇んでいた。泣かない、と呟く。もう泣かない。二度と会えない人にだけ、心を連れて行かれてはだめ。この場所の人たちは優しいから、いつか貴方を忘れて

いくために、だから泣かない。

リィザは低く自分に言い聞かせるように数度繰り返し、そっと小鳥に近づいた。指先で撫でると硝子特有の凜とした冷たさ。これをくれた時、彼の指は温かだった……。不意にそれを思いだし、リィザはくすりと笑った。あれから1年と少ししか経っていないというのに自分がひどく年をとった様な気がしたのだ。

タリアの淡い紅灯に燃えるような色に染まる、硝子の小鳥。リィザはそれをそっと掌に納めて愛しく撫でた後、鏡台の引き出しの一番奥に仕舞った。小鳥の姿が視界から消えた一瞬、リィザはそっと目を伏せて微笑んだ。

――さよなら。思い出の奥を、若主人の面影が通り過ぎていった。

やがて水揚げのしきたりや慣行は順調に進んでいき、彼女は穏やかな声に促されるままに闇の中へ入った。そこで行われたことは、今までリィザが知識としてだけ知っていたことであった。

やがて夜の始まる時刻、常連の言葉にまんざらでもない様子で酒場女は進み出る。太り気味の身体を些か持て余すように狭い卓の間をすり抜けて、彼女は店の隅で暇を囲っていた鬱気分の豎琴弾きを小突いて商売道具を取り出させ、深く息を吸い込んだ。

そして場末酒場に溢れ流れ出す、豊かな音量。昔劇場で歌っていたのだという女の経歴自慢を信じる者はここには誰もいない。劇場にはあり余る豊潤な香りの年代酒や煌めく宝石の偽物の、安い酒と硝子玉に囲まれて、だが女の歌だけは真実本物だった。音楽のための楽器でない、心震わせる、魂の歌。

女は一心に歌う。あいのうたを。

波間流離う海鳥たちの 叫びが今宵も 耳を打つ
遠く聞こえる潮騒の うねりをかき消す 声がする
お前の胸にも聞こえている？ 私の歌う、海鳥の歌
見つめてよ
お前の世界の中心を 私がすっかり占めるまで

日が落ちると一斉に回廊に揺らめく炎が灯った。リユース皇子は香料油の匂いはどうしても苦手だったが、立場上好きを言うべきではないという習慣のためにそれを口に出したことはない。

だが、一瞬眉をひそめたのを父は素早く見たようだった。

「――深く吸い込まないで、回廊の真ん中を歩きなさい」

皇子は微笑んで自分の父を仰ぎ見る。

すぐ下の異母弟カルア皇子は父に生き写しだと今更ながらに思う。しっかりした健康な体つきと精悍を感じる面差しは、あの明るい異母弟にそっくりだ。

皇子の視線に父帝はゆっくり微笑んだ。明るい夜空の色をした瞳の奥に、自分に対する情愛と慈しみを簡単に見つけることが出来て、皇子は胸の底が静かになるような安堵を感じた。

両親からの情という意味において、皇子は父からより多くのものを受け取っている。

父の言葉に皇子は頷き、父が先へ行くようにと半歩引いて道を譲った。皇子の訳知りの仕草に父は苦笑し、彼の肩を抱いて共に後宮への道に戻り始めた。

「……あまり根を詰めるんじゃないぞ、リユース。お前は何でも徹底的にやろうとしすぎる」

父の言葉に皇子はええ、と軽い相づちを打った。父上が何でも適当になさりすぎるのです、という返答は心の中にしまい込む。

父は鷹揚な登極者であり、実に大らかに執政の長として過ごしているように皇子には見える。気概や意欲というものをさほど感じたことがないが、それが現代の皇帝に求められている資質なのだろう。

既に時代は移り変わり、皇帝が権威と権力の掌握者であった時間は去った。今はその二つの象徴という意味が正しい。が、皇子はそれには僅かな疑問を覚えている。政治であれ軍事であれ、まれにそのどちらかの見識の深い皇帝は存在した。彼らはそれ故に失脚し帝位を去らねばならなかった。定まった権力の機構に口を入れる支配者など、貴族達は欲しくないのだ。

リユースはそれには疑問と不服を覚える。皇帝はこの国の最高権力者では既にないが、敬意を払われても不思議ではないはずだ。なのに頂点にいるその人が国政というものに真剣に関わることを望んでいる者など、誰もいない。

父は周囲の期待に実に良く添った皇帝であるかもしれなかった。それを面と向かって非難は出来ないのだが、リユースは何か釈然としない。

「お前の考えていることは分かるよ、リユース」

父が優しく言った。リユースは今日はほぼ一日父や廷臣達と共に在った。殆ど父が発言をしないことにも驚いたし、臣下もそれに慣れているように全く勝手に議事を進めていくやり方にも仰天した。

それが顔に出ていたのだろうかと思ひ、曖昧に微笑みながら父上、と言った。

「父上はご自分で国政をご指導なさろうと思ったことはないのですか？ 彼らの議論と来たら同じ場所を行ったり来たりで……」

「歯痒いかね？」

父の穏やかな言葉に性急さを諭されているようで、リユースはやや赤面して俯いた。父帝は喉を鳴らすようにして笑った。

「お前にはそうかもしれんな。だが、実際登極してみれば違うものだと分かる。それに議論はされないよりも尽くされるほうがより正しいと、私は信じているからね」

それは立憲君主制という機構の心臓でもあった。

リュースは曖昧に頷いて、ゆっくり歩を進めた。この国では昔から官僚と政治の絡み合う機構が複雑に、だがしっかりと構築されている。それは初代の皇帝があまりに早く逝去したせいであろう。即位時の2世皇帝は僅かに6才、国家とその周辺の廷臣達が生き残っていくためにはそれしかなかったのだ。

皇帝は富と名誉と権力の象徴とし、実際の為政を官僚が担当し、官僚を法務で縛るというやり方をさまざまな規制と法令でほぼ完全な形で組み上げた太祖皇帝の遺臣ケイ・ルーシェンの呼吸が未だに法令の底辺には潜んでいる。

「私たちは祖先から受け継いできた遺産をまた次世代に伝えていくことを考えなくてはいけないのだよ、リュース。分かるね？」

穏やかに諭されて、皇子は頷く。それはそれで正しかろう。それに父は立太子されて皇帝になったわけではない。16年前に当時の皇帝であった同母兄が結婚問題のもつれから失踪し後継者がいなかったため、暫定の継承順が一位であった父が急遽即位することになったのだ。

父にとっては予期せぬ即位であったはずだし、帝位を望んでいたかどうかはすこぶる怪しい。情熱というものを持って望めと父に号令するのは酷というものかも知れなかった。

それを理解していても、皇子は自分の心の奥底に父の言葉への違和感があることを否めない。何がどう、とはっきり指摘することは出来ないにしても、納得しているというわけには行かなかった。

皇子は固く唇を結んだ。資質や皇帝の意欲の増減で簡単に翻弄される国政というのも良くないが、いずれ自分が帝位につくことを思うと暗澹とした気持ちになる。現在まで彼が学び築いてきた知識も理論も全く役に立たないということなのだ。

努力すれば結果は出せる。それを厭うたことはない。だが、結果を出すことを求められていない時はどうすればいいのか、皇子は更に暗い気分になった。

無理矢理それを貫こうとするならば、それを試みた歴代の皇帝達と同じように臣下を相手に泥沼のような権力闘争に明け暮れなくてはならないだろう。勝つか負けるかも分からない争いに身を投じなくてはならないことを思うと、傀儡でも静謐な一生を送りたいと願った皇帝たちの心情も理解できなくはなかった。

それは父の願いであるのかも知れなかった。父帝は実権を掌握することを望んでいない。父の望みは恐らく、家族に囲まれて温かに一生を終えることであるのだろう。他人の価値観を理解し納得するには、リュース皇子は未だに若いという年齢であった。

彼の表情を見て取ったらしい父帝は鷹揚に微笑んだ。

父の大きな手が自分の額の髪を払いのけ、愛しく輪郭に触れてくる。その手の温もりのように愛されている実感はあった。細められた目の奥にも、優しい声音の静かさにも、それは暗闇の蝋燭のように灯っている。

「私には私のやり方もあるし、お前にもそれがあるだろう。しばらくは勉強がてら私の側にいるといい。それにまだお前になると決まったわけではないからね」

立太子の条件に実は出生順はさほど関係がない。皇室の権威の失墜と共に有力な皇子の暗殺や失踪が相次いだ時代を経たために、年長の皇子3～4名の資質が大まか明らかになった時点での合議によって継承権順を決定するのがこの500年ほどの慣例である。

現在一番近いと目されているのはリュース皇子でありそれを自分で自負してもいるが、異母弟カルアにもさほど欠損はなく、その下の異母弟エセルは自分と似た思考型のおとなしい人格だ。末弟ラインは勉学より剣術の才能が飛び抜けて光っているが、実は座学とて悪くなかった。

誰が立太子されてもおかしいわけでない。カルア・エセルの両異母弟にあまり意欲がなく実弟ラインに至っては尻込みするような素振りがあることを考えるに自分だろうという未来観があるだけのことだ。

「……でも、父上。私は皇太子になりたいのです」

皇子は低く、父にだけ聞こえるようにそっと呟いた。父は頷き、不意に立ち止まって彼の肩を抱き、額に軽くキスをした。

「――私もイリーナも、お前を愛しているよ。私たちの大切な皇子」

囁きが耳元でした。リュースは微笑み、はい、と明るい声を出して頷いた。

母イリーナ妃の住む小宮は夏薔薇庭園の中にある。丁度季節は夏をゆっくりと過ぎていく頃で、まだ咲き残っている色とりどりの薔薇が見事に美しい。侍女が摘んでいた花を受け取って、皇子は父と共に母の元へと歩いた。

窓辺に母の姿が見える。皇子の視線が向いたのを気付いたのか、軽く手を振ってくれる仕草に皇子はほっと息を付いた。最近どうにも母が余所余所しいと感じていたから、皇子にとっては何気ないことでも宝石のような事実が変わる。

最近という言葉が一体どの辺りからを指すのか、皇子は始まりの地点をはっきりと示すことは出来ないが、それが暫く続いていることは確かだった。だから尚更、立太子への道を選ぼうと決めているのは意固地なのだろう。それでも何か一つでも気を惹くことが出来て喜んでくれるなら――と、皇子は考え続けている。

母は窓辺でレース編みの途中だった。弟のライン皇子はいない。日が完全に落ちるまでは剣の稽古であるのだろう。ラインの不在に皇子はあからさまに安堵し、安堵したことに気付いて自己嫌悪で頬を厳しくした。弟を決して嫌いではない。明るい上に他人をよく気遣う優しさを持っており、彼にも良く懐いている。それは一種彼の理想の人格であった。

皇子が呼吸を整えている隙間に、両親は軽い挨拶のキスを頬に交わしていた。

父帝と母妃の間には烈しく燃えるような情熱や甘い空気はないが、年月と共に培われてきたらしい信頼がある。それも愛情の一種の形であるだろう。父の愛というなら明らかにもう一人の皇妃ユーデリカに注がれているが、母はそれにはさほど頓着した様子を見せなかった。

来月の誕生日で15才になるリュースと3ヶ月ほど前に13になったカルアの両皇子に皇太子候補としての諸処の知識や学問を教える特設の学問所が後宮内に開く。それがどんな立場に基づき土台に根ざしているのかを知らしめるために今日は父の側に一日おいて貰っていたが、候補となるのは彼一人ではない。

アルカナ大公系の母を持つ自分に対してアイリュス大公系の母から生まれた異母弟のカルア皇

子が共に席に着くことになる。父が異母弟を現在ユーデリカ妃が暮らすロリス湖畔の離宮からこの後宮へ連れてくることに際し、母親代わりに面倒を見てやるよう母妃に頼んでいるのはその為だ。

「あちらは大分やんちゃだが」

父の声は苦笑している。カルアは良く言うなら闊達、悪く言うなら落ち着きがない。半刻もじっとしているのが苦手だが、体を動かすことならば大概好きだった。彼とその実弟エセルが遊びに来ると連れ回されて疲労で熱を出すのがリュースの現状だ。

「ええ、ラインも遊び相手が来ると喜びますし」

母の返答に父が刹那、目配せした。それに籠もる厳しさが何であるのか分からずにリュースは持ってきた花を渡すための侍女を呼ぼうと硝子の呼び鈴を取った。ちりちりなる甲高い音の隙間から、母の声がするりと抜けて届いた。

「――勿論、リュースにだっていいことです。……言葉の綾ですわ」

自分の耳が一瞬引きつったように動いた気がした。父の一瞬の所作の意味がやっと彼にも分かったのだ。母の言葉から綺麗に自分の存在だけが抜き取られていたことに。皇子は僅かに身を固くしかけ、それをどうにか押しとどめた。自分が気付いたことを、両親に悟られたくない。二人ともが今皇子に気を遣っていることを分かっているから尚更だった。

現れた侍女に皇子は夏薔薇を手渡す。先ほどの両親の会話など聞いていなかったように微笑んで、今年の薔薇は白が多いですねと他愛ないことを言った。

「母上のお名前を戴いた薔薇でしょう？ 香りも強くて綺麗な品種です」

母イリーナは淡く笑って頷いた。彼と似た繊細な顔立ちが美しく曇りないことを注意深く観察し、皇子はようやく内心で安堵した。

どんな形であれ、皇子は母に負担を強いることはしたくないのだった。

父を迎えに来た侍従が扉を閉める音がした。今夜は父帝は北接の大国ヴァリエーンの大使との食事会、つまり公務での晩餐である。公務がない夜でも両親と弟が揃っての食事は珍しいが、これは父と母の間の事情であった。

元々親好的な間柄で結婚したというわけではない。父の兄であった先帝の失踪を受けての取り急ぎの即位と結婚だったのだから、二人が今強い愛情で結ばれていなくても仕方がないのかも知れなかった。一方のユーデリカ妃とは父は従兄妹同士であり幼馴染みでもあったから、自分にとってのエリザ公女のようなものであろう。

皇子は母との食事は久しぶりだった。先年の終わりに中等学院を首席で卒業して以来、後宮の片隅で本に埋もれているか魔導の塔に集蓄されている文献の研究に殆ど毎日を費やしている。食事は気の向いた時に食べられる分だけという不規則さで、自然一人で何かつまむことが多かった。

それは皇子にとって、気楽さへの依存でもあった。所詮自分は他人に合わせるのに慣れていないのだ。気心の知れた人間はとても少なく、心許せる者は更に少ない。母も例外ではなく、例えばこうして夕食に戻ってくるはずのラインを待つ間、何を話していいのかよく分からない。

中等学院に通っていた頃にはその話を母の方から尋ねてくれたりもしたのだが、卒業してしまえば何もない。しばらくは体調のことも考えて高等学院への進学を数年先送りするように典医に言われたために、現在は魔導学の講義だけを聴講するにとどめている。

一つにはこの年齢で高等学院へ進んでも周囲が全員20才を幾つか過ぎていて、今までのように周囲から完全に浮き上がることが分かっているからでもあった。

魔導学の講義にしても、4年前に論旨を後継した時間生成理論の、皇子は今や旗手であり第一人者であった。魔導学は論理と仮定と計算と実験の永遠の螺旋だが、そのどれも皇子は筆頭に立つ実力があった。

時間生成の実験だけは2年前の失敗によってしばらくは凍結だろうが、他愛ない他の検証実験程度なら皇子は一人で十分だった。そしてその度自分を見る学生達の奇異と賞賛と嫉妬と、恐れるような目つきを皇子は知っている。それがあつ限り、彼らとは相容れないことも分かってしまうのだ。

だが、こんな話を母にしようと思ったことはなかった。中等学院のときもそうだった。どうにかして明るい話を掘り起こすことに熱心だったのだ。何か材料を捜してリユースは部屋をざっと見渡し、最近増えたらしい一枚の絵に目を留めた。光臨する天使と周囲に群がる魚の群れが幻想的な青を基調にまとめられている。

「天使画よ。綺麗でしょう」

母の声がそっと囁くように言った。リユースは頷いた。宗教画としてよりも幻影画としての価値を追ったような一幅であるが、揺らめく波間に魚鱗が光る様や手を差し伸べて微笑む天使の顔が天上の安らぎを思わせる。よい絵であるといって良かった。

「どうしたのです、これ？ 献上品……ではないですよね、まさか」

天使画を書く画家は大抵若い。これは最近の若手や新人の画家の間で天使を意匠に使った絵が流行しているからだ。献上品として納宮される品は既に作家として名の立った者の作品が主流だ

から、天使画を後宮で見ることになるとは思っていなかったのは事実だ。

「ええ、勿論。美術監長がこの前持ってきてくれた画集の中に入っていたの。とても気に入ったと言ったら本物を持ってきたのよ」

母は苦笑しているのだった。ねだったわけではないが、取り上げてしまったような気持ちもするのだろう。

皇子はそれにそっと笑い、母の向かいの席を立てて絵の前に立った。画家の名前は右隅に完成した日付と共に入っている。

「――スコルフィーグ……ああ、彼女ですか」

皇子は署名を見やって呟いた。知っているのという母の声には曖昧に頷く。

「高等学院に聴講で行った時に、学院の中庭で声をかけられました。まだ若い……そうですね、多分20才にもなっていない女性です」

経緯が分からないというように微笑みながら首を傾げる母に、皇子は向き直る。

エミリア＝スコルフィーグは皇子に絵のモデルになって欲しいと言ったのだった。絵画にも派閥や学閥があり、高等学院の芸術部展に出展するために学院を訪れた時に皇子を見かけたらしい。

それを皇子は断った。忙しいと彼女に言ったのは間違いではなかったし、写真だけでもと食い下がられても、自分の写真には沢山の権利や営利が絡んでいるため気軽に許可を出せないのだ。

「まあ……こっそり写真だけでも撮らせてあげれば良かったのに」

母の残念そうな物言いに皇子は少し笑い、露見したら彼女の方が困りますからと言った。自分は父帝からの口頭での軽い叱責で済むが、相手はそうはいかないだろう。平民層であるから尚更だ。口にしない部分を母は察したのだろう、残念ねと柔らかく笑ってじっと天使の面輪を見つめた。

光臨する天使の表情は甘く優しく、微かに開かれた唇の微笑みが慈悲の形に納まっている。

「気に入ったなら持って行きなさい、リユース」

絵にじっと視線をやっていた王子にイリーナ妃が言った。皇子は母を振り返り、いいのですかと目線で問うた。母妃は笑って頷く。それはいずれ侍女の手によって包まれて彼の部屋に届くことになるだろう。

皇子が礼を口にしていると、侍女が茶を運んできた。くせのない発酵茶にいくつかの香料が混ぜてある香料茶で、母妃好みのいつもの凛とした強い香りがついている。この茶の匂いに触れるたびに、皇子は母親の元にいることを強く実感にするのだった。

「ご苦労。そこにおいて下がっていいよ」

皇子はそう言って侍女を払った。どんなにぎこちなくても感触が掴めなくても、母親の側にいる時間は皇子にとっては貴重であり、全てに代え難かった。そこに他人を入れることを歓迎しない自分の狭量さに苦笑になりかける。

が、それは彼にとっては何をおいても欲しいものであり、殆ど望みを持たない彼の唯一に近いものだった。なめらかな磁器のカップに茶を注ぎ、皇子は母親に受け皿ごと差し出す。どうぞ、と微笑んだ皇子はだが、一瞬後に怪訝にその笑みをおさめた。

母はじっと皇子を凝視していた。僅かに見開かれた瞳の端で、睫が震えている。

「……母、上……？」

ぼんやり皇子が呟くと、それで我に返ったように母は肩をひきつらせた。

「あの……何でもないのよ、大丈夫……」

無理矢理笑う顔をどこかで見たことがあると皇子は自分の記憶に捜し、去年の聖誕祭へ辿り着いた。あの時も、母は自分を見て呆然とした。食い入るような真剣さと、驚愕と、泣き出しそうな瞳の奥の潤みがひどく似ている。

それを聞きたいと皇子は思った。何故ですか、と口にしかかった。だが現実に戻った瞬間、皇子はもの柔らかに自分が笑って母親を氣遣っていることに気付いた。

――聞けない。涙をこらえようとしている母の理由を聞くのが怖い。何故かと口に出してしまったら、答えを知りたがっていることが母に分かってしまう――

「母上、大丈夫ですか？ ……これ、どうぞ。落ち着きますよ」

いつもと変わらないように注意深く笑いながら、皇子は母妃の手にカップをそっと取らせようとした。

その瞬間、母が掠れた悲鳴のようなものをこぼして身を折った。耳障りな音を立てて磁器のカップが皇子と皇妃の手の間で倒れる。皇子は反射的に皿を自分の方へ傾けた。母に熱湯がかかると思ったのだ。

「――っ……」

カップから勢い付いて溢れた茶の飛沫が皇子の華奢で白い手に掛かる。一瞬上げかけた声を押し殺した時、床でカップが割れた。

その音でイリーナ妃ははっとリュース皇子を見、彼が自身を庇って押さえた手へ目をやって、今度ははっきりした理由のために細い悲鳴になった。

「リュース――ああ、ごめんね、誰か、誰か！ リュース、リュース、手を見せて――火傷になってしまうわ、ごめんなさいごめんなさい、ひどいことを――」

母は狼狽えて口走り、彼の手を取って撫でさすった。

「大丈夫です、あの、殆ど掛かってませんから……」

皇子はなるべく優しい声を出した。実際僅かに数滴が手の甲に飛んだだけで、殆ど跡にも残らない、冷やす手間も要らないようなものだ。痛みさえ、たいしたものではなかった。

だが彼の声は母の耳には殆ど入っていないようだった。皇子の手を握りしめておろおろしながら、ごめんなさいとばかり繰り返している。リュースも次第に困惑が濃くなってきて、母上、と宥めるような声になった。

「もう大丈夫です。ほら、全然痕にもなっていない。どこに飛んだかなんて分からないでしょう――片付けを頼む」

最後は母の声に駆けつけてきた侍女達に言い置き、皇子は皇妃の手を取ってその場を離れた。砕けた磁器のかけらが床に散らばって危険でもあったし、何より母を落ち着かせなくてはいけない。ラインが戻ってきたら庭へ出てくるように言伝して、皇子は母を連れて薔薇園へ出た。

夏の夕暮れはようやく沈み始めており、空の一番高い部分は紺青だった。薄くたなびく紫金の雲、名残の日差し、そして夕日に温かな茜色に色づく白い薔薇。その薔薇は母イリーナの名を

冠された比較的新しい品種で、ほっそりしたうてなから開く大輪だ。

「……今年はいいい薔薇が出来ますね」

皇子は今にも開きそうにふっくらした薔をそっと指で撫でながら呟いた。とにかく彼の被ったささやかな災難のことを忘れさせたかった。

未だに啜り泣いていた母は微かに頷き、彼の触れた薔をよく見るようにかがみ込んだ。

「この薔薇はね、私がアルカナの本家を出て後宮に入った時に記念に贈られたのよ。もう……16年になるのね……」

その声にはそれまで積み上げてきた経緯を振り返る感慨が滲んでいて、皇子は自分の表情がやっと和らいだのを感じた。母はじっと薔薇を見つめていたが、やがて両手で顔をそっと覆った。母の声が小さく、恐らくは自分にだけ向けた言葉を呟く。

――マリア。

「……母上……？」

皇子の不思議そうな声に、母ははっと顔を上げて無理矢理微笑もうとした。

「大丈夫よ。何でもないわ……」

皇妃は彼に首を振り、ようやく立ちあがって薔薇園の中央にある小さな泉へ歩いていく。整えられた庭に俯き加減に歩く母の細長い影が落ちて、どこかひどく寂しげであった。

先ほど呟いた言葉は恐らく誰かの名前であろう。それが誰であるのか、皇子は知らない。ただそれに滲んでいた沈鬱さに母の痛みが宿っている気がして、皇子は余計な好奇心であると自覚はしながら、つい口を開いた。

「マリア……って誰です？」

母は足を止めた。

肩越しにゆっくり振り返る視線がじっと皇子に当てられて、やがて外された。伏せられた睫の影が頬に落ちる。

「……お友達よ。もうずっと昔の……綺麗で、可愛くて、素直で……とっても優しい子だったわ……私の大切な……妹……」

一瞬皇子は去年の聖誕祭に聞いた母の妹のことだろうかと思ったが、すぐにそれは否定できた。母方の叔母はメリーナといったはずだ。貴族間では時折親しい年下の女性を妹と呼ぶこともあるから、きっとそれだろう。友人という言葉もそれを裏付けている。

そうですか、と皇子は言った。母の友人達は誰も彼もみな華やかで眩しい。その中にマリアという女性がいたかどうかを記憶に捜し、遂に見当たらなくて皇子はでも、と続けた。

「最近は何を見せていないのではありませんか？ 一体どうしたんでしょうね」

何気ないその言葉に母は視線をそっと戻した。何かいけないことを聞いてしまったのだと悟って皇子が慌てて何か付け加えようとしていると、母は低く呟いた。書かれた台本を丁寧に、しかし感情の籠もらないように棒読みしたような口調だった。

「――その友達は、もう、死にました」

そう言った途端母妃はがくりとうなだれた。皇子は狼狽して母上、とだけ言った。母は彼を涙で赤く腫れた眼で見つめ、突然彼をきつく抱きしめた。一瞬肩の骨が軋んだように痛んだ。

「リュース」

強い腕の力で母に抱かれ、息苦しささえ覚えながら皇子ははいと生真面目に返事をした。母の言葉はそれきり途絶えた。嗚咽が彼の耳元で続いている。呼びかけることも身じろぎすることも出来ず、皇子は黙って母の慟哭を聞いていた。

「リユース、リユース……愛しているわ」

母は同じ事を繰り返している。愛している、愛していると何度も呟くたびに、その言葉の濃厚さが薄まっていくような気がするのには不思議だった。

夕映えをじっと見ていた目を皇子は閉じて、母の繰り返す言葉をずっと聞いた。口を挟むことではない気がして、自分の呼吸音さえ押し殺した。

母は確におかしかった。彼のことを呼び続ける低い声も、愛しているという囁きも、その両方が上の空のようにせかせかと流れていってしまう。その言葉が嬉しいという感情の反応を自分に連れてこないことが不思議で、皇子は溜息になった。

それを聞きとがめたのか、母が不意に体を離れた。皇子は既にさほど変わらない位置にある視線を怪訝に見上げる。母はじっと彼に注視を与え、そして再び顔を歪めた。

ぐにやりとゆがんだ表情が涙の前触れであることを分らない皇子ではなかった。具体的な方法は思いつかないものの、どうにか宥めなくてはと思うのは先ほどと同じで、皇子は母にそっと手を伸ばした。

だがその瞬間母妃は半歩後ろに下がった。皇子は僅かな時間、まばたきをする。

――避けられた、という衝撃はやや遅れてやってきた。耳元を雪崩落ちていくような音がある。夏の余韻の虫の音のこだまと分かっている、それは自分の血潮が脳天からひいていく音に思われてならなかった。

皇子は何かを言おうとし、母親の様子に沈黙した。彼よりも尚更皇妃は蒼白であった。

「リユース、リユース、ごめんね、ごめんなさいね、愛してる、愛してる、お前のことを愛してる、お願い、ごめんね、愛しているわ――」

怒濤のような言い訳を口走り、皇妃は彼と似た美しく繊細な顔を痙攣させた。救いを求めるように、首から下がった白金の神紋板をしきりにまさぐっている。

その指先が神経質に板に埋まった瑠璃石をいじるのを皇子は視界に入れながら、母親のこの神経のかぼそさとささくれやすさは、確かに自分の中に流れている血なのだとぼんやり思った。

「ごめんね、愛しているわ、お願いよ、愛してる、愛してるわ……」

呻きながら母は彼に向かって微笑み、そして首を振った。

「あの、あのね、もしお前が忙しいなら――」

「母上！」

皇子は咄嗟に大きな声を出した。母は怯えたようにまた半歩、後じさった。その永遠に遠い距離に皇子は思わず顔を苦くし、それに自分で気付いて慌てて笑みを作った。

「あの、そ、そう、魔導学の論文を仕上げなくてはいけないんです、急がなくてはいけないから、その、今日は帰ります！」

思いついた用事を口走り、皇子は母の返事を待たずに背を返した。

東からゆっくり上る月に白薔薇が本来の青白さを取り戻しつつある中を、皇子は逃げるよう

に走って抜ける――いや、多分これは逃げているのだろう。

跳ね上がるほどに走る側から涙がこぼれそうになる。怖かった。母があの瞬間何を言おうとしたのかを考えたくもないし分かりたくもないのに、直感が声高に叫んでいる。

忙しいなら来なくていいのよ。もう来ないで。来るな。

最後に浮かんできた強い言葉に皇子は走りながら喘ぎ、奥歯をきつく噛み合わせた。母は泣きながら自分を愛していると言った。信じて欲しいと何度も目で訴えながら繰り返した。

けれど、それをまるで信じていない。彼に対する最近、母はいつでも怯えたように彼を見ている。どんなに言葉を優しくしても穏やかに笑って見せても、喜んで貰えるように何をしてもしそれは同じだった。

自室に駆け込み、彼がいつも一人でいる場所になっている書庫に籠もると、全身から汗がどつと噴き出てくるのが分かった。

息を整えながら、皇子は本棚に並ぶ皮の装丁の背を軽く拳で叩いた。どの本も政治学や経済学や、その他の皇帝教育のためにと母が贈ってくれた本だ。お前にその気があるならしっかり頑張らなさいと言ってくれた。その言葉一つで自分は本ごと覚え込んでしまうほど勉強したのに。

なのに、その視線一つ微笑み一つ、弟から取り戻すことが出来ない……

皇子は走ったせいで上がった呼吸が次第に胃の底で吐き気になるのを無理矢理押さえ込んだ。ライン、と呟く。

「愛してる、弟を、愛してる、ラインは可愛い、大切な、私の、大事な弟……」

早口で呟く口調が母と酷似していることに皇子は気付き、小さく笑った。無性におかしくなってきたのだった。

くすくすという乾いた笑い声をあげて暫く皇子は笑った。自分と母は全くよく似ている。これだから母は私が嫌いなのだ。自分の嫌な部分まで、全くそっくりに再現してみせるから――でも。

皇子は自分の胸ぐら辺りを片手で掴んだ。心臓は壊れてしまいそうにきりきりと波打っている。その痛みで今死ねたらいいのに。そんなことをちらっと思い、皇子は苛立ちのまま本の背表紙を今度は思い切り叩いた。

重い櫓の書棚が揺れて乱雑に皇子が積み上げた本が崩れ、何冊かが彼の肩や背を打ちながら転がり落ちた。

打撃に皇子は喉で呻き、背中の鈍い痛みを与えた本をまさぐりよせて適当なページを開いた。夜が落ちた書庫は暗い。だが、彼が何か書き込んだ痕跡を認めればそれで十分だった。

「――かくて行政の責任の所在は官僚を総括すべき統合機関に最終的には委ねられるがそれ以前に監査機関を置くことを厭うてはならないことを念頭に置くべきであろう。監査の監査を永遠に続けることは無意味であるとしても最低限に行うかその姿勢を常に見せておくのは為政者として当然の責務であり義務である――」

皇子は本の一節を呟いた。どの本でもそうだ。彼は既にこの書庫にある本などは処分しても記憶の中から同じものを探し当てることが出来る。

皇子はその本を放り投げ、次の本を手を取った。僅かな灯りに金文字の題名が光る。皇子は目を閉じてその中の一節を暗誦しはじめた。この本は行政学ではなく経済学の本だ。債券売買とそ

の数値の理論について。その次は法律。次は軍学。歴史。地理。古典……そして魔導。

「時間軸は存在を前頁資料２２にあるように数値上、絶対存在を確信するものであるが、次元軸との交錯におけるたわみは未知数である。帝歴１９９５年の魔導士カシラムによる実験の際にはそれは極めて高い数値を示しており、それを付属効果として計算に組み込まなくてはならないことは必至といえよう。計算式は次頁資料２３にて示す（資料２３参照）。この計算が正しく効果が順調に魔導効果として成長をすることを前提にするならば、時の魔法はいずれ、「魔法」ではなく「科学」の名の下に実体を明らかにするはずである……」

自分が書いた論文を暗誦し、皇子はそれを収録した魔導学の本を思い切り床にたたきつけた。

こんな論文、書かなければ良かった。あんなに必死に学業になど専念しなければ良かった。知識や学問など、極めるために突き進んでいっても最後に待っているものが母からの隔絶だと知っていたらそんなこと、最初からするはずなんてなかったのに……！

皇子は上がってきた苛立ちのまま、床に散らばった本を壁に叩きつけた。自分の中にある納得しきれない怒りや、弟に対するどす黒い感情をどうしていいのか分からなかったのだ。

更に投げつけるものをと床にあった本に腕を伸ばした時、手首が突然捕まれて皇子ははっと振り返った。微かにある灯明が仮面の銀を反射して光った。

「殿下、それ以上はどうか」

彼の随従の魔導士が、表情の見えない仮面の下から心痛めたような声で彼を気遣っていた。

マルエス、と皇子は顔を苦く歪めた。この瞬間に、誰とも顔などあわせたくなかったし会話もしたくなかった。一人になりたかった。その身に馴染んだ孤高で自分をひたすら慰撫してやる時間だけが欲しかった。他人の気配など、身近にしたいとは思わなかったのだ。

下がれ、と一喝するとマルエスは彼の手首を放して平伏した。魔導士の長く暗い色の衣が黒い沼のように床に広がった。

「いずれ、そのようにも。しかし殿下、本をお仕置き下さっても何かが変わるわけではありません」

核心を一言で射抜かれて皇子は僅かに呼吸を飲み込み、頬にかあっと上がってきた熱さに押し出されるようにうるさい、と怒鳴った。

マルエスがお許しをと低く言って彼の足の甲に額を押しつける。仮面のひやりとした感触に、皇子は急に心臓を掴まれたようにどきりとした。

その一瞬で皇子は我に返った。まだ燦っているような火種は胸の中にあるが、頭の方は至極冷静な、普段の彼の通りに戻りつつある。自分を巻き込んだ一時の熱狂とも言うべき荒廃から目を背けた時、真っ先に随従を怒鳴ってしまったことが胸に落ちた。

「――すまない……怒鳴って悪かった」

俯きながら皇子は呟いた。自分の声にひび割れるような疲弊が滲んでいることに一瞬置いてから気づき、溜息になる。

緩く首を振って本棚にもたれ座り込むと、顔を上げたマルエスが何かお持ちしましょうと言って手を差し出した。彼の手掴まって腰を上げ、皇子は居間へ戻る。大して動いたわけでもないのに息が切れた。

窓辺の椅子でじっとしていると、目の前に切り子硝子のグラスが置かれた。口をあてると苺の甘い香りと共に微量の酒精がした。苺を漬けた酒を水で薄めたものだろう。

「落ち着かれましたら少しお休みになって下さいませ。夕食はライン殿下がこちらでご一緒されるという連絡を母妃殿下から頂きましたので、もう少々かかります」

「ラインが？そう」

皇子は深く頷いた。母のこれは気遣いだ。または本当に気分が悪いのか。いずれにしろ皇子が逃げるように自室へ戻ってしまったことを気にかけて弟をこちらに寄越すのだから、母が彼に申し訳なく思っているのは本当だろう。

そんな遠慮。

皇子は胸の内で苦々しく呟き、軽く目を閉じた。激高と滅茶苦茶な運動が彼の強健でない身体を次第に気怠い沈黙へ押し込めようとしている。腕が重い。

自分のひ弱さ加減に皇子は今度は苦笑し、マルエスに下がるように言った。

「大丈夫.....大丈夫だから、ラインが来るまで少し一人にしておくれ」

彼の既に去った激しさを理解したのだろう、魔導士はゆっくり頷いた。

マルエスは皇子に随従するようになって長い。勿論他の皇子達にも両親にも護衛の魔導士がいるが、一番馴染んでいるのは皇子であったかも知れなかった。魔導に通じ才能があることを誰よりも知っているのは皇子であり、その為にマルエスは彼の良き相談相手でもあったからだ。

マルエスが軽く一礼して書庫の方へ歩いていく。皇子が散々投げ散らかした本を片づけてからこの部屋を去るのだろう。多少気恥ずかしい思いをして皇子はその後ろ姿を見やり、そして呼び止めた。

「マルエス、彼のことはどうなっている？」

去年の夏頃から皇子は中等学院でわずかな時間を共にした少年を捜すことに魔導士を従事させている。

さほど急いだ報告がないということはまだ見つかっていないということではあろう。もっと人手がいればとも思うが、これが皇子の個人的な感情を満たす物であるという気枷があって申請を出来ない。マルエスの方は案の定、困惑したような吐息を落とした。

「――ラウール本家の屋敷には既にラウニス伯爵家が入っておりまして、痕跡が入り乱れております故、判別に多少時間が」

ラウニスはラウール本家の門閥家の係累だが、ラウール失脚の余波の通りにさほど勢いがない一族といえた。が、散り散りになったラウール系閥の今は筆頭でもある。他の家と結託はしていないから再興などという夢は見えていないのだろう。ラウール本家の門地に移住したのはそれを受け取る権利があったからに過ぎない。

旧ラウール屋敷の中に残る沢山の痕跡、例えば誰かの触れた壁、使った机、そんなものに残る気配の残り香をマルエスは捜していた。人には必ず固有の斑紋がある。気の流れでもあるし指紋などの具体的な物まで含まれているが、屋敷の中の多々ある痕跡を総検討し、どれがキエスのものであるかを判別し、特定が済んだ後にそれを元に探索を開始するという腹だ。

但し、現在その屋敷にはラウニス伯爵やその家族、召使いなどが起居している。彼らの痕跡とキエスの痕跡をより分けていく作業は膨大で、マルエスが時間が欲しいというのはそのことであ

った。

だが、マルエスは出来ないとは口にしていない。だから時間は掛かってもしずれその答えも結果も皇子に披露するだろう。

「……期待している。よろしく頼む」

はい、とマルエスが仮面の下でそっと笑う気配がした。皇子は視線を随従の魔導士へやる。マルエスは軽く会釈すると、皇子に銀の仮面をまっすぐ向けた。

「殿下が御熱心ですので、つい」

僅かにリユースが赤面すると、それを見なかったようにマルエスは深く腰を折り、書庫へ入っていった。扉が閉まって魔導士の長衣が消える。皇子は何故かほっと溜息になり、目の前の淡酒を含んだ。

何故、とはマルエスは聞かなかった。それを聞くことの出来る立場でもない。それに甘えて自分が説明を怠っていることを、リユースは自覚していた。

何故彼に会いたいのだろう。その疑問は、自分に何度問いかけても毎回違う答えが返ってくる。

彼は私に何か話があるはずだから？

魔導論文の賞金を渡してやりたいから？

彼の逃亡の理由を聞き、出来ることなら力になってやりたいから？

そのどれもが間違いではなくて、完全に正しい訳でもない。会って一体どうしたいのかと聞かれれば、皇子は曖昧に微笑むしか出来そうになかった。

けれど気になる。自分を見つめていた眼差しも、身を翻すように逃げてしまう時にもきつい輝きになる気性も、偽悪的な口調でさえ、何かの声にはならぬ言葉である気がして落ち着かない。

あえて無理に総括するなら、と皇子はふと思い浮かんだ言葉を呟いた。

「彼と……友達、に、なりたいたいのかな……」

名前も知らないのに、とリユースはぼんやりと思い、唇で薄く笑った。それでも思いついたその言葉は自分の胸にひどくしっくりと納まるようだった。

彼の抱える孤独と皇子の抱える孤独はよく似ていた。気位が高くて他人を寄せ付けない——彼はいつでも人の中心にいたが誰にも心を許していなかったことは分かる——所も、誰からの理解も欲していないと身構えてみせる所も、孤独に慣れてしまった所も。だから会えばきっと——多分、話が出る。リユースはそれが自分の勝手な空想であることを承知しながらも、うち捨ててしまうことが出来なかった。

彼の話を知りたい。今まで何処にいて、どうして生きてきたのかを。喜びの話を苦みの話を、辛さも楽しさも、その生きてきた軌跡を知りたい。

話がしたい。どんな下らない話でも。皇子はきゅっと唇を結んだ。

——淋しい。それは皇子が次第に重苦しく感じ始めていた身の孤独であった。

彼を取り巻く人々は彼を憧憬し崇拝しても、決して近寄ってこようとはしなかった。彼に取り入ろうとする者たちは沢山いたが、彼に近しくなろうとする人間はついに見当たらなかった。憧憬があるなら嫉妬もある。双方の視線の重さだけが共通だった。

少女達はまた違う目で彼を見た。沢山の手紙、手作りの押し花の葉、刺繍の入ったスカーフ、そんなものと共に愛の告白も嫌というほどきいた。

けれどそれは皇子は全て断っている。よく分からないのだ。人を恋すること。愛すること。その心が一体どこから派生してくるのか、彼には全く理解できない。エリザ公女は呆れ顔で、考えることがそもそもいけないのだという事を言ったが、その意味さえあやふやで掴めない。

気持ちという不可解は自分の中の薄暮であった。うっすらと見える気もするが、何があるのか得体が知れない。そして正体の見えないものは怖い。

けれど、母の関心は欲しい。あの視線や弟に向けるような優しい笑顔や穏やかな声が、もっと欲しい。弟に目を取られがちな母の、年上である彼に理解と分別を求めている母の、柔らかな腕に抱き巻かれて感じる安息を、もっと欲しい。そしてそれは弟がいる限り自分に燦々と注がれないだろう。

胸に一瞬さした鋭い痛みに、リューズは端麗な頬を歪めた。これはきっと、淋しさのための苦痛だ。決してラインを自分は嫌ってなどいない。だから母上、もう少しでいいから、ほんの僅かでいいから、一瞬でいいから、

――私を見て下さい。

皇子は首を振る。彼に会いたい。会って話がしたい。その淋しさを、例えようのない孤独感と虚無感を、彼は分かってくれるだろうか……

「……本当に、何て、都合のいい……」

リューズは低く呟いた。けれど、淋しい。

誰よりも孤独だと、淋しいと、皇子は呟いて滲んできた涙を押し出す為に目を閉じた。

見つめてよ

お前の世界の中心を　私がすっかり占めるまで――

酒場女の歌声は朗々と、小汚くて薄暗いホールに響き渡る。

安酒を更に水で薄めて飲む客達が、女の歌に口笛で加勢する。豎琴の音は陰鬱で、それを弾く指の持ち主のように暗い表情だ。

きらきらひかる、硝子玉の髪飾り。

安直な煌めきが安酒場での余興に相応しく、床に淡い影を落とす。

女の歌は、まだ続いている。

愛を囁く海鳥たちの　歌は掠れた　しゃがれ声

嘎れた喉から啼きあげて　今宵も死ぬほど　呼んでいる

お前の元にも届いている？ 悲鳴のような、海鳥の歌

抱いていてよ

お前の持てる両腕の その長さに余らぬように

海から上がってくる風が枝をゆらした。盛夏に茂った濃い緑がざわめくと、耳に遠く巻いているような潮騒と混ざって不思議な音になる。療養所の庭は患者達を宥めるために広く作られていて、木陰とその下のベンチが存在するが、広さ故に他の患者と出会うことが珍しいのも気楽で、最近では尋ねてくると庭に出ることが多い。

ベンチに腰を落として自分の肩を枕に眠る母にちらりと目をやり、クインは自分のスカートの皺を丁寧に伸ばした。

顔色は確かに良くなった。感染値も下がって療養所の中であれば条件付で歩くことが出来るようになった。頬の血色もいいし、薬も効いている。その薬のせいで母親は先ほどから目を覚ます気配がないが、それでもクインは良かった。

月に一度顔を見にミシュアまで空間転移してくるが、その都度母は身体を回復させていくように見えた。この療養所に母を置いて最初の数ヶ月、自分が半信半疑であったことは否定しない。

本当に薬は効くのだろうか。本当に母は助かるのだろうか。母には言えない身の切り売りをしてまで稼いだ金は有効に、自分を救う柔らかな腕の持ち主を現世につなぎ止めてくれるだろうか。そうでなかった時、自分はもうどうしたらいいのだろう。

最後の疑問が浮かんだ時、クインは恐怖のあまりにそれから目を逸らした。そんなことは考えたくなかった。彼の中にある不安という根は雑草のように頑迷で、幾ら千切っても千切っても次々に芽を出しては彼を苛立たせる。

けれど母の様子を見ている限り、薬は良く効いているようだった。療養所に連れ込んだ時は既に美しかった爪の色が奇妙に黒くなり、左の小指と薬指は麻痺が進行していた。

指先の色はもう戻らない。黒死に罹患した患者がよくするように、母もまた、色が変わった指先を隠す為に手袋をしている。

無造作に膝に置かれている手を、包み隠す布地の上からクインは撫でた。この手の熱さが彼をひたすらに導き、守り、愛してくれていたのだ。離れていても、それは変わらない。

自分は母を愛しているし、母も自分を愛している。

――でも。クインはそっと溜息になった。

離れている時間は彼と母の間に遮蔽幕のように薄く、何かをかけてしまった。手袋のごく薄い遮断でも決して素肌に触れられないように、自分とこの優しい人の間に、何かが横たわっている。

離れて過ごしているせいなのか、それとも母に話せないことばかりが増えていくからなのか、クインはそれを考える度に自分の胸の中を烈しい苛立ちや屈折した怒りが荒れ回ることを自覚している。

自分は何かのせいにしたいのだ。クインは他人からは表情が見えないように俯き、ぎゅっと唇を噛んだ。

憎いというなら全てが憎い。

何故俺ばかりがこんな怒りを抱えなくてはいけない。生まれた瞬間の星の配置のせいか、それとも宮廷内の事情ってやつか、どれにしたって俺を放り出してもう片方だけを大事に暖めている理不尽のつけを、払わせてやりたい。

理不尽、理不尽、理不尽。呟く口調に潜む切羽詰まった苛立ち。クインは表情に出ないようにゆっくりと奥歯を噛み合わせた。

納得なんか、出来るものか。俺が母さんに話せない秘密で苦しい時に、あっちは大切に絹の衣装にくるまれて微笑んでいればいいなんて、どうして決まったんだろう……

そしてクインはいや、と自分を宥める為に首を振った。

皇子は彼に優しくあろうとした。何かの共感をその瞳に見ることが出来た。ほんの一瞬の交感でも分かることもある。

皇子は自分の正体を知らない。けれど、自分と話をしたいに違いない。ほんの僅かに目を見交わした瞬間も、曇りのない明るい、嬉しそうな笑顔だった。

――皇子になど、会いたくない。皇子の優しい笑みも素直な視線も、事情の内実を知らないなりに気遣うだろう態度も、全てが自分を鞭打つのが分かっている。それは自分の持ち物であったかも知れないのに、自分の可能性の影と現実を突きつけられれば痛い。

痛いことは分かっているから自分がどうするかも知っている気がするのだ。

会いたくない。自分を何の条件も見返りも期待せずに優しくしようとしてくれる人を、この手で、言葉で、蹂躪するようなことはしたくない。

会いたくない。会えばきっと自分は彼を傷つける。そうしてしまいたくて仕方がないのだ。

この煮えるような黒い気持ちを憎悪と呼ぶのかも知れない。自分の上を通り過ぎていく男たちの仕打ちなど、憎しむのにも値しない。あんなものはただの仕事だ。流れていく時間を、滑稽で奇妙な仕草を、目を閉じるなり天井を見上げるなりで潰していればその内に終わる。

最初の頃に感じていた生理的な嫌悪感も、精神的な負荷感も、全ては消えた。その方が自分にとって楽であることを承知して享受しているはずなのに、何故それがこんなに気に食わないのだろう。そして思考は皇子の元へ戻る。自分と同じ血を持つ、彼の幸福について。

死んでしまえばいい。ちらりと湧いたそんな言葉にクインは溜息をついた。皇子のことを思うたびに、憎悪だけが募った。間違っていることは知っていても。クインはじっと目に鮮やかに映える芝生を睨み、唇をひき結んだ。

――もうすぐ、15になる。

母はあの約束を覚えているだろうか。黒猫の小さな友人を置き捨てていった夜、全てを話してくれると言ったその言葉を。

(15になったらね。そうしたら教えてあげる……)

その声の暗さを記憶から呼び戻し、クインはぞっと目を閉じた。何かに押し潰されそうな、母の声音の重さと暗さがひたすら耳元でうなっている。掠れた蜂の羽音のように、それは彼の心に煩わしく寄ってくるのだ。

(お前の母親は私よ。私一人よ。お前は私の子よ、私の子なのよ……――)

私の子。母親は私。愛してるわ。繰り返される呪文のような呟きに、自分はいつだって頷き、微笑み、母の温かな身体に抱きついて頬をすり寄せて受け入れてきた。それをしなくなったのは母が発症し、療養所へ入ってからだ。

肌が直接触れなくなったからなのか、それとも自分が次第に沢山のことを知り得たせいなのか、同じ事を言われて以前と変わらず頷いていても、胸の奥では別のことを考えている――何故

。

何故自分だけが王宮を出されて市井にいるのか、母が自分を連れているのか。答えは既に輪郭を掴めるような位置にある気がして、クインはそこから顔を背けることしかできない。

それは自分を今まで愛してくれたこの女の、暗い部分を知ることと同じ意味だからだ。

マリア・エディアルという名前は恐らく虚偽だ。どういう事情であれ、母が皇子を皇城から連れ出すことが出来たとするならば、自分とリュース皇子の出生時に皇城に出入りできる立場にいたということに他ならないが、現在行方不明となっている貴族の名前の一覧にはなかった。

貴族の俸禄も収支も、租税や諸権利が密接に国庫と絡む為に戸籍に付随する形で公開されている。帝都の台帳管理事務所へ行けば、誰でも閲覧が出来るのだ。

母の実家と正体さえ、分からない。闇に紛れた根の部分に向かって進むことは出来るはずなのに、怖い。だって.....

浮かんできたまがまがしい言葉の毒気を抜いて鎮める為だけにクインは深く呼吸をした。

皇城から皇子を一人連れ出してその後連れて歩いているとなるなら、それは誘拐というものではないのだろうか？ その証拠に一度は迎えが来たのではないか？

そしてそれを母は振りきって逃げた。クインを少女に擬態させ、母娘の記載の戸籍まで探し、殆どの財産をなげうって安全を買った。

中央中等学院に入学することをあれほど恐れていたのは、貴族の子弟の多さや何よりも皇族の教育機関としての役割を知っていたからで、いずれ自分がリュース皇子と再会することも理解していたのではないだろうか。リュース皇子と自分が真向かえば、そこから何かが零れてしまうと思ったから？

いずれにしろ、どの仮定も母をおとしめることしか出来ない。彼女が今まで注いでくれた愛情を疑っている訳ではないが、基盤となる血縁関係を自分で否定してしまっている今、それは疑問と過去の真実への欲求に変化するしかないのだ。

けれど怖い。母親の過ちを自分で暴きたいと願うことなど、どれだけ恐ろしいだろう。彼女の悲しむ顔など見たくない。恐怖で強ばる顔も、絶望に黒く塗りつぶされた顔も、何もかも見たくない。

それを見なくてはならないとするなら、真実など要らない。母、マリア・エディアルと名乗る女の為に。

クインが再び長い溜息になると、肩がふっと軽くなった。知らない内に身体が揺れていたのだろうか、母が長いまつげをゆっくりとあげていくのが見えた。その奥に濡れ輝く黒い瞳が夜空のように美しい。

こんなに綺麗な人だったろうかとクインは不意に恐ろしくなる。病のせいで暫く沈んでいた肌の色はやや戻ってはいるが、血の気の薄い頬などは透けるような白さだ。けれどそれは母の美しさを少しも損ねない。却って空恐ろしくなるような肌の美しさいつの間にかすり替わっている。

。

一瞬のぼんやりを癒すように母は笑い、そして彼の背後へ向かって会釈した。

クインが振り返ると、同じ療養所の患者であろう老婦人が杖を手にゆっくり歩いてくるのが見

えた。患者と分かるのは母と同じように手袋をしているからだ。クインは立ち上がって椅子を譲ろうとするが、老婦人は穏やかな笑みのままに首を振った。

「一度座ってしまうとね、立つのが辛いだよ。こんなお婆さんになったら分かるわ」

機嫌良く、小さく笑う声に悪意がないことを知り、クインはほっと微笑む。それでも座ってしまうには居心地が悪かったから、何となく、立ちつくした。

母と老婦人は患者同士の気安さでひそひそと世間話をしている。他愛のない話に適当に付き合っていて微笑んでいると、老婦人は彼を見て目を細めた。

「でも本当にいいわねえ、こんなふうに娘さんがしょっちゅう会いに来てくれるんですもの、お幸せだわ」

母は微かにくすぐったそうな表情をし、そしてゆったり頷いた。この子は、と彼の腕をそっと撫でる仕草に籠もる熱は以前と全く変わらない。手袋の薄い遮蔽が悲しいと思うのは自分の勝手なのだろう。

「この子は私しか家族がいなくて……父親はとうに亡くなりましたし、私の方は天涯孤独の身ですから……」

老婦人が頷き、彼に向かって淋しいわねと微笑んだ。それに曖昧に笑って首を振り、母さんがいますからとクインは呟いた。社交辞令のようにでも口にすると、それが真実胸に沁みた。

この母が居たからこれまでを過ごしてこられた。逃亡の理由も身分の詐称や秘匿の理由も、どうでもいい。母を守ることが自分に出来る限りそうし続けたいと願い、望み、帝都へ戻ったのだから。

今更後悔などはしない。母を離れて見捨てることなど出来はしない。けれど、自分がこの世に生きていることの真実を知りたい。だがそれは、母を糾弾し追いつめることと同じ意味ではないのだろうか――

クインはふっと母達から視線を外すことで、それを忘れようとした。

彼の翳った表情に気付いたのか、老婦人は散歩の途中だと笑って立ち去った。木漏れ日の強い日差しに彼女の背が遠くなるのを見つめていると、母が消え入りそうな声で低く呟いた。

「――カーズ……」

思わずクインは振り返った。その名前は彼の耳を通して心臓を凍りつかせる効果をもった、魔術であった。

様々な疑心と惑乱が脳裏を通り過ぎていくのを呆然と見送って、何かを言おうと唇を動かしたが、そこからは言葉は遂に出てこない。強い嵐に全てをさらわれて惚けているようだ。すうっと脳天から血がひいていくような感覚がした。それでやっとクインは我に返る。何を言っているのか未だに分からないまま、母さん、とだけ呟いた。

母は視線をまっすぐに彼に与え、そして眩しそうに手をかざした。それが木漏れ日の強い光を遮ったのか、それとも母の胸内にある何かを直視しない為の仕草であるのか、クインは知りたいとも思わなかった。

「……覚えていたのね……もう子供の時のことだから、忘れてしまったのだと思っていたけど」

母の声は何かを懐かしがる甘さを含んでいる。彼を攫いに來た男が彼の目の前に現れてから、10年がやっと経過しようとしていた。この秋でクインは15才になるのだ。

微笑む母の面差しの影の薄さに、クインははっきりと戦慄を覚えた。何かを悟ったような表情は、人の命の薄さの証明のような強さをかいま見せられてどんな言葉よりも烈しく怖い。自分を見て遠く懐かしいものを見るような顔になったことが、母の命数の少なさを叫んでいるようで、クインは怯えの為に視線を外した。

「私はお前に沢山の話を――」

「母さん」

クインは反射的に母の言葉を遮った。声音を使うことさえ忘れていたのに気付いたのは一瞬おいてからだ。

彼は真実震えていた。一番冷たく寒いものは、いつも身の内側からやってくる。母の語る真実を聞きたいだろうか。自分は何を一体知りたいのだろう。

中核は既に知っているクインは考えていた。自分はまず間違いなくリュース皇子の双子の兄弟だと、考えるまでもない。あの皇子を見た瞬間にそれは知り得た気がする。生まれた年や時期もほぼ同じ、まるで鏡の中から抜けてきたようにうり二つの自分たち、そして何よりも、あの幼いばかりだった夜に彼を迎えに来た男が言った言葉。

（それが身分というものであるからです）

（母君が悲しまれます）

彼は自分に膝をついた。母のことはマリアと呼べと言った。それが身分だからとも。あの言葉や仕草の一つ一つが自分の推測に強い信憑を持たせている。だから母の口から語られる真実が何であるのか、そちらの方が今となっては怖かった。

自分は臆病なのだとクインは唇をゆっくり噛んだ。夏のむせるような熱気の中であって、そこは酷く渴いていた。

「母さん、いいの。大丈夫。私は、今のままで、本当にいいの」

どうにか作り出した少女の声音は、それまで自然に使いこなしていたものとさほど音調が変わらない。それに気付いてクインはようやく掴まることの出来る安堵を見つけた。

呼吸を僅かに整えて、それまで凍えているように固まっていた頬を弛め微笑んだ。

「……母さんが私のことを愛子だと言ってくれるから、私はそれだけでいいから。ね、私、お父さんのことなんか興味がないの。今までだって助けてくれなかったもの。お父さんが生きているにしても死んでいても、今の私には関係ない」

関係ない、と強く言いきると、母は眉を僅かに寄せた。悲しげというにはあまりに淡く、切ないと呼ぶにはひどく穏やかな顔であった。

「……そう、ね。そうかもしれない……でも、私は私の罪の話をお前には聞いて貰わなくてはいけないわ……」

「罪」

クインは低く繰り返した。その禍言に一度は落ち着いた胸があやしく騒ぎ始める。心臓が次第に痛みを訴え始める。波打つように耳音で鼓動が響いた。

母の罪、が一体何であるかはもう知っている気がした。その罪ゆえに追われ続け、流れ続けなくてはならなかった。追っ手の影を感じるたびに暗くひきつった頬の歪み、怯えたような瞳の色

、切羽詰まった声音が彼を抱きしめてお前は私の子だと囁き続けた。

そこまでして自分に刷り込みたかった幻影を未だに共有しているのだと母には永遠に信じていて欲しい。自分がどうやら真実に近いものを知りつつあることも、真相を知ろうと思えば手段がない訳ではないことも、教えたくない。

何故そんなことをして、彼女を悲しませなくてはいけないのだろう。自分を守り、導いてくれた優しく白い手を、拒絶することなど出来ない。そんなことが出来るはずがない。

母が何故自分を連れているのかは知らないが、注がれてきた愛はこの世で唯一信じるものを選べと言われれば指さすものだ。

彼女の微笑みを信じている、愛している、他に何も信じられなくても愛せなくてもいい。それだけが重要で絶対に唯一なのだ――

躍起になってそれを自分に刷り込もうとしていることに、クインは薄々気付きながらも目を逸らした。罪と言われて騒ぎ始める血潮が喉を上がってきそうで苦しい。

クインは微かに喘ぐように呼吸をし、母さん、と震える声で言った。

「母さんの言うことが何であっても、私は母さんの味方だから。罪なんて言わないで。そんなこと、聞きたくない。私は知りたくない。母さんの罪なんて、あるはずがない……」

「――私は聖女ではないわ、カース……」

「私、そんな名前じゃない。そんな人知らない、お願い、母さん、俺は母さんとずっと一緒にいるだけで、いいんだ……」

言葉の輪郭が不意に少年のものへ揺らいだのにクインは遅れて気付き、自分を落ち着かせる為に首を振った。その仕草に弾かれたように澄んだ、甲高い音がした。腰のベルトから通した銀の懐中時計が指定した時刻を告げている。

クインは明らかに安堵し、時間だわ、と呟いた。空間移転は身体への負担が少なくはない。今夜の客のために、もう移転座標まで戻らなくてはいけないだろう。

「仕事、忙しいのね」

「ええ、そう……ね。でも慣れてきたから平気よ。母さんは心配しないで。また、ね」

マリアはクインを見上げてゆったり頷いた。

彼女に微笑み返してクインは血縁のない、自分を皇城から拉致したはずの女の頬に、そっと唇を押し当てようとした。母がごく自然に、しかしいつものように決然と身を引いた。母は、彼に死の病が伝染することを心からおそれている。

クインは母に淡く笑いかけ、そしてごく簡単な肌の触れる喜びを放棄して、彼の住处へ赤い色をした迷路の中へ戻るために背を向けた。

空間転移から抜けて現実へ出る瞬間は、いつも極彩色の悪夢を見る。胸が悪い。それまで水中にいたような身の重さがふっと消えて空間へまろび出るような感覚と、僅かな座標の誤差のために、クインは転移から降りるときは大抵転倒した。勿論そのために、転移から抜けてくる場所は彼の部屋の寝台の上になっている。いつものようにそこにどさりと勢いで転がり、クインは吐息を漏らした。

魔導で空間を渡る時の酩酊感はいつまで経っても慣れそうにない。身に馴染んだ悪寒を喉で宥め、クインはのろのろと寝台に座り直した。襟元に柔らかく結んだスカーフを引き抜いて首を楽にすると、自然と溜息が零れた。

母さん。眩きは既に少年としての落ち着きに戻っていたが、一度覚えた動揺はなかなか静まってくれそうになかった。母が言いかけた罪という言葉が、払っても払っても重く蘇ってくる。

――罪の話を聞いて貰わなくてはいけないわ。私は聖女ではないのよ。

クインは頬を歪める。彼にとって母親の聖性は絶対で、世界で最も美しいものであった。そこが汚されることへの怖れは根深く彼の中に居着いている。

母が15になったらと期限を切った夜から、自分は一度も真実を尋ねなかった。髪の色が少しでも覗く日は、閉じこめてでも外へ出さなかったような頑とした人であった。はっきりと口に出したことを、撤回する人でもない。

それに流転の最中の母の怯えように、不用意に聞いてはいけないことなのだとクインはいつしか悟っていった。母を悲しませ恐れさせるものこそが幼い流転の日々に知っている一番の敵であったのに、自分が同じ事をしようなどとどうして思えただろう。

それでも10才の秋に彼の分裂した運命に出会った瞬間、逃亡の理由の方はするするとほどけていったのに、肝心の動機は却って絡まってしまった糸のようであった。

尋ねなかったことが今更正解だったと安堵するのは自分が逃げているせいだろうか。母が言う罪とやらが真実許されざるものならば、そんなことは知りたくないのだと思っているのは否認という罪だろうか。そして何よりも、母の元から帰ってくる度に募る、渴仰のような思慕をどうしたら。

母親の腕の温かみを知っていた時代から急に放り出されてしまったからなのか、クインはそれに巧く対応できない。ふと気づけば人肌の恋しさ故になのか、気に入った客には最初の頃より甘い態度をとっている。

それを認めざるを得ない夜は、ひどく打ちのめされた、惨めな気持ちになった。クインは記憶から吹き上がってきた沢山の痛みをこらえるために唇を噛んだ。

誰か。胸の奥からかすかに聞こえてくる声を、クインはいつも遠くに聞いている。ミシユアの海から駆け上がってくる潮騒と似た、心ざらめく悲鳴のようなその声を。

誰か、誰か――お願いだから……――

その後の言葉が何であるか、クインはいつも聞かない。そんなものに耳を貸してはいけないのだということだけがわかっていれば十分だった。

母の不調は仕方がない。それを救うためにはこれしかなかったと納得はしている。けれど心の中にある痛みまではどんなに慰撫しても頑として折れなかった。そのために皇子を憎むのは間違

っているなら、あとは自分を厭うしかなかった。

クインは寝台に座り込んだまま、片手で顔を覆い、そしてもう片方の手を自分を抱くように回した。誰か。耳の奥から何かが囁いている。

母の腕に巻き取られて幸福だと思っていた日々が遠い。あの頃のように誰かと何の見返りも打算もなく、ただ愛のためだけに手を取り合うことは自分にはもうやってこない気がしてたまらない。そんなことを考えただけで、震えがくる。母を失いたくない。彼女をどうしても自分の元から無くしたくない。

マリア＝エディアルと名乗っている彼女の正体も罪とやらの内容も、どうでもいい。彼女だけが自分を真実愛している、この世でたった一人なのだ。

クインは顔を覆っていた手を外し、今度は両腕でしっかりと自分を抱いた。外は夏のぬるい黄昏で、寒さを覚えているわけではない。けれど、そうでもしていなければ自分がいつまでも震え続けなくてははいけないようで、居たたまれなかった。

長い溜息が、床に落ちていく。

客はその欲求に従ってクインの内面には無頓着、それがましな言い方であるならば無神経だった。そう振る舞う権利も他の娼婦たちなどと比較にならない金額に含まれているというなら間違いではあるまい。それにいちいちつきあう義理もないと反発を覚えたのも最初だけだ。

物として扱われることにクインは慣れた。極上の人形のように仮想の天使や悪魔のように客たちは彼を愛でたが、それはすべて彼の表面を滑り落ちていくもので一晩たてば忘れるもの、朝の水浴と共に流れて消えていくものとなった。

それでよかった。彼らの勝手な幻想や妄執に関わるよりも、自分は物であるのだと暗示して天井の模様を数えている方がよほどましだった。

けれど、そうして頑として無機質を装った心をしどけなく解放する場所が、ついに見つからない。以前は母が彼の負荷を柔らかに吸い取ってくれていた。幼い頃に涙を唇でついばんでくれたような暖かさがいつでもクインの還る場所だった。

それはもう身近にはいない。抱きしめようとするやと離れてしまうようになった。その寂しさを、その度に胸を突かれるような痛みを、感じないようにするにはどうしたらいいのだろう……

誰か。胸の奥から何かがこみ上げるように聞こえてくる。

いつかおまえを愛してくれる人を、おまえが愛する人を見つけなさいと母は言った。それはおそらく正しいのだろう。自分には誰もいないのだと思うときはこんな時だ。

それを当初クインはライアンに求めようとした。ずっと昔彼が彼でいられる場所を作ってくれた男、クインの望みを叶えてくれた男。

ライアンにこだわるのは彼がクインの状況や事情を考慮することが出来る男であったこと、昔からクインを一段下として見ずにほぼ対等に相手をしてくれた男であったことが大きいだろう。

特に4年前帝都にいた頃はクインはやや年上に見えたとはいえ10歳の子供で、ライアンは18か9だったはずだ。ライアンの正確な年齢は本人も知らない。

この場合、8の年齢差は大きいはずであった。ライアンは既に少年期の終わりにおり、自分はそこへ踏み出す時期であったのだから。だがライアンは彼を子供扱いにはしなかった。クインが語る継承戦争を勝ち抜くための方策に価値があると認めてからは尚更クインの話をよく聞いてく

れた。

（俺の力が借りたいときは必ず俺を呼べ）

帝都から逃げ出す日にライアンはそう言った。それは彼の信頼と感謝の印だった。ライアンの多くはない言葉の中に籠もる真摯を嗅ぎとって信じたからこそ、クインはライアンを頼って帝都へ戻ったのだ。

だが数度の関係を持った後はライアンはクインを以前ほどは寄せ付けなくなった。ライアンがタリア王の側近でありタリアの自警や派閥抗争に既に深く関与している以上、時間がとれないのはあるいは不可抗力であろう。

が、ライアンから訪ねてくるときも淡々と最近の様子を訪ねるくらいで、クインの訴えようとする言葉にはほとんど頓着しない。適当にあしらわれ続け、クインはライアンのことを考えようとする反射的に苦い怒りがこみ上げてくるのが最近になりつつある。

チアロはライアンが十分に自分に目を向けていると言うが、どこが一体そうなのか自分にわからないなら全く無意味だ。

ライアンか、と呟いてクインは自分を抱いたまま舌打ちした。彼が何を思っているのかわからないのは昔からだが、それがこんな根の深い苛立ちに変わることを、クインは自分で持て余している。

苛立つ波は次第に強くなっている。心の中に荒れる海を見る日には、何をしても神経が尖って落ち着かない。自分でも幼いと承知しつつ、だがどうしようもなく焦がれている。待っている——誰か、を。

そしてそれはライアンではないのだろう。苛立ちを収め寂しさを埋めるためだけに彼に縋り付こうとしたとき、ライアンは彼に言った。

（俺はお前の保護者でも愛人でもない。俺を特別にしようとするな、お前はただ勘違いをしているだけだ）

その時なんと答えたかは忘れてしまった。ライアンが自分を突き放したことだけが絶対の現実だった。

現実にはクインにはいつも辛く苦く、そして痛い。勘違いという言葉で示されたライアンのはっきりした拒絶を、クインは思い返す度に激しい怒りに襲われる。

ライアンは俺に関わる気がないのだ。4年前と同じく、仲間とは決して認めず頑として一枚壁を隔てた距離をとる。時間さえも惜しいのか、滅多に姿も見せない。それが自分の抱える秘密のためであるのか、それとも自分の中にある何かの要因のせいなのか、クインはわからない。どちらであっても現実が動く訳ではなさそうだった。

4年前に彼の側にいた頃は、ライアンは素っ気はなかったがクインのことをよく気かけ、救ってくれた。それは自分が子供だったからか、それとも継承戦争を勝利するために彼にいくつかの助言を与えたからなのか。

けれど、役に立ったからというのならその理由は今クインの身体を通り過ぎていく男たちと同じ、彼をただの小綺麗な小物のように扱うことと変わらない。ライアンからはその無機質さは感じたことはなかった。彼は良くも悪くも、自分の思惑に忠実にクインを遠ざけている。

そこへ思い至りライアの冷淡さについて考えるとき、クインは怒りと苛立ちを濃厚に眷属として持つ寂しさを感じずにはいられない。チアロはクインにとって大切な友人であり気安く心を許せる希有な相手だったが、ライアは友人ではない。かといって確かにライアが言うように愛人でも保護者でもなく、まして主人でもなかった。

彼は一体自分の中の何であろう。こうして彼のことをつらつらに考えていると、彼にまるで恋するようだとクインはふと思い、苦く唇だけで笑った。それは恋ではなかった。愛というものも違う。

けれど、彼の視線が向かないと知れば身を切られるほどに欲し、得られないと知れば焦がれるほどに切なく、悲しい。それをどうにかして彼に理解させたいはずなのに、気づけば彼に嫌味をいい、八つ当たりをし、不機嫌に鼻を鳴らすことしか出来ていないのだった。

——でも、ライア。

クインは長い溜息をつき、身体をゆっくり寝台に横たえて目を閉じた。転移の時の眩暈も悪寒もまだ身体の下辺に残っているようで、ひどく応えた。

でも、俺は、淋しいんだ。

生活の不満や仕事の鬱憤などではなく、友人の不在などでもなく、ただ、——淋しい。

母の腕の中にいてぬくやかに守られていた時代から突然身ぐるみを剥がされて世間に転がされたせいなのか、暖かであったという記憶のままに、還りたい場所を探している。

自分が求め求められる場所へ。誰かと見つめ合いながら微笑みあいながら、幸福をしっかりと感じ取れる心の棲家へ。還るための道を、共に歩く相手を、探している。

——一人では、あまりに淋しくて。

淋しい、と呟けばそれが真実のような気もした。それを和らげる役割を彼に求めるのは間違っているのだろうか。ライアは暗にそう示しているが、クインはライアの意志には気付かないふりをし続けている……

閉じた瞼の裏が滲むようにじんと熱い。クインは枕にあ顔を押しつけ、声を殺してわずかに泣いた。食いしばった歯の隙間から漏れる吐息が、震えている。

淋しい、淋しい、母さん、俺から離れていかないで。

俺を一人にしないで、置いていかないで。

脳裏を巡り回る言葉だけが、世界のすべてのようにのしかかってくる。誰もいない部屋で一人で泣くときでさえ、大声にならない逼迫が、今のクインの全てだった。

……そうして寝台にうつぶせてしばらく体を震わせていた彼の耳に、扉が軋む音がした。誰かが入ってきたらしかった。

クインは素早く身を起こし、目元をこすった。涙はほとんど止まっていたが、痕跡を他人に見せるのは何があっても承諾できなかった。

この家に出入りしているのはライアとチアロの二人だけではない。チアロ一人では結局手が回らないこともあると結論したライアが彼の側近から一人、オルヴィという女を時折寄越す。ライアは夕方近いこの時間は大抵タリア王屋敷だから、チアロかその女かのどちらかであろう。

。

オルヴィはライアの性質に近い、暗く陰気な女だ。だからという訳ではないが、クインは彼

女を苦手としている。ライアンに輪をかけて口数が少ないのもそうだろう。彼女に泣き顔を見せるものかという奇妙な意地でクインは尚更平静を装うように呼吸を整えた。

簡単に扉をたたく音がして、寝室の扉が開く。よう、という軽い挨拶が耳にした瞬間にチアロであることを悟り、クインはやや息を戻した。

「転移してきたばかりだろ、顔色悪いぜ」

そんなことを言いながら気安い表情で近寄ってきたチアロは、だが彼の手前で足を止めた。いつも明るく翳り無い表情に、一瞬さっと怪訝な線がよぎる。クインははっとして顔に手をやろうとするが、その華奢な手首をチアロが素早くつかんだ。

「……泣いてたのか？ どうした、お前の母さんに何かあったのか」

彼の声音はなだらかに暖かい。その温もりに溶かされたように、一度止まったはずの涙がふとこぼれた。

瞬きに頬を転がり落ちていく水滴の数をぼんやり数えていると、チアロが彼の隣にすんと座り、肩に腕を回して彼を引き寄せた。

チアロの大きくて骨ばった手が子供をなだめるように頭を撫でている。彼の仕草にクインは消え入りそうな嗚咽をこぼして友人の肩に顔を押しつけた。チアロは彼に先に聞いた以上のことは何も聞こうとしなかった。クインの気が済むまでこうして彼を捕まえているつもりなのだ。チアロが自分を追いつめないことは、クインにとっては安息であった。

チアロはよく知っているのだ。クインの気分の上下が激しいときはクインにとってひどく心痛い何かがあったときで、この頃は療養所から帰ってくる度にこんな風に滅入って気怠く鬱に沈むことも。何も追求せず何も要求しない彼の優しさが真実胸に染みた。

——淋しい。

それでも身の内では吠え回っている声はどれほど貪欲なのだろう。わずかな仕草や時間で癒されることに激しい抵抗を叫んでいる。淋しい淋しいと訴える声に半ば押し切られるように、クインは顔を上げてチアロの首に腕を絡めた。

——淋しい。

自分の中で何かが決壊したように、それだけが流れてくる。声が背を押すような感覚にとらわれて、クインはそっと唇を彼に近寄せていった。

吐息が交わされるほど近くになる。チアロの肌の温度までが唇で感じるような錯覚を覚えた瞬間、それがずっと離れた。クインは視線を友人に与えた。何故か彼の方が泣き出しそうな顔をしていた。

「……クイン」

チアロは彼の名を呼び、肩をつかんでゆっくり揺すった。

「俺とお前は友達だ。俺は、友達と、こんなことはしない……分かるか？」

クインはゆっくり頷いた。チアロの声はひたすらに静かで、穏やかだった。クインはもう一度頷き、分かる、と呟いた。

「ごめん、もうしない……」

付け加えるとチアロは眉根をよせるようにして切なく笑い、彼の肩を軽くたたいた。

「俺とお前は友達だ、いいな。何があっても俺はお前を見捨てない、約束する」

クインは頷いた。チアロの言葉も眼差しも、疑うことなど出来なかった。それを切り捨ててしまえば、今持っている数少ないものをさらに失うことになる。

その恐怖を一瞬ぞっと背中に覚え、クインは俯いた。衝動が過ぎ去った後は、増して荒涼とした気分になる。

黙ってじっとあらぬ方向の床を見つめていると、チアロの苦笑のような吐息が聞こえた。

「……なあ、気休めみたいなことでしかないけど、お前、女の客でも取ってみるか？」

クインは怪訝な面もちで友人を見つめた。今まで寝てきた客は夫婦が二組あっただけであとは全て男であったのだ。女の客、という耳慣れない事象にぼかんとしていると、チアロは数は多くないんだけどね、と付け加えた。

「でもないことはないんだよ、春先から5人くらいは聞かれてる。ほら、夫婦にお前を入れたことがあったろう。あのときの奥さんあたりから漏れたんだろうな。……気分くらいなら変わるかもしれないぜ、男相手と違って女だったら主導権も取れるだろうから」

「うん……そう、だな。そうする。そうだ、それもいいかもしれない……」

男たちが自分に加える身勝手に気ままな愛情に似たものを、別の形で他に吐き出す行為であることを薄く承知しながらも、クインはその話に深く頷いた。あるいは、飛びついたと言ってもよい。

母が抱えている暗部を思えば恐ろしく、自分の中にとぐろを巻く怒りは悲しい。

この二つに翻弄されるだけでこの先の時間を埋められていくのかと思うと、胸が潰されそうになる。頼む、とクインは低く呟いた。どんなものにでも、縋り付けば楽になると思っている自分自身を厭いながら。

——やがて日は落ちて、クインは身支度を整えて地下水路からタリアへでた。

涙の痕跡も荒れた心の海も全てが彼の堅い殻の中へ仕舞われて、この世で一番美しく圧倒的で、そして生身でないものになる時間がくる。

いつもの貸し部屋の主人は彼を見て曖昧に笑いかけ、そして一抱えもある深紅の薔薇の花束を押しつけた。一体何かと目で問うと、あんたの前の客が届けてくれってさ、と主人は言い、今日の客への牽制だろうと苦笑する。

独占欲の証左である薔薇の花を抱えてクインは最上階の部屋へと階段をのぼる。鼻腔からむせるような甘くきつい香りが身体に吸い込まれていくようだ。

部屋が決まっているのは事前にチアロかオルヴィかが隠した写真機などがないかどうかを確かめやすいからだ、おかげでとうに天井の様子は数え終わってしまっている。次からは何をしようかと考えながら、クインはいつものように部屋の扉を3度叩いた。少しの間をおいて扉が開く。中に足早に入り込む彼の肩をつかみ、男は花屋は呼んでいないと言った。

クインは振り返り、抱えた花束をずらしてちらりと男を見やった。この男は今日初めて見る顔だ。それがみるみる上気していくのに微かに笑い、そして今度はまっすぐに男へ視線をやって婉然というように唇をゆるめた。

「でも……今夜の花は買ったでしょう？」

そんなことを戯れに口にしたとき、男の強い力が自分を抱きすくめた。腕から花束が転がり落

ちる。ふわりと舞い立った強い香りに喘いだクインの視界の端に、男が踏みにじった薔薇の花弁がとまった。

今夜はあれを数えようかとクインは思いつき、先を急ぐ男の身体に腕を回した。

抱いていてよ

お前の持てる両腕の その長さが余らぬように

夜を往く人々の間をか細く縫って、小さな酒場から歌が聞こえてくる。流れ豊かな雑踏の中、小魚が泳ぎ渡るようにその歌は誰かの耳をかすめゆく。それはもう若くはない女の声。けれど人生の不確かさと悲しみを知っている声音。どこか突き放した他人さが気楽で、だが誰もが覚えのあるような温もりが懐かしい。

女の歌にふと足を止めた通りすがりの男は一瞬迷い、おぼろな光がこぼれてくる酒場へと足を踏み入れた。主人らしい初老の男が目で好きなところに座るように促して、席に着くとほぼ同時に女が次の一節を歌うために深く息を吸い込んだ。

女は歌う。あいのうたを。

愛からはぐれた海鳥たちの 叫びは風に紛れゆく

流浪い彷徨い鳴き立てて 戻らぬ人を呼び続け

お前の耳にも流れてくる？ 慟哭のような、海鳥の歌

帰してよ

お前の姿が世界から 消えてしまったあの日まで

むせかえるような血臭の中にライアンは立っている。彼の足下に転がる、ほんのさっきまで人間だったものは既に動かない。僅かにあがった呼吸は疲労のためではなく、ねっとり汗ばむような歓喜のためだ。息を深く整えながら、その度にむら立ち上る血液の残り香の中、ライアンは今、うっすらと笑っていた。

呼吸ごとに鼻腔から全身に回る血の生臭さが自分を今、満たしている。握りしめた細刃刀が痙攣している。たった今殺したこの相手の最期の悲鳴や彼をにらんだ目つきや、そんな記憶を目の裏に呼び戻そうとライアンは目を閉じ、僅かに身を震わせた。

それは彼にとって快楽であった。他人の前に命を奪うために立つ、その瞬間の憎悪さえ悦楽だ。背中を駆けていく一瞬の戦慄も、時折は身体に加えられる痛みでさえも、ぎりぎりの相克のなかにあればライアンのための麻薬と変わった。

陶然とした甘美を咀嚼するためにライアンは手袋をしたまま両手をじっと見やった。黒い皮の手袋にヒルのようにこびりついているのは相手の皮膚だ。最近は相手を苦しめるために一息には殺さず、苦しむ方法をまさぐりながらゆっくりと奪い尽くすことが多い。

僅かに手袋についていたそれをライアンは指先でこそげとり、その場に捨てた。この相手には恨みどころか面識もなかったから、既に彼はこの快楽から醒めかけている。何の感情も持たなかった相手ではやはり現実へ戻ってくるのが早い。

ライアンは手袋の先からのぞいている指先をちろりと舐めた。細刃刀は菱形のむきだしの両刃だから、使うときは指先のあいた手袋をする。

血の匂いは陶酔の極みにあるときの甘さを既に失いつつあった。ライアンは舌打ちした。

死を与える瞬間に自分を高い位置まで引き上げてくれる歓喜は、やはり何かの思い出がある相手の方が強い。嫌悪程度でも数日は記憶からゆっくり引き出して楽しむことが出来るのに、真実憎んでいたり愛していたりすれば、自分はきっと気が狂うに違いない——脳髄ごと犯される、快楽や背中合わせの悲痛のために。

ライアンはふっと吐息を漏らした。今でさえ、クインであれば彼を見て狂っているというだろうか。あれの中の天秤はまだ水平だ。水平を知って常にそこへ戻ろうとしているから均衡をとろうとして振幅が大きい。

ライアンは長々と嘆息した。僅かな時間彼を支配していた熱狂的な高ぶりは既に散り散りになり、残滓はかえって気分を悪くする。眉をひそめて細刃刀の刃尻から鋼糸を抜こうとした。

鋼糸を残すのはライアンが自分の仕業だと宣言するための方法だ。誰の仕事であるのかを知らせる場合にはみな、自分なりの方法を持っている。

だが興奮はまだ身体の方には残っているらしく、指先が僅かに痙攣していてなかなか糸をはずせない。苛立ちが次第に募ってくる頃、他人の気配が背後からした。

ライアンは振り返らなかった。その気配の主が誰であるか最初の足音を聞いたときから分かっていて、それは自分の服従者だったからだ。

「どうした、チアロ」

巧く動かない指先にじれながらライアンは言った。チアロが微かに溜息になったのが聞こえた。肩越しに視線を一度やると、チアロは顔をしかめて彼の足元を見ていた。

「見る度にひどくなる——ライアン、大丈夫なのかよ」

「何が」

「何がって……あんただよ。頭、大丈夫」

さあな、とライアンは素っ気なく応じた。チアロの嫌悪も次第にひどくなる。無論それは自分が誰かを屠る仕業が次第にむごくなっていることに対応しているのだった。

興味のなさそうな彼の返答にチアロはくしゃりと顔を歪めて、面白くないと表現した。ライアンに向かってこれほど明け透けにするのは今はチアロくらいのものだ。ライアンはそれにとくに気付いていて、だからチアロの不満も反抗も、不愉快ではなかった。それに配慮する気がないだけなのだ。

チアロは大人びた仕草で肩をすくめ、ライアンに歩み寄った。誰かを手にかけてまだ完全に甘美な夢から戻っていない彼に向かって警戒心なく近寄ってくるのもまた、チアロだけだ。並ぶと背丈はほぼ同じだ。僅かにライアンが彼を見下ろす格好になる。それを意に介さないという風で、チアロはライアンの手にある細刃刀をつまみ上げた。今までほどけなかった綱糸を簡単にほどこき、チアロが彼の手からそれを振り落とす。血溜まりの中にきらりと光りながら、綱糸が浮き上がった。

ライアンはそれを一瞬みやり、そして肉塊をつま先でよりわけて左手であった部分を拾った。死してなおまだ握りしめている拳をむりやり開く。中に籠められていたのは1本の鍵だった。

これだな、とライアンは呟いて新しい綱糸を鍵に通し、腰のベルトにくくりつけた。視線でそれが何かを問うているチアロには首を振った。

「お前はまだこちらのことに首を入れなくていい。チェインの方を固めておくんだな」

チアロは唇を尖らせて分かってるよ、と言った。そうした表情はチアロがライアンの元に来た頃から変わらない。やんちゃ盛りの子供と同じ顔を今でも彼の弟分はする。

そしてライアンはそれを甘いと苦笑しても、決して侮蔑や嫌悪にはならない自らの胸の作用を知っていた。

チアロと話していると、いつも心のどこかが淡く弛む。それを自覚できる程度に血の色をした白昼夢から醒めてくると、やっとこの場に立ちこめる生臭さがむっと気分を悪くしたのが分かった。

「話があるなら歩きながら聞こう」

ライアンは既に身長では彼に追い付きつつある部下の頭をぽんと軽く叩き、歩き始めた。

僅かに遅れたチアロが彼に並ぶ。路地を一つ通り過ぎるまで性質に反してほとんど無言だったチアロは角を曲がるときに背後へ一瞬視線を与え、大きく呼吸をした。

「ああ、気分悪い。ライアンよくあんな中に立ってられるよね？ おまけに見るたびになんか気味悪く一人でにやにや笑ってるしさ。ほんと、あれだけは頂けないよ」

血の臭いが薄れたことで、やっと本来の気ままさのままにチアロがしゃべり出す。それを適当に耳に流れ込む側から捨てていると、ほら、と明るい声を立てて少年が笑い出した。

「ライアンは興味がないことは片っ端から聞き流すんだ。せめて聞いてますって顔でもして適当に真剣に頷いてればいいのにさ。興味がないので聞いてません、って思い切り顔に書いてある」

チアロの言葉にライアンは唇を少しゆるめ、首を振った。チアロのように何事にもせわしく

反応するだけの、何かがこの世にあるとは感じられなかった。自分を取り巻く世界に色素は薄く、ほとんど無彩色の平板な視界だけが全てだ。

そこに何らかの色が入るとしたら赤だ。それは血の色だ。命飛び交う血しぶきの中でだけ、自分が現実を生きているのだという強烈な実感を得ることが出来る。それに比べたら他のものはなんと薄く白けているのだろう。

何もかも、黒白の点描のようにしか見えない。過去を追想しても、やはりそれは同じだ。そしてそこに入り込む色もまた同じく赤い。彼の永遠の主人であり、これからもあり続けるであろうリァン・ロウの髪の色。

ふと溜息になったライアンの腕を軽くつねり、チアロは声を上げて笑った。この少年がそんな仕草をするときは、自分の正気を咄嗟に引き戻そうとしているのだ。ライアンは大丈夫だと口にして、チアロの肩を軽く叩いた。

「……ライアン、ねえ、本当にさ。俺のことやチェインの他の連中のことはいいけど、クインの話だけはちゃんと聞いてやってよ。俺たちはあんたが王様だから、王様のなさることには関与せず、だけど。でもクインはあんたの臣下じゃないんだろ？ あんたがそう扱うから、あいつもそう思ってる」

ライアンは頷く代わりに長く嘆息した。クインの語った本来の出自とやらがどこまで真実であるか、今はまだ定かではない。だがリュース皇子との相似は尋常ではないことであるという認識はあった。クインが双子なのだというなら、それは信じてもいいだろう。

兄弟順などは些細なことだ。要は大貴族と国家の中枢へつながる糸へ彼が変化する可能性があるということで、それが重要であった。だからこそクインのしたいことはさせてきたし、ある程度自分の感情などを押し込んでつき合ったこともある。正直、ライアンは性的な対象としての男には興味を感じない。女であっても少女と呼ぶような年齢にはあまり衝動が起こらなかった。少年となると尚更だ。

クインのあの我が儘と呼んで一蹴すべきだった願いを聞き入れ、数度の関係を持ったことで、ライアンの中でクインとの契約は終了した。半ばは義務感でもあったのだが、けれど、クインの方はまだ終わっていないと考えているらしい。

客にひどくむごたらしく扱われて寝付いた時でさえ、流石に様子を見に顔を出したライアンに向かって手を差し伸べたではないか。

（ライアン、来てくれたんだ？　なんか、久しぶりに見るね……）

他愛のない言葉とは裏腹に、彼を見る視線の縋り付くような光は強かった。それにどうしたのか竦んだように怯んでしまい、彼に近づくことさえ躊躇われた。

クインが時折発する、飢えて泣く猫のような声音に絡め取られてしまっただけとはいけない。あれに耳を貸してはいけない。誰かに深く荷担し手を伸べるということはライアンにとって、彼の全てをそれに賭けるということと同じだった。

クインを自分の特別の位置に置くことは断じて、してはならない。クインは彼の契約の相手であって、過去の感謝の印を渡しているのであり、それ以外でも以上でもないのだ———ということを自分に言い聞かせ続けている。

「……あれはまだ何か言っているのか」

クインのことを考えると否応なしに気が滅入る。元来感情の隆没が少な目のライアンにとって、それだけでも特別ではあるのだ。

その問いにチアロはふふんと鼻を鳴らし、自分で聞けばいいじゃない、と言った。これはチアロなりの当てこすりというものであった。ライアンは吐息をぬるめて笑い、首を振った。

「奴のことは放っておけ。いつまでも誰かに甘えていればすむ年じゃないだろう」

「誰もいないのもどうかと思うけど？ だからライアン、あいつと話し合ったんだけどさ、今度から女の客もつけてみようと思って」

「……女か……」

ライアンは曖昧な返答をした。女客を取らせて彼の感情の均衡をとるというチアロの提案は実はかなり前に聞いた。そのときは甘えさせるなど簡単に退けたものの、同じことをチアロが蒸し返したならば、クインは相当煮詰まっているのだろう。だが、気が向かないのは確かだった。

「……俺はそれには賛成しないと行ったはずだなチアロ？」

「でもライアンはその代価を支払わないじゃないか」

クインの放置をきっぱりと非難し、チアロはライアンにきつい目線をくれた。一瞬それに目を合わせ、ライアンはやがて溜息と共に頷いた。

「……分かった、好きにしろ。但し、一人の女に深入りさせるな」

クインが快樂の供給者として自分を買う女に興味を抱くとは思えなかったが、男と女の間には突然何が起ころうとも不思議ではない。クインが突然それまでの主張や過去を放り出して女との生活を選ぶなどということはさせてはならなかった。

クインの顔を実際に見たことがある者は限られてくるが、チェインの幹部たちには存在自体は教えざるを得なかった。彼がライアンと密接な関係にあること、チアロが彼のために時間を大量につぎ込んでいることを幹部達に提示したことで、ライアンはクインへの手出し無用を宣言している。そんなことでもしてやらなければ、クインはチェインの中を歩くだけで身の危険を考えなくてはならないだろうから。

だがそれはクインがライアンの持ち物だということと同じ意味であった。少なくともチェインの中ではそうだ。チェイン王ライアンの所有物だから保証される。

だからクインがライアンの庇護を蹴って遁走するなどということは、ライアンの体面に深い傷を付けることと同じだ。タリアもチェインも、最後は力だけが支配を正当化する。そんな場所において、現実はまだ一つであった。

——舐められたら終わり。

チェインの子供達の上に立つ身として、タリア王の幹部の中に座る身として、そんなことは断じて許すべきではなかった。実際問題としてその不安は薄い、可能性はないわけではない。勝手はさせるなよと付け加えると、チアロは頷いた。この少年もまた、彼の系譜に連なり彼の思考を理解し手を貸す者であるのだ。

同じ客は二度と取らせないこと、保険のためにこちらは写真を密かに撮っておくことをチアロは口に出し、ライアンに視線で許可を問うた。

ライアンは頷いた。クインに関わるのはこれ以上は余分だという自身の中の警鐘を鑑みるに、

それは渋々でも同意すべきだった。これを拒否すればチアロはクインへの時間をもっと割くようにと言うだろう。

次の路地をすぎようとしたとき、チアロが足を止めた。ここで、という少年にライアンは苦笑気味に頷く。チアロはタリア王屋敷とそこにたむろしている大人連中が苦手なのだ。ライアンに連絡をつける以外では滅多に近寄ろうとさえしない。

明日、とライアンは言った。翌日はチェインの幹部達から地場の様子を聞くためにライアンがチェインの煉瓦屋敷に必ず戻る日だ。チアロの煙草を買っておくよという声に頷き、軽く手をうち振って王屋敷へ歩き出す。

「ライアン」

その背にチアロの声がかかって、ライアンは振り返った。彼の部下の表情は光源の向きのせいで淡い陰になり、よく見えない。けれど、いつものように朗らかに明るく笑っていないことは、空気だけで分かった。

「——リァンはもう還ってこないよ」

その瞬間に、自分の肌が凍るように震えたのが分かった。

その名は今でもライアンの支配を握っている。死してなお、ライアンの胸に呪縛を加える男。ライアンを拾い、彼にふんだんに笑顔と視線を与え、利害づくでライアンの心を自分に縛った男。

その狡さを計算を、ライアンは既に知っている。だが、それでもどうしようもない。リァンは彼にとって父性の代弁者であり、神でもあった。その死から、4年を経過した今でも。

ライアンは何かを言おうとし、そして沈黙した。リァンの死は既に乗り越えた。4年前の継承戦争時に、そうすることで彼はチェインの王となった。

けれど、その後に心に残った甘い追憶と思慕だけは、捨て去ることが出来ない。彼の残像を追い、面影を踏み、その奇跡のような生が辿るはずだった道のりを自分の手で作り上げることに躍起になっている。

チアロの言葉はあるいは非難の続きであった。けれど、それになんと返していいのかさえ、見当がつかない。クインが彼をなじるときの引き合いにリァンを出すのは許せなかったが、チアロの言葉にはそんな揶揄がないだけに困惑する。

ライアンが黙っていると、チアロは吐息で笑ったようだった。

「リァンは戻ってこない。俺はでも、リァンよりはライアンが好きだよ」

「……チアロ」

「いいよ、無理しなくたってさ。でも、クインよりも俺はライアンを見てる方がきついときがあるってことを、覚えといてよ——また、明日ね」

それ以上をライアンに言わせず、チアロは素早く身を返して立ち去った。ライアンはチアロの消えた路地をしばらくじっと見つめて立ちつくした。

分かっている、と呟く。

分かっている。リァンの死も、彼が俺にかけた打算の魔術も、それに気付きながら自分がまだ囚われていることも、リァンの出来なかったことを実現するために生きていることでさえ、自覚

している。けれど、彼の代わりなど見つからない。そうしなくてはいけないのだということは理解しているが、理性の部分よりも深く暗い淵の中に感情は沈み込んでいて、乖離したままであった。

ライアンはゆっくりかぶりを振った。過去の日々が眩しかったというなら間違いではなく、今でも自分を一度は通り過ぎていった真夏のような日々を恋うているなら正しい。それが二度と自分には戻ってこないであろうことも分かっている。誰かに指摘される以前に、死者は蘇りはしないのだから。

だから、それから先はライアンの勝手な夢想と追憶の仕業だった。けれどリァンがいなくなって自分のために生きていく人生を結局タリアの中に求めたときに気付いたこともある。

リァンの面影と追想はいつでもライアンの胸の内であって、誰にも邪魔をされず勝手に連れ去られないものなのだ。自分律というもののの中にリァンの行動規範が深く刻まれている以上それを切り離すのは至難であるし意味がないが、そんなことをしなくてもいいのだ。

リァンはその死によって、ライアンの中に永遠に根を下ろした。その木が枯れないように、彼自身が注意深く見守っていればいいのだ。そしてそれは永久にライアンだけのものだ。今度こそ、誰にも邪魔はさせない。

クインはそれを敏に感じ取って、それがいかに無意味な仕業であるかを彼に教えようとしているのだろう。

けれど、そんな言葉など、聞きたくない。自分の中にあるものを他人が触ろうとしているのだと思うだけで反射的に怒りさえ覚えた。

ライアンは僅かに舌打ちをし、歩き出した。タリア王屋敷へたどり着く前に、この自分の中の不愉快をせめて表情からはうち消しておかなくてはならない。

タリア王アルードとその周辺に巢食う側近達が今のライアンの相対しない、だからこそ恐ろしい敵なのだった。

タリア王屋敷にはいつものように王側近の数名がてんでに好きな部屋にたむろしている。彼らにはそれぞれ手持ちの領域があって、それをお互いに侵し合わないことで表面上の結託をしているが、末端では時折境界区域の支配や利権を巡っての抗争がある。それはライアンが総括するチェーンでも全く同じで、この町の少年達は大人達の鏡でもあった。

2階の奥にあるいつもの居間へ入ると、魔導士を相手にアルード王はなにやら話をしているようであった。あの魔導士は国からアルードが借り受けているもので、タリアの抗争自体には関わらせないものの、情報収集などには重宝するようだ。

クインが魔導を使うのを見ているから初めて人外の力を見たときよりは衝撃は薄まっているが、今でもそれは十分に気味が悪く、そして得体の知れない脅威だった。

アルードはライアンにすぐ気付き、こちらへくるように手振りで指示をした。そっと近寄っていくと、魔導士が振り向きもせず、ライアンに位置を譲る。彼らは銀の仮面を付けているから実際の目で物を見ない。にもかかわらず盲目であるようなぎこちなさは動作にはなかったから、この場合もなにがしかの力でもって位置関係を把握しているのだろう。

「戻ったな、ライアン。首尾は良かったと見える」

ライアンは首肯し、最前奪い取った鍵をアルードに手渡した。それを一瞥してアルードは微かに笑って側に控えている魔導士の肩を叩いた。退出を命じる仕草である。

魔導士は無言のまま立ち上がった。仮面のせいで顔も何も分からないが、時折聞くその声で、どうやらこれが少年であることは分かる。背丈はクインとさほど変わらないが、カノンという魔導士名を持つ彼に関して、知りうるのはそれくらいだ。

魔導士がアルードへ会釈して立ち去ってのち、アルードは手振りで自分の前の椅子を示した。座れということであった。アルードの前で腰を下ろすことが出来るのは、幹部だけだ。チェーンにおいてもそれはほとんど変わらない習慣である。

「……これで全員のはずです」

ライアンは低く言った。アルードは曖昧に頷いて、彼の手に渡った鍵をちらちらと硝子越しの日射しにきらめかせている。

その鍵が境界地区の利権の源へたどり着くための最初だと、ライアンは知っている。新興派閥が今までの境界主の権利を侵害して勢力を伸ばしつつあるあたりであった。アルードの判断はその新興の派閥への援助だった。おそらくそちらのほうに彼にとって実入りがあったのだろう。

旧閥の連中が仕切っていた町の権利証明に債権の証書、それに薬や武器の裏の流れを管理していた帳簿がある。部屋の鍵はすぐに開くが、複雑な仕掛けと魔導斑紋の入った錠前は専用の鍵でないと無理なのだ。

ここ半月ほどは旧閥の連中のうち、抵抗を選択した者を一人ずつ食い荒らしていくことにライアンは使っている。チェーンの王として少年達の上に君臨している身であることで、ライアンはタリアの複雑に張り巡らされた境界権利に絡んでいない。彼だけがどの派閥とも利害関係を持たない、無派閥であった。

そのせいで、こうした境界権利の絡む抗争の始末にライアンはよく顔を出した。逆にほぼ関係しないのが魔導の力をほどこした禁制品に関わる全てであるが、これは得手の者がいるのだから

、均衡は取れているというべきであろう。

アルードはご苦労だったなと薄く笑い、既に用意してあったのだろう懐から小さな袋を取り出した。中は小指の爪ほどの碧玉と紅玉の裸石だった。これが今回のこの件全てを決算する報酬であった。

ライアンはそれを手の中に入れて、アルードに軽く会釈した。次の話を切り出さないから、どうやらこの場を出ていいらしい。そう結論して立ち去ろうとしたライアンを、アルードは待てと呼び止めた。

「……そろそろお前にも、こちらの中に本格的に入ってもらわなくてはならない。分かっているだろう——お前の身内をこちらへ寄越せ、あの……何とかいったか、お前の可愛がっている小僧でも構わんさ」

チアロのことだろう。ライアンは苦く笑い、あれはここのしきたりを守れるほど大人ではありませんから、と言った。アルードもまた似たような笑みになった。数度ではあるが、チアロをつれてきたこともある。その性質が大人達の内に潜む駆け引きに向く者では到底ないことを、彼も知っているのだ。

もしくは、とアルードは続ける。

「7地区の妓楼に馴染みの女でもいるのなら……」

「いえ——あそこの女将と多少、縁がありまして」

その縁とやらの内容を目線で問われ、ライアンはアルードに向き直った。

「俺の母親の姉妹なのです。ずっと昔、母に連れられて数度、会ったことが。あちらもそれを覚えていたので多少気安くて……それに俺は同じ女とは続けない、知っているでしょう」

それは確かにライアンの習性だった。妓楼はタリアの派閥に関与しないために自らの組合において自治を行っているが、それはすなわち特定の者の意志の働く妓楼はないということと同じだった。無論、タリアの奥に進めばそんな規範さえ関係のないもぐりの女部屋はあるが、誰が関与しているか分からないような場所でライアンは女を求めない。

それに表妓楼の彼女たちは客の秘密を守るという一点において徹底した教育を受けているので、比較的ぬるくしだらかに神経を休ませてやる事が出来る。だがそれも馴染んでくれば分からない。だからライアンは、どこかの妓楼に通い詰めて一人の女に入れ込むということはしない。

——それはあの女だけなのだ。一瞬でも、彼に血のつながりのある家族という夢を見せてくれた少女。クインとよく似た感情の激しさと心根の弱さが、ひどく哀れで愛しいような気もして、つい突き放すことも出来ずにずるずると年月を重ねている、あの少女。

けれどサラを事実上の人質として差し出すことは、やはり躊躇われた。それはいずれ見捨てなくてはなくなる彼の手駒でなければならないのだから。

同じ女とは関係を持たないというライアンの言葉に、アルードはそうだったなと苦笑気味に応じた。

「だがいずれ、それに代わるものでも差し出してもらわなくてはならない。他の連中にもそうさせているからな——が、まあいい。今度の件で一本、麻薬の筋があいている。お前にやろう」

ライアンは僅かに姿勢を直し、深く頷いた。先に手にした宝玉よりも、こちらの方が破格によい報酬であった。チェーンからあがってくる収入などとは比較にならない。あちらは人数の増減

や抗争の有無で多少変動があるが、麻薬は一度網を張り巡らせればあとは勝手に満ち、手にこぼれ落ちてくる。どんな場合でも金は要る。これから先、さらに重要になってくるに違いないのだ。

ライアンは僅かに時間をおいた後、ありがとうございますと言った。アルードは小さく頷き、誰かを王屋敷に伺候させることを忘れるなと付け加えて手を払った。

タリア王の元から退出して、ライアンは回廊を戻りながら長く嘆息した。タリアの内側にいることで、次第に足下であるチェーンの支配からは縁遠くなっている。それもアルードの狙いの一つであることは確かだ。アルードに目をかけられているのだという幻想など抱いたことはないが、ライアンの働きに応じて報酬を与えなければ他の者達への示しが見つからないとアルードが踏んだのだろう——つまり、現状は満足すべきであった。

タリア王屋敷をすぐに辞して、ライアンはゆっくりタリアの表通りの方へ歩いた。王屋敷は彼にとって居心地の良い場所ではなかった。アルードと同じ場所の空気にあると思うだけで、肺の中が濁る気がする。

それに身体の奥底には殺人の快楽に身を委ねた後の、気怠い疲労がたゆんでいる。血を見た後は命の根元に触れたせいなのか、ひどく気が荒ぶって鎮めるのに手間がかかった。

だからライアンはあの少女に会いに行く。シャラの顔をみて他愛ない話に気を紛らわせていれば過ぎ去っていく倦怠があった。それはほぼ唯一、過去の呪縛から逃れてしどけなく他愛ない戯れに興じていられる時間であったかもしれなかった。

あの少女は自分の中に殆ど唯一残っている庇護すべき花だ。摘み取るのは簡単で、それを待っていることも知っているが、けれど一度折った花は二度と土に根付かない。

彼女が特別であるのは寝ていないからで、それ故にずっと自分の中にあるだろう聖域といえた。それを自分の手でわざわざ壊すようなまねなど、すべきではない。

それにどうしてもライアンは彼女を自分の愛人にしようと思えなかった。まだ水揚げ前の、白い衣を着た無垢の痛々しさを見知っているからだろう。

けれど、胸が渴く日は彼女に会いたい。何の血縁もなくとも、彼にとってシャラはただ一人の妹だった。父を元より知らず、母には売り飛ばされてのち他人の手を転々として生きてきた彼の、血の証明のような気がするのだ。

全くの他人であることは知っている。自分が母に売られたときの状況やお互いの顔立ちの相似からライアンは当初、異父妹であろうかと考えていたがそれはすぐに否定された。あの妓楼の女将はシャラの母と親しかったせいで、ライアンという名であったというシャラの兄を見たことがある。瞳の色が違うなら、それは状況が似ているだけの他人であろう。

だが、それとライアンの心の中の作用とは全く関連がなかった。

妓楼はようやく始まる時間を迎えて、階下に降りている遊女達が多かった。他の女達には視線を殆どやらず、ライアンはいつもの場所に座る女将に目礼する。女将は簡単に頷いてこちらへとライアンを手招きした。

前と同じ金額を彼女の前に置くと、女将は苦笑する。

「揚げ代、あがったんだよ。部屋も一つ良くなっている。今日はいいよ、まけておくさ。あんた

には大分注ぎ込んでもらっているからね」

差額のおごりは女将の厚意であったから、ライアンはありがたく領いた。金に困っているわけではないが、こうしたささやかな貢ぎ物を断るのもおかしい話だろう。

小間使いの少女が彼を案内していった先は、確かにそれまでよりも一段上の階級に属する部屋だった。年数や揚げ代の多少によってやはり遊女にも格がある。

次第に上へあがっていくシャラの身なりを、ライアンは微妙な困惑で眺めている。それに自分が相当関わっているのは確かだったが、実際二人の間に何かがあるわけでもなかった。

ただ、シャラの方は上機嫌だった。この少女は一面現金で、生活の環境が上向けばそれで虚栄心を満足させるところがある。アルードからもらった宝玉を並べてどちらが欲しいかと聞くと、紅玉をさして指輪にして欲しいとねだった。

「で、こっちはライアンがお揃いの指輪にして持っていて。ね、いいでしょう？」

ライアンは曖昧に喉を鳴らした。シャラがどちらか好きな方を選んだ後は換金しようと考えていたのだ。

彼の思惑を悟ったのかシャラは冷たく整った面差しを、暗く俯けた。その表情に差し込む気鬱と悲しみが濃い。揃いの指輪などという児戯のような記号を欲しがる裏に、不意に彼女の深い苛立ちと懊悩が揺らめくように見えた気がした。

シャラは黙って唇を尖らせたまま、彼の煙管をいじっている。ライアンもまた黙り込んで煙管を撫でるシャラの指先を見つめている。シャラの思いが次第に蓄積されていくことを感じないことはなかった。

彼女の目線がただひたすらに自分に向けられていることを理解し、それに当惑とぼんやりした畏れを覚えながらも突き放せない。

縁を切るなら簡単だ。二度とこの妓楼に足を向けなければいい。

それを彼女も分かっている、ライアンが不機嫌やその淡い怯みのために沈黙するとき、その先をなじる言葉を絶対に口にしない。彼から見捨てられてしまうことを、何よりも恐れているのだ。

それに深い哀切を感じないではいられない。それにシャラはどうしたところで自分の妹だと思い続け、本人にもそれを言い続けてきた。態度を今更翻すことは出来そうにない。

このままでは永遠にシャラを傷つけるだろうことも分かっているのに。

……ふと、ライアンはシャラを見た。彼女のすすり泣く声が聞こえたのだ。

シャラ、と呼ぶと少女は自分の口元を手でしっかり押さえたまま首を振った。

ぱらりと後れ毛がおちて、首筋を軽く叩く。肩との付け根に一葉咲いている、赤い斑紋にライアンは気付いた。昨晚の客がつけていったのだろうか。シャラは遊女なのだ。それを今までも知っていたくせに、今初めて目にしたような気持ちになる。そして巻き起こってくる大量の感情はやはり、憐憫なのだった。

ライアンはもう一度シャラの名前を呼んだ。シャラはやはり首を振った。

「……ライアン、いいでしょ？ 少しくらい、あたしに、希望くらい、くれたって、いいじゃない……ちっとくらい、いいじゃない……」

呟く言葉は甘く弱い、非難と言うほどのない繰り言であった。彼女に言えるこれが限界なのだ

。ライアンは微かに呼吸をふさがれたように喘いだ。何かを言ってやることも、抱き寄せてやることも、しようと思えば出来るだろう。けれどそれが一瞬の慰めでしかないことを、ライアンは分かっている。

そんなありきたりのものに引き替えてしまえば、この少女はただの年若い遊女でしかなくなる。それを押してまでシャラを自分のものにしたいかと問えば、彼の中の判断はいつでも首を振った。

シャラ、とライアンは3度目を言った。

「分かった、宝玉はそうしよう……」

これが逃げなのか妥協なのか、ライアンには判別が出来なかった。シャラはやっと頷き、少しだけ笑った。ライアンは僅かな安堵のために溜息になった。

その吐息をすくうようにシャラは彼の口元に手を伸ばし、それはだめだと言うようにか、指先をライアンの唇に押し当てた。同じ色の瞳が絡み合うようにぴたりと合わされる。涙のせいで僅かに潤んでいるシャラの目がじっと彼を見つめ、そしてゆっくり近づいてきたのが分かった。

ライアンは腕を伸ばし、シャラの首を巻き取るようにして抱き寄せた。自分の肩に埋めるようにシャラの頭を押しつける。シャラが微かに震えた気配がした。

遊女の貞操は唇にある。それをどうしても彼女はライアンに与えたいようだった。回避するための抱擁にシャラは震えていたが、やがてライアンの背に微かに爪を立て、ばか……と耳元で囁いた。

ライアンは返答をしない。シャラはしばらくそうしていたが、やがてすすり泣き始めた。張りつめていた彼女の身体から力が抜ける。それに合わせて腕をゆるめてやると、子供が親の腕に収まるようにするとシャラはライアンの胸に収まり、顔を当てて嗚咽を始めた。

しがみついている指先は、それでも服をゆるくつかんでいるだけで決定権をライアンに与えている。それに気付かないようにして少女の頭をゆっくり撫でてやると、シャラは不意に泣き崩れた。たくらみをはぐらかされたのを分かったのだろう。

ばか、と呟く口調はそれでも切なく訴えるもので、彼を責めるものではなかった。泣き続ける少女の身体を包む赤い人工絹の薄さは遊女特有のものだ。手で触れるとすぐに体温が伝わってくる。

シャラの身体に籠もる熱が厭わしいのか、哀しいのか、ライアンにはよく分からない。けれど今、この少女を宥めてやれるのが自分の沈黙であることは知っていた。

連綿と続く嗚咽が収まったのは結局シャラが寝付いてしまったからとなった。泣き疲れて眠ってしまうところ、やはりまだ子供なのだとライアンは意味もなく安堵する。

遊女の部屋であるから寝台は一つきり、その上に抱き上げてそっと横たえてやると、シャラは一瞬目を開いたが、ライアンがその瞼を閉じるように手で押さえてやると、すぐにまた眠りへ戻っていった。

ライアンは溜息になった。シャラの視線の強さはいつでも変わらずにまっすぐに彼を射抜いている。それが気鬱な圧迫と思えるときもあるし、憐憫の哀しみに見えるときもある。

どんなときでも変わらないのは、シャラが彼の庇護対象者であって、決して愛を紡ぐ相手では

ないということだった。

それだけ分かっていたら十分だとライアンは自分に言い聞かせ、部屋の明かりを落とした。

遊女の部屋には天窓が一つきり、そこからはタリアの炎の色が月光と共に差し込んできて、ほんのりと赤い。しんと静まりかえればどこからか、はぐれた羊が鳴くような声のとぎれとぎれに聞こえる。

それが何であるかは考えるべくもなかった。この妓楼は決して安普請ではなかったが、よほど好きな客の相手でも誰かがしているのだろう。甘えるようなもの悲しさが、声のどこかに潜んでいるようであった。

ライアンは服を脱ぎ、簡単な夜衣に袖を通した。泊まる客のために、大抵こうした服がどの妓楼にもおいてある。煙草入れと煙管をつかんで寝台に上がり、眠ってしまったシャラを真横においてライアンは天窓に移る月を眺めあげた。

誰かを手にかけた興奮と苛立ちと歓喜と倦怠は、彼女を傍らにして次第に流されていくものだった。そういう意味において、シャラは確かに特別な女だった。

愛しかったし、大切だった。恋情と愛欲は彼の中では切り離されて別々のものとして成立しつつあるが、その二つを繋ぐ可能性があるとしたら、今はシャラであるとしか考えられない。無論これから先自分にも命をかけるほどの女が現れるかもしれないが、だがその女は決して自分の妹ではないのだ。

ライアンは煙草の一服を長く吸った。物事をじっと考えるときにはそれは手放せない癖になっている。

ふっと煙草の香りが消えて苦みだけになった。種草が尽きたのだ。それでライアンは煙草をやめて、寝台の脇の灰皿にそれをことりと置いた。

——抱こうか。

陶器が鳴る冷たい音と共に腹の底に転がりでてきた新しい考えにじっと目を凝らす。このままではいずれ、どのような形であっても破綻するだろう。

失いたくないという思いは確かにある。シャラのために死ぬことは出来ないが、だが出来る限りのことはしてやりたいと思っている。シャラの一番の望みが自分と関係を持つことであるなら、そうしてやってもいいかもしれない。

.....何より、自分にも何かが起こるかもしれないから。あるいはそれを知りたいのかもしれない。ライアンがいなくなつてのち、色素が薄まって濃淡でしか見えない世界に、劇的なものが紛れ込むならそれが何であるかを自分も知りたいのだ。

ライアンは溜息をついて、そっと手を伸ばした。シャラはよく眠っている。

遊女の衣装は大抵簡単に脱がせることが出来るように、前の衿を何カ所か紐で結んだだけの作りになっているのが普通だ。首元の大きなリボンをするりとほどき、そして肩から胸にかけての衿目をほどく。腰の横の紐を解き、何か大切な包みを開くように丁寧に左右に開く。

——そしてライアンは、僅かに呻いた。

淡い赤に染まる月光に照らし出された肌はあわあわと白く、その中で呼吸のためにゆっくり上下する裸の胸はこちらが怯むほどに頼りなく小さい。右の腋横に僅かに残っている痕跡の赤い色が目に痛くて見ていることさえ辛かった。ライアンは開いたときと同じような手つきで、シャラ

の肌を隠すように衣装を着せた。紐を最初より丁寧に結んでやる。ひどい罪悪感だけが残った。

駄目だ、とライアンは呟いた。彼女は駄目だ。一生駄目だ。まだ幼さを片隅に残したままの身体が記憶の端をよぎる。ライアンは首を振ってそれを追い出そうとした。

自分はきっと、見てはならないものを見てしまった。シャラと関係を結ぶことは出来ない。無理だ。この同情と哀憫とが胸にある以上、彼女を抱こうとすることさえ罪悪であるような気がして居たたまれない。

自分にとっての快楽は既に女などではなく、人を狩る獣としての衝動へ変化しているのかもしれない。

リァン、とライアンは呟き、堅く目を閉じた。彼に人を手にかけることを快楽として教えたのはリァンだった。ライアンは彼のためにそうなるべきだという目論見を体現した存在だった。リァンの手腕は確かに見事だった。暗示をかけた主人がこの世から消えてもなお、呪縛はライアンの中に残っている。

ぎりぎりの命のやりとりを交わしている時、微かに彼の耳には鈴の音が聞こえる。涼しく鳴り響くその音を聞いていると、全てのものを引き裂き、八つ裂き、奪い尽くしたいという衝動が呼び興る。相手によってその感情の多少はあったが、やはりそれは彼にとっては絶対快楽であった。

自分は、どこかがおかしいのだ。リァンが握っていた彼の調律を、引き受けることの出来る者はいない。だから何かが狂ったまま、それでも生きている。生き続けていく。リァンが辿り着くはずだったその場所に、自分が座るその日まで。

ライアンは顔を歪めた。リァンのいなくなった世界には、彼を縛るものはなくなった。

けれど、人は何かのためにと自ら捕縛されることで生きていける生き物なのでないか。解き放たれた野生に打ちのめされて死ぬよりも、共生で繋がり作り上げた広大な籠の中で不自由を歌いながら自己憐憫で満足する鳥ではないのだろうか。世界はそんな構築に出来ている。

だから一度その輪から外れてしまった者に戻る場所などないのだ。仄かに明るかった場所を振り返り振り返り、それでも待ち受けている闇へ飛び続けるしかない。そうするしか出来ないのだ。今は。

リァンの呪術がまざまざと身に甦る日は、彼というライアンを繋いでいた籠の大きさと、それが今は既に失われていることを教える現実の狭間にあって疲弊が激しい。彼のいない世界に、今生きている、その不思議。

リァンのために死にたかった4年前に、死んでいればこんなことを思うこともなかっただろう。それが一体自分にとって至福なのか悪意なのか、何故判別する必要がある。

——あなたが、いない。

それだけが真実なのだ。

——この世界に、あなたが、いない。

それだけが現実なのだ。

身を取り巻く環境も人間も、全てが変わったところで起こったことは頑として動かない。時間は戻らず、人は甦らない。リァンのために生きていたことは恥じることはなかったが、それだ

けが全てであった時から、自分は確かに大人になりつつあった。

そしてそれを自分のために喜べないでいる。リァンはその死の前日まで、確かにライアの全てだった。

あなたのために生きて、あなたのために死ぬのが夢だった。その他の全てのことは色彩の薄い写真のように、現実味が薄かった。命の辿る道筋に落ちているものが、自分を責め苛むものばかりでないことを教えてくれた。だから自分にとってあなたは光であり、神であり、世界そのものだった。何も考えなくなかった、ただあなたの語る世界が正しいのだと闇雲に信じていればそれでよかったのだから。

ライアンは閉じた瞼の裏で、リァンの面差しを呼び戻そうとする。彼の植え付けた種子が今ライアンを支配する絶対律ならば、そうでなかったはずの未来もまた存在したはずだった。

そのとき自分はシャラを抱いてやる事が出来たろうか。彼女に求めているのは渴きを潤すための僅かな弛緩の時間だが、命を奪い啜り尽くす快楽を知らなければあるいはごく自然に、関係を持っていたらろうか。

どんな仮定にも意味がないと知っていながら、ライアンはそれを何度も繰り返す。リァンを少しでも責難するための材料を探して記憶の海を彷徨いながら、しかし遂に感傷に負けて、それが遠く懐かしく、帰りたい日々であることを認めざるを得ない。

この世界に、あなたはいない。

もしもという言葉になんの意味もないことを知っているけれど——帰りたい。

ただひたすらに、帰りたいかった。

帰してよ

お前の姿が世界から 消えてしまったあの日まで

ゆるくたゆたう豎琴の、音色は淡く消えていく。儚さは世の宿命で、生まれれば消える運命のまま、歌は今宵も消費される。使い捨ての歌、使い捨ての涙。それは何のこともない流行歌。時が来れば誰の脳裏からもこぼれおちていく砂。

けれども歌に籠められた、ほんの僅かな真実が時には誰かの胸を打つ。強く。叩く。強く、強く。それが歌の普遍というものならば、魂をこめて歌うこの余興にも、何かの愛があるだろうか？

女の歌は、続いている。

海を漂う海鳥たちの 声は今夜も 啜り泣く

呼び恋い続ける鳴き声の 悲鳴を飲み込む 海潮音

お前の胸には触れている？ 私の歌う、海鳥の歌

殺してよ

お前が別離を告げる前に　私が憎んでしまわぬ前に

ちかちかと天窓から陽光が射している。その眩しさにチャラは目を覚ました。遊女の部屋は客の使う表廊下と、下働きが使う裏廊下に挟まれていて、窓は天井に四角く切られたものが一つだ。天窓からの光だとすれば、既に昼に近いはずであった。そんなことを思いながら寝返りを打つと、その横に男がいたことにチャラは驚いて微かに息をのんだ。無論それは前の晩の客なのだが、この時間になっても部屋から出さないのはやはり具合が悪い。

と、いうよりもこの時間まで客がいることが信じられない。しっかり朝寝を決め込んでしまった自分も悪いが、相手も良くない。大体、こんな時間に帰したのが知れたらねえさんたちに具合が悪いわ。起きなさい、とチャラは隣でまだ寝息を立てている少年の肩を揺する。彼はうん、と曖昧な返事をして目をしばたきながら起きあがった。

「……なんだよ、もう朝……」

そこまで来て、彼も時間の遅さにようやく気付いたようだ。天窓を見上げ、ついで寝台の脇に適当に放り出されている彼の時計を拾い、長い長い溜息になる。

「やっちまった……ま、いいや。俺がいなくても他がどうにかするさ」

最後についていた呟きは樂觀というよりは期待であろう。その証拠に少年は急いで身支度を始めた。短い髪がまだ寝癖のままになっているのを、チャラは適当に直してやる。ありがとうと笑う顔は屈託なく、これが彼女についている客の中で一番若くて朗らかな人たちだ。

「あんたも本当に不思議よね」

彼の支度を手伝いながら、チャラは呟く。鏡をのぞき込んで寝癖を押さえるのに懸命だった少年は何が、と振り返らずに言った。けれどその視線は鏡の中で動いて自分を見ている。彼は自分が好きなのだとチャラはとうに知っていて、それをこんな僅かな仕草でとらえ直すたびに、決して不愉快にはならないのだった。

「あたしとあの人のこと知ってるんでしょうに。よくもまあ、自分のご主人様の女に手を出そうなんて思えるわ。あんたの図太いところ、尊敬しちゃうわよ、チアロ」

「だって、彼は駄目だって言わなかったよ」

その言葉にチャラは胸の奥がちりっと焦げた匂いをたてるのを感じる。けれどそれを表情に出してしまったら、自分の中の誇りや矜持というものが全て崩れ去ってしまう気がして、ことさら笑顔になるのだ。

「そりゃ駄目だとは言わないでしょうよ。身請けもまだなんだし、妓楼に置いてるからにはあんた以外の他の客とだって寝るんですからね。神経が鉄で出来てるのはだから、あんたの方。いい根性してるわね、本当にさ」

チアロはどうにか跳ねた髪を撫でつけ終わり、くるりと彼女に向き直った。彼の表情はいつもの通りに明るい、瞳にある光はひどく真剣で、切なくなるほど強い。その強さが逆に喜びと怯みのない交ぜになったものに彼女の胸の中で変化して、チアロのことを決して嫌ってはいないのに、この目をされると喉がふさがれるように呼吸が苦しい。

——そして彼と同じ目で、自分もあの人を見ている。あの人があたしを見て、微かに逃げ出したいような素振りを隠そうとするのはそのせいだ。でも、じゃあ、どうしたらいいの？ チャラがぎゅっと唇を結んだとき、だって、というチアロの声が聞こえた。

「だって、俺、お前が好きだもの。お前がいいなら今すぐここから出してさ、二人でタリアなんか出てどっか別の場所へ行ってもいいよ。俺、他のどんな事のためにも痛いことは嫌いだけど、お前のためだったら死んでもいい」

「馬鹿ね」

シャラはあきれた風を装って、つんと肩をそびやかした。チア口のまっすぐで直截で、軽やかではあるが真剣な言葉を聞くと、ひどく心浮かれている。けれどそれは本当に欲しいものの代価品であって、所詮偽物でしかない。偽物であることを承知していてもいるが、チア口の真摯な気持ちを知らながらそんなことしか考えていない自分にも嫌気がさすのだった。シャラの表情が曇ったのに気付いたのか、チア口はやっと上着をかぶりながら彼女に近寄ってきて、ゆっくり顔をすり寄せた。

「……暗い顔すんなよ、せっかく綺麗な顔してるのに台無しになるぜ」

こつんと額同士を打ち合わせてチア口は笑い、彼女の手を軽く握った。

「また来てもいいだろ？」

ご勝手に、とシャラはふいっと顔を逸らす。いつでもこうしてじらしてやれば、彼はまた熱心にシャラへの賛辞を降り注ぐのだ。その言葉を聞くのは好きだった。後から自分で適当にこじつけ、改竄し、もっと別の声で囁かれるのを夢想するために。

「——待ってるくらいの殊勝なこと言ってよ、たまにはさあ」

チア口の甘えるようなすねた声に、シャラはつんと顔を背ける。慣れ親しんだ関係が既にこれを冗談に流せるほどに積み重なっていた。彼女から気に入る言葉を引き出せないのはいつものことで、チア口はやれやれと肩をすくめる。出会った3年前にはまだ子供の領域を出ていなかった身体も仕草も、既に少年と呼ぶ域へ達し、やがて大人と呼ばれる時代へ入っていくだろう。彼の未来は何故かすなりと、良いものばかりを描くことが出来る。

「お前の気位の高いところ、すごく好きだけどね」

チア口の声は苦笑を含んで甘い。シャラはふうんと素っ気なくそれも流した。

恋愛には必ず勝利者がいる。力関係は決まっていて、逆転することは滅多にない。この場合はシャラの方が明らかな優位であった。チア口の率直な賛辞も洪水のように溢れてくる愛の言葉も、全ては彼女の意のままであって、止めろと本気で言えば彼は飲み込むだろう。チア口の言葉はどれも軽やかに明るい、誇張や戯れのような嘘の匂いはしない。それがどれだけ自分を慰めているかシャラは知っている。本当に振り向いて欲しい人に顧みられないまま年月だけが流れ堆積していくのを、見ているしかできないから。

またね、と簡単な言葉だけを残してチア口が出ていくと、シャラは長い吐息を落として寝台に座った。昼近い陽光はやけに明るくて、それが天窓の硝子を通して降り注いでくる健康な目覚めが自分に不釣り合いに似つかわしくない、そんな居心地の悪さがじりじりとあがってくる。

チア口のことは嫌いじゃない。あれは自分の崇拝者で、彼の気持ちに頷けばその性質の通りに明るく力強く自分を愛するだろう。それは分かっている。彼が今シャラに降り注いでいる陽光のごとくにまっとうに自分を恋していることはきっといいことなのだろう。

でも、そんなもの要らない。

どんなに辛くても苦しくても、焦れても泣いても苛立っても、自分の心が吸い付いていく背中

は一つきりだから。

好き、とサラは呟いた。その声が耳から胸にするりと落ちた瞬間、そこが鈍く痛んだ。あの人があたしのことを特別に思っているのは知っている。でも、それはあたしが欲しい視線じゃない。あたしが欲しい熱じゃない。彼に温かに大切に扱って欲しいなどと思ったことなんか、一度だってない。彼がサラの目の届かない場所できっとしているであろう、取り巻く女達にするように戯れに踏みにじって欲しいのだ。

彼の長い指が自分を愛撫するならば、どれだけの歓喜になるだろう。彼がよく鍛えられた身体が自分の身体を法悦の中に押しつぶしてくれたら。たった一度で死んでもいいのに——……

その瞬間、サラは微かに呻いて首を振った。やけに生々しいことを考えている自分がひどく淫蕩な女であるような気がする。あの人のことを考えると胸が苦しく切なく痛い。この痛みが次第にひどくなるのを自覚して、自分がどれだけ彼を恋しているかを思う瞬間は自嘲の入り混じった哀しみの中だった。

——自分も母のようになるのだろうか？ そんな疑問がちらと脳裏をかすめるとサラはいつも恐ろしいものを見たように、その考えから目をそらした。サラの母は多情で恋の多い女だった。どこまでが客でどこからが男であったか遂に分からないが、それでも恋し、夢中になり、最後は決まって捨てられることの繰り返しだったことは知っている。男に騙され、殺されかけた末に運河に身を投げて死んでしまった母。サラとよく似た顔立ちの女は結局幸福にはなれなかった。自分も同じ運命の車輪に乗っている気がして、サラは怖くてたまらない。遊女になるまでは今のところ、同じではないか。

それを救ってくれるであろう相手にサラはたった一人をさだめた。彼以外知らなくていいし、見えなくてもいい。他のことなど必要がない。いつか彼が自分に向かって膝をつき、低く数少ない言葉で何かを語ってくれたら。それだけで死んでもいいくらい、あたしは彼が好きなのに。

ちりと胸の奥が焦げるような痛みがした。サラは溜息になった。自分が考えている半分も、彼は自分を思っていないだろう。あの人には沢山の敵と沢山の配下がいて、何かにかかりきりになるには手に持つものが多すぎる。その内の一つが自分であることを疑ったことはない。水揚げから既に4年、サラの元にずっと通い続けているのは確かなのだ。3度ほどミアの部屋にあがるのを見たことがあるが、自然にそれは消えて今はこの妓楼ではサラだけに金を落としていてくれる。

——でも、そういうことじゃない。

彼が自分を特別の女だと周知のために環境を美しく整えていくにつれて、どこへも捨てられない怒りだけがたまっていく。

——そういうことじゃない。

彼の視線も吐息も言葉も、全てが自分一人のものであって欲しい。彼の中の一部分を分け与えるのではなく、何もかもがあたし一人に注がれるようになって欲しい。彼という存在の、全てが欲しい。妹だなんていう檻に入ったままではそれは永遠に手に入らないだろう。

いつかあの人にも自分ではない誰かを愛して特別に想うことがあるだろうかとサラは不意に思い、瞬間的にわいた激しい怒りにぎゅっと手を握りしめた。そんなの、絶対に、いや。そん

な女、あたしが殺してやる——

激昂につられて浮かんできた言葉の強さにシャラははっとし、そして辟易して額に手をあてた。振り回されたときのように、ひどい眩暈がする。

彼のことになるのと全く盲目のように何もかもが消えてしまう癖を、シャラは半ば呆れ加減に見つめた。そんなことではいけないと自分でも思うし、女将や先輩の女達からも言われてなお、その癖はなかなか直りそうにない。それが自分でも可笑しいと思うし、仕方ないような気もして、こんな事を考えるときは堂々巡りの惑乱の中だ。シャラは長い溜息になり、そして勢いよく寝台から立ち上がった。

あまり彼のことを考えても今は仕方がない。この夜にも自分を買うであろう見知らぬ男達のために適当に部屋の掃除でもして、身綺麗にしておかなくてははいけないだろう。入浴や化粧はタリアの火入れの時間が近くなってからでもいいが、洗濯と掃除だけは早めにしなくてははいけない。シャラは昨晚来ていた人工絹のスリップドレスを拾い、下着と一緒に洗濯用の手桶に入れて部屋を出た。遊女達の部屋から裏廊下へ出れば、そこには高い位置の格子窓からさんさんと昼に近づいていく強い日射しが注いでいる。

遊女達の部屋には簡単な浴室がついているが、こうした日々の細かな雑用に使うための水場は別にある。客を傷つけないように部屋に刃物や針なども置かないから、裁縫のための部屋もあって、昼前はみなてんでにそこで必要なことをしているのが普通だ。

シャラが水場に入っていくと、先客がいた。長いことそうして足で踏んでいるのか、洗い桶の中の白い足が赤く染まっている。とんとん続く小気味よい音が何かの拍子のように規則正しい。不意に女は足を止めた。水を換えるのだろう。一度桶から出たときにシャラにようやく気付いたらしく、丁寧に頭を下げた。

「おはようございます、シアナねえさん」

源氏名で呼び合うのはどの妓楼も同じ習慣である。シャラは軽く頷いておはよう、と言い、女の隣に洗濯用の桶を引き出した。

「随分丁寧にしてるのね。リーナは相変わらずこんな事が好きなんだ」

シャラの言葉にリーナは小首を傾げて笑う。シャラが恋心という煉獄から目覚めて混乱し、立ち直りながら出てくる不機嫌な朝であるとするなら、この女は朝方は奇妙なほど明るい。ごく自然に呼吸をしているように見える。

だがそれが不幸の臭いであることを、シャラは誰に教えられずとも知っていた。不幸な女は同じく不幸な女を見抜くのだ。恐ろしく正確に。

——彼女の前に出るといささか怯むのはそのせいだろう。彼女の真闇色の瞳に見つめられると、真っ黒な空に映る星のように自分の中身もそこに浮かんでしまう気がするのだ。シャラは彼女から視線を外し、洗い桶にぬるま湯を張った。自分の洗い物を入れて隣で踏み始める。同じ事をしていたリーナが成果を確かめるように彼女の木綿のワンピースを広げた。

それで彼女が長く洗濯をしている訳が分かった。客が吐いたのだろう、その痕跡がくっきりと裾に残っている。シャラが一目見て分かるくらいだから、落とすのには時間がかかるだろうと思われた。リーナの溜息が聞こえる。

「吐かれたの？」

シャラが聞くと、リーナはええ、と困ったように笑って頷いた。

「お酒が欲しいっておっしゃるからお出ししたんですけど.....明け方に。シーツはさっきやっと干したんですけど、こっちはまだまだですね.....」

「あんまり飲ませちゃ駄目よ。酒は繰り越しが出来るからって言って、適当に切り上げさせないと。酔っぱらってる奴の相手は疲れるでしょ」

「ええ、まあ.....無茶を言う方が多くなるのだけが本当に困ってしまって」

その無茶というのが何であるか、聞きたい衝動にシャラは駆られた。リーナというこの遊女が水揚げから半年にもなろうというのに未だに客あしらいというものが出来ないことを、女将が嘆いているのを聞いたことがある。遊女達の間でひそひそ交わされる性技のあれこれなどを本当に試したことがあるのかどうか、一度聞いてみたくて仕方がない。

——あんたまさか、寝転がってるだけじゃないでしょうね？ そんな意地悪い言葉が浮かんでくるのは自分が苛立っているからで、その苛立ちはあの人のせいだ。シャラの世界で一番美しく力強い男。

シャラはふっと溜息になって、肩をすくめて見せた。

「泥酔する前に寝台に引っ張り込んじゃえばいいのよ。お酒が残ってたらまた来る人も多いしね。気に入った客だったら半分くらいは残して置いて、次に来たときに、って言うの」

「ええ、そうなんですけど」

気弱く微笑む面差しに僅かに浮かぶ困惑の色を、シャラは素早く嗅ぎとって目を伏せた。彼女のしていることは明らかだった。水揚げの時と同じような調子でたおやかにちょこなと座っているだけなのだろう。シャラの母も娼婦であり、シャラはこの世界に入ることを嫌悪したことはなかった。そうしないと生きていけないことくらいは分かる。

この場所で生きていくからには仕事としてすべきことはする、というのがシャラなりの意地であるが、彼女はそれを放棄しているのだ。いつまでお姫様のようにいたいのだと怒鳴りつけたい衝動もあるし、そんなにここが嫌なのかと聞いてみたい気もする。それにいつまでもリーナ一人だけが無垢のような顔をして何も出来ないのですと装っていると、自分がひどく薄汚れた娼婦であると言われているような気になる。

けれどそれを口に出さないのはリーナ自身がその困惑に開き直っていないのが分かるからだ。どうしていいのか、リーナには分かっていない。臆病というなら正しいであろうしそれを怠慢とそしめるなら正しい。けれどそれを本人が気に病んでいる、その不幸をシャラは薄々知っていて、だから彼女に何かを言ってやりたいと思いながらも口にすることが出来ない。年齢が同じだからもっと馴染んでもいいとは思うのに、なかなか世間話程度から先に進まないのはそのせいだ。「.....もし衣装が足らなかったらあたしに言いなよ。ちょっと古くなったやつだけど、あんたに似合いそうな可愛いやつ、あげるから」

彼女に一瞬抱いた苛立ちを鎮めるために優しいことを口にして、シャラは自分の洗濯物を勢いよく踏み始めた。

彼がシャラの元を訪れたのはそれから4日ほどしてからだった。日付も曜日もまるで定まっていないうが、月に2度か3度は顔を見せる。小間使いの少女の案内でシャラの部屋の前に立つ彼の表情は冷たく整って、どこからも何も寄せ付けない酷薄さが目立っているが、シャラの側に腰を下ろすときには微かにではあるがぬくまるのを、シャラはいつものようにじっと見つめた。

その整った面差しを見るたびに思うのは、息苦しくなるほどの思慕であり、眩暈がするほどの憧憬だ。彼はあたしの神様。あたしを生かして殺すための神様。

ほうっとシャラは見惚れるための吐息をつく。するりと腰のベルトに挿されていた煙管を取り出して火をつける仕草。薄い唇がついばむように吸い口に触れるその風情。彼のすることは全てが美しく、完璧に整っているようにシャラには見える。

「……珍しいか、煙草が」

今日は彼は機嫌がいいらしい。シャラがいつものように自分を見つめている視線を厭う素振りなく、薄く笑っている。

自分と同じ翡翠色の目が、自分をじっと見ているのにシャラは気づき、そっと手で髪の形を確かめた。日付が決まっているのならその日は特別に綺麗にしておくのにといつも思うのだが、その約束はくれたことがなかった。

毎日そうしておけばいいのかもしれないが、シャラは日常を巧く運営していくことは苦手で、部屋の片づけや洗濯や針子作業もどうにも好きになれない。料理などはしたことがないが、おそらくこれも同じだろう。

シャラはつまらない空想をすぐに捨てた。あれほど待ちこがれていた時間を目の前にして、他のことを考えるのは馬鹿馬鹿しいことであった。

「いいこと、あったの？」

微かに自分の声が上気して、いつもよりとろんとしている。この声音がひどく女臭く甘たらく聞こえるのは知っているが、こんな声にはしかないのだ。

別に、と返答する声は先ほどとは一転して固い。何か良いことがあったとしても、それはきつとタリアの内律に関わることであって、くちばしを入れるなという態度だった。それはそれで正しいだろう。シャラにはタリア王を頂点とするこの町の機構のことはよく分からない。自分たちは緋房の籠の鳥であって、美しくさえずっていればそれでいいはずなのだ。

「ちっとも自分のことは話してくれないんだ……」

それでも拗ねたふりで彼の顔をのぞき込めば、そこにあるのは淡く翳ったぬるい表情であった。彼は苦笑しているのだ。

「俺のことなど聞いてもつまらんさ。それよりも最近はどうだ——チアロも相変わらずのようだな」

「……他のお客のことは話せませんよーだ」

きゅっと顔を縮めて愛嬌のある表情を作ると、男は今度こそ唇をゆるめて笑った。はっきりした彼の笑顔はごく珍しく、それに見入ってしまう自分がつくづく馬鹿な女だとシャラは時々恨めしくなる。彼の僅かな仕草や造作で簡単に幸福になってしまうのは、一体損なのだろうか、得なのだろうか。たった一つ言えることは、こうして容易く見つけることの出来る幸福は、やはり容

易く散ってしまうということだ。

彼の表情が僅かに変わるたびにそれが何を意味するのか必死でシャラはくみ取ろうとするが、その性癖のおかげで先ほど感じていたはずの光は気付いたときには既にはない。ただ光感の気配だけが胸のどこかに漂っている。

「……チア口の奴が、しばらく来られないと——」

言いかけた形良い唇にシャラはだめ、と人差し指を押し当てた。

「今は他の人の話なんかしないで。あたしはチア口の話なんかしたくないわ」

「だが、奴はお前が」

「関係ないわ。あたしはあなたしか好きじゃないもの。そうあの子にも言ってあるもの。だから今は他の人の話なんか、聞きたくないししたくもない」

きっぱりと言い切ると、シャラはさっとその場を立った。彼のためにいつものように酒と食事を頼まなくてはならなかった。酒は飲まない男だが、食事は抜かない。

簡単に注文を書き付けて小さな袋に入れ、下の調理場へ通じる管へそれを放り込む。袋にはそれぞれの遊女の源氏名が書いてあるから、それを見て部屋へ注文の品を裏廊下を通じて小間使いが持ってくることになっているのだ。酒にしろ料理にしろ、彼の好みと量はだまか掴んでいる。何を食べるのか最近は何くともなくなってきた。

作業を終えて男の所へ戻ると、彼は煙草を楽しんでいた。煙草を吸う男の肌からは草の甘枯れた匂いがすると他の遊女達が言うように、彼の側によると確かにその匂いがした。時折夜中に目を覚まして彼の鼓動を聞くために耳をつけると、正しく脈打つ動音と共に煙草の甘く渋い匂いにふわりと包まれるようで、シャラはそれが好きだ。

長い一吐きを終えると彼は服の内側から小さな袋を取り出した。あけるように目線で促され、シャラは口を縛っている綾紐をほどく。中から転がり出てきたのは紅玉の指輪であった。血の色をしたそれをぐるりと白貴石で囲み、ぐっと爪で立ててある。何、と言いかけてやっとシャラは気付いた。

以前彼がタリア王からもらったという紅玉と碧玉の一揃いを指輪にして一つずつ持ちたいと言ったはずだ。それを彼は律儀に守ってくれたというわけであろう。

「すごい……綺麗」

シャラはそれをつまみ上げて灯りにかざした。深く濃い赤に白貴石の眩しい輝きがはえて目を奪われる。あの紅玉以外にも彼が色を付けてくれたのだった。

「すごい、綺麗、すごい、……似合う？」

右の中指に押し込むと、何の抵抗もなくぴたりと入った。ずっと以前、別の指輪をねだったときに教えておいた輪径を彼はまだ覚えていたらしい。

けれど彼の指には揃いの指輪はなかった。そんな風にしてくれると言ったのをもちろんシャラは覚えているから、ねえ、とその袖を引く。責められずなじれない、そんな弱さがひどく甘ったれた声音に変わった。

「一緒に作ってくれるって言ってた指輪は？　今日は持っていないの？」

僅かに男は苦く笑ったようだった。

「……指輪は、細刃刀の手袋に引っかかるからな。俺が持っているという意味だったと思ったか

ら結局」

言いながら彼は左の頬をかすめて落ちる髪をかき上げる。その耳朶に柔らかく噛み込む、青い光があった。

「邪魔にならない選択が優先なのは仕方がないだろう……それとも指輪をこちらに作り替えるか、シャラ？ 細工屋の親爺はお前の指輪に使った石と細工は上等だからそれが一番いい形だと言っていたが」

うん、と曖昧な返事をしてシャラは自分ではめた指輪の輪郭を指先でなぞった。彼の言うとおり、これはこれでよい細工物だった。それに彼の理屈も分からないとは言えない。それが嫌だとかどうしても駄目だとか、そんなわがままを言えば彼を怒らせるかも知れない。その最後の考えがどうしても抜けないのだ。

わかった、とシャラは明るい声を出した。自分と彼の間に共通するものを持ちたかったのに、それは結局微妙にどこかがずれた形となって実現した。けれど、それをシャラは責めない。——そんなことが出来るはずがないのだ。

「いいわ、ありがとう。大切にするね」

男はゆったり頷き、髪を押さえていた手を煙管に戻した。シャラとほぼ同じ、とってつけたような薄い茶色の髪が落ちて碧玉の色味は完全に視界から消えた。

「ねえ、見てもいい？」

シャラは立ち上がり、側に寄る。無造作に男が頷き、彼女から顔を背けて煙を吐いた。

そっと手を伸ばして彼の髪をかきあげると、先ほどと同じように深い青がきらめいた。耳朶に指で悪戯するように軽く触れると、男は僅かに喉を鳴らした。まるで猛獣を撫でてやっているようだ。とシャラは思い、確かに自分がこの男の特別な相手であることを思い知った。

彼は気安く誰にでも触れさせるような空気を持たない。以前の宴席でリーナなどは本気で怯えていたようで、それ以後もシャラの語る彼の話を聞きながらの表情は硬い。

時折彼がこの技楼で派手に振る舞う宴席においても、チア口以外の誰一人、寄っていかうとしないではないか。

その特別さを何度も違う角度から見つけるたびに、シャラはねじれたような気持ちになる。彼がシャラに心やすくぬるくほどけているのは、彼女を妹だと認知しているからだ。それは彼にそっと身体を預けてみた幾多の夜、背中に手を回してみた数多の朝に、その度に告げられてきた言葉だ。

あまりしつこくかき口説くようなら俺は寝台で眠らなくてもいいのだと言われたのが丁度1年ほど前のことだ。そのとき涙をこぼさないように意地だけで目を一杯に見開きながら頷いたのは、彼が遠くなってしまうという恐怖ゆえのもので、決して納得したわけではない。

だが、向こうはシャラが理解して聞き入れたような態度をとる。シャラの涙が見えなかったはずはない。自分がどれだけ彼を好きか、知らないはずはない——なのに。

そっと落とした溜息に、ちらと男はシャラを見て煙草に戻った。シャラは彼の耳を飾る宝石から視線を離して寝台にぼんと座った。

彼の側にいると泣きたくなる。どうしていいのか分からない。この人を好きで、とても好きで

、どんな風にされても殺されたっていいと思っているのに、彼はきつとあたしを何気ない女のように愛さないだろう。兄妹だという確証もないくせに一貫して態度を変えない。

閉塞した状況をどうにかしたいとどれほど願ってもどれほど思っても、彼はシャラに対する線引きの位置を変える気配がなかった。

すり寄れば押し戻され、泣けば宥められ、これ以上の何かを出来るとは思えない。

そのくせ何か他愛のない我が儘を通したいときには泣けばいいと知っている。彼の目の前で、ぼろぼろ涙をこぼしてみせれば彼が大概怯むと分かっているのだ。指輪のこともそうやって泣き落とした。例えばずっと来てねという約束も、抱けと言わない代わりに一緒に寝台で眠ってもらうことも、そうやって承知させてきたのだから。

これは狡いのだろうか。あたしは陰険で悪知恵の働く女？ それともこの人を振り回すだけの足かせ？ 当人はとにかく彼の下にいる幹部の数名はシャラをそう見ているのが明白だったから、この考えはシャラの中に根深く住み着いている。宴席で当然のように彼の側にいる自分を見る連中の目つきと来たら、まるであたしが彼を都合良く利用しているだけのような、うろんなものを見るように蔑むのよ。

だから彼らの前では絶対に笑ってやるのだとシャラは決めている。彼らの前では華やかで驕慢で艶やかな花になってみせる。ことさら連中の前で供物をねだるのも、甘えた声を出すのも、彼らの不愉快が多少は溜飲を下げるからでもあるのだ。

シャラは黙ったままで煙草を続けている彼を見やり、寝台にゆっくり身体を倒した。真横になった世界には、やはり彼しか見えない。どんなときもいつでも、彼はシャラの全てだった。

——神様。

シャラはリーナが時々呟いているその言葉を思い起こす。彼女の不幸は明らかだが、それを彼女は祈ることで忘れようとしているように見えた。目に見えない何者にそんなに真剣に心を傾けられるのか、シャラにはさっぱり理解が出来ない。けれど神様という時の彼女の口調には全てを委ねたような敬虔さと安堵感があって、それはそれでよかろうとも思う。

神様、という言葉をおもいついたのはだからリーナのおかげだ。彼女の言う、崇高でこの世で最も正しい人だというのなら、シャラの神は彼だ。彼女の神は見えないが、シャラの神は目に見える。

冷淡な陰がさす整った面差しをして、低い声で、広い肩で、細い指で、シャラを捕らえて彼女に君臨し続ける、絶対の相手。——でも。

シャラは目をすがめる。そうすると視界が狭くなって彼の姿もほっそりとして見えるが、どんなときでも見えるものの中心に据えられているのだった。

でも、リーナの言っている神様は安息をくれるけど、あたしの神様はそんなものをくれないわ……一体何が違うのかしら……？ シャラは半身を横たえたままじっと彼を見つめた。いづどんな角度から眺めても、彼の冷たく整った顔貌にはシャラの視線を引きつけてやまない不思議な力があつた。

ちらと彼の視線が自分を向いたのが分かった。きつとずっと長く見つめていたのだろう。彼を見ていると心浮き立ち悲しくなり、その両方がぐるぐると巡って次第に訳が分からなくなる。

そんなときに自分がどんな表情をしているのか、シャラはよく知らなかった。だが、彼がそれ

を見つけるときに憐憫のような淡いかげりを瞳にくゆらせることは既に気付いている。

だからきっと、今にも捨てられそうな顔をしているのだ。

それを思うと自分で自分が厭わしくなる。彼が自分を見捨てきれない甘さや弱さにつけ込む真似だと分かっているのに、それを止められない。そうでなければいつか彼から見放されてしまうような気がして、怖い——怖くてたまらない。

こんな状態が一体いつまで続くのだろう。

それでもシャラは同情など要らないと、憐れみなど欲しくないと、訴えることが出来ない。そんな言葉は一瞬の激しい怒りを焚きつけても、決して燃え広がらせてはならない炎だ。

彼がもう自分の元にこなくなると言うことを、考えるだけでも恐ろしく、気が狂いそうになる。

「——どうした、シャラ」

いつもと同じ低い声音が自分の本名を呼ぶ。

本来はシアナという源氏名で呼ばれるべきであったが、これを許すことが特別である証なのだ。遊女と客という枠を越えるという表示であり、それは二人の間に流れている現実という河そのものであるようにも思われた。自分は客ではない、という意味であろう。

それもよく分かっていて、シャラは別に、と素っ気ない返事をした。けれど彼のやや困惑じみた、淡い影のくゆる表情は変わらない。どうしたのだろうとシャラがまばたきすると、ぽろりと涙がこぼれたのが分かった。

ああ、自分は泣いているんだ。だから彼はあんなに困ってるのね。意地悪く囁く自分の中の呟きにシャラは唇を噛み、いいの、と小さく声にして寝台に顔を押しつけた。

僅かに場の空気が対流する気配がする。彼が何かを言おうかどうしていいのか考えているときは大抵こんな奇妙な沈黙になるのだ。

考え抜かれた言葉など要らなかった。シャラの気持ちに配慮するためだけの優しい言葉をなんと紡いでいいのか彼が考えているとしたら、それはシャラの胸にある恋情となんと不釣り合いで薄い心なのだろうか。

——恋愛には必ず勝利者がいる。力関係は決まっていて、逆転することは滅多にない。恐らく、自分たちの間には永遠にないだろう。自分は彼のために生きて彼が死ねと言ったら死んでもいいとさえ思っているのに、彼はきっとあたしのために命を捨ててくれるとは言わないだろう。

いっそ死にたい。今彼があたしを大切にしてくれるこの瞬間に。そうでないといつか、彼を憎んでしまいそう——.....

死という単語がふっと脳裏に浮かんだ瞬間、それへの甘美な憧れと本能的な畏れによってシャラは堪えきれずに声を上げて泣き始めた。それを全て彼にぶつけるには覚悟と勇気が足りず、飲み込んでしまうには溜め込んできたものが多すぎた。

そっと自分の髪を撫でる手がある。シャラは顔を上げてその手の主の首にしがみついた。

こんな時でなければこの男はシャラが身をすり寄せるのを避けようとする。自分がどこまでも計算高い女であるという自嘲を心に聞きながら、それでもシャラは離れられない。

「好き……」

結局、自分に残っているのはこの言葉だけなのだ。呆気ないほど簡単な、たった一つの言葉によって自分は自分を苦しめるもの全てと戦わなくてははいけない。そしてその戦いを見て見ぬ振りをされるなら、自分は本当に彼をいつか殺したいほど憎しむかもしれなかった。

「……大好き……」

熱に浮かされたように呟くシャラの髪を、大きな手がゆっくり撫でる。この中途半端な優しさなど要らないとはっきり言えたらどんなにいいだろう？ でもそうしたら彼はあたしから離れていかないだろうか。あたしを嫌いにならないだろうか。あたしにもう二度と会ってくれないんじゃないだろうか……

知りたくない。知りたくない。この仮定を投げたときにどんな目を出すのかなど、知りたくもないし考えたくもない。だから言ってやれることはそう幅がなかった。

「ねえ……いつか、あたしのこと、殺してくれる？」

一瞬自分を抱き留める肩が痙攣したのをシャラは感じた。

彼の呼吸はいつものように静かだが、その僅かな所作で鋭く心に噛みついたことをシャラは知る。泣きたくなるほどそれが嬉しいような気もしたし、取り返しのつかないことをしてしまったような恐れも同時にわいてきて、シャラはねえ、と再び言った。

「あたし、死ぬときはあなたに殺されたいの。ねえ、そうしてくれる？」

「馬鹿なことを言うな」

「……そう……ね、馬鹿みたい……」

シャラは小さくしゃくり上げるように笑った。彼のことばかり考えている自分が可笑しかったし、こんな簡単な泣き落としの罠にはまる男もひどく可笑しかった。

でも——死にたい。彼の手で死ねたらどんなに幸福だろう。こんな事を考える自分は本当に馬鹿なのだろうか。

それを思ってシャラがもう一度小さく忍び笑ったとき、裏廊下から通じる扉が叩かれるのが聞こえた。注文に出していたものが揃ったのだろう。シャラはぱっと体を離して小さな仕出窓から出される銀盆を受け取った。代金はあたしにつけておいて、と窓越しに小間使いに言いつける。

出てきた食事を彼に差し出しながら、シャラは彼が火を消した煙管を手にとった。漢氏竜の彫刻のある柄に指を這わせる。この煙管ほどに彼にほど近くいられたらどれだけ嬉しいだろうかと下らないことを思い、胸内にそっと溜息を落とした。

彼のしていることはあたしを緩慢に殺すことだ。だからいっそ一息に殺して欲しいと願うことの何がいけないんだろう。それをいつかこの男に言えるだろうかとシャラは彼女の神に視線をやり、ふと笑った。

多分かなわないことであろうと思うことのほうが、空想の中では美しく見えるものなのだ。シャラはそれをとうに知っているはずであった。

「——ライアン……」

彼の名を戯れのように口にして、シャラはもう大丈夫よと言う代わりに笑う。

悲しいときは、笑うしかないじゃない？

死にたいときは、尚更笑うしかないじゃない。

あたしたちは、美しく着飾って華やかに笑ってこそその緋房の籠の鳥なんだから。

せめてその小鳥の中で一番に愛でて欲しいという願いに突き動かされて、シャラは上機嫌に見えるように笑った。

笑いながら手に残る煙管を、胸に燻っている何物かのためにへし折ってやりたくなる。

その時、ほんの少し彼を憎んでいる自分にシャラは気付いた。

殺してよ

お前が別離を告げる前に　私が憎んでしまわぬ前に

酒場の中はいよいよ暗い。注文の酒がグラスごと目の前に置かれると、中の液体が僅かな灯りに揺らいで琥珀色の淡影を男の手に落とした。下町と呼ばれるこの界限でそれほど良い色の酒があるはずがない。この薄暗がりはそのせいなのだろうかとぼんやり思いながら男は客席の間に立ちつくす、酒場の歌姫を見つめた。

声は神が人に与えた最良の楽器だと、誰かが言った。それが最良だとするならば、それは魂からほとばしる熱の量に浮かされてのことではないだろうか。

けれど、それは悪くない。男はふと唇だけで淋しく笑う。女が揺るがす声の中に籠もる熱は確かに魂の形に似ていた。

歌はゆるやかに続いている。

涙を持たない海鳥たちの　悲鳴は海へ墜ちるもの

泣けずに沈んだ宿定は　閉じて籠もった貝のよう

お前の元には届いている？　涙の代わりに、海鳥の歌

探してよ

波間にさすらう魂と　私の欠片をいつの日にか

夕方近くなってくると技楼には次第に活気のようなものが満ちてくる。タリアの火入れの時間はまだ少し先だが、それに合わせて開く店棚の支度のために、遊女達はお互いに品評を試合ながらの化粧に余念がない。

この時間、彼女たちの忍び笑いや取り交わす言葉で地階の客用の食堂は明るい活気に溢れているのが通常だ。仲の良い遊女達はそれぞれにかたまって、化粧小物や簡単な装身具を貸し合ったりそれぞれにいる想い人の話をしたり、時間が来るまではくつろいでうち解けて過ごす。

リィザも同じようにそこに入り、いつもと同じ椅子に座って簡単に化粧を始めた。水揚げの時に女将がしてくれた化粧が魔法のようであったと今更に思うがそれでも慣れというものはある、最初の頃よりは全てがましに傾いている。

外のざわめきが微かに流れ込んでくる。開業前だから外に面した格子の窓は閉められ、全てに簾がおりているが、音だけは完全に遮断できない。通りの浮かれるような賑わいは全くいつも通りの日常であった。

リィザはちらりと外を見やり、微かに吐息を漏らした。深闇の始まりがそこに迫り来る時間、外の繁賑が華やかであればあるほど、心が暗くうち沈んでいく。リィザはそれには既に気付いているが、一体どうしたらいいのか自分でも分からないまま、ただ日々を流していることに怯み続けているのだ。

水揚げから既に9ヶ月と12日を過ぎていく。日数までがすらすらと出てくるのは自分が一日一日を丁寧に、あるいは執拗に数えているからだ。この一日一日が、終わるのを数えている。指を折りながら日々が過ぎ去っていくのを見ている。

そうやって待ちこがれているのは恐らく、朝を告げる遠い鐘声であった。あるいは早朝を歌う鳥の声、微かに白み始める空の色。

その時間になると、明らかにリィザは安堵した。距離感を掴めないままに通り過ぎていく沈殿した空気から僅かな間でも解放されるかと思うと、自分でも情けないほどにほっとするのだ。

こんなことではいけない、もっと努めなくてはという声が次第に自分の中で小さく縮こまっていくのが分かる。

その代わりに聞こえてくるのは、何かに潰されるように呻いている自分の声だ。押し殺した呼吸の息づかいがひどく苦しげで、それを聞くだけでも胸がしめつけられそうになる。

リィザは僅かに溜息をつき、その記憶を振り払おうとした。タリアの火入れの時刻は近い。そろそろ長く赤い夜が始まろうとしている。化粧と身繕いくらいは終わらせておかなくてはならなかった。

鏡の中にいる自分の瞳にある光は弱く暗い。それを直視しないように気を払いながら、リィザは白粉を軽く肌に乗せた。

元々日に当たって色素が浮く程度には白かった肌が最近では更に透明になってきている気がする。見習いの頃とは違い、遊女となった今では外で日に照らされることなどあり得ない。そばかすなどすっかり消えて、真白の雪のようだと時折は寝語りに口にする男もいるほどだ。

それを思い出してふと漏らした笑みを鏡の中に自分で見つけ、リィザは一瞬僅かに唇を結ぶ。それは自分ではとっとするほど嘲笑と酷似していたからだ。

あざけているのは男達か、それとも労働の質が変わった途端に美しくなっていく肌の現金な作用か——否、多分一番嗤ってやりたいのは自分だ。何もかもを微笑みで誤魔化し、真実をひた隠し、表面だけを慣れたように振る舞う心中で全く別のことを考えている自身なのだろう。

この妓楼に来た頃、リィザは自分の身に起こった運命の流転を飲み込めなかった。毎日泣いてばかり、帰りたいと呟くばかりだった。それでもこの場所で生きていくことを納得して受け入れて、水揚げを迎えた。その時には確かに未来を良い方に考えようとしていたし、リィザなりに覚悟は決めたつもりであった。これが芝居や物語だったらそれで一件落着、であったのだろう。

けれどどうしたことなのか、身体は頑なに全てを拒んだままだ。心は受け入れても、身体はびったりと閉じられたまま、自分の運命を声無く呪い続けている——それが分かる。

天窓から淡くこぼれ落ちてくる赤い夜光の中で男の手が自分の直肌を遊び始めると、呼吸が止まりそうになる。ぎゅっと目を閉じて一刻も早くその時間が過ぎ去ってしまわないかと息を潜め気配を殺していると、必ず悪い夢を脳裏に見た。

それはあの貴族荘園で闇雲に働いていた頃の幻だった。幻影としては美しかった。あのころに見知っていた、虹や優しい小糠雨や蝶の乱舞や蜘蛛の巣の朝露や.....それに、彼。思い出しては駄目だと必死でうち消そうとするたびに、自分がいかに幸福だったか満ち足りていたかを思い出す。

そしてその瞬間、身体の上にある違和感に気付いてリィザは小さな悲鳴を上げて目を見開いてしまう。行為の最中におもむろに凝視されるほど男を興ざめさせるものもないらしく、大抵の客は鼻白み、何かを言う。それは直截な怒りであったり苛立たしい嫌味であったりしたが、言われた瞬間からリィザの身体はますます強張って、やがてそれは激しい苦痛に変わるのだった。

それは勿論、自分が悪い。リィザは理性では理解している。

相手は客で、自分は遊女だ。見合う金額を支払って楽しむ為にそこにいるはずなのに、歓待する側が醒めていることほど腹立たしいものもないだろう。それは分かる。けれど、何を自分に言い聞かせても納得させようとしても頑なな身体はどうしたらいいのだろう。これだけはどうしてもいかも分からずに途方に暮れている。

——神様。

逃げ込む先は、それしかなかった。水揚げの相手の男が無名神教会の僧職者であったのも何の偶然であったのか、最前から興味はあった無名神への祈りの聖句や紋様板の使い方などを教わることが出来た。名無き神は全てを知り、赦し、癒してくれるという教えに逃げ込みたくなるほど現実には閉塞という城壁の中に在って、そこから動こうとしない。

だからリィザはそれまでよりの何倍も、真剣に祈った。助けてくださいとは言わない。どうか救ってくださいとも思わない。ただひたすらに、この現実から逃れる術として、安息を求める場所として、姿のない相手に黙祷した。祈りをしている時には現実という籠の中に在る疎ましいことも気の重いことも全て忘れていられた。

——神様.....

安息を少しでも探そうと、悲鳴と共に目を開けてしまった後はリィザは尚更目を固く閉じ何も考えまいとする。だがその所作をあざ笑うかのように幻は今度はそれまで相手をしてきた沢山の男達が与えてきた様々な苦痛に変わり、脳裏をぐるぐると回り続けるのだ。

絶望という言葉がうっすらと胸に広がっていくのを感じるのはそんなときだ。その息苦しさを振り払う為にますます瞼を強く閉ざすと、ついには涙になりそうになる。——客という涙を浮かべるなど、論外以前の問題だ。

他にどうしようもないではないのだ、とリィザは自分を必死で言い含める。この妓楼以外に居場所などないのは理解せざるを得なかったし、自分でも納得したと女将に告げたからこそ水揚げもその後のこともあるのだからと。

自分が在るべき場所はこの妓楼であることは明白であった。この中で自分なりの希望も未来も探していくべきで、それがいつか幸福というものへ至るかばそい道を見つけてくれる……そのはずなのだ。なのに。分かっているのに。

リィザは長い溜息になって鏡の中の自分に目を凝らす。

時折訪ねてくるディーと他に二人ほど以外には常連客を持たないリィザは夜ごと客を誘う為に待合室に入らなくてはならない。身の空いている遊女達はそこか食堂かのどちらかにいて、通りすがりにでも目をとめてもらうのを待っているものだ。

夕食は客のおごりにしてもらうのが殆どで、そうでなければ自分で頼まなくてはならないが、それには金がかかる。勿論妓楼の女なのだから客のものよりも安価だが、それにしても全てにつけて金が必要だ。

その金はどうやって作るかといえば、結局客からの小遣いや客が頼む食事や酒に含まれている見返り料、そして指名料だ。何がいいとか嫌だとかご託を並べていては新しい衣装どころか下着の一枚も買えない。水揚げの時に多少のものは揃えてあるが、衣装も2枚や3枚では具合が悪いし、第一リボンや造花などの髪飾りに装身具なども多少無くては淋しく見えて余計に客がつかなくなる。

この場所で生活をしていく為には客を取らねばならない、そういう機構は既にくみあがっている。なのに、それに馴染めず気付けば日数だけをひたすら数えている自分は一体何なのだろう。

妓楼に売られた来たときにも自分の中の頑迷さに自分で微かに辟易したことがあった。今、その真芯の強情さをほとほと持て余している。

男には慣れていくものだし行為自体には馴染んでいくものだと言った遊女達はみな言った。水揚げの翌朝にはそんなことは信じられないと溜息をついたものだったが、相手には慣れた。僧職のあの男からは女慣れた手つきや仕草などにも関わらず、どこか愛情めいたものの匂いを嗅ぎとった。その頃にはまだ男の腕の中にいるときに目を開くようなことはなかった気がする。

僧職の男が秋を過ぎてぷつぷつと来なくなり、やがてそれが転任であることを女将から知らされて後、完全に身体感覚は閉じこもった。そんなことではいけないと思えば思うほど、吐息さえこちなくかたまっていく。

他の遊女達の言う歓びというものを得ることが出来ない行為が、苦手から苦痛、苦痛から苦役に変わるまでそう時間はかからなかった。リィザは怯えているのだ。男という生き物全てが空恐ろしく、得体が知れなくて怖い。

リィザが遊女としての素の部分にひどく乾いたものしか持ち合わせていないことは、肌を合わ

せていれば分かるらしい。怒る客、白けて不機嫌になる客、または逆にどうにか自分に感覚を与えようと躍起になる客、——そして、一番恐ろしいのはそれを知って殆ど一晩中責め苛む客だ。そういう性質の男はそれこそ文字通り夜の間中、言葉でも肉体でも彼女を追いつめることしかない。多分、自分の怯えて強張り青ざめた顔もそれをあおっているはずだった。

水揚げの相手には僅かに感じる事が出来た情愛めいた空気は完全に見失い、どう探していいのかも分からなくなっている。こんな状態の自分にも僅かながらいる常連客というものが、一体何が良くてリィザに時折顔を見せるのかも分からない。

——それとも自分は彼らを憎んでいるのだろうか。どんなに冷えてあしらってもしつこく自分を買いつけるから？

自分に問えばいつも答えは分からない、だった。反射的に否定が出てこないところが更にリィザを暗澹とさせる。馴染みの客達は行きずりの相手よりはまだ安堵を覚えることができるのに、彼らさえ厭うているなどと思いたくない。

だが嫌悪感が少なく悪夢がやや淡いことと、愉楽というものを取り違えることは出来ない——……

がちやりという重たい音でリィザははっと我に返った。黒い制服を着た小間使いの少女が表の篝火にくべるための薪籠を扉の側に置いたのだ。細く扉を開けてその支度の為に外へ行く黒い衣装を見送り、リィザは鏡に向き直った。

化粧はあまり凝ったことをしない。少し前に15になったばかりの肌は下手に飾り付けるよりも素の若さを売った方がいいと皆言ったし、同い年のシアナという姐妓もそうしている。だからごく簡単にそれをすませ、淡い色の口紅を置いて頬にかかる髪だけを後ろでまとめて百合の造花のついた櫛を挿した。

この櫛はチェインの若い王の側近であるディーという男が彼女に買い与えたものだ。そう高価な品ではないが、衣装の布地がさほどまだ良くない。髪飾りにだけ金を注ぎ込んでいても均衡が取れなくて奇異なだけだろう。

自分の指先が慣れた仕草で身支度を終えていく。仕上げの真珠粉を軽く目元に掃かせてぱたりと化粧道具の小箱を閉めると、それが合図だったように遠く一つ、空気をふるわせる鐘の音がした。夜の開始を告げる晩鐘の、予告の鐘だ。

微かに絹のさやかな音がした。僅かに3名の遊女が立ち上がって自分の部屋へ戻っていく。彼女たちは客がつかなくてもこの待合室には入らなくてもいい権利を得ているのだ。この妓楼で一番良い部屋住の遊女達は揚げ代もリィザの5倍からというところで、客を選ぶ権利さえ在る。彼女たちが嫌だと言えれば女将は上客を断るであろう。

そしてそんな権利は彼女たちが特別である証左であり、リィザにはきつと降りてこないものであった。今のままでは無理だと考えるまでもない。

正直なところリィザはほとんど嫌になっているのかも知れなかった。妓楼での生活も、男も、どこかに現実乖離したままの部分を残している。馴染めないと言で斬って開き直ることが出来たらどれだけ楽だろうか。

夕方になるとリィザはいつもこんな気鬱に囚われる。次第に憂鬱は深く重くなっていき、鳴り響く晩鐘と共に簾があげられて通りに火が入ると、それは鉄のように固まって動く気配さえ

なくなってしまうのだった。

——早く、朝が来ないだろうか。リィザはこの夜の身の置き方などへの思考を振り飛ばし、ただひたすらに、解放される時間のことばかりを考えている。

待っているのは朝、天窓から次第に白ける月が見えなくなって鳥の音がする時刻。自分の隣にいる見知らぬものがようやくいなくなる時間。夜の始まるこの時間にそんなことばかり考えているのがいかにも不遜で、リィザは微かに吐息を漏らし、立ち上がった。

化粧道具を一度部屋に置いて裏階段から待合いへ下りてきたその瞬間に、耳に響き渡る四点鐘があった。火入れの時間である。巻き上げられた簾の向こう側の赤い光の洪水はこの日も目に痛いほど眩しくて、リィザはつい目を閉じた。

この日の最初の客は泊まらなかった。まだ部屋にあがるのを差し止める時刻ではなかったから、リィザは身体と部屋の痕跡を丁寧に消してから階下へ降りた。身体の中の倦怠と嫌悪はこのまま自分の部屋で新しい毛布に潜り込んでいたいのだと一心に訴えているが、それに耳を貸してはならないことはよく分かっていて。

そんなことをしても、結局何の進展にも進歩にも、無論解決にもなりはしない。どんな風に自分を慰めても宥めても潤わない性質に呆れながらも、根気よくつき合っていくしかないことは分かっている。それにどれだけの苦痛が伴うかという問題だけで。

さすがに待合室には遊女達はまばらだ。そろそろ泊まりの客が主体になってくるほど夜は深まっていて、既に今宵の相手を見繕った娘達は自室に籠もっている。これから先の時間はやや揚げ代もまかることもあるから、外をそぞろ歩く男達の視線がちらちらと待合室の格子の向こうから注がれているのが分かった。

リィザは格子のすぐへりにある腰台を見やる。身の空いた遊女たちが身体を置いて、外を行き交う男に視線を流して声をかけるための場所だ。数名の女達が既にそこにいて、格子の隙間から手を招いたり、お互いに何かを言い合って笑っている。

そこに行かなくてはと思う瞬間には、リィザの足は動かない。おっとりとも内気とも表現できる怯えがちな性質が、見ず知らずの男に笑いかけるような真似をさせてくれないのだ。

第一、何を言っているのかもまだよく分からない。

けれどいつまでもそこに杭のように立っているわけにもいかないとリィザが呼吸を飲み込もうとしたとき、後ろから声がかかった。

「空いてるわよ、あそこ」

振り返るとシアナであった。リィザとは妓楼の中で唯一年齢が同じ少女だ。リィザのたおやかな風情とは反対の、煌めくような華やかさを放つ顔立ちは整っていて美しい。ライアンというチェーンの若い王と容貌に共通するものが多かったが、どちらが綺麗しいかというならば、間違いなくこのシアナの方であった。彼女を目にする度に、はっとするほど綺麗だとリィザは思う。それは最初に出会った頃からまるで変わらない。

リィザが一瞬自分に見とれているのに気付いたのか、シアナは肩をすくめて唇だけで笑った。彼女の仕草はどれも素っ気なくて強いが、そのどれにもさして悪意はなかった。

「今、身体空いてるんだったらあそこで外でも見てればいいじゃない？」

シアナはまっすぐに腰台を指して淡々と言った。シアナねえさんは、と聞き返すと同い年の遊女は微かに笑って首を振る。

「あたしはこの後指名が入ってんのよ。部屋で待ってるのも暇だから、ここに誰かいないかと思ってさ」

シアナはいいながら、リィザの背をとんと軽く押した。そこへ行くようにと促されているのが逆に楽に足を動かしてくれた。元々他人に指示されたことをつつがなくやり遂げてきた生活であったから、こうしなさいと強く言われると反射的に頷いてしまう。

指名の入っている客というのはライアンのことだろうか。遊女間でもお互いの客の個人情報は秘匿が鉄則だったから聞くことは出来ないが、シアナの表情はさほど待ちかねているという風で

はなかったから、違うのかも知れない。

リィザが腰台に身を寄せて座ると、シアナがリィザの黒い髪を手で梳き流して何やら編み始めた。

「黒髪もいいわね、あたしも一度染めてみようかな」

衣装には規定があるが、髪型なども自由になることのひとつだ。リィザは背の中程で揃えているが、シアナの方は肩にまつろうあたりで切ってすそだけを簡単に巻いている。それがふわふわと彼女の秀麗な面差しを彩って、いっそう華やかに見えるのだった。

「シアナねえさん、でも今の髪型もとっても似合ってますけど」

リィザの言葉にシアナは曖昧に笑い、そうねえと呟いた。

彼女の方がリィザよりも3年も早く水揚げを迎えているせいか、男のことにしても妓楼の中のことにしてもよく知っている。お互いに持っている性質が組違っているために実は雑談していても感覚の機微がよく掴めないのだが、これはリィザが薄々感じているならばシアナも思っているだろう。こうしたことは伝播するように正確に相手が鏡になる。

けれどリィザを経験の浅いもうととして、何くれと面倒を見ようとする辺り、根は悪い少女ではない。多分、それだけ分かっていたら良かった。

「——姐さん、客待ちかい？」

格子の外から声がかかる。

太い銅鑼声にリィザが僅かに怯みながら格子の外を見やると、朱塗りの菱木に手をかけた大柄な男がじっと二人の方を見つめていた。その視線は迷わずシアナの方に向けられている。二人並ぶと紛れもなく、人目を引くのはシアナなのだった。

この瞬間に自分の胸に湧いたのが、微かな痛みだったのかそれとも大量の安堵だったのか、リィザには区別が出来ない。この男は自分に興味を持たないが、それが何故なのかを考えたいとは思わなかった。

シアナはふっと唇をゆるめて笑った。リィザよりも遙かに面差しが整っていることを彼女は知っていて、こうした小さな表情に僅かに優越感のようなものが滲む。リィザはそれを当然だと思う。客の前で笑うことさえ難しい自分などよりも、今から美女になると明白で明るく振る舞う彼女の方がよほど大人びて華麗だった。

「あたしは待ってないわ、これから他の旦那様が来るもの……ねえ、この子は？ まだ水揚げからそんなに経ってない新人よ。可愛い子でしょ？」

ぐいとシアナの腕が自分を押し出して、リィザは籠のように巡らされた格子へ縋り付くような格好になった。のぞき込む男を、上目に見上げる。僅かな時間男は考えていたようだったが、急に明るく笑った。この笑顔になったときの返答は決まっている。

「いやいや、俺は姐さんが空いてるときにまた来ることにするよ」

「そう……じゃ、またね」

シアナはぷいと顔を逸らす。こんな高慢に見える仕草でさえ、彼女は華やかさにすり替えることの出来る、希有な少女ではあった。

雑踏の中に男が消えるのをリィザはぼんやり見送る。あの行きすがりの男がリィザを買わなかったのはシアナと比べて明らかに顔立ちが平凡だからだろうか、それとも自分の隠し持った性質

を素早く嗅ぎとったからだろうか。直感のようにそれを見抜く男達もいる。

リィザは小さな吐息を漏らした。あの男が自分を買わないという選択をしたことが、明白な安堵になってしまうのが自分でも疎ましい胸の作用だった。と、急に耳が引っ張られてリィザは隣の少女を見る。シアナの方はやや機嫌を曲げたらしく、むくれたようにとがらせた唇からおもむろに溜息を吐いた。

「あんたねえ、せっかく勧めてんだからさ、お愛想の一つくらい言いなさいよ」

「あ……ごめんなさい……」

リィザは目を伏せて小さく謝罪を呟いた。違う違うそんな言葉など口にしたいくないのだと誰かが耳の奥で叫んでいるような気がしたが、それは黙殺するしかない。今更処女だと気取るわけでもないし、この9ヶ月間で相当の数の男を知っているのは事実だ。

リィザの反応のにぶさにシアナは顔をしかめ、長い溜息をついた。何かを言われるよりもそのほうが応えた。

リィザはもう一度ごめんなさい、と言った。

「……謝って欲しいとは思わないけど」

シアナは中断していたリィザの髪結いを続けながら低く尖った声で言った。

「あんたがそうやって不幸です不幸ですって顔してるとさ、こっちも滅入ってくるのよね。何とかならないの、それ。もうちょっと明るい顔してればお客だってもっとつくわよ」

「そう、なんです、けど……」

だが実際どうしたらいいのか見当がつかない。男という未知の生き物は、身体を重ね合わせた後でも未知のままであった。

見えないものに好奇で以て突き進むことが出来るのはそんな性質の女だけで、リィザのように見えないものに対峙したときにまず恐怖を覚えるような者は、ただひたすら怖い恐ろしいと震えているしか出来ない。

リィザの返答はやはりシアナの気に入らなかったらしい。彼女は苛立ったように軽く舌打ちすると、理解できないと言いたげに首を振った。それも仕方ないだろうとリィザは思う。シアナが自分を分らないのと同じように、自分も彼女がよく分らない。

ライオンに彼女が夢中になっていることは傍目にも明らかであったが、あの端正な顔立ちの男の一体どこがそんなに好きなのか全く分らない。それに彼を深く恋しながらも他の客もあっけらかんと受け入れていることに、矛盾を感じないのだろうか。

……勿論そんなことを聞けば彼女が不機嫌になることは分かっていたから口には出したことがないが、リィザにはシアナの明るさも不思議だった。彼女とは仲の良い姉妹にはなれても、決して愛し合う友人同士にはなれないと思うのはこんな時だ。持っている性質が違いすぎる。

けれどシアナが何くれと気をかけてくれることも本当だったから、シアナについてはよい先輩としてリィザは彼女を敬った。シアナにもそれは分かっているのだろう、時折かみ合わなくなる会話などには執着せず、構ってくれるのはそのためだ。

シアナは今までの会話のことなど忘れたようにリィザの髪をいじっている。細い指が器用にリボンと髪を編み合わせていくのを壁の鏡で見ていると、シアナを呼ぶ女将の声がした。指名の客

とやらが来たのだろう。行きがけにしっかりしなさいよ、とリィザの背を軽く叩いてシアナは待合室を出ていった。

取り残されて、リィザは赤い河のような通りを見やる。そこを流れていく人の波はそぞろに陽気で、これからの夜を楽しむつもりの方達の期待感が見えるような気さえした。

ふっと溜息をつこうとしたとき、隣にいた遊女がリィザの膝をつついた。女将が自分呼んでいるのが聞こえた。

待合室を外から見かけて時折は指名する男もいたし、特に敵娼を指名しない客に女将が空いている遊女をつけることもある。仕事に直接関わらないことは大抵昼間自室に呼んで話をするのが女将の癖だったから、客に違いなかった。

待合室から出ると、女将が機嫌良く頷いた。その奥に立つ男には、見覚えがある。

リィザは一瞬翳りそうになった面輪を、会釈のようにして伏せることで誤魔化した。

「指名だよ、リーナ。旦那様をご案内おし」

女将の声に頷いて、リィザはディーに淡く微笑んでみせる。笑いかけることが出来る程度には、馴染んでいる相手だった。

ディーはいつもと同じくそれに合わせるように笑う。その笑みには確かに情のようなものが滲んでいる。彼が外で何をしているのか薄々知っていても、リィザの元を訪れるときには血生臭い気配は消すように努めてくれるのはありがたかった。リィザの臆病さも物怖じする性格も、半年も経てば分かってくるのだろう。

部屋へ入るとディーは服の前ボタンを片手で器用に外した。リィザは彼の背後に回り、上半身を覆っていたシャツを肩から剥がすようにして脱がしてやる。よくついた筋肉があがる右肩に比して、左側にはそれはない。人の体を造り上げる血肉の鎧の代わりに、金属の留め金がにぶく光を反射している。

機械人という名称は後になってから聞いたが、失った身体の一部をこうして補うことは時折あった。金額によって多少は機能にも差があるが、彼の腕は安くはない部類に入る。その証拠に、簡単な動作なら胸筋と複合させた疑似神経の働きで単独で動かすことが出来た。

が、腕はそれなりに重く、動かすのにも労力が要るために、神経を休ませるべき妓女の部屋では大抵外してしまうのだとディーは最初の晩に言った。

今日もその言葉通り、腕を外しにかかっている。手伝うのも初めてではなかったから、リィザはいつものように彼の右手の届きにくい左肩の後の留め金をあげて腕を身体から分離した。ディーは礼のつもりなのだろう、リィザの頬を軽く撫でると寝台の脇の椅子に腰を下ろした。食事は、と聞かれてリィザは済みました、と答えた。それは嘘だったが、先の客が帰った後の気の重さなどで食べる気にはならなかった。

「.....お前さんは会うたびに痩せていく気がするな？ 大丈夫か」

彼には気遣われてばかりだとリィザは苦く微笑み、はい、と頷いた。

「水揚げの頃とあまり体重は変わらないんです。ディー様が心配下さるから、そんな風に見えてしまうんでしょうか」

リィザはディーに気を遣わせたくなかった。本来気遣いをするのは自分の役割であるはずなのに、逆のことをされると気恥ずかしい。但し痩せているというのは本当だ。体重が変わらない

というのも嘘ではないが、背が伸びていて、相対的には痩せている。

ディーは体格のことにはそれ以上触れなかった。リィザが痩せ気味なことを自分で気に病んでいるのを察しているのだろう。こんなところでこの男の優しさを知るにつけて、彼に対して何故もっと心が開いていかないのか、自分で不思議になる。それは数少ない常連客といえる男達全てに共通することでもあった。

リィザの特性なのか、彼女を気に入って時折通ってくる男達は優しい。多分それはリィザ自身が怯えなくていい空気を持っている相手であるからだだろう。相手を怖がっているときの自分の弱々しい怯えに怒りを覚えたり白けて苛立ったりするような男は、まず二度と来ない。

食事を終えたディーと雑談などに興じていると、遠く鐘が鳴ったのが聞こえた。これは日の最後の鐘だ。雪崩のように遠く幾重にも拍っているのがわかる。

ディーが天窓を見上げ、時間だな、と呟いた。リィザは一瞬ぴくりと肩が痙攣したのを感じ、それには気付かなかったように部屋の灯りを落とした。

この最後の一点鐘を合図に妓楼の娘達は闇に潜り込む。妓楼の扉も閉められて、これ以後は翌日の開棚までは客は中にはいることは出来ないことになっていた。

周辺の妓楼も規定によって同じ行動をしつけている。だから、夜半の一点鐘の後には、赤い格子の町であることが信じられないほど青く澄んだ夜が天窓から差し込むのだった。

寝台の脇の小卓に残した油皿の炎だけが揺らめいている。ディーが黙ったまま自分を引き寄せて、丁寧に髪をほどいていく。彼の指が自分のこめかみ辺りから髪の中へ入る。ゆっくりと頭部の輪郭をなぞる。

リィザは目を閉じて、じっと息を潜める。自分が情けなくて、ただ彼に申し訳が無くて、涙がこぼれそうになる。彼のことを嫌ったことなど一度もない。ディーは出会った頃から彼女に辛く当たったこともなかったし、声を荒げたことさえない。

なのに、心安いはずなのに、身体の方はいつものような苦痛の予感に強張ってどうにもならない。彼に申し訳ない、悪いという罪悪感はあるのに、それは少しも胸の中からこぼれてこなかった。

片腕の欠損の為に、ディーはいくつかの要求をいつも囁く。それに頷いて従って、やがて彼の身体が自分に被さると、リィザは現実的なものと罪のものと、両方の重みに耐えかねるように吐息になる。それが何かの加減か、男が快さのものだと思いこんで一言二言、呟く言葉にリィザは答えない。ただ、没頭するふりをする。

自分は勤勉な女優のようだと思うのはこんな時だ。けれど、勤勉であればあるほど惨めな気持ちになる。一体これはどうしたら解消するのか、それとも一生自分について回るのか。

一生この妓楼の中にいるという仮定がちらっと脳裏をかすめ、リィザはその想像の荒涼さに呻く。

「.....どうした」

かすれた声が自分のごく近くに聞こえる。いいえ、と首を振ってリィザは彼の首に腕を絡めて引き寄せた。彼の唇が自分の首筋を確かめるようになぞっている。

ディーの視線が自分のひどく醒めた表情に向かないようにして、リィザは天井の方向を見あ

げた。

天窓に映る月。その青ざめた色をじっと見つめ、リィザは待っている。——朝を。解放される時間を。しばらくは安心していられる、その瞬間を。

いつか彼を愛せるだろうかという問いには答えがない。けれど待ち続けている。誰もがいうように、愛し、愛される、その相手を。全ての苦しいことから解放されるはずの、その愛を。

それがこの男になるかどうかは分からない。もしくは彼の腕の中でそんなことばかり考えていることが答えかも知れなかった。

でも。リィザは溜息をつきそうになって、慌ててそれを飲み込んだ。

いつかという魔法があるのだと、自分に言い聞かせていればそれを遠い明日には信じることが出来るだろうか。いつか誰かと巡り逢うだろうか。いつか誰かを愛するだろうか。自分に欠けているのは恐らくそれだ。

全てを怖がって閉じこもってしまいそうになる心、追憶と現実の間でばらけて碎けてしまいそうな自分、それをまとめてあげてくれるたった一つの力。

その魔法を、いつか。

相手がディーであるならそれも良かったが、今はこうして彼の肩越しに月を見上げる勤勉で怠慢な娼婦だ。リィザは目をすがめた。天窓の月がやわく歪んだ。

探してよ

波間にさすらう魂と 私の欠片をいつの日にか

まばらな拍手が酒場に起こる。伴奏の豎琴がひととき大きく込み入った和音を奏で、それはやがて一段高くずれた主旋律を導き出す。

歌い女はそれに頷き、豊かな胸に手をあてて深く息を吸い込んだ。

てらてらと安く光る口紅の色が、開いて溢れてくるのは——歌。

女は歌う。

あいのうたを。

生まれつきの海鳥たちが うたいつづける、魂は

お前がどこかで捨ててきた 真珠のような、涙と似ている

私は今宵もお前を呼ぶ

お前を呼び戻す為に うたいつづける、海鳥の歌

愛してよ

お前の全てをなげうって
愛してよ
お前の胸の中にあるはずの
愛してよ、愛してよ
流れる血潮 その最後一滴までに刻んでよ
愛してよ、愛してよ
お前の胸に届くまで 叫び続ける、私の声で
繰り返し、繰り返し
愛して欲しいと、かもめたちはうたう

.....やがて夜は更けていき、女の歌は記憶の中へ放り投げるようにしまわれる。酒場女は常連客の愛想に頷いて、彼らのおごりの酒をあおった。

「.....彼女は昔、どこかで歌を？」

男は聞いた。酒場の主人はさあねと笑った。

「こんなのは流行歌だからね。劇場に出ている女がこんな安い歌を知っているなんぞ、聞かないね」

主人の言葉はもっともであった。男は苦笑し、酒と女へ渡す小銭を置いて店を出た。

外はまだ、夜の半ば。夏の宵は短いが、それをひたすら楽しみ尽くそうとするための赤い格子の町はまだ眠らない。男は僅かに溜息をつき、雑踏の中へ紛れていった。

どこから、安い歌が聞こえる。流行歌に乗せた薄っぺらい愛を唇の端で嘲笑しながらクインは赤い迷路の中を歩いていた。

今日の客は彼の気に入らなかった。初めて買うはずなのにやけに尊大で、それを思い切り顔に出したクインを薄汚いと罵ったのだ。じゃあそれを買うあんたは何なんだよとクインはつい笑いだし、かっとなった客に平手で打たれ、腹を立ててそのまま部屋を出てきたのだ。

明日になればきっとオルヴィから一くさりあるだろう。この仕事は彼女がとってきたものだから、嫌になったら放り出しても構わないとクインは決めてかかっている。チアロの仕入れてきた話であったなら多少は忍耐することも、オルヴィへの当てつけのためであれば我慢するという選択はなかった。一晩くらい投げても十分に余裕がある程度には、忙しい。

赤い格子棚の中をぼんやり彷徨いながら、クインは苛々と爪を噛む。

今日は素の少年の姿であった。身長が最近日ごとに伸びていくようで、女装だと却って目立つようになりつつある。背の高さが既に少女の範疇には修まりが悪くなってきていた。

だから女装と通常の服装とを最近は取り混ぜている。どちらにしても目立つことには変わりがなかったが、少年の格好をしているときには眼鏡をかけているのが普通だ。度は入っていないが、多少印象が変わる。髪は魔導で黒く見せ、体温を安定させる為の保定の魔導を施した指輪をはめて、あとは少しだけ化粧で面差しの印象をいじるのだ。

妓楼の硝子に映る自分の顔がひどく陰立っているのを見つけ、クインは不機嫌にそこから顔を逸らした。この夏が終われば15になる。母の罪という言葉が重く胸に沈んでいて、そこへ歩き続けていく一日一日が息苦しく、気鬱だった。

二度と会いに行かないわけにもゆかないし、真実の中核となっている部分を知りたい気持ちは確かにある。けれどそれに母と自分の間の血縁の否定や贖罪を含まなくてはならないとなると、理性などとは全く別の部分から、聞きたくない知りたくないと呼ぶ声がして、クインはそれを見捨てる事が出来ないでいる。

——苛々している。

それは確かだった。女の客を取ってみるかという提案に飛びついたのはいいが、これもまったくチアロが最初に言ったとおり、気休めにしかない。むしろ適当に調子を合わせながら天井の模様で謎解きをしている男のほうが何も考えないでいられる分ましかもしれなかった……若い女がいないのも確かではあったけれど。

クインは吐息を漏らして髪をぐしゃぐしゃとかき回した。この晩はまるきり空いてしまったが、まっすぐアパートに戻る気にはならない。

以前同じようなことがあって早戻りしたときに、自分のいないがらんとした建物で微かな声を聞いてしまったのだ。

彼の住み着いている部屋は最上階だが、地下水路から抜けて上へ向かう階段の途中でそれは聞こえた。不審に思ってそっと声のする部屋に近づきながら、クインは仕方ない笑みになるのを押さえられなかった。

彼の住处とは階層が違うその部屋にいたのは一組の男女であるようだった。乱雑に放り出されたままの家具が視界をでたらめに遮っていて姿は見えないが、声の具合からして間違いないと見

当がつく。無人だと思って紛れ込んできたのだ。ここは俺の城だから出て行けというつもりでクインが口を開こうとしたとき、男のほうで半身を起こした。右肩にはっきりと分かる古い傷が見えた。

その傷をクインは知っていた。数度とはいえ寝たことのある男にうたれた刻印を、忘れるはずはなかった。苦い感情が口の中に湧いた。何かを言ってやろうとしたとき、女の声が今頃、と呟くのが聞こえた。

(―――今頃、あの子も、同じことしてる……)

その声もクインは知っていた。チアロと共に彼の身辺にいて、仕事を世話し生活の細かな面倒を見る役割を与えられている女。クインはきつく奥歯をかみ合わせた。怒濤のように巻き起こった眩暈は、恐らく怒りのためであった。

(奴のことは今は関係ないだろう)

ライアンの声が低く答えた。その声には怒りのようなものが籠もっていて、オルヴィは小さく喉で笑ったようだった。クインは足音をたてないようにして、そっとそこを離れた。

クインの仕事は通常朝までかかる。拘束時間が翌朝の一番鐘までであることで、大抵の客は彼を一瞬でも長く手元に置きたがったのだ。二人とも自分が朝まで戻ってこないと思っていたのだろう。

自分の部屋で絡み合っていたなら絶対に赦せなかっただろうとクインは思う。そうでなくても、オルヴィのことは最前から気に入らなかった。ライアンと似た寡黙な質の女だったが、彼女が自分に最初から好意の欠片もいていなかったことは肌を感じている。

それはこのせいだったのだろうかとはぼんやり思い、階下から時折聞こえる彼女の声から逃れるように毛布をかぶって目を閉じなくてはならなかった。

逃げたのだという自嘲と、ライアンへの苦い怒りと、オルヴィへの嫌悪が混じり合った末にクインはこのところひどく苛立っている。だが、今日も早く戻れば同じ光景が広がっているような気がして、居たたまれない。チアロに愚痴のように訴えると友人は決まり悪そうな顔をして、いつか話さなくちゃいけないとは思ってたけど、と言った。チアロも知っていたのだ。

(女がチェインで暮らすのは大変なんだよ。チェインなんて男ばかりだから下手なことすりゃ便所にされて終わりだし、そんなことなら町に立ってりゃ金になるからな。だからライアンの周りにいることを選んだんだろう。彼女、字が読めて計算が出来るし、無口だからライアンには合うみたいだ)

ライアンと寝たのはオルヴィなりの保険だろうと付け加え、チアロは気にするなとクインに笑った。

ライアンがあの子を寄越した理由の一端はそれで分かった。オルヴィはライアンの愛人の一人で、それをつてにチェインでのし上がって行こうとしている種類なのだ。そしてライアンもそれを承知しているであろう。自分の周りにいることがどんな羨望と利益を生むかを知らないわけではあるまい。

チアロから話が行っているのかいないのか、ライアンもオルヴィもそれ以後態度を変えることはなかった。けれどクインにも見知ったことがある。少し前からライアンの左の耳朶に碧玉が留められているが、オルヴィの右耳にもそれがある。石の形や大きさは殆ど同じだが、彼女のほう

が紅玉なのは揃えたのだろうか。オルヴィは時折それを彼に見せつけるためなのか、わざわざ右の耳に髪をかけるような仕草をする。

嫌な女だ、とクインは歩きながら顔をしかめる。あの女と気が合うなどという幻想は抱いたことがないが、ライアンを挟んであちらが寵を誇るの、自尊の意地にかけても認めることが出来ない。

今夜の客があの子の持ってきた話で良かったとクインは当てつけに思い、そして長い溜息になった。今戻れば同じ事が行われているかもしれず、それを関知した瞬間に今度こそ声を上げて彼らをなじれば敗北感だけが残るのは分かっている。面白くなかった。

不機嫌に俯いたままクインはタリアの赤い格子の中を回遊している。男も女も彼は客として巡りあうままに知ったが、女であっても自分を思うようにしようとする相手には少しの関心も持てなかった。

同じ女でも、自分が全ての主導権を握ることが出来れば違うかも知れない。恋人を作るという選択肢も本当はあるのだろうが、誰かと巡り逢う機会など無いに等しかった。

一番身近にいる女といえば実はオルヴィなのであるが、それを思う度に冗談じゃないという白けた気持ちになり、最後は失笑がこぼれてくるのだった。

けれど今、自分の巣であるはずのアパートには戻りたくない。帰る場所を一時見失い、ふらふらと華やかな迷路の中をうろついている自分が可笑しくて、クインは唇を歪めて鼻を鳴らした。

母親からの乖離、心預ける相手の不在。その二つが入り混じりあい、手を取り合って踊りながら、胸の内ですぐ身の切るような寂しさを訴えている。

お前を心から愛してくれる人、お前が本当に愛する人に会えればきっと寂しさも消えると母は言った。それは真実だろうとクインも思う。母の語る言葉は彼にとって、いつでも煌めくように美しい真実であった。

けれど、現実理想のようにはいかない。その理想を求めて胸の痛みに殉じるのか、手に入らないものだとして諦めてこれからも同じように日々を流していくのか、その選択肢は自分の前に並べてみせるだけで辛かった。

どこからか歌が聞こえてくる。この春先から時折流れる、お仕着せのような愛の歌だ。

『涙を持たない海鳥たちの 悲鳴は海へ墜ちるもの——』

題名は知らない。かもめがどうか、海鳥がなんとか、そんな淋しげな歌だった気がする。まともに聞いたことのない歌の俗っぽさにクインは肩をすくめた。こんな物欲しげな歌を考え出す奴はよっぽど強欲に違いない。

そんなことを思いながらクインは歌の出所を探すようにぐるりと周囲を見回した。

タリアの大通りからは少し入ったこの界限も、並ぶ店棚は妓楼が圧倒的に多い。顔見世のための格子部屋から手招いている、白く優しい腕たちと笑い交わす女たち。クインがちらりと視線を向けてやると、彼の尋常でない美貌にあがる歓声。

今夜はどこかへあがろうかとふとクインは思いつき、自分の耳に嵌めた大ぶりの真珠を撫でた。

現金はあいにく殆ど持ち合わせていないのだが、以前客からもらったこの耳飾りを換金すれば

足りるはずだ。大抵出入りの鑑定屋が妓楼にはいるから、揚げ代とやらを差し引いた釣り銭を、帰る前に貰えば済む。

.....妓楼などに足を入れるのは実は初めてなのだが、大体の仕組みはチアロとの雑談で知っている。多分相手のほうでどうにかしてくれるはずだし、女そのものは知らないわけではなかった。

ライアンへの不愉快な怒りも、オルヴィへの苛立たしさも、全て忘れてどこかで明るく華やかに発散するというのは悪い考えには思えない。ただの思いつきにしては欠損はなさそうで、クインはやや考えた末に娼家にかかる絵看板を見つめた。屋号は駒鳥と桜桃だと聞いている。確かライアンが通いつめ、チアロが必死で気を惹こうとしている女がこの近辺の妓楼にいたはずであった。

ライアンがひたすらに構いあげている女、チアロが夢中になる女というのは一体どんな女なのだろう。オルヴィなどはライアンの愛人に過ぎない——とクインは底意地悪く笑う——あの嫌気の差すほど情感の薄い男が愛しているという女。チアロは美人だと繰り返していたが、この友人の場合は惚れた欲目の無意識の嘘だったとしても不思議ではなかった。

クインはゆっくりと来た道に戻り始めた。この先は組合に入っている妓楼が少ない、次第に全ての質が落ちていく坂道でしかない。気付かずに通り過ぎたのだろう。歩いていると歌が近くなる。音源はどうやら遠くない場所にあるようだ。

『泣けずに沈んだ宿定は 閉じて籠もった貝のよう——』

悲しげな声が歌っている。それを聞くともなく耳に入れながら、クインはことさらゆっくり歩いた。自分の部屋に戻れないという奇妙な現象が腹立たしくもあり、けれどたまさか思いついた思案が存外面当てには良さそうだという意地の悪い面白みもある。ライアンへの当て付けとするならこれもよさそうだった。

妓楼はそう時間をかけずに見つけることが出来た。こぢんまりというには大きい、タリアの大通りの店に比べれば遙かに気安そうな風情だ。屋号である駒鳥と桜桃の浮き彫りになった看板がぶらさがっている。ライアンの女だという遊女の源氏名は聞いていないが、聞けばなんとかなるだろう。

クインはそろそろと妓楼へ近寄っていく。大体の話は聞いているものの、最初に足を入れるには多少の踏ん切りがいった。妓楼の地階は大抵食堂と顔見世のための待合室になっていて、両方が塗り格子の向こう側に見て取れるようになっている。赤い衣装を着ているのが遊女、白が見習いで黒がただの下働き、だったはずだ。

一体どれがライアンの執心するという女なのか、クインは格子の向こう側をほんの少しの間、眺めやる。女達はそれぞれに美しく装っており、待合や食堂で華やかに笑ったり客であろう男と何かを話したりしているが、どれがそうなのかはやはり分かりそうになかった。

あまりこれは考えることではなかった。思考を重ねて理解できることと、賽を投げてみるまで分からないことがある。クインは自分の性癖を緩く笑いながら、妓楼の格子からこぼれ落ちてくる明るい光のほうへ歩いていった。

——と、その耳に微かに異音が聞こえた。硝子が碎ける音はどれほど小さくてもはっと首をすくめたくなるような痛さであった。

「——ごめんなさい……ごめんなさい……」

一瞬の空白の後、壊れてしまったようにそれだけを繰り返す細い声がある。それに被るのは客であろう男の怒鳴り声、そして怯えたように弱々しくも同じ事をひたすら呟く声、だがそれは何かに窒息するように聞こえなくなる。

クインは足を止めて格子の向こう側へ視線をやった。食堂が見渡せる格子に男の大きな手が遊女の喉を掴んで身体ごと格子に押しつけ、何かを早口で言っている。

他の遊女達が悲鳴のような声を上げて客に縋り付く。男は何かを低く言って喉輪にしていた手を離し、おもむろに華奢な体つきの遊女を平手で思い切り打ち据えた。その音が自分の鼓膜の近くに炸裂した記憶が一瞬戻り、クインは顔を引きつらせた。

殆どたたきつけられたように遊女が食堂の格子に背を打ち、崩れ落ちた。長く豊かな黒髪に挿されていた百合の造花が片方ぽろりと格子の外側へ落ちて、風に送られ通りのほうへ転がる。

クインは足をとめて顛末を見やった。

客の男はどうやら女将なのだろう中年の女に食ってかかっているが、女将のほうはそれを適当に慰撫するつもりのようなのだ。食堂の奥の方に小間使いの少女が先ほどからせっせと上等の酒や食事を用意している。

遊女達もこぞって男の機嫌を取り始め、とってつけたような明るいさざめきが空気を支配しようとする奔流の中で、黒髪の遊女は誰にも構われずに俯いたまま、打たれた頬を押さえた。細い肩が震えているのが見える。客に打たれることも暴力をふるわれることも、クインは自分の身に甦るようでぞっと背を冷やした。直接の肌の痛みよりも、見えない傷として胸に突き刺される痛みのほうがよほど辛いだろう。

その遊女がひどく哀れに思われてきてクインは足早に造花に近寄り、拾い上げた。大して良い品でないのはすぐわかったが、遊女は格子の外へ勝手に出ることは出来ない。小間使いの少女がこの花に気付くまでには散々踏みにじられてしまうだろうという予測もなぜだかひどく哀しかったのだ。

返してやろうと近寄っていくと、彼女がまだ少女と呼べる年齢であることにクインは気付いた。恐らく自分と対して年齢は違わないはずだ。肌の白さ、そこに被さる黒髪の見事な対比、けれど打たれた衝撃のせいなのか、まだごめんなさいと呟きながら震えている。頬を押さえる手では隠しきれないほど大きな赤い痕跡が、くっきりとそこに残っていた。

クインはそれを見ないようにしながら格子に手をかけ、なあ、と荒ぶる男の気を引かないように小声で言った。

「——なあ、これ、あんたの花だろ……」

掌に造花を乗せ、クインは格子の隙間から差し入れるようにしてやる。少女が頬を押さえたまま、ゆっくりと彼を見上げた。

その瞬間に、クインの目の前に広がったのは黒く輝く深淵のような宇宙だった。一瞬遅れてそれが少女の大きな黒い瞳に潤んでいた涙の輝きだと気付く——気付く、時には既に、クインは息苦しさを覚えて喘ぐように喉を鳴らしていた。

ふっと世界の音がまるで消えてしまったような刹那の時間に、転がり込んでくるのは歌だ。

誰かが、どこかで歌っている。

『探してよ 波間にさすらう魂と、私の欠片をいつの日にか——— 』

それだけが聞こえる。まるで何かの暗示のように。

今自分の前にあるのは一体何だろう。頭の中が次第に白くぼやけて霞み、その代わりに真闇色に美しい夜空とよく似たものが広がっていく。

何かの壮大な光景に似ている。分からない。これは何だろう……

魂を抜き取られたように少女の目を見つめていたクインの耳に、微かな、彼と同じほど呆然とした吐息が聞こえた。それはやはり震えていたが、先ほどまでの暗い彩りでは既になかった。

少女の目が限界までに大きく見開かれ、その中の光がひたと彼を見据えて離さない。

『愛してよ お前の全てをなげうって……』

かすれた歌声以外には、互いの胸衝かれるような呼吸しか聞こえない。

『愛してよ 流れる血潮 その最後一滴までに刻んでよ——— 』

クインの手から知らず、百合の造花が転がり落ちた。

星が瞬く束の間、あるいは永遠のような悠久の時間。

二人は惹かれ合うように、求め合うように、運命を互いの中に探すように、目線さえ離せずただじっと、見つめあっていた。

——それは、深くて暗い色であった。心に潜むの深淵の、その更に奥にあるようなひっそりとした闇。通りを照らす沢山の灯火が夜の沼に映るようにぼんやりと輝いている。

クインは僅かな時間、呼吸さえ殺して目の前に広がっている美しい闇を見つめていた。自分の目に映っている現象が一体何であるのかさえ考えられない、真っ暗で空白の時間。

どこかで見た。やっとその沼から浮いてきた気泡が割れて、耳の奥で囁いている。どこかで知っている。見たことがある。この色を。瞳の深い美しさを。懐かしささえ覚える奇妙な既視感を、だが不思議と違和だとは思わなかった。

懐かしい？ 知っている？ けれど、確かに初めて見る少女だ。それは間違いがない。就学していた頃も飛び級が多かったクインの身边には、同年齢程度の少女たちは殆どいなかったはずだ。それとも流れていく先々の、沢山の町ですれ違ったのだろうか。けれど、多分出会っていたなら彼女を忘れない。それだけは何故かはっきりと分かる。

ふっとその瞬間、瞼が動いた。瞬きであることにクインは一瞬置いて気付いた。それでやっと現実の知覚が戻ってきたようになる。

周囲の雑踏とざわめきは普段と変わらない。けれど、ほんの瞬き一つの間の刹那、確かに時間が止まったような永遠があったことを、クインは半ば呆然と掴むように、自分の胸元あたりに手をやった。

その耳に微かな吐息が聞こえた。少女が喉を僅かにならしたのだ。彼女もまた驚愕していた。大きな瞳の中の星々がこぼれおちそうなほど、一杯に見開いた目がじっと自分に当てられている。

魂を吸われるような感覚を覚えてクインは微かに後ずさった。その下がった分を詰めるように少女が格子にすがりつくようにして、彼に指を伸ばそうとする。整えられよく磨かれた爪がそっと自分の袖に触れ、こわごわと撫でてから掴んだ瞬間、クインは淡いしびれのようなものに背をふるわせた。

身体末端が痛い。痛くて、——分からない。

何かを言おうとしてクインは唇を薄く開き、そしてそこが渴いているのに気付いた。長い一瞬、目を閉じてクインは呼吸を深くする。そうすると胸の奥の痛みが僅かに切なく焦れて別の痛みになる気がした。きゅっと袖が強く引かれた。クインは再び視線を少女へ与える。

よく見れば飛び抜けて見目の麗しい少女というわけではなかった。吸い込まれそうなほどの大きな瞳と、黒髪に良くはえる白い肌が美しいが、肌の方は年齢ゆえのものもあるだろう。化粧がごく薄いのは肌の元からの良さを全面に出す為の所作なはずだ……自分だってほとんどしないから分かる。

少女はまだじっと彼を見ている。彼女の湖沼のように鈍く光をはらむ瞳に自分がいるのが見える。

彼女が何故自分を見つめているのかは、クインにとっては考えるまでもないことであった。彼に出会う者たちはその時間の多少や驚愕の表現こそ違え、みな一様に彼の圧倒的な美貌の前に呆然とする。

だが、いつものように何を見ているのだと意地悪く微笑むような仕草はどこかへ消えてしまっ

て出てこない。だからそれ以外にどんな反応をしていいのか分からずに、クインもぼんやり相手を見つめ返すしかできていないのだった。

「お前……」

クインは低く呟いた。とにかく何かを言わなくてはと思ったのだ。少女がゆっくり頷く。視線だけは彼にぴたりと合ったまま動かない。

大きな目だ、とそんなことを思った。吸い込まれそうなほど。

お前、とクインは二度目を言いかけた。だがその後何を続けようかと一瞬迷った彼よりも、気の張った女の声の方が強く、そして早かった。

「リーナ！」

はっとしたように少女が身を痙攣させ、振り返った。さら、と黒髪が流れて落ちる。片方落ちた髪飾りが押さえていた部分がほどけたせいで、編み込んだ髪が多少甘くほどけてきている。その不揃いさがかえって目に焼き付くようだった。

リーナというのがこの少女の源氏名であるようだった。リーナとは矢車草の薄紫の品種を意味する。なるほど、彼女の赤い衣装の裾には淡く光る金の糸で矢車草の刺繍があった。

おいで、と女の声が続いている。その声の方向を見やれば、恐らく遊女たちの部屋へ続く回廊の入り口にあつらえた帳面台に陣取る中年の女が見えた。この女だけは遊女の赤や見習いの白といった符丁のある服を着ていない。通常町中で見かけるような、きちんとした仕立ての灰色の長衣に黒い編み糸のショールを羽織っている。つまりは女将であろう。

女将の隣には中年の男が帳面台によりかかるようにしてリーナを見ている。彼女を指名した客なのか、少女に向かって軽く手を振った。少女は頷き、クインを振り返った。そして三度かち合う視線の中にお互いを見つけて、少女は困惑したように首を傾げる。

何だよ、とクインは囁いた。少女は首を振った。その曖昧さに焦れたようになって、クインは思わず顔をしかめた。

「何だよ、言いたいことがあるなら言えよ」

つい乱暴な早口で言ってしまってから、クインはそのために更に渋い顔になる。些細なことですぐ苛立って噛みつく癖がこんな時には自分で舌打ちしたくなるほど疎ましい。

少女は驚いたようにぱちぱちと目をしばたかせ、それからまた首を振った。彼女の視線がずりりと自分の顔から落ちて、格子の下の方へ流れていく。つられるように目線を追って、クインはやっと少女の迷いが何であったのかを分かった。

自分の足下に転がっている百合の造花を拾い上げる。そうだ、自分はこれを拾ってやろうとしたんだっけ——ほんの僅かな時間の中に濃く深く凝縮された深奥を感じていたせいなのか、ひどく長い時間が過ぎた気がするがそれは錯覚だ。何故なら、妓楼を探して彷徨っていた頃と同じ声がまだ同じ歌を歌っている。

クインは造花をつまんで格子越しに放り投げた。明るい灯火に踊るように百合花がふわんと宙を飛んで彼女の足下に落ちる。少女は造花を大切に拾い上げ、彼に向かってやっと笑った。

その途端、目を引くような何もない、ごく平凡な面差しが急に様変わりしたようだった。含羞のような仄かな恥じらいを含んだ微笑みは、確かに何かが違う。大仰な美少女ということでは決してなかったが、その笑みには何かの強い力があつた。——ほんの僅か、ぽかんと見つめてし

まうほど。

その一瞬が通り過ぎた時、クインはぶるっと一つ震えた。背中の皮膚が粟立っている。

胸に急に噴出してくるぬるい感情が何であるのか、その瞬間にクインには分からなかった。ただやわらかな湯のようなものが胸の一番奥深い部分にたゆっている。何かがそこにぼつりと灯る——ような、ぼんやりした、曖昧な、感覚。

それをこわごわ確かめるようにクインは自分の喉元辺りを指で押さえた。かすかに脈打つ血管がやけに敏に伝わってくる。

何か言おう。そんなことをふと思ったのに唇が動かない。真冬の雪に凍えた時と同じように重く堅く、ぴくりともしなかった。

「……リーナ！」

先ほどよりは焦れた声が再び促した。少女はさっと振り返り、こくりと頷く。そしてクインの方へ向き直って百合の花を胸に当てるような仕草をした。

「あの……」

少女の唇が動いて、やっとそれが彼女の声だと気付く。声は細く、弱い。消え入りそうな小さな声だが、面差しや表情ほどは幼くはなかった。けれど、やはり懐かしい。理性の部分ではこれが全くの錯覚だとわかっていても、ひどく遠い匂いがした。

クインが彼女を見ると、僅かに頬を赤らめる。その頬のふわりとした明るさを見た瞬間に、血の気がかあっと自分の方にあがってきた気がした。クインは慌ててつんと顔を逸らす。反射的に怯んだのだ。

「あの、花、ありがとうございました……」

囁くような声にクインはそっと視線を戻す。少女はクインが自分の方を見たのが嬉しいのかほっとしたように笑い、深く腰を折った。彼女の髪が肩を滑り落ちる。その圧倒的な量と黒い色の輝きは、夜の滝のようにも見えた。

「ん……ああ、別に」

素っ気なく返事をし、クインは頷いてみせる。少女はもう一度彼に礼を言い、背を返した。ゆっくりと遠ざかっていく。

クインは彼女の後ろ姿をぼんやりと見つめた。少女は振り返らない。女将と客の男が待つ帳台まで辿り着くと、女将の言葉に首を振ったり頷いたりしている。男が彼女の頬を撫でながら女将に何かを言った。女将がしまりなくしどけない笑みを浮かべたから猥雑な冗談でも言ったのだろうか。

彼女の方は俯いてしまったが、恥じ入っているのか、男の方は上機嫌だ。やがて少女が男に何かを囁いて二人は回廊の向こうへ消えていく。クインはそれを見ながら今から彼女をあの男が抱くのだという現実につきあたり、ふと奇妙な苛立ちにかられた。

あの女、一体どんな顔をしてどんな風に啼くだろう？　けれどそれが自分の前に他の男が知っていることがたまらなく不愉快だ。ぴくりと頬が不機嫌ゆえに引きつったのをクインは感じ、舌打ちした。一瞬の交感にうつけて惚れたのなんだの言い始めたら、まるきり自分が馬鹿に思えてくる。

多分あの瞳のせいだ。あれが吸い込まれそうなほどに大きくて深い色をしていたから、どこかで見たことがあるような懐かしさだったから。そのせいで心が落ち着かないのだ。

どこで見たのか、あの少女でなくても類似した者を自分は知っているような気がしてならないが、それが何であるのか見当が付かない。苛立ちはそのせいだろう。昔から、自分に理解できないことがあるのが途方もなく気分を悪くする。

突然こんこんという音がして、クインははっと顔を上げた。この妓楼の女将であろう帳面台にいた女がクインに練れた笑みを向けていた。

「——何か用事かい？ それとも気に入った娘でも？」

「え？あ、いや、別に、用事じゃ」

咄嗟のことにクインは相当きょとんとした顔をしたらしい。女将は小さく笑った。昔は美女であつたろう面立ちは、笑うと意外に深い皺が出る。見かけよりは年齢が上なのだろう。

「用事じゃなければそこをどいて欲しいんだけどね。外からのお客が中を見る為の寄席場所だから」

言われてクインはやっとその妓楼の中に足を入れた。食堂で給仕をしていた女たちや客たちの視線が一瞬、怒濤のように身に流れてくる。それにいつもの薄い笑みを放り投げてやると、やっと自分の余裕が戻ってきたような気分になる。あの少女と目が合ってそれがなんだか懐かしかっただけのことで、ひどく調子を崩していたのだ。

「ここ、一晩いくら」

クインは帳面台にさきほどの男がしていたようによりかかりながら言った。女将は彼をちらりと見て、少し意地の悪いような微笑みになった。

「うちはただの旅館じゃないけど？」

からかわれているのだとクインは女将をきっと見据える。彼の視線のきつさに女将は苦笑して悪かったね、と呟いた。

「でもこんな店は初めてだね？ 指名があるなら娘の名を、ないなら部屋が空いているかどうかを聞くんだよ。娘たちの格によって値段は全然違うからね。指名がないなら空いている娘の中からあたしが適当に見繕う」

クインは頷いた。女将の看破したとおり、妓楼に足を入れるのも初めてであつたから、妓楼の仕組みなどは知っていても実地のことは何も知らないのだ。勿体ぶりもせずに淡々と教えてくれた女将に安堵し、クインはこれ、と耳から真珠の粒を外した。

「これで大体どの女でも足りる？」

女将は彼から真珠を受け取り、鑑定用の小さな拡大鏡でしばらく見ていたがやがて大きく頷いた。

「——十分だね。うちの一番いい娘でも買える、いい真珠なこと。指名は.....ないんだっけ」

クインは首を振る。彼女のことですっかり飛んでいたが、やっと自分がここに何をしに来たのか思い出したのだ。

「他の奴から聞いて.....ライアンっていうチェーンの頭がいるだろう？ そいつの女がいい」

女将は長い溜息になった。あのね、と続ける言葉がやけに優しい。だから断られるのだとすぐ

にわかった。

「どの妓楼も同じだけど、どの遊女にどんな客が付いているかは極秘なんだよ。うちの娘たちにも、娘同士で客の個人情報の話なんかはしないようにしつける。組合に入っている妓楼はどこもそうだ。だから、例えばそのライアンっていう男がいたとして、うちの娘を可愛がってくれてるってことがあったとしても、あたしはそれが誰だかを教えるわけには行かないね」

客の個人情報は教えるわけには行かないと言われるなら、それも道理であるかも知れなかった。だからクインは別の方向から食い下がる。

「俺がライアンと知り合いだって言っても？」

「じゃあ源氏名を聞いておいで。聞けないならそれはそういうことなんだよ」

女将は素っ気なくやり返し、クインの手に真珠を返した。

「で、どうする？ あたしに空いている部屋を聞く？ それともそっちの食堂で食事でもしていく？ 給仕に出ている赤い衣装の子が娘だから、好きな子を選べばいいが。ああ、その場合は指名料は半額つけてもらうからね」

クインは女将の視線の先にある食堂を振り返った。確かに赤い衣装を着た遊女たちが客の合間を縫っては酌をしたり給仕をしたり、男客は大抵一人だが、一人で黙々と飲み食いしている者は見あたらない。そこで女を選ぶという行為がどこことなく腑に落ちなくて、クインは首を振った。そう、と女将は自分の提案に拘泥せずに頷いた。

「それで、どうする。あがる？ 帰る？それともリーナが空くまで待ってるかい？」

先ほどの邂逅を見られていたのだと気付いてクインはぱっと自分の頬が赤らむのを感じた。女将は少し笑った。

「あの子がいいなら待っていればいい。あんたは綺麗だから放って置いてもうちの娘たちが相手をしたくて焦れてるよ」

クインは食堂の方を振り返る。と、いくつかの視線が彼の面輪に当たってほころぶように微笑み咲いた。どれも美しく着飾った女たちであったが、やはり誰からもリーナといった少女に感じたような力はなかった。

クインは曖昧に返答し、リーナ、と聞き返した。女将は頷き、1刻半もすれば相手が出来るはずだと付け加えた。他の男と寝た直後に買うかと聞かれている生々しさにクインは怯み、首を振った。それはとんでもなく悪趣味である気がしてならなかった。

「いいよ、また来る.....リーナ、だっけ、彼女、高い？」

「指名料込みで晩酌が50ジル、泊まりが80ジル。他に飲み食いするならその値段だね」

クインは苦笑した。それは彼の一晚の値段の僅か10分の1だったのだ。女将はその笑みをなんとなく思ったのか、帳簿をぱたりと開いて明日、と言った。

「明日は指名が入ってないから相手が出る。もしあんたがその気があるなら今予約入れていつでももらえるなら、少しまけるけど」

クインは首を振った。明日の夜は夜間の看護学校の入学試験がある。医療の実践と現場を知る為に、クインは看護学校の試験を受けるのだ。首席で試験に通れば学費もかなり特待で安くなるとそれなりに勉強もしてきたのだから、これを放り出すわけにはいかない。

それから先のことは仕事の予定をチアロかオルヴィからか聞かなくてはわからなかった。

「いや、先のことは俺にもわからないんだ。……今日は帰る」

クインはそれだけ言って帳面台の前を離れた。またね、と女将の声が追いかけてきたがそれには振り向かず、手を軽く振ることで挨拶に代えた。

住処にしているアパートが見える角を曲がると、部屋に灯りがついているのが見えた。誰かが来ている。少なくとも、だからライアンがオルヴィと密やかに関係を持つようなことは行われていないのだろう。

クインは僅かに溜息をついた。安堵したことが自分でひどく屈辱的な気もするし、それでも多少は楽になった恩恵にそのままおぼれてもいい気もする。そのどちらに気分を定めるのか思案したまま、クインは自室に辿り着いて扉を開けた。

入ってすぐにある居間の長椅子にゆったり背を預けていたライアンが、いつもの彼の煙管をくわえたまま、クインに視線を流して頷いた。クインは薄く部屋に漂う煙に眉をひそめ、軽くあごをしゃくった。最近は何に対して不機嫌な態度を取ることが多い。

クインの仕草で何を言われているのか悟ったのだろう、ライアンは煙管を灰切りの皿にもたせかけて天窓下の椅子の上に立った。天窓を開ける。ゆっくり手で空気を攪拌して煙を追うが、一瞬充満していた臭いだけはそうそう消えそうになかった。

クインはライアンが降りた窓下の椅子に座った。何故彼がここにいるのかはわかっている気がしていた。あの客からオルヴィへ、そして彼女からライアンへ、連絡が回ったのだろう。ひとしきり小言でも言うのだろうかとかそれを意地悪く待ちかまえていると、ライアンはクインのそんな表情に気付いたのか、薄く唇だけで笑った。

「お前が自分で自分の客を減らすのは勝手だ、好きにしろ」

いつものように突き放されて、クインは唇を歪めた。ライアンの興味も関心もまったく引きつけておくことが出来ないのは昔からだ、焦れた思いが沈殿しつつあるこの頃には尚更彼の態度がクインの胸をひっかくようだ。

ちりちりいう痛みを身体のどこかに聞きながら、クインはそう、と声だけは素っ気なく返した。ライアンは長椅子の背もたれ越しにクインを見ると苦笑したような吐息になった。

「オルヴィの仕事だけ容赦がないな、そんなにあれが嫌いか」

「チアロ以外はみんな嫌だね」

そこにライアンを付け加えなかったのは当てつけでもあるし、半分ほどは本気かも知れなかった。ライアンの関心の薄い態度を目にする度に、ひどく苛立つし怒りを覚えるし、そして最後には自分自身の持つものの少なさについて思い知る。嫌味に気付いたのかどうか、ライアンの返答はなかった。丁度草が切れたのか、灰切り皿にこつこつと煙管を叩いている。

「何しに来たんだよ。用がないなら帰れば？　とってもお忙しいんだからさ」

クインは極力つまらなそうな声音を作って言った。

ライアンは曖昧に首を振りながら、腰に下げている煙草入れに手をやっている。中身を変えようとしたところでクインの先ほどの渋い顔を思い出したのかそれをやめたが、代わりに吐き出されてきたのは煙よりも胸に悪い言葉であった。

「悪態がつけるくらいならお元気そうで何よりでございますな」

自分の嫌味に同じような辛辣が戻ってきてクインはむっと唇を結び、ライアンに聞こえるような舌打ちをした。

ライアンが振り返り、淡い苦笑のままで長椅子を立て彼の隣あたりの壁に背もたれた。その

手がぽんぽんと軽く自分の頭を叩く。子供扱いに怒ってクインが首を振ると、ライアンは懷から小さな包みを取り出して彼の手に握らせた。口を縛る朱紐をほどくとそこからクインの爪先ほどある翡翠が転がり出てくる。

「しばらくタリアを離れる。チア口を残していくから大体のことは用足りるはずだが、何かあったら使え」

「しばらく……って、どれくらい」

さあな、とライアンは返答を濁した。分からない、と付け加えてライアンはまた腰に手をやった。煙草飲みの習性が自然とそうさせるらしい。

クインはライアンの手を軽く叩いた。煙草の制止である。叩かれた手をライアンは軽く振り、溜息になった。その指先が手持ち無沙汰に空間を彷徨うのを自分の指を絡めて引き取ろうとすると、ライアンは素っ気なくそれを振り払った。指が離れる一瞬、強かに打ち返してクインは場を離れた。

居間を挟んで二つの部屋が相對するという簡単な作りの部屋の、片方は寢室でもう片方は書齋として使っている。あまり整理整頓というものが得意でないクインの性質を反映して、居間も寢室もそして書齋も乱雑にものが散乱しているが、その書齋の床に放り出したままの生物学の本を拾い、クインは机の前の無炎灯のつまみをひねった。部屋が本を読める程度には明るくなる。

開け放したままだった扉がこつこつ叩かれて、クインは不機嫌にそちらを見た。ライアンはゆるく苦笑を浮かべていた。

「たまには顔を見に来てやったのに、そんなに不機嫌にならなくてもいいだろう」

「ふうん、来てやった、んだ？ どうせチア口にうるさく言われたんだろ」

本の字面に目を走らせるようなふりをしながらクインは返答を待ったが、違うという答えは遂に聞かれなかった。

クインは軽い溜息と共に本を開いたまま、ライアンを斜めににらみ据えた。

「別に、あんたのしけた面なんか見たって嬉しくないね。しばらく出かけるから俺にお小遣いでもやりに来て下さったんでしょ、チェイン王陛下様々。有り難くも勿体なくも恐縮至極に存じ奉ります……で、用事が済んだんだから、帰れば？」

ライアンは吐息で笑い、クインの背後から彼の開いた本をのぞき込んだ。彼は字を読めないが図版や写真の具合で學術書だということくらいなら分かるのだろう、熱心だなと呟いている。

微かにそのライアンの呼吸が首に掛かってクインは身をよじった。他人と寝るのに慣れてきた身体が、愛撫ではないのに僅かに反応しようとするのだ。その反射にクインはきゅっと唇を噛み、乱暴な仕草で立ち上がった。ライアンを睨みながら、彼を振り向く。

「……帰らないの？」

読みかけの頁に指を挟み、クインは空いた方の腕を伸ばして指先をライアンの胸に強くつきつけた。夏の薄い綿生地を通して、彼の呼吸と体温が僅かに伝わってくる。

その瞬間に、自分が彼の身体を欲しているのは確かだった。男と寝ることに既に抵抗感はない。自分の身体に道筋をつけたのはライアンだったし、最初の夜が過ぎてもクインが客との行為に慣れていくまでは時折関係を持っていた。

けれど最近は全く記憶にない。ライアンがタリアの自警のことだけで引き回されていた頃にも

あまり会わなかったのだが、最近新しく麻薬の取引筋を一つ手にしたようで、ライアンはそれにかまけて殆ど姿さえ見せない。二人でいることなど、ここしばらくの記憶にまるで見あたらなかった。

彼に欲情しているのか、それとも単に欲求を解消したいだけなのか、クインは判別しようとしてやめた。数少ない記憶の中で、ライアンが彼を抱く時にだけはひどく優しく思ったように思われて、それにすがりたいのだろう。何かの温かなもの、愛でなくともそれに似たものの熱を感じ取ることが出来たのは、結局この男だけだったから。

チアロに縋り付こうとした時、友人はそれを丁寧に拒否した。それはチアロの彼を気遣う心根から来るものであったから不愉快ではなかったが、チアロ以外に心を許せるというならば、やはりライアンしかいなかったのだ。

自分とその身体と、抱えている破裂しそうな胸の中の何か。小綺麗な器と自分でも持て余しかけている中身の熟爛を過ぎようとしている溶液。それ以外に自分に何かがあるのか、確かめたい。何でもいい、誰かから愛されるような何か——自分の価値。

母マリアの為に生きていかねばならないことは分かっている。それは彼にとって決して苦役ではなかったが、けれど、それだけなのか。

俺の価値は、今ここにいる身体と心の意味は、それだけの為に在るのだろうか。

誰かの為にというなら容易い。母の為にと呟くならそれは決して間違いではない。確かに自分はそのために生きている。

だけど、でも、俺は？

俺のために何かはあるのだろうか。俺の為に誰かがいるのだろうか。俺を見て、俺を信じて俺を頼る、俺の相手が。

多分それはライアンではないのだろう。けれど、今この瞬間に、彼しかいない。肌を重ねる感触に擬態させながら心ほどいて誰かに甘える方法を、クインはこれしか知らない。

クインは本を挟んでいた指から力を抜いた。本が床に落ちて紙が折れた音がした。

「——帰らないなら、煙草は、いやだよ……」

彼の胸元へ刺すようにあてた指をしならせてずらし、やがてそっと掌を押し当てると脈が打つのが微かに分かった。クインはライアンの心臓の辺りへ手を這わせながら、彼の目を見ないように自分の指先を見つめた。

自分の造形美にはクインは一点の曇りもない自負と自信を抱いている。その通りに男にしては華奢な体つきにそぐわう指の細さが頼りなげで、自分でそれに腹が立った。クインが僅かに目端を歪めた時、手首が掴まれた。

「お前は、俺からもう一度同じ事を聞きたいか」

低い声が言った。クインは黙りこくったまま、掴まれた自分の手首あたりにぼんやり視線をやった。

（俺はお前の保護者でも愛人でもない）

ライアンの声が遠い記憶の底から低い声で呟いている。クインは唇だけでそっと笑い、返答をせずに俯いた。彼の顔を見ることが出来ない。自分の中にあるものを見透かされてしまいそうで

怖かった。

クインの沈黙がじっと時間をやりすごしかけたとき、ライアンが溜息がした。

「既に契約は終了している。俺はお前と寝る気はない」

その声にクインは反射的に顔を上げた。契約という言葉が凍ったような胸の中に唐突に切り込んできたのだ。冷えた怒りが背を駆け上がってくる。

クインは手首を掴んでいるライアンの手を乱暴にふりほどき、視線に強い力をこめて睨み据えた。

「……契約？ 俺はそんなことを言った覚えなんか無い。あんたが何をどう解釈するのはご勝手だけど、俺は知らないね、そんな約束は」

「約束だと？ 俺も知らんな、約束なんてものは。既にお前にやった金額の分は俺は取り戻したと言ってるんだ」

彼が最初にクインに与えた1万ジル分は使い切ったと言い、ライアンはクインの視線を同じように睨み返した。クインは舌打ちをしてライアンの肩を突き飛ばすようにし、その勢いで自分の方がよろめいて下がった。

「俺はあんたに金を払えって言ったかよ！」

怒鳴り、クインはかあとなった頭を宥めるために、左のこめかみを指で押さえた。ライアンが溜息をついたのが聞こえた。

「お前の商売はそれだろう。金は要らない？ 俺をお前の愛人にするつもりか？ それこそそんな話はどこでしたのだと聞きたいが」

クインは言葉無く顔を歪めた。ライアンの言葉に何かをたたきつけてやりたいが、言質という意味においてはライアンの言うことが事実だ。クインは縋り付こうとし、ライアンはそれを避け続けているのだから、言った言わないの話になると具合が悪い。

けれど、そんな些細なことではないのだ。

俺は、と言いかけてクインは呻いた。自分の怒りも苛立ちも、その根底にある飢えて吠える獣のような声も、全てを言葉にすることはとても難しく、どれも的確でないのは分かり切っていた。何を訴えてもライアンの面差しに歪み一つ与えられないことも。

だからクインはもっと直截なことをした。自分が床に落とした本を拾い上げ、それをライアンに叩きつけ、帰れよ、と叫んだ。

「帰れよ——帰れ！ 知らない、あんたの顔なんかしばらく見なくたって俺には関係ないんだろう！ だったら嫌味だけ言いに来るなんて、あんたも案外暇なんだ？」

殆ど脈絡など通っていない言葉にライアンが小さく鼻を鳴らしたのが聞こえた。それは冷笑と呼ぶべきものであった。

「そうだな、俺もそんな気がしてきた。お前の癪癢の相手など出来るんだから、俺も思っていたより時間があるらしい」

クインはライアンにさっと手をあげた。何かの言葉も怒りも、全ては反射的な仕草の方が早かった。振り下ろした手はライアンに当たらない。体術ということについてはライアンの方が彼の数段上におり、全く暴力では歯が立たないのだ。

打ってやろうとした手をするりとよけたライアンが、その手首を素早く掴む。その次の瞬間に

訳の分からない眩暈がして、世界がぐるりと一周回った。どさりと床に投げ出され、クインは僅かな時間、ぼんやりする。

つと肩に掛かっていた引きつるような重みが消えて、それですとんと体重が床に完全に落ちた。ライアンがクインの手首をようやく離したのだ。横に立つ彼を見上げると、ライアンは軽く首を振った。

「お前は自分で自分の吠える声に苛立っている。俺は巻き込まれたくない。もう充分だ」

激昂するでもなく淡々と呟かれた言葉に、クインはそう、と重い声を出した。のろのろ立ち上がって本を拾い、軽くほこりを払うような仕草をしながら呟いた。

「なら、さっさと帰れよ」

一瞬の間をおいて、ライアンが溜息をついた。お前……と何かを言いかけ、奇妙なところで言葉を句切る。クインも顔を上げ、戸口の方を見やった。確かに扉が開いた音がしたのだ。

軽い足音がして、部屋の中を覗いたのはオルヴィだった。女としてはやや長身に属するが、やはり女である体の線は明確だ。

お前か、とライアンが僅かに肩から力を抜いた。オルヴィが彼に簡単な会釈をする。クインはふんと頬を歪めて鼻を鳴らし、何だよ、と不機嫌に言った。

「すっぽかしたんだって？」

オルヴィの声は低めの苛立ちの範囲に属する冷やかかさであった。だから何だよとクインはつまらなそうに促す。オルヴィは不機嫌な声音のまま、淡々と言った。

「私の時だけそんなふざけた真似をするならもう私は仕事をあつらえない。全部チアロにさせればいい。その代わり、私の繋いできた客に対する始末だけは一度つけてもらう」

謝れ、という意味であろう。クインがなんと噛みついてやろうかと身構えと、ライアンの声が駄目だと入ったのが聞こえた。

「お前とチアロでこれを切り回すように俺は言ったはずだ。俺に無断で勝手はさせない」

「ライアン」

オルヴィはクインにする時よりはやや温んだ声を出した。クインは不愉快な気分をますます濃くして眉をひそめた。その声に滲んでいる僅かなおもねりを感じ取ったのだ。

「——態度をわきまえろってことさ」

ライアンが何かを言う前に、クインは素早く割って入った。オルヴィはそう、と簡単に頷いた。

「……伝えておく。今日の客はもう一度あんたをご指名だ。引継はチアロに伝えてある……あんたが今度はすっぽかすかどうか、帰ってくるのが楽しみだな」

クインはそう、と何気なく話を流したが、そこに含まれている毒はすぐに察知することが出来た。帰ってくるとオルヴィが言うのならば、ライアンがタリアを離れるのに彼女も同行するのだろう。それをわざわざ言葉にしないで提示しているのだ。

だからクインはオルヴィに向き直り、華々しい笑顔を浮かべて見せた。

「伝える必要なんか無い。俺はあんたに言ったんだよ」

オルヴィは僅かに眉を上げ、そして頷いた。クインにとっては相変わらず、冷徹な壁しか感じ

ない相手であった。軽く彼女を睨むと同じような視線が返ったが、さほど長くは続かなかった。オルヴィはライアンに軽く頭を下げる。それは先ほどの自分の発言についての簡単な謝罪のようだった。

それが済むと、彼女はクインに迷い無く近づいてきて、一枚の紙切れを差し出した。

「次の仕事だ。最前のご希望通り若い女だから、せいぜい楽めばいい」

オルヴィの手から紙片をかすめるように奪い取り、クインはその内容にざっと目を通した。女客の時にはいつもの連れ出し用の貸し部屋ではなくタリアの外の宿を使うから、場所は毎回変わった。メモには姉妹ということで部屋の予約が取られていること、使う偽名などが記されている。クインは分かったと紙片を机の引き出しにしまいこみ、あごをしゃくった。

「用事が済んだら帰れよ、……二人とも、だ」

オルヴィが何かを言いかけたのを、ライアンが首を振って制した。彼女の肩を軽く叩いて出ていく背に、クインはよいご旅行を、と怒鳴った。オルヴィだけがちらと振り返り、頬で暗く笑った。それは恐らく、クインに対する嘲笑とライアンの一件の勝利の顕示であった。

クインはぎりっと奥歯をかみ合わせた。オルヴィのこれみよがしな態度は彼の神経をいつでも一番嫌な音の不協和音で逆撫でる。あの女に小馬鹿にされたのだという屈辱感とライアンへの怒りが急速にあがってきて、クインは拳を握りしめた。中で爪が皮膚につきささるようで痛い。

戸口が閉まる小さな音が聞こえた瞬間、それが悲鳴になってこぼれた。何にどんな怒りをたたきつけていいのかさえ、知り得ない。

胸の裂かれそうな苛立ちと痛みと、もの狂おしい怒り。それらに翻弄されるようにクインはふらふらと寝室へ歩き、寝台へ身を投げた。

「母さん——助けて……」

呟く言葉に救いと癒しを求めても、彼の聖母は遠く離れた場所にしかなくて、彼を暖めてくれる魔法とはなりそうになかった。

初夏のまっすぐな日射しがようやく茜にゆるむ頃、クインは夏用の薄いワンピースに着替えて地下水路へ降りた。水路に降りて複雑な迷路をどうにかくぐればタリアの境界門にほど近いアパートへ出ることができる。

どこへ行っても彼の突出した美貌は人の目を引いたが、タリアの中ではそれが悶着になることが多い。いちいち声を掛けてくる連中の目的は結局は彼の身体であったが、相手をするのも面倒で、最近は今更他人が疎ましかった。

——疎ましい、くせに、ではライアンがタリアから消えるとどこか物足りない。それをライアンの不在ゆえだと結論してしまうには内心の矜持の抵抗は頑迷であった。クインは水路からあがる階段を上りながら舌打ちをする。ライアンにこれほどまでにこだわる心根が一体何であるのか、クインは自分でもよく分からない。彼は確かに自分の愛人や血縁やではなかったし、そうしたいという欲求は見あたらなかった。

だが、結局誰かに縋り付こうとする時に真っ先に浮かぶ面差しであることも事実であった。チアロはクインのせっぱ詰まった孤独感をどうにか緩和しようとしているのか、頻繁に食事や娯楽に誘ってくれるが、それとはまた違ったことでもある。

クインは綺麗な顔を歪め、唇の端で苦く嗤った。ライアンなど言葉を交わしていれば苛立ちだけが蓄積されるのに、いないとなるとオルヴィの同行がやけに気に食わない。それを自分が不服としていることさえ怒りになる。

——ただ、ただ、自分が欲しいのは、ライアンの言葉ではなく彼の自分を気遣う心でもなく、ひたすらに焦がれるほどに欲しいのは、欲しいのは……そこまでくれば思考がふいに回転を止める。ライアンから何が欲しいのかさえ、彼への怒りゆえに曖昧に塗りつぶされてしまった絵のように焦点がぼやけている。

クインは首を軽く振り、地下から上がった床の隠し扉を足でゆっくり閉めた。鏡の中にいる自分に向かって微笑んでみせる。瑕疵なく整った顔がきらめくような美しい少女が嗤った。化粧の具合を一度見て、クインは部屋のクロゼットから肩掛けのレースと靴を選んで外へ出た。

このアパートにはいくつかの事務所が入っていて人の出入りが多い。その一つを架空の名義で借り受けて地下水路に繋いだのは正解だったといつもながらに思う。タリアの中をさほど歩かないうちに地下へ降りることが出来るし、他人の目は今でも微かな警戒心を呼び起こさせ、胸をささくれ荒らすのだ。

まっすぐに前を見つめて歩き始めると彼に目を留めた人々が足を止め、やがて自然に割れて彼のための行き道を造る。微かな吐息、ぶしつけなほどの視線、そんなものでさえ身に飾るように誇らしげに背を伸ばしてクインはタリアの境界門を出ていく。ここなど自分の居場所ではないのだと威嚇するような微笑みが自分の顔に張り付いていることは知っていた。

境界門を過ぎた辺りでクインは流しの辻馬車を拾い、この日の仕事だと指示された宿へ入った。オルヴィの書いた紙片にあった偽名を告げると宿帳をめくって管理人がああ、と曖昧な声を出した。

「お部屋は一番上にご用意してありますよ……しかし、……ああ、済みませんね、お姉さんとはあまり、その、」

クインは柔らかに笑ってみせる。どんな時にも自分の美貌には絶対の自負があった。

「姉とは母が違うものですから」

その場の嘘をさらりと口に寄せ、教えられた階段を上がる。指定の部屋は最上階の全ての面積を使う特別室だが、これはさして珍しいことではない。

軽く扉を叩くとすぐに中から返答があった。オルヴィが嫌味に吐き捨てていったように確かに声音は若い女のものであった。若い女ね、とクインは微かに内心に毒づく。一体、どんな女なんだか。彼の一晚の金額は既に800ジルを超している。これから経費やライアンへ渡る一割を差し引くと手元には300と少しが残ることになるが、この先更に揚げ代は高額につり上がっていくだろう。少なくともチアロにはそのつもりがある。経費には客の身元を確かめるための調査料も含まれているから大幅に目減りすることは仕方がない。

だから今ならまだ高額といっても誰かを破産させるには足りないほどであったが、それにしても男娼を買う若い女、というものがどんな種類であるのかをクインはこの晩とっくり見物するつもりであった。どこかの金満家の後妻、それとも亭主が役に立たない人妻、未婚の女だとすると相当好きな女だろうか。何にせよ、それは軽侮と冷笑を連れてくる。

どうぞ、と扉が開いた瞬間、クインはそれでもその底意地の悪い思考をさっと表情の奥へ押し込んだ。どんな相手だろうと客は客、と今までも刷り込んできた性癖であった。

「——本当に、来てくれたのね？ 嬉しいわ、夢みたい……」

けれど出てきた女は彼の想像していたどんな極悪な色も持っていなかった。一瞬虚を突かれたようにクインはぽかんとする。彼女はそれまで彼を買いつけて散々玩んできたどんな男たちや女たちとも何かが違っていた。彼らは一様にどこか暗く歪んだ炎を目に飼っていたし、身から発せられる空気にも重い澱みがあるものなのだ。

クインを僅かに見上げて大きく瞞られた瞳の輝きには純粋な驚きだけが灯っていて、それがひどく女を無邪気に見せている。年齢はなるほど若い。20には届いていないのは確かだろう。特別美しいというわけではなかったが、どこかで見たような既視感でクインは少し瞬きをし、それが過ぎた晩に格子の向こうにいた黒髪の遊女の印象であることに気付いた。——確か、リーナと呼ばれていた少女。

但しそれは見間違えるというほどの酷似ではなかった。どこことなく顔立ちから受ける最初の感触が似ているのだ。あのリーナという遊女もそしてこの女も、さして珍しげな特徴ある容貌ではなかったから、単に空似というものであった。夢みたい、と女が繰り返して呟いた。クインはその声でようやく現実に戻り、さあね、と小さく呟いた。

「そっちが買っておいで夢も何もあるかよ。——中、入れてよ、いい加減にさ」

クインの言葉にはっと女は振り返り、ごめんね、と慌てて身体をずらした。彼女に一瞥もくれずクインは部屋の奥へと踏み入れた。部屋は流石にこの宿の一番であって、調度も内装も申し分なかった。売春宿とはやはり品格が違う。クインが部屋の中を見回していると扉を閉めた女がいい部屋よね、と明るい声で言った。女の声に全く淫蕩さが潜んでいないことにクインは戸惑い、思わずじろりと彼女を睨んだ。

この女は一体なんだろうという疑問が先ほどから彼の脳裏を巡っている。彼を買った客たちから感じてきた負の威圧がかけらもない。そもそも男娼を買う事自体をしないだろう、よい意味に

おいての、ごく普通の女だ。奇妙な清潔感が彼女の明るい空気を支えている。

彼のきつい視線に女は怯むでもなく目をしばたいた。彼が何故自分を睨んだのだろうというのさえ理解していない、まったくの素人ぶりにクインは遂に溜息になった。

「.....あなたさ、俺を買ったんだよな？」

女相手の時いつもするように、適当に言葉で相手を気圧したり翻弄したりする気にはなれなかった。この女は恐らく、本当にただの素人で興味本位なのだ。一体どこのお嬢様だと次第に苦くなりながら、クインは彼女に向き直った。

「だったらこっち来いよ。買った分は楽しむ気があるんだろ」

彼の噂をどこかで聞きつけて面白半分に手を出そうとしたのなら、それはいたく彼の中の自嘲笑と自尊心のかけ混ざった部分を傷つけた。客たちの目的も欲望もクインには失笑の対象だったが、それさえ持たない女が気まぐれに自分を指名したのかと思うと、苛立たしさがまた腹の底にとぐろを巻き始めているのが自分でも分かった。

欲しくもないくせに物珍しさだけで買うという行為自体が自分を馬鹿にしている。相手を蔑むのは自分の役目であって客のものではないのだ。女が扉を開ける前にそこで自分が浮かべていた冷笑をいきなり浴びせられたような汚辱にクインは微かに身震いし、薄く笑った。

「.....こっち、来いよ。来いって言ってるのが聞こえないのか？」

ほとんど脅しあげるような低い声に、女はぴくりと肩をふるわせた。怯えているのだ。クインは大声で笑い出したい衝動を耐えながら、ゆっくり余裕を持って獲物に近寄るように足を踏み出した。女の肩を掴んで腰に回そうとした手を、女は身をもぎ放すようにしてすり抜け、待って、と掠れた声で呟いた。

「待って、ねえ、私、こんなつもりじゃ」

「じゃあどんなつもりなんだよ」

クインは小さく笑いながら耳元へ囁いた。彼の吐息が女の耳朶にやわく絡んで産毛がさわりと逆立つのが見える。彼女の腰に今度こそ手を回して後ろから抱き寄せるようにすると、待ってと二度目を言いながら、女が突然くるりと身をひねった。正面からおもむろに向き合う形になってクインは僅かに身を引く。

と、左の耳がぐいと引っ張られてクインは慌てて体を離れた。

「待って、って言ってるでしょう？ どうして言うことを聞けないの！」

ぴしゃりと言われてクインはきょとんとする。頭ごなしにと言われて怒りになるはずのいつもの反射が、どうしてか反応が鈍い。まるで自分が5才の子供に戻ったような気分であった。

「あ、いや.....ごめん.....」

ぼんやり口にして、それが謝罪であったことに一瞬後から気付く始末だ。彼の言葉に女はうち解けたような笑みを見せた。美女ではなかったが、十分に居心地のよい、明るい笑顔であった。誰かのそんな表情を随分久しぶりに見た気がした。どうにも調子が狂う相手だとクインは苦い顔になる。気を詰めていた表情や身構えていた心根をゆるく解いて、クインは部屋のソファにどさりと身体を投げ出した。

「.....あなた、じゃあどんなつもりで俺を買ったんだよ」

寝る気がないという意味合いであろう女の言葉に落ち着かない気分であった。積み上げてきた経験の全てが投げやりに首を振って、この女は男としての自分に興味がないのだと溜息をついている。

クインは身支度整えて編み上げてきた髪をほどいた。魔導の効果で黒く輝いている長い髪が、若干の柔らかな癖を残したままこぼれ落ちる。それを無造作に片手でかき回していると、女が部屋の隅に屈むのが見えた。少し大きめの布鞆から、貴重品のように取り出した黒い箱の正面に、大きな硝子の球面が見える——写真機だ。

「写真は駄目だよ」

女が光画紙を入れようとする間際、クインはそれを遮った。それは男女どちらの客でも同じ事であった。客側の手にクインの写真が渡れば、それはどこからどんな形で誰に伝わるか分らない。ただの家族写真や記念品ではないのだ。最も皇太子に近いとされているリュース皇子との酷似は、正体や身元の詮索をいつか必ず呼ぶはずであった。その確実な証拠となる写真など、残すことは自暴自棄といってもよいことであった。

女はえ、と聞き返した。

「……どうして？ ——事情があるなら誰にも見せないわ」

「駄目ったら駄目。あんまりしつこいなら写真機、窓から放り投げるよ？」

女が写真機を扱う手つきはひどく慎重であった。恐らくそれは彼女のものではないだろうという推測はどうやら正解であるようで、女は一瞬俯いてから頷いた。

「ごめんなさいね、私、こんなこと初めてだからよく分からなくて……」

「あんたが初めてなのは知ってるよ」

どう考えても男娼を買う類の女でないことも、既に雰囲気雄弁に語っていた。世間ずれしすぎていないなら学生かも知れない。クインがそんなことを考えていると、女は写真機を鞆に戻す手で、大きめの写生帳を引き出した。

「何だよ」

クインは立ち上がり、彼女の手元をのぞき込んだ。新しい頁を探すように女がばらばらとめくる紙には練炭色で何かが描かれている。それは花だったり人だったりごくたまに猫や犬だったりしたが、総じて淡い圧力で描かれた美しい絵だった。

「絵は？ 写真は駄目でも、絵ならいいでしょう？ ね？」

そんな事を言いながら、写生用の練炭でも探しているのか女は鞆の中で手をごそごとと動かしている。彼女の荷物がどうやらその鞆一つであること、それがどこにでも安く売られているような綿地のものであることにクインは気付いた。そのまま足下に視線をやる。彼女の靴も昔自分が母といった頃に履いていたものと、さほど変わらぬ粗末なものだった。

微かに、胸がちりっと焦げるように痛んだ。この女は自分と同じ階層にいる相手であった。服だってそう高価なものであるとは思えない。普段彼を買い付けている裕福な連中の払う金には何の同情も覚えないが、この女が自分を買う為に支払った金額を思うと一瞬呆れるほど……馬鹿馬鹿しいのか感心したいのか、どちらであろう。クインは溜息になった。どうやらこの女は一晩のモデル料としてあのオルヴィのふっかけた額を払ったようなのだ。

「……絵も駄目だって言ったら？」

クインの言葉に女は顔を上げ、そして少し困惑したように笑った。

「それは……ちょっと眩暈がするわね」

だろうね、とクインは応じて天井を見上げた。良い部屋らしく高く取られた空間の天井画は何かの洒落気なのか魚が水草の間をすり抜けていく題材だ。魚鱗の古びた色を眺めながら、クインは女の申し出を吟味した。オルヴィの取ってきた仕事であるし、気に入らなかったの一言で投げようか。金はチアロから返してやればいい。写真はもとより絵でさえも自分の容姿を形に残すかと思うと、真っ先に嫌悪感が立つことを軽視してはならなかった。

「……俺じゃなきゃ駄目か？ 他にもっと、本職のモデルだっているだろう」

「そうねえ……でも、新しい意匠の一連作を興す時には、やっぱり最初の自分の印象に近い相手を捜すものでしょ」

「それはあんたのやり方と理屈だから俺は知らないね。俺と似てるってなら……よく客にも俺がリユースさまとかいうお偉い人と似ているって言う奴もいるね」

よく似ている、そっくりだと呟く声に混じっている混濁した欲望をクインはいつもひっそりと嗤ってきた。あの皇子様ときたら恐らく自分に向けられている視線に時折はこんな淫蕩な値踏みが潜んでいることにも気付いてはいるまい。その闇に葬られるべき部分を引き受けて、クインはますます自分が皇子の影となる気がした。あの皇子の引き受けている部分が光溢れる明るい世界ならば、その足下に落ちる影のすさまじい暗さに自分は生きている。皇子本人を決して嫌な奴だと思ったことはなかったはずなのに、彼のことを考えてふと目線をあげれば、鏡の中にいる自分がひどく暗くて惨めな気がするのには単に僻みであった。僻みだと、分かっているからこそ尚更……辛い。

突然頬に何かが触れてクインははっと顔を上げた。女が彼の柔らかな頬をそっと撫でたのだった。

「……大丈夫？ あまり嫌なことは考えない方がいいわ」

さらりとした本心からのさりげない気遣いに、クインは怯んだように半歩後ずさり、いや、と曖昧な返事をした。微かに目の奥が潤み出そうとしている。人の優しい指先が、恋しい。それはいつか母が彼にふんだんに与えてくれたのとよく似た、まっすぐに単純に相手を案じる情愛のぬくもりだった。

「何でもねえよ———気安く触んな」

ぱっと顔を背けると、女はゆるく笑ったようだった。それが彼を宥め慰めようとする種類のものであることは、すぐに分かった。何かの反動でもあったようにそれにふらふらと縋り付きたくなるからだ。

クインはことさら厳しい表情をして舌打ちをした。誰かがこんな風に時折優しくするだけで、ひどく寄りかかりたくなるほど自分はどこかがおかしくなっているのかも知れなかった。

「ごめんね、本当に厭ならもうしないわ。……それに、リユース殿下は駄目よ。あっちは……そのう、もう断られたの。肖像権と写真の利得について懇々諭されちゃったわよ」

女はちゃんと肩をすくめて仕方なさそうに笑った。クインはそう、と軽く相づちを打ってやがてゆるく笑った。さほど交流が長かったわけではなかったが、あの皇子の生真面目でひっそりと

した性質がそのまま変わらずにあることは分かった。

「だから俺を買ったってわけだ？ ふうん……絵、か……」

皇子の手元をすり抜けた話が巡って彼の元に回ってきた、その事自体は珍しいとは思えなかった。それは時折あることであったのだ。珍しいのは女が決して裕福な生活をしていないということであった。服も靴も鞆も、ごく普通の古着や使い込んだ品としか思えない。800ジルを越す金を惜しげなく出せる環境でないのは明白で、それを彼の一晚のモデル料と引き替えようとしている。皇子に断られたからと、諦めてもいいはずのその話の続きを見たがっているのだ。

「……そんなに、絵、好きなんだ」

半ば呆れ加減に呟いた言葉に、女はそうねと笑った。

「好きというよりは、描いていないと死んでしまうかも知れないってことだと思うの……何があってもずっと絵だけは描いてきたからね……」

女の微笑みに浮いた淋しげな影を、クインはじっと見つめた。何があってもと呟く程度には沢山のことが通過した、微かな痕跡をそこに見つけた気がした。……僅かに、胸が弛む。同情であったかもしれないし、幾ばくかの共感であったかもしれない。

「絵なら……いいよ」

クインは小さく言った。同じ女の客は取らないことになっている。この女が自分に会うたった一度の機会に大枚を支払ったのなら、どうにかすり抜けのききそうな現実を目をつぶってやっても構わない。ライアンの判断に委ねるならば恐らく彼は撥ねるだろうし、チアロも同じ事を言うだろう。だから彼女の申し出を受けるのかも知れないとクインは思い、それを否定する材料がないことに気付いて苦笑した。

「……絵ならいいけど、あまり他人に見せないでくれよ。それと、俺とどうやって連絡を取ったかは誰にも言うな——ま、男娼の買い方なんかべらべら喋ってあんたの得になることは何一つないけどな」

女は大急ぎで頷いた。彼の気が変わらないうちにと思っているのだろう。

「ありがとう。私はエミリア」

短く、はっきりと名乗る。この女の風情からして偽名とは思えなかった。男娼を買って本名を名乗る相手というものが存在するとは思っていなかったにせよ、それはクインを相当面食らわせたらしい。表情も作らないでただ彼女を見つめ返すと、女はもう一度笑った。

「エミリア＝スコルフィーグよ。みんなエミルって呼ぶわ……なんて呼んだらいい？」

最後の質問にクインは肩をすくめた。

「適当にどうぞ。リユースでもいいぜ。それともカルア？ エセル？ ああ、ラインなんてのもいたな、どれでもいいさ」

エミリアは呆れた、と呟いて彼の首を軽く、ぴしゃりと音を立てて叩いた。

「不敬なこと言わないで。別に本名を聞いている訳じゃないんだから……」

分かったよ、とクインは適当に手をひらひらさせた。

「じゃ、リユース」

「嫌な子」

エミリアはくしゃりと顔を歪め、それからついというように笑い出した。彼女の持っている空

気はどこまでも明るくて、清潔だった。それにつられてゆるく笑いながら、ふと胸の重みが軽くなった気がして、クインは苦笑する。けれど、それさえ遂にぬるく解けて安息にこなだれていくことに、何故か懐かしい安堵を覚えた。

クインは自室の寝台に転がって、ぼんやりと一枚のカードを見ている。降臨する天使、その周囲を取り巻く幻影のような魚の群。淡めの色遣いながらどこか強烈に印象に残る神秘的な青が絵全体を美しくとりまとめている。

この絵がエミリアといった女の、細い手が編み出したものであることは信じられない気もしたし、よく知った気もした。

何があっても絵だけは描いてきたとエミリアは言った。それは真実だったろう。写生用の練炭を握って一心に彼の姿を写し取り始めた彼女は真剣で、声を掛けるのもためらわれるほど無心に手を動かし続けた。

突き詰められたような目の光、きゅっと結んだ唇のきかん気。特段美しい女ではなかったはずなのに、その顔をつい見つめてしまう。目が馬鹿になったように彼女の面輪から離れないのだ。

——描いている時だけは、私の世界は私のものだから。

クインに向かって照れたように笑った顔はごく普通の若い女であるのに、画帳に向かう彼女は別人のように厳しい表情をする。

芸術というものにクインはさして関心がなかった。これからもないだろうと思う。けれど別際に彼女がくれた一枚のカードを捨てることが出来ない。エミリアの描いたという天使と魚群の一葉が印刷されたカードの裏には画廊と展示会の期間、そして合同出展するという画家の名前が連盟で記されている。

そしてこの仲間たちの中ではエミリアは特別名前の出ている存在なのだろう。合同出展のうち、半数は彼女の「春幻想」と名付けられた一連作に割かれているようだ。

(興味があったら来てね。今週中はずっとやってるから)

その彼女の言葉を何度も口の中で転がしながら、クインはじっと天使の微笑むカードを見ていた。……もう二日もそんなことをしている。

ゆらめく波間に射す光の線をかいくぐるように身をよじる銀色の魚たち、それに手を差し伸べて微笑む天使の表情が柔らかく、甘く、優しげなのにひどく切ない。幻影画であることは疑いないが、天使の面輪に何か懐かしい、ぬくい感情がはい出してくる。

……これは余計なことなのだろうか。自分は物と同じなのだ、ただ客の望みを察してそのように振る舞うだけの人形なのだと必死でしつけてきた外殻が、柔らかく薄い微笑みひとつにゆるゆると消え去ってしまいそうになる。

クインはこんなことではいけないと必死で思いこもうとする。人の優しく触れ合う暖かさを求め始めたら、恐らく客と寝ることなど出来なくなる。

最初にライアンと寝たとき、微かに震えていたし怖かった。だから彼が自分をごく丁寧に、まっとうな恋人にするように扱ってくれたことは分かる——今なら、それは分かる。

そのせいでライアンについて苛立ったり怒りを覚えたりしながらも、もう一度誰かのぬくもりの中にひたって癒されたいと考える時には彼に手を伸ばし続けて拒否され続けていることも。

男たちに組み敷かれながら、クインはいつでも自己を閉じてただ暗い場所に彷徨っているようだった。身体の反応は興るままになることで、自分の感覚や意志とは既に遠い場所にあった。

それが異様なことだと胸のどこかが飲み込めないままであったのを、今更思い知ることなど、

欲しくない。

要らない。そんなことに気付けばもっと苦しくなる。居たたまれなくなる。いやだ、それは嫌だ。このままでいいはずなのだ。チアロだって母さんだって、俺を気に掛けてくれてるじゃないか。何が不満なんだ。足りないんだ。

けれど、その明確な回答など——要らない。そのはずなのに。

クインは起きあがった。寝台の脇の小卓の上で、彼の時計が時間をせかしている。クインは澄んだ音で彼を呼ぶ時計の音を止め、服を脱いだ。週に2度、看護学校へ通っているのだ。試験は首位で通過し、特待の資格も得たのだから放り出すのは愚かであった。

看護学校へは少年のままの姿で通っている。身長はこれからどこまで伸びるか分からないし、そもそも中等学院の時にもあの皇子が少女の体つきではないと断言したではないか。医療系の学校であるから、その目はもっと厳しくなるはずだった。

クインはクロゼットの中から派手すぎない衣服を選んで身につけると、鞆に教書を放り込んだ。髪は適当にまとめて黒く見せ、眼鏡をかける。女装の時とは違って、素顔を晒すことにやはり抵抗は強かった。

いつもの地下水路から抜け、少し歩いて乗り合いの馬車にあがりこむ。彼の面差しに時折はぶしつけな視線が当てられることもあるが、大都市ならではの無関心さがおおむね彼の過敏な神経を守ってくれた。

いつものように他人の視線を拒絶するためにやや俯きがちに、馬車の振動に身体を預けながらぼんやり窓の外の薄暮の景色を眺めていたクインはふと視線をあげた。ちらりと一瞬目が過ぎた街角に、既視感の青い色がよぎったのだ。

肩をひねって振り返り、目線を滑らせていくとやはり何かがちらりと引っかかる。僅かに時間を探し、すぐにクインはその正体を見つけた。表通りに面した硝子張りの店の一面に、あの天使の絵の複製が大きく張り出されている。

「あ……」

微かにクインは声を漏らして腰を浮かせた。天使のカードをぼんやりと眺めながらつい彼女のことを考えていた最前までの記憶が、不意に現れた偶然に対して喧噪に息づき始める。

急に心臓が高く打った気がして、クインは思わず口元を押さえた。カードの裏に印刷されていた画廊の地番など、覚えていない。多分その箇所は見ないように務めてきた。ふらふらと彼女の親切とやらに甘えてしまっただけは、この先客とのことが辛くなるだけだから。

けれどその矢先に眼前に現れた絵の天使は、彼を許すように優しく微笑んでいる。

もう一度だけ。そんな声が耳の裏で囁いたような気がして、クインはきゅっと唇を結ぶ。あと一度だけ、たった一度だけでもいいから、彼女とごく普通に話したり笑ったり、そんな平凡でなだらかな時間が欲しい。それを嬉しいと思う部分が自分の中にまだあったことが喜びに変わりそうになる。

いけないと思いこもうとする傍にその声が次第に大きくなっていくようだった。微かに苛立ってクインが爪を噛もうとした時、急に馬車がかくんと揺れてとまった。

「——降りるかい？」

その声が自分に向けられたものだったことに、クインは遅れて気付いた。乗り合いの切符勘定

をする車掌が御者を止めたらしい。

「あ……いや、」

何かはっきりしないことをクインは口の中で呟いた。車掌がいぶかしく彼を見つめる。クインは馬車窓の向こうにやや遠く見えている青い絵の具の色を見やり、自分の鞆を見やった。

学校が、という胸の中の呟きがする。その声に耳を澄ましながらか、クインは唇を開いた。

「降ります——ここで降ろして下さい」

自分の声がぼろりとこぼすのを自分で驚きながらクインは受け止め、そして苦笑になった。

一度くらい看護学校を休んでもすぐに取り返しはきくという自信はあった。それまでの学舎の経験からしても、数度通った看護学校の内容の密度から言っても、それは殆ど確信といって良かった。

……一度くらい、いいか。そんな現金さに自分で薄い苦笑を浮かべながら、クインは馬車を降りた。精算分の釣り銭を適当に服に押し込み、天使の絵の掲げられた画廊へ少しづつ近寄っていく。いつか妓楼にこわごわ近寄っていった時よりも更に何か恐ろしく不可解なものへ近付いていくようで、落ち着かない。

画廊は通りに向かう壁面を全て硝子の一枚板で張っており、そこにカードと同じ絵の大きな複写画が張られていた。馬車の中から見えたのはこれだ。水の青が優しい。

クインはその絵をじっと見つめた。カードの時にもふんわりしたぬくみのある絵だと思ったが、大判になると更に顕著だった。表情しか見えなかった小さな印刷よりも、事細かな仕草や表情の微妙な加減、光線の柔らかさなどがゆったりとした時間を連れてくる。美しい絵であった。技巧も色使いも表情も、全てが穏やかにゆっくりと、そして確実に胸の中に入り込んでくる。

クインは溜息をついた。彼女が何かにとりつかれたように夢中で彼を写生していた時の情熱の帰結はこれなのだろうか。だとしたら、とクインは不意に頬を赤らめる。

……そりゃあ大層なものに見込まれてる。自分は天使ではなく、これほど美しいものでもない。現実と欲望の中に彷徨いながら、それを厭い嫌い憎しみさえしながら、そこから離れて生きていけない。それほど醜いものがあるだろうか。

けれど自分でも可笑しくなるほどに、彼女が自分の表面だけを小器用に写し取っていたのではないことは、知っている気がした。

あの日、いつしかソファで眠ってしまったクインが夜半に目を開けるとエミリアはまだ写生を続けており、彼の目覚めに気付いて優しく笑った。

（起きたの？ 眠ってていいわよ……）

それは僅かに記憶の奥底に眠る、母の声音と似ていた。声自体は似ていないのに、その柔らかな音調が似た場所に囁きかけてくる。

頷いて目を閉じた自分の素直さにクインは苦笑したはずだったが、その先はすぐに闇に溶けて分からない。エミリアがそっと自分に近付いて毛布をかけ直してくれたことだけ、それだけを何故か覚えている。

クインは微かに笑い、長い溜息になった。画廊の中にはいるのには、また別の種類の勇気が必要。どうしようかと視線をちらりと入り口の方へやると、慌てて居住まいを正す若い男女たち

がいた。どうやら彼を見つめていたらしい。やっぱりこの顔は目立つな、とクインは苦笑した。

彼らの年齢は多少ばらけているようであったが、雰囲気は似通っていた。合同出展とカードの案内にはあったはずだったから、これはその若い画家仲間というところなのだろう。

「あ、あの、よければ中、見て行きませんか？」

クインと一瞬目線のあった女がしどろもどろに言う。下手きわまりない勧誘にクインは微かに首を傾げた。

「エミリアって……ここにいるって聞いたんだけど」

「エミリア？ ああ、エミルね、いるわよ」

女は知った名前が出たことで安堵したらしく、ほころんだ笑みになった。こっちよ、と手招きされて画廊の中へ踏み入れる。中は意外と広く、白い壁と淡い枯れ草色の絨毯が落ち着いた印象だ。

初めてのことで周囲を見回していると、先ほどの女がすぐに戻ってきた。クインは僅かに皮肉に見えるような笑みを作り、照れのために軽くあごをしゃくる。が、そんな意地も連れられてきたエミリアのぱっと咲いたような笑顔で急に引き込んで、口元を歪めてあらぬ方向を見た。

「来てくれたんだ、ありがと、嬉しいわ」

やはり彼女の声は通って明るい。あの晩も朗らかな声や表情であったが、それを改めて確認した気持ちになる。自分が彼女につられるようにゆるい顔になっていることにクインは気付いたが、それをさっとしまい込む気にはならなかった。

「暇だったし」

それでも口をついて出てくるのはそんな言葉だった。エミリアは彼の持っている鞆をちらりと見て、そうね、と頷いた。

「でも来てくれたんだから嬉しいわ——ごめんね、今、商談中なの。すぐに済むと思うから絵でも見ていて、ね？」

商談ということは絵の買い手が付いたということだろう。エミリアはどうやらこの画廊に絵を飾っている連中の中では一番手であるらしく、いくつかあの天使の絵と同じ筆触の絵には売約済みの札が画題の下に張られている。

「売れてんだ、絵」

「まあ、そこそこにはね……何しろ散財しちゃったから、取り戻すのに必死よ」

くすりとエミリアは笑う。散財というのが自分のことであることに気づき、クインは少し笑った。

待ってて、と言いついてエミリアが奥の応接室へ戻っていく。その後ろ姿を見送ると、先ほど案内してきた女が知り合いなの、とクインをのぞき込んだ。まあ、と適当に肩をすくめるとそれ以上は諦めたのか、女はこっち、と彼の先に立って画廊の奥へ歩いた。

「ここから先がエミルの今度の新しい連作よ。右から時系列にそって並んでるから、その順に見てあげてね」

それだけ言い残して女が去るのを待ち、クインは絵の前に立つ。天使の絵とは少し趣が違うが、淡いくせにしっかりと塗られた色調と美しい幻想の光景は同じだった。

滔々と広がる若草色の野原に少女がいる。エミリア自身に少し似ている気がするが、もっと

幼い。まだ10才にもならないだろう。黒髪が風にあおられて顔にかかり、ほつれてさえいるが、その目線は何か見えないものをみつめるように敬虔に、ひたすら空へ向いている。

展示説明の額には妹の成長を追いながら幻想の中に取り込んだ一連の作品であることが記されていて、その通りに一枚を経るごとに少女は少しずつ成長していく。

若草の野原があり、爛漫の花壇があり、きらめく海がある。あの天使と通じる、一点の曇りもない優しさ、綺麗に透き通った慈しみがある。

ゆっくりとクインは絵の前を移動する。成長する少女の面影はやはりエミリアに次第に似てくるようだった。少女の表情や服装は様々だったが、どの絵もどこか遠い、とりとめない場所をしっかりと見つめているようで、視線の強さが焼き付く。

そんなことをぼんやり思いながらクインは最後に近い一枚の前に立つ。それは春を迎えて割れ崩れていく氷の上を渡る少女の姿だった。均衡を取るように大きく手を広げ、やはりずっと上の、あらぬ場所を見ている。黒い瞳に何も書き込まれてはおらず、それが何を見ているのかはやはり分からなかったが、現実の何かではあり得なかった。不思議な微笑みは苦悶でも諦観でもなく、試練にうち勝ったときのものでもない。どの風景にいても少女はたおやかに凜としていたが、この一枚には特にそんな表情が強かった。

綺麗な絵だった。技巧よりも、絵を通して何かが確かに心の底を掴んで優しく揺する。それにゆったりと身を任せていると安らいだ気持ちになる。彼女の絵は、そんな絵だ。誰かの為に描かれた、愛を語る絵。愛を語るゆえに幻想と現実が調和して、美しい絵。

彼女の胸の中にある幻影がごく一部であっても鮮やかに投影されていることは、疑う余地がなかった。美しく結晶化された彼女の中の無限の夢が押し寄せてくる。

綺麗だと口の中でクインは呟く。絵の善し悪しなど彼には分からないし、エミリアの絵に一体幾らの値が付くのか、それが高いのか安いのかなど全く知らない。けれど彼の心に根付き、彼に向かって優しく微笑む天使の幻影と同じ血脈が、この絵には宿り、息づいている。確かに呼吸しているのだ。

そしてこの絵を生み出した絵の主は今、すぐ近くにいる。応接室の扉を開けて彼に話しかけるために、ゆっくりと近付いてくる。

僅かに呼吸を整えたクインの肩を、全く別の誰かが掴んだ。

かたんと自分の前に淡い色の果実酒のグラスが置かれた。天然炭酸のあげる気泡が微かに揺らぎながら、グラスの向こうの風景を時折歪めてみせる。

クインはグラスの縁を指先で遊び、口を付けた。一息にあおろうとしてそれをやめる。けれど膝の微かな震えはとまりそうになかった。

（なあ、君、もしかして———ほら、君が高等学院に魔導の聴講に来てたとき、俺、君と同じ研究班にいた……）

掴まれた肩、強引に振り向かされた力の強さ。それに思わずよろめいて均衡を崩し、声を掛けてきた男にもたれて座り込んでしまった。

（中等にいた彼女だよな？ 名前———ごめん、名前が出てこない……けどほら、魔導論文で確か賞まで取った———）

それでも話しかけるのを止めそうにない男を咄嗟に睨み、クインはさっと立ち上がったつもりだったのに、いきなり鞭打たれた事実足に足が追い付かなかった。自分は恐らく相当よろめきながら体勢を戻したはずだ。

（誰、それ）

出来るだけ低く、冷たい声音を出したのは内心のひどい波をそうでもしないと自分で叱りつけることが出来なかったからだ。男はクインに睨まれたのがいかにも存外だったというように目を丸くし、やっと思いついたらしい名前で彼を呼んだ。———それは確かに中等学院に入学した頃彼が使っていた偽名だった。可愛らしくてありふれた少女の名前。

（……俺、男なんだけど？）

クインは辛うじてそれだけ絞り出した。男の方はぼかんと彼を見つめていたが、やがてかあつと赤くなった。思い違いだと納得したらしい。

（ごめんよ、でも本当に似てるなあ……彼女、もしかして君の親類とか親戚とかじゃないかな、本当に綺麗な子でさ、大人しくて可愛くて……魔導の方もまさしく天才少女ってああいう感じなんだって……）

（悪いけど）

割って入ったのはエミリアだった。クインをかばうように自分の背後へ押しやって、男の名前を呼んでいる。知り合いなのだろう。

（この子は私の遠縁なの。帝都に出てきたから今日ここで待ち合わせただけよ、変なこと言わないで）

ぴしゃりと断言する強さは、あの日にクインの耳を引っ張って叱りつけたものと同じだ。庇われているのだとクインは微かに卑下のために唇をきつく結ぶ。だが、それ以上の言葉はあの頃と同じように喉で凍り付いて出てくる気配がなかった。

男の方はややあってからクインに向かって軽く頭を下げた。ごめんよ、という口調の丁寧さとぼくつつな雰囲気はあの頃のままだ。……高等学院で魔導学の聴講を受けていた頃のまま。彼の名前も得意だった呪言形態も繋がって記憶から戻ってくる。

あれから考えてみれば5年は経過していない。まだ彼が高等学院に在籍していても特段奇異な出来事であるわけではなかった。何故あの場にあの男がいたのかなどは知らないが、エミリアが

高等学院の芸術専攻部にいることと無関係ではないだろう。

とにかく、とクインは画廊から3区画ほど離れた食堂の一番奥でそっと溜息になる。エミリアが咄嗟に庇ってくれたことを感謝するしかないが、それにしても自分はひどく動揺したらしい。真っ青だとエミリアは彼を気遣い、この食堂で待っていないかと言ったのだった。

それに頷いたのは、やはり呆然のなせる業であった。中等学院に通っていたことさえ忘れかけていたのに、記憶はどこかへ無理矢理紛失させても過去は喪失しない。全て確かにクインが通ってきた欺瞞の歴史そのものだ。

クインは暗がりには身体を押し込むようにして顔を歪めた。震えはまだとまらない。迂闊だった。エミリアが高等学院の芸術専攻部にいることを、まるきり知らなかったわけではない。カードの出展画家一覧の後援にも高等学院の名前があった。

名前を呼ばれた時に振り返らなかったのが、今は唯一自分を宥める材料といえそうだった。振り向いていたら全てが雪崩のように露見していくに違いない。自分が男だと言うことくらいは気付くだろう。

気付けば、過去の欺瞞が剥がれる。剥がれ落ちた欠片を、自分と母を追い続けていた連中が拾う——自分の強迫観念の根深さ、臆病な性質をクインはやや苦く奥歯にかみつぶすが、それでもその経緯は明白で、しかも逃れられない絶対の道筋に見えた。

クインは痙攣のとまらない指先で自分の額を押さえ、机に肘をついた。まだ膝の細かな動きもやまない。近付いてはいけない。高等学院の関係者にも、あの場所にも、二度と近寄ってはならない。隣接している中等学院の学舎にも、生徒はともかく教授陣はまだ残っているはずだ。藪をつついて妙なことになるくらいなら、最初から逃げてしまえ。

その考えは既に彼の中に根付いている習慣に近い反射だった。それを繰り返して呟きながら、今日という今日に限って自分がそれになかなか頷かないのが苛立たしい。

本当はエミリアなど待たず帰るべきだった。酒の一杯でも一息にあおって帰るべきだ、今でも。

けれど何故か腰が浮かない。彼女を待っているのだ……なんとも不思議なことに。礼を言わなくてはとクインは自分にどうにか刷り込んでみる。エミリアが遠縁なのだと出任せを言ったことでかなり救われた部分があるのは確かだった。

そうやって答えのでない自問自答を繰り返していた彼の前にエミリアが立ったのは、それから同じ酒の3杯目を終える頃だった。ごめんね、と囁く声音にも苦笑気味の表情にも、先ほどの出来事の欠片も残っていない。まるでなかったことのようにだ。

「……何も食べてないの？ 少し食べる？ 絵が売れたからここ、おごるわよ——えーっと… …ね、何か嫌いなものある？」

「食欲、ないから」

クインは乱暴に返答した。事実、何かを食べる気などまったくおこらなかった。ひどい眩暈に必死で耐えているほどだ。エミリアは軽く溜息をついた。

「でもお酒だけじゃ胃に悪いわ。ここ、窯焼きの鳥が美味しいのよ。香草が嫌いじゃなかったらそうして貰うわね？ それとパンと……そうね、何か温かいもの胃に入れた方がいいから、煮込みかなにか」

「要らないって言ってるだろ！」

クインは机を拳でたたきつけて怒鳴った。一瞬食堂の中の視線が呼び寄せられる。クインは机に突っ伏して要らない、と繰り返した。恋人たちの単なる痴話喧嘩だと思ったのか、やがて注目が散って元の静かなざわめきが戻る。

「……ねえ、少年」

それを待っていたようにエミリアがそっと彼の髪を撫でた。

「でも、生きていく限りは食べなくちゃ。あなた痩せてるわ、とってもね。もっとちゃんと食べて、もっとちゃんと生きないと、ね」

クインは机にうつぶせたまま緩く首を振った。エミリアの言葉はやはり彼に温かくしみこんでくるものだったが、今は聞きたくなかった。

「いいんだ、要らない……本当に、今日は要らない……食べたくないんだ」

呟く口調がひどく甘えたものになっている。クインは気付いて一瞬きつく眉根を寄せた。誰にでもすりよっていく野良猫と同じ種類の生き物になった気がする。自嘲で苦く頬が歪んだ。クインはそのために更に黙り込み、額を机に押し当てたまま呼吸を殺す。それは自分自身をひどく情けなく思うことでもあったのだ。

そうしてじっとしていると、やがて耳に仕方なさそうな、けれど甘い苦笑が聞こえた。

「……さっきの、気にしてるの？ ごめんね、彼、ちょっと唐突で思いこんだら盲目的なところがあるから」

クインはそっと視線をあげて自分の前に座る女を見やる。彼女は微笑んでいて、クインの目が自分に向いたことを知ってもう一度小さく、ごめんね、と囁いた。

「……あいつ、あんたの、何」

クインはふて腐れたような顔を上げ、頬杖を付いてエミリアを見た。彼女の方は肩をすくめた。

「彼は趣味で絵を描くのよ。基礎写生からちょっと教えてるの」

ふうん、とクインは流した。エミリアはクインの返答がやっと通常の音調に戻りつつあることを理解したのか、適当に注文を済ませると展示会のあれこれを話し始めた。あの男が口走った内容について、彼女は触れようとしない。それが彼女の気遣いであることは明らかだった。

食事を適度に進めながらエミリアは料理を取り分けてクインの前に置く。それを義務的に口に押し込むうち、やっと落ち着いてきた心象にクインは深い吐息を落とした。4杯目の酒を、それで最後にしなさいねと苦笑するエミリアに頷きながら注文する。運ばれてきた新しい酒に唇を寄せる瞬間に、クインはぽつりと呟いた。

「……さっきの、聞かないんだ？」

エミリアもその場において、あの男の口走ったことを聞いている。クインが少年であったことで男の方は人違いだと納得した様子だったが、エミリアはそれこそ女装したクインを見ているのだった。もっと幼かった頃にはまさしく少女にしか見えなかったことくらい、想像が出来ない種類の女ではないだろう。

エミリアはそうねと笑い、でもと続けた。

「あなたが話したくないことなら聞かない。興味はあるわ、正直に言えば。でも、あなたが嫌がっているのにどうして聞こうと思えるの？」

クインは頷く。彼女の言葉一つ一つが、何かの宝石のようにきらきら胸の中に踊る。ありふれた気遣い、ありふれた言葉、ごく当たり前のいたわり。そんなものに過ぎないと承知していても、それに甘えたくなる。

誰かという叫びが胸の奥にする日に、遂に与えられなかった安息の気配がする。

——泣きたくなる。誰かの無条件の優しさが、胸に痛い。突き刺さるように痛い。痛みがある、それが疼く、心臓を貫かれたような深い疼痛、それら全てが声を合わせて彼女に甘えてもいいのだ、そうしてもきっと慰撫してくれる、助けてくれる、その予感を歌っている。

高らかに。クインは片手で顔を覆う。本当に泣き出しそうだった。

「……奴の言ったのは、嘘じゃない。あれは俺だ。10歳の時まで、中等にいたんだ。天才だとか神童だとか言われて、いい気になって、魔導論文も書いたよ……」

自らの擬態や根本の欺瞞など忘れ、豊かな未来を夢見て自分の持つ力を傲慢に発揮していたのはまだ5年も経たないほどの近い過去なのに、ひどく遠い。自分の過去ではないような気がするほど、現実味がなかった。

「……また、戻りたい？」

クインが声を震わせたのをなんと思ったのか、エミリアはそんなことを聞いた。クインはゆっくり首を振り、分からないと答えた。

「分からない、そんなこと……俺は、同級生なんかみんな馬鹿にしてた。友達なんかいなかった、みんなちやほやしてくれたけど、俺は奴らのことを端から相手にする気なんかなかった……」

一瞬目の裏に皇子の面影が過ぎる。皇子のことは別のもので塗りつぶされてしまっていたが、彼が特別であることは真実だった。

「分からない、エミリア、俺は、あんな場所に戻るもんかと思ってた、でも、あそこにいた頃が一番……今から考えるなら、一番、ましだったかもしれない……」

少なくとも母がいて、きっかけはどうであつたにせよチアロやライアンなどと友人関係を築くことが出来、学校という閉鎖された特殊な空間の中で自分の能力の限界を楽しむことさえしていたのだから。

「学校、好きだったのね……」

エミリアのなだらかな相づちにクインは曖昧に首を振った。苦笑になる。

「俺は、学校なんか別にどうでも良かった……そう、確かに受験した時は……将来は学者や役人になって母さんをもっと楽にさせたいと、思ってたはずなのに……」

自分はその人の足枷なのだろうか。それともあの人の罪の中核、動かし得ぬ重大な証拠。

けれど、そんなことは知りたくない。知らなくていい。ただ母と名乗る女のために自分の人生を使い潰したって構わない。

けれど母の温かな肌は彼に与えられなくなってしまった。時折手を重ねても、手袋の薄い遮断を隔てた体温のもどかしさに訳の分からない衝動を覚えることがある。

エミリア、とクインは呟いた。

「でも、俺は、中等にいた頃のことなんか、捨てたんだ。捨てたら終わりだ、もう戻れない、二

度と戻れないんだ……捨てるってそういうことなんだ、リーリーが……」

クインはふと唇からこぼれた名前を確かめるように、指でそこをなぞった。今この瞬間まで忘れていた、あの、最初の友人の名前。ずっと彼の話し相手だった、黒い猫のぬいぐるみ。

何かがこぼれるように、胸の奥から吹き上がってくる。

「あいつを捨てた時から、色んなものを捨ててきて、だから、みんな同じだったけど、でも、もう拾えない、拾えないから、諦めるしかないだろ、だって、もうないんだから、なくしたものは還ってこない、だから」

酔ってる。クインは自分の唇がせわしなく動くのを放置しながらぼんやり思った。頭がおかしいんだ、きっと。なんでこんなことをべらべら喋ってるんだ。酔ってる。間違いなく酔ってる。帰らなきゃ——でも、どこへ？ タリアの奥巣、ライアンが俺に放り投げて寄越したあの部屋へ？

クインは小さく笑い出した。帰らなきゃ、と思うのにその場所がどこであるのか今ひとつ確信にならない。あの部屋の寝台は確かに彼の寝床ではあったけれど、帰還する場所ではありえないのだった。それはいつか、母の腕の中だった。沢山の不満や不安も激情も、母が彼の波を鎮め慰めてくれた。

それさえ、自分で切り捨てなければならなかった。母への秘密を持ったのは自分だ。だから結局自分が自分でその場所に封印をしたのだろう。

クインは喉で笑いながら、捨てたんだ、と呟いた。リーリー。彼を捨てたあの夜から、拾うもの全てを捨て続けてきた。そうしなくては生きていけなかったと分かっているのに、いつまでも拘泥している。

「……もう、帰ってこないから……」

クインはエミリアが最後だと念を押した酒をあおり、注文をするために片手をあげた。その手がぱちんと弾かれる。クインはエミリアを咄嗟に睨んだが、彼女の方は涼しい顔でやってきた給仕に向かって伝票を振り回した。勘定するときの仕草だ。

「——適量はもうちょっと少ないみたいね、覚えておくわ。……ほら、立って。行くわよ」

精算を終えてエミリアはクインを促し、彼の鞆を掴んで外へ出た。外はすでに夜の更けていく時間で人通りもまばらだ。石畳の街路を歩くエミリアの後をクインは黙ってついて歩く。鞆、という意識はまだあるのだ。

「どこ行くんだよ。鞆返せよ」

クインの声にエミリアは少しだけ振り返り、微笑んだ。

「見せたいものがあるの。あなたに見て欲しい」

その瞬間彼女が浮かべた薄い笑みは、それまで見てきた明朗さとは少し毛色の違った淋しげな影に縁取られているように思われた。

クインは何かを言おうとしてやめ、だまって彼女の後を追った。

月が出ている。半分欠けたやわい光が帝都の石畳の隙間を埋める白漆喰を優しい色に浮かばせていて、俯きながら歩いていると水面を歩いているような不思議な幻想があった。微かに眩暈がするのはやはり酔っているせいだろう。世界がゆらゆら、揺れている。

エミリアは時折振り返りながら彼を待ち、呼んだ。もう帰ろう、鞆だけ返して貰ったらつき合う義理なんか無いんだ、と何度も口にしかけてはそれを飲み込んでしまっている。

.....誰でもいいのか。クインは皮肉に唇を歪めて笑う。母さんがいない。ライアンが俺を無視する。一度繋がりそうに思えたリーナとかいう女だって.....結局俺のものじゃない。今夜も誰かのもので、明日もまた違う誰かのものだ。

自分を愛してくれる誰かが欲しい。その残り香、気配のようなものでさえ欲しい。飢えているというほどに渴いている——多分、本当に誰でもいいのだろう。例えば彼の機嫌を取ろうとする客たちや、こんな通りすがりの女にまでいい顔をするほど。

自嘲はやはり胸によい作用はもたらさない。クインがますます無口に黙り込んでいると、エミリアが少年、と彼を呼んだ。

「ここよ。部屋は3階の右」

上がっていくアパートはやや古めの木造で、階段を上がると軋んで鳴った。あまりよい部屋というわけではなさそうだったが、彼女の身につけているものとは相場は釣り合っているだろう。

どうぞ、とエミリアが入っていく部屋に足を入れると、まずむっと鼻につまる薬品の臭いがした。看護学校でも薬独特の臭気はあるが、それとは全く別の系統の臭いだ。

クインが思わず顔をしかめるとエミリアは少し笑って、居間はちょっとまだから我慢してねと囁いた。彼女の言葉の通りにそこは彼女が窓を開けてくれたせいもあって無臭にやや近い。

「ごめんね、絵の定着剤の臭いなの。臭いでしょ？ 慣れないと吐く人もいるくらい」

彼女の苦笑にクインは頷く。しかめ面の彼にエミリアは笑い、厨房の方から水の瓶を持って戻ってきた。差し出されてクインはそれを受け取る。酔いも醒ました方がいいのは分かっていた。

待っててね、とエミリアが一度消え、すぐに手に大きなものを掴んで現れた。絵だ。形や大きさですぐに分かる。

「俺に見せたいのって絵？ それならさっき散々あっちで見たよ」

ふて腐れたような声になったクインに、エミリアは灰かに笑ったようだった。彼の座る窓下の長椅子にぽんと座り、月光に照らされる位置にもたせかける。

「春幻想の、最後の一枚。あそこにあるのは売るための絵だけど、これはアスナに.....妹にあげるための絵よ。定着材がやっと乾いたから、明日にでも梱包して田舎に送ろうと思ってたんだけど、その前にあなたに見せてあげたいって思った」

ふうんと気のない返事をしてクインは彼女の持ってきた絵を見つめた。画廊にあった絵とは確かに何かが違っていた。彼女の絵の特徴である厚い絵の具の塗りはそのままだが、色が違う。淡いなりにしっかりと目に残る色味も幻想の一部であったはずなのに、殆ど色味さえない。辛うじて色はついているものの、春幻想のシリーズにあった夢幻的な色彩の自由な筆致とは言えなかった。

妹であろう少女が春の野を背景に花を胸に抱く構図で、少女は印象的だった瞳をじっと閉ざし

、唇だけで微笑んでいる。表情は柔らかだったが、やはり色数の絶対的な不足のせいで、画廊にあった絵よりも遙かに粗い印象が強い。

クインが黙っていると、彼の隣でエミリアがどう、と優しい声で言った。彼の戸惑いを分かっているような声音であったから、クインは首を振った。

「……画廊にあったやつの方が綺麗だ」

実際、こちらの方が絵の具の塗りが妙に厚いこともあって、ひどく太く粗末な感慨を引き起こした。元々多少筆致の厚い絵であったが、これはそれが顕著すぎて描き殴ったようでさえある。筆の跡もまったく放置したままで、それが粗いという印象を担う大きな一つであった。

「あんまり好きな絵じゃない。画廊にあった方がよかった」

思ったことをそのまま口に乘せる。彼の言葉にエミリアはそうね、と簡単に頷いた。

「多分、みんな同じ事を言うでしょうね。でも、これはこれでいいのよ。妹に見せるために描いた絵だから」

クインは怪訝な視線を彼女に与える。大人という年齢の端によく足をかけようとしている年齢の、尖り始めた顎の線が細い。それが何故かひどく切なくて、クインはふっとそこから目をそらした。彼のその仕草にエミリアはそっと笑った。

「いいの、アスナ……妹のための絵だもの。あの子だけが分かっているよ」

「でも、色だって画廊の方がずっと綺麗だった」

自分の感慨を否定されたような僅かな不服に、むきになってクインは言った。エミリアはだが、いよいよ柔らかにそっと笑った。

「いいのよ。あの子、目は見えないから……」

クインは一瞬きょとんとし、それから徐々に彼女の言葉の意味を悟って呼吸を潜めて深くした。見えないと繰り返すとエミリアはそう、とことさらゆっくり頷いた。それは、とクインは曖昧な居心地悪さを口の中で噛みつぶし、ややあって大変だね、と付け足した。

それを口にしてからその事実の重大さにやっと気付く。エミリアの絵の大きな特徴であるはずの、人物像の表情の優しさや色使いの暖かさ、染みいるような筆致の美しさも、エミリアの肉親が見ることが出来ないと言うのはひどい皮肉である気がした。

クインが黙り込んでしまったのをエミリアは小さく吐息で笑い、彼女自身の目線を粗い粒子で構成される絵へ向けた。

「4年前の流行熱でね……親ももういなかったから医者にも診せてあげられなくて、見えないって気付いた時には遅かった。力のない自分も悔しかったし、何よりあの子が不憫で哀れでずっと泣いたわ。私の絵をとっても好きだって言ってくれたあの子に、もう見せてやる事が出来ないと思った」

エミリアの声はしっかりして、静かに明るかった。クインは絵を見つめる彼女の横顔へ目線をやった。エミリアは彼に視線を合わせ、微笑んだ。それがやはり何の気負いもなく明るいことが不思議だった。

「……この絵はね、だからこうやって見るのよ」

彼女がそう笑った次の瞬間、クインの手に温かなものが重なって彼ははっと肩をいからせようとする。それは既に反射というような早さだった。客のことも、自分の周辺にある思いに任せな

い現実も、彼の手を取ってはくれなかったはずなのに、それは不意に降りてきて彼を動転させる。

大丈夫、と宥める穏やかな声。それに何かが触れて中の神経がゆったりと波を風ぎへ近寄せていくのが分かった。

クインは微かに喘ぐ。触れた箇所が過敏に熱い。肌が発火しているような気がする。けれど動くことさえ出来ないで、ただ震えの上がって来るまま、エミリアの手の温度に動揺しているのがひどく恥ずかしかった。

目を閉じて、と囁くような声があった。クインは瞬きし、そして何かを言おうとして言葉が見つからず、唇を無意味に動かす。エミリアは少し首を傾げ、彼の手を掴んだままで背後に回り、ゆっくり抱き寄せるような仕草でクインの目を後ろからもう片方の手で隠すようにした。

そっと背中に彼女が被さる。声を上げかけてクインはそれを飲み込む。ほぼ同じ位置にある心臓の鼓動が、とく、とく、肌と服の薄い厚みを通して触れ合っているようだ。

「こうして、ね」

エミリアの声が自分の耳すぐ端でした。クインは吐息がかかる距離にやや身震いする。それと指先が絵であろうざらざらした表面に触れるのが同時だった。導かれるままに指先で絵を撫でる——その触感が筆跡の流れを捉えて滑った。

「ここは緑。春の色、新しくて綺麗な草が戻ってくる春」

そっと囁く声が優しい。泣きたい。それだけに触れて泣きたくなるほど優しくて温かい。

「ここは青。やっと晴れた日の眩しい空色、ほら、雲、柔らかい、ふわふわしてる。このなだらかな線は山、ずっと向こうにある山に霞雲がかかっている」

彼女の言葉の通り、指先には山の稜線のような薄い膨らみと、所々途切れるような攪拌された綿のような乱線が分かる。空と彼女が言った箇所は殆ど平らで筆致もほとんど感じ取れない。

雲だと言う場所には確かに雲を表すようなゆるい曲線が脈絡無く配置された、模様のようなものがあつた。

「そして、これが妹。あの子の目、鼻、ここは瞼……睫毛が長くて、ほら……眉の形はこう、肩の線はここ……少しづつ大人になっていくから大分身体も柔らかな線になってる……」

彼女の声と手が導く絵と、告げられる色味が次第に頭の中でぼんやりした絵になっていく。指先の感覚が連れてくる、幻想で形作られていくもう一枚の絵。色を彼女が告げるたびにそれはしっかりした風景のように鮮やかになっていく。意識の中にしか存在しない、鮮明で美しい絵。

髪よ、と指がたどる道筋のうねるような流れと豊かな情感、殆ど官能的ですらある輪郭。

「——見える？　これがあの子の見る絵よ……」

エミリアの声にクインはゆっくり頷いた。彼女の手が離れる。

背後からそっと気配が遠くなって、クインはやっと目を開けてエミリアを見た。彼女はやはり笑っていた。その笑顔がいつにもまして切なくて、ぬくやかで、ひどく優しい気がした。

「……あの子が見えないって分かって、私、本当に悲しかった。あの子のいないところでずっと泣いてた。絵も……芸術院への推薦を貰えそうだったけど、やめて働こうとしたわ。でもあの子がこうやって」

エミリアは言いながら手を自分の顔にあて、指先で造形を確かめるように撫でた。

「私の顔は見えないけど、どんな顔をしてるかは分かるって言ってくれた。姉さんが笑ったり泣いたりしてるのが良く分かるって、あの子が……」

僅かにエミリアの声が歪んだ。クインが目を向けると、月明かりのぼやけた視界の中で彼女は淡く泣きながら、それでも彼に微笑んだ。

クインは当惑と怯みの中間にある痛ましさに揺すられて首を振った。エミリア、と言いかけると彼女は首を振ってエミル、と言った。

「……エミル……」

呟くように言うと、彼女は頷いた。エミル、とクインは繰り返した。エミリアは微笑みながら首を振り、指で軽く涙をこそいだ。その口元がやはりまだ笑っている。仄かで温かい、彼女の絵と同じ、人の肌の温度と心の熱を教えてくれる笑みだ。

——唇に触れたい。彼女の柔らかで温かなそこに触れたい。クインは唐突にそんなことを思い、身体をずらしかけてふとそれを止めた。キスは誰かと寝るより重要なことだという娼婦の世界の常識が不意に現れて彼の腕を掴んだのだ。それが特殊な条件の特殊な約束だとは知っていても、一瞬のためらいの時間が衝動を冷えさせるのには十分だった。

男女どちらでも寝ることに抵抗はない。それは既に彼にとって定理のような身体の反射に過ぎない。けれどその先に来るはずの、簡単な仕草が重い。特別なことなのだという感覚が自分の身に染みすぎていて、キス一つがどうしても出来なかった。

クインは僅かに俯き、エミリアの絵に指を這わせた。彼女が盲目の妹のために描く絵はやはり地味な色彩とぼってりした画材の厚みでどうしても垢抜けない。けれど、目を閉じて空想に委ねれば驚くほど豊かな情景を示した。

「……ねえ、少年。妹が……その時言ってくれたの。見えなくても見えるものがあるし、無くしたものの代わりに拾ったものもあるからいいって、気にしないでって、絵を続けて欲しいって、私の絵があの子の希望だって……」

「希望……」

クインは呻くような声で呟いた。その言葉を生まれて初めて聞いた気がした。希望、と繰り返すとそれが尚更痛くきつく胸に落ちた。

「少年、希望は自分で探さなくてははいけないわ。あの子の希望が私の絵なら、私の希望はあの子なのよ。アスナがいるから描き続ける事が出来る。あの子が私の絵を自分の未来だと言ってくれたから私、ずっとずっと描くわ、描き続ける。あの子の為に」

だから、とエミリアは続けた。

「あなたの希望を探して。お願い、辛そうな顔をしないで。あなたが無理に笑ったり喋ったりしてるのを見ると、居たたまれないほど私も辛いわ……」

クインは臓腑の奥を突き刺されたようにして深く呼吸しながら喘いだ。胸が痛い。何故という疑問も、煩わしいという感情も、湧いてこない。溢れてくるのは涙だ。自分でも訳が分からない衝動と激しい高ぶりが、そんな形になって身体の中から吹き上がってくる。

「エミル……」

喘ぎながらクインはこぼれてくる涙を手でぐいぐい拭い、口元を押さえた。泣いている時は言

葉も声も役に立たない。エミリアがゆっくりと彼の額にばらばらにかかる後れ毛を払い、そっといたわるように抱きしめた。

彼女の体温。そして髪についている定着剤と絵の具の微かな匂い。それにどっと寄せる安堵を覚えてクインは彼女にしがみついた。いつかあった、こんなぬくい腕の中がやっと自分に帰ってきた気がした。

涙が落ち着くまで長いことそうしていて、やがて身体が自然に離れた時、その懐かしさや嬉しさにクインはつい笑みをこぼした。エミリアの気配がふっと密やかになる。怪訝にそちらを見ると、彼女はじっとクインを見ていた。視線の強さが出会った夜と同じ色だ。

「綺麗ね——本当に綺麗」

呟いたエミリアにクインはゆるく首を振った。

「俺は……そんなんじゃない……誰かにそう言って貰えるほど何も……無いから」

「いいえ。あなた綺麗だわ。とても……綺麗。あなたの笑った顔、もっと見たい。あなたを描きたいわ……」

エミリアはそんな事を言って淋しく笑った。その先を続けないことでクインも事情を分かった。女客は二度と同じ相手を取らないのが決まりだ。エミリアがチアロにつてを取っても彼はその理由であっさり撥ねるだろう。……けれど、抜け道もある。

「俺、時々来ても……いいよ……」

それでもこんな言い方しかできない自分を苛立たしさと苦笑の両方で眺め回しながらクインは言った。これは恐らく重大な違反の一つになるだろう。ライアンは女客を取らせること自体にあまり良い色を示さなかった。

だからこそ、意味があることもある。これがあてつけなのか反発なのか、……それともエミリアへ向かう何か特別の前触れなのか、まだよく分からないけれど。

彼の言葉にエミリアは目をしばたき、ついで嬉しそうに笑った。いいの、と聞かれていいさと答える。いずれにしろ、彼女といればここ最近自分を取り巻いていた嫌な空気とは離れていられるのだ。

ありがとう、というエミリアに首を振り、クインはもう一度絵に目をやった。塗り厚い絵はやはり重たそうな色の印象でしかなかった。

「いつか、ちゃんとあなたを描けたら……その絵をあなたにあげる。妹のためにこの絵を描いたように、いつかあなたのためにあなたを表す絵を描くわ、約束する……」

エミリアの言葉にクインは頷いた。その瞬間にこぼれてきたのはやはり温かな感慨だった。

凍ったようだった胸を、ぬるくほどかしてゆく、春の日射し。新緑の隙間から降る木漏れ日に似た、眩しい季節の前触れ。クインはそんな幻想が一時脳裏をよぎるのに任せて目を閉じ、エミル、と言った。

「俺の絵が出来たら見せてよ。見たいんだ」

勿論、とエミリアが深く頷いた。

それを見届けて、もう帰るよ、とクインは立ち上がった。酔いも醒めて来た頃合いであったし、今日は看護学校と言うことでタリアを抜けてきている。あまり遅くなってはチアロに心配も掛

けるし不審を抱かせたくもなかった。

今日が最後じゃない。それを思うだけで心浮かれるほど嬉しい。鞆を受け取ってアパートの外へ出ると、既に夜は深く人通りは殆ど無かった。月は変わらずに石畳に光の影を落としている。

またね、とエミリアが彼の頬に軽くキスをした。それに照れたように笑い、クインはまた、と繰り返す。

数歩行って振り返り、まだそこにいたエミリアにクインは言った。

「——クイン」

「え？」

「みんな、俺をそう呼んでる」

それだけ言って、クインはぱっと駆けだした。気恥ずかしくて返事は待てない。その背後からまた、と叫ぶエミリアの声が弾んでいるのを知って、彼は唇をゆるめて笑みを作った。

吐息のように細く、月光のように淡い、心底から浮いてきたほころぶ笑みを。

ゆっくりと外周を回っていくと、さびくれた門構えが見えた。チアロは足を止めて彼の記憶の中の過去と照らし合わせ、やがて頷く。確かここで良かったはずだ。もう……4年ほど前のことであったが、おぼろながら所在地を覚えていた自分にほんと安堵する。

鉄の飾り格子になった門扉を軽く押して中へはいると、庭にいた少年たちが一斉に稽古をやめてチアロを見、そして彼の背後の子供を見た。……身売りだと思われているのだろうか、視線が強い。チアロは苦笑し、彼に付いてきた子供の額をつついた。

「ショワ、外で待ってろ」

子供はやや不満げに唇を尖らせるがチアロの言葉に逆らいはしない。チアロがライアンの子飼いと呼ばれているように、ショワは彼の一番近い部下であり、弟のような存在でもあった。

ショワが門扉の方へ戻っていくのを見据えてから、チアロは視線を前へ戻した。ぴしりという鞭が空気を割いて石畳を叩く音がしたのだ。その音に弾かれたように子供たちがまた稽古を再開した。殺陣、軽業、そして芝居の台詞と立ち回り。子供を監督する鞭をうち下ろした老人に向かってチアロは軽く会釈し、その側へ歩いた。

「何か用かね。うちは今は新しい子供は要らないよ」

老人は椅子に腰を下ろしたまま、ぼそぼそと言った。チアロは首を振った。

「少し調べものをしてるんだ……もう10年くらい前に、この一座にライアンって子供がいたと思うんだけど」

「さて、年を取ると耄碌していかん」

微かに空気の抜けた声で笑うと老人は再び石の床に鞭を叩き、何人かの名前を続けて叫んだ。

「何度教えたらいんだ、この馬鹿どもが！」

名前を呼ばれた子供たちが微かに身を硬くする。チアロはそれに首をすくめた。ここがライアンの育った場所だ。少なくとも6才を過ぎた頃から12、3まで彼はここで活劇芝居の役者をしていた——この子供たちと同じように些細な失敗に怒鳴られ、鞭で打たれながら。

チアロはさっと彼らの目に走った怯えに気付き、お願いだから、となどらかな声を出した。言いながら内懐から10ジル紙幣を数枚掴みだし、老人の手に押しつける。それをさっと袖の中にしまい込み、老人はチアロをややすがめになりながら見上げた。

誰を捜してるって、と聞き直されて、ライアンの名とこの芸団で活劇の殺陣役者をしていたことを告げる。老人はチアロの説明に何度か頷きながらぼつぼつと返答した。

——ライアンだってね？ ……イダルガン役の活劇役者か……ああ、そういやそんなのもいた気がするな……まあ、お待ち。帳簿を探してあげようね。

そうして老人が席を立ち、奥にある雑居用らしい建物へ消えていく。子供たちの殺陣の気迫が途端にゆるまって、チアロははっきりした苦笑になった。鬼の見ていない間にはやはり気が楽になるのはどこの世界も共通らしい。

芝居の稽古を何となく視界に入れながら、チアロは長い溜息をつく。ライアンの履歴は大体を本人から、何かの折りに断片的に聞いたものをつなぎ合わせて理解している。彼はこの一座から老人の稚児に売られ、2年近くを慰み者に甘んじた後逃亡し、チェインに転がり込んできたはずだ。

この劇団だと言うことには間違いがない。……何故なら4年前にライアン自身がここへ来たのにチアロも同行したのだから。あの時、自分もショウと同じように外へ出されてしまった。ライアンに付いている自分を、子供たちがうろんな目つきで見たのだろう。そんなことが今更分かる。

ライアンが何をしに来たのか、その時には教えて貰えなかった。けれど、今は知っている——多分、正確に察している。今チアロがここへ訪ねてきたのと同じ理由によって、ライアンは4年前にここへ来たのだ。

お願いよ、という声が遠い場所から蘇ってくる。チアロは吐息を長く落とした。彼女のことは特別だ。気位が高く、気質が脆く、鼻っ柱が強いくせに折れてしまいそうなほど弱い。彼女のことを思うたびに新しい息吹のようなものが胸の底に湧く。一目見た瞬間から何かに撲たれたように彼女のことがばかりだ。

恋だの愛だのという小難しい理屈は要らない。ただまっすぐに、彼女だけに視線も思いも向かっている——好き、なのだ。

(お願いよ、ねっ、いいでしょ？ あたしのこと好きなんでしょ？)

利用されているのだということが分からないほど馬鹿でもないが、彼女がそう思いたいならそれでも良かった。彼女のことに限る限り、馬鹿だと言われても構わない。

要するに、何だっていいのだ。彼女が自分に頼ったり甘えたりしてくれれば、それがどんなにあざとい仕打ちであっても、誰かの身代わりであっても、八つ当たりであったとしても嬉しい。それが恋だ。少なくとも、チアロにとっては。

シアナ、と彼女の名を呟くとそれだけで嬉しくなってくるのだから本当に馬鹿なのかも知れない。この名前は遊女としての源氏名だから、本名は別にある。それを教えて貰えるのは特別の印で、この調べものが終われば与えて貰えるはずであった。

(兄がね、いるの。会ったことはないんだけど、母がそう言ってたから……兄を捜して、お願い。年は私より7才上で、名前は……)

シアナはややためらうように言葉を濁し、そして名前はライアンよ、と付け加えた。シアナの7才年長というのなら、それはチアロの主人であるライアンと同年齢であったはずだった。

ライアン、と聞き返すとシアナは深く頷いてお願いよ、と幾分重い声になった。

(そう。つまりね、ライアンが私の兄なのかどうか、調べて欲しいの。私の母の名前はシルナ、南国沿海州の出身で言葉が片言だったから、母のことを聞いて貰えれば分かるかも知れないわ——お願いよ、ねえ、こんなこと頼めるのチアロくらいしかいないの)

最後に追加された言葉が目的を達しようとするあまりの無意識の媚びであったせいでチアロは反射的に頷いてしまったが、落ち着いてよく考えてみればこれも妙な話であった。

ライアンはずっと彼女に通い続けている。シアナもライアンに夢中だ。けれど彼女は自分たちの間に血縁があるかどうか気がかかるらしい。……ライアンとの絆を確かめようとしているのだろうか、それとも兄妹であったら関係が劇的に変化するのか。

妹である方がチアロには都合が良さそうだった。気になる、というならば血縁が証明できればシアナがライアンを諦めるという選択が浮上する。シアナはそれを迷っているのではないだろうか。

だがライアンはこの問いの答えを知っているはずだ。4年前に彼も同じ疑問を抱いてここへ、自らの母親の足跡を求めて立ち寄っている……恐らく。そしてそのまま関係を解消することなく続けているのなら、シアナは彼の妹ではない。概測をどこことなく掴みながらも確信には至らないため、この芸団まで足を向けているのだが、回答は知っている気も胸のどこかにあった。

やがて戻ってきた老人が、子供たちの様子をさっと一瞥して帳簿をめくり始める。古びた紙のカビ臭さが僅かに漂ってくる程度の時間が過ぎて、老人の指先が一カ所でとまった。

「この子だな……帝歴1978年9月、ライアン、6才」

そうですね、と頷いたチアロにだが老人は自分で首を振った。違う違う、と呟き、その指がやや遅れた記録を辿る。この子だな、と指された帳簿には名前がなかった。チアロが訝しく老人を見ると、老人の方はひょいという仕草で肩をすくめた。このライアンって子はこっちの子を買う3日くらい前に死んだんだよと薄く笑い、付け加える。

「名前は母親が売りに来た時に聞いたはずだったが、忘れちゃったんでね。だからこのライアンって子の名前をそのままつけた……」

チアロは僅かに眉をひそめる。この老人の適当さ加減はここにいる子供たちの個々への関心など無いことの証明であった。金のない家ほど子供が多い。仕事を手伝わせたり、最初から無戸籍にしておいて売り払ったり、子供など物と同じなのだ。少なくともこの老人や、老人に子供を売った親にとっては。

これに多少の不快を感じるのは、チアロにとっての父親が、決して理不尽で憎むべき相手でなかったことが幸いしているのだろう。チアロは気分を変えるためにそう、と務めて明るい声を出した。

「ねえ、じゃあこっちの子がイダルガン役をやってたライアンだよな？ 12か3でどっかの変態に稚児に売られた……」

「人間きの悪いことを言うんじゃない、養子だよ、養子」

チアロは今度は苦笑して分かったよ、と老人の詭弁に合わせた。実際のことはライアンの少ない言葉数の中から拾い上げた嫌悪感で察しているが、ここで実体のことを論議しても始まらないだろう。老人は養子だともう一度念を押し、それから頷いた。最前のチアロの言葉への肯定であるらしい。ではこの名無き子供がチアロの主人であるライアンであろう。

「じゃ、この子の母親なんだけどさ……異国人って話、ない？」

ここでシアナの記憶と合致するならば、もう少し詳しく調べても良かった。これが噛み合わなければ他人だと断定も出来る。老人は怪訝に眉をひくつかせ、首を振った。

「いいや、異国人から子供を買ったことなど一度もないよ。言葉がおかしいと芝居に使えないからな」

一瞬置いてチアロは頷いた。老人の言い分には道理があった。軽業なども見せてはいるが、この芸団の一番の出し物はやはり芝居だ。台詞がおかしいのは具合が悪いのだろう。

間違いがないかを確認してチアロは10ジル札を老人に渡し、芸団を出た。門外で退屈そうにしていたショワが駆け寄ってくる。

「もういいの、チアロ？ 何の用だった？」

「いや、お前には関係ないことだよ」

軽く子供の柔らかい髪を撫でてチアロは多少巻き起こってきた感慨のために空を見上げた。

ライアンとシアナは兄妹ではなかった。そうではないかと推測していたものの、呆気ないほど簡単に回答は与えられた。……けれど、これをシアナに伝えたら……どうだろう。

彼女は今でもライアンに夢中だ。それに嫉妬さえ興らないのは自分もライアンを好きで、深く尊崇しているからでもあろう。彼の良くない所も沢山知っているが、誉めろと言われたら幾らでも出来る自信がある。

けれど、嫉妬しないことと希望を持たないことは違う。いつの日にか、シアナがライアンに向けるような熱っぽく潤んだような瞳の中に自分を見たい。彼女のためになら、文字通り何でも出来るとも思う。

そうやってかき口説いても何度も言葉を重ねても、身体さえ添わせていたって彼女の美しい翡翠色の目はいつでもチアロを通り越し、ライアンを見ている。兄妹でないと教えてしまったら、その目は二度とそこから動かないかもしれない……

チアロは頬を僅かに苦笑に歪め、薄い色の髪をくしゃくしゃかき回した。教えてしまえばきっと一生彼女の都合のいい友人程度のものから脱却することが出来ない。けれど黙っているのは彼女が多少なりとも自分に向けてくれた信頼を裏切るのと同じ意味だ。

告げるべきなのかどうかを考えながら、それでも生来の多弁な性質のままショワと雑談に笑い合いながらチアロはタリアの境界門を過ぎた。黄昏近い境界門の付近はこれからこの歓楽街で一夜を楽しもうという魂胆の人々によってごったがえしている。

どうするかは彼女の顔を見てから考えよう、とチアロはショワに根城へ戻っているように言いかけ、ふと視線を彷徨させた。既視感が視界の端によぎったのだ。

チアロは反射的に人波の気配に自分を埋めた。これは習性と言うべきだった。視線だけでせわしなく気配の方向をまさぐっていると、細い身体が目に入った。

——今日は女装か。

チアロはタリアに流入してくる流れに逆らって外へ行く、すらりとした立ち姿を見つめた。髪は適当に編んで後ろでまとめ、夏向きの淡い色のワンピースに編革のサンダルを形良い足に引っかけ、歩いていく。すれ違う人々が驚愕と賛嘆と、畏怖にも似た目つきで振り返るのが判で押したように同じで苦笑を誘う。華やかで匂い立つように美しい面差しを掘り起こし、チアロは眩しいような圧迫で目を細めた。

初めて会った時の驚愕が、彼を見て目を瞞る人々の仕草に呼び戻ってくる。

「仕事っすかね」

ショワの言葉に、チアロは我に返った。今日は仕事はなかったはずだ。本人が少し休みが欲しいと言っていたし、先月から看護学校にも通い始めているからそれに配慮する意味でチアロは頷いている。

学校か、と思いかけてチアロは首を振った。授業は週に2度だが、仕事と重ねたくないという彼の言葉を受け入れ、毎週彼と予定を連絡し合っている。今日は一日何もない日だ。仕事は入れた覚えがないし、授業は確か、明日でなかったろうか。……それに、彼は学校には確か男のままの服装で通っていたはずであった。

「ショワ、奴を尾行しろ。とりあえず、どこへ行ったのかだけ分かればいい」

さっと言いつけ、持っていた20ジルの札と小銭を子供に押しつける。ショワはちらっと過ぎていく背中を見つめ、でも、と言いかけた。それを遮り、チアロは大丈夫だと素早く言う。

「奴はこういう事には素人だ、お前が奴をじろじろ眺め回さない限り、気付かない」

尾行には通常二人以上があたる。ずっと同じ人間が視界にいれば気が付くことがあるし、連絡をしやすいという利点もあって、普通はそうするのだ。

だが、それはないとチアロは即断した。ショワに言った通り、クインはこうしたことには疎く、反応が鈍い。それは仕方がないことだろう。ライアンは彼を仲間に引き込む気がなく、チアロも同じだ。

仲間として迎えるのなら教えていくべきいくつかのことを、だから彼には伝えていない……例えば、尾行のまきかただとか。つまりショワ一人でも十分だ。チアロは既に身長が平均よりも抜けていて、目立つ部類に入るし、顔見知りには適任ではないだろう。

雑踏の中からどうやらクインは抜けたらしい。人の吐息や視線の方向がばらけて戻ったことですぐに分かった。チアロも目立つがクインはもっと人目を引く。一瞬見失ったとしても、人の気配の方向で探し出せるほどに。

チアロは肩をすくめてチェインへ戻り、彼の根城となっている煉瓦屋敷の地下から水路に降りた。そこを経由してクインの住処であるアパートへ回る。合い鍵は持っているのだ。

書斎の机近くには、登校時に使っている鞆が置かれていた。相変わらず、適当に積み上げた本と訳の分からない書き付けが散乱している汚い部屋だ。

机の上の意味のない単語の書取、専門用語の辞書だろうか分厚い本にびっしり挟まれた紙片。それらをそっと動かして、チアロは引き出しを開けた。こちら整理整頓とは無縁に文具が散らばっている。

引き出しをゆっくり滑らせて、中の物の位置をずらさないように気を使いながら手を奥へ突っ込むと、やはり何かが指先に触れた。隠し物は引き出しの奥、というのは本当に常套だ。

紙片のような物を指でつまんで引き出すと、それは一枚のカードだった。幻想的な青い色は海なのだろうか、そこに微笑む天使と群れ泳ぐ魚を配した美しい絵が印刷されている。

裏を返すと地図と日付があった。父親から最低限の読み書きは教えられていたせいで、チアロはごく簡単な構文は理解できる。いくつかの単語は読めないが、絵の展覧会の案内状だろうということは察しが付いた。

絵か、とチアロは少し眉を寄せる。……確かクインの最近の仕事の中に、絵を描くとかいう若い女がいたはずだ。オルヴィから仔細の申し送りを受けた時に、そんなことを聞いた気がする。

それとすぐに結びつけて考えるのは性急すぎると思うけれど。

チアロは溜息になった。カードを元の場所に戻し、違和感のないように慎重に引き出しを閉めて居間へ戻る。一応の用心のために切っておいた明かりをつけて、ゆるく首を傾げながら長椅子に身を預けた。

……クインの様子は確かにこの半月ほどおかしい。明らかに浮かれている。それにはとうに気付いていたが、元来気性の上下の激しい子供のことであるから悪い時があればよい時もあるのだ

と考えてきた。

.....だが、チアロに何も言わずタリアの外へ出かけていくとなると、何かの秘密を持っていると思った方がいいだろう。

折りもあり、ライアンが居ない。彼はオルヴィを連れてシタルキアの北東、エリオン王国に足を向けており、あと1ヶ月は戻ってこないだろう。タリアを離れる直前にクインとまたひどくやりあったらしく、そんな話をライアンからは聞いた。留守中は頼むと言われて頷いた記憶がある。

まずいよな、とチアロは額に落ちる髪をかき上げるついでにくしゃりとかき回した。ひどく明るくて楽しげなクインの表情には確かに安堵も覚えるのだが、地に足の着いていない浮かれ方は.....恋だろうか。チアロは顔を一瞬歪め、自分の表情が渋いことに遅れて気付いた。それは彼のためにいいことだ、とは思う。けれど彼のために素直に喜んでやることは出来ない。

クインはライアンのもので、だから許容されていることが沢山ある。ライアンの掌握する子供たちの幹部と呼ばれているのは現在チアロを含めて6人だが、クインに多少なりとも好意を抱いているのはチアロくらいのものだ。

ディーもノイエもカインも彼を疎ましく思っているし、残る二人、イシュラやカリスに至ってはライアンが彼を所有することにさえ不満げな色を漂わせている。無論チェインの王たるライアンに面と向かって異を唱えはしないが、何か不祥事があった時にはこぞって処分を吠えるだろう。

6幹部に更に一人増えるという噂もちらほらあるが、そうなれば事態は更に悪くなるのは明白だ。追加が囁かれているのはオルヴィという女.....クインの目下の天敵。

チアロはちゃんと肩をすくめた。ショワの報告を待たなくてはいけないしこれが杞憂であると思いたいが、常に事態の想定はしておくべきだった。

恋人が出来たなら、それはクインにとってはきっと良いことのはずだった。これまでのように思いを預けようとライアンに寄りかかっては拒絶され、その結果荒れるだけ荒れているよりは遙かにましだ。

けれどそれを喜べない。ライアンはなんて言うだろうとチアロは溜息になった。彼は気に入らないのに決まっているからだ。それは所有欲というよりも体面の問題で、チェイン王としての顔を潰されることがあれば、タリア王アルードへの示しも具合が悪い。そもそもクインのことはアルードには隠したいはずだ。いずれ、クインは何事かの切り札にも使えとライアンは考えている。

何が起きているのかがはっきりするまでは彼の様子を逐一観察するしかないが、もし外の世界に恋人が出来たなら.....

チアロは難しい吐息を落とした。その時は彼に、忠告をしなくてはならない。ライアンのいない時機であるのは却って好機だ、忠告を素直に聞いてくれたら自分の胸の中にだけ、収めておけばいいのだし。

そんな言い訳を胸でいじりながら、チアロは嫌な懸念が自分から一向に離れていかないことに舌打ちをした。

ぼんやりした光景には色がなかった。薄い煙幕のような白黒の世界に、ぼやけた焦点の格子木が見えている。

ああ、これは夢だ。それを知覚した途端、ぬるく体が溶けていきそうな感覚が興った。視点が低い。まだ幼い自分の見ていた、遠く古い目線の焼き直し。格子の向こう側にもつれあった男女が見える。のたうつように身をよじり、意味のないあやふやな言葉を叫んでいる女と、それを殆ど殺すかのような勢いで攻め立てている男、右肩の傷。

視点はゆっくりと格子の中へ分け入って男の右肩を視線で撫で、女の傍にすんと座り込んだようだった。女が自分の手を握る。一瞬ぎくりとするほど熱い。

(ねえ、見てて、見ていて、ねえ、可愛い子ねえ、どこから来たの?)

浮かされたように口走る女に視線が上下する。自分は頷いたらしい。

どこから来たのという問いに答えるように、子供特有のふっくらした手が上がり、女の腹を指した。自分の唇が動いて何かを言ったようだった。その何が良かったのか、女がけたたましく笑う。それに合わせて男が笑っている。

笑う。笑う。嘲り、蔑み、侮る声が幾重にも、ぐるぐる、めまぐるしく、ひたすらに、笑う笑う笑う笑う——……

これは夢だ。強い声が胸の奥から囁いている。それに導かれるように決然と目を開けると、そこは柔らかな光の中だった。窓から淡い光線が差し込んで、白いシーツの波間に優しい灰色の影を作っている。

それを目にした瞬間、これが現実だと身体が理解したようだった。すうっと肩から力が抜けて、自分がひどく身を強張らせていたことがやっと分かる。

長い溜息を肺から押し出していると、隣にいた男が身じろぎした。起きたかと言われ、目をしばたいて素っ気なく頷き返すと男は腕を寝台傍の小卓に伸ばした。煙草だろう。何度かこの男と共に朝を迎えたことがあるから、寝起きの最初が一服から始まることは知っていた。

身を起こしてその通りに煙草を始めるライアンの仕草はもの慣れていて、そもそもの印象の通り、素っ気ない。けれど、それは自分も同じだ。何もかもは過去へ置いてきた。今まで寝てきた全ての男たちも自分に同じものを見て、苦笑したではないか。

終わればすぐに醒める女。痕跡も空気も全てを呆気なく消してしまう奴——つまり、なつかない犬。

そんな喩えを思い出して、オルヴィはそっと視線を伏せた。考え事をする時は、ことさら無表情になる。それが子供の頃からの韜晦の手段であり、母とその周辺の男たちへの目眩ましであった。

オルヴィは薄い毛布の下で身体的位置を変える。枕に肩まで押しつけるようにして、まだまどろみに半分ほど漂っている気分のままに目を閉じた。眠るかと思われて目を閉じたままで首を振り、少し、と呟いた。ライアンの返答はない。ないが、それは了承の沈黙であるように思われた。

母の夢を見るのは久しぶりだとオルヴィはまだ脳裏に鮮明に残るそれを、じっと見つめる。古ぼけた格子棚は母の店、シタルキア南部の都市メーリンの、安い妓楼の立ち並ぶ地域の更に隅に

オルヴィは8才まで育った。特段美少女ということでもなかったため客には適当に邪険にされながら成長したが、その生活の終わりは母の人生の終わりでもあった。

だらしのない男に惚れ、男の言うままに麻薬に手を出し、最期の血の一滴までも啜り尽くされて死んだ母。最後にはオルヴィのことさえ分からなかった。中毒のせいで濁った白目でぎょろりと娘を見て、どこから来たのと同じ事を繰り返し聞いた。

あの草をやる奴は馬鹿だ。馬鹿だから踏み込むのか、あの草の見せる胸の悪くなるような幻影が馬鹿にするのかは知らないが、あんなものに溺れるやつは生きていく価値なんかありはしない。死ねばいい。母のように惨めに。

僅かに眉根を寄せて深い溜息をつく。母親の死んだ後は債権者によってタリアの非組合の娼窟へ送られ、8才の夜から客を取った。その娼窟には当時の自分よりも更に幼い少女もいたから、そうした好みの客専門だったのだろう。

12の時にその娼窟の主人も借財のせいで逃げ、すぐに掴まり、自分たちの見ている前でなぶり殺しにされた。それまで奇妙にねっとりした声音で自分たちを扱っていた男が絶叫と苦痛にのたうち、緩慢に死んでいくのをじっと眺めながら、オルヴィはひたすら口の中で同じ事を呟いていた。

——私は石だ。石になろう。何も思わず感じない石だ。石になろう、石になろう……

転売された先の娼窟でも、オルヴィはあまり売れない女だった。笑わない、愛想も言わない、もの暗い表情の女はやはり敬遠されるのだった。とびきり美しい面立ちであれば違ったろうが、生憎そんなものは持ち合わせていない。

あまりに売上が悪くてその娼窟からたたき出されたのが17の時、そのままオルヴィは迷うことなくチェーンに足を踏み入れた。タリアの少年王のことは時折聞いて知っていたし、娼窟で知った数人の顔なじみもいる。あまり不安はなかった。チェーンに女は珍しく、そのせいで数度は手酷い目にもあったが、それはオルヴィの中に決定的な傷を残さなかった。

——私は石だ。何も感じない石。

それが全てを傍観するための呪文だった。それさえ胸の中で呟いていれば、やがて災厄は遠くなった。いくつかの傷、些細な諍い、保険のために寝てきた少年たち。そんなあやふやなつての最後に立っていたのがチェーンの若い王だった。王という古めかしい言葉の持つ重い澱みを確かに感じた相手。

お前と似ているだろうと皮肉を言って笑っていたのはどの幹部だったろうか。あるいは全員だったかも知れない。オルヴィがライアンの人であることは周知のことであり、それ故に一段蔑まれていることも知っている。幹部たちの中で一番馴染みがあるのはチアロだが、彼にしたところで腹の中でどう思っているか知れたものではないだろう。

無論ライアンと寝たのは単なる保険だ。自分の足場を僅かにでも確保するためのことで、それ以上ではなかった——はずなのに。

毛布の中でオルヴィは身じろぎし、右耳の貴石に触れた。一体何が起こってライアンがこれを自分に寄越したのか全く見当が付かない。宝石には詳しくないが、色の濃い石は高いと聞いているし、タリア王からの下賜品だとライアンが言っていたはずだ。安い品ではあるまい。

そのことを思う時、オルヴィはひどくせわしない気持ちになる。土台ライアンから何かの形あ

るものを貰う、ということ自体が違和感なのだ。彼は単に自分を便利な道具のように扱っていたはずだった。少なくとも、最初の頃はそうだった。

それがどうしてこんな宝石になって戻ってくるのか、それが何故なのか、どう判断していいのかわからない。有り体に言うならば、面食らっている。一体ライアンは自分をなんだと思っているのだろうか？

そこまできてオルヴィは自問の馬鹿馬鹿しさにさっと頬を歪めた。ライアンにとって一番大切な女は妓楼の中にいるはずだった。彼の視線をもう長く独占しているというその遊女の名前も顔もオルヴィは知らない。妓楼での宴席には正直なところ自分の居場所があるとは思えなかったし、ライアンも自分に来いとは言わなかった。

知らなくていい。オルヴィはそっと頷く。多分、知らない方がよいことなのだ、これは。この奇妙な怖れがどこから来るのかも、考えるな。

——私は石だ。何も感じない、何も思わない、ただの石くれ。

胸の中に呟き続けていると、かつかつという硬い音がした。煙管の灰切りだろう。気配は再び火種石をいじっているからもう一服というところか。

既に神経は覚醒へ向かっていて、目を閉じていても眠りに落ちることはなさそうだった。オルヴィはゆっくり体を起こし、ばらばらに落ちてきた髪をかき上げる。横目でちらりとライアンを見ると、彼の方はゆるくくわえた煙管の先に火種を移すところだった。

面伏せた瞼のくっきりした外殻線、煙管を撫でる整った指先。あの手はいつでもひんやりと冷たい。ライアンはいつもと変わらぬ無表情のまま、煙草を繰り返している。深い呼吸にずっしりと重い存在感があった。他人と同じ事をしていてさえ、身から漂い始める重い威圧がある。

これは確かに美しい男であった。力ある雄にだけ現れる薄紗のような煌めきが時折、はっとさせる。そもそも役者のような整った面差しでもあるはずだが、彼の身に付いた空気に比すれば全く目立たない付属物であった。

それとも、とオルヴィはふと思う。ライアンの面輪に大して感慨を強めないのは更に美しい顔貌を知っているからかもしれない。美貌というならばあの少年であることは間違いがないのだから。

そしてオルヴィは渋面になった。元からあの少年はオルヴィを気に入らなかった。何故始めから悪意で迎えられたのかは分かる。彼はライアンの関心を引きたくてたまらない上に、チェインの少年たちとは折り合いが悪い。オルヴィもその一翼に見えていただろうし、いつ頃からか更に憎まれるようになった。誰かから漏れたのか勘付いたのか、オルヴィがライアンの愛人であることを知ったのだろう。

いや、元から気に入らなかったのは自分も同じだ。最初にライアンに連れて行かれたアパートで自分を見た少年の目が、ざっと一瞥した後にぬるい軽蔑へ変わったのは確かに見た気がする。取るに足らない相手、まったく自分の敵ではないという表情だった。

嫌な奴。それがクインに最初感じた感触であり、時間を経過して接触が増えるほどそれは強まっていった。

確かにあの美しい面輪は特別の産物だ。一つ一つの表情や仕草でさえ、それがどんなに乱暴で

斜に構えた偽悪であっても、目を奪うほど美しい。けれどその美貌を鼻に掛けた態度や人を小馬鹿にしたような口調はどうしても腹に据えかねる。

だから時折はライアンとの関係を盾にとって彼をからかう。そうすると透けるほど白い肌がさっと怒りのために紅潮するのだ。それさえ美の範疇にあるのはさすがであるかも知れなかったが、屈辱感さえ口に出来ない品高さが少年を荒らすことは予測が立てやすかった。

ふん、とオルヴィは唇だけで笑う。そんな笑い方がライアンに似ているとチアロが以前苦笑していたはずだった。似ているだろうか、とふと湧いた疑問をこね回していると、これだけは確かに似たような吐息がぬるく落とされるのを聞いた。

「……あれのことを考えているな」

ライアンの表情はぬるい。オルヴィは目線だけで肯定した。

「あまり嫌味な客を選ぶな、奴がどういう客が気に食わないかくらいは知っているだろう」

その作為はとうに知れていたようであった。オルヴィは肩をすくめ、返答をしない。そもそもあちらも気に入らないという理由だけで当日でも平気で撥ねつけるのだから、オルヴィだけが不興を買うのは公平でなかった。

「不満か？　だが、奴を荒れさせることは感心しない」

「あの子が私を嫌いなんだ。何故好かれるようにしなくてはいけない」

「機嫌は取らなくてもいい、配慮してやれと言っている」

「同じ意味だ」

オルヴィは短く返答し、寝台から降りた。裸のまま部屋を横切り、適当な服を拾ってかぶる。

エリオンはシタルキアの北東に位置する国で、夏近いとはいえ裸身だと肌が冷えた。服の内側から小さな薬包が転がり落ちるのに目を留め、オルヴィはそれを拾いあげる。

「……煙草にでも入れたらどう、ライアン？」

当てつけの嫌味を呟いて彼にそれを放り投げる。寝台の上にどうにか届いた薬包をライアンはひらき、灰皿へこぼした。微かに鼻を突く、甘い匂い。エリオンの裏の市場で高価に取り引きされている麻薬、その精製された顆粒はどの種類でも多少の差はあれ、甘い匂いをしている。

エリオンまで出向いているのはこの麻薬の以前の取引筋との契約の為だ。彼がアルードから下賜された麻薬筋は殆どそのままライアンの手元へ収まったが、重量の単価や取引のための符丁などは一度打ち合わせなくてはならない。

いくつかは別の取引先からの申し出もあるようで、実物は吟味しなくてはならないしその元締めとも顔を繋いでおく必要があるだろう。自分が伴われてきたのはその為だ。母の妓楼で初歩の筆記と計算は覚えている。チアロでも良かっただろうが、この点は恐らくクインのためにあちらを残したに違いない。

そしてこれはオルヴィにとって、紛れもなく大きな転機の間となるはずであった。麻薬筋のことはライアンの掌握する事柄の中でも金額からして大きな項目の一つだ。その基本的な契約の提携に立ち会い、彼らの語る方針を書き留め、簡単な試算を出すことでその基盤に深く、大きく食い込むことが出来る。

それを思うと薄い興奮がオルヴィにも上がってくる。チェインの中で勝ち上がろうと決めた時から、ライアンはオルヴィにとって当面の寄生先だった。彼はチェインという小さな王国に君臨

する絶対王だ。

もしくは、とオルヴィは頬を厳しくした。クインと相容れないのはお互いの寄生の邪魔だと感じているからかもしれない。クインがどんな事情でか知らないがライアンに頼っているのと違う事情で、しかし同じようにオルヴィも彼に頼っている。宿主を取り合っているのだと思うとやはり面白くはなかった。

オルヴィの渋面をどう受け取ったのか、ライアンが視線で意味を問うてくる。オルヴィは別に、と素っ気なく返答してから付け加えた。

「あの子のことなら、すべきことはしている。あちらが気に食わないのは勝手だが、私は配慮してるつもりだ、十分に。金払いのいい、後腐れのない相手をちゃんと選んでやっている」

ライアンは僅かに溜息をついて薄茶色の顆粒の上から煙管の火種を落とした。灼熱の小さな塊がそこへ転がり落ち、微かな音を立てて薬粒を焼く。彼は薬はやらない。オルヴィと同じく、あの草に手を出す奴は愚かだと知っているのだ。

風に乗って漂ってくる、ほんの僅かな甘い匂い。母の体臭とよく似ている。記憶の中の嫌悪と。

それから逃れるようにオルヴィは浴室の扉を開けた。ライアンの肌には既に煙草の匂いが染みついていて、一晩傍にいと何故か眩暈がする。肺の中に差し込んでくる空気が細胞を侵していくような、きつい、感触。オルヴィは首を振り、水栓をひねった。一瞬おいて、受口から冷水が小雨のように落ちてくる。

肌をこぼれていく人工の雨が、むず痒い。自分の髪から鬱そうと煙草の移り香が立ち上り、やがてそれは水と共に流れ落ちる。彼の煙草の匂いが薄くなっていくのに連れて、オルヴィは長い吐息を落とした。

気に入らない。

あの子も。

妓楼にいるという彼の女も。

肌をかすめていく煙草の匂いも。

嫌悪と呼ぶにはひどく薄い感触がして、それでも何かが変わっていく——剥がれ落ちて。

オルヴィは唇だけで暗く笑った。

金払いのいい、後腐れのない客は確かに選んでいる。その先のクインの嫌悪のことを思って意地悪くほくそ笑むのは、クインの自分に対する嫌悪の鏡であり意趣返しだ。せいぜいねちこい相手にいたぶられればいい。

そのせいで荒れていく様子は確実に溜飲を下げる遊戯であった。変化をつける為にあの変に素人臭い女を混ぜてみたのも、その落差を激しくするための布石だ。男客への憎悪に近い嫌忌との比較でいっそ、どの女でもいい、駆け落ちでもしてくれたらライアンも彼を処分しなくてはならなくなるのに——……

オルヴィは肩を軽くすくめた。そんな都合のいいことは滅多に起こらない。だからこそ続ける意味もあるのだと、そんなことを思った。

看護学校の課題を終えてクインは綴りの右肩を紐でとめた。ぱらぱら読み返しても全く欠損が無くて我ながらいい出来だ。その欠損には、わざといくつかの間違いを混ぜてあるところまで含まれている。

.....幼くて魔導論文を書き散らしていた頃、欠陥を故意に作ることなど思いもしなかった。

あの苦い失敗はしてはならない。目立ってはいけない、看護学校とて医療行為の一端に噛む故に、魔導の扱いは教えているのだから。

医療と魔導は既に切れない縁で結ばれつつある。黒死の病に唯一効果のある薬は魔導と医術の融合によって出来上がるものであるし、その他にも難病といわれるものに対処する高価な薬には大抵魔導の効果が組み込まれているのが普通だ。

医者としての医療学校と看護師のための看護学校は多少内容は違うが、行き着くところは人間の病と向き合う為の技術であって、医者が基本的な魔導の扱いを知っていると同じように看護師にもそれが求められている。

そして、それゆえに魔導学を修めている学生たちとの研究会が存在した。クインの通っている学校にもある。大抵は優秀な学生を高等学院へ出向させるのだ。

だから成績も適当な匙加減を加えて卒業には支障ない程度に押さえてある。普通よりは少し上あたりの階層を彷徨わせている成績と合わせて、同じ学生同士の研修会でも目立つような発言は慎重に避けた。

自分は、よくやっている。クインは自己満足に小さく笑うと課題の綴りを鞆へ放り込んだ。今日は仕事もないし、学校は明日の夜だ。さて、とわざとらしく腰に手を当てて机の斜め上に切られている窓の向こうを見やる。白くなめらかな皇城の壁面が一面夕映えの薄陽に染まり、雲のない空は夏の訪れを宣言するような、突き抜けた朗らかさだ。

どうしようかなと首を傾げてみる傍から自分がひどく機嫌良く笑っていることにクインは気付く。

けれどそれは少しも嫌な気持ちにならない。何かの特別なことがあったわけではないのに、心の底が仄かに明るくなったような気分になる。

それが何のせいなのかは知っていた。エミリアは唐突で気まぐれとしか言いようのない頻度と時間にまたがる彼の訪れを、いつでも喜んでくれた。他愛ない話、単なる雑談、それに愚痴、そんなことをいちいち真剣に笑ったり驚いたりしてくれる。

甘えているんだということは分かっているけど、居心地のいい許容を手放す気はなかった。ほんの一時態度を弛めていた客たちにも最初の頃のような権高い表情を作れるようになってきている。客に媚びなくなってきたことで、蓄積されて行かなくなったものもあった。

やっと自分の均衡を自分で操り始めたようで、それも心穏やかにしてくれる。

全てが良い方向へ転がり始めた。追っ手のことや自分の出生のことは追々考えて行かなくてはならないだろうが、とにかくほっと呼吸を温くできる場所があったことが何より大きい。

どんな時間に行っても彼女は大抵一人で絵を描いていた。静物もあったし、窓からの風景もあった。その全てに共通するのは彼女の素朴で清潔な明るさで、それを線画の奥に僅かに感じるたびに、何故だかひどく嬉しくなる。

そして急に照れくさくなってきて、髪をかき回してクロゼットを開けた。一瞬迷って夏の薄く柔らかいシャツを選んで簡単に着替える。客との商売の時は女装も多いが、身長や骨格の堅さが次第に彼を大人にしていっていった。決定的な違和感ではなかったが、既に女装よりは男装のほうがしっくり馴染むようになっている。

度が入っていない眼鏡を探していると、部屋の扉が開く音がした。クインは振り返る。このアパートへ訪ねてくるのなら、今はチアロくらいしかいない。ライアンはあの女を連れてどこかへ出ているようで、この一月、消息さえ聞かなかった。

居間の方へ出るとやはりそれはチアロであった。クインに向かって軽く手を挙げ、途中で買ってきたらしい袋を長椅子にそっと置いている。硝子の鳴る音がしたから水の瓶も入っているのだろう。

「ありがとう……仕事？」

クインは袋の中身をざっと覗きながら言った。チアロはひどく曖昧な返事をして、お前は、と聞き返した。クインは一瞬怪訝に友人を見る。何かを聞いた時に質問で返すようなことは今まで無かったからだ。

淡い不審がうっすらと胸に広がっていく。エミルのことは知ればいい顔をしないだろうという予測が先にあったから、クインは別に、と答えた。適当にいつも引っかけている部屋着でないのは本当だったから、素早く付け足す。

「別に、買い物でも行こうかと思ってただけだよ……どうかしたのか」

じっとチアロを見ると彼はうんと頷いて笑ったが、やはり薄墨のような曖昧な予感が表情に張り付いている。クインは長椅子に座り直してどうしたんだよと強い声を出した。チアロはそれで肩をすくめた。

「怒るなよ、別に駄目だっていう訳じゃないんだから……俺はただ、彼女の所にでも行くのかと思ってさ」

彼女、という単語が耳に突き刺さってクインは一瞬ぎょっとする。こんな言い方をするのならエミリアのことを確実に知っているのだ——ということに思い至り、次の瞬間にそれが苦い感情に、どうしてという疑問は監視されていたのだという推測に変わった。クインは顔を歪めた。

「……俺が自分の時間を何に使っても自由だろ」

声音はすり切れたように低かった。チアロは苦い笑みを崩さない。違うと言葉で否定されるよりもそのほうが胸に応えた。

「何だよ、俺がどうしていようと関係ないだろう、ライアンだってそう言ったじゃないか」

「クイン」

チアロは困ったような声を出してクインに近寄り、肩を叩こうとした。なし崩しに宥めるような仕草をクインは咄嗟に振り払う。ライアンに突き放された怒りをいつもチアロがそうやって慰めようとしてきた——今度も同じような対処をしようとする友人の態度が面白くなかった。

チアロは諦めない。再びクインの肩に手を伸ばし、今度は捕まえて優しく揺すった。

「なあ、何で駄目かは分かるだろ？ 今ならライアンもオルヴィもいないし、他の幹部連中にはまだばれてないし、どうにかなると……」

「うるさい」

クインはチアロの手を押し戻した。チアロは僅かに目を見開き、視線を落とした。それがひどく傷ついたような表情であったことで、クインは微かに罪悪感を覚える。自分が辛く苦しくて荒れるだけだった時間に、傍にいて話を聞いてくれたのはチアロだけだったのに。

ごめん、と決まり悪く呟くと、チアロの方は温んだ笑みになった。

「……何で駄目なのかは知ってるはずだ、クイン。今ならあんまり深い傷にはならない」

クインは首を振る。やっと手に入れた場所を、この一言で放棄する気になど全くなならない。エミリアが彼にふんだんに与えてくれるなだらかな日だまり、突き抜けて明るい空気、何よりも心穏やかに彼女の優しさにしなだれて覚える安息を手放すなどどうして思えるだろう。

「いやだ」

ふて腐れたような声でクインは言った。ぷいとチアロから視線を逸らす。友人は彼の肩を撫でるようにさすり、ますます優しい声を出した。

「なあ、頼むよ。……そのう……お前があんまりライアの所有の範囲から逸脱すると俺もちょっとまずいんだよ、なにせライアの留守中のことだからさ。俺のこともたまには考えてくれよ、な」

柔らかい声だった。クインは横目で友人を見やる。彼に縋るような言葉とは裏腹に、その顔は少しも困惑していなかった。むしろ、淡い哀しみのような気配さえする。チアロは自分を下げてでもクインを引き留めようとしているのだ。

それはクインには出来ないことでもあった。だからクインはやや態度を和らげる。そんなことまで友人にさせたことは確かに罪悪感になった。

でも、とクインは顔を上げる。チアロの配慮を嬉しく感じ取ると、エミリアに自分の負の部分を預けることは全く比重が違うことなのだ。

「お前しか知らないっていうなら、黙っててくれよ——なあ、いいだろ？ ライアはあんなだし、俺は……俺は、ただ……別に恋人とかじゃないんだし……」

ねじれた言い訳を呟きながら、クインはチアロの腕を掴んだ。チアロは首を傾げて溜息になった。

「クイン、俺は忠告をしているんだよ。お前はライアのものだ、違わないだろう？　なのにタリアの外で女と会ってる。他の幹部たちに知れたら、彼らはお前を処分しろと言うはずだ」

クインは煮え切らない返答を喉で鳴らす。チアロの言うことは出鱈目の恫喝ではなく、十分に予測される未来であった。最終的にはライアの胸一つでもあるが、幹部たちが口を揃えて処分を吠えれば無視することは考えにくい。配下の意見を尊重するというよりは、それによって傷つく彼の体面と矜持を優先するだろうということだ。

「ライア、いつ、帰ってくる……」

苦い気分のままクインは呟いた。チアロは僅かに迷った後、来月の半ばにはと答えた。一緒に行ったオルヴィからの連絡があったようで、大体の経緯は知っているらしい。

「だから頼むから、もう」

行くなと言いかけたチアロの言葉を、クインは素早く、強く遮った。

「いやだ」

殆ど泣きかけているような声だと自分で思った。けれど、それが却って自分の意志を強く固めたような気持ちを連れてくる。

いやだ、とクインは繰り返して素早く、勢いよく立ち上がった。チアロが驚いたように微かに目を瞠る。それは本当に不意を付かれた時の彼の癖だ。僅かにそれで溜飲を下げて、クインはいやだと三度目を言った。

「ライアンは何もしてくれない、俺はもう奴のことを考えたくないんだ、もう嫌なんだ、うんざりしてるんだよ、どうして分からないんだ！」

叫ぶ自分の声に吊り上げられるように、苦く痛い記憶ばかりが脳裏からあふれ出てくる。ライアンの冷たい声音までを思い出してクインは一瞬上がりかけた涙を飲み込んでもう嫌なんだ、と怒鳴った。

「分かってる、それはよく分かってるから」

宥めようとするチアロの肩を軽く突き飛ばし、クインはたまたま放り出されていた眼鏡を掴んでまっすぐに扉へ向かう。待てよと追いかけてようとするチアロを一瞥振り返り、何が分かってるんだよと低く小さく、唸るように言った。

「分かってるなら放っておいてくれよ、俺は大丈夫だから」

「クイン、でも、」

「ライアンは勝手だ、だから俺もそうするんだ。何がいけないのかなんて、知るかよ！」

鈍く冷たい怒りのままにクインは吐き捨て、外へ走り出た。乱暴に扉を閉め、階段を駆け下りる。路地は既に紫色の暮刻の中で、建物の輪郭線までが不明瞭な闇に沈みつつある。

普段使う地下水路を放棄して、ただチアロとその向こうにいるはずのライアンやその幹部たちへの当てつけの為だけに、クインは地上を駆け出した。

エミリアに会いたい。何を言われても、どんな制約があっても、彼女に会ってこの吹き上がってくる怒りや苛立ちを宥め鎮めてやりたい。

会いたい———それだけでいいから。

走ってタリアの境界門を抜けると、急速に力がゆるんだ。膝に手を当ててしばらく呼吸を整え、エミリアの住居であるアパートへ歩き出す。部屋を飛び出した時にチアロが何かを叫んでいた気がするが、それはもう分からない。

それから黙って突き飛ばされてくれたのが彼の優しさであることに気づき、クインは溜息になった。チアロのことを憎くなど思えない。

だからそれはその果てにいたはずのライアンへと流れ込んでいく。憎しみだと単純に言い張るよりも遙かにねじれている感情が強く、強く、体の中に根付き増殖していくのがはっきりと分かった。

開け放した窓から誰かの歌が聞こえる。窓にかけられた綿レースの繊細な模様がまだらな影を、背もたれからだらりと下げた腕にゆらめきながら落としている。それをぼんやりと見つめるでもなく視界に入れながら、クインはじっと歌を聴いていた。

（私とうとう見つけたわ あの人は私の運命の人）

やけに明るい恋の歌だ。歌っているのは子供たちで、歌いながら石蹴りをしているらしい。からからという軽い音が調子に合わせて聞こえる。あ、という声、馬鹿と一斉にはやす笑い声、そして歌はもう一度最初から繰り返されるために撒き戻る。

クインはゆるく嘆息した。下らない歌だ。子供がはしゃぎながら歌い遊ぶのとよく似合った、調子はずれの明るさと馬鹿馬鹿しさ。

クインの吐息にやっとエミリアが画帳から顔を上げ、どうしたの、と聞いた。別に、とクインは素っ気ない返事をする。それから突き放したような自分の声の不機嫌に気づき、外、と言った。

「歌、聞いてた……さっきから同じ歌ばかりだから」

「陣取りでしょう？ 最近あの歌でするのが流行ってるみたいね」

簡単に応え、エミリアは画帳の下に小さく何かを書き込んだ。それは一枚の素描が出来上がった時の彼女の覚え書きだ。日付と場所とモデルの名前は最低でも書き留めておくらしい。クインが最初それをひどく警戒した為に、そこには最初の夜の画帳と同じく少年としか書かれていない。

クインは長椅子から立ち上がってエミリアの背後へ回る。練炭特有の濃淡で描き出されているのは背中を向けて椅子にもたれ、項垂れるような仕草をしている彼自身だった。身につけているものというよりは、肩の線や微かに傾げられたうなじの角度が確かに自分だと思えるような絵だ。

画面の中の少年はがっくりとうなだれていたが、細い首筋にあるのは力強いたわみであり、それは絶望と呼ぶよりは遙かに祈りのような敬虔さに満ちているように見える。雪崩落ちている髪の毛の向こう側は窓。あるはずのカーテンは描かれておらず、その代わりに窓の高い位置から太陽が啓示のように差し込んで、少年の背中を斜めに一条よぎっている。

彼女は天使の題材を描くのだと改めて知ったような気持ちになって、クインは何気なくふうんと言った。エミリアの絵はいつ見ても何かがそこにある気がする。ひどく懐かしかったり、温かだったり、その絵からエミリアの気配が溢れ出て、まっすぐに絡め取られてしまうような淡い畏服。

「最近良くなったわね、背中」

描き上がった絵をじっと見つめていたエミリアが不意に言った。クインは横に並ぶエミリアを見やる。彼女の方が3才の年長ではあったが、背丈は既にクインの方が若干高い位置に到達していた。

クインの視線にエミリアは少し笑い、同じ画帳のかなり前の頁をめくりだした。エミリアは素描をとる時背中をよく好んで描いていたから同じようなものは遡れば幾らでも出てくるが、彼女がやっと手を止めたのは、かなり最初の頃に描かれた頁だった。

「ほら、これが最初。すごく……気が張ってて身構えている感じ」

エミリアと出会った夜だろう。女装のまま宿の一人がけの椅子にもたれ、窓の外を見ている自分だ。表情は見えないが、肩のあたりにまつろう空気は確かに尖って張りつめきった糸のようだった。

クインは小さく頷いた。エミリアの言葉の意味がほぼ掴めた気になったし、そしてそれは正しいと自分も思う。良くなったという言葉が示す通り、エミリアの部屋で彼女の素描や習作のモデルに登場してくるようになった自分の背中から、きりきりと切羽詰まった空気は消えていて、代わりになだらかな落ち着きと安堵に手足を投げ出しているような無防備な背中が多い。

「次の評価会にはあなたの絵を出そうと思うのよ。ほら、こんな風にして」

エミリアは先ほど描き終えた素描の頁をめくり、練炭を握る。光が照らすクインの背中にその先端を当てて、さらさらと迷い無く動かし始めた。

途中まで来ればそれが何であるかは分かる。クインはあやふやに微笑み、そして微かに赤面した。

「俺、こんなじゃないよ……」

曖昧な言い訳を口にする、エミリアは笑って首を振った。

「そう？ あなたには違っても、私にはこうなのよ。今は小さいけれど、いつか広げて飛ぶことができるわ」

さらりと言ってエミリアは彼の背に折り畳まれた翼を描き終えた。

翼ある者、美しい幻想、そして祈り。これは確かに彼女の絵だ。豊かに包む、愛情のまま。

僅かに心の底が揺らぎ始める。嬉しくてたまらない。自分の中に沢山の闇があってそれに押しつぶされそうだったのはつい最近なのに、闇の中でこそ美しく輝く沢山の星をエミリアが彼の手を取って教えてくれた。闇夜の星、微かに白く淡い光。それを知っただけで胸の中がほんの少しなだらかになったようであった。

あるいは自分は、絶望したかったのかも知れない。それは息を呑むほど強い力で自分を壊していくはずだった。それで良かった、絶望できるほどの強靱な心があれば破壊の後の再生を支えてくれるはずだったから。

けれどそれはなされなかった。代わりにクインは明るい窓辺にぼんやりともたれる午後や二人で寄り添うようにして囁きあかす夜を手に入れた。

——それを捨てろだって？ 冗談じゃない。クインは先日のチアロの言葉を不意に思い出し、奥歯をきつく噛み合わせた。

チアロが自分を心配してくれるのは分かる。あれほど無遠慮にはしゃぎ回っているような印象の実、チアロは細やかで優しい目線で彼を気遣ってくれているのだ。

それは今も変わらない。あの翌日に訪ねてきてくれたチアロと和解は済んでいる。けれど彼が言ったことを許容できるかどうかは全く違う話だ。

ライアン の 帰還は どうか 半月ほど 先で、それまでには何か対策を練っておかなくては いけない。そもそも 奴のせいなのだ、と まっすぐに 非難を 思うことが 出来るようになった 分だけ 気が 楽になった から、ライアン と 多少は まともに 話が 出来そう だった。

……全て、川のように静かにゆるやかに、安息と安堵へと流れていく。何故それを放棄しなく

てはいけないのだ。

それを考え出すと苦い怒りと共に冷たく黒い恐怖を微かに感じる。戸籍の一件で思い知った通り、ライアンもその抱えている連中も短絡に人を手にかける。ライアンなどはむしろそれを楽しんでいるような節があり、どうしてもその部分には怯まずにいられない。チアロは忠告だと言った。このまま突き進んでいけば破滅するという意味であつたろう。それはクインのこの生活の終わりであり、畢竟、母の死と直結している。

母の死、と思うと背中がぞくりと粟だった。当面今の生活を続けていかななくては、金の工面が出来ない。折れてライアンにでも頼ればどうにかなるだろうと分かっている、自分の中の頑迷は激しく首を振った。

対等に、という自分の矜持がひどく幼くて崩れやすい虚塔であることは薄々理解しているが、けれど自分を無視して何があるのだろう。今でも十分、客という時には己を殺し沈めている。それ以上はどうあっても耐えられない。

だからこそ、エミリアの持っている清潔で素朴な明るさが自分にとって重要なことなのだ。彼女の優しいぬくやかな海に抱かれていると、とてつもなく幼い子供に還ったような不思議な落ち着きが自分を癒してくれるのが分かる。それはクインにとってどんなものにも引き替えられない貴重で、大切に、最も美しく平凡な時間かもしれなかった。

「.....お茶でも淹れましょうね」

エミリアがいつものような朗らかな声で言った。クインはそれで我に返り、側を離れて厨房へ消えていく彼女を見送る。自分にまつわりながらも話せないことは確かに多く、エミリアはそれを追求しなかった。それも多分、気楽さを増幅してくれている。

クインは軽い溜息になって、先ほどまでもたれかかっていた長椅子へ転がった。うつぶせに体勢を直し、ぱらぱらと画帳をめくる。エミリアは悪く言うなら手当たり次第に目に付いたものを描いていて、統一感のある画題ではなかった。

自分がいる。次の頁には日だまりの猫に途中で逃げてしまったという悔しそうな注釈、その更に次にはどこかの資料館で写生したらしい展翅蝶の素描、絵の傍に呟くような独白、忘備録替わりの走り書き。

画帳がエミリアの写生帳であり日記であつた。そのために最初は読むのを躊躇ったのだが、エミリア自身が全く頓着無く彼に過去をめくって見せてくれて最近は余り抵抗感がない。眺めるといほど熱心でもなく絵をめくっていると、小さな走り書きが目についた。どうやら時刻表らしく、地名と金額から大河ユーエリを下りミシュアへ出る客船であると予測できた。

「どっか行くの？」

クインは茶のカップを二つ手にして戻ってきたエミリアにその覚え書きをなぞりながら聞いた。エミリアはああ、と軽く頷いた。

「来月にでも、ちょっと南へね。学校も来週から夏期の長期休暇に入るし、海でも描きに行ってみようかなって思って。——ミシュア、行ったことある？」

「うん.....まあ」

「南の海は特別綺麗なものね、写真でしか見たことないんだけど。2週間くらい向こうで色々描

いてくるつもりなの。日程が決まったらちゃんと教えるわ、あなたが来たらいけないから」

クインは何度か瞬きをする。エミリアの不在は僅かな落胆を連れてくる。けれど、ライアンやチェーンの連中のことを鑑みるに、多少はそうした空隙をおいた方が良い気もすると胸の中で素早く弾き出して頷いた。

「ん、分かった……」

お土産買ってくるわよと笑うエミリアの楽しそうな表情に、クインはやっと自分も顔が弛んできたのを自覚する。……あまり考えすぎるのはよそう。今この瞬間が満ちて穏やかならば、それでいいから。悪い方へと考えすぎていつも自分でたてる騒音に苛立っているようなところが、クインにはある。それを自覚しつつある今ならば、どれだけそれが自分をすり減らす無駄な摩擦であるか、知っている気になっていた。

エミリアは自分で淹れた茶を一口啜り、渋いわ、と思い切り顔をしかめた。クインはつられるように自分も同じ事をして同じ渋面になり、どちらからともなく笑い出す。このごく普通の笑い声を、ひどく愛しく思いながら。

小さな馬車を降りると煤けて赤い町並みと、青みかかった石畳から世界を異なる色へ変える境界の2本柱が見えた。相変わらず昼日中の白けた光の下では薄汚くてよそよそしい。外からタリアへ戻ってくるたびに胸に微かに興るのは確かに嫌悪なのに、それをいつの間にか許容しているのは諦観なのだろう。

所詮、この町でしか生きてゆけないのだ。リアンの背を追うように少年たちの上に君臨し始めた時から自分の命一つに沢山のものが付随している。今死ぬわけにはいかないし、勝ち続けなくてはならない。その義務を重いと感じないのは僥倖であったけれども、重いと思うものはある。

——例えば、あの庇護している子供のこととか。

ライアンは内心で軽い自身の嘆息を聞いた。タリアを離れる直前彼の癩癢につい、つき合ってしまった。全身の気配を逆立ててこちらを巻き込もうとする瞳を見る度に、何かひどい間違いを犯している気持ちになる。

客を取り始める前にその予行がしたいなどという一瞬啞然とするような彼の願いを聞き入れたのは、彼がそう思っているであろう秘密の担保ではなくて、純粋な憐憫の為だ。再開した少年の切羽詰まっている上に怯えたような目が、ひたすら哀れでならなかった。

元々ひどく誇り高い子供であったことも、その痛ましさに拍車をかけていただろう。ライアンの元から一度走り去った時、クインは沢山の事情はあったにせよ明るく陽気な子供だったはずなのだ。

けれど、どこかから戻ってきたクインは疲弊と焦燥のせいなのか、気強く傲慢だった瞳の凄みさえ失ってしまっていた。それが自分でもはっとするほどの憐れみに変わる。——それを知ればクインの方はまた傷つけられたように思うだろうから、口には出来ないことではあったが。

客とのことはクインの性質には合うかもしれないと当初樂觀していたことを、ライアンは認めざるを得ない。傲岸不遜の塊、自分の理知と美貌に抱く正直で圧倒されるような自負。それは彼の内面から滲むように溢れていて、きっと客には崇拜という扱われ方をするだろうと考えたし、最初は確かにそうだったはずだ。

おかしくなった分岐点は何であったのかをライアンは知る術がないが、その時機ならば記憶とつき合わせて導くことが出来る——そして、それが一層クインの元へ足が向かない理由であった。

ライアンは髪に手を入れてゆるくかき回す。気が重い。あれは何故、俺にそんなにこだわるのだろう——男は初めてだと言っていたし、あの怯えた態度やその後のもの慣れぬ仕草や空気がそれを裏付けていたからあまりにえげつないことは控えた、それは本当だ。が、それを何かと勘違いしているとしたらライアンは面食らうしかない。そもそもクインの申し出を受けたのも、ライアン自身の苦い記憶の為だ。

活劇の芸団から稚児に転売された夜のことは、思い出せることのほうが少なく、またその殆どは息苦しい屈辱の黒で塗りつぶされている。あれを与えるよりはと思ったことは否定しないが、同情を他のものに取り換えられても困惑するとはしか言いようがないのだ。

客の殆どが男であることで価値観が若干揺らいでいるのかもしれない、と言ったのはチアロであったはずだが、だからといって同性愛がごく普通の志向だという考えを持つのは浅薄にす

ぎる。それはあくまでも珍しい嗜好に属し、タリアの外へ行けば非常に少ないものだろう。

後ろを付いてくるオルヴィに聞こえないように溜息を落とし、ライアンはチェインに入る小路を折れた。通称で煉瓦屋敷と呼ばれている建物の、記憶の通りの影が目に入る。窓辺に何かが動いた気配がして視線を上げると、窓が開いて少年が顔を出した。あれは確かチアロが連れていたショワとかいう子供だ。では、チアロもここにいるだろう。

煉瓦屋敷の1階の広間の奥に、ライアンのいつもの席はある。幹部たちが集まってくるのも大抵ここで、チェインの様子を聞くのも何らかの命を下すのもここだ。そこへ入っていくと全員が立ち上がって彼を待ち受けているところであった。

「お疲れさまでした」

簡単な挨拶と共に幹部の一人であるノイエが腰を折る。それに全員が倣うのに簡単に頷き、ライアンは自分の場所である椅子へ腰を下ろした。脇の小卓へ灰切りの小皿がまわされてくるのもいつものことだ。黙って顎をしゃくると幹部を除いた少年たちが広間から出ていくのも符丁通り、ここに至ってようやく自身の巢へ戻ってきた実感が湧いた。

「イシュラとディーは」

見あたらない幹部の名をあげると、ノイエが軽く頷いた。

「イシュラは自派の内部の始末に出ています。中で少し造反の気配があったようなので、その粛正と燻り出しのために最近はあまりここに来ません。探しにやりましたが、少しかかると思います。ディーはタリア王からの呼び出しで王屋敷へ出向いています。呼びにやりましたから、じき、戻ってくるでしょう」

ライアンは頷き、煙草の支度をした。僅かに空いた間を支配する、奇妙な沈黙。それが何の為であるのかをライアンはすぐに悟り、自分の真横に立つ女を一瞥した。幹部以外は退室するように命じた仕草にオルヴィが従わないゆえに、ライアンに留守中の様々を告げる時間をずらしているのだ。

ライアンの視線を受けてオルヴィは軽く一礼し、出て行こうとした。その背をライアンは呼び止める。

「オルヴィ、ここにいる。出て行かなくていい……これから先もだ」

一瞬少年たちがさっと気色ばむ。ライアンの言葉は絶対ではあるが、不服や不満をまるで押し殺してしまうにはそれぞれ忍耐が足りない。誰かが異を唱えないかと視線でお互いをつつきあっているのを仕方なく受けたようにチアロが口を開いた。ライアンに向かって対等で飾らない口を利けるのはチアロくらいしかいない為、こんな場面は大抵彼に貧乏くじが当たることになっている。

「でも彼女は自分の派閥を持っていない、後ろ盾がないと本人もきついと思うけど」

愛人のつてを辿って登ってきた女、ということを口にしないのはチアロの感性の優しさであったかもしれぬ。それは誰でも知っていることであつたし、現在はライアンの愛人であることもしかりであった。

が、ライアンはそれを一蹴する。

「構わない。これは俺の傍におく——いずれ、タリアの方へ連れて行く。チェインの自治には関わらせず、お前たちの派閥に口出しはさせない」

「でも……」

「では、代わりに麻薬の管轄が出来る奴がいるなら名前を言え——カリス」

不意に視線を向けられた少年は言葉を濁し、やがて頷いた。他の幹部たちがそれに倣う。チアロがやっと荷が下りたというようなほっとした表情になり、この1月半の不在についての報告の口火を切りだした。

彼の不在の期間中、ほぼチェインは平穏であると総括できそうであった。個々の派閥についての幾つかの細かな抗争はあったようだが、ライアンに收拾を切り出す者がいないならば決着は付いているか見通しがあるのだろう。この場にいないイシュラの自派閥については彼から直接報告を受けなければならないが、他の幹部たちが口にしないと見ると飛び火していない程度の規模と思われた。

ライアンは煙草を飲みながらそれらをいちいち聞いた。チェインは確かに彼の最も有力な足場であり、チェインの王である故にタリア自治の内部にも食い込んでいる。いずれチェインはチアロに任せてタリアの大人たちの派閥に匹敵するような自分の派閥を築いていくことになるだろう。

やがて報告が済んで幹部たちが解散すると、オルヴィが彼に向かって深く頭を下げた。今後幹部として取り扱うと宣知したことは、きっと彼女のためになることだった。

「ありがとうございます、ライアン」

呟く声音には過剰な感情は浮かんでいない。北へ連れて行った時から期待はあっただろうが、それを表面にする女ではなかった。ライアンは軽く頷き、そこに残っているチアロを見た。長く馴染んでいる故に、この少年がなにかもの言いたげにしている空気が分かる。

「……話は裏で聞こう、来い」

ライアンはそう言って裏廊下へ出た。オルヴィにはチアロが首を振ったらしく、足を止めてライアンにもう一度礼を言うに済ませた。では、これは確実にクインの話だ。オルヴィはクインとひどく折り合いが悪い。折り合いというよりはお互いに絶対に折れないと決めたような頑なさや似たような底意地の悪さで以て、ちくりちくりと相手を攻撃することをやめようとしなかった。

クインかと思うと途端に気が滅入ったのが分かった。激しく強くライアンを縛ろうとする意志を感じるたびに、何かに気圧されるような苦い忍耐を強いられる。ライアンは長く大きく嘆息した。

「あれのことはお前に任せてあったはずだ、いちいち俺に持ち込むな」

それが本当にうんざりした声音であったことにライアンは一瞬遅れて気付く、自分で顔をしかめた。チアロはちらりと彼のそんな表情にライアンと苛立った声を出した。裏廊下の壁にもたれてライアンは一度火を切った煙管にもう一度煙草をつめる。それで続きを促されていると悟ったチアロは、話を切り出す為らしい溜息をついた。

「どうやらタリアの外に女が出来たみたいなんだ……その、女客となんだかいい感じみたいでさ……」

ライアンは舌打ちし、煙草に火を入れた。

「だから俺は女客をつけるのには反対したはずだったな、チアロ」

自分の声は不機嫌と困惑と、それを感じざるを得ないという怒りが滲んで低く冷たい。だがチアロは彼の言葉にはっきりと首を振り、ライアンと彼を真正面から睨むように見た。この1月と少しの間にまた背が伸びたらしく、もう視線の位置は殆ど変わらない。間近にするチアロの目線は強く、底が苦い色に覆われている。

——チアロもまた、怒りを覚えているのだ。それは自分に対してなのだとライアンは視線の強さで悟った。

「……クインはあんたのものだ、ライアン。俺はそれでいいと思う。でも、飼い主ならその責任をとってやれよ。変な同情や気遣いでそのままにしておくより、ちゃんと支配してやらなきゃ、誰が主人かも分からなくなる」

ライアンは黙って煙を吐く所作で天井を見上げた。はぐらかされたと思ったらしいチアロの声が更に怒りと苛立ちに低くなる。一体いつ頃から変声したのだったか、チアロもからを脱ぎ捨てるような勢いで成長していくのだ、とぼんやり思った。

「俺はあんたのせいだと思ってる。クインが荒れるのもオルヴィに下らないことで噛みつくのも、今度のことも。相手は普通の女だ、本当に普通のね。特別美人でもないし頭が良さそうにも見えないのにクインはあっという間に夢中だよ」

「……忠告は？」

「一度。拒否された。ディーに相談したら、ディーは女の方を始末しろと言った。俺はそれは賛成できないからライアンが戻ったら話をするとディーと約束した」

経緯の説明にライアンは頷いた。チアロの対処は正しかった。クインのこととなるとどうにもうまく対応を見つけられないのはいつも自分の方なのだ。

一体あれは何者なのだろう。ライアンに対等を要求し、同じ口で庇護を頼む。かと思えば頼りしなを浮かべ、撥ねつける癪癪を投げ、全く一貫性が無い上に凄まじく求められていることだけは分かってしまうのだから始末に困った。どこへどう分類すればいいのかが分かれば対処も出来るが、クインはその分類に収まらない。範疇があちこちに逸脱しているために分類が出来ぬ。出来ぬ故に、その不可解さに苛立ってしまうのだ。

「ならばもう一度同じ事を言ってやれ……ディーと一緒に。俺はまだエリオンから戻っていないと言え、奴がどうするつもりなのかはすぐに結果が出る」

チアロはこの言葉にすぐに渋い表情を作った。ライアンはふっと年下の少年から視線を逸らす。何をチアロが怒っているのかなど、考えることでさえなかった。

「……俺は奴の飼い主だ、確かにな。だが、それと奴を抱くのとは何の関係がある」

「クインはそれしか知らないんだ、他にどうやって甘えていいのか分かんないんだよ」

「それは俺のせいかな」

「ライアン、そうじゃないだろ？」

チアロは呆れたように声を荒げ、そして溜息になった。くしゃくしゃと亜麻色の髪をかき回している。ライアンは自分を落ち着かせる為に煙管をゆっくりさすり、やがて深く頷いた。

「相手というのはどんな女だ」

「ん……絵を描いてる。結構その世界じゃ有名みたいだね。家族は田舎に妹が一人だけ。盲目で、盲字学校に通ってる。本人は帝都、西の八区」

ライアンはそうかと頷き、では、と強く吐き捨てるような口調で言った。

「クインが警告を無視した時は、その女の方に接触しろ」

「——殺すの？」

さらりと口にするのはやはりチアロもチェインの子供であった。命の価値をクインのように重大で尊崇すべきものだというとならえ方をしない。但し、簡単なことのように聞きながらもチアロの頬は厳しい。一般の女に手を出すのは確かにチアロにとっては倦厭すべきことのようにだった。

「いや……そうだな、クインに近付いたら妹を目の前で八つ裂きにするとでも言ってやれ。多分、折れる」

「やな言葉」

チアロはくしゃっと顔を歪めた。賛同してはいないものの、ライアンの示した逃げ道の存在には気付いているようだ。殺せ、と命じたわけではないから事実上チアロへ裁量を与えたに等しい。であればチアロは女を殺すのは最後の手段として他の手を考えるだろう。それがチアロの気の済む方法であるなら好きにするのが良かった。

ライアンは煙管をくわえなおしながら裏廊下を歩きだした。この廊下の深奥にはずっと以前に死んだリアンの隠し部屋がある。ぼんやりとした時間を過ごす時はその場所が気に入っていた。

——まだ、彼の気配が残っているような気持ちになるのは、自分の気のせいなのだろうけど

。

その背をチアロが呼び止め、ライアンは怪訝に振り返った。ライアンがリアンの部屋へ向かう時は邪魔をしないのがチアロのいつもの配慮だったのだ。どうした、と言うとチアロは苦く苦く、微笑んだ。

「ライアン、クインが怖い……？」

その言葉にライアンは背中を一瞬痙攣させた。ぎくりとする、という言葉が浮かんだのはそれから一瞬後のことである。それを知覚した途端、今度はさあっと血が上ってくるような音がした

。

——耳の奥に、まろやかな鈴の音がする。何かを憎しみ、八つ裂き、血を啜って命を踏みにじりたいという欲望の音だ。怖いのかという質問にライアンは首を振った。けれど、憎いのだろうかという自問には何も返らない。ただ、鈴の音が弱くなり強くなり、陣営を決するための何かを待っていると言わんばかりの焦れったさを誇示するかのようだ。

ライアンはもう一度首を振った。恐怖、という意味においては感じたことはなかった——それはずだった。

チアロは頷き、ならいいんだ、と軽く流した。またねと言い置いて戻っていくチアロの背にひどく安堵を覚えていることを、ライアンはしばらくの間気付かなかった。

忠告は二度目はないのだと言われてクインはきっと目線を据えて相手を睨んだ。きつい視線を投げつけられた方は平然とそれを受け流し、クイン、と低く言う。

「ライアンのものであるからそう扱え、というなら理解しよう。もし扱いがお前の思うに足りないと言うならライアンに伝えよう。だが、自分だけが好きに出来ると思うのは間違いだ。あまり我が儘が過ぎるとお前自身が処分の対象になることを覚えておけ。詮議になればお前の味方はこいつだけだと心得ろ、いいな」

ディーは側に立つチアロを目線で示した。チアロの方は最前の忠告の時と同じ、淡く歪んだ表情をしている。それにわけのない怒りを覚えるのは、ディーの乱暴な言葉をチアロが全く制しないことが大きいだろう。つまり、チアロも同意見なのだ。

これは恫喝であった。紛れもなく圧力とよべる種類のものだ。けれど、ここに至るまでに自分を追いやってきたのはライアンではなかったろうか。自分は何度も言葉やそれ以外のもので彼にやり場のない胸苦しさを訴えようとし、ライアンはそれを冷淡に退けてきた。

冷ややかな彼の態度に癩癩を起こし、知っている限りの罵詈雑言を投げつけ、一瞬の狂熱が過ぎて残るのは、白けた怒りと感情の煤けた灰だけだった。だから彼に頼るのはやめた……その何がいけない。

クインはじっと二人を睨み据え、ゆっくり、深く呼吸をした。そうでないといつものように怒りにまかせて奔流のようにわめき散らした挙げ句、自分の悲鳴で一層追い込まれていってしまう。

「……ライアンには、そう何度も言った。奴は、俺とは関わりたくないと、言った。ディーが同じ事を言ってもやっぱり同じさ、——なあ、チアロ？」

話を振られた友人は曖昧に笑い、クイン、と穏やかな声を出した。これが何であるかは知っていた。この前にも聞いた、彼をどうにか宥め、落ち着かせようと懐柔する声音だ。そうだと感覚が頷いた瞬間、背がざわりと冷えた。紛れもなく怒りの為だ。

「ライアンには俺からももう一度、強く言うから。彼が帰ってきたらもうやめた方がいい。ほんのちょっと遊ぶつもりだったと思えば俺もディーも、黙っていてやるから」

「黙っていてやる？　へえ、ありがたいね」

言葉尻を捉えて吐き捨てると、チアロは困ったような溜息になった。ディーをちらりと見やっているのは、助力を求めているのだろう。困惑を隠さないという表情で自分をやわらかに制するチアロのやり方だ——いつもと同じ。

同じ、と思うと尚更胸の中に荒れる音を聞く。お仕着せの服のように慣れて扱われることはひどく誇りを噛んだ。

「ライアンは俺とは関係ないんだと、奴が自分でそう言った。だから俺が何をしよう、奴は構わないはずだ」

クインの言葉に二人は顔を見合わせ、小難しい表情で目線を交錯させた。クインは舌打ちをして、椅子に投げかけてあった白レースの上着を取る。日光に肌を直接晒さないように日中出る時は羽織るものを持つのが習慣で、今まさに外へ行こうとしていた矢先の二人の訪問であったためにそこへ置き放してあったものだ。

意図を悟ったチアロが彼を遮ろうとする。先日の彼への些細な暴力が咄嗟に浮かんでクインは柔らかにチアロを押し戻し、ごめん、と彼にだけ聞こえるように囁いた。

「もう少し勝手にさせてよ——ライアンが戻ってきたら、もっと上手い方法を考える。お前に迷惑はかけないから」

チアロは痛ましそうに眉を寄せ、首を振った。何を言いたいかはこれまで散々聞いてきたはずであった。クインはごめん、ともう一度を言って振り返らずに部屋の外へと歩き出した。背中
でディーがクインと呼んでいるのが聞こえる。

「いいか、これは忠告じゃない。警告だ。警告の次はもうない、それを覚えておけ」

クインはちらと振り返り、出て行きざまに隻腕の男へ嘲けるような笑みを浮かべる。それは自分の突出した美貌に被さると、ひどく相手の神経を逆撫でするものになるのは承知していた。

「——うるさいよ、あんた」

吐き捨て、クインはアパートの部屋を出た。

ふらりと路地へおりて太陽のきつさに目を細め、日陰を選んで歩き出す。外へ行こうとしていたのは飲料水が少なくなりかけていたからだだが、最初から彼女のところへ向かうのだと二人とも思いこんでいたようで、それも面白くない。

クインは熱線にじりつく石畳の白茶の眩しさに、目を細める。ディーにむかってうるさいと言
い、チアロには迷惑をかけないと口にしながら次第次第に最後の線が忍び寄ってくるのを感じないではいられなかった。ライアンが帰ってくる。そうしたらエミルとは終わりだ。

チアロやディーに散々繰り返されるまでもなく、ライアンの所有物だから尊重しろという主張を勝ち得た時から、それを自ら覆してはならないことは知っている。けれど、その冷静な囁きとは全く違う場所からそんなのは嫌だと叫ぶ声が聞こえて、クインはついそちらにふらふらと引き寄せられてしまう。

声は強く激しく主張する。嫌だ。嫌だ。やっと見つけたのに。やっと会えたのに。

優しい人に優しくしてもらえて嬉しいのに。それが今の生活の中にたった一つの温かな色をしたものののに。

何故。

何故。

何故、何故、何故それを捨てなくてはいけない、——と。

警告、とディーは言った。忠告と言ったチアロがあくまで善意であるならば、警告と口にしたディーはその次に来るものを既に考え始めている。処分という言い方をしていたが意味するところはなぶり殺しだ。ライアンもチェインの自治を乱した子供に対しては容赦しない、それと同じことをするという示唆であった。

エミル、とクインは呟いた。彼女の与えてくれる許容と抱擁のなだらかな海に身を委ねていたいという欲求は強く、他の何よりも第一の望みであった。甘えであるかもしれないし、依存であるかもしれない。

けれど、彼女の優しく温かな視線と手が導き出す絵の中に、クインは満たされて幸福な顔の自分を見つけてしまった。知ってしまえばもう戻れない。それを手放したくない。彼女と共にいることが出来れば、いつか彼女の絵の中にいるような表情が出来るような気がするのだ。

けれどこのまま進んでいけば破滅するとチアロは忠告し、ディーは更に警告という言い方で威嚇に変えた。クインが拒否し続ければエミルにも危害を加えるとライアンは言うかもしれない。否、それは突然現実になって自分の前に突きつけられるかもしれないのだ。

クインは僅かに首裏が冷えた気がして身震いした。恐怖と呼ぶには薄い冷氣であったが、その可能性が低いと言いきるだけの材料は何もない。むしろ、短絡にエミリアの命を奪って決着とすることは十分に考え得る未来であった。

失いたくない。けれど今のままではいけない。その上手い均衡点を見つけられない苛立ちにクインは秀麗な面差しをぎりっと歪めた。どこかで蝉が鳴いているのまでが気に障る。

クインは貯まってきた鬱を吐き出す長い溜息になった。エミリアとのことは現実、まさしく袋小路へ向かって走り出している。ライアンはきっと許さないだろう。怒り狂うに決まっている。

けれど、それは無視されるより遙かにましだ。奴が俺を引き裂いても俺はきっとそれを嗤ってやろうとクインはその予行の為に唇を吊り上げる。

行き場のなかった苛立ちや不透明な鬱屈をすくい上げてくれたのはエミリアであって、ライアンではなかった。何度もライアンには救済を求めたはずなのに、それを一顧だにしなかった。飼い主だと名乗ったくせに、事実を放り投げている。

それが許せない。憎い。彼への怒りと当てつけの為に何でも出来る気がする。つまりそれに踏み出すきっかけと勢いの問題なのだ。

憎い。ただ——憎い。チアロに向けるものが淡い不満でオルヴィやディーに感じるのが嫌悪だとしたら、ライアンへのそれは憎悪と呼んでも良かった。強い思い入れがあるほど憎しみも増すし、苛立ちも募るのだ。

彼への意趣返し。エミリアの安全と自分の未来。全てを平等で公平な単位には振り分けられない。一つ一つが全く別のものであると同時に、根深いところで堅牢に繋がっている。通算が出来たところで感情の振り幅の予測など出来るはずもなかった。

クインが軽い舌打ちをした瞬間、あら、という軽い声がした。クインははっと視線を上げる。じっと考え事をしながら足早に歩いているうち、どうやら自分は彼女のアパートまで来ていたらしい。

「エミル……」

呻くような声音で呟き、クインは唇を引き結んだ。エミリアの死のことばかり考えていたせいなのか、ぱあっと胸詰まるものが駆け上がってきて自分でも上手く制御できない。いけない、と面伏せた先の睫毛をぱらぱらと涙が伝い、夏の乾いた石畳に水滴の染みを作った。

「どうしたの？ ……泣かなくていいのよ……」

何の見返りも打算もなく降り注ぐのは、優しい声、そして温もりの気配。そっと彼女の指先が頬に触れて、クインは目を閉じる。無条件に自分を受け入れてくれる人の肌に涙が止まらない。気が抜けていく証左のように、涙だけが溢れてくる。

クインの肩をそっとエミリアが抱いて、慰撫のためにゆっくりさする。うん、と意味なくクインは頷き、頷きながら彼女を見、そしてやっと足下の旅行鞆に気付いた。ここへ歩いてきたことがそもそも無意識の作為であったから忘却していたが、彼女は今日から南行であった。

「ごめ……いかない……と、船……」

クインは整わない呼吸のせいで途切れがちな言葉を呟き、彼女の旅行鞆を見た。鞆には絵の具の染みがつき、中には入らなかったらしい大きめの画帳が無理矢理くくりつけてある。

それが目に入った瞬間に、一つの夢が胸底から転がるように目の前に出てきた気がした。

海に行きたい。広くて自由な海、遠く遙か南の海へ。いつか母と渡った美しい碧緑の彩の海、風駆け上がる坂が繊細レースのように町中をめぐる街、聖都の名をいただく沿海の海泡ミシュア。

あの海へエミリアと行けたら、それはどんなに美しく凝固するだろうか。

ライアンのこと、彼の布く掟のこと、別離、恫喝、反発、混乱、そんなもの、どうでもいい。考えたくない——せめて一瞬、ほんの僅かな時間でも、綺羅めかしくて温かな夢を見たい。

その何がいけない。考えたくない。ただひたすら、彼女と一緒にいる時間が欲しい。逃避なのだと分かっている、その淡く甘い夢は魅惑的だった。

「俺も……行く」

クインは呟いた。エミリアは首を傾げ、いいの？と聞いた。それが自分の仕事や学校や、その他のものを指していたのは分かっていた気もしたが、この瞬間に、それはライアンへの密かな背反を問うように聞こえた。

「いいんだ」

クインは僅かに動揺した自分を叱りとばすように、しっかりとした声で言った。

「いいんだ、エミル……いいよ、全部いい。一緒に行く……駄目？」

エミリアは明るい笑みになって首を振った。クインは頷き、エミリアの鞆を取った。着替えも何も持っていなかったが、耳にはいつかの真珠がはまったままだったから不安はなかった。いざとなればどうにかなるという楽観もある。

それに多分、これが最後の機会になるはずだった。ライアンがもうすぐタリアへ戻るだろうことは、チアロやディーのせわしない態度や目線の動きで分かる。はやく自分を納得させて事態を収束させたい目つきだった。

ならば一層、今を離れてはいけない。時限は近く、その限界線を越えた先には暗い未来しかないのが分かっている。母のことがある故に、結局自分はライアンのものだと言う羽目になるだろう。

だから今、尚更今、彼女と離れたくない。どこからが恋で何が依存なのかも知りたくない。彼女といえることで得られる安堵も安息も失いたくない。彼女といえれば自分が少しはましになれるような気が、彼女がふざけて描いた翼をいつか本当に持てるような、そんな気がする。

もっとエミリアに近くなりたい、側にいて肌の温度の分かるところで微笑み合って、心の感触が浸透するほど近付きたい。

これは恋なのだろうか。恋というのは存外分かっているようで分からない。けれどこのもの狂おしいような希求と切ない傾倒は何か劇的なものの前触れだと根拠なく信じている。だから告げなくてははいけないことはただ一つきりだ。クインは彼女の鞆を持って歩きながら、小さく言った。

「好きだ」

エミリアはじっとクインを見上げ、それから少し掠れた声をだした。

「私、あなたより3つも年上よ」

「関係ない」

「絵のことで利用してるだけかもしれないのに？」

「そんなこと、関係ない、全然」

重ねて言葉を返されて、クインはやや不機嫌な声音になった。彼女の方はじっと俯き加減に歩き続けていたが、やがてそっとクインの名を呼んだ。

「私、きっとあなたを好きになるわ——気が狂いそうになるくらい、今、あなたを描きたいと思ってる……」

エミリアの言葉にクインは頷き、鞆を持ち替えた。軽くあたった肘の下がするりと寄り合い、やがて指を絡めて掌が重なる。

二人は手を繋いだまま、ゆっくりと南と自由へ歩き続けた。クインはただ幸福だった。あれだけ罵りあい言葉を突き刺しながら一つも理解できなかったライアンとのことが急速に薄れ、遠くなっていく。

それはきっと、良いことに違いなかった。何よりも自分のために悪いことだとは思えなかった。

ユーエリ河に接岸する南下船への連絡馬車へ二人は乗り込んだ。時間は差し迫っていたから馬車はすぐに出立する。それが大路を折れて見えなくなってから、チアロはゆっくりと街角から歩み出た。駐車場の行き先をみて頷き、流しの馬車を止める為に手を振って合図する。

乗り込む直前、やはり同行していたショワを振り返り、チアロは言った。

「行く先はどうやらミシュアだ、ライアンにそう伝えろ。3日後の昼過ぎに船がミシュアに着くはずだから、クインは夕方までに奴の部屋へ戻す、と」

ショワが頷いて駆け去っていく。それを見送ってチアロは御者にたっぷりの金を押しつけ、目的地と急用を告げて馬車の座席に身をうずめた。

馬鹿だな、と低く呟いた声は誰にも届かない。それはむしろ、クインに何も有効なことを出来なかった自分に向けた声であるかもしれないとチアロはふと思い、こみ上がってきた苦いものに頬を歪めた。

優しい波だ。ずっと昔に家族で行ったシタルキア東部の海よりも、ずっと透き通るように淡い水がなだらかにうち寄せてくる。潮の匂いはごく僅かで、それよりも南から渡ってくる駈蕩とした風が肌にまろい。

どさりと砂に旅行鞆を置いて、クインが大きく伸びをする。時々はっとするほど粗野な仕草がなければ、完璧な少女に見えるだろう。ミシュアへ下る船の中でも彼は一際の美少女として耳目を集めていて、彼はそのあしらいに慣れた微笑みで周囲を圧倒するばかりだった。着替えがないから服を融通したが、実際エミリアよりも数段映えるのが苦笑になる。

クインは海風に乱れる髪をうるさそうに手で制しながら、エミル、と言った。

「あとで、その……どっか泊まる場所を探さないと……」

最後にふわっと赤くなるあたりが、商売に関わらず妙にすれていないようで、エミリアはつくすりと笑った。時々彼は、こちらが面食らうほど幼く初心い。

無論、泊まる場所を探そうという彼の言葉が何を含んでいるかを察しないことはない。船の中は一番安価な他の旅客と共同の大部屋で、広い空間に一応の仕切線がひいてあるだけの場所だ。

——それでも夜は二人で一枚の毛布をかぶり、額を寄せ合い、手を繋ぎあって眠った。彼が主人にはぐれた獣のようにおずおずと身を寄せてきた時、胸にゆるく湧いてきた気持ちは一体何に例えたらいいだろう。それはぬるい湯のようなもので、全身をひたして柔らかく、温かくしてくれるものだ。

彼の身体はぬくやかで、身を寄せていると小さく心臓の音が聞こえた。彼の皮膚も血も冷たいとどこかで思っていたのだろうか、それがひたすら胸に迫ってエミリアは最初の夜を殆ど眠ることが出来なかった。

伏せた瞼の半月のように魅惑的な曲線。薄く開いた唇の蓮桃色。頬に優美な影をうつす長い睫毛。そのどれもが美しいのは、それら全てが不安定で強く儚い魂の上に乗っているからなのだ。

横になったままで眠り込んでいるクインの頬を撫でると喉を鳴らしてエミリアの鎖骨あたりに額を寄せてきたから、腕を回して彼の頭をかかえるように抱いた。僅かに髪の毛の匂いがして、それはとても愛しく切なく自分を取り込んでいくようだった。

出会った時の顔を、思い出せない。あの時の彼はひどく歪んでくすんだ印象だけが全てで、他に記憶から探すとしたら何かに傷ついてひび割れたままの声でしかない。

一目見て可哀想な子だと思った。それは理屈ではなかった。ただ感じる、彼の背負った何かの影が目にも痛いほどだったから。辛さが頬の歪みに淋しげな色になるまでに滲んでいたのに、不満を口にしない。何よりもそれが胸を刺した。辛さや苦しさを訴える相手がいないのだ、この子は——……

そう悟ったから妹の為の絵を彼に見せた。人は何にでも救われるし希望を持てるのだということを知ってほしいとそれだけの願いだった——彼は泣いた。ぽろぽろと涙をこぼして、無言のまま泣いていた。希望、と言呟いた声音の震える重みがまだ耳の奥に残っている。

そして自分は彼に見惚れていた。あっけに取られるほど、彼は綺麗だった。誰かを困惑させる

為とか引き寄せる為の罫ではなく、純粹に胸の中の痛みをこぼす涙。それを見た瞬間に息苦しいほどの感情が降りてきたようで、彼を描いても表情がうまくまとめきれない。自然に背中ばかりが多くなってしまう。

だから船の中でクインが見せた沢山の表情が尚更眩しい。彼はとにかく良く喋ったし、笑いもしたし、なるほど成長期なのだと感心するほど食欲もあった。これが素地なのだ。

だとしたら、あれほどまでに追いつめられていた理由は彼が自分で言い出すまでは絶対に聞くことは出来ない。自分で言い出すまではまだ少しかかりそうだったが、とにかく明るい彼を見ていれば安堵になる。

船がミシュアに到着したのは昼過ぎのことだが、宿よりも先にエミリアは海を見たかった。そう言うクインは何度かミシュアへ来たことがあるらしく、この浜へ案内してくれたのだ。遠く霞む岬の遠景が、海の青さに色濃い緑をまぶして目に優しい。波の音も、光の影も、このミシュアを基点にやがて南海と言われる美しい島々へ到達することを信じさせてくれる。

エミリアが黙って遠くを見ていると、その袖が軽く引かれた。クインの方は少し怒ったような、困惑したような表情で佇んでいた。

「……あの、あのさ、部屋なんだけど……一緒にいい……かな」

そういえば、彼にきちんとした許しの証拠を与えていなかったとエミリアは気付いた。縋るような目をしている。心細くて不安な瞳の青が、この海の穏やかな色にゆったりとほぐれていくなら、それもいいかも知れない。

エミリアは自分の心をまさぐって曖昧に笑った。クインのことを一人の男として好きか、という問いにはまだ自信を持って頷くに足る確信がない。彼を見れば美しいと思い、その美しさが脆く繊細で不安定な魂の産物だと知り、知れば憐憫に変わる。実のところ自分のこの締め付けられるような胸の痛みが、一体同情なのか恋なのか判然としないのだ。恋愛は慈善事業ではないし、これが彼の不幸への共鳴なのかそれとも庇護欲なのか、そしていずれもっと昂る気持ちへ変わる前哨なのか、どれに結論つけて良いのか分からない。

「エミル……」

クインは返答がないことを焦れたように彼女を呼んだ。それから一瞬迷ったように視線を彷徨わせてエミリアの肩に手を伸ばし、ためらいながら抱きしめる。他にどうして良いのか分からないようだ。

——可哀想だ。エミリアは目を閉じて、クインの背中をそっと撫でてやる。彼への気持ちの中核にあるのは同情なのだろう。けれど、この気持ちはいずれもっと激しく強い何かに変わっていく。そんな予感がする。

描きたいという思いはその指針であったし、それがあつた限り彼をきつと愛するようになるだろうという確信はいずれ見つけられるはずだ。鏡の中の自分の瞳に。

エミリアはいいわ、とクインの耳元に囁いた。

「今日は一緒に……ずっと一緒にいるわ……」

クインが頷いたのが分かった。

やがて体を離したクインは照れくさそうにありがとうと言うと、腰の時計をちらりと見た。これは彼が最初から身につけていた物だ。

「俺、ちょっと行かなくちゃいけないところがあるんだ。……あの、そんなに長くはしないから、1刻かあと半分くらい、待ってて欲しいんだけど」

エミリアはそうね、と時計を覗き込んで頷いた。夕方には戻ってくるという意味であろう。分かった、とエミリアは頷き、砂に置かれたままの旅行鞆にくくりつけてあった画帳を引っ張り出した。

「いいわ、私ここで描いてるから気にしないでいってきて」

「ん……ごめん」

すまなそうに目線を下げる彼にエミリアは微笑み、いいわよと強く言った。鞆を開けて固形絵の具の箱を取り出す。それくらいの時間があるなら、色絵の一枚は写生できそうだった。どんな時でも一人で時間を潰すことが苦になったことはない。あいた一人の時間はエミリアにとって大切に貴重な時間でもあったのだ。

クインはここで待っていて欲しいと繰り返して、最後にもう一度ごめんと付け加えた。繰り返すのは不安だからだ。

——エミリアが自分を置いてどこかへ去ってしまう、という怖れにただ震えている。

行かないで。置いていかないで。クインの切羽詰まった目の色が訴えていて、深い青をしたそれを見つめれば切ない。信じていないのではなくて、ただ失うことが怖いのだ。何かを失うことしか知らなかったと泣きながら彼がこぼした夜の記憶がたった今、その淡い恐怖を気付かせて、エミリアを絡めてしまう。

彼を見捨てられない。彼が求めるのなら、一杯の水にでも頼りない糸にでもなろう。それが愛であれば、いつか必ず答えが出る。

「待ってるわ……ずっと、待ってるから」

エミリアは子供を諭すように、ゆっくり優しく言った。クインは頷いて、ごめんと同じ事を言った。目の中の切なく求める光はやはり変わらない。こんなにまで必死でクインが自分を恋していたことなど、今、初めて見る気がする。

愛おしい。

「どこにも行かないわ」

ただひたすらに、切なく悲しいほど愛おしい。

「あなたを待ってる、ずっとずっと」

うん、と頷く仕草が素直で普段よりもずっと幼くいとけなかった。クインはエミリアにそっと唇をよせようとし、何かに気付いたように離れた。人の声もするし、第一彼は今、少女の格好をしている。女二人でひたすら触れ合っているのは人目に奇妙に映るだろう。

クインはやっとぬるい笑みになった。それがようやくごく普通の笑顔に戻ったようで、エミリアはほっと息を付いた。

「じゃあ、また。その……後で」

クインの気安い笑みにつられてエミリアは頷き、後でね、と繰り返した。クインは嬉しそうに笑った。

花開く笑み。やっと見つけた。この表情だ——多分。

エミリアは彼の面差しをじっと見つめて深く頷く。自分は今、圧倒的な者の前に仕える敬虔な巫女であるような気がした。

夢中で描き上げた最後の一枚に日付を入れると、エミリアは画帳ごと鞆にくくりつけた。これは彼にはまだ見せたくない絵だ。筆致も感情も、全てが乱れていてとても絵になっていない。けれどその惑乱は決して悪いものにはならなかった。

自分の印象に刻まれたままに先ほどのクインの破顔した笑みを描き写したが、自分でも制御できない何かが指先から溢れてきて止まらない。まるで自分の意志とは関係ないかのような早さで手が彼を描き出す。

止まらない、止まる気配さえない。今までザクリアのアパートで見た彼の微笑みや不満な表情や、虚をつかれたまばたき、歪めた唇、淋しげな横顔、皮肉な影の落ちる頬、何もかもが一度に降りてくる。何故今までこれを描けなかったのか、忘れていられたのか、そんな疑問さえ浮いてくるほどだ。そんな狂騒の熱に浮かされるように1冊画帳を使い切って、はっと気付けば既に日は和らいで優しくなりつつあった。

クインが戻ってくると言った時刻までにはまだ少しありそうだった。エミリアは苦笑してはいていたサンダルを脱ぎ、海へ足を入れた。練炭で汚れた利き腕を軽く洗う。

それが済むと旅行鞆の中に入れておいた小さめの画帳を取り出し、絵の具で直接浜で遊ぶ子供たちを写し始めた。幻想画が画題の中心のように言われているエミリアであったが、実題のうち家族の絵は好んで描いた。

温かで柔らかい一つの箱のような、ぼんやりと優しい印象をエミリアは持っている。表現したいものがどうやら自分の場合は美しい光景ではなくて、優しく普遍的な愛と祈りなのだと確信するのはこんな時だ。妹を描くのもその為なのかもしれない。エミリアは少し息をついて、遊ぶ子供たちを眺めやった。

アスナの黒々とした目には深淵の闇が棲んでいる。それは月のない夜の星空と似た暗闇で、だからこそ美しかった。失ってみて初めて気付くものもあり、気付いた故に一層愛しくなるものもある。アスナの幸福が何であるかを自分が決めることは出来ないが、あの子にはどんなことでもしてやりたい——それが喩え罪であったとしても手をつけるだろうという確信が、どこかに眠っているのがわかる。

エミリアはそっと笑った。この旅行が終わったら故郷のステリオへ寄って妹の顔を見て帰るつもりが最初からあった。出来れば彼を連れて行ってやりたいが、クインはどれくらい一緒にいられるのだろう……仕事、ということは帝都を出た日からついぞ口にしないが、彼の仕事が決して暇であるとは思っていなかった。

今クインに必要なのは戻る巣であり、温かな寝床であるようにエミリアは思えてならない。自分に縋り付いてくる目が必死で、切羽詰まっているから分かる。

その為に彼が求めているものを自分が持っているなら差し出してやりたい。去り際にクインの浮かべた安堵の笑顔が瞼の裏に強くまざまざしく蘇ってきて、エミリアは感歎の吐息を漏らす。あれが彼の最も明るい笑みだ。そして、一番幼い。

彼はまだ子供だ、どんな意味においても。だから守りたいと思うのだろう。無垢であることが子供の証明ならば彼はまさしく無垢のままであり、自分が汚れていると感じつつけることで尚更頑なに美しく孤高にあり続けている。それがとても綺麗らしく感じると同時に、痛々しさを覚える

要因だったはずだ。

彼のことを、好きになるだろうか。エミリアは手を止めて子供たちを見やる。いつか自分にも、きっと愛し合って結ばれる相手が出来るはずだ。クイン以前につき合っていた男は故郷のステリオでの絵画鑑賞の同好会で知り合ったが、最後にはエミリアをなじって離れていった。

——君は絵が描ければいいんだろう？ 俺のこともきっと絵のついでかその肥やし程度にしか出来ないんだ……彼は絵を愛していたが描く男ではなかった。自分では描けないから一線で描く人を尊敬できると言ったのは同じ唇だったのに、エミリアの描く世界に彼の印象の色であった白が混ざり始めたのを喜んでくれたはずなのに、結局自分を踏み台にされたのだと言って離れていった。

好きだという気持ちならば、彼とのことにより多く見つけられた。絵の中でしか愛を語れないと言われてエミリアはそれなりに傷つきもしたし、怒りもした。クインに同じ不満を与えたいはずもないが、ではどうしたらいいのかは全く分からない。

エミリアは軽い溜息をついて、写生を再開した。そろそろ夕刻近い海は淡い灯火色になりはじめた光線を乱反射して、巨大なだんだら模様を描き始めている。それは一瞬の魔法のような風景だったから、描き留めるのを急かされるようで、自然に手が早くなり意識は平板になっていた。集中する時はいつもそうだ。

——だから、人の気配が背後にしたのをエミリアは長く気付かなかった。光の幻想を淡い色で写し終えて一息ついた時に、やっと背後に誰かが経っているのに気付いたのだ。絵を描いていると時折後ろから覗き込む者もいるから、それにやや鈍感になっていたのも本当だろう。

「こんにちは」

ふと振り返ったエミリアが何かを言う前に、少年はにこりと笑った。笑顔が明るく屈託ない。背はすらりと高く、手足が長い印象があった。色素の薄い髪は夕日に今染まり始めていて定かではないが、亜麻色というところだろうか。とにかく体格が細く長い印象が強く、ついで笑顔の人なつこさが胸に残った。

こんにちは、とエミリアは笑って見せた。相手の明るさに合わせた笑顔であったが、普通の挨拶ではこれで十分だった。

「絵、上手いね……声をかけようと思ってたのに、ずっと見ちゃったよ」

少年の言葉にエミリアは軽く微笑み、ありがとうと言った。絵は彼女の本業であったから、素人にこうして写生を誉められることには慣れている。少年は頷き、ちらりとエミリアの横を見やった。

「……隣に座っても？」

聞かれてエミリアは頷いた。少年の持っている空気には敵意を感じさせるものが何一つなく、朗らかな気配の居心地がよかった。少年は嬉しそうにエミリアの隣へ腰を下ろし、もう一度エミリアの絵を誉めた。

「俺、あんまり絵は見ないんだけどあなたの絵は好きだな……何だか優しくて泣ける」

エミリアは首を傾げ、そう、と曖昧な返答をした。写生は子供たちと夕日の海だけで、それも素描に近いからそんな印象を受け取るには多少材料が足りない気もしたのだ。少年は訝しげなエミリアの表情に気付いたらしく、照れたように笑った。

「ああ、いやほら、この前ザクリアで展示会やってたでしょ？」

それでエミリアは多少の納得に微笑んだ。この少年のことは記憶にはないがずっと会場にいたわけでもないし、展示会のことは事実だったからだ。ほら、と少年は証拠を掲げるように上着のかくしからカードを取り出す。エミリアはそれに破顔した。

それは展示会の告知に使った天使の絵だった。水の青を基調に天使と魚群を描いた絵で、これは評価会でもよい評をつけて貰えた一幅だ。何故か巡り巡って今、リユース皇子の元にあると聞いている。絵のモデルを最初皇子に頼もうとして断られたのだから、不思議な縁に思われた。

「この絵が綺麗だったから、俺、ザクリアであなたの画集も探したんだ。結構出てるんだね、色々あって驚いたよ」

エミリアは曖昧に頷いた。今何冊出ていたろう——画集については本人に権利料が僅かに支払われるだけであまり現金に変わるものではなかったが、何よりも絵の告知になるために厳密に条件を取り決めたことはなかった。少年の言う画集が何であったのかは分からないが、そんなうちの1冊だろう。

「画集はいろんな所から出ているから、気に入ったら見てやって」

「うん、そうする。妹さんの絵があったでしょ、幻想の連作のやつ。あれが入ってるのがいいな。何かある？」

「そう……だったら、そうね……」

エミリアは少し考え、画集の中で妹を描いたものが多めに入っている本を記憶に探り出し、題名を画帳の隅に書いてちぎった。これがいいわ、と言うと少年はありがとうとくしゃりと顔を潰すようにして笑う。笑顔の心地よさが明るくて、一瞬クインにもこんな顔が出来ればいいのにと、そんなことを思った。

少年は紙片を服の内側に入れ、エミリアに頷いて立ち上がった。夕日というべき温かな色に照らされて、少年の影が長く伸びる。彼は決して飛び抜けた美形ということではなかったが、人好きのする性質と穏やかで明るい笑顔が人に落ち着きと微笑みを与えるようであった。天真爛漫というほどに幼くもないが、それでも明朗な表情が誰であっても悪い印象を受けないだろう。

エミリアは置きかけていた練炭を取った。表情や仕草の雰囲気、僅かでも写し取っておきたかったのだ。と、それに気付いたらしい少年がやめてよ、と苦笑になった。

「俺なんか描いてもいいことなんかないよ」

いいえとエミリアは首を振る。少年の身についている雰囲気は、どこかに描き留めておきたいという欲求を興させた。エミリアはすぐだからと素早く言って、写生を続けようとした。

待って、と手首が掴まれたのはその時だった。そんなことをされるのは初めてで、エミリアは思わず小さな声を上げる。だが、少年は掴んだ手を放さないままやめてよ、と繰り返した。

「俺なんか描いてもろくな事にならない——無論、彼もだ」

エミリアはふと表情を引いて少年を見た。彼、と少年は言った。それが誰のことであるのか、一瞬繋がらない。彼、と怪訝に呟いた次の瞬間、それが最前まで自分が呟いていた言葉と重なった。

「彼……」

エミリアは喘いだ。上手く呼吸が出来ない。彼、と繰り返してエミリアはふと冷たい眩暈を感じてこめかみに手をやった。そう、と少年が肯定する為の強い口調で言ったのが聞こえた。エミリアは顔を上げ、側に立つ少年を見上げる。彼はまだ微笑んでいて、それは先ほどまでと変わらない、明るく裏のない笑顔だった。

「そう、彼。あなたに何と名乗っているかは知らないけど、彼だよ。……彼と最初に会うのに俺たちに連絡を取ったのはあなただったね、エミリア＝スコルフィーグ？ 担当していたのが女だったろう、やけに暗い女——つまり、あなたはあの女を通して彼にまつわる世界のことを感じなくてはいけなかった」

エミリアはじっと少年を見つめた。夕映えの中で少年は苦笑気味ではあるが、やはり明るく笑っている。何の気負いや凄みも感じない。だからこそ、これが少年にとって特に威圧を加えなくてもよい程度の、ごく普通の通告だと知れた。

潮風が一瞬強く増し、エミリアの肌を叩いた。それに我に返ったように、背がぞくりと冷えた。

「……でも……あの子は」

何の当てもないまま反論しようとした時、手首が痛んだ。少年が掴んだままだったそこを、きつく握りしめたのだ。一瞬の圧迫の後で手先が痺れてくる。エミリアは呻き、その瞬間に指先から練炭が砂に落ちた。関節がぎりっと合わさって軋む音がする。ぴくんと反射で自分の指先が撥ねるのにエミリアは喘いだ。息苦しい。

「例えば、あなたが絵を二度と描けないようにする、ということも出来る。どこをどうすれば人の身体が駄目になるかくらいは俺でも知ってるんだ、ご主人にそう教えて貰ったから……あ、ごめんね、痛いでしょ？」

少年はにこりと笑って手を離す。途端にどっと血が通い始めてエミリアはそこを押さえた。急激な血液の温度がかあっと火照るようで、強く手をさする。感覚は見失ってはならない。

「でも、俺はそんなのはやだな。あなたの絵は本当に好きなんだ……彼のことで色々こっちで調べた時に見て、本当に好い絵だと思った。だから、これが俺の好意だと信じて欲しいんだ——今すぐ一人で、帝都へ帰ってくれたら二度とあなたの周辺に近付かないと約束する」

エミリアは反射的に首を振った。クインに二度と会わない、という意味であることはすぐに分かった。そんなことは出来ない——すべきではない。彼の瞳に自分へのまっすぐな光を見てしまったのに、それを見捨てるなど出来るはずがない。

だめよ、とエミリアは低く呟いた。

「今私があの子を見捨てたら、あの子には帰る場所がなくなってしまう。それは駄目よ。絶対に駄目。せっかく、良くなってきたのに……」

描けなかった表情。彼の上全体に落ちていた、重苦しい影。それが次第に薄れていった夜と昼が、言葉につられるように戻ってくる。エミリアはだめ、と繰り返した。

「駄目よ、また元に戻ってしまうわ……」

言いながらエミリアはその胸痛む想像に顔を歪めた。出会った夜のような歪んだ印象へ彼が戻ってしまうとしたら、途方もない罪悪感だけが残るだろう。やっと普通の少年らしい表情が覗くようになったのに、それがまた取り繕って刺々しい殻に引き戻されていくかと思うと胸が裂けそ

うだ。

だめ、と繰り返しながらエミリアは何度も首を振った。少年は曖昧に頷き、エミリアに額を寄せて囁いた。

「そのことは俺も反省しているし、後悔してる。奴がずっと淋しくて苦しんでたのを俺は知ってた。知ってたけど、俺はそんなに酷いことじゃないと思ってた……少し我が儘なところがあるんだと。でも、奴がどれだけ追いつめられた気分だったかは良く分かった。奴の渴きを俺は癒してやれないが……」

少年は頬を歪めて切なく笑う。

「けれど、その方法を知っている。こんなことは二度とさせない。奴をこんな風に飢えさせない。それも約束しよう」

だから、と言われてエミリアは首を振った。だめよ、と言い募る自分の声が揺らいでいる。彼を今この瞬間に愛しているかと言われたら分からない、としか言いようがない。けれど彼の助けを求める声に頷き伸ばした手を、今ここで引いたらあの子は二度と立ち上がれないかもしれない……

それだけはしてはだめ、とエミリアは強く自分に頷きかける。駄目よと更に繰り返した声はそれまでよりもしっかりと強く聞こえた。

「私は、あの子を見捨てたらいけないわ。出来ない、そんなこと……」

言いながらエミリアは立ち上がる。少年から少しでも離れたいと思ったのだ。少年はその反応に淡い苦笑を浮かべ、エミリアの鞆をさっと奪い取って行こうか、と言った。

「船着き場まで送るよ。帝都まで一人、個室を買っておいたから。さあ、急がないとあまり時間がない」

「返して。私はいかないわ。ここで待っていると約束したもの」

手を突き出すと少年は仕方なさそうに笑い、エミリアの鞆を砂に置いた。

「……君がどうしても、と言うなら仕方ないね」

声はあくまでも軽く明るい。それがひどく底知れなく恐ろしくて、エミリアは半歩後じさった。逃げないで、と少年が素早くエミリアの腕を掴む。離して、と叫んだ声が途中で裏返し、悲鳴のようになった。けれど、誰も近寄ってこない。自分の声が酷く掠れて震え、小さく強張っているのに気付いたのはこの時だ。エミリアは低く呻き、離して、と震える声で言った。

「離して、……私を……どうする、の」

クインの関わっているのが帝都の闇にほど近いのだと知っていたはずだった。タリアから彼が来ていることも。タリアの華やかで猥雑な表面の下にはこの国の暗部を引き受ける深い闇がある。その王たるのがタリア王であり、その幹部たちや部下たちがどれだけ悪辣で残虐かは今更語るほどのことでもないはずだ。

沢山の暗い逸話が不意に瞼の奥をよぎった気がしてエミリアは震える。それを何とか悟られないように殺そうとしていると、少年がどうもしない、と返答した。

「あなたのことはどうもしない。でも、今帰らなくてはいけない。そうでなければ、まず5日後にあなたの親しい人がいなくなるよ」

「——何……？」

エミリアは思わず瞬きをした。彼の言う意味が良く分からない。ぽかんとしていると、少年はゆっくりエミリアに近付いて、その頬を軽く撫でた。神経の具合が繋がるように、その瞬間にざあっと背中が粟立つような感覚が走った。

「……そしてそれでも帰らなければまた5日後に、別の人がいなくなる。悪いけど、留守中にあなたの部屋には何度か入らせて貰った。手紙があるね——故郷の恩師、近所に住んでいる親戚、それと初等学校の頃からの友人たち……帝都の同僚、絵の同人会の仲間、あなたにちょっと気のある画廊の若旦那、学院の友人たちに、写生を教えている生徒たち、それに」

少年は一度言葉を句切り、まっすぐにエミリアを見た。

エミリアは口を開けた。悲鳴を上げたいと思ったのだ。けれど、唇からは何もこぼれてこない。上擦った自分の呼吸が不規則に打ち出す音だけがする。木枯らしのような音が。

「それに……」

少年が言いかけた言葉を引き留めるようにエミリアは彼の腕を掴んだ。やめて、と動かした唇が、一体どこまで正確に発音を刻んでくれたか分からない。けれど、彼が何を言おうとしたのか、直感が教えてくれたのだ。

少年はエミリアの制止には構わず、それに、と強い声を出した。

「あなたの肖像画はよく似せてある。妹の題の絵を見れば、どれがあなたの妹かはすぐに分かるはずだ……あなたの部屋にあった彼の絵も、背中だけなのに確かに奴だったから」

「やめて……あの子は、関係ないわ……」

エミリアはぎゅっと目を閉じる。黒く冴えた瞳の少女が、脳裏をゆっくり歩いている。姉さんと呼ぶおっとりした、芯の強い声。やめてと呻いた声は、今度こそ震えて強張っていた。

「妹は——他の人は、関係ないでしょう？ どうして、そんな、……酷いわ」

「うん、そう、酷いよね」

他人事のように少年は呟き、彼に縋り付くような姿勢のエミリアの背をゆっくりと撫でた。でもね、と呟く声は最初に声をかけてきた時とやはり同じだ。

「あなた、彼と会うのは一度きりだという約束を守らなかったね……それだけでも本当は殺せと言う連中もいる。俺は俺たちのことに本当は関係ないあなたを巻き込むのはいやだから、一度あなたを説得する機会をもらった」

「説得ですって？」

エミリアは急にかあっと頬に血が上るのを感じて面差しをすくい、相手へ強い視線をあてた。少年はやはり微笑んだままで、それが尚更怒りに変わった。

「これは脅迫でしょう？ 私があの子を捨てなければ、私の周りの人を殺すというのに！」

「決めるのはあなただよ、エミリア？ それに脅迫っていうのは、最初の一人を殺してからするものさ」

エミリアはきっと奥歯を噛みしめて相手を睨んだ。睨まれた方はゆるい笑みを浮かべたままでどうする、と何度目かを口にした。

「あなたは帰らなくてもいい。すぐに妹さんにも危害が及ぶわけではないしね。でも、それがいつになるかは教えられない。だからいつ手が伸びるのかをあなたはいつも怯えていなくてはいけ

なくなる——奴とのことをその他全部と引き替えてもいいというならそれでもいいんだ、ただ、それにどれだけの覚悟と実際の犠牲を伴うか、というだけの話」

少年は軽く笑い、つとエミリアから離れて大きく伸びをした。しなやかな背中。気負いなくまっすぐに伸びて、まるで影さえもない。ひどく惨い脅迫を口にしながらも終始彼は穏やかで、どこか済まなそうな気配さえあった。裏も感じないから、これがこの少年の素地なのだろう。クインにあったのが思いの外幼い明るさであったことと同じように。

「で、どうするの？ 奴の為に全て失っていいというなら、俺にはもうあなたには何も言うことがない……奴が帰ってくるのを待って奴に同じ事を言うさ」

エミリアは低く喘いだ。クインに同じ事を言った時、彼はどんな顔をするだろう。あの強く切ない光で自分を見つめて、何を言うのだろう。

——それが全てを捨てて欲しいという言葉だったら、どうしたらいいの。それが思いの外強い動揺であったことにエミリアはうろたえ、うろたえたことで目の前が暗くなったような気がした。

迷っている。いいえ、多分これは迷いでさえない。彼には救いが必要。エミリアはそれを与えてやりたい——でも。

目を閉じるとこの春に最後に会った時の妹の、あどけない笑みが浮かんでくる。細い首と手足、華奢な肩とほっそりした指。あれを失うことなど考えられない。

アスナ、私の可愛い妹。たった一人の肉親、私のための希望。

アスナ。呟くと、涙が出そうになる。それを飲み込んで堪えた時、おこりのように震えが来た。

「駄目よ、そんなのは駄目」

叫ぼうとしても声にならない。今頷いたら全てが消えてしまう。紺青の海にしどけなく漂う水泡のようにその淡い夢のように、全てが呆気なく終わってしまう。彼のことを愛そうと思ったことも、彼が自分を見て切なく縋り付いたことも、二人で手を繋いで眠った時間も、——彼の背中に垣間見た美しい翼も。

それは駄目だと思う側から、だが体は動かない。震えているだけで、ぴくりとも出来ない。エミリアはたった一つ出来ることをする。目を閉じればやはり浮かぶのは黒髪を風に軽く任せて笑う、妹の無垢な笑顔だった。

少年がそっと近付いてきて、エミリアの肩を抱いて言った。

「大丈夫。ゆっくり息をして。俺は約束したことは守るよ——彼のことは俺がどうにかするから、心配しなくていい」

囁くような声音が優しい。エミリアはそれに引かれるように頷いた。頷いた瞬間に、体中から力が抜けて座り込んでしまう。

戻れない。分からない。

何が正しくて間違った判断なのか、きっと一生答えなんかでないはずだ。妹を助ける為にクインを見捨てる、これが正しいはずはないのに。

けれど怖い。クインの背後にあるはずの組織の全容は知らないが、ある、ということだけでも

十分なはずであった。そしてそこからの使者はエミリアの知人と肉親を無差別の人質にとると宣告した。エミリアが折れなければきっと実行に移す。

「だから先に帝都に戻ってくれるね？」

念を押すように囁かれた言葉にエミリアはがくりと項垂れ、小さく首肯した。こくりと頭が垂れた瞬間に、堰を切ったように涙がこぼれ落ちてくる。

彼を哀れんでいたし、彼を愛しんでもいた。青い宝石のような瞳が切なく自分を見つめていることが歓喜と困惑を両方連れてきた。

エミリアに縋る目、ためらいがちに伸ばされてきた手、好きだと言った時の切羽詰まって掠れた声。そのどれもが淋しげで、だからぬくぬくと甘やかしてやりたかった。湯浴のようにゆったりと普遍の愛と祈りに浸らせて癒してやりたかった。

——でも、妹と引き替えには出来ない。

「ごめんね……」

掠れた呻きに少年がごめんよと付け足し、エミリアの腕を掴んで立ち上がらせた。砂に足を取られて僅かによろめく。

「もう行こう、船の時間がある。荷物はこれだけ？」

少年が鞆を取ろうとしたのをエミリアは触らないで、と強く言った。クインを失う悲しみよりも、このやり方や唐突さへの怒りがひどく暗い声音にしていた。

「——一人で行くわ。構わないで……」

呟いて鞆を自分の方へ抱き寄せる。鞆にくくりつけた画帳ごと一度抱きしめて、エミリアは画帳を外した。

「これをあの子に渡して……あの子を描いてたの、全部この中にあるから」

うん、と少年が頷き、代わりに船の指定切符を差し出した。エミリアはそれを受け取る。これを少年がお詫びにと言うならそれも良かった。何より、他人に紛れたくない。河を上る便だから帝都まで5日ほどかかるその間を、一人になりたかった。

「あの子にごめんねって、言って」

少年は肩をすくめてそれは言わない方がいいと思うよ、と言った。エミリアは一瞬を置いて頷く。確かに少年の言うことは正しかった。

「……これは必ず彼に渡しておく。……中を見ても？」

「いいえ」

エミリアは強く言い捨て、返答を待たずに背を返した。

回帰線の間際に太陽が隠れていこうとしている。その薄く弱い光を頬に感じながら、エミリアは早足でその場から、そしてクインの未来と運命の中から立ち去るために歩み出した。

窓の外には緑の濃い色が、夏の明るさを主張している。途中で母の為に買ってきた花を適当に水に挿しながら、自分は何かを口ずさんでいたらしい。

「今日は何だか嬉しそうね」

母親の言葉でそれに気付き、クインは照れの為に頬を歪めた。エミリアが自分を待っているだろうと思うと足が着かないほど浮かれているのが気恥ずかしい気もしたし、自覚していてさえ胸の奥が柔らかくさざめいているのが分かる。

「何でもない……わ。大丈夫。上手くやってるから、心配しないで」

いつもと同じ言葉をすらすらと口に乘せ、クインは花の角度を指先でいじった。白い薔薇の大輪がそっと揺れる。母は手にしていた刺繍枠を下ろし、クインの横へ立った。こうよ、と言いながらこうしたことに器用でない息子の仕業を直していく。

「……いい薔薇ね」

肉厚でしっかりした花卉を指で撫でながら、母が呟いた。

「お前、これがなんて花だか知っているの？」

「薔薇……じゃないの？」

きょとんとしたクインに母親は少し笑い、『麗しきイリーナ姫』よ、と言った。ふと細くなった母の瞳が哀しげに淡く微笑んでいる。

イリーナという名にクインは内心ぎくりとする。その名は現在の皇妃であるイリーナ・ロシェルを指しているのだろう。あの皇子の実母であり、即ち自分のおそらくは真実の母の名であった。それを思えばひどく切ない。皇子のことを憎んではいけないと知っているはずなのに、皇子のことを思うたびに焼き切れそうな怒りと憎悪を覚えるのは自分が狭いのだと理解しているはずなのに、それはいっかな弱くなる炎ではなかった。

自分の胸の中の、荒れる炎の幻影。何もかもを手に入れなくては嫌だと吠えて、自分を捨て去ろうとするもの全てを焼き尽くしたがついている。ライアンのこと、その熱に煽られあぶられて追いつめられていった。自分でさえ焼いてしまいそうな激しさが、時折自分で恐ろしくなる。——いつかこれが自分自身を殺しそうだ。

不意に胸に湧いた不吉な言葉にクインは目を伏せ、ゆっくり呼吸をした。イリーナの名の由来を自分が知っているとは悟られたくなかった。母の胸の中にある罪をいつか聞かなくてはいけないとしても、それを受け入れることが今の自分に出来るなどとは到底思えなかった。

「そう……イリーナ姫？ 綺麗な品種ね。香りがちょっと強いから、窓を開けるわ」

クインは微笑みながらそんなことを言い、手を伸ばして硝子窓を押した。小さく木枠が軋み、ついで外の風と空気が吹き込んでくる。

「いい風……」

クインは呟いて、梢の向こうに瞬き見える海へ視線をやった。エミリアは今、何をしているだろう——絵を描いているだろうという予測とは別に、今彼女がどんな表情で何を描いているかを知りたい。

もっと知りたい。彼女のことを。二人で身を寄せ合って眠った船の中、目覚めると彼女の柔らかな腕の中に収まっていたことがあった。指を絡めると、無意識に握り返してきた。

掌の熱、肌の温度、髪の匂い。決して美しい女でもないし、絵のこと以外にはごく普通の女だ。それは分かっている。

けれど——でも、彼女しかいない。自分を捕まえ、微笑み、特別だと優しい言葉をくれるのは、彼女しかいないのだ。ライアンが戻ってくれば彼女の為に二度と会わない方がいいとは分かっている。ライアンがどう判断するかは分からないが、エミリアを手にかけて全てを短絡に葬る可能性は低くない。奴は人を殺すのが好きだからな……クインは苦く奥歯を噛み合わせる。チアロでさえ眉をひそめているではないか。元々チアロは殺人についてはあまり積極的でないことはあるが、それにしてもよい趣味だとは思えなかった。

「……何かあったの？」

母親の優しい声が背中を撫でて、はっとクインは顔を上げた。自分は随分難しい顔つきで窓外の枝を睨んでいたらしい。慌てて顔を弛めるための満面の笑みを作り、何でもない、と言った。

「もうすぐ夏期の中途入学の受験期だから、少し気になるのね。生徒から何人かは受けることになってるから」

仕事は塾の講師ということにしてある。いつまでこんな風に誤魔化すのだろうという自嘲がそっと胸の奥に囁いたが、クインはそれを無視した。いつまで、ならば簡単だ。この嘘が知れてしまうまで——つまり、永遠に。

「そう……あまり無理はしないのよ。昔から、そんなに丈夫な方じゃないんですからね」

クインは頷く。虚弱というほどでもないが頑丈ではなかった体質は、やはり根の弱い体質だというリュース皇子のそれと重なる。こんな些細な状況証拠を積み上げた末に、血縁はやはり確信というものに変わっているのだった。

「大丈夫、母さん。私は……全部大丈夫だから」

母を安心させる為に繰り返してきた台詞をまた口にして、クインは笑って見せた。そう、と母は頷きかえし、しばらくクインを愛しげに見つめてから言った。

「ねえ、お前……好きな人でも出来た？」

母の声にクインは思わずえ、と聞き返した。それからぱあっと赤くなる。慌てて俯いても、尚更頬に血が集まってくるようで止まらない。

「や、ちょっと待って、何でそんな……母さん」

何か取り繕うようなことを口の中でしきりと呟いていると、母は明るい笑い声をたてた。クインはますます赤面するが、表情に出るものは隠しようがない。次第に仕方ない笑みになってクインは照れたまま肩をすくめた。

「別に、そんなことないわ……第一こんな格好でどうしろっていうのよ」

女装のままの姿であったから、母はそうねと苦く笑う。でも、と付け足された言葉は優しいが苦みに満ちて悲しげであった。

「でもね、お前もどんどん成長するわ。見る度に大きくなる気がする……この格好もあともう少しになってしまうわね」

クインはやや真面目な表情でそうね、と曖昧に返答した。体つきはどんどん男性的になっていく。細身の体格はともかく、肩の広さや腕の関節の大きさは確かに男のものだ。身長がどこま

で伸びるかは分からないが、女装では目立ちすぎるようになってしまうまで僅かというところだろう。

但し、クインは自分の美貌については強烈に自負というものを持っている。まだ少しの間ならば、女装でも通せるのではないかという感触はあった。誰もがクインの容貌に目を奪われるため、体型は後から印象に付加されるだけの追加事項に過ぎないのだ。美少女という印象さえ与えてしまえば後はどうにでもなる、というのはあまりに適当な仕儀だが、それをまっとうするだけの雰囲気を作る自信はあった。まだしばらくは大丈夫だろうとクインは考えている。

「そのことはどうにか考えるわ。あんまり厳しいと、ここへも来られなくなってしまう……」

言いながらそれが一番恐ろしいことだとクインは思う。やはりあの時ライアンに下手に取りすがって戸籍を貰わなくて良かった。真実母娘の戸籍を用意できていたら、臨機応変というわけにはいかなくなるではないか。今更自分の選択を追認してクインは大きく安堵の溜息をはき、母さん、と言った。

「でもしばらくは大丈夫。まだ普通にしていれば誰も気が付かないから」

クインは笑い、母親の手袋の上から軽く唇を押し当てた。この病にかかってから母は接触を極端に怖れるようになった。感染値は下がっているから今はもう遮蔽幕もないし部屋の外へも出ることが出来るが、素肌を触れ合わせることは絶えている。

だからいつも頬ずりや軽いキスで確認してきた愛情は、いまは薄い手袋越しのこのキス一つであった。それでも、黒死の証明とも言える黒ずんだ肌は今のところ指先だけだ。それ以上広げない為にクインは自分を提供することを選んだのだから、手袋をしていても唇の温度を知っていて貰えるならば報いはあるのかもしれない。

「またね……母さん」

クインは柔らかに笑いながら告げる。陽は次第に傾き始めていて、窓の向こうの遠い海は屈託ない青から夕陽の反射の鈍い灰色になりつつあった。今からミシュアの街へ戻るならば、夕方になってしまうだろう。

母は頷き、ねえ、と優しく彼を呼び止めた。クインは首を傾げてみせる。窓辺の椅子から母は立ち上がり、愛しくクインの前髪を整えてやりながら言った。

「いつか好きな人が出来たら教えて頂戴ね……お前の為にいつでも祈っているわ。お前の幸せと、お前の愛を」

クインはじっと母と決めた女を見つめる。マリアは柔らかに笑ってクインの手をぎゅっと握りしめた。うん、と小さくクインは呟き、誰にも聞こえないように母の耳元で小さく囁く。

「分かってる。でもそれはもっと遠い時間だと思う……」

ライアンとのことがある限り、エミリアは通り過ぎていくだけのことになるだろう。それでもいい。今彼女の持つ愛と癒しが欲しいのは本当だから。

母は頷き、ごめんねと小さく言った。クインは首を振る。本当は、マリアと名乗り彼の母だというこの女を見捨ててもいいはずだ。けれど、そんなことは出来るはずがない。それは既に自明であり、納得が済んでいることでもあった。そして血のつながりがないことをクインが知っている、ことをマリアには悟られてはならなかった。あくまでも優しい子として、ただ母を思い案

じている子であると思っていて欲しいのだった。

クインはまた、と強く言うと背を返した。扉を閉める一瞬に、母の笑みが視界をよぎった。瞳の奥にある、柔らかで温かな表情。かちゃりと錠金具が噛む音がした瞬間、クインは既視感に微かな溜息をついた。瞬間母の瞳にあった光と良く似たものがエミリアの目にもある。

途端、クインは上がってきた羞恥の為に赤くなる。エミリアへ向かう心の中核が何であるかを突然思い知ったような気になったのだ。まるで子供じゃないかと自分を苛立たしく思いながら、クインは溜息になった。エミリアが完全に自分を愛しているとは思っていない。どこか彼女は同情的でそれが自分を多少卑屈な気持ちにさせるけれど、いとおしさというものに完全な境界線などないのだから、それも一つの思いなのだろう。それでも今夜はずっと一緒にいてくれると言った。

——どこか、眺めのいい部屋を探そう。町の向こうに海が見える部屋を。ミシュアの街は大きくて、きっと夜でも明かりを消せば地上の灯火が星のように綺麗なはずだ。一晩だけでも一瞬でも、彼女とのことを一番美しく思い出せるように。

愛や恋という名前は後から考えればいい。後から振り返れば幻のようなことかもしれない。たった一夏で通り過ぎていく、美しい夢のような。

けれどそれに縋って僅かにでも希望を見ていられたらどれだけ幸せだろう。希望という言葉を教えてくれたのもエミリアだった。彼女の持っているごく普通の当たり前の優しさにずるずると甘えたくなる。陽の降り注ぐ窓辺やぬるい湯に浸かっている時のようなゆったりした心地よさにただひたすら身を沈めたい。

エミリアに会う以前ならばそれが真実からの愛ではないと叫んで拒否しただろうか。けれど、それをはねつける気力などもう僅かも残っていない。彼女の微笑みというぬるま湯につかりきってから、ああ自分は本当に傷ついていたのだと覚えることが真実なのだ。

クインは足早に療養所を出てミシュアの街へ向かう。来る時は坂を上るためにやや時間がかかるが、帰りはほとんど駆け下りていくような勢いで下っていった。頬を海からの風が撫でて通り過ぎていく。エミル、と胸内で彼女を呼んでクインは一人で笑い、慌てて顔を引き締めた。

エミリアが待っていると言った砂浜は船着き場からほど近い。療養所は市街地からやや北寄りに外れた場所にあったから、畢竟ミシュアの街をよぎる格好になる。

クインがやっと元の浜へ戻ったのはだから、陽が落ちてからのことだった。まだ残光の気配が濃厚に漂って、空の低い場所は燃えるような色だ。砂浜には既に人影がまばらだった。そろそろ家路を辿る時間であるのだ。

クインはざっと周辺を見渡し、怪訝に首を傾げた。彼を待っているはずの人の姿はどこにも見えなかった。確かこの辺りに、とエミリアが座り込んでいたような箇所へ歩いていっても、そこには夏の光線のせいでまだぬくい砂があるばかりで、彼女の気配さえない。

「……エミル？」

口に出して名を呼んでみても、返事はどこからもこない。クインは眉をひそめて辺りを落ち着き無く見回し、腑に落ちないままその辺りの適当な店を目で探したが、やはりエミリアの優しい姿は見つけられなかった。

エミル、とクインはもう一度呟く。訳が分からない。何度か瞬きしてからやっと、彼女の荷物であった大きめの鞆が消えていることに気付く。

クインは首を傾げ、唇を結びながらじっと砂へ視線をやった。鞆がない、エミリアがいない。……先に宿でも探しに行ったのだろうか。それはそれで構わないのだが、自分を待ってくれないのがいかにも彼女らしくなくて……奇妙だった。

戸惑ったままクインは更に近辺を見やり、溜息になって砂に座り込んだ。場所はここで良かったはずだ。宿でも探しに行ったのか、とにかくここを離れたなら必ずここへ戻ってくるだろう。鞆がないのは置き放しておく訳にもいかないからだ。

自分の中でそう整合をつけて決着すると、クインはまだぬくい砂に指で意味のない線をゆるゆる描き始めた。

浜辺とはいえ波打ち際からは遠い場所では砂は乾いてさらさらと指を滑る。他にすることもなくてぼんやりかき回していた無意味な線はいつの間にかエミリアの名をつづっていた。

エミル。クインはそれに目を落とす。彼女の空気もなだらかな優しさも、全てが欲しい。女を知らないわけでは勿論なかったが、いつものような態度で相手を蹂躪する気にはならなかった。そんな事を考えていると、ひどくそぞろで高ぶった気持ちになる。意味のないあやふやな笑みをこぼしては飲み込んでいると、砂をかき回す手にこつんと硬いものが当たった。

視線をやると、黒い小さな棒のようなものが目に入った。クインはそれをつまみ上げる。これは見たことがあった——エミリアの手にある所を何度も目撃しているからすぐにわかる。写生用の練炭だ。エミリアが自分で使いやすいように握る部分を若干えぐってあるため、彼女の持ち物だとすぐに分かった。

クインは一瞬それに視線を与え、立ち上がった。彼女がこれを捨てていくなどあり得ない。何かがあったのだ。探さなくては、と軽くスカートの砂を払って走り出そうとした時、黄昏の中を歩いてくる人影に気付いた。

ちらりと視界の端をよぎった影を無視して通り過ぎようとし、クインは足を止めた。一瞬逆光になる影の中に、既知の空気を感じ取ったのだ。クインは影に向き直り、二、三度まばたきを

した。……微かに呼吸が上擦ってくる。すらりとした上背のある身体が片手を挙げて簡単に彼に合図した時、クインは何かを呻いて後ずさった。

「チアロ……」

夢うつつに呟いた自分の声に撲たれたようにクインははっと身を強張らせ、近寄ってくる友人から更に同じだけ後ろへ下がった。痺れたような塊が腹の底から上がってくる。それが喉を通過した時、喘ぎになって唇からこぼれた。

「……チアロ、お前……」

何故、という疑問は浮いてこなかった。クインは一瞬強く目を閉じる。最初から尾行られていたのだという確信は少しも動かない。何のためにという疑問さえ、愚かだ。

急に心臓が早く打ち始め、クインは呻きながら額に手を当てる。喉が干上がったように痛い。全身から水が抜けてしまったようにかあっと頭の中までが熱いのに、血の流れだけが速くどくどくと脈を打って止まらない。クインは喘ぎ、首を振った。

「大丈夫か、クイン？」

いつもと変わらないチアロの声が、その瞬間、混乱の為に濁った脳裏にきりっと一本の正気を与える。それは重要で重大なことを聞く理性だ。

「俺に触るな」

差しのばされたチアロの指先を叩き返し、クインはその腕で友人の胸ぐらを乱暴に掴んだ。

「エミル——は、エミリアは、彼女は、」

「大丈夫。無事に帝都行きの船に乗せたから」

クインは持てるだけの力を視線に込めて友人を睨み据えた。チアロは少し困ったように笑い、本当だよ、と穏やかに言った。

「5日後に帝都に着く便だから、心配なら見に行けばいい。但し、遠くから見るだけだ。二度と会うな……次があればライアンは俺に命じなくてははいけない」

その名前にクインははっと手を離した。チアロがこの瞬間にこの場所にいること、ザクリアから尾行されてきたこと、いや違う——ミシュア行きはクインにとっても唐突で衝動的な行動だった。

次があればというチアロの言葉がするすると全ての解答を掴み出す。

「ライアンは……もうタリアにいるんだな」

クインは呻き、更に導き出した答えに全身が逆巻くような眩暈を覚えた。

「俺を……試した、な……」

最後の忠告とやらをチアロやディーを通じてクインに与え、その上でクインがどう判断するのかを待っていたのだ。チアロが僅かに時間を迷った後で頷いた。

クインは目を閉じる。憎悪や怒りさえ、啞然というべき自失の前に崩れ落ちていきそうだ。試した、と繰り返して呟いて、ようやくそれを飲み込むことだけに成功する。

無事だとチアロが言うならそれは信じてもいい。二度と会うなという通告も、これは最前から自分でも覚悟していたことだ。

けれど、こんな形でこんなに唐突に、呆気なく終わってしまうものだということは予想していなかった。覚悟などというものは追い付かない。何もかもが不意に消えて、残されてどうしてい

いのかさえ分からないのだ。

いや、たった一つだけすべきことがある。クインは小さくエミリアの名を呟きながらチアロを軽く突き放し、その反動で後ろへ下がった。

「俺は、許さない」

エミリア。エミリア。俺の希望。

優しい声で俺を抱き寄せて大丈夫よと笑ってくれた——クインは喘ぐ。涙も枯れてしまったように、ただ、駆け上がってくるものに揺すぶられるように呼吸を荒げるしか出来ない。

チアロが何かを言いかける前に、クインは背を返した。待て、と叫んだ声と同時に腕がぴんと引っ張られ、その場にたたらを踏む。離せ、と怒鳴ってクインは身をもぎはなす間にチアロの爪が引っかかったのだろう、腕の内側をずっと細い痛みが走った。僅かな間を置いて、そこがうっすら滲むように痺れてくる。

「ああ悪い、傷が……」

そんなことを言いかけたチアロの声が宥めるように優しげで、クインはやめろとひきつった笑みになった。

「やめろ、今更——そんな偽善、違うか」

「そんな言い方こそやめろ、クイン。俺はお前に傷を付けたくないだけで……」

「へえ？ ああ、大事な商品だもんな！」

首筋ががくがく震えている。俯いていることさえ頭が重くてままならず、クインは振りかぶるように顔を上げ、そのままの勢いで喉をのけぞらせて笑い出した。やめろ、というチアロの声が淡い恐怖に変わっている。

クインは甲高く音を外した声で笑い続けながら、右手を左の耳の付け根へ持っていく。何をしようとしているのかを悟ったチアロが飛びかかろうとするより早く、思い切り爪を立てて唇の方へ引き下ろした。チアロの呻きが聞こえた次の瞬間、左の頬を何条にも細く強い痛みがはしった。

「顔だろ？ なあ、顔だろう、チアロ？ だったら、ほら、こんな、」

「よせ——やめてくれ、頼むやめてくれ……」

あまりに弱々しい友人の声をクインは初めて聞いた。軽く鼻で笑い、やめてやるよ、と吐き捨てて今度こそ走り出した。クイン、と叫ぶチアロの声がみるみる遠くなる。

エミリアと過ごすはずの夜に浮かれ飛んできた道を、クインは全速力で戻りだした。療養所の近くに空間移転の為の移転座標を置いている。魔導での移転には正確な相対座標を示す必要があるから、それをザクリアの自室とこの場所において誤差をごく僅かに抑えているのだ。

月が次第に辺りを照らし始めていた。いつもの街道の目印から脇へ降り、まっすぐに座標まで駆け寄っていく。自分で書いた石盤の赤い塗料文字が目の奥でちかちか瞬いている。この場所と自室をつなげる空間の魔導の数値を確かめ、クインは一息を置いてすぐに詠唱を始めた。

途端、ふっと身体が浮くような感覚がして、すぐにたたき落とされる。失敗したのだ。あまりに呼吸が乱れていて上手く行かない。地に落ちた瞬間に足を少しひねったらしく、足首の辺りから軽い痺れと痛みで力が入らなかった。

クインはぎゅっと唇を噛んだ。ほんの僅か、血の味がする。落ち着かなきゃと深く呼吸をした時、まるで凍えた時のように唇が震えているのに気付いた。

これを止めなくては詠唱どころではないと口元へ手をやると、かちかちと歯が鳴っている。クインは呻きながら石版に額を押しつけた。脳幹から発熱する、とぐろを巻く熱さが僅かに冷える気がした。

「エミル、エミル、エミル」

呟いているとそれはやはり目のくらむような怒りへ変わった。それが逆に激しく荒れる胸を一瞬だけ宥めてくれる。

クインはきっと顔を上げた。月は自然にあわあわと世界を照らし、星が次第に姿を現し始めている。紫紺の空を睨み、クインは激しく首を振ると始めから詠唱を始めた。

——ライアン。目を閉じたまま、その名を胸に呼び起こす。瞬間全身が沸騰しそうになる。

許さない。許さない。

エミリアは本当にただの女だ。巻き込んだな——俺が勝手をするからという理由をつけて彼女を巻き込んだ。エミリアには手出しをしていないとチアロがいうなら、もっと身近な、おそらくは妹あたりを脅迫に使ったはずだ。

それが簡単で何の負担も要らない方法だから。エミルに俺と妹を選ばせた。

それを思うと目の前が血に染まるような怒りを覚える。あの子は私の希望だとエミリアは言った。あの子のために描き続けるとも。

エミリアから絵を取り上げてはいけない。彼女から彼女自身の翼をむしりとしてはならない——分かっていて、そんなことは！

クインはようやくいつもの落ち着きを取り戻したように慣れた詠唱を続けながら薄目を開けて月を見上げた。ぼんやりと滲んでいるのは淡い雲か、涙だろうか。分からない。喉の奥に悲しみがこみ上げてくるのをぐっと殺した時、詠唱が終わった。

身体があり得ない形にぐにやりと歪み、ずっと足下が消えたような感覚が降りた。数度の失敗の後にやっと成功したらしい。

空間を渡る時間はほんの十を数える間だが、水中を無理矢理連れ回されているような浮遊感と体の重さは何度経験しても慣れるものではなかった。いつもの寝台の上にどさりと身体が落ちた瞬間、ミシュアの浜から疾走してすぐに転移を始めた呼吸の合わなさが強烈な吐き気になる。

それを目を閉じて飲み込んでいると、寝室の扉が開いた。ザクリアの方がミシュアよりも若干東にあるからこちらは既に夜の中に世界がある。居間はそのせいで明々とランプが灯され、一瞬目を焼くほど眩しかった。

思わず手をかざしたクインの耳に、低い声がした。

「……戻ってきました、ライアン」

ああ、と返答する重い声。かつんという硬い音は灰切りだろうか。それを耳にした瞬間に凄まじい怒りが跳ね上がってきて、クインは出来うる限り素早く身を起こし、そちらへ向かって駆け出そうとした。

途端、かくんと膝が落ちる。足をひねったことを忘れていたせいか、勢いで床へ身を打ち、喉で呻いた。

「消耗してますが」

ごく冷静に自分を見つめて呟く声はディーだ。姿は逆光の暗い影とクイン自身の燃えさかるような血熱のためによく焦点を結べないが、好意の欠片もないからすぐ分かる。

クインが体を起こそうとゆっくり腕に力を込めていると、ディーがまっすぐに歩いてきて腕を取った。立たせるというわけでもなく、床を引きずられて居間へ放り出される。

軋む肩を押さえながら、クインは半身をやっとあげた。久しぶりに見るライアンは居間の長椅子にもたれ、じっと腕を組んで自分を見つめていた。

その目に表情がない。ディーがクインの襟首を掴み、ライアンの足下に這いつくばるように押さえ込んだ。微かな失笑。オルヴィが暗い笑みを口元に歪めながら、ゆっくりと腕を伸ばしてライアンの背後から彼の首にまきつけている。挑発だと分かっている、忍耐など出来なかった。

「離れろ、馬鹿女」

掠れた声音で呻くと、オルヴィはたまらないといったように背をそらして笑い出した。それは確かに哄笑だった。勝ち誇ったような声にクインは相手を睨み、黙れ、と低く吠えた。

「お前の顔を見るだけで吐き気がするんだよ！」

「そう。私もお前が嫌いだから丁度いいな」

「お前と一緒にするな！ 最低の売女のくせに！」

「それがお前とどう違う。お前だって男に足を開いて金を貰ってるだろう」

クインが何かを言い返そうとした時、不意にライアンが顔、と呟いた。

「その顔はどうした」

声がいつもよりかなり低い位置に掠れている。クインは別に、と押さえられたままでライアンから顔を背けた。自分の顎にディーが指をかけ、強引に上を向かせる。ひっかいたんでしょうね、と淡々と呟いた声に、ライアンが頷いた。

「顔はどうした。……あの女にされたのか」

クインは首を振ってディーの捉える顎を無理に振り切り、床にぺたりと額をつける。顔などよりも、どんな表情をつくればライアンの胸に同じような傷を作ることが出来るのか、まるで見当が付かないからだ。

不意に自分の上から重力が消えた。ディーが押さえていた体を離したのだ。クインは身を楽にするために丸めようとする。呼吸を整えようとしていると首根がおもむろに掴まれ、長椅子へ引きずりあげられた。

「顔はどうした、と聞いたな。自分でやったのか」

ライアンが身を寄せるようにして呟くように言った。クインは無理矢理笑おうとして頬を歪め、傷の痛み顔に顔を痙攣させた。今更疼くような痛みが幾らでも湧いてくる。

「それが何だよ」

脳裏に逆巻く荒波の幻影が、言葉を上手く紡がせない。とどろく音がただ憎い憎いと呻いているのだけが聞こえる。それに耳を傾けていると、ああ本当に自分はこの男が憎いのだと次々に湧いてくるようだ。馬鹿な、とライアンが低く言ったのが聞こえた。

「お前の価値は顔だと自分で知っているはずだな。——オルヴィ、しばらくは仕事は休ませろ。」

使い物にならない……そう、連絡を。チアロが戻ってきたらあれに身の周辺のことをさせておけ」

オルヴィが簡単に頷いた気配がした。ライアンは視線をクインに戻した。彼のまろい緑の瞳が何かにかぎろい、ひどく不安定な明滅を繰り返していることにクインは気付いた。ライアンの感情が何か揺すぶられているのだ、それもかなり強く。

クインは唇をめくりあげるようにして、吐息で笑って見せた。ライアンが喉を鳴らしたのが聞こえた。僅かに細められた瞳の奥に、たわめようとしているらしい激しさがある。

——怒りだろうか。それとも、自分の胸にあるような憎しみだろうか。

それをライアンが理性というもので押さえ込んで今までのように冷淡にあしらおうとするなら、それが最も許せなかった。エミリアの優しい温もりを手放して遂に何も得られないとすれば、それは全ての敗北に等しい。

それだけは嫌だ、とクインは奥歯を一度きつく噛み合わせ、そして傷のせいでひきつれ痛む頬をぐしゃりと歪めて笑った。

「……あんた、何か言うことはないの？ 浮気された亭主だってよっぽど腑抜けじゃなけりゃ、ひとくさり言うぜ」

「二度とこんな面倒を起こすな」

ライアンの言葉はいよいよ低い。語尾が微かに震えている。

「いいな、お前は俺の特別だから許されていることが沢山ある。旨い汁だけ吸って身分を逸脱することは許さない」

「特別だって？ どこが？ あんたの特別はリァンだけで俺のことは付録だろ？ チアロだってあんたにはリァンの模造品じゃないか……！」

ライアンが不意にクインの喉を掴み、黙れと掠れた声で言った。ぼそりと呟くような声音は感情を無理に轢き殺した時特有の抑揚の無さで、クインはそう、と更に笑った。ライアンの内側に爪を立てることは出来たらしい。

あとは思い切りひっかき下ろすだけであった。

「で、俺はそれ以下って態度なんだろう、はっきり言えばいいじゃないか！ ライアンは俺が怖いんだ、俺が消えたら守るべきお可哀想なリァンの幻だって消えちまうんだからな！」

「黙れ！」

ライアンの叫びがした瞬間、耳元で火花が散ったような衝撃がクインを身体ごと横へはじき飛ばした。椅子の脇の机に体側を強く撲ち、身体が反射で撥ねる。

クインは薄目を開けてライアンを見た。自分は泣いているのだろうか、視界がぼやけてはっきりとしない。けれどそのもやのかかったような世界の中心でライアンが肩を震わせて、荒い呼吸を宥めすかそうとしているのは見えた。

クインはしゃくりあげるような呼吸でどうにか笑った。耳の奥で空気の塊がはね回っているようで、自分の声さえあやふやになりそうだ。だから尚更くっきりと発音する。

ライアンの心に噛み付いて、そのまま引きちぎってやりたい。——エミリアとのことを簡単に裂き壊したように。

「怒ってるんだ、凶星なんだな、ライアン！ あんたは俺が怖いのだ、リァンの代わりにしたは

ずの庇護人形が自分にいちいち噛み付くのが気に入らない癖に、リアンの代替品だから殺せないんだもんな！ やってみろよ！ 案外楽しいぜ！」

クインの叫びがきんと響いて一瞬世界は静まりかえった。ライアンが物も言わず青ざめていく。それは驚愕や不快のためではなく、血の気の引くような怒りのためだった。

貴様、とライアンが呻いたのが聞こえた。クインはふんと鼻を鳴らして笑おうとした。それが終わらぬうちに喉が急速に締めあげられ、体重が消えた。次の瞬間、がくんと首の付け根に重量がかかり、足が勝手に空中を蹴る。

喉元をひつつかまれて吊り上げられているのだと悟った時、ライアンが何かを吠えてクインは壁に叩きつけられ、崩れ落ちた。

一瞬呼吸が止まり、それを回復するように大きく肩で息をする。全身が軋み痛むのをこらえ、クインはそれでもこらえきれずに笑い出した。それは弱々しい吐息のような物でしかなかったが、ライアンをあぶるには最早十分すぎる炎だった。ライアンが喉を鳴らして唸ったのが聞こえた。

ライアンが足早に自分に近寄って胸ぐらを掴み、宙へ再び吊り上げる。衝撃にそなえてクインは奥歯を噛みしめて息を殺すが、殴打は頬ではなく腹へきた。

みぞおちに膝が入った瞬間、クインは呼吸を喉で詰まらせた。床に落ちる。咄嗟に頭を庇って丸くなろうとした腕が踏みつけられ、無理な角度で筋がみしりと引き延ばされる激痛がはしった。

クインは悲鳴を上げた——気がした。後のことははっきりと判別が出来ない。

嵐のように突き刺さる力が自分を散々なぶり、痛めつけている。朦朧とした意識の中で、クインは確かにライアンの小さく殺した声を聞いた。笑っている。ひきつったような声で、しかし確かにライアンは笑っているようだった。

何かを言ってやろうと唇を開くと、そこからしまりなく何かが零れ落ちていく。鉄の錆びたような臭い。

「——死んでしまう、殺す気ですか、ライアン！」

掠れた声が怒鳴っているのを耳に留めたのを最後に、ふっと意識が暗闇へ紛れ込んだ。

ステリオは丘の街だ。シタルキア中北部の丘陵地帯の中に属し、ゆったりした隆没が波濤のように遠くまで続いているのが街外れから見える。夏の草の緑が溢れてくるようで、強い光線の下にあれば一瞬目を細めてしまうほど眩しい。

エミリアは鞆を肩からかけ直し、振り返った丘の様子が記憶と変わらないことに安堵して歩き出した。まっすぐに街の中央区からやや外れた地区へ入り、やがて背の低い薔薇の木の双柱門を抜ける。夏薔薇の甘く清涼な香りがふっと鼻先をかすめ、やっと自分が元の場所へ戻ってきたような気になる。

奥から偶然歩いてきた中年の女に軽く会釈すると、女はあら、と明るく笑った。

「まあ、エミリアさん？ 帰省は再来週って聞いてましたけど、早めたのね？」

女の表情にどんな影も苦悩も遂に見つけられず、エミリアはやっとぬるい笑みになることが出来た。何かがあれば、きっとこんな風に屈託なく話しかけると言うことはしないだろう。

それが思いの外自分の頬を弛めたらしい。ほっと溜息になると、女はエミリアに満面の笑みを向けた。

「面談室をお使いになる？ それとも帰宅するかしら？ アスニアったら養家に迷惑だからってなかなか帰らないのよ」

エミリアは苦笑になった。叔父夫婦には子供がおらず、そのせいでエミリアもアスナも実の子のように愛しまれている。葡萄園も年によって作付けに波があるのは仕方がないが、片手間に仕込んでいる葡萄酒の評判が存外良くて、不足のない暮らしだ。口減らしではなく、自分の世話に手がかかることを気にしているのだろう。

それはエミリアも同じであった。だからアスナが全寮制のこの盲学校に入りたいと夢を語った時に絵の新人奨励賞を貰った絵を売って金を作ったのだ。

「連れて帰ります。部屋へ行って荷造りを手伝ってもいいですか？」

どうぞ、と女が微笑む。エミリアが頻繁に面会に行く部類であることもあって、面談には比較的甘い。盲学校特有の手すりや階段の終わりの鳴き床を通り、妹の部屋の扉を叩く。どうぞ、という声は明るくて、いつもの妹のまま、何も変わらないごく普通の日々のままだ。

部屋の扉を開けると、妹は窓辺にいた。開け放した窓硝子に耳を当て、じっと目を閉じている。窓に跳ねる風の音を聞いているのだ。

扉が開くと一瞬通りが良くなった風が強く硝子を震わせて、それが楽しいのだろう、アスナは小さく喉を鳴らして笑っている。ちりと扉にくくりつけられた合図の鈴が鳴った。

「……だれ？」

おっとりと口にして妹は窓から身を離す。傾げていた首を直すと長く伸ばしている髪がさらりと肩を滑って落ちた。妹の目と同じ、美しい夜空の色だ。落ち着いて扉の方角へ向けられる目は、それでも見当違いの場所を見ている。というよりは、振り向いた耳に気配を悟ろうとしているからどうしても見えている者とは視線のやり方が違うのだ。

エミリアは私よ、と小さく言った。妹の無事を目にした瞬間、気が抜けてしまうほどの安堵に襲われて、口を開くのもおっくうなほどだ。

「——姉さん？ 姉さんね、その声、すぐに分かる！」

アスナは朗らかな声を挙げてするりと窓際の椅子から降りた。自室の中は既に未知の世界ではないらしく、歩いてこようとする。

姉の身体を一瞬でも早く確かめようと伸ばされてきた手の先にエミリアは指を添わせ、絡めて引き寄せた。妹の身体はまだ少女の入り口にある年齢のままに小さく、すっぽりとエミリアの両腕の中へ収まってしまう。この小さな宝石の愛しさにエミリアは破顔し、きつく妹を抱きしめた。腕の中にある身体の温度と質量が、やっと確かな実感に変わる。

「アスナ、アスナ……会いたかったわ」

エミリアはうわごとのように口走り、何度か再会の軽いキスを頬に交わしあってから長い溜息になった。一つが無事に解決すれば、更に一つが浮いてくる。不安というのは大抵一つの根に連なっていて、全てが消えるという確信に至るまでには一つ一つを丁寧に潰していかななくてはならなかった。

エミリアは僅かに呼吸を飲み込み、重大なことだと悟られないようなさりげない声音を作り出した。

「ねえ、何か最近おかしい事はなかった？」

「おかしい？ ……例えばどんなこと、姉さん？」

「ああ、いえ……いいのよ、気にしないで——ちょっと見ない間に大人びた感じがしたからびっくりしただけ」

妹の反応が余りに無邪気で、エミリアはやっと自分の暗い想像を振り切ろうと決意する。この小鳩のような妹が不幸になることを想像するよりは、幸福に微笑んでいる姿を思い描くことの方が重大で重要で、大切なことだ。叔父さんの所へ帰るわよ、とエミリアは努めて明るく口にして、簡単に荷物をまとめて外へ出た。

ザクリアのような大都市とは違って流しの馬車などはほとんど無い。二人で田舎道を歩いている途中で捕まえた農馬車に便乗出来たのは運が良かったほうであろう。

アスナは刈り取った牧草に夏の匂いがすると身を投げて笑っている。朗らかな笑い声が耳に響くたびに少しずつ、エミリアの不安や恐怖を埋めていくようだ。可愛い子。エミリアは草の束に頬を押しつけている妹を見やる。

草の匂い、風の音、小鳥の声、太陽の熱。視覚を失ってしまった代わりにアスナは全てを肌と心の感触で捉えている。悲壮でもなく、自棄ばちな明るさでもない。これがこの子の芯なのだとエミリアは不意に妹を頼ずりしてやりたくなる。両親がいなくなってからは唯一残された最も濃い血の相手であったし、何よりも幼く守るべき者なのだ。

叔父夫婦の家に着いたのは夕方近くになってからだった。馬車を降りてから少し歩いたが、しっかりと手を繋いでいるせいなのか、アスナの足取りにあまり不安はない。最近の寄宿舍での生活や、習いだした点字のタイプのことなどを嬉しそうに語っている。

やはりあの少年の口にしたのは単なる恐喝なのだとエミリアは次第に心がぬるく解けていくのを感じてそっと笑った。黄昏に埋没する農園はいつもの色で、何も変わらない光景を見る度にほっと長い溜息になる。忘れようと努めても、一度刷り込まれた恐怖を捨ててしまうことは難しい。それが検証によって少しずつ安堵にすり替わっていても同じだ。

姉さん、と妹が強くエミリアの手を握った。どうしたの、と優しい声を出すと、見えないはず

の黒々した瞳をまっすぐに向け、アスナは微かに憂えたような表情で言った。

「姉さん、何だか怖いことがあったのね？ 震えてるもの、ずっと」

エミリアは一瞬返答が出来ない。真夏のぬるい残照の中でアスナの手を強く握りしめて震えていたとするなら、やはり怯えているのだろう。失いたくないのだ。全てを。

「大丈夫。アスナと一緒にいれば、きっと落ち着くからね」

返答は下手に誤魔化さない。肌で触感を読むごとく、アスナは気配に敏感な娘だった。光を失うまでもその傾向はあったが、それは更に強まっている。妹はそれに直接答えず、そっと笑った。遠くから自分たちを見つけたらしい叔母の驚きと歓喜の声と呼んでいる。それに何の暗さも感じない。エミリアはまた同じような溜息になって手を振り返した。

久しぶりの養家は記憶の通りの野暮ったくて温かな色味をしている。手縫の壁掛けも毛布のつぎも、そこに溢れるように縫い込められている住人の愛情が真冬の雪のようにじんわりと重たい。けれど、それに埋もれてやっと暖まるような心地もあるのだ。

エミリアの帰郷は予定よりも半月早く、これは相当突然といって良かった。どうしたのだと苦笑する叔父たちにも、アスナと同じく日常の明るさはあっても恐怖の影は見つけれない。3ヶ月ほど前に帰省した時の空気と同じものをふんだんに与えられて、ようやく神経ごと弛緩していくようだった。

夕食が終わると妹を連れてエミリアは二人の部屋へ引き取った。昼下がりの埃っぽい道を歩いてアスナも疲れているようだったし、エミリアも船を降りてからは強行軍であったといってよい。

一刻も早く妹の無事確かめたかったし、叔父夫婦の息災を見たかったのだ。

アスナはついてすぐに自分で整理した棚を開けて、手探りで寝着を取り出している。着ていた木綿の服をぱっと勢いよく脱ぎ捨てているのはやはり、自分に対する目の意識の薄さなのだろう。見られている、ということに対して無頓着なのだ。

寝着をもそもそと着ている仕草はたどたどしい以外の何でもないが、手伝ってはいけないと言われている。身辺のことは自分で一通り出来るようにするのが自活の最初だと盲学校で教えているようだ。

だから手を貸さずにエミリアはじっと待っている。釦の数を丁寧に数え、指がゆっくりと着替えを仕上げていく。次第に子供から大人へ渡り始める身体はどこも淡く薄い、女の匂いがする。未完成で危うい身体の線が、この一瞬しかない美しさをもっている。それは殻を破ろうとする直前の息吹だ。

見る度に妹の身体がゆっくりと、しかし確実に子供時代の次の季節へと歩いていくのが分かった。それに比して笑顔は昔の通り、屈託なく明るい。子供のままのような、無垢の永遠を垣間見る気がする。

けれど、その身体のように妹が子供のままだとは思ったことがなかった。他人には無邪気で明るく、やや年齢にしては幼く思われるほど素直に大人しくやわやわしい少女であったが、真実子供であれば言うはずの他愛ない我が儘も癪癪も持っていない。何かを無理矢理主張して誰かを困惑させたりすることがないのだ。

——優しい子。エミリアはやっと全ての釦をかけ終えて、一番下から順にきちんと止められているかを確認している妹を見ながら思う。

優しくて、傷つきやすく、そして強い。両親の死、自身の盲。そんな境遇の中にあってもアスナはいつもエミリアを支え、励まし続けた。辛くないなどとは思わない。アスナの強さは何事にも動じない鉄ではなく、しなやかに風にそよぐ若木のそれだからだ。

不意に愛おしさの波が零れてきて、エミリアはそっと目元を拭う。妹と自分と、支え合って生きていきたい。可愛い子。優しい子。私の希望。エミリアは口の中で呟いた。ふと意識のそこを何かがかすめようとするのを無理に押し殺し、着替え終わって寝台に座る妹の隣へ腰を下ろす。「……綺麗な髪ね、アスナ。やっぱり長いのが似合うわ」

言いながらエミリアは櫛で丁寧に妹の髪を梳いてやる。これは久しぶりにあった時の姉妹の心を近くする儀式のようなものであった。流れるような黒髪は艶やかでどっしりした重みがある。量が多いが美しい髪だ。妹の身を整える閉じた幸福を噛みしめていると、不意にアスナが姉さんと言った。

「——ねえ、前の手紙にあった男の子は元気？」

ふっと瞬間、手が止まった。胸の深いところが一瞬で射抜かれて、僅かな時間呼吸も出来ない。

エミリアはそうね、とあやふやな事を返答し、もう寝なさいと強く言った。寝台に入れてからそう立たない内に妹が寝付いてしまうと、エミリアはほっと溜息になって自分も寝台へもぐりこんだ。船の中の揺らぎがなくて、真実自分は戻ってきたのだと思う。

目を閉じると真っ先にクインのことが浮かんた。

——クイン。見捨ててしまったという罪の意識や哀れだと思ふ胸の作用よりも早く、彼の表情が豊かにあふれ出してくる。

苛立つ頬の線、癪性に歪めた唇。そんな翳りばかりの面差しが、いつしか素直に明るく変化していったのをみたのは、奇跡か幻のような出来事であったはずだ。

船の中でみたのはいとけなく縋りつく、切羽詰まった依存であった。怒り、笑い、不機嫌になり、毒づき、そして強く禍々しい言葉に自ら傷つくような顔。沢山の彼を見たはずなのに、最後に他のもの全てを消し去って浮かんでくるのは、ミシュアの浜で別れた時の幸福そうな笑顔だ。

心の温度のままに全てを全身から発散する彼の、あれが最も力ある表情だった。あの瞬間に自分たちの間に秘密も打算も形式もなく、ただ惹かれるままに相手を見つめていればそれで良かった。そのはずなのに。

エミリアは毛布を頭まで引き上げ、中で丸くなった。涙がたぎるように溢れてくる。ここに至って初めて、ミシュアの浜で膝を折った時から自分は茫然としていたのだとやっと思ふ。

結局のところ、自分は何に負けたのだろう。

クインのことは愛しかった。彼が自分のためにそこにいてくれと言うのなら、彼の繊細な神経を宥める鎮静剤だったとしても意味があると思った。彼の心はひどく荒くて激しい波だが、その根底にあるのは絶望的な寂しさだった。

だから可哀想に思った、それが間違っているはずはない。男として愛していたかという問いに

は今でも答えがないが、それも仕方がない。憐憫は決して恋ではないが、それも人への真摯な祈りならば、愛と呼べる種類でないか。

手放してしまった希少な宝石。彼はその硬質な心でもって自ら傷ついていく。それを自分に止めることが出来るなら、それに準じる巫女でもいいと確かに思った。女というものは殆どが絶望的に美しいものが好きで、それは馬鹿馬鹿しいことではあるが仕方がない。圧倒的なものの前にひれ伏すならば、愚かしさでもってしか出来ないからだ。

彼は美しかった。表面に浮かぶ外殻ではなく、胸の奥津城に誰にも触れさせない頑とした純粋を飼っている。それを自分でどうしていいのか分からずに、秘密を分かち合う相手を必死で捜そうとして遂に見つけられない悲哀が彼をどうしようもなく打ちのめしていたのだ。

エミリアはこぼれる涙を枕に押しつけながら深く頷いた。彼の背中に翼を描いたのが何故だったのか、ようやく解答が見つかった気がした。それはきっと彼が最も欲しているものだから。力強く羽ばたいて地上より少しでも高く、天へ近付いていきたい、そしてそれが出来ないことに絶望しつつあった天使。

——それを捨ててしまった。自分の手で。一度は彼は翼を見つけたはずだ。そんな表情を知っている。

彼はどうしただろう。あの少年は彼の、おそらくは友人なのだろう。名前は遂にその唇から零れなかったが、彼の口から陽気な友人の話は聞いたことがある。それに任せていいのだという声が自分の中からすることを許せない。彼への罪悪感と自分への絶望が、家族の無事を確認し、確信してから湧いてくる。

それが自分で本当に卑怯だと思う。あんなに心細く不安な声で自分を呼んで、どうしていいのかも分からないまま身を寄せてきた獣のような彼を見捨てて、全てに目を瞑り耳を塞いで逃げてきたのだ。

心の底から彼を哀れだと思う、張り裂けそうなほど悲しいと思う。けれど、それを救うために自分の根底を構成するこの家の温かな色をした全てを差し出せと言われたら、それは出来なかった。出来ないならば、これは全てを賭けて狂っていくような恋ではなかったのだ。

そう呟く側から言い訳のようだという自嘲が湧いてきて、エミリアはきつく歯を食いしばる。少年がエミリアに彼を不幸にはしないと云った言葉を鵜呑みにする気はなかった。第一、それは自分とは関係がない。気休めにもならないのだ。

クイン、とエミリアは小さく名を呼んだ。もしあの時全てが順調に流れていたならば、今頃は彼と身体を寄せ合い名前を呼び合っていたかもしれないのだという新しい推測は、思った以上に胸を刺した。痛い。彼は今、どうしているだろう。

その資格は既に無いとしても、案じているのは本当だ。あれが恋でなくても、愛の種類ではあったから。思えば全てが幻の儚さであった気がした。夏の海にくゆる、蜃気楼のような。

違う、とエミリアは反射的に強く思った。全ては自分の目と、心が真実だと思うのがうつつであり、幻だと思ふものが夢だ。醒めて消える夢にはしない。誰がどんな思惑を持っていたかも関係ない。エミリアの中にある、一番の彼が全てで現実だ。

現実、と呟く。あれが幻でなかったことを証明するために、うつつの夢であったことを残して

おくために、この胸の後悔と彼への追憶のために、差し出せなかった自分の全てを賭けるとする
なら、方法はたった一つだ。

——描きたい。

自分の身体の中から力強く浮いてきた言葉に深く頷き、エミリアはゆっくりと身体を起こす。
妹を起こさないようにそっと寝台を抜けてショールを羽織ると、静かに家の外へ出た。葡萄畑
は月夜に照らされて、青緑色の海のように葉がうねっている。

その中をエミリアは足早に作業小屋へと向かった。作業小屋の屋根裏は昔からエミリアの絵の
ための部屋になっている。専用の部屋を増築してもらう事が出来なかった代わりに、エミリアが好
きなだけ一人で絵を描けるようにと叔父が作ってくれたのだ。

屋根裏へあがるとそこは昔のままの世界であった。賞を取ることも、芸術院へ進むことも、絵
を売って生活することも、全く思いもせずに自分のためにただ描いていた頃の気配がまだ残っ
ているようだ。

描きかけてそのままになっている何冊もの画帳、何を描くか迷って手をつけていない木綿の画
布はやや日向焼けしているが、構わずにエミリアはそれを作業台へ立てかけた。

——描きたい。

胸の奥から衝動が、それだけを囁いている。

床に落ちていた炭は写生用の柔らかいものではなく、おそらく子供の頃に母屋の備蓄庫から拾
ってきたものだ。それをも愛しいとエミリアは微笑み、画布と真向かった。

——彼を描きたい。いいえ、描かなくては。

更地のような何もない画布に、たちまちクインの沢山の表情が零れてくるようだ。これまでに
見た綺羅綺羅しいものではなく、人形のような魂のない端正さではなく、たった一つ、描きたい
と心から思う表情が出るまで、じっとエミリアは画布を睨み据えて待っている。

——描きたい。

ここへ戻るのは自分の持っている業なのだろう。それをなじって離れていった恋人もいた。全
てのことを絵のための土台であると言われて悲しかった。けれど、それは今の中ではなくても何
かの真実を含んでいるかも知れないと思う。

描きたい。クインという奇跡を描き留めておきたい。そうしなくてはいけない。全てがエミリ
アの中で昇華されていくのなら、通り過ぎていった恋愛でさえなかった交感を形に残し現実だっ
たと振り返るよすがとなるのはやはりこれしかない。

自分自身の中から溢れてくる、この衝動と情熱の帰結しかないのだ。

描きたい、とエミリアは強く画布を睨んだ。

彼を描きたい。美しさで周囲に君臨する王ではなく、ただ寂しさと怒りと、それでも希望を手
に入れようとするあの目を持った少年としての彼をとどめておきたい。

自分でも意識せずに最初の一線が出た。何も描かれていなかった処女雪の上に足をつけた僅か
な罪悪感が手を止め、やがてそれは突き進み、滑り出す。

彼を描きたい。今、描きたい。

ひたすら突き上げてくる衝動がエミリアの手を自動筆記のような勢いで動かしている。ザクリ
アのアパートにある美しい幻想画とは違う絵になるだろう。この高揚感をしばらく味わってい

なかった気さえする。

売り絵は否定しないしそれで食べていこうとしているのも事実だが、他人が求める自分の絵はいつの間にか幾重にも張り巡らされていた自分らしい優しさという枠の中であった。慣れた技法と慣れた愛に、僅かに疑問を持ったことはなかったろうか。エミリアの持つ魂の複製品のような絵を沢山描いてきた気がする。

——描きたい。

エミリアは自分の手が勝手に彼の姿を描き出していくのを見つめながら、深く頷いた。これは彼だ。誰がどう言っても、私の中の彼だ。技術でもなく、色彩の綾でもなく、彼の魂をこの一枚に塗り込めておきたい。その為だけに描く、自分のための絵。

描きたい、とエミリアは呟いた。途端に何かが決定的に弾けたらしく、一度は止まっていた涙が溢れてくる。それを空いた手で払いのけながら、エミリアは忙しく手を動かした。

描きたい。全ての決算に、自分と彼が僅かにでも同じ地平に存在した証拠に、今描きたい。この絵を最後に情熱全てを燃やし尽くしても構わない。

これが描くということで、これが想うということだ。

絵のために生きているのだという非難はあるいは正しいかも知れない。けれど、それがどうしたっていうの。それが生きていくということなのよ——私にとって。

クインのことがこの絵の代償であったということではないのだ。全ての魂への打撃があるからこそ、それを糧に出来るのだから。

エミリアは夢中で描き続けた。この絵を彼に見せてあげられるかは分からない。けれど、描くことで彼への祈りを形残すことが出来る。

その為に描くのだ。愛も、祈りも、形にならないものだからこそ、胸の中にあった証明と追憶のために。

「天使」

エミリアは呟く。

「天使にするわ——夜明けに空を見る希望を」

これがエミリアにとっての彼と過ごした夏、奇跡のような短い季節の決算であった。

——これは後に、『暁の天使』として展覧会で最高の評価を得、また画家エミリア＝スコルフィーグの劇的な質的転換を示す一枚として扱われるようになるが、それはまた別の話である。

ゆっくり目を開けると、視界は白く濁っていた。瞬きをすると涙がこぼれていく。おかしい、何が悲しくて泣いているんだろう。それが分からなくて更に瞼を動かしていると、次第に世界が形を表してくるようであった。目線をあげるとよく知った木の節の模様、窓硝子の気泡。光は斜めにたっぷり差し込んで、寝台の端と床に日向の匂いを振りまいている。

吐息を漏らして起きあがろうと右手を寝台に支えようと、途端に腕がひきつるような激痛がはしり、思わず呻いて身体を倒れこんだ。まるで右腕に力が入らない。手の指が一斉に痙攣し始めて、自分でもどうしていいのかわからなかった。枕に頬を押しつけて次々に浮いてくる脂汗を拭っていると、軽く駆け寄ってくる足音がした。次の瞬間、ぴたりと冷たい感触が額に押しつけられて心地よさに僅かに喘ぐような声が出る。

「右腕は痛めているから、あんまり使うなよ」

聞き慣れた明るい声に振り仰ぐと、チアロが柔らかに笑いながら自分に濡らした布を押し当てているのだった。ああ、という、喘ぎとも吐息ともつかない声がこぼれた。

チアロがクインの額に濡布を押しつけ、肩を抱くようにして体勢を直す。起きるか、と聞かれて頷くと、寝台にもたれるように身体をあげてくれた。

「起きたな、クイン。……今、食べるものを持ってきてやるから」

クインはぼんやりしたまま頷いた。全身が気怠く、ぎしぎしと軋んでいる。ばらばらにされたのを無理矢理繋ぎ直したように、関節が重くてなかなか動かすことが出来ない。ちらりと右腕を見るとこれでもかというように包帯が巻かれており、添え木までがあった。それを見た途端、強い湿布薬の臭いがした。

クインはそれをじっと見つめて首を傾げた。記憶が不鮮明で、どこからが夢で現実なのか、まるで分からない。一体何故こんなことになっているのかも。左手でそっと右腕の包帯を撫でようとすると、左の小指と薬指にも包帯があった。こちらは固めてあるらしく、ぴくりとも動かせない。

クインはぼかんとする。現実味のない世界に突然迷い込んだようで、どう反応していいのかも分からなかった。厨房からチアロが戻ってきて、寝台の隣に椅子を引きずり腰を下ろす。甘い匂いがした。

「蜜桃の甘煮だよ。昨日買っておいんだ、お前、食べたいっていったろ？」

クインは目をしばたき、そう、と小さくいった。その記憶は完全に抜け落ちていて、チアロがそう言うならということではかない。クインの反応でそれをチアロも悟ったらしく、何だよと苦笑して皿の中の刻まれた果肉を匙ですくった。

「ほら、口開けて……遠慮すんなよ、その指じゃ匙を持つのもすぐには無理だから」

どうやら右手は力が入らないし、左手は動かせない指がある。それを悟ってクインはおとなしく唇をあけた。匙のひんやりした感触が割り込んできて、舌尖にあたる。舌の上を転がって落ちていく桃のざらっとした表面が気持ち悪い。クインが顔をしかめているのにも構わず、チアロは定期的にせっせと桃を口に運んでくる。どうやら自分は長く眠っていたのだろうと思ったのはこの時だった。皿の中をあらかた嚥下し終えてから、クインは腕なんだけど、と言った。チアロは頷き、完治まであと3週間、と告げた。

「筋をひねって傷めただけだから、使わないようにその期間吊っておけば大丈夫だってさ。あ、それと左手の指は骨がぱっきり折れてるけど、無理しなければちゃんをつくって。あと、肋骨が何本かいっちゃってるからしばらくの間、仕事は休み」

クインは頷いた。全てがもやのかかったような断片的な記憶ばかりで、何一つ系統立てて思い出せない。ただ、夏の美しい幻影を見た気がする。眩しくて綺麗な、紺青の海の幻を。

海が……と言いかけると、チアロがごめんよ、と素早く遮った。

「俺と一緒に帰れば良かったな。お前にあんな馬鹿なことを言わせなかったのに……」

クインはじっとチアロを見つめた。友人は昼下がりの明るい空気の中で柔らかに、どこか哀しそうに笑っている。馬鹿なこと、と復唱するとチアロはリアンのことだよと苦く笑い、クインの額にはりついている髪を丁寧により分けた。

「リアンのことは、俺にはいいんだよ。お前がそう思ってたのをディーから聞いたけど、嬉しかった。ありがとう」

クインの身体に負担をかけないように配慮された抱擁が、温かだった。クインはじっとそれを受け止めながら、自分の脳裏を検証する。チアロの言葉にも、肯けるような気がしたが決定的な確信がない。全てはぼやけた曖昧な世界にあって、何もかも現実味がない。クインの反応がどうやっても薄いことに気付いたらしく、チアロはやや置いて寝台の脇から大きめの何かを取り上げた。

「あ……」

クインは喘いだ。それを目にした瞬間に、薄い皮膜が破れたように全てのことが次々に溢れ出してくる。

エミリア、暖かな色をした優しい絵の人。一度は澄んだ視界が見る間にぼやけてくる。自分は泣いているのだ。出会いの夜に目を見張った彼女から一息に、最後に見たミシュアの海での微笑みまでを駆け上がる。

「これ、彼女から預かったんだよ。お前に渡してくれって言われた」

チアロがエミリアの画帳をクインの膝におき、口を綴じていた紐をほどいた。クインは頷いた。夢ではなかった。あの心穏やかで楽しかった日々は幻でも空想でもなく、最後に身に残った傷と共に確実に刻まれている。エミル、とクインは呟いた。俯くと涙が落ちて画帳の表紙にこぼれた。それをチアロの指がこそげとる。ごめん、とチアロの声が聞こえた。

「……こんな風にはしたくなかったのに、お前にもライアンにも、一つもいいこととしてやれなかったな」

チアロの声音には深い悔恨が滲んでいる。お前のせいじゃないよ、とクインは言った。誰のせいだということには意味がなかった。ライアンの仕打ちに憤っていても、それが自分の癪癢で利己的な欲求だということくらいは知っていた。けれど、それを押してでもライアンには自分を見て欲しいと思い、願いが叶わないと焦れて自棄になったのだ。

エミリアに出会ったのは、そんなときだった。乾いた砂に吸い込まれていくように、エミリアの全てが胸に通っていった。誰でも良かったのだろうかという疑問は、さらさらと目の前を通り過ぎてしまった。自分に希望という言葉を教えてくれたのは、彼女であったはずだから。

いいんだ、とクインは繰り返した。チアロが切なく笑ってごめんよと呟いた。クインは首を

振り、そっと画帳の表紙をめくった。一人にしてくれるつもりなのだろう、ゆっくり休めと言い残してチアロが席を立ていく。それを視界の端で確認しながらクインは目を落とした。

練炭の強く淡い濃淡で描かれた世界は、良く知った温もりのままにあった。最初の一枚には近所で遊ぶ石蹴りの子供がある。

——私とうとう見つけたわ あの人は私の運命の人——

耳の奥に明るい恋の歌が蘇る。エミリアのアパートから覗いた日常の写生だ。日だまりの猫に逃げてしまったという注釈、蝶の展翅。側に走り書きの文字が日付と場所を教えている。

自分もいる。最初の一枚は背中だけで表情さえないのに、尖りきって折れそうなナイフのようだ。ひどく苛立ち、暗く出口のない怒りで気が狂いそうだったのだと今なら思える。エミリアの部屋での写生もやはり背中が多い。けれど、何かが劇的に変化したのが背中だけでも分かる。自分の肩や俯く首筋から暗い翳りが消えている。

これが彼女の力だった。いつでもクインを許し、優しく笑ってくれた。大丈夫よと囁いてくれた。自分が彼女の優しさに甘えつけ込んでずるずると居着くのを、黙って受け入れてくれたのだ。

エミル、とクインは呟いた。居心地が良かった、甘えていた。自分の背負うもの全てを投げて彼女に縋り付こうとしたのだ。そしてそれをエミリアは受け入れようとしてくれた。船の中で手を繋いで眠った記憶、ミシュアの砂浜で約束のために抱きしめた身体。肌の熱。平凡な女の平凡な優しさでも良かった、彼女が自分を抱きしめて、大丈夫よと言ってくれればそれだけで良かったのだ。

クインはこぼれる涙を左手の甲で拭った。胸にあるのは引き裂かれたという痛みでもなければ世界への煮えたぎるような怒りでもなかった。

——淋しい。ただ、淋しい。たまらない。

寂寞とした大地に一人で立っているようだ。ほんの僅か先に潤う泉が見えていた気がしたのに、それは蜃気楼だったのだろう。真夏の光線と紺青の海に抱かれて一度は取り戻せると思った自分の中の平均律が霞み、消えていく。

次の頁をめくると、項垂れる自分の背に翼が描かれていた。これが希望の形なのだ。俯きながらも前へ行きなさいとエミリアの声が耳元で謳っている気がする。

行きなさい。前へ未来へ進んで行きなさい。

今はまだ小さいけれど、いつか広げて飛ぶことが出来るわ。

エミリア、とクインは喘いだ。目を閉じると涙がぼたぼたと紙に零れる音がした。上掛けの端でそれを吸い、クインは自分の背にあるとエミリアが言った翼を見つめた。彼女の瞳にこれが見えていたなら、いつか自分にも見えるようになりたいと思っていた。いつかエミリアの見る世界を、自分で見たかった。——エミリア、あなたの手の紡ぐ、愛と祈りといたわりに満ち満ちた世界を。

クインは泣きながら次をめくる。船の中で彼女が描いていた小品がいくつか続き、それは突然現れた。自分だ。はっきりと分かる。笑っている、胸が痛むほど明るく強くまっすぐに、自分が笑っている。沢山の笑顔。いくら描いても足りないと思ったのか、筆致は急いで早い。勢いの

ある線が自分の満面の笑みを描き留め続けている。日付はミシュアで別れた日だ。砂浜でこれを描いたのだろう。

エミル、とクインは呻いて画帳を閉じた。正視は難しかった。何を失ってしまったのか、はっきり分かったのだ。エミリアは確かにクインの希望かそれに近いものだった。彼女は全身全霊を籠めて自分への慈悲を描いてくれた。これほどまっすぐで堂々とした視線を、何の含みや翳りもない笑顔を、クインは鏡の中にさえ見つけることが出来なかった。それを簡単にエミリアは掴みだし、紙の上に広げて見せてくれている。

大丈夫よ。エミリアの優しい声がした気がして、クインはゆっくり身体を寝台へ横たえて画帳を抱き寄せた。彼女の代わりにこれを抱いて眠りたかった。暖かさは同じだ。そう信じればかなう。大丈夫よ、大丈夫よ……エミリアの声が遠く歌っている。彼女の世界を抱いて、クインはゆるやかに微睡みへ漕ぎ出した。

目が醒めたのは夕方近い時間だった。差し込む日が赤い。気付くとチアロが出し放しにしていた椅子で、ライアンが画帳をめくっていた。身じろぎするとクインが起きたのを分かったのだろう、画帳を閉じて足下へ置く。

クインはじっとライアンを見つめた。ライアンも同じように自分を見つめ返してくる。彼とこうして視線を意味無くかわすのは本当に久しぶりだと思った時、声が聞こえた。

「済まなかった」

うん、とクインは長い吐息と共に言った。チアロは言わなかったが、自分の怪我は殆どをライアンの暴力がつけたものなのだろう。それをさせたのは自分だ。あの瞬間瞬間のことを時系列立てて思い出すことは出来そうにないが、ライアンの傷だと知っていてリアンの名を持ち出し、そこに爪を立てたのは自分なのだ。

「あと二十日もすれば右腕の包帯は取れるはずだ、医者がそう言っていた」

「うん」

「足はひねっただけだから、もう大丈夫だとも」

「ああ、うん……」

「……済まなかった」

ライアンの声が呻くように言った。そこに籠もった深い慚愧にクインはもう一度、うんと返事をした。ライアンが自分の額を指でなぞり、頬に触れる。傷は残らない、と言われてクインは目をしばたき、そういえば自分で左の頬をひっかき下ろしたことを思い出した。

クインはそれにも頷き、ライアンの置いた画帳へ視線をやった。泣いた痕跡も残っているだろう絵を見られるのはひどく恥ずかしく、そして居たたまれなかった。自分が何をエミリアに求めていたかまでを見透かされそうだ。

「あの女の絵だな」

ライアンの言葉には抑揚がない。これはいつものことだったが、急に不安がこみ上げてきてクインは左腕を伸ばし、ライアンの服の裾をつまんだ。握りしめたかったが、無事な三本の指ではそうするしかできなかった。

「彼女には手を出さないで……お願いだから」

必死の思いで口にした言葉に、至極あっさりとライアンは頷いた。その反応の早さが却って不

安を呼んでいることに気付いたらしく、大丈夫だと付け加える。

「俺はチアロに任せた。だからあとは奴に言え」

クインは頷いた。チアロに一任した時からライアンはエミリアのことを手にかける気はなかったのだろう。むしろ、その気がないからチアロに任せたということも言えるはずだ。チェーンでは特に頭目の面目が重要視されている。エミリアのことを知りながらライアンが彼女を放免したならば甘いと言われる種類であろう。チアロならば、まだ目立たない。ありがとう、とクインは呟いた。ライアンは頷き、それと、と続けた。

「オルヴィはお前の身辺から外す。お前とは本当に駄目だな、まるで合わない」

そんなことを今更気付いたのかとクインは呆れかえる。ライアンは溜息になった。

「別に俺の愛人だからという理由でお前に添わせていたんじゃない。だが、どうやら無理のようだ。今後はチアロのところの子供が来る。オルヴィがしていた仕事はディーに割り振る。ディーの方がまだましだろう、お前にとってはな」

クインは曖昧に頷いた。どちらがより嫌いかということになれば、確かにディーの方がオルヴィよりも数段はましだったのだ。クインが頷いたのを見て、ライアンはそれと、と付け加えた。

「それと、ディーに礼を言っておけ。奴が止めなければ俺はお前を殺していたはずだ」

それにもクインは頷いた。記憶のどこかで殺す気ですかと怒鳴っている声を知っている。あれはディーだったのだろう。彼がライアンを止めたのは自分へのいたわりなどではなく、基本的にはライアンがその意志で庇護していることを急激な怒りのために破綻させることをためらったせいだ。それがすらすら理解できるが、助けられたのは事実であるらしい。分かった、とクインは小さく言って目を閉じた。

ディーの思惑を指摘して毒づく気力は既にどこにも見あたらなかった。すっかり何もかもが燃え落ちて、残っているのは温かな記憶の気配だけだ。全てを失って茫然としている。ここにあるのは脱け殻のようなものなのだ。エミリアが去り、再び世界は薄暮へ落ち込もうとしている。彼女の希望という言葉がなければ、既にくず折れていたかもしれない。

エミル、とクインは呟いた。その瞬間に、瞳が潤み出す。その熱さに耐えられず瞬きをする、涙がこぼれて頬をかすめていった。むず痒い感触を嫌って枕に頬を押しつけていると、それを大きな手がゆっくりと撫で取っていくのが分かった。

クインは目を開けてライアンを見る。自分を見やる彼は自分と同じ程度に傷ついたような表情をしていた。クインをこうして寝台に送り込んでしまったのは彼自身だった。そのための痛みを簡単に表情に見つけることが出来る。クインは混濁した記憶の中に残っているライアンを巻き戻し、あんた、と呟いた。

「笑ってたよね、ライアン……俺を殴りながら、笑ってた」

ライアンの指が一瞬ぎくりとしたように止まり、そしてややあって再開する。そうらしいなという声にはひどい悔恨の影があって、クインをやや落ち着いた気持ちにさせた。

「多分、お前を殺せるのが嬉しかったんだろう」

ライアンの返答に、クインは吐息で笑う。

「倒錯してるね」

「本当だな」

ライアンがゆるく笑うのが聞こえる。それに合わせるようにクインがそっと笑うと、ライアンは涙をぬぐっていた手をクインの髪に置いてゆっくりと撫でた。

「だが、お前が死ななくて良かった——自分でしておいてと思うだろうが、時々自分で歯止めが利かないことがある……済まなかった、殺してしまうところだった……」

彼の声が吐息のようにかすれて消えた。クインはライアンを見た。年長の男はクインの髪を撫でながらどこかで放心したような表情をしていた。過剰な安堵のためなのか、それともその余韻を引き戻して怖れているのか、いずれにしろクインに手をあげたことを痛みとして覚えている。

いいよ、とクインは言った。彼を怒らせ挑発したのは自分だったのだ。あの瞬間、殺されてもいいとさえ思っていたはずだ。ライアンがリアンへの追悼に縛られて身動きが取れないことを誰よりも苦く思っているのは本人なのかも知れないと初めて思う。

けれどそれを責めてしまうのは、ライアンの視線が自分だけでなく、例えば彼に忠実で明るい友人のことも見ようとしないからだ。チアロはいいよと笑っていたが、彼の胸内を思えばただ切なく、哀しかった。

「いいよ、分かってる……あんたには特別はリアンだけで、俺も他の奴も誰もそこに入れる気がないんだ」

クインの言葉にライアンは苦く笑い、長い溜息をついた。

「……リアンの替わりはいない。誰であっても。お前に何を言われても、それを譲る気はない……彼を信じているし、信じることを信仰と呼ぶなら彼は俺の神だ——死んでしまった今でも」

僅かに何かを思いだしたのか、ライアンの目元が痙攣した。目にあるのは未だに癒えないままでじくじくと膿続けている傷であった。クインはそう、とその目の影を見つめながら言った。

「淋しいね」

「そうだな」

ライアンは少し笑い、けれど、と続けた。

「けれど、今を生きている奴らを厭うていることはない。チアロのことも、お前のこともな……ただ、俺は求められるのに慣れていない……のだと思う。欲することは知っていても、どう受け取っていいのか、分からない」

クインは頷いた。ライアンはまだ子供と呼べる頃、ろくな記憶さえ残っていない頃に母親に身売りされて厳しい環境を生きてきたと聞いたことがある。最も最初に与えられる無償の愛情は母からの慈雨だ。彼はその経験が殆ど無いのだろう。歯痒いね、と言うと、ライアンはそうかと頷いた。

「そうか、歯痒いか。……そう、なのだろうな多分……けれど、お前が苦しむのは俺にも辛い。どちらが辛いかは良く分かった」

クインはじっとライアンを見つめる。薄暮で次第に視界の悪くなる世界の中、ライアンは確かに目を伏せてクインを見ていた。

この視線だった。自分を案じ、心を推し量ろうとする目。ライアンが自分を気にかけているのだという事実突き当たり、クインは瞬きをした。焦がれるほど欲しかったはずなのに、なだらかに満ち足りた気持ちになっても歓喜とは遠い。エミリアのくれるはずだった安息とは、これは

決定的に何かが違うのだ。

エミリア、と湧いてきた言葉を呟くと、ライアンがあの女か、と低く言った。

「忘れろ。お前が忘れてやることが、あの女のこれからを保つ。二度と会うな」

クインは返答をせず、肩を震わせた。一度は引き込んだ涙がエミリアの優しさの追憶に触れて再び零れだした。

エミリア。好きだったのだ。どんな依存であっても甘えであっても、その腕に巻かれて心跳ねるほど嬉しかった。愛かどうかは分からない。恋していたという確信もない。けれど、母親から離れて初めてクインのために胸をさらけて好意を見せてくれた、貴重な時間だった。

エミルと泣きながら呟いたとき、ライアンがその涙へ唇を寄せた。泣き火照った肌にはそれは一瞬震えるほどに冷たい。やめろ、とクインは唸ってどうにか動く方の腕でライアンを押しつけた。

「やめろ、俺は、もう……」

ライアンの関心は要らないのだとは言えなかった。けれど、エミリアとのことの埋め合わせだとするなら酷く傷つくとは思えなかった。ライアンはクインが飲み込んだ部分を察しているのか何も言わずに体を離し、そして置き捨ててあったエミリアの画帳を手にとった。

足早に部屋の隅にある石の暖炉に立ち寄って中へ放り込む。たまっていた去年の灰が舞った瞬間に、何をしようとしているのかを悟ってクインは喘いだ。やめろと叫んだ声が既に潤んでいる。

ライアンは振り返らずに、腰に吊った煙草入れから火種石を取り出して躊躇わずに火をつけた。クインは自分のかすれた悲鳴を聞いた気がした。エミリアの全てがあっという間に燃えていく。

「忘れろ」

ふと気付くとライアンがクインの側にいて、震える体をきつすぎないように抱いていた。その腕に縋るようにクインはじっと暖炉を見つめ、喘いで身を折る。ライアンに力の入らない身体を預けたまま、全てが燃え尽きるのを見るように言われて黙って画帳の末期を見つめた。

エミリアとの全てのことが、今炎の中に消えていく。最初から幻だったように、何もかもが燃えてしまう。涙が出る。

それを惜しんで泣き叫んでいいのか、それとも理不尽だと声を荒げていいのか、それとも麻痺したように茫然としていることを悲しめばいいのか、まるで分からない中で、クインはひたすら泣きじゃくった。

黒ずんだ塊が最後にぼろりと崩れるとクインはライアンを押しやり、身体を寝台へゆっくりと戻した。片腕の痛みのためにひどく緩慢な仕草を見かねたのか、ライアンが一度抱き直して横たえる。その優しさに見える仕草が辛くて顔を背けると、ライアンが低く言った。

「忘れろ。全て無かったことだ——いいな」

クインは首を振ろうとした。

「ライアンは、彼女の代わりに、ならないんだろう？ 俺のことはどうでもいいと」

言いかけた時、ライアンが不意にクインの唇を手で塞ぎ、涙の後へ口づけをした。ぴくりと身

体が揺れる。自分が欲しかったものとは何かがずれていることを承知していても、それはひどくよく似た幻影だった。

「忘れろ。無かったことだ。最初から何もなかった。忘れろ、クイン。今から記憶を繋ぎ直せ」
ライアンは口早に言って、それへの返答を拒否するようにクインの頬の爪痕に唇を落とした。クインは呻いた。息苦しさだと思ったのかライアンが、口を塞いでいた手を離す。それに大仰に呼吸をしていると、ライアンの唇が自分の頬を何度もつえばむようにかすめた。

視線をあげると瞳がかち合った。一瞬戸惑ったようなライアンの目にまっすぐ視線をあてながら、クインは彼の頬に触れて目を閉じる。手でゆっくりと導くと、わずかな躊躇いの時間をおいて、唇が塞がれたのがわかった。娼婦の世界の口づけは、貞操の意味だとライアンから聞いた。それを迷った律儀さがひどくおかしい。

そしてエミリアと最後までキス一つさえしなかったことに気づき、クインは急にこみ上がってきた何かと、その何かを忘れるために無事な方の手をライアンの首に巻き付けた。ずるずると曖昧になる世界の中で、自分の声は確かに啜り泣き、泣き続けていた。

それはこの夏を葬るための鎮魂歌であるように耳に響いた。

しゅっという空気の音にカノンは背後へ跳躍した。銀の線が一瞬後に自分の残像を斬る。微かにあがってきた相手の呼吸を聞きながら、カノンは繰り出された切っ先を待ってぎりぎりのところで身をかわし、行き過ぎて僅かにたたらを踏む子供のうなじを指で軽く突いた。

「これで15回目のご薨去です、殿下」

ふっと振り返った子供は照れくさそうに笑い、カノンから離れて大きく深呼吸をした。

「やっぱり駄目だね、まだ全然足りない」

そんな事を言う口調に淡い悔しさや苦笑めいたものは浮かんでいても、激しさはない。自分の力量の不足についてこの皇子はよく知っているようだし、今の時点でまったくカノンにかなわないことを当然と受け止めているようだった。

「どうなさいます、もう少しお相手いたしましょうか」

カノンが言うと、皇子は多少考えるような時間をおいてから首をかしげた。

「お前は？ 僕はいいけど、お前の方は仕事はいいの？」

「これも仕事でございますよ」

カノンは仮面の下で淡く微笑みながら言った。軽く咳払いする。

この1月ほど、カノンはタリアから離れて魔導の塔にあった。変声期という時機に相当する魔導士はあまり仕事には従事しない。魔導が結局人の声を媒介として力を引き出し効果を組み合わせるものである以上、声変わりする頃には何もかもが辛いのだ。

その期間は役目を特免されて魔導の塔に籠もり、師匠の魔導士について研究の助手などを務めるのが普通である。カノンも例外ではなく、こうして塔に戻って声が落ち着くまでは待機ということになる。

カノンの返答に皇子は軽く声を立てて笑った。第1正妃イリーナとよく似た面差しは愛らしく整っていて、やや紫のかかった深い青の髪と同色の瞳が朗らかに人なつこい。それがシタルキア皇国のライン・アミネス第4皇子であった。

母妃が溺愛するという話は小半時ほどですぐに納得が出来た。第1皇子であるリュース・クインはおとなしく控えめで万事ひっそりしているが、こちらは明朗さと嫌味ない甘え方を持っている。これほど素直になつかれると、なるほど愛しいものなのだ。

ライン皇子にどうやら剣士としての類い希な才能があることは2、3年前から次第に明らかになってきており、既に成人前の子供たちは相手にならない。近衛騎士と混ぜてみても遜色がなかった。無論体力や腕力の問題があるからまったく対等というわけにはいかないが、あと3年もすれば公式の剣試合で実はかなりよいところまでゆけるのではないだろうかと言われている。公式試合は色を付けた剣を使う得点制だから、技術をより試されるのだ。

息子の才能を誰よりも喜んでいるのは母親であるイリーナ皇妃で、近衛に預け、そこでも頭角を現す気配を知ると、今度は更なる鍛錬の為に魔導士を要請した。魔導士は魔導の力を借りて時間をより多くの区切りとして掴むことが出来る故に、一般の人間からみえれば驚異的な身の軽さを誇っている。

その役目がカノンに回ってきたのは彼が現在待機期間中であることも理由の端に囁んでいるが、何よりもその第1皇子の護衛魔導士マルエスの推薦が大きい。カノンが以前からタリアの赴任

に心浮かないことを知っていて、未だに護衛魔導士を持っていない皇子の相手役ということで相性を見るようにと魔導士の管理をひきうけている塔の長老会に進言してくれたのだ。

その言葉のおかげで、とりあえず変声期の待機期間はライン皇子の側にいる事が出来そうであった。塔や魔導の研究会で会えたら一言礼を言いたかったが、マルエスはリュース皇子の用事とやらで多忙を極めており、対面する機会が未だに無かった。

ではあと少し、とライン皇子が言った。この冬に11歳になるはずの少年であったが、皆が口を揃えて言うように確かに筋がよく、本人も熱心だ。強くなること自体が面白いのだろう。皇子が剣を構えて最初の距離を取る。カノンはどうぞ、と言った。

皇子が軽く呼吸を切って低く駆け出す。皇子が横に払った模擬剣をふわりと飛んでかわすと着点を見定めていたように彼の胴を狙い、正確に剣がはしった。

カノンは模擬剣の中程を押さえるように足で蹴り、皇子の脇へ回る。均衡を崩した皇子がそれでも受け身を取りながら鮮やかに回転し、勢いのまま素早く立ち上がった。

カノンは彼の突きを軽くかわし、するりと皇子の背後に回る。と、皇子はそれに合わせるようにかかとでくるりと体を入れ替えた。軸にならなかった右足で剣練所の石床を蹴り、カノンの羽織る魔導士の長衣めがけて突っ込んでくる。絹一枚というあたりでそれを避けながら、カノンは人々の言う皇子の才能というものをつくづくと思い知った気分だった。

本気かと問われると微妙だが、決していい加減に相手をしているわけではない。なのにほんの1刻前にはまるで届く気配さえなかった皇子の剣が、次第に自分に近いところをかすめるようになってきている。飲み込みの早さと勘の良さ、そして殆ど驚異的というべきはその反射神経なのだろう。

魔導士とまともに戦うことが出来るならば国内一級の戦士であると結論してもいいが、カノンはそんな相手を数人しか知らない。……そしてそのうちの一人が現タリア王アルードであることは決して偶然などではないのだった。

斜めに切り下ろした剣の軌跡をくぐってカノンは皇子の正面へ潜り込む。皇子はほぼ真横に飛んでそれをさけ、着地の反動を利用して逆にカノンの胴横に剣を滑らせた。鋭い一撃をカノンは軽く飛びかわし、皇子の背中側へ降りる。皇子の反転は早い。その動作の機敏さだけでも、恐らく本当にこの子供は強くなると確信が出来た。

「殿下、こちらへ！」

カノンは軽く手を挙げる。もっと打ち込んでこいという言葉に皇子は小さく頷き、剣を繰り出した。剣を振り回すというような大味さは微塵もない。手首も強そうだ。腕から肩にかけての筋肉を使う基礎の部分と、手首の角度で剣を操る小手先の技術の両方を、皇子は均衡良く使っている。

皇子の一撃をひらりとくぐって体を返したとき、別の魔導の匂いがした。魔導を身に帯びる者が近くにいと、身体能力の補助や向上のために自らに施している魔導の波長が空気を歪めて伝わってくるからすぐに分かる。魔導の塔には現在120名ほどの魔導士がいるが個々によって波長は違うから、知人であるなら判別が出来た。

カノンは打ち込まれてきた皇子の剣にすれ違い、その首筋を軽く叩いた。

「——16回目です、殿下」

勝敗を宣言するとライン皇子はそうだね、と屈託無く笑った。

「やっぱりまだ追いつけないなあ……カノン、だっけね。もうしばらくは来てくれるんでしょう？」

この相手役が暫定であることは知らされているのだろう、ライン皇子はそんなことを言った。カノンは頷き、でも本当に筋がおよろしくて驚きましたと付け加えた。

「……いずれ私の方も自分を鍛錬しておきましょう。が、殿下、お迎えですよ」

ライン皇子の手から練習用の模擬剣を受け取りながら、カノンは魔導の気配の方を振り返った。あ、と皇子が明るい声になる。手を挙げて勢いよく振りながら、兄上と叫んだ。

「兄上！ 兄上、いらしてたんですか？」

剣練所を見下ろす観覧席の中程にぽつんと座っていた人影が立ち上がり、ゆっくりした歩調で階段を降りた。簡単に観覧席と剣練所を区切る鉄格子の腰高柵越しに、ラインと呼ぶ。兄の元へ走り出す、跳ねるような歩調の軽やかさにカノンはそっと仮面の下で微笑み、模擬剣をその場において歩き始めた。

同母の兄弟は頬を寄せ合うようにして密やかに何かを言い合ったり笑いあったりしていた。その様子は少女たちがじゃれつくような、甘やかな秘匿を描く一枚絵のようによく空間に収まっている。二人とも繊細な面差しと高貴を感じる空気を、皮膚の一部のようにごく自然に身に帯びていた。

カノンはそっと近づき、ライン皇子の背後へ膝をついた。リユース皇子がちらりとカノンを見た気配がした。大仰にならぬようにしながら頭を下げる。兄の視線に気付いたのだろう、ライン皇子はカノンというんです、と朗らかな声音で彼を紹介した。

「魔導の塔から来てくれて。……ええ、そう、全然かないません。剣、当たりそうで当たらないんだもの」

自分の言葉にくすくすライン皇子は笑った。カノンが皇子の集中力を持続させる為に、わざと回避の瞬間をぎりぎりまで待っていることは分かっていたらしい。

弟の言葉に淡く微笑んだリユース皇子は相変わらず、確かに辺りを圧倒し気配を染め変えるほどの美貌の主であった。嫌味なく明朗で素直という美德に恵まれたライン皇子の持つ、温かで人なつこい空気とは違い、この兄皇子の方にはひんやりと他人を距離をとる、夜の空気がある。類い希な美貌であることは確かだったが、それは線の細い人形のような脆さと繊細さから無縁ではなかった。

「カノンと言ったね。ラインを宜しく頼むよ」

弟の頬を軽く指で撫でてやりながら、リユース皇子が言った。御意のままに、とカノンは更に頭を下げる。リユース皇子は頷き、弟皇子に向かって切り上げを促した。太陽の熱が既に弱い。黄昏が近いのだろう。

皇子二人が何事かを話しながら遠くなっていく。カノンは膝をついたままで十分に遠ざかるのを待ち、立ち上がった。模擬剣を詰め所へ返してから魔導の塔へ戻らなくてはならない。タリアにいない時にはそこが彼の戻る巣であった。

魔導の塔の魔導士たちには基本的には個室が与えられる。魔導士となるまではその師匠の部屋

住となって資格を取るまでは出ることを許されないが、魔導士の試験に通ればあとは比較的、個人の生活は自由だ。

カノンは自室に入って鍵をまわす。そして大きく呼吸をして仮面を取り、束ねて頭巾へ押し込んである髪の手止めを解いた。黒い髪がふくらむように流れ落ちてくる。カノンは首を振ってそれを軽く払いのけ、仮面を机においた。顔の上から目を押さえる。

魔導士の仮面は個人情報秘匿を目的にして作られていて、魔導士の試験に通った時に師匠から贈られるものだ。大抵は師匠が周辺の気配や風景を直接脳髄に送り込むための魔導を施しているから、目で物は見なくとも直視しているのと同じ程度に現実を知覚することが出来た。白銀のなめらかな表面の額には階級を示す紋様が描かれ、内側にはカノンという名が彫られている。

カノンか、と少年は苦笑した。その名は魔導士としての名前であって、本名は別に存在しているはずであった。けれど、カノンはもうそれを思い出せない。鏡をちらりと見れば、あの第一皇子にうり二つとはいえないが十分に似通ったものを見いだせる、端正で美しい面輪がそこにある。

父親と一緒にいた頃、父が自分を連れ歩く先々で少女と間違えられたり、近所の女たちが自分を可愛いとほめそやしたり、そんなことがたくさんあった。年齢は確か、———確か、今、15か6だったはずだ。この魔導の塔に連れてこられた時が6歳だった気がする。

但し、カノンの記憶は既に涙の向こうの景色のように歪んでぼんやりした色彩の塊になりはてている。自分の本名も、年齢も、住んでいた場所も、何もかもを生活に追われていく内に忘れてしまった。これは子供の頃に塔に連れてこられた魔導士にはさほど珍しい現象ではないらしいから、気に病んだことはない。

それに、ほんのいくつか覚えていることもあった。

たとえば、自分に母親がいなかったこと。確か……多分、最初から、いなかった。

父親がいて、とても優しく背の高い人で、その父に連れられて色々な土地へ行った気がする。父は時折何かに怯えたように自分を抱いて、自分の名前を呼んでいた———もう忘れてしまった、その名前を。

お前には大変な運命を与えてしまった。けれど自分に正しく、人に優しく、そして世界に正直に生きていきなさい。いつかお前に私とお前の母親のことを話さなくてはならない。それは私と彼女の罪の話でもあるが、けれど、お前をこの世に生み出した真実を私はきっと話すはずだから———

父の言葉の抑揚や優しい声は見つかるのに、そこに語られているはずの自分の名前が良く聞こえない。カノンは鏡の中で気難しく眉根を寄せている自分と目を合わせながら、じつくりと胸の中の記憶をまさぐり出そうとした。

途端、目の前に火花が見えた。はっとカノンは顔を上げる。これ以上はどうやら禁戒に触れるようだった。

魔導士に科せられた禁戒は、実はたった3つしかない。

素顔を含む全ての個人情報は秘匿されること、たとえ何であっても主人の命令には従うこと、そして長老会の決定に服すること。この3つだけが魔導士を縛る。どこからどこまでを不服従とするのかの境界線は常に曖昧に推移しているが、禁戒に触れればそれはすなわち死であった。法

文には「処分」と記される。魔導士は物と同じであるのだ。

そして自分の過去はどうやら自分でも知ってはならないようだった。それに対する疑問は自分でも驚くほど小さかった。何がどうしたところで、自分の現実と未来が変化するわけではない。

カノンは魔導というものに対して馴染みが早かった。魔導の塔に来てから4年で魔導士たる資格を得たが、これは魔導の塔の記録に残るほどのものだ。どんな呪文でも構成でも、泉が湧くようにどこかから彼の中にわき上がってきた。

それが才能なのだと師は嬉しそうであったが、その師ももういない。カノンが資格を取った翌年に南大陸の雄であるフィアラズ帝国へ出向を受け、出先で事変に巻き込まれて処分されたのだ。カノンを天才だと喜んでくれた師の死は辛かったが、その後に拝受した辞令はタリア王の側近としてのタリア出向であった。

正直、カノンはタリア出向を喜んだことがない。魔導士を要請するのにも莫大な金額や資格や推薦がいるが、その代価を支払った主人には文字通り命をかけて忠節を尽くす義務がある。魔導士たちの間で一番希望が高いのは皇族の護衛だが、これが恐らく最も安寧に余命を保つことの出来る仕事であった。そしてタリア王の手足となるならば対極といってもいいだろう。

タリアには抗争が多い。タリア王の交代のときはもちろんだが、そうでなくても各派閥や末端の支配領域の諍いなどは珍しくなく、自然沢山の危険を身近にしなくてはならなかった。主人の命を全うできないと魔導の塔に報告されれば処分、そして服命を拒否しても処分、だからおとなしくタリアへ行くしかなかった。

タリア王アルードが今のところ子供である自分に多少気遣いを見せているのか、命じられる仕事に困難すぎることはないから助かっているが、もしタリア王の交代が囁かれるようになれば、今のようには安穩としていることは出来ないだろう。

将来的にタリア王を狙うことの出来る位置にあるのが、今はライアンという男一人だから暗殺でも命じてくれればいいのには思わなくはない。正直、やり遂げる自信はある。接近戦では苦勞するだろうが、そもそも魔導で身体的能力をそいでもいいし、炎で焼き払ってもいい。

けれど、アルードは命じようとはしなかった。実際そのライアンを至極便利に使っているのだから、今はまだ価値があると思っているのだろう。主人の思惑に口を挟むことは禁戒ではなかったが歓迎はされなかった。だからカノンは黙っている。わざわざ仕事を作ってし損じることがあれば、それは自分の生命に直接関わる危機となる可能性があるからだ。

カノンは微かに溜息をついた。魔導士として生命をまっとうしていくことは難しいことではなかった。彼は物事の飲み込みも理解も人より早かったし、魔導に関しては飛び抜けて優秀であることは自負している。

多分、長らえれば史上最年少で長老会へ入るだろう。いくつか掛け持っている魔導の研究会のどこでも、彼は同志たちから感心と賞賛を受け取っている。

けれど、その先に一体何があるのかカノンは上手く捕らえることが出来なかった。一体自分が何処から来て何処へ流れていくのか、うすぼやけた過去と不鮮明な未来しか思い描けないときには、そんなことをぼんやり思う。父や幼い頃の記憶が曖昧であることも、きっとそれに拍車をかけているのだろう。

カノンがそんな根拠のない推論に一人頷いていると、自室の扉がこつこつと叩かれた。扉を開けずに返事をする、外からの声が言った。

「魔導士カノン、在室か」

聞き覚えのない声だが、呼び出しは魔導の塔専属の奴隷と決まっている。あちらが敬語を使わないのは、自分たちの方が奴隷よりも更に下層の身分に位するからだ。

「今、装束を解いています。何用ですか」

扉に近く立って言うと、外の声が長老会の呼び出しを告げた。先日出しておいた転任の申請に対する回答が出たのだろう。辞令は同時期に申請をした魔導士たちとまとめて伝達が行われる。

髪をまとめて色が見えないように頭巾へ押し込み、仮面をつけてカノンは外へ出た。外には既に呼び出しの奴隷はいなかった。伝令が済んだことで自分の他の仕事へ戻ったのだろう。

呼び出された議事廷には既に長老会の構成員である上級魔導士たちは見あたらなかった。他の魔導士の影もまばらで、支度をしている間に終わってしまったらしい。人数が少ない時はそんなこともある。

だが、カノンは自分を待っていたらしい年長の魔導士にすぐに気付いた。さきほどもリユース皇子の側に、姿は隠遁させていたものの随従していたことは分かっていた。魔導士ならば魔導士の気配をすぐに感じ取る。

「同志カノン、来たか」

マルエスがゆらりと身体を彼に向けた。

「同志マルエス、お久しぶりです。先ほどは挨拶もせず」

マルエスはうむ、と頷いた。彼の年齢はもちろん分からないが、階級としても魔導士としての経年もカノンの先達というべきであった。治癒に関わる魔導の研究会で同席する以外にはあまり見かけないが、マルエスの場合は主人であるリユース皇子自身が魔導に良く通じていることもあって、皇子の相談役としても努めているようだから忙しいのだろう。

「我も隠遁していたおりゆえ、構わない。それより、長老会からの裁定を預かっている」

マルエスが差し出した文書を受け取り、カノンは巻き留められていた紐をほどく。たたりと下がった辞令書には、長老会全員の魔導印と長老会決定の朱印が押してあった。

『同志カノンの申請について長老会で検討した結論は以下である。却下』

カノンは長い溜息になった。変声期の待機期間が終わり次第、再びタリアへ戻らなくてはならない。落胆したカノンの肩を、マルエスが慰めるように叩いた。

「気落ちするな、同志カノン。同志がタリアで暗殺と諜報だけをさせておくにはあまりにも惜しい人材である旨、いずれ折を見て我から殿下へ申しあげよう」

マルエスの言う殿下というのは、彼の仕えるリユース皇子であろう。カノンは頷き、ありがとうございますと呟いた。マルエスはいや、と仮面の下でそっと笑ったようであった。

「それに、ライン皇子の護衛役は決定していない。……良い方だろうか？」

「ええ、とても。何というのか、育ちがよいというのはああいふことなのですね」

他人を疑ったり憎んだりすることを知らないような、明るい無邪気さが眩しい。人である以上は幼いながらも様々な感慨は胸にあるだろうが、他人にそれを気取らせないのが自然であった。

マルエスは頷いたが、それ以上を口にしなかった。進言しても受け入れるかどうかはリユース

皇子の判断一つであり、またリュース皇子からの要請があったとしても長老会が否決すればかわないことである以上、これから先は不確定な事柄ばかりだ。

「まだしばらくはタリアへ行かなくてもよいだろう。ならば、ライン殿下のお相手をつつがなくやりとげることだ」

マルエスの言葉に頷いて、カノンは辞令書をきゅっと握りしめた。あの赤い格子の迷路の奥に自分にとっての何かがあるとは、彼は到底信じることが出来なかった。

リィザは黒く広がる自分の髪の手からろのろと身を起こした。百合の造花の花弁が撲たれた拍子に散ってしまったらしい。白い布地の破片が黒髪の中の小舟のように落ちている。折角の花だったのに――

ふと浮かんできた涙を指で押さえ、リィザはぴくりと肩をひきつらせる。指の触れた箇所が鈍く痛んだ。

「ごめんね……」

誰へ向かうでもない謝罪を呟きながらばらばらに解かれてしまった花をかき集める。うてなの辺りへ縫いつければ元に戻らないだろうかとしばらく花弁をあれこれあててみるが、途中からちぎれてしまったものはともかく、根から外れてしまったものはどうにもなりそうになかった。

リィザは掌に安い綿地の花を握りしめる。爪の裏が淡く痺れて、その痛みで涙がまた上がってくる。唇をきゅっと結んでしばらく耐えていたものの、やがて唇の方から弛んで嗚咽になった。

何故殴る男に出会うのか、ということについては自分のせいだ。怯えがちな性格や臆病な気質はそれを煽るためのものであって、原因ではない。女将も、そして他の姐妓たちも口を揃えて言うことは、殴る男はどの遊女にも同じような確率で潜んでいて、ただその札を表にしやすい相手としにくい相手がいるということだ。

狩られる子鹿、あるいはか弱い雛鳥。保護欲をそれで見いだす男もいる替わり、弱いというだけで荒く翻弄したいと舌なめずりする男もいる。そういうことなのだろう。でも、だったら、どうしたらいいの……どうしたら、どうしたらどうしたら！

ふっと胸の中に湧いてきた一瞬の激しさにリィザは自分で怯えた。そんなことを思っただけではない。自分以外の全てのせいにしてはいけない。この妓楼で一番実入りが少なく、時折強かに顔を打たれてはしばらく店に出られないなどということを繰り返しているのだから、原因は必ず自分の中にある。

客が殴る理由は様々だ。曰く、歓待が悪い。もっとはっきりものを言え。苛々する――けれど一番辛いのはそんな罵倒ではなく、暴力でもない。笑え、という言葉が一番胸を痛くする。

それが特に、命令ではない、優しい声であったりした時は。

(少しは笑ってくれないか)

自分の頬に片手をおいて額同士を触れ合わせながら彼が言った時、どうして微笑むくらいが出来なかったのだろう。優しくされて、丁寧に扱われて、なのに何故、唇をほころばせることくらいが出来なかったのか。

一所懸命にそうしようと頬を動かしていると、遂に彼は苦笑した。いいんだと言われた瞬間、絶望のような薄い黒雲が胸の中に広がっていくのが分かった。それがひどく安堵と似ていたことが更に沈鬱な気持ちにさせる。

リィザはゆるく首を振り、造花を掴んで立ち上がった。まだ打たれた側の耳奥がにぶく反響を繰り返しているような気がするが、部屋の片づけなどもしなくてはならない。

天窓を見上げればそこには半分に足りないほどの月とゆるゆる流れていく雲、そして仄かに赤く光る硝子板があった。タリアの闇は妓楼が表に焚いていた篝火を一斉に落とすため、意外なほど青い。だからまだ早い時間といえた。

リィザは造花を自分の衣装棚の奥へしまい、化粧台の鏡を見やった。殴られた箇所は少し赤くなっているが、痕跡が残るほど酷い物ではなさそうだった。少し冷やせばすぐに元のような肌に戻るだろう。ぼってりした腫れはあるが、口の中に血の臭いはしなかった。

散らかった割れ物を拾っていると、女将からの呼び出しがあった。どうやら先ほどの客は女将にひとしきりの苦情を言っただけらしい。いつも女将がぼんやりと煙草をしている応接間へ行くと、来たね、と苦い顔をした。

「さて、同じ事を何度言ったらいいのやらだね、お前には」

呆れ半分の言葉には、明らかに次第に加算されていく苛立ちが滲んでいる。リィザは身を縮め、項垂れた。謝罪は既にその度に呟き続けていて、口にあることさえ躊躇われるほどだ。だから殆ど言うべき事はない。じっと俯いて、女将の諭すような声を聞いている。

「怖がっていても仕方ないのは分かるだろう？ 何がそんなに怖いんだ、暴力、それとも他人？ 何だっていいけどお前だけがこんなにしょっちゅう酷い目に遭うんだから、もう少し何とかおし」

リィザは黙ったままでこくりとする。女将の言うことは尤もで、反論など出来る余地がなかった。女将はやれやれと呟きながら煙草に火を入れ、深く一服している。女将の胸内を完全に知っているわけではないが、リィザばかりが酷く手痛い目に遭うことを商売ぬきで案じてくれていることは分かっている。——少なくとも、そんな気配がする。

「全ての男が優しくて人格者だったらこんな商売はあがったりだけどね、しかし全員が酷い男でもない。大体は、人の中に割合の多少で両方あるもんさ」

リィザはまた頷く。女将の言葉は分かりやすく、よく胸に通った。通るゆえに重いこともある。頷きこそすれ、返答は出来なかった。

「好きな男を作れ……と無理には言わないけど」

じいっとリィザの様子を見ていたらしい女将は煙草の煙を溜息に混ぜて吐き出した。

「でもね、もうちょっと客に愛想良くして気に入って貰わなきゃ、本当のところはお前が一番辛いはずだよ」

それも良く理解できる言葉ではあった。リィザは小さくはいと答えた。誰も苦痛を代理にすることは出来ない。リィザの苦役を解消するのはリィザ本人しかいないのだ。なのに、それをどうしていいのかが分からない。今のままでは良くないことだけが分かる。

それ以上をリィザが返答しないことに女将はゆるゆると首を振り、煙管の火を小皿で切った。「……あんまり気を張りすぎても良くはないんだろうけど。そうだね、もうちょっとゆったり構えてご覧。それだけで大分違うはずだから」

「はい……あの、努力します」

女将はその言葉に何故か哀れんだような笑みを浮かべ、そうねと曖昧に頷いた。どうしたのだろうとリィザが口を開こうとした時、部屋の扉が叩かれて小間使いが顔を出した。

「母さん、あの、リーナ姉さんにお客さんが」

ぴくっと肩が動いたのが自分で分かった。今諭されたばかりなのに、反射的に竦んでしまう。怖いのだ。結局のところ、殴る男でなくたって、全ては暴力なのだから。

リィザの様子をちらっと見た女将が、煙管を勢いよく灰切り皿に打って立ち上がった。顎をつ

まんでさっと顔立ちの様子を確認し、大丈夫だねと頷く。

「部屋は大丈夫？ そう、ならいいね。……旦那様をリーナの部屋へご案内」

小間使いに指示をして、女将はリィザに自分の化粧箱を取ってくるように言った。女将の部屋からそれを持って帰ってくると、リィザを隣に座らせて化粧を手早く始める。慣れた手つきの確かな魔法はあっという間に鏡の中の少女を一段美しくしていく。

「お前の馴染みの旦那様はそれでもまだ少しはました、せめて機嫌良く可愛くして、優しくして貰いな」

丁度その時リィザは瞼を薄く掃き始めた色粉筆のために目を閉じる。頷くことも首を振ることもしなくていい仕草に逃げ込んでいるのだ、という胸の中の呟きは小さくない。けれどそれに耳を貸してしまえば溜め込んできた澱みのような黒い物が流れ出してしまう気がして、それを無視している。

やがて女将の手が紅筆をとって唇に色を差し始めた。これで返答さえしなくていい。唇を這うむず痒さ、紅特有のぬらりとした匂い、芸術品を仕上げるかのような潜めた息づかいの女将の気配。

それらが急に遠くなってリィザが目を開けると、女将は化粧小物を箱へしまいはじめていた。リィザはぺこりと頭を下げて部屋を出る。裏廊下を通して自室へ入る裏戸をくぐると、見慣れた背があった。振り返り、軽く頷く目線が柔らかに微笑んでいる。殴る客に接した後だからなのか、今日はそれが特別温かな安心感となって胸底から溢れてくるようだ。

リィザは何かの予感の為に思わず目を伏せる。それはやはり正しくて、制御できない涙がその途端にぽろぽろと流れ落ちたのが分かった。狭い部屋の寝台にもたれていたディーは黙ってリィザの腕を掴み、ゆっくりひきよせる。彼の筋肉の厚みと温度にますますリィザは彼の肩に顔を押しつけ、ひたすらに嚙り泣いた。

「大丈夫だ、大丈夫、大丈夫……」

呟く彼の声音の低い落ち着きにリィザは何度も頷く。人肌の温度を残しているほうの手が何度も自分の髪を撫でつけてくれるのが、気力の抜けるような安堵に変わって、次第にリィザの体の中に根を張り始めるのが分かった。

「どうした、辛かったか」

気遣ってくれる声にリィザは曖昧に首を振り、ようやく止まり始めていた涙を指先で払って顔を上げた。

「ごめんなさい、あの、大丈夫です……ごめんなさい……」

他の客の話は禁忌であったから理由を口にするには出来ないが、ディーの方は何があったのかを薄々は察していたらしい。いや、と苦笑してリィザの頭を軽く撫でた。

「俺のことなら気にするな。お前はいつも俺に謝ってばかりいる」

リィザは俯く。彼の言うことは事実で、それが元からの自分の性格から来る習性に上乗せされた後ろめたさであることは明らかだった。

ディーのことを決して厭うているのではない。けれど彼の姿をこの部屋に見れば悲しくて切なくて、いつも結局は謝罪になる。いつか巡り逢うはずの魂の相手が、何故彼ではないのだろう。

それは分かってしまうのだ、理屈ではない何かによって。閉じたままの身体も、硬く冷えたままの心も、そうなければいいというリィザの仄かな願いなど無視したように同じ所に居座り続けているのだ。

ごめんなさいと呟くと、ディーは優しく、切なく笑った。

「いや、謝るな。謝らなくていい……今日はお前にいとまを言いに来たんだから」

リィザは顔を上げ、ぽかんとディーを見つめた。男はリィザの頬に軽く触れ、あまり無理をするなよと言った。柔らかな笑みを浮かべた柔らかな声音には悪戯めいたものは何一つ無く、それが決別なのだと気付くのに一瞬以上の間があった。

別離の言葉だと腑に落ちた瞬間に、リィザは小さく震えだした。どうしてとは思わない。自分のこの頑なで冷えた性質が結局、彼の忍耐の限界を超えてしまったのだ。

それが申し訳なくて、ただディーに済まなくて、けれどそれを口にしたら尚更彼を傷つけるのではないだろうかという考えが言葉を奪ったようで声にならない。ディーの持っている空気はこの妓楼の生活の中で僅かにでも馴染めるものであったはずだった。それを失ってしまうのは恐ろしく、怖い。

そう思う根が自分の心の安楽の為であることが、自分でひどく汚らわしくて厭わしかった。

「ごめ……ごめんなさい、私……私、ただ……ごめんなさい……」

一度は収まったはずの涙がまた滲んでくる。ディーは少し笑って首を振った。

「俺といるとお前は辛そうだ——どんな時でも。お前はお前で辛いとは思うが、俺を心苦しく辛く思うなら、もう来ない」

リィザは目を閉じ、瞳に積まれた涙が押し出されて落ちた。決定的な一言であった。ディーはリィザの心情を知っていて、見ぬ振りをしてくれていたのだろう。けれどももう来ない。リィザの痛みには2種類あるのを理解して、その一方を負担している自分を消してくれるのだ。

——それは、罪悪感という痛み。どんなに言葉も夜も重ねても、心だけは重ねられなかった罪へ向かう背徳の痛み。

リィザは喉で呻き、両手で顔を覆った。日常は辛かったし、殴る客も酔って無理難題を押しつける客も、粘着に責め苛む客も辛かった。けれど、一番辛かったのは、確かに彼だ。

(笑ってくれないか)

そんな容易いことさえ出来なかった。その罪が今、僅かな間だけでも心を安らげてくれたはずの男を遠ざけようとしている。何かを言おうとしてリィザはやめた。何を口にしても、今更の言い訳でしかないと分かっているはずだった。

「泣くな、お前が苦しく思うことはない……俺も、俺が本当にお前を好きかどうかなど、実はよく分からない」

ディーは長い溜息をつき、苦い笑みになった。それは恐らく自嘲の為のものであった。

「俺は俺で、お前が絶対だと言うだけの材料がない。気に入っていたというなら本当だが、それ以上は分からない」

淡々と告げる彼の表情に、翳りはなかった。リィザは頷いた。それは彼の真実なのだろう。嘘がないことは分かる。

「だから、もう来ない。……頑張れ、というのは妙な気分だが、息災でな」

リィザはもう一度同じ仕草をした。ディーはやっと気持ちが落ちたように笑い、立ち上がった。義手はつけたままだった。彼は本当に、話だけしたら帰るつもりだったのだ。

リィザは表廊下へ通じる扉を開けるディーの、がっしりした背を見る。この背にいくつかの傷があることは知っていた。傷、背骨の規則的なくぼみ、そして欠けた腕の痛々しさ。

胸に巻き起こってくるのはやはり哀しみであって、狂おしい別離への拒絶ではない。それを彼も知っている。自分も理解している。

最後に振り返ったディーの目はまだ優しく、こんな場面に出くわしたことが殆ど無いゆえの困惑で、いっそ悲しく見えるほどだ。多分、自分も同じ顔をしているのだろう。ディーの表情を見ているとそう信じられた。自分たちは、同じ目をして同じ顔つきで相手を見ている。だから駄目だったのだ。

———同じ目つき。

ぱたりと扉が閉まってディーの姿が見えなくなってから、リィザはぎゅっと唇を結んだ。

優しさもいたわりも、相手への恋情とは関係がない。恋は全く別の炎だ。燦るだけでいっかな火のつかなかった気持ちを誤魔化すことなど出来そうになかった。

———同じ顔つき。

リィザは化粧台の鏡を振り返る。そこにあったのは確かに優しく相手を思いやって慈しむ目であっても、全ての障害や困難を乗り越えても相手を巻き込み、さらっていく目ではなかった。

遠い国の音楽のように、淡々と朗読が続いている。先ほどからカルアは隣で瞼の重さと必死で闘っているが、あまり抑制できないようだ。時々目を見開いたり大仰に頷いたり、眠ってはいけないという意識があるだけましなのだろう。

本文の論旨がまとめに入ったのを聞き留めながら、リュースはそっとカルアの膝を揺する。はっと顔を上げた弟が慌てて口元のゆるい涎滴を拭い、照れ笑いになった。

し、とリュースは唇に指を当てた。それと殆ど同じくして教授が朗読を終える。どうかねと問われてリュースは大変感銘を受けました、と取り澄まして返答した。それに倣ったカルアが同じ事を同じような口調で言う。皇子たちの様子に気付かず、老教授は頬をほころばせて今日はここまで、と宣言した。

ようやく講師がいなくなった部屋でカルアが大きく伸びをして笑った。

「ああ眠かった……兄上は良くあれで眠くなりませんね」

「魔導も同じくらい古典音楽じみているから慣れているんだろうね。カルア、思うのは良いけどあまり眠っては駄目だよ」

簡単にたしなめると、弟はやんちゃな仕草で肩をすくめる。立太子のための資質を見るという題目で二人が並んで講義を受けるようになってから一月ほどになるが、カルアの気楽さばかりが評点に負として書き込まれているのは察している。リュースの場合は大抵当たり障りがないために、あまり印象にも残らないのだ。

評点が全てならいずれ自分が皇太子となるだろう。カルアもそれを望んでいる。他の人たちには内緒なんですけど、とこっそり耳打ちしてくれたのは

「だって俺が即位して兄上に補佐をお願いするとなると、結局兄上が全部国政をみるってことになりませんか？」

という他人任せの気楽な意見であった。

それにリュースはつい苦笑してしまったから、カルアの方は彼のでした承が取れたと思ったらしい。以来ますます適当な受講ぶりとなっている。

それも構うまいとリュースは思う。結局のところこの帝王学とやらの学問所などは形式だ。皇太子は貴族間の派閥の力点が左右することになるだろう。カルアに決まれば学問所の評定などは不真面目で浅慮、から明るくて行動的、へと書き換えられるのだから。

昼食のために二人でイリーナ皇妃の居宮へ戻りながら、カルアは朗らかな声でリュースの袖を引く。

「午後からエリザとルーミエが来るんです。イリーナ様の夏薔薇庭園が丁度いいから遊びに来るみたい。兄上も一緒にどうですか？」

「うん……そうだね……」

リュースは曖昧に返答する。カルアがね、と明るく念を押したのに結局頷いたのは、エリザに会うのが久しぶりであるからかも知れない。元々幼馴染みという気安い間柄で行き来があったが、中等学院に通い始めてからはあまり顔を合わせなかった。

エリザは恋人と上手く行ってるのだろうかとリュースはふと思い出し、唇だけで苦笑になる。そんなことまで自分が気にかける必要はなかったし、婚約ということになればいずれ慣例に従っ

てアルカナかアイリュスのどちらかから正妻を取ることになるだから、自分があれこれ気を揉むことでもないのだ。エリザに対してあるのは穏やかで温かな友好であって、何かの激しさではあり得なかった。

.....それは少しづつ分かり始めている。

夏薔薇庭園は母イリーナの自慢の庭だ。残夏の気配が漂い始める頃に一番爛熟する季節を迎える。.....夏の初めにその庭で、イリーナからの拒絶を受けたはずなのに、いつの間にか二人は同じ場所にいて、身体を添わせていた。

それまで母と上手く接点が見つけれなかったとしても激しい喧嘩や反抗もしたことがなく、それは母の方も事情が同じだ。ラインのことは叱りつけもするし甘やかしもするが、リュースに対してはその必要もなく美貌や優秀を誉めているうちにその他のことを忘れてしまったような節がある。

お互いに怒り慣れていない者同士の感情の行き違いが激しく決裂すると、どうなるかは火を見るより明らかだ。あれから芝居じみた暖かさが自分たちの間に流れているが、結局自分たちという母子は決定的な時間というものをまだ味わいたくはないのだろう。

それが分かっているつもりは良かった。とにかく母を傷つけることはしたくないし、非難することなどは出来るはずがない。元々感情の揺れ幅のある女性だし、と結論つけて一人で納得している。あれは言葉のあやで、単に勢いで口走ってしまっただけなのだと。マリアという、遠い昔に母の友人だった女性の話聞いたのが良くなかったのだろう。

(その友達はもう死にました)

母の今にも崩れそうなほどの硬い声が呟いている。知らなかったとはいえ辛いことを思い出させてしまったとリュースは思い、二度とそのことは口にすまいと誓った。つまりは母に辛いことはさせたくないのだ。

庭園が近くなると、白い帆布が庭園の一角に張られているのが見えた。湿度の高くない昼にはああして庭に日よけをつくって食事にすることがある。薔薇園の食事は花の香りと外の涼やかな空気のせいで、普段よりはリュースも食が進む。だから母は時々こんな風にして彼を歓待してくれるのだ。そんなことを考えているとカルアがあ、声を上げた。

「母上.....」

リュースは顔を上げる。カルアが母と呼ぶならば、それはアイリュス系の正妃ユーデリカに違いない。リュースの母とも従姉妹同士で、やはりこれも幼馴染みという関係だ。穏やかでおっとりした、深窓の令嬢という風情がまだ残っている。

こちらに気付いたのだろう、ユーデリカ妃がゆったりと手を振っているのが見える。カルアがついというように手をあげたあと、慌ててそれを下ろして赤面した。母親に甘えるのに羞恥を覚える年齢になってきたらしい。

異母弟は母親とこしばらく離れて暮らしている。淋しくないことはないだろうとリュースは思い、カルアの背中をとんと押す。照れ笑いになったカルアがそれでも少し足を速めて母親の元へ歩み寄り、頬ずりを交わした。

即席の天蓋の下には他にも父やアイリュス大公、それにアルカナ大公までもが揃っていた。無論母イリーナの姿もある。エリザたちが来るとカルアが言っていたのはあながち間違いではない

。エリザはアイリユス大公の一人娘であるし、ルーミエはいずれ一人しかいない嗣子の不都合を埋めるために、アイリユス本家へ養女に入るだろうという予測が既にあった。

つまりこれは立太子の口頭試験なのだとリユースは悟った。皇太子の決定については専任の討議会を経るという手続きになっているが、その前に主だった大人たちであらかたを決めておくつもりなのだろう。

今上帝である父、その二人の正妃、そしてこの国の権力機構をほぼ分割掌握する大貴族の両大公。リユースはアルカナ系でありカルアはアイリユス系であるが、父がアイリユス系の皇子であったことを考えるに、ことはやはり資質や意欲の問題ではないようだった。

リユースは大人たちに軽く会釈して給仕の侍従に教書を渡した。カルアがそれでやっと本の所在をどうしたらいいのかを悟ったのか、同じ事をする。

父を中心にそれぞれの母と挟まれるようにして席に着いたあと、食事は台本があるように明るく過ぎていった。エリザの中等学院での話、ラインの剣術の上達。子供たちの話に相づちを打つ大人たちの表情にはあまり気負ったところがなく、あるいは素養をみるだけであまり重要な試験ではないのかも知れないなとリユースは思う。横目でカルアをみれば異母弟のほうは刻まれた野菜の中から嫌いなものをさりげなくよけるので必死だ。

リユースはそれに苦笑し、彼の前の皿から肉を拾い出した。肉や脂といったものはひどく胸に悪くて元から余り好きではなかった。そうでなくてもここ最近、暑気あたりなのか食事をして吐いてしまうことが多い。ラインはこんなものが好きだから、と弟の皿にいつものように入れてやろうとすると、母がぴしゃりと駄目よ、と遮った。

「リユース、ちゃんと食べなさい。ラインもそんな物欲しそうな顔をしないのよ」

普段はこうしたことにあまりうるさい母でなかったから、他の大人たちの反応を気にしているのだろう。リユースはすみませんと簡単に頷き、捨てるわけにもいかないと良く煮えた肉を口の中へ押し込んだ。

何か変な臭いがすると思ったのはその時だ。腐っているということではないが、普段口にしてるものと何かが決定的に違う。口の中でいつまでも噛み続けているわけにもいかないと急いで水で押し込むと、やっと喉を塊が通りすぎて行ってリユースはほっと溜息になった。

食事が進むとやがて最後の菓子が出る。果物よりもこの季節は氷菓が多く、それがまだ胃に何かが燻っているような感覚には良かった。

早めに食べ終わったラインが椅子から滑り降り、大人たちに向かって簡単に礼をすると庭へ向かっていく。それをエリザとルーミエが追って、カルアが自分もと立ち上がりかけたとき、父帝がそれを制した。

「カルア、まだ最後の茶が出ていないよ」

カルアはきょとんとした顔で立ち止まった。食後の茶などは重要なことではない。何故それを待てと自分だけが言われるのかを理解できていない顔つきだ。自分に困惑したままの視線が向けられて、リユースは弟に首を振った。

「いいからここにいなさい、カルア。皆さんは私たちに話があるようだから」

大人たちが目配せをしあっている気配がした。父がふと目を細め、リユースの髪を撫でた。そ

れに少しばかり微笑んで、リュースは自分の前に置かれた茶を含んだ。僅かに残るのは甘い香り。薔薇園で母が摘んだ花の匂いだ。

「さて、今回の仕儀ですが」

口火を切ったのはアイリュス公であった。中年の、ややふっくりした体格は首をすくめた梟と似ている。目尻はいつも何かのために微笑んでいて、そのため細かな皺が沢山そこにあった。

「両殿下には学問所は如何でしょうか」

問われてリュースはカルアと視線を合わせ、先に口を開く。

「座学が中心なので単調ではありますが、興味深く拝聴しています」

「難しくて分からない事が多いですけど、兄上によくして貰ってます」

カルアの返答に大人たちが一斉に苦笑になる。自分の返答もあまりにそつなく出来すぎていたが、カルアも本当に適当だとリュースはゆるく笑い、そうでもないよと軽く口を入れた。父がカルアの額を撫でて、リュースに負担をかけるなよと一応の釘を刺し、二人とも、と言った。

「二人とも、もっとよく国の姿を知っておきなさい、特にカルア。お前はずっとロリスだったから、宮廷のことは良く分からないはずだ。リュースには何度か議会などを見学させているが……」

父帝の視線にリュースは頷く。

「お前も同じ事を経験した方がいい。お前はもっと知るべきだ——それとリュース」

父は今度は彼に向き直り、淡く笑ってみせた。

「お前は勉強は良くできるし思慮も深いけれど、カルアが知識を積むべきなのと同じように、お前も他人との経験を積むべきだ。いいね、人は一人では生きてゆけない、それはとても当たり前のことなのだから」

父の言葉は優しいが、頑としてもいる。リュースはやや俯いた後で頷いた。父の言葉はきちんと分かる気もしたし、具体的には何も分からない気もした。リュースが俯くと、そっと母が彼の手を握った。目線は優しく笑っていて、リュースはそれでやっと安堵する。

自分の至らないところは自分では掴みづらい。けれど父がそんな風に考えているとすれば、やはり反省した方がいいのだろう。父帝がリュースに欠点ではないのだよと優しく言って、さてと語調を整えた。

「カルアの養育もきちんとした形では終えていないし、これの皇族としての教育をきちんと施すことで審議会の時期を少し先へずらしたいと考えているが、両大公のお考えは」

父の物言いは穏やかで、根底に気遣いが流れている。威圧的でないのは父の性格からくるものだが、それ以前に両大公の意志を無視しては何事も進まないのも現実であった。

「異存はありません」

真っ先に返答したのはアイリュス公で、これは至極尤もであった。父帝もアイリュス系であるが、やはり自閥系から次の帝位を出すことは大きいものだ。ついでアルカナ公が頷く。イリーナの実兄であるが、こちらは瘦躯といってよい男だ。

「時間を延ばしてじっくり審議した方がよろしいな、こういうことは……次代の君を決める重要なことです」

こちらは余裕とも取れる言葉であった。父はそれにも頷き、では来年の冬を過ぎてからに、と

決着する。もういいよと言われてカルアは早速というように席を立ち、夏薔薇の誇る庭園の、噴水のあたりへ走っていく。そちらからエリザたちの笑い声が聞こえていた。エリザに少し近況でも聞こうかと思いながら、リュースは茶を飲んだ。夏は食欲が落ちるかわりに水ものが多い。その彼をアイリュス公が呼んだ。

「殿下、うちの娘をどうかよく思ってやってください。あれは私に似ず、思いがけず美しい娘になりました」

ええ、とリュースは曖昧に頷いた。エリザはくっきりした面差しの美しい少女であった。さすがに大人たちの席ではおとなしく礼儀に乗っ取って食事をしていたが、本来は闊達で明るい。

「いずれ、もっと大切なことをお願いに上がりたいものですが、殿下があれを厭わしく思っていないければと心配しておりますので」

リュースは苦笑になった。最近自分とエリザが疎遠なように思えて気を回しているのだろう。彼女とは確かに会わない日々が続いているが、それはリュースにとってさほど重要なことも変化もない証拠であった。エリザの方も普段と変わらない。

中等学院の講師陣の手伝いに時折卒業生として顔を出す、そんな時には軽い挨拶程度は交わしている。

エリザとの婚約は誰もが暗黙に想定していたが、はっきりとした形で示されたことはなかった。自分か彼女か、もしくはどちらかの親が激しく拒絶したら撤回が出来る。それをほんの僅かに先んじる言葉でもあった。リュースは大丈夫ですよと笑ってから、付け加えた。

「でも、彼女には彼女の思いもあると思います。どんなお願いにしても、どうか彼女の言葉を一度聞いてやってください、公」

選択はエリザに委ねるというリュースの言葉に、アイリュス公は不意に生真面目な顔になった。

「——魔導士までお使いになって、誰をお捜しです、殿下」

リュースは僅かに身じろぎし、エリザの父に真向かいあった。それがエリザと彼とのことにどうつながるのだろう。それがまるで結びつかなくて、リュースは瞬きをした。

「……何の話です」

中等で一緒だった「彼女」のことを表にするにはまだ確定的な何か、はなかった。それに「彼女」がひどく沢山のことに怯え、今でも怖れ逃げ続けていることは去年の夏の花火の日によく知ることが出来た。魔導によって痕跡を辿れないように結界罫を残していったならば、それは即ち二つのことを教えてくれる。

彼がまだ逃亡者であること。そして彼を追う相手が魔導士をかり出せるほどの立場や地位を持っていること。だから迂闊には全てを肯定するわけにいかない。リュースは宥めるように笑って公、と言った。

「魔導士には色々なことを命じます。私の小さな証明問題の実証にも。ですから、誰かを捜しているということもよく似たそんな実証実験かもしれません。申し訳ないですが、誰を、ということに心当たりはなくて……」

言いながらリュースはふとその場の空気が一転していることに気付いた。全員が呼吸を忘れた

ように黙り込み、父は愕然としていて、母は蒼白だ。そしてアルカナ公はじっとリュースを睨むように強く見つめている。何かを聞き漏らさないようにという表情にも見えた。

リュースは奇妙な沈黙に慌てて笑い、本当に何でもありませんよ、と言った。その時になってやっとアイリュス公が聞いた意味が分かった。エリザのことを無視して誰か見かけただけの女性を必死で捜しているとても思っているのだ。

そんな下らない、という失望に似た怒りでリュースはやや不機嫌になり、その原因を作ったアイリュス公にまっすぐに視線を当てた。

「一体私が誰を捜していると問題なのですか？ エリザとのことは彼女が決めることだと申し上げましたし、私は私の信念と意志で魔導士に命を与えています。私にとって必要なことです」

強く言いきると、それではっとしたらしい父がリュース、と叱りつけた。

「そんな言い方があるか！」

父帝の言葉が終わらない内に、軽く頬が張られた。リュースは乾音を立てた頬を押さえる。痛みは殆ど無かった。父が自分を庇ってくれたのだとその軽さで悟る。

済みません、と呟くとその場の空気が張りつめたものから一段弛んだ。座ったままリュースはアイリュス公へ腰を折って謝罪の言葉を口にしようとした。

——その時のことだった。

リュースは弾かれたように席を立ち、口元を押さえた。何かが胃の底から翻ったように、逆に駆け上がってくる。

人々の驚いた声に構う余裕なく皇子は数歩駆け出し、眩暈で崩れ落ちた。身体を打った衝撃で吐き気が一気にこみ上げてくる。どうにか身体をずりあげようとする、自分の上にふわりと影が出来た。

マルエスの長衣の端だと思った瞬間に、皇子は身を折って胃の中のものを全て吐き戻した。喉の奥から上がってくる嘔吐が臓腑全体をえぐるようだ。

喉に引っかかった細かな溶液をどうにか咳で飛ばしていると、殿下と囁きながらマルエスが背を撫でたのが分かった。

「どうかお休み下さい。……最近良くございませんね」

呼吸を整えながらリュースは頷く。だが眩暈がさほど酷くないと気づき、リュースは怪訝に思った。奇妙なほど身体に変調はなかった。戻してしまったことで大体が解決してしまったらしい。多少の胸焼けは残っているが、あまり違和感がないのだ。

さっきの肉だろうか？ とリュースは侍従が差し出す水で口を注ぎながらちらりと天蓋を振り返った。母イリーナが蒼白で駆け寄ってくる場所であった。

「リュース、リュース！ 大丈夫？ 無理をしては駄目よ……——お前はここの子の護衛魔導士ですね？ 最近は体調が悪いのかしら？」

マルエスが暫くの体調の低い位置の推移を説明しているのをぼんやり聞き流しながら、リュースは口元を拭く。侍従が薄い綿布を日よけ代わりに彼にかけ、呼ばれてきたらしい近衛騎士が負担をかけないように抱き上げた。

ちらりと振り返ると、マルエスが隠遁のために淡く消えるところだった。薔薇園の土に彼の吐瀉物が残っていないのなら、きっとマルエスの衣に戻したのだ。

皇子は赤面し、長い吐息と共に目を閉じた。

隣で身を起こす気配がした。それでライアンはふと目を覚ました。窓の外は青暗く、月も天の高い位置にある。まだ夜明けには早いようだ。月明かりのほの暗さの中で寝台の脇の水瓶を取り上げて、口を付けたらしい。嚙下する音が聞こえる。瓶を置く音。再び潜り込んでくる身体——細く、彼に比べれば遙かに小さく華奢な腕がライアンの肩に回って足が絡まった。

ライアンはクインの肩を抱いた。彼が目覚めているとは思っていなかったのか、微かにクインが溜息をもらし、すぐに何事もなかったように目を閉じる。あれから彼は殆ど口をきかない。

足の怪我はもう良かったが、腕の方はディーが止めなければ筋を切って引きちぎるところだった。自分の中の修羅を制止することが出来なかったのだ——いや、多分そうする気がなかったのだろう。

あの時、クインが叫んだ瞬間から全ては極彩色の幻のようで、ただ煮えるような怒りと憎しみだけが自分の中にあった。鈴の音だけが確かに耳に聞こえていた。それはライアンだけに聞こえる残虐な衝動の呼び水で、あの軽やかで澄んだ音を聞いていると全ての血がたぎる。命を食らいつくすための歓喜と陶醉があっという間に彼自身を飲み込んで、どこまでが自我なのかさえ分からなくなるのだ。

ライアンは目を閉じて、その瞬間の甘美を引き出そうとする。束の間の肉の手応えと血飛沫の中にだけ、自分の全てを容易く見つけることが出来る。胸高鳴る、血の踊る、凄まじい悦びが全身を息づかせ、自分の命を実感に昇華するのだ。その相手を憎しめば憎しむほど心酔は強く、歓びは深く、愉悦は身体を貫くほどに鋭い。クインの言葉に触発されたとはいえ、そこまで強い歓楽はごく僅かだ。

……だからクインを特別に思っているのは本当なのだろう。但し、それが何であるかは理解できない。クインが自分にひたすらこだわる理由も同じだ。

クインは自分がリアンの身代わりなのだと思っている。それはまるきり見当違いではなく、確かに彼を守り死ぬことが出来なかったという後悔が闇雲に庇護する対象を求めていたまさにその時、クインは自分の前に現れたのだ。

けれどそれはもう遠い。クインはリアンではないし、性格も全く違う。何よりもライアンに頼るということはリアンはしなかったし、むしろライアンの生真面目な部分や思い詰める性質をからかったりさりげなく救おうとしてくれた。

それに、リアンはクインがするように全身の力でライアンに対峙したことなど無かったはずであった。ライアンはリアンの犬と呼ばれる種類のもので、向き合う必要さえなかったのだ。

それにチアロだ。クインが引き合いにだした言葉の中で、これははっきりと覚えていることの一つであった。あの時の口論の内容は後になればなるほど曖昧で、強い感情の被膜に押しつぶされて曖昧に消えてしまっているが、チアロとリアンの相似は以前からのことであった。リアンの生前からも、チアロの調子の良い朗らかでいい加減な部分が俺と似ているとリアン本人が笑っていたことがある。

俺も子供の頃はあんなだったさ、懐かしいな——なあ、ドオリィ？

リアンが幼馴染みで片腕であった男を呼ぶと、彼は大きな肩をすくめて本当だと笑ったはずだった。

チアロを拾ったのは偶然で気まぐれだった。行くところがないとライアンに縋った子供が切羽詰まっていたこと、リアンにそろそろ自身の子飼いの部下を持った方がいいと言われていたことなどが重なっていたとはいえ、チアロでなければならない理由など、その瞬間にはどこにもなかったのだ。

その証拠に、チアロを拾っても最初の頃は足手まといの子供であったしその後は自分の身辺で適当なことを喋っている奴だという苦笑めいた、出来の悪い弟を構うような気持ちであった。

そしてリアンが突然世界から消えた後、チアロは確かに一時リアンの面影や空気をふんだんに残している存在であった。自分の殆ど異様といって良いチアロへの引き立てはその頃から始まっている。丁度その時期にチェインの支配者の継承戦争があったから目立たないが、チアロの出立の地点は間違いなく自分の偏愛だ。

けれどそれを乗り越えてチアロは良くやっている。チェインをやりたいという自分の意志は殆ど誰にも話したことがないが、それがチアロ可愛さだけから来るものではないことは少なくともディーには分かるはずだ。

ライアンの子飼いだと既にチアロの顔はタリアの上層幹部も認識している。いずれ自分に何かがあればチアロも一蓮托生のはずだ。誰かに肩入れするということは、その敵も背負うということと同じだから。

チアロがそれに怖じ気づくような気配は無かったし、ライアンの存在を上手く利用して自分の立場を上昇させているらしい。らしい、というのは既に自分がチェインから離れかけているせいでもあるが、これから先、金も人手も要る。そのつてに一番信頼している少年を頭目においておきたいのは当然のことだ。

他の連中が信用できないわけではないが、ライアンが無条件にその言葉を信じるのは、ディーとチアロの二人だけであった。

それにチアロには恐らく、何かがある。リアンに似た、という言葉しか見つけれないのが自分でも歯痒いが、真芯の打たれ強さと朗らかで自然な求心力はどこかが違う——そんな気がする。見込めるとディーに言ったのはそんな意味だったし、甘さはあるにせよ、それがチアロの良い部分であることも確かなのだ。

一つ一つを丁寧により分けていけば、クインの言葉など戯言だと一蹴すべきであったことだけが分かる。そこでライアンはまた溜息になる。

あの時自分は確かに不機嫌だった。クインには出来うる限りのことはしてやっていたし、時間も自分なりに割いたつもりだった。けれどクインはそれでは到底足りないと思われ、その間隙を一足飛びに埋めようとして自分に身体を委ねようとして拒絶されて偶然知り合った女に傾倒した。それが最初ライアンへの当てつけを含んだ行為だったことも察してはいる。

下らないというのが最初の感想であり、ついでうんざりだという溜息を聞いた。けれど自分の体面のためにそれ以上を好きにさせておく訳にはいかなかった。知っているのはチアロとディーくらいだったはずだから、その内輪で済ませておければと忠告を試みたことは結局裏目に出てしまった。

運が良かったのは細刃刀を含めて切れ物を自分がディーに用心にと預けていたことで、それがなければクインを切り刻んでいたはずだったが、リアンのことを引き合いに出すのも自分をもっ

と心に留めて欲しいと吠えるのも、その二つが融合することだって初めてではなかったはずなのに、あの瞬間にそれでたがが飛んでしまった。

ライアンは自分にしがみつくようにして眠っているクインの頬の輪郭線を指でなぞる。これがいま生きて彼の胸に生暖かい吐息をこぼしていることが安堵にやっと変わる気がする。と、不意に長い睫毛が動いて深く鮮やかな色の瞳が覗いた。

「——ライアン、起きてた……？」

声はしわがれてかすれている。これは眠りに落ちる前にクインを壊すような勢いで抱いたからだ。この瞬間だけはクインの声を溢れるほどに聞く。けれどそれは、絶叫と悲鳴という形だ。

腕も肋骨も、その他に肩や背中に残る打ち身の青黒い痕跡さえ薄らいでいるが消えていない。そんな時に責め殺すようなことをすればそんな声しか聞かないのは当然だ。

だが、そんな苦痛のための悲鳴よりも胸に痛いのは、これがクインの望みだということだ。身体の不具合は元よりライアンも承知している。彼に負担をかけない方法なら幾つかを思いつくが、それは激しい拒否にあった。

もっと、とクインが言う。もっとしてよ。もっと。ライアン、もっと——……もっと、壊してよ——

彼の言う通りに無理な姿勢を取らせると悲鳴になり、それに気圧されてライアンが身を引こうとすると更に自分で身体を打ってしまう。精神の均衡の満ち引きが元々激しい性格ではあったが、どこかが決定的にゆるんでしまったのか、激痛に全身を突っ張らせて痙攣させながら、喉を鳴らして笑っているのだ。

怖いというなら、これほど恐ろしいと思うこともあまり記憶になかった。痛めつけられたい、滅茶苦茶に破壊されつくしたい、その欲求に彼は身を委ねている。それに引きずられるようにつき合っている自分も混乱しているのだろうが、クインの狂乱に一枚噛んでいることがひどい罪の意識を引き起こした。

そのクインの口から久しぶりに落ち着いた声音を聞いた気がして、ライアンは今、となだらかに言った。うん、とクインが小さく頷き、痛いはずの腕で自分を支えて身体を起こす。ライアンが眠っている——と彼が思っている——時にはそんなことはしないから、これは明らかに当て付けであった。それを知っているはずなのに、思わず顔を歪めてしまう。

クインはそれにふと笑い、ライアンの首に腕を回して唇を重ねてくる。仕草がまるで娼婦のそれになってきたなとライアンは思い、それでも押しのけることはせずに口づけを受け取った。

「煙草の匂いがする……」

そんなことを呟いてクインはライアンの首に腕を絡めて横になった。腕に巻かれるようにライアンは横を向く。

クインが彼の身体に手を這わせて目を閉じるのは、もう一度という意味だった。ライアンはよせ、と咄嗟に制止した。クインの細い身体の限界はもはや遠くにあるとは思えなかった。その前に心がどこかへ行ってしまうか、そのどちらが早いだろう。

「どうして？ 俺がしたい時につき合うって約束、してくれたよね」

クインは淡く微笑みながらそんな事を言った。その約束は本当に存在する。彼女の絵を燃やした後のまだ熱い灰に手を入れようとしたから、それを回避するためにクインの要求を飲む形で頷いたのだ。

瑠璃色の瞳の奥の光が不安なほどに強い。月が映っているのだとライアンは思いこもうとし、クインと呼んだ。

「その約束は確かにした、けれど、これ以上は……死んでしまう……」

と、クインはその返答に背をそらして笑い出した。ライアンはよせ、と同じ事を言いながら形の良い唇に手を押し当てた。クインは首を振ってそれをもぎ離し、喉で笑い続けた。

「殺すつもりじゃなかったんだ？ 知らなかったな.....知らなかった、ふ、ふふ」

「やめろ、クイン」

「いいよ——ほら、だから、さ」

クインが自身に巻き付けていた夏の上掛けを蹴り飛ばし、生白い身体を晒す。求められるままにライアンが踏み躪った虐痕が目飛び込んできて、ライアンは怯んだ。口元が痙攣し、やめろ、と勝手に呻く。

それを無視してクインは自分から足を開いた。場末の娼婦のようになってきたとライアンは目をそらす。既に正視に耐える状態ではなかった。彼の様子にクインは機嫌良く笑い、ねえ、とライアンの手を取るが、それを振り払ってライアンは端に寄せられたままの上掛けを手繰り寄せた。

日常、彼は殆ど喋らない。何かを話してもどこかに魂を置き忘れてきたようにふらふらと視線が彷徨っていて、まるで脈絡が噛み合わないのだ。

夢の中に生きているようにひどく無防備で無力な子供の昼と、ばらばらに殺してくれという勢いで激しく彼を求める傲岸で非力な脅迫者の夜、その二つがクインの精神を引き裂いていくのが分かる。

会話が成立するのは殆ど夜で、昼はうすぼんやりとして危うい、間延びした表情でじっと外を見つめているだけだ。

ライアンは画帳を燃やしたことを今更のように後悔している。あの時これは泣き叫んでいたはずだった。あの女との追憶の形見になるはずだった絵にライアンは火をつけた。クインがこれにいつまでも追想をよせるだろうことが痛ましいことだと思ったからだ。

忘れろ、と強く言うとそれには返答せずに握力の残る左手でライアンにしがみついてきた。辛いというよりは一息に全てを失ったような寄る辺ない自失に何か縋り付いて身を寄せるものがあればと彼を抱いた。より強い支配を、とチアロも言ったはずだった。

そんなつもりがなかったというなら、今のこの状態こそ、こんなつもりはなかった。クインのことは分からない。ただ痛ましい。これほどまでに弱かったのかと愕然とする。クインの偽悪調の喋り口や顎をそらすような態度はこの内面を頑なに守ろうとする為の棘だったのだろうかやっと知った気になるが、どうしてやればいいのかはやはり見えなかった。

ライアンの首にクインの手が触れた。ライアンはクインを見つめる。表情のない視線で彼はライアンを仰視していて、やがてふいっと顔を背けた。

ライアンはこの瞬間に自分が明らかに安堵したのを感じた。クインが傷ついたとさえ口にせずに自分を貶めることでライアンに復讐しているのだとしても、その手が弛むことはたまらなく気を緩めたのだ。

「.....ライアンは、俺が怖いんだな」

クインが呟くのが聞こえた。ライアンは横臥してクインの身体を後ろから抱き寄せ、かもしれない、と自分にも聞こえないほど小さな声で言った。クインの危うさ、昼と夜では全く違った方向にそれぞれ突き抜けて揺らいでいる心を見ると、焦れたような叫び出したくなるような、そん

な気持ちになる。

「そうだな、怖い。お前が自分で傷つきたいというのを見ているのも……」

「何言ってるの？ 違うよ、ああ——やっぱりライアンは俺が怖いんだ」

クインはライアンに背を向けたまま、肩を震わせている。笑っているらしい。

「違うよ、あんたは俺が怖いんだよ。俺を身近に置くのが怖いのだ。リァンが死んだ時みたいに、全部連れて行かれるのが怖いんだ」

ライアンは虚をつかれて身じろぎし、沈黙した。リァンを失った時の深い沈痛と茫然は未だに彼の中に痕跡を残している。クインとライアンは呻いたきり絶句した。クインはそうなんだね、と静かに断じると、不意に仰向けに身体をずらした。

「……俺は別におかしくなかなってないよ、ライアン——ただ、少しばかり嫌気が差しただけさ」

その口振りは今までと比べても異様に静かで、厳かめいていた。ライアンは返答する言葉を見つけれずにただ沈黙する。クインはくしゃっと顔を歪めて笑い、ライアンの頬を撫でた。

「いいよ、別に。俺はこれでいいんだ。ライアンに壊してもらうのも、客に殺されるのも同じだ、俺が死ぬ時に誰かを道連れに出来るなら、何も要らない……」

うっすらと笑みを浮かべるクインの瞳には、やはり大きすぎる月が映りこみ、瞬きをする度に揺れて不安を誘う。月を見ているのか、少年の視線の焦点は遠く、遙かだった。

道連れにしたいという彼の望みの静かな狂気にライアンは狼狽え、眉根をよせて首を振った。そんな破滅の衝動が良い方向に変わるはずはなかった。クインはライアンを凝視め、そして静かに笑い出した。形の良い唇がほころんで、聞くに堪えないほど切羽詰まった媚声が溢れてくる。

これ以上を聞いているとおかしくなりそうだとライアンは思わず身体を離そうとした。クインがさっと筋をいためた方の腕を伸ばし、ライアンの背に回す。無理矢理もぎ離すことは出来るはずだったが、怪我という弱みを盾にする方法に、それと分かっているが手が出せない。

あれほど誇り高く驕慢だった少年が、ただ自分の話を聞かせるためにだけこんな惨めな真似をするのかと思うとたまらなかった。

これは復讐なのだ。あの女とのことをライアンが簡単に引き裂いた、彼の体面のため、というクインの矜持を滅茶苦茶に叩き潰す理由で壊した、その復讐だ。

ライアンは頬を歪めた。胸に痛ましく斬りつけてくるのは憐憫であった。痛ましく切なく、見ていることさえ辛い。そしてクインをこんな風にしたのは自分であるという自覚を否応なしに見せつけられ、怯みきっているのにクインから離れることが出来ない。今それをしてしまうと、本当に死んでしまうのではないかという恐怖がどこかにあるのだ。

自分に必死にしがみついてくる身体をライアンは抱きすくめるようにして寝台に押しつけ、辛うじて押し潰さない程度に胸を合わせながら言い聞かせるように低く呟いた。

「クイン、済まなかった。あの女の事は謝る。絵を燃やしたことも、お前がそれを忘れるためにはそのほうがいいと思った、本当だ」

クインは何がおかしいのか喉を鳴らして笑い、そう、と簡単に流した。足を絡めてくるのをどうにか離そうとしていると、クインが不意に彼の鎖骨に歯をたてた。

甘噛みするほどの痛みはさほど強くない。けれど、どうにかして男を誘うつもりの仕草には胸が突かれるほどの痛々しさを感じる。手負いの獣と同じだ。心に裂いた傷は目に出来ないが、そこからあがる血飛沫と痛みにじっとうずくまることも出来なくて転げ回って痛みを訴えている。

クイン、と名前を呼び、ライアンは唇を深くよりあわせた。結局こうすることしか咄嗟に出来ない自分の愚かしさも、クインはきっと嗤っているのだろう。クインが腕を自分の首に巻き付けてしっかりと足を絡ませた。ねえ、という声が泣き出しそうなほど潤んでいるのに、涙は見つけれない。画帳を焼く炎にあぶられて消えてしまったように、あれ以来彼の涙を見ていなかった。

「——うんとひどくしてよ……思い切り手荒にしていいいから、ライアン、さっきなんかよりもっともっと痛くして……」

「クイン止めよう、お前が本当に死んでしまう」

「殺せよ！」

クインが不意に怒鳴り、その勢いで肺が軋んだように呻いた。クインと手を伸ばそうとするのをだが叩き返し、きつい、それでいて何かに浮かされている熱にゆらぐ視線をまっすぐにライアンに当ててくる。

「殺せよ、それでいいんだよ！ 同情なんか要らないんだ、憐れみなんかもっと要らない！ 半端なことするなよ！ 俺が怖いくせに！ 怖いくせに、怖いくせに！」

吠えるように叫んでクインは不意にまた笑った。ねえ、と呟く声に媚態が戻っている。この出鱈目な態度にライアンが覚えるのは、それでもクインがそんなものは要らないと怒鳴ったはずの憐憫だ。追い込むという言葉の意味を今更思い知る。

ライアンはクインの細い顎を捉えてしっかりしろ、と揺すった。

「同情や憐れみが要らないというなら、何が欲しい、クイン。言え」

クインは首を振り、両手で顔を覆った。唸るような音が喉から零れたが、それは涙の声ではなかった。

「要らない——あんたからは何も、要らない、あんたはリアンのものだ、そうだろ？ 永遠にリアンのものだ、違うの？ だったら要らない……要らない……他人のものなんか……誰が……」

呟く言葉が不意に途切れる。どうしたと言おうとした瞬間にクインは彼を押しやって頭までを上掛けに隠し、震えだした。泣いているのだろうか？ とライアンはその肩を揺する。けれど返ってきたのは乱暴な拒絶だった。

ライアンは長い溜息になり、そしてそっと上掛けをめくった。クインは体を震わせていたが、やはり泣いてはいなかった。けれど涙の方がよほどましだと思うのは、それさえ枯れた絶望を自分が知っているからだ。

本当に傷つき、叩きのめされてのたうっているその瞬間に、涙は出ない。それはあまりに深く、あまりに濁いた闇だからだ。

涙がこぼれてくるのは現実を受け入れて折り合いをつけ始めようとする時で、だからクインが今、ひどく混迷した闇にいることは分かる。それを自分が心苦しく、ひどく痛ましく眺めていることも。

クイン、とライアンは努めて静かに言った。

「——俺があの子のことを体面のために潰したのではなく、嫉妬のためにそうしたと思え。お前が欲しいというならどんな言質でもやる、何が聞きたい、言ってみろ」

クインは視線を翻し、ライアンを睨み据えた。それをライアンはやはり睨み返す。二人でじっと身じろぎもせず瞬きもせずに見合った末に先に折れたのはクインの方だった。

「.....何でそんなことまで俺に聞くんだよ.....」

それが強制したのだという事実を避けようとする策略だとは分かっていた。けれど、ライアンは頷いて済まないと言った。クインが欲しがっていたのは彼を必要だと言い、彼に手を伸べる人間だった。それをあの子が占めようとしたのを壊したのは自分だ。それによって自ら壊れたいと願うクインを一度つなぎ止めてやれるのも。

いつかクインも新しい想いに身を委ねていくだろう。けれど今、血を吐き散らし、絶叫に近い悲鳴をあげながら彼が傷つけ巻き込もうとしているのはライアンで、それを拒否する権利はあっても出来ないだろうということも、全てを見通したような諦観が襲った。

「俺はお前の気に入る言葉を知らないが、これでどうか」

淡々と呟き、ライアンはクインの肩に触れ、髪に指を差し入れてゆっくり愛撫した。クインが微かに喘いで目を閉じる。その瞼に唇を寄せ、頬を両手で優しく挟んで深いキスをした。

クインが喉で呻き、一度ライアンの肩に手が触れた。それは弱く押し戻そうとして何かに負けたように力を緩め、縋り付いてくる。

「.....涙が出ない」

唇が離れた時、クインが呟いた。

「ライアン、駄目なんだ。あれから泣けない。エミルのことが」

「忘れろ」

名前が出た瞬間にライアンは遮り、愛しくクインの額を撫でた。

「涙はそのうちに出るようになる。あの子の事は忘れろ、もう言うな。いいな」

クインは唇を歪め、何かを言おうと口を喘ぐようにあけた。ゆったり十を数えるほどの時間が沈黙に流れ、やがてクインは頷いた。頷きながらライアンの鎖骨あたりに額を押し当て、震え出す。

けれど無理に涙を流そうとしてもそれが無駄な仕儀であることは、ライアンにもよく分かっていた。夜の蒼さを一人で背負わせないためだけに彼の細い肩を抱きながら、ライアンは窓の外の月を見上げた。

夜はそろそろ長く伸びていく季節だった。

晩鐘が遠くから幾重にも、空気を震わせながら近寄ってくる。それを待っていたタリアの篝火が殆ど一斉に灯され始めて、通りは一呼吸する前に朱泥に浸ったように赤く染まった。

チアロはこの瞬間が一番好きだ。これを女の化粧だとたとえる言葉を初めて聞いた時、深く頷いた記憶がある。とびきり華やかで贅を尽くした表通りの組合筆頭妓楼の格子が赤く照らされて燃えるような美しさを誇っている。

小さな白い花火が尾を引く音を立ててぱちんと咲いた。火薬は砂金と同じ価値がある。筆頭妓楼で何か慶事があったのだろう。

「お、豪気だね、見に行こうか、水揚げか身請けの披露だよ」

チアロは明るい声を出し、隣でぼんやりと突っ立っている友人の手を握る。彼はまるで子供に戻ってしまったようだ。昼間はいつ訪ねていってもまともに受け答えをしない。ぼんやりと、安心して弛緩しきった視線で外を見ている。

——窓の外、鳥たちを。

夕方を過ぎてこの時間になるとようやくぼつりぼつりと言葉が出るようになっていたから、連れ出すのはいつもこんな時間だ。クインの返答はないが拒否の様子は見せなかった。

彼の様子に頓着ない風を装って、チアロはほら、と手を引いて歩き始める。少し足を引きずりながらもクインは大人しく連れられているが、彼の声は聞けなかった。

エミリアとのことを壊して破算にしたとき、これほどまでに彼の異存が酷いと思っていたなかった。ミシュアから地上街道の乗合馬車でチアロは帝都まで帰還したが、そこで待っていたのはライアの激高のために全身を痛めたクインの姿だった。

(喧嘩だ、気にするな。ただライアのことを引き合いに出したのは奴が悪い)

ディーはそんな言い方をしていたが、それをしたくなる、クインにとってはせざるを得ない状況を作り込んでクインを追い詰めていったのはライアではなかったろうか。

最初に出逢った頃からクインはライアのことをライアが気かけすぎると気に入らなかったが、それをなじらなくてはいけない方が、責難されるより辛くないなどということはない。

ライアは心なし青褪めていたから、それ以上を彼には言えなかった。けれど、とチアロはクインの手を引いてタリアの大通りをゆっくり巡りながら思う。

クインは淋しかったのだ。

誰でも良かったというのには語弊があるかも知れないが、優しく明るい愛情で、彼の胸のささくれだった部分を丁寧に埋めてくれる相手であれば誰でも良かった——自分にさえ縋り付こうとした彼があまりに辛くて見ていられなかった。

エミリアという女に傾倒し始めたのを気付いた時、依存は既に始まっていて簡単に引き抜くことは出来そうになかった。クインを下手に傷つけまいとして却って機会を見失ってしまった責任は、自分にもある。今となっては何が最善で次善であったのか、定かではなかった。

エミリアの方はどうやら帝都には戻っていないらしい。では彼女の故郷にでも飛んでいったのだろう。故郷近い街に妹がいるはずだ。彼女にも酷いことを、とチアロは胸の中で呟く。ごく普通の愛情の配分を心得ている彼女に妹とクインを無理矢理選べと言え家族に決まっているのだ。ライアの思惑は分かるしそれには自分も賛同するが、あまりよい役回りではなかったと自分

でも思う。

それにしてもディーや、ライアンと共に戻ってきたオルヴィのようにエミリア自身への危害を提案するよりはライアンは随分ましと言えた。

ライアンはクインを彼なりに特別に気にかけている。遠ざけようとするのがいい証拠だ。失って辛いものは持たない主義で、辛くなりそうなものには近寄りたがらない性質だから、ライアンが身边に寄せている人間のうち、信頼されているらしいディーや自分を除いた全てが捨て駒だ。うぬぼれるなら、多分自分たちも捨てていい札だが、それはかなり後のことになのだろう。

順列の詳しいことは察するしかないが、チアロはその最後の札は自分だと思っている。

——それをクインが気にかけているとは知らなかった。ライアンが彼に特別だと言ったことに嘘だと噛み付いて、叫んだと聞いた。

（あなたの特別はリァンだけで俺のことは付録だろ？ チアロだってあなたにはリァンの模造品じゃないか……！）

単純に、これはチアロにとっては嬉しい言葉であった。ライアンの視線が自分の後ろにリァンの面影を探していたことは分かっているし、それは仕方のないことだと諦めてきた。それが嫌だと思ったところで今更違う自分にはなれないし、そんなことは意味がない。

ライアンが自分に何を投影していても、自分がライアンに対して思う心や気持ちには本来関係がない。相手の思惑に関わらずまっすぐに人を愛せる自分がチアロは好きだし、いつまでもそうでありたいと考えている。

相手からの心が返らないことや思うに任せないことが多い時は哀しいが、生きている限り、よい未来が必ずある。

それをクインにも信じさせてやりたかった。けれどクインはエミリアとのことが壊れてしまった衝撃に、未だに足元が定まらない。これ以上はもう耐えられそうにないとライアンが音を上げたのが珍しかったが、その様子を聞けば背が冷えた。

昼間を過ごすチアロとの時は彼は大人しすぎるほど従順だ。口数は少ないが、時折はチアロの冗談に唇をゆるく開くことがある。目がまるで違う場所の幻を見ているから真実安堵するわけには行かないが、チアロを気遣うならそう酷いことではなかった。

だがライアンの口から聞く彼の褥の狂気には愕然とする。何が一番惨く辛いかというなら、それが全てライアンへの復讐であろうことだ。ライアンによって追いやられていった方法とは違うやり方で、クインなりにライアンを虐げている。道理でなかなか傷が良くならないはずだった。

クインは確かに頭がいい、とチアロは苦笑になりかける。ライアンが何故自分に対して弱腰なのか近寄りがたく遠ざけようとするのか、確信してやっているのだ。分かっていなければライアンへの好意の示し方はもっと違うものになるはずであった。

失ってもいいものしか側に置かない。愛したものを失う辛さを知り抜いているからこそ、最初から愛さないように遠ざける。何もかもを失ってもいいように、無くして辛いものは持たないようにしているのだ。

チアロはその臆病な性分を、けれど却って愛おしい。馬鹿だなあと思う。こんなに分かりやすく背反なことがあるだろうか。好きならば好きだと直線的に愛すればいいのだ。失って辛いのはどんなものだって同じだし、それは自分の気持ちの上に興ることだから、誰にも奪われない。

それをライアンは怯えている。クインが彼にとって庇護対象者でありリァンに対する彼の欲求の一部分をまっとうして補完する存在であることはチアロは疑わないが、クインもそれが自分への興味と関心と好意だと誤解できればことはここまでこじれなかったはずであった。

クインがライアンに何故ああして絡むのかはチアロにも良く分からない。ただ、彼は年齢が離れて上の、自分に優しくしてくれる相手には男女問わず比較的素直に懐く傾向がある。まだ幼い頃に出会ったことでライアンの印象は彼の中では大きいのだろう。

.....最初に彼を捕まえた時、ライアンは確かに時のタリア王、カレルにクインを貢ごうとしていた。カレルは虐癖の持ち主で、リァンから同じように提供されたライアンが死の寸前まで追いやられたことがあるらしい。

らしいというのはその頃チアロは父親と気楽な旅を渡り歩いていたからだが、クインをカレルに差し出して生け贄にするつもりであったはずだ。

ライアンがクインを逃がしてやったのが何故なのかはチアロには分からない。けれど、クインがそれで彼を自分に甘くしてくれる相手だと感じたのは間違いがないだろう。事実、クインはそれ以来ライアンの渋い表情にも頓着せずにチェーンに出入りしていたのだから。

クインがライアンに好意を持つのは分かる。彼をつなぎ止めておくために身体を開くしかないと思っているのが間違っているだけなのだ。

チアロは手を引かれて俯いたままついてくるクインに足、と聞く。クインはやや呆けたような表情であったが頷いた。

「うん.....大丈夫」

そう、とチアロは顔を潰すようにして笑ってみせる。今クインに必要なのは、彼女がふんだんに与えるはずだった優しさと明るさを、少しでも補充してやることなのだとチアロは信じている。

綺麗なものを沢山見せてやりたいと思うのもそうだし、何か美味しいものでも食べさせてやりたいと思う。ぬるく傷ついた心にはぬるま湯につけるような愛情が相応しく、上等だった。

花火の上がった妓楼はやはり水揚げの披露目だった。見物の人垣に混じり込んでいくと、どっしりした赤い絹地にびっしりと刺された精緻な刺繍が目に入った。水揚げの少女が身動きする度に揺れる花板の飾鎖が眩しい。少女の面差しは可憐で、ぱっちりとした目が人形のようなのだ。

「可愛いなあ、ほら、年はいくつだろ」

チアロは明るい声を上げながら、指をさす。クインはちらりと興味なさそうに視線をあげ、さあ、と投げやりな声を出した。チアロはクインの反応の薄さには構わずに可愛いよなあと朗らかに笑った。

「あ、ほら祝儀が出る」

大きくて格式の高い妓楼の水揚げには沢山の儀式がある。格が落ちれば落ちるほど、特別なことは何もなくなっていくのだ。

万象万乗万歳の決まり文句のかけ声と共に、駄菓子を包んだひねりが妓楼の中からばらまかれる。人々がわっと喊声を上げてそれを拾いに詰めかける。人並みに押されてチアロはクインの手を握ったまま前の方へ押し出され、一つ二つを拾った。これは拾ってやるのが礼儀なのだ。

最後に水揚げされる少女からひねりが投げられて、これは特別の祝儀が入っているものだったから人々が手を伸ばしてこちらへとざわめく中を、不意にチアロは視線を感じて貼り付けていた楽しげな笑みを収めた。

強い視線は水揚げの少女からまっすぐにこちらへ向かっていた。それが簡単な好意でないことを肌で悟り、チアロは微かに怪訝に眉根を寄せる。と、少女の整って愛らしい表情がきゅっと歪んだ。その目が自分から少しずれた場所を見ている。

チアロはそれを追って視線をずらし、慌ててクインの手を引いた。

クインはやや俯き加減に薄ぼんやりとした表情をしていたが、その物憂げで儂い様子はこの場の全ての上に君臨するほどの美しさだった。見慣れているはずのチアロでさえ、一瞬言葉が出ない。

赤い篝火に照らされた肌は茜色に染まるほど白いことを誇り、じっとあらぬ場所を見つめている彼の身から、微かな光感さえ覚えるほどの麗しさだ。

少女の目線でクインに気付いた群衆が波打つようにざわめき、打たれたように静まりかえった。少女の目にあるのは今やはっきりした怒りであった。水揚げという妓楼での最初の晴れがましさを横から奪われる怒りだ。

少女がどんな奢りの中にいたか、その怒りの激しさを見れば一目で分かった。美しさと可憐さを崇められ讃えられ、数多くの男たちの憧れを掻き立てるために媚びるでなく豪奢に微笑む、そんな生活をしていただろうし、これからもそうなるはずだった、——但し、それは朝日に消える霞のように、無力な強さしか持っていない。彼女よりももっと圧倒的に美しい、くっきりした美貌の前に。

少女が美しく化粧された頬を歪めた。チアロは人垣の中から抜けようとクインを促した。分厚い人混みに掻き入ろうとした時、少女が祝儀を投げた。それはまっすぐにクインの目尻あたりに命中し、重い音を立てて落ちた。

その瞬間に、何かの糸が急激に張り戻ったようにクインの瞳に光が宿った。底光りする光のよ

うなものが戻り、クインがきつく少女を睨みつける。

少女は今にも泣き出しそうな表情をしていた。これから先の数年において一番の誇りになる場面をよそ者に汚されたという屈辱が、彼女の白い頬を上気させている。

クイン、と促そうとした時、友人は低く笑い出しながら自分の足下に落ちた祝儀を拾い上げ、止める間もなく投げ返した。それはしてはならないことの一つであった。少女が美しい面輪を歪め、気違い、と叫んだ。それがきんと通った瞬間にクインが喉をのけぞらせるように笑い出し、チアロが持ったままだった通常の祝儀をひつつかんでそれも少女めがけて投げつけた。

チアロが口を塞ごうとするよりも、クインの誇らかな哄笑の方が強く早い。

「黙れよ、淫売！」

クインはそう怒鳴り、笑い出した。少女がくっとう唇を噛んで、もう耐えられないというように妓楼の中へ駆け込んでいく。それと入れ替わりに妓楼の衛士たちが駆け出してくるのに目を留め、チアロはクインの手を掴んで駆け出した。背後で怒鳴り声がしている。

「おい、待て、馬鹿どもが！」

「チアロだな——このチェインの餓鬼め！」

タリアに長くいるのならば、チアロの顔を知っているものも時折いる。それは無論ライアの側人としての彼の顔だが、いずれ妓楼の組合を通じてタリア王の配下あたりを經由し、ライアに嫌味がゆくだろう。

路地や抜け道ならばチアロの方が彼らよりも数段詳しい。滅茶苦茶に走り回ってやっと呼吸をつく、と、またクインが喉を鳴らして笑い出した。たがの弛んでいるような感触はしなかったが、人を怒らせて楽しむような真似はいい趣味だとは到底思えなかった。

「あれはまずいよ、可哀想に……」

息を整えながらそんなことを言うと、クインはゆるゆると首を振った。

「だって、俺の方がずっと綺麗だよ……チアロはそう思わない？ エミルはいつも俺のことを綺麗だと言ったしね」

クインの言葉にチアロは溜息になる。少女の傷ついた顔もよくわかる。それが仕方のないことだとも。クインの美貌は天与としかいいようがなく、人目を惹き付けて離さない。見に行ったことが悪かったのは確かだが、クインにはこの世界にある美しいものに少しでも触れて欲しいのだ。

いつまでも自分の中の狂気や怒りにつきあっていても、それは全く彼を成長させない。美しいもの、優しいものに触れて嬉しいと思える心だけが、人を自分で癒させる。

「確かにお前の方が美人だったけど……でも」

エミリアのことはあえて無視し、チアロが言いかけるとクインは黙ってというように首を振った。

「俺のことはもういいんだよ、チアロ。ライアに頼まれたのか、それとも？ あいつ俺を殺したいのか違うのか、どっちなんだろうな」

「クイン、そんな言い方は良くない」

「じゃあどんな言い方がいいんだ？ 俺はただ、ライアに俺のことをリァンみたいにぐじぐじ思い出して貰えるならなんでもしようと決めただけさ」

チアロはそれ以上何かを言うのをやめ、クインの肩を揺すって歩き出した。タリアの大通りにはそれなりに格式のある店が多く、年若い者が気楽に入れるような店は殆ど無かった。

食事のために路地を渡り歩きながらチアロは何が食べたいかと聞く。クインは大抵要らないと返答するが、それは無視していつも自分一人で何事かを喋りながら適当な店を探すのだ。馴染みを殆ど作ろうとしないライアンについて歩く内に、自分にもそんな習慣が出来上がってしまったている。

ここ数日の食事を脳裏で確かめながら、チアロは目で適当に店を探し歩く。手は繋ぎ直すと素直に従うクインがやはり哀れでならなかった。結局のところ、彼は淋しいのだ。

彼をこんな風にしたのは俺だとライアンは苦しく呻いていた。その声をクインに聞かせてやりたいとチアロは思う。そうすれば、もっとライアンとのことを穏やかに受け止めていけるだろうに、それをどうして放棄するのだろうか。

愛はぶつかり合うものでも破壊し合うものでも、そして支配しあうものでも決してない。お互いがあるがままに在ればいいと思う自分が間違っているのだろうかと考えてしまう。

とにかくクインには心の均衡の取り方を思い出して貰わなくてははいけなかった。ライアンに返し刀で次第に迫っていく様子には、端で見ている方がひどい危機感を覚える。特にクインに何もしてやれなかったという悔恨は恐らく、ライアンよりは自分の方が深く感じている。

ライアンの場合は自分の臆病な性質がクインを沈めてしまったという後悔であろうが、チアロはその過程をライアンよりも良く目にしていたし、自分ではそれなりに息抜きをさせているつもりだったのだ。

それにはまず一緒にいる時間を増やすという最も単純な方法へ立ち返るというのがチアロの結論だ。彼に沢山の、人生と世の中の楽しく面白いこと、美しいものや愛らしいもの、そんな彩りがあることを思い出させてやりたい。

とりあえず何か、と通りをぶらついてしていると、不意にクインの足が止まった。気付かずに行き過ぎようとして、チアロもそれにひかれて立ち止まる。

クインは遠い目線で赤い格子の向こう側を見つめていた。消えてしまった蜃気楼を眺めるような視線だとチアロは思い、嫌な表情だと苦く思いながらクインの目線の先を辿ろうとした。

その時、不意にクインが呟いた。

「……エミル……エミルがいる……」

チアロはぎょっとする。彼女をさらって妓楼へ放り込めなどと指示をした覚えなど是在るはずがない。そんな馬鹿なと慌てて赤い格子の向こうへ彼も視線をやるが、やはりエミリアなどはいるはずがなかった。

けれど、その代わりに見つけたのは戸惑うような現実だった。クイン、とそっと目を塞いでやると、クインはふっと格子から顔を背け、チアロに抱きついてきた。動揺しているのだ。

それが本人でないことくらいは知っているのだろう。けれど、時折人は自分の欲するものを無理矢理にでも見ようとする——例えば、自分とはまるで似つかない顔立ちをしているのにも構わずに、チアロの遠くにリアンを見ようとするライアンだとか。

それを思ってチアロは苦い顔になる。

そこにいたのは黒髪の遊女だった。

似ている。顔立ちはエミリアという女よりも多少幼く弱々しいような気配がするが、一瞬見た時の造作や面差しの雰囲気に通ずるものが多い。別人だということはすぐに分かる程度の相似でしかないが、例えばエミリアが持っていた温かで優しい空気は同じだ。

チアロは迷い、クインを見た。クインは見たくないというように顔を背けたままで俯いていた。思い出したくない。忘れたい。そんな言葉に心底から頷くことも出来ずに彼が苦しみ呻いてのたうちまわっている。

チアロはじっと格子の中へ目をやった。この妓楼は彼の馴染みだ。チアロが心の底から深く恋をする女、シアナがいる。女将の人なりも良く知っているし、金額も大体は計算できる。僅かに躊躇う心を振り切るためにチアロはそうだと明るい声を出した。

「なあ、ちょっと寄って行こうか、そうしよう、いいだろ、つき合えよ」

返事を待たずにクインの腕を引き、妓楼の格子戸を開ける。小間使いの少女が常連客のチアロを見て微笑み、いらっしゃいと愛想を言った。それで帳面台で煙管をいじっていた女将が顔を上げ、チアロに頷く。

「女将さんこんばんは。えーっと」

「あの子はさっき客が帰ったばかりだから、少し待っていておくれよね。それと……そっちは？」

女将の視線が向いて、チアロはクインを軽く突き飛ばす。よろめくようにクインが前へ出て、ようやくはっとしたように周囲を見回した。妓楼だということは分かるのだろう、途端に俯いて柱にふらふらともたれかかり黙り込む。気に入らないのだ。

チアロはその不平を無視し、あの子、と食堂で給仕をしている遊女を目で示した。

「あの子、こいつにつけてやって。金は俺の奢りで、泊まりでね」

女将はちらりとクインを見やり、すぐに頷いた。小間使いが黒髪の遊女を連れてくる。遊女はクインに目をやった瞬間に、あ、と小さな声を上げた。

反応が初めてではないらしいと気づき、チアロは軽い笑みになりながら、知り合い、と聞いた。

「あ、あの……いえ、少しだけ、お話をしたことがあるだけで……」

小さな声は消え入りそうにかぼそい。到底チアロの好みから遠かったが、こんな優しげな少女の方がクインにはいいかも知れないと思い直し、彼を頼むよといった。

「ちょっと落ち込んでるんだよ、慰めてやって」

チアロは遊女に笑いかけ、女将によろしくと同じ事を言った。女将が頷いてあんたの奢りで良いんだねと念を押した。それにチアロが頷くと女将はにっこりと商売の破顔を作り、よく通る声で宣言した。

「旦那様をリーナの部屋へご案内！ ゆっくりして行って頂戴。分からないことがあったらこの子に聞いてね」

最後の言葉はもの慣れていないクインへのいたわりなのだろう。戸惑って振り返るクインにチアロは手をひらひらと振り、食堂の方へ歩き出した。シアナの身体が空けばじきに階下へ降りてきて彼の頭をはたき、いつもの傲慢な笑顔でまた来たのと笑うはずであった。

渴いている、とライアンには言われた。そうかも知れないとクインは思う。エミリアとのことが幻になってしまったことで自分を責め、ライアンを非難し、けれど彼からの贖罪を受け取ってしまえば最後に向き合うのは自分の中の罪でしかない。

だからそれは受け取らない。狂気なのかそのふりをしているのか、自分でも境界は曖昧だったが、世界への怒りとライアンへの鈍い憤りが今の自分を辛うじて支えている。

昼の柔らかで温かな日射し、明るい日常の光の中にいると自分が場違いなところに座らされているようでどうしていいのか分からない。そして夜の青い孤独の中にいればただ淋しくて身を切られるほど辛い。

ライアンはあれから時間を割いて回してくれているようだが、月に三度ほどだった会話が週に二度になったことが劇的な変化だとは思えなかった。

一人の夜は淋しいし、ライアンがいてもなお淋しい。ライアンに徹底的に自分を痛めつけるようにし向けているのは彼の心に悪意と痛みをばらまくにはそれがいいと思ったからで、どうやら成功しているようであったが、一体こんな事をしてなんになるのだろうという声がどこからか聞こえてくるのだ。

——意識を取り戻した夜、ライアンに現実には巻き戻されるようにして彼と寝た。殆ど力づくでライアンは自分を取り戻そうとしたのだ。快樂かどうかという以前に自分の中の空虚と胸裂けるような悲しみがぐるぐると回って、あの晩は喉哽れるまで泣いたはずだ。

ライアンの身体が自分を押し潰さないように気を使うのが苛立たしくてたまらなかったし、エミリアのことを失い、全てを放擲したことで初めてライアンが自分をその意志で巻き込んだことが許せなかった。

けれど、それはエミリアの温かな腕に巻かれる以前、自分が望んでいたことではなかっただろうか。知ってしまえば他のものは要らない。ライアンが彼に与えようとするエミリアの身体の熱と似たものでは、既に満ちてゆかないのだ。

エミル。クインはじっと遊女の部屋の床にはられた、美しい組木模様を睨み据える。チアロが自分を勝手にこんな所へ押し込んでいったのは、今怯えたような目で彼を遠くなく近くない場所で見つめる彼女がエミリアと似ているからだ。

順序としては逆で、最初エミリアを見た瞬間には、それ以前に行き会ったこの遊女と似ていると思ったはずであった。けれどその位置は決定的に逆転している。

エミリアは彼の中に明るい光が差し込むための窓をつけてくれた。いつか翼を広げてそこから飛ぶことが出来るわと言ってくれた。彼女といるだけで穏やかになる気がしたし、手を触れていれば嬉しく、頬を寄せていればなお嬉しかった。

終わることだ、というのは分かっていた。いずれ離れて行かなくてははいけないとはっきり自覚していた。だからこそミシュアへ向かう旅路やその過程が美しく貴重なものになるだろうと思ったのに、それはほんの僅か手前で道を逸れ、息苦しい迷路へと紛れ込んでしまったのだ。

エミリアはどうしているだろう。見に行くことさえ怖い。自分が彼女に接触したら次はないとチアロも言った。だから行かない方がいい。行ってはいけない。あの優しくて暖かな色をした女に二度と会えないことが現実だった。

そしてクインは顔を上げて自分をひたすら見つめる遊女に視線をくれた。それははっきりとした敵意のような眼差しだったらしい。遊女が怯えたように肩を震わせたのが分かった。

「……お前……何か喋れよ」

クインは低い声で命じた。チアロといると楽なのは、彼が勝手にいつまでも口を動かしてくれる部分が大きいのだろう。自分がどんな状態でも、彼なりにクインの気持ちを引き上げようとする。

遊女は済みません、と呟いた。

「あの、何のお話を、したらいでしょうか……？」

怖々とクインの機嫌を伺おうとする瞳が大きい。あの晩に一瞬、捕らえられたような気持ちになったそれは、今はもう何の感情も呼び起こさない。彼女の面輪にエミリアの幻だけを見ている。

なるほどライアンは下らない、とクインはふと鼻で笑った。彼がしているのはこれと同じ事だ。彼のことを思い出すと尚更不機嫌になる。クインは遊女の問いに返答しないまま、座り込んだ椅子に身をゆっくり埋めるような姿勢を取り、長い溜息になった。

——つまりチアロは俺がライアンと同じくらい下らないと思ってるんだな。クインは口元を思い切り歪める。チアロはエミリアの顔を知っている。彼女がエミリアと似ていることも、では分かったのだろう。

気を使おうとしてくれることを有り難くは思っても、これが嬉しいかどうかは良く分からなかった。それに、とクインは困ったように俯いてしまっている遊女を横目で見やる。

彼女にはエミリアの持っていた嫌味ない明るさが足りなかった。もっとうち解ければ違うのかも知れないが、クインの発散する不穏な空気に気圧されているのか口数も少なくおどおどこちらを窺うばかりだ。

クインが溜息になった時、あの、という小さな声が聞こえた。

「何だよ」

切り捨てるように言うと、ごめんなさいという反射的な言葉がもれた。クインは苛立つ。自分がせっかちで気忙しい部分があることを承知しながらも、この女は俺の機嫌を取らなくてはいけなはずだという認識がひどく素っ気なくて乱暴な言葉や態度にしかならないのだった。

「ごめんって、何が」

底意地の悪いことを聞いている、とクインは顔を歪めた。遊女は困ったようにますます身を縮め、ひたすら済みませんと呟いている。それがいい加減に癪に障り始めてクインはお前、と吐き捨てるように言った。

「お前、同じ事しか言えないならもう黙ってろ」

——彼女はエミリアではない。失ってしまったものは、もう戻ってこない。

「俺は別にお前のくどくどした謝罪なんか聞きたくねえよ」

——エミリアではない。彼女の持っていた全てと遠く隔たった、別人だ。

そんなことは分かっていたけれど、何を期待していたのだろうと思うと尚更かあっと胸の底が熱くなるようだ。クインは言いたいことだけを言って長椅子の方に移って寝転がり、天井を見上げた。天窓から地上の赤い光に揺らめく月が見える。

クインは手を伸ばした。エミリアの声が、自分の中に蘇ってくる気がしたのだ。ここは緑。春の色、新しく綺麗な草が戻ってくる春。胸に描く幻想を、温かな理想を、そっと囁く声が優しくかった。彼女のおおらかな気持ちに抱かれていたかった。エミル。

エミル、好きだったのに。これがどんな種類の愛でも欲しかったのは本当なのに、どうしてあんな風に突然、何の予告もなく精算しなくてはいけなかったのだろう。

現実が進んでいくのに、心の方はそれに追いつかない。自分がせかせかと時間を早めていく性質であるのに、肝心の己がついてこれられないなどというということが、また苛立ちになった。

クインは自分の顔を片手で覆い、長い溜息になった。何も考えずにいたかった。忘れろとライアンが言うのは正しいのだろう。ただ、自分が意地でもそんなことはしてやるものかと思っているだけだ。

忘れない。絶対に。それがライアンへの復讐の方法であつたし、自分の中に美しい幻影が眠っていたことの証明でもある。そしてクインは不意に身を起こした。

結局この女がエミリアに似ているかどうかなんて、どうでもいいことじゃないか。自分に優しく微笑んでくれた彼女は一人しかいない。ならば、誰でもいい。もうどうでもいいし誰でも構わない。一瞬でも、ほんの束の間でも肌の熱と吐息で溶けてしまえるなら、もうどうだって構わないじゃないか……

そんなことを口の中で呟き、クインは所在なく彼の横に座っていた遊女の腕を掴んだ。はっとしたように彼女が目をみはる。大きな瞳が怯えたように潤んでいるのを見た瞬間に、罪悪感のようなものが胸をかすった。それに自分で動揺する。

何がいけないんだとクインは強く顔を歪めた。

自分は客で、この女は遊女だ。俺を好きなように遊ぶあの客連中と同じ扱いをしていい相手だ。クインの表面だけを丁寧に愛でて好き放題に彼を扱う連中に覚えた憎しみが、形を変えて戻ってくる。

抱いていいはずだったし、滅茶苦茶にしていいいはずだった。ライアンが彼の胸を切り刻んだように、誰かを傷つけることで均衡を取っている。

自分は荒れ狂いたいのだろう。本当に狂ってしまえたらどんなに楽だろうか。けれど、母のことがある限り生きて行かなくてはいけないし、あの商売だって辞めるわけには行かない。ライアンとの自虐ともいうべき関係も、エミリアとの思い出も、何もかも、放り出すものか。

それら全てを放擲しない重みを、どこかに吐き出さなくては潰されてしまう。その捌け口が女でどうしていけない！

クインは無理やり彼女を長椅子に引き上げると、着ていた木綿の赤い花襟の紐をほどいた。余りに性急で乱暴な仕草に彼女が驚いたような声を上げた。うるさい、とクインは強い言葉を捨てた。彼女はびくりと肩を震わせるとクインがもどかしく剥がそうとする服を手伝うつもりなのか、一つ二つ釦を外そうとした。

クインはその白い手を払いのけ、服の前衿を掴んで思い切り引き破った。勢いで釦がぱちぱちと飛ぶ。遊女の視線がそれを追ったのが気に食わなくて、お前、と喉元を掴んで呻くように言った。

「俺を見てろ。他の所に目をやるな。いいか、ずっと俺を見てろ」

遊女の喉を離すと、彼女は怯えたままで頷いた。クインは彼女の服に目を戻す。それは彼の粗野な行動のせいで既に半分ほどが引き裂かれ、下からはととするほど白い肌が覗いていた。

体つきは少し幼い。胸の隆起もあまりないし、腰まわりもほっそりとしていて、さほど肉感的な魅力を放つ少女ではなかった。クインの視線が身体を眺めているのに気付いたのか、少女が恥じらうように手で胸を覆った。クインはそれを乱暴に振り払う。羞恥なのか少女がふわりと頬を赤らめて、どうしようかと迷った末に手をクインの肩に回そうとした。

その瞬間、クインは喘いでその手を叩き返した。似ている、と呻きかけてそれをどうにか飲み込む。最初の印象が似ていた通り、ふとした仕草や頬の影がぎょっとするほど重なったのだ。

けれど——似ている。どうしようもなく下らない、全く意味のないことだと分かっているのに振り払えない。エミリアの身代わりなのか、彼女は。頭がおかしくなりそうだとクインは喘ぎながら、ぼろりと名前を呼んだ。

「……エミル……」

その声に遊女がえ、と聞き返した。クインははっとした。今自分の身体の下で怯えたような不安な目つきで、しかし命じた通りに彼を見つめる女は決して彼女ではなかった。

こんな時にエミリアならどうしただろう。大丈夫よと笑ってゆったり抱き寄せてくれたらうか。それとも、優しいキスを、エミリア？ あなたならどうしただろう。俺を慰めてくれたのか、それとも抱き包んでくれたらうか。

いずれにしても、それをこの少女が代行することはありません。

急速にきたものが急速に冷えていく。クインは少女を突き飛ばし、立ち上がった。眩暈がする。ライアンがしていることをせせら笑っていたはずなのに、気付けば自分まで同じ事をしようとしていたのは何故なのだろう。

淋しいという気持ちが何でもさせるなら、ライアンに縋ればいいのか。そのほうがよほどましだ。少なくとも、ライアンとエミリアを混同するほど馬鹿ではない。

だが、似た印象の女に依存しようとする事自体が、汚い。ライアンに向かって俺はリアンの幻影ではないのだとほえついたことが霞んでいきそうになる。クインはよろよろと少女から離れ、喉で意味のないことを呻きながら扉に背をつけた。

少女が急いで服の前をかき合わせ、駆け寄ってくる。

「——あの、ごめんなさい、私、何か、あの……」

クインの機嫌を損ねたのかと見上げてくる視線が大きくて、あの晩に出会った時のように美しく潤んでいる。

けれどこれはエミリアではない。こんな賈の代用品で間に合わせようとした自分も許せないし、おどおどとクインを窺おうとするこの女にも腹が立った。

「俺はお前なんか欲しくない。あいつが勝手に放り込んだんだ——もういい、俺に構うな……泣くな、馬鹿っ」

ついというように涙をこぼした遊女に心底うんざりしてクインは怒鳴りつけた。

渴いている、とライアンは自分を指して言った。自分の中では涸れてつきてしまった涙をこんな下らないことでぼろぼろこぼしてみせられると、いっそ当てつけなのかと勘ぐりたくなる。

「泣くなって言ってんだろ、いい加減にしろ、知らない、帰る！」

クインは少女を突き飛ばし、扉を乱暴に開けて足早にそこを出た。待ってと少女が叫んでいるのが聞こえたが、それには構わない。来た階段を駆け下りていくと、女将がぎょっとしたようにどうしたの、と聞いた。それに返答をせず、先ほどはチアロが開けた格子戸から出ていく。何かを女将が言いかけた気配がしたが、戻る気にはならなかった。

駆け戻ったアパートは人の気配がない、しんと冷たい闇の中であった。クインはまっすぐに寝室へ入る。遊女の身体からついたのか、ふわんと甘い香りがする。

こんなもの、と滅茶苦茶に自分の肌をかきむしり、それでも足りなくて意味のない悲鳴を上げながら服を脱ぎ捨てて暖炉に放り込んだ。

灰が舞い立つ。

月明かりの中で画帳の最後の角の形が崩れたのをクインは見、そしてぺたんとその場に座り込んだ。エミリアの残した全てがたった今、最後のものさえ潰え去ってしまった。

それを思うと後から後から何かがこみ上げてくる。獣のようなうなり声を上げてクインは暖炉の前へひれ伏すが、涙はやはり出てこなかった。

「エミリア、ごめん」

呟いた言葉にクインは自分で首を振る。画帳はエミリアが自分へ渡したかった希望の形であった。背中が良くなったと誉め、翼が見えるのよと笑い、よい未来を彼に教え、そしてそれを教えたことを忘れないでというつもりでチアロに画帳を預けたのに決まっているのに、それを自分は為す術なく燃えるのを見ているしかなかったのだ。

「エミル、ごめん、ごめんよ……」

呟き続ける声に混じってくるのは大量の、自分でも制御できない量の後悔だった。それが苦く鋭く自分の背中を打ち続けている。エミリアがここに、と描いた位置が痛い。

いつかクインを描いたらその絵をくれるとエミリアは約束をしてくれた。この画帳はそのための引き替えの切符だった。それを大切にしていられなかった、ただライアンが画帳を燃やすのを、ぼんやりと見ていた。

腕も胸も、痛むのはこれは罰だとクインは思う。

罰だ、罰が下ったんだ。二度とエミリアには会えない。彼女の託してくれた希望が他人の手で蹂躪されるのをぼんやり見ていた。だから泣くことさえ出来ない、これが罰なのだ。

クインはほんの僅かに形が分かる灰へ手を伸ばし、おそろおそろすくい上げた。灰は既に冷めていて、たださらさらと細かく指の隙間からこぼれていこうとする。

それを阻止するようにクインは灰を握りしめた。

自分の手の中にある、一握の灰。自分の体温にぬくまっていくそれは、エミリアとの全ての思い出の遺灰であった。

クインは喉で呟いた。涙の気配は、やはりどこからもなかった。

皇子が論文の綴りをめくり終わると同時に、ト占版の上に線が浮かんだ。それを見つめていたマルエスがそっと笑い、隣で固唾を吞んでそれを見守っていた少年魔導士の肩を叩く。ありがとうございますと呟いた少年期特有のかすれた声に耳を止め、皇子は微笑み立ち上がった。

「終わったようだね。どう、マルエス」

皇子は魔導士二人が真剣に斑紋をいじっていたト占版を覗き込む。そこに浮き現れた赤黒い線の紋様を見つめ、柔らかに笑った。魔導を知らぬものが見ればただの絡み合った線であったが、これは正式なト占だ。皇子の魔導斑紋と、カノンの斑紋の相似判定である。

魔導には使う個人によって特有の斑紋が出る。これは誰一人同じ斑紋を持たない完全なる固有であった。声の質などによって魔導呪文にも個人で得手不得手があるし、声が一人ずつ違うものであるのと同じように、斑紋にもそれがあつた。

そして魔導が声を媒介とする超自然である以上、斑紋の傾向が似ているかどうかは同じ術を合で行うためには重要で重大なことである。

「大体が一致しているね。これはとてもいい、マルエス、分かった——カノンといったね、今度の移動時期に申請を出しておこう……論文も良かった、面白かったよ」

皇子はカノンの手による綴りをちらりと見やって笑ってみせる。アイリュス公が魔導士を使って誰を捜しているのだと指摘したことで、リュースはマルエス以外の魔導士を申請するという案によりやく本腰になった。魔導士には魔導斑紋が顕著に現れるから、マルエス一人に探索を任せて置いたことが知られる要因であつたのだろう。

皇子自身が魔導には通じており、研究などの為にマルエスとの合同詠唱なども経験している。そこに更に一人加えるとなると、魔導斑紋のかなり高い一致がないと難しい。要するに、魔導における相性の問題だ。

線で描かれるカノンの資質、マルエスの資質、そしてリュース自身の資質を示す線には大きなずれはなく、どれかというならばカノンと自分の一致率が高い。ならば今までのようにマルエスに頼りながら、カノンもきっと使えるはずであつた。

それに、とリュースは論文の内容に深く頷く。治癒系の魔導は身体の代謝を無理矢理高める効果によるものだが、これに例の時間生成論を練り込んだ論文は論理が確立できれば医療魔導の大きな質的転換をもたらすだろう。今はまだ机上論に過ぎないが、面白い理論の組み立て方をする。年若くても優秀ですとマルエスが強く推す理由も分かった。なるほど、この少年は見つけたのかもしれない。

「彼」の時間生成理論は実験が失敗して後に頓挫という形になっているが、いずれ皇子自身が深く踏み込んでみたいと願う領域でもある。一人ではどうしても検証実験の詠唱にまる二日ほどかかるから、複数による合同詠唱が必要だ。それにもいずれ関わってもらうことが出来るだろう。

ありがとうございます、とカノンが深々と腰を折った。いいや、とリュースは穏やかに言った。

「私も丁度、マルエス一人では手が足りなくなってきたところでね。色々と頼むことが多いとは思うけど、よろしく頼むよ、カノン」

「はい、一所懸命務めさせていただきます……ありがとうございます、本当に……」

カノンの声は弾んで明るい。現在はタリアへの出向だと聞いているから、魔導の塔も勿体ない人の使い方をするものだとしゅースは思う。

カノンの実地魔導も見せて貰ったが、声が現在の変声期で安定しないのはともかく、詠唱の正確さと構成の的確さは見事だった。いずれ高等学院の魔導学の講義でも聴講させるよう、長老会に申し出てやらなくては。

自分の周辺に魔導士が数多くいることにアルカナの叔父はあまりよい顔をしないが、学問としての魔導の追求はしゅースの大きな目的であり喜びだ。詠唱の実地はマルエスに頼ることも多かったが、これで彼の負担を軽減してやることも出来る。

そしてしゅースは窓の外を見た。初秋へと向かう濃い緑の中を、こちらへ走ってくる人影に気付いたのだ。董色の目に鮮やかな髪は弟だ。カノンがここにいることを誰かから聞いたのだろう。

「カノン、ラインが来ている」

しゅースがそう言うと、少年魔導士は一礼した。ラインの剣術の稽古相手にとカノンは選ばれて登城したのが最初であった。

魔導士の身ごなしは特殊だ。そのもの慣れぬ感覚が珍しいのだろう、ラインはカノンに良く懐いている——もっとも、ラインが懐かない相手など殆ど知らなかったけれど。ラインの相手にとカノンが下がると、しゅースは深く頷いてカノンの論文をめぐり直した。

「何かお気に障ることでも、殿下」

マルエスがしゅースにそっと問うのに首を振る。

「いや、彼は本当に優秀だ……年齢は多分私と変わらないくらいだろうけれど、いずれ私が公職に就く頃には彼が長老会に入っているとやりやすい」

それにはあと十数年はあるだろう。公職、と曖昧にした部分にだろうかマルエスは小さく笑い、カノンは若いけれどよく心得た同志です、と言った。それにもしゅースは頷く。

アイリュス公の発言以来、両親共に誰を捜しているのかとひどく執拗に彼に聞いた。

母方の叔父であるアルカナ大公もちらちらと探るような聞き方をする。それには全て知りません勘違いでしょうと返答しているが、この反応は明らかに異様といえるものであった。

一体自分が誰を捜していると上手くないのだろうか。

マルエスの推論を否定する理由が無いために、「彼」のことを現在はラウール大公キエスだと仮定しているが、もしかしたらそれも間違いなのかも知れないと皇子は考え始めている。

但し、だとしたら誰なのかということについては白紙に戻ってしまう。「彼」の魔導斑紋を拾うことは最早不可能だ。中等では口をきけないということになっていて一度も詠唱を行ったことがないし、それ以前の上級学校や初等学校での斑紋痕跡など、どれが彼のものであるのかを一体どうして判別できるだろうか。

魔導斑紋には声質が深く関わる。声質、つまり遺伝要素だ。斑紋を拾ってもどの家系との一致が知りたいかということではがなく、斑紋が分かったから血筋がすぐさま探せるということでもなかった。「彼」がキエス＝ラウールでなければ全く別の仮定から始めなくてははいけない。

中等学院に残っていた「彼」の戸籍には母と娘、とあった。彼を連れていたのは母親を偽装し

た誰かであろう。戸籍の出所はどうやらタリアラしく、あの赤い格子の町の暗部に隠れ紛れてそれ以上の追求は諦めなくてははいけなかった。いずれにしろ、マルエス一人に任せきるには次第に全てが重くなりつつあった。

いずれ皇太子と決まればもう一人か二人は護身や連絡のために魔導の塔へ申請を出さなくてはならない。魔導士の管理を行う魔導の塔は皇族を頂点とする国政機関とは別の傾倒の組織で、内部の上級魔導士たちで構成する長老会の決定が皇帝の勅命以外の全てに優先されることになっている。申請するときに勝手にこちらで相手を選ぶことは出来ないのだが、今回のように先に斑紋のト占を行ってれば、まずは希望が通るはずであった。

「マルエス、彼の件の申請が通ったらすぐに捜索に加えておくれ。……どうやら急がなくてはいけないな。父上も母上も、少し……何というのか、おかしい」

父の休日に呼び出されて午後一杯を言い抜けに費やした記憶が新しいが、そうでなくても夕食の時に母も同じ事を繰り返し聞いた。ラインがきょとんとしているのが救いだが、両親が一体何を怖れているのか、全く見当がつかない。

怖れている、という言葉をつき、リユースは自分で深く頷いた。そう、二人とも何かを怖れている。執拗というべき回数、リユースに誰を捜しているのかと聞き、穏やかに微笑みながら魔導士を貸しても良いのだと提案する。

その異様さが却って怯みと用心を呼んでいて、リユースはいつも誤魔化すか適当に言い逃れることくらいしか出来ていなかった。だが、何かがあるという感触は大きくなっていく。

それが一体何であるのかはまるで見えないのだが、両親が何かに怯えていることと、リユースの捜し人が一致すると思っているのだ……何故。

あまり時間をおくとマルエスの捜索にあちらの魔導士が追い付く可能性がある。あちら、とリユースはまるで敵のような呼び方が浮かんだことに自分で苦笑するが、しかし両親がこのことを快く承知していることはなさそうなのだ。

「どの辺りまで行きついたかな」

リユースの質問に、マルエスは幾つかシタルキア北部の都市をあげた。既にキエスと思われる痕跡は判別が済み、それを時代順に追っているところであった。

「とにかく徹底的に転々としておりまして。追われる身であることが大きいのですが、一カ所に三ヶ月と居りません。他国へも足を伸ばす気配がありますので、同志カノンの申請をお早め下されば有り難いことです」

マルエスの言葉にリユースは頷き、そうしようと言った。お願いいたしますと深く例をしたマルエスがところで、と切り出したのは別の話であった。

「それと殿下、お体の方は如何でしょう。あれ以来、体調など何か変わったことはございませんでしょうか」

リユースはああ、と軽く頷く。これはあの昼食会の時に嘔吐して以来、どの医者にも何度も言われていることであった。何もないよと簡単に答えてカノンの論文を自分の書斎にしまい込もうとしているとマルエスがそっと近寄って皇子の肩を押さえ、低く小さな声で囁いた。

「よろしいですか、殿下。母宮とここの侍従たちがお持ちするもの以外はなるべくお口になさる

のはお控え下さい。もしそれ以外に何かを召し上がる時は、必ず先にわたくしをお呼びいただくように、お心得を」

「——マルエス」

リュースは不意に表情を変えた。

毒、と喉の奥で呻き、ごくりと飲んだ呼吸が胃に落ちた瞬間に、やっとそれが実感になった気がした。リュースは眩暈を覚えて背後に立つマルエスに一瞬背を預ける。

誰かが自分を殺そうとした——

その現実味の無さと事実自分が嘔吐した時のことを思い合わせてリュースは青ざめる。マルエスを振り返り、リュースは毒、と呻いた。マルエスは小さく、しかしはっきりとした仕草で頷いた。

リュースは喘ぎ、額を押さえた。マルエスが彼の腕を取り、書斎の椅子に座らせる。ずっしりと重たいものを抱え込んだような茫然にリュースはゆるく首を振り、毒、と三度目を呻いた。

しっかりとマルエスに膝を揺すられて上の空で頷く始末だ。殺される、というこの言葉の何と現実味のないことだろう。だが、誰かがリュースを邪魔に思い、短絡に決着をつけようとしたのは事実なのだ。しかし、とリュースが喘いだ時、殿下と魔導士が低く言ったのが聞こえた。

「どうかお気をしっかりお持ち下さい。いいですか、確かにそれは毒ですが、致死量ではありませんでした。せいぜいあの場でそうでしたように、嘔吐するくらいのもので。しかし混入されていたのは事実です、殿下、つまり」

「なるほど」

リュースはやや落ち着いてきた呼吸を均しながら呟いた。

「つまり、私が立太子されるとまずいのだな……」

学問所の様子を見るに、リュースの方がカルアよりも資質が豊かだという結論になるのは当然のことであろう。何分カルア本人にさほどやる気がない。学問所のことだけで全てが決することはあり得ないが、材料の一つではある。リュースが皇太子として至らない点として健康問題を印象に残しておきたいのだ。

ならばあの場が選ばれたことにも意味があった。両親とアルカナ・アイリュスの両大公が揃っていたのだから、彼らの前にリュースの身体の弱さを喧伝したい者がいるということになる。

リュースは唇を引き締め、下らない、と呟いた。皇帝の実権などとうに貴族閥と官吏に渡って久しい。普通に即位したところで、実権をすぐさま奪い返せるなどという夢は見たことがなかった。試してみたいことはあるが、それも両大公の意志を汲みながらの修正と無縁ではいられないだろう。何よりそんな形で皇太子への道を妨害しようとするなど迂遠だし、卑屈というしかない方法だ。

リュースは次第に最初の恐怖が怒りに変わるのを感じながら分かったと言った。

「では気をつけておこう——カノンの申請も早めなくてはね。どうやらこれから先、人手が今まで以上に要りそうだし……お前にも負担が大きいね、いつも済まない、マルエス」

いいえと魔導士は仮面の下でひっそりと笑ったようだった。

魔導斑紋などの資質の相性と当人同士の気質の相性も噛み合わせて派遣されてきたマルエスは、確かに彼とはよくそりがあったといえた。そもそもあまり他人に馴染まないリュースであるが

、マルエスとはそうささくれだった関係には至っていない。ごく普通の主従という空気が流れている。そこにカノンを加えるとまた空気も変わろうが、マルエス本人がカノンを高く評価していた。

リュースはもういいよ、とマルエスに魔導の塔へ戻るように促した。マルエスは治癒以外にも幾つかの魔導の研究会に名を連ねている。魔導士としては彼はごく普通の能力に属し、何事もそつなくやり遂げる程度には出来上がっていた。カノンのように長老会へ入るかも知れないという期待は酷かもしれなかったが、リュースの道楽ともいえる人捜しにもきちんと意見を述べてくれる年上の友人として、リュースは彼を頼りにしていたし、信頼してもいた。だからマルエスが研究会に顔を出すことを優先してもいいとしてきたし、それはこれからも変更するつもりはなかった。

マルエスが下がるとリュースは学問所の講義をまとめ直し始めた。来週には口頭試問がある。カルアに多少の知識と体裁をつけてやらなくては、弟があまりに可哀想になるのだった。

講義の抜き書きをまとめ終わると既に日が落ちる頃であった。適当に片付けていると、弟のラインがひょっこりと顔を出す。日に焼けた頬が眩しく赤い。今までを外で剣の稽古にしていたのだろう。

「どうだった、少しは上達した、ライン？」

そんなことを聞いてやると弟は肩をすくめる。魔導士に勝つことのできる子供などいるはずがないからリュースは淡く笑って弟に待っているように言った。これから夕食の時間になる。

リュースは半ば辟易したような吐息が自分の唇から零れたことに気づき、苦笑になった。また両親からのしつこい追及の時間なのだ。

そしてその予感はやはり正しい。皇子に向かって両親は宥めたりすかしたり、とにかくマルエスを使って何をしているのかを聞きたがった。リュースはそれに適当に返事をしながら皿の中の料理をフォークでつつき回している。昼食会の時のことが蓋になったように、殆ど入らない。

それをようやく見咎めたのは母で、どうしたの、と怪訝な面もちで聞いた。

「さっきから全然食べないのね、リュース？ 食欲がないと身体も出来ないわよ」

リュースはまあ、と曖昧なことを言った。ラインの前でこんな生臭い話はしたいとは思わなかった。弟はまだ正真正銘の子供で、皇太子の候補からも外されている。いたずらに騒がれても困惑するし、何よりも心配をかけたくない。

その場の言い訳のようなことを口にして夕食を終えると、父帝はラインに簡単な書取を言いつけてリュースを夜の庭へ誘った。母妃も一緒だ。これは何の話だろうとリュースは思い、また人捜しの話だろうかと思うと胸の内で苦笑と溜息が同時に聞こえた。

庭は薔薇の終わりの甘い香りが漂っている。白い薔薇が月の光に輝くような美しさだ。庭園の噴水の縁に腰掛けて、父帝が彼の頬をそっと撫でた。

「お前に少し話しておきたいことがあってね。ゆっくり呼吸をして、落ち着いて聞きなさい、いいね」

父はゆったりと、そして心底から穏やかに微笑んでいる。リュースは同じように唇をほころばせると、ええ、と頷いた。そっと彼の背に母が座り、肩を抱く。自分の頭上で両親が視線で何かを会話している気配がした。

リュース、と呼ばれて素直に返答をする。父は彼を愛おしく見つめた後、ゆっくりと区切るように言った。

「来週に口頭試問に私が列席することになっているのは知っているね？」

リュースは頷いた。学問所の簡単な試験ではあるが、次世代の帝位の行方を占うという意味で皇帝本人の列席が義務となっている。口を挟まずに同じ場所に座っているだけではあるが、形式というのはそんなものだ。それがどうしたのだろうかと思っていると、父は彼の聡明な額に触れて優しく、ごくゆっくりと言った。

「その時に、立太子の候補から降りたいと、私に申し出るように、いいね」

リュースは数度瞬きをした。父の言葉が胸に理解として落ちてくるまでに、少しかかったのだ。

「何故……」

呻いた時、上手く唇が動かない。やがて呼吸自体が出来ていないことに気付く。それを打破するために強く何故と呟くと、それはまるで悲鳴のような声になった。

「何故——何故です、父上！ 私は、ずっと、……どうしてですか、理由は何ですか、父上、私は、」

言い募りながらリュースは自分の胸あたりを掴む。そうしていないと身体から魂がふらふらと彷徨い出ていってしまいそうな気がしてたまらなかった。

たまらない、と思った瞬間に怒りとも悲しみとも、疲労ともつかぬものがどっこみ上げてくる。自分が今まで努力し、たゆまずに続けてきた全てが父の一言で撤回しなくてはいけないとしたら、どれだけの徒労で無駄だったのだろうか。

そんな馬鹿な、とリュースは呟き、父上と言いかけた。

と、不意に背からリュースは強く抱かれた。母が彼をぎゅっと抱きしめて、ごめんねと呻くように言ったのが聞こえた。母上、とリュースはそれを無理矢理もぎ離し、父にまっすぐな視線を当てる。

「納得できません。理由を……理由は何ですか、父上、私は自分の出来ることはしてきました、今までだってずっとしてきました、これからも！ これからもやるべきことは努力します、わ、私は、別に、性格だって、それに——」

意味のないことを連ねて口走りながら、リュースは眩暈を耐える。何故です、と呟いた声が自分で悲鳴のようだとリュースは思った。

何故ですかともう一度繰り返すと、父帝が辛そうに目を伏せ、しかしはっきりした声音で言った。

「お前はどうしても身体が弱い。帝位につけばそれだけでまっとうできないのではないかと私もイリーナも心配しているのだ、リュース。……分かるね」

「いやです」

「リュース、聞き分けなさい。お前のことを私たちは思っていて言っているんだよ」

「いやです！ いや、いや、それは、嫌です、嫌だ嫌だ……」

駄々をこねるような幼い拒否を呻いてリュースは顔を上げる。その途端に涙が頬を流れ落ちていったのが分かった。泣いているのだと思った瞬間に、更に溢れてくる。

「昼食会の時のことは、あれは違います、父上、私の皿に毒が——」

と、その禍言に父帝が息を呑んだ。リュースは毒です、と強く言った。父が狼狽えるように視線を彷徨わせる。毒、と母が呻いた声にリュースは振り返り、そうですと強い口調で言った。

「あれは私の食事に毒が、だからあんな、父上、あれはだから違うんです」

言い募るリュースに父帝は頷き、確かかねと低い声を出した。それでようやく事の重大さを悟ったような気持ちになって、リュースは震えながら頷く。

「私の護衛魔導士が、そう。致死量ではないとか、そんなことも言っていましたが、しばらく用心するようにと言われてました」

父は頷きアウイスと呟いた。父の背後にふわりと魔導士の影が現れる。調査を、という言葉に魔導士が頷いて消えると、それでやっと我に返ったのか母の悲鳴が聞こえた。

それに却って冷静な部分が戻ってきたようにリュースは母の手を握りしめ、大丈夫ですと強

く言った。イリーナはそれには返答せず、彼の細い身体を強く抱きしめて、震えだした。

父がリュース、と彼の身体に触れる。リュースはそれを振り払い、父を睨み上げた。

「だから父上、私は降りません。そんなのは……そんなのは嫌です。私は絶対に嫌だ。今降りたらそんな卑劣なことに負けたことになります」

父は半ば哀しげな表情で首を振り、彼の肩を掴んでゆっくりさすった。

「リュース、私たちはお前のことをいつも考えている。お前が元からあまり丈夫でないことも今まで見てきた。お前は頭のいい、賢い子だ。優しくてとてもいい子だよ——けれどお前のような賢くて繊細な子には、私は帝位を継がせるべきでないと考えている……リュース、お前が即位したら沢山の現実を見なくてははいけない。お前にはそれはとても辛いことだと思う。なまじ聡明過ぎると、知らなくていいことも分かってしまう……」

父の言葉は淡い苦みに彩られていて、リュースは僅かに怯んだ。この言葉には父の見てきた苦いしつつが全て滲んでいるように思われたのだ。

何かを言おうとしてリュースは沈黙した。父の経験とそれ故のいたわりに太刀打ちできるものを見つけられない。だが、素直に受け入れるには足らないものが多い。リュースは父上、と絞られるような声を出した。

「私は、きちんと、今までちゃんとやってきました！ 不安だというならもっと試してください！ 結構です、だから、降りろと言うのは撤回してください！ 父上、私は嫌です！ 身体のことだって、では何故最初からそう仰らなかったんです、今更、今更そんなことを言われても、私は納得しません」

リュースは言いながら首を振った。リュース、と彼を母が抱いてごめんねと言った。

「ごめんね、私が諦められなかったから。でも、お前のために一番いい方法を私たちで話し合ったのよ、信じて頂戴、リュース。お前がこれまでちゃんとやってきた事は良く知っています。でもね、お前を失うことの方がずっとずっと怖いよ……！」

「私が私をどうするか、未来をどうしたいかは、私が自分で決めます」

リュースは母を叱りつけるように言った。はっと顔を上げた母妃の董色の瞳に瞬く間に涙があがってくる。母上とリュースは強い声になった。

「太子候補にではラインをあげるのですか？ 母上は昔から、私よりラインの方がずっと可愛いんでしょう？ 私が何をしても母上はラインばかり」

すらすらと自分の唇が吐き出す言葉にリュースは目をきつく瞑った。自分の中にこんなに醜い部分があったのだと思った時、彼の名が呼ばれ、咄嗟に頬が打たれたのが分かった。

リュースは僅かによろめき、喉で呻いた。ずるずると座り込む。打ったのは父であった。彼をもう一度平手で打って、叱りつける。

「リュース、二度とそんなことを言うんじゃない！ それは母への侮辱だ、いいな、そんな馬鹿なことがあるはずがない、イリーナがお前をいつ邪険にしたというんだ！」

「——薔薇園で！」

リュースは凄まじい早さで顔を上げ、父に怒鳴り返した。

「母上は私にもう会いたくないと、顔など見たくないからくるなと、そう、そう言って、そう言

って」

言葉にするとそれがどれだけ自分を傷つけていたかが初めて分かった気がした。リュースは喘ぐように言葉を紡ぎながら、拳でぐいぐい涙を払った。

「だから、私は、悪いことを聞いてしまったと、そう思って、でもマリアという女性のことは、同情しますが、母上が、彼女と何があったか知りませんが、私が……」

そこまで夢中で口走ってリュースはふと声を潜めた。父は目を睜り、微かに震えていた。驚愕と茫然の為に、やがて静かに青ざめていく。リュースと叫んだ父の声音は今まで聞いたどれよりも強張り、重たかった。

リュースは一瞬目をしばたく。父上、とそっと声をかけようとした時、マリアという呻きが背後からした。はっと振り返ると母妃が蒼白というべき顔色で口元を押さえ、おこりのように震え出すところだった。

この名が母にとって重大な罪の意識をかき起こすことは知っていたはずだった。リュースはしまったと顔を歪めて母親を宥めるために手を伸ばした。

だがそれは届かなかった。母はさっと立ち上がり、マリアともう一度呟くと許して頂戴と喘いだ。

「ごめんね、ごめんね……マリア、私が悪いのよ。いけなかったのよ。お前にもあの人にも沢山の罪を負わせて、追い出してしまった！　許して……」

それだけを呟いて、母は耐えられないと言うように身を翻し、駆け去っていく。それではっと我に返った父がイリーナと叫んで数歩追いかけ、そしてリュースを振り返った。

「——先に館へ戻りなさい、リュース。……マリアのことを、お前は知っているのか」

厳しい口調にリュースは父を見つめ、やがて力無く首を振った。ただ母上がそんなことを、と言いかける先を、父が言い訳はいいとぴしゃりと撥ねた。

「リュース、確信もない事を引き合いに出すのは止めなさい。いいね」

その言葉に頷くと、父は厳しい表情のまま母を追って駆けてゆく。リュースは混乱を払うように首を振り、とぼとぼと歩き出した。

夜の夏薔薇庭園は静寂の中で、月光だけが明るい。自分の影を見つめながら歩いていると、ふとその横に新しい影が出来た。マルエスだろうかと皇子は振り返り、

——何かの凄まじい予感に咄嗟に背後へ跳躍した。自分の残像を銀色の線が横断するのがくっきりと、劇的に遅く見えた。

はっとした瞬間、後先を考えずに飛んだ身体が薔薇の茂みにぶつかり、植え込みを潰すように皇子はその中へくずおれた。人影がはっきりと手を振り上げる。その手に銀にぎらつく光がある。

何かを考える前に皇子は叫んだ。

「マルエス！　マルエス！」

その視界にふっと尾を引く銀の線が現れる。

リュースは身をよじる。彼の身体への決定的な傷を負わせるに至らない、しかしかすった痛みを首筋に覚えてリュースは叫んだ。

次の一撃を振り上げた影が、横へはじき飛ばされる。魔導士の長衣と背格好でマルエスだと知

って、皇子は薔薇の植え込みにだらりともたれた。

マルエスが人には在らざる早さで人影の腕を取り、簡単に押さえ込む。骨の折れる軽い音がして、リューズはびくりと身をすくめた。相手の身動きを封じ、マルエスが自分に駆け寄ってくる。大丈夫ですかと助け起こされて、リューズは異変に気付いた。

世界が揺らいでいる。身体が痺れたように動かない。

何かを言おうとした唇が重くてびくりともする気配がなかった。殿下と叫ぶマルエスの声は聞こえるのに、それに返答しようとしても何も出来ないのだ。脳幹が痺れ、末端から感覚が無くなっていく。喉が何かを呻こうとして、呼吸がふと止まった。

息が出来ない。弛緩した身体に力が戻ってこない。

あ、と小さく喉を鳴らすと、マルエスが毒、と唸って不意にリューズの瞼を手で閉じた。僅かな時間をおいて、傷になったらしい場所に温かな吐息がかかった。くすぐったいような感覚が首筋を撫でて、リューズは身体を痙攣させた。柔らかいものがそこに押し当てられ、きつく吸っては離れるのを繰り返している。

それを四度まで数えた時蓋が開いたように空気が喉を通り、それで深い呼吸を長く長く吸いながら、リューズは痺れるような無意識の中へ転がり落ちた。

赤い格子の向こう側は、いつもと同じ雑踏だった。興味本位で覗き込んでくる男たち、からかうための言葉だけを投げつける男たち、みないつもと同じだ。そして自分がまったく不変の頑なさの中にいることも。

リィザは格子のきわの腰台に所在なく座り、ぼんやりと通りを眺めやっている。誰かを誘うでも睨み据えるでもない弱い視線は誰の気も惹くことがない。それが楽なのだろう。何度叱られても叱られても、気付くと同じ事をしているのだ。

自分は芯まで冷たいのだろうかという時折恐ろしくなる。ディーへ深い罪の意識を覚えてもそれは彼にまったく心が開かなかった言い訳で、彼がリィザの元に訪れなくなったことをどこかで安堵しているようなのだ。

ディーは自分に十分優しくかった。癪性で暴力の多い男に巡り会うリィザの性分には過ぎた相手ではあった。けれど、優しいことが辛い時もある。そして二人ともがそれ乗り越えてお互いを理解し合おうと思っていなかったことだけが分かる。だから駄目になってしまったのだということは分かるのに、これからどうしたらいいのかということは全く見えない。

リィザは外を眺めながら、ディーと過ごしてきた百には足りない夜のことを思い出そうとする。酒は少し薄めの薄荷入り。煙草は吸わない。義手は重たくて目はまろく鈍い青。彼の性癖や口癖なども思い出せるのに、その一瞬一瞬切り取られた記憶の中に、自分の感情がまるで進入してこない。

それを思うと自分の頑なで鉄のような心にうっすらとした絶望さえ抱く。その時は確かにディーを嫌いではなかったはずなのに、覚えていないというのはやはり薄情な証拠なのだ。

リィザはそっと溜息になる。ディーを含めてチェイン地区の何人かを知っているが、その殆どは若い者特有の性急な粗野であった。ディーのように血の臭いを消し去る男は珍しい。

まして女に丁寧に接するなど妓楼ではまさしく貴重な種類であったはずだ。

けれど、結局は条件ではない。それを分かっていたからこそ、ディーは離れていった。チェイン王ライアンの宴席とやらがまたあるのなら、その時に一言謝らなくてはいけない。心を開けなかったことではなく、あれほど心をかけて貰ったのに、彼に何かを残してやることが出来なかったことを。

謝ることではないかもしれないが、何かを残しておきたい気がしてたまらない。恐らく、彼が来なくなる以前よりもずっと彼のことを考えている。

リィザはその矛盾にそっと苦笑し、また格子の向こうへ視線を漂わせた。ディーにあれだけ酷い仕打ちをしておいて、という自嘲をリィザは胸に聞いているが、それに構っている余裕はなかった。

もう一度会わなくてはという信念に近い思いだけが、リィザを苦手であった腰台にずっと座らせている。

——初めて出会った時、自分は傷ついていた。

酔った客に無理に抱き寄せられて、衣装の裾から潜り込ませた手が自分を勝手にまさぐり始めるのに恐怖さえ覚えて震えていた。止めて欲しいと何度も口にしながら聞いて貰えなかった。惑乱と羞恥で泣き出してしまったことを責められて、済みませんとしか言えなかった。

自分の謝罪は他人の心に届かないらしい。余りに豊かにありふれて流れてくるために、全く真実味が薄いようなのだ。平手で思い切り打たれ、喉を絞められて、一瞬これで死ぬと思ったことを今この瞬間のこのように思い出す。

死にたかったのかもしれない。客とのことはあまりに辛く、自分を取り巻く世界はあまりに冷ややかだった。

あのまま虐め殺されたら自由になれるかもしれないとそんなことを思っていた。死に解放と救いを求めてはいけないと神様は言うらしいけれど、それを思わなくては生きていけない辛さはどうしたらいいのだろうか。

けれど辛い辛いと呟くことは出来ない。この格子の町はみな、似たような境遇の女たちで溢れている。貴族荘園から引き離されたことをリィザはずっと悲しみ、未練を手放すのに長くかかってしまったが、そんなことはごく普通のことで、もっとひどいことを幾らでも聞くことが出来た。

自分よりも哀れな人も沢山いる。例えばミアは家族が食い詰めて、冬を一家が乗り越える食料のためにここへ来た。シアナは娼婦だった母親が同棲していた男に追いやられて運河に身を投げた後、アパートの家賃の片に売られた。母親の遺産というべき金や宝石は同じ娼婦仲間が洗いざらい持って行ってしまったのだという。

だからあなたは恵まれているのだ、ということは誰も言わなかった。少しづつ不幸の根と種類は違うが、結局この妓楼にいるところで全ての帳尻はあうようになっている。この妓楼はタリアの中堅どころというあたりだが、女将がもっと格式高いところへあげたいらしく、日の売上のために無理な注文を取るということは殆ど無い。

——問題はリィザの頑迷な心なのだ。今でも自分の身に起こったことを理不尽だとなじり、悲鳴を上げ続けている。ディーもそれで失ってしまった。

リィザはゆるく首を振る。ディーだけではなく、他の常連客にもリィザは顔向けできないことをしている自覚はあった。勤勉で怠慢な娼婦だと思ったことがあった。その感慨は強くなっても聞こえなくなることはない。いつもいつも、リィザの近くにいてリィザを非難し続けている。

そんな中で、彼と出会った。あれは確かに何かの劇的な瞬間だった。

彼は客に打たれた時に髪から落ちた造花を拾ってくれた。多分自分を見て哀れんだのだろう、そんな声を出していたはずだ。

けれど格子の向こう側に彼を見つけた瞬間に、僅かな負い目は吹き飛んでしまったようだった。

彼は美しかった。目を奪われるという意味を初めて知った気がする。

彼は何かを口走るように喘いでいた。リィザは声も出せなかった。ただ、何かの予感か雷鳴のようなひらめきに撲たれて茫然と、目の前の奇跡に見入っていたのだ。

あの時、確かに何かが起こっていた。自分も彼も震えていた。格子という籠のあちらとこちらでお互いを引き合うように凝視めあっていたのだ。

それは天啓とよく似ていて、例えば農園にいた頃に小糠雨を見つめてやがて空が明るくなってくると、リィザはじっと予感をまっていた。何か美しいものに出逢うかもしれないと思うと胸が膨らむような期待があった。虹や蝶やそんなものでも嬉しかったのに、彼の面差しに溢れてくる

ような存在感が眩しかった。

だから、二度目に逢った時、彼に何かが起こったことははっきりと分かった。夏の初めにリィザを見つめていた瞳の色は同じなのに、そこにあった零れるような命の火が揺らぎ明滅していて、全く力無い、ただあるだけのようなものになっていたからだ。

魂が抜けてしまったようなぼんやりした、殆ど無気力というべき表情が胸に鋭く突き刺すように痛かった。顔立ちはあの時と変わらないはずなのに、そこに激しく強い光がないだけでまるで別人のようだ。

礼を言わなくてはとリィザは思っていた。造花はあの時、ディーから貰った大切なものだった。その彼ももう自分の所には来ないと言ったきり、その言葉を守り通しているけれど、あの瞬間にはリィザにとって、数少ない安心して身にまとうことの出来るものだったのは真実だったから。

けれど、礼だとか彼の名前を知りたいとか、そんなことは吹き飛んで、ただ傷ついた顔つきで不機嫌に部屋にいた彼を、自分はどうしたら良かったのだろう。話せと言われても咄嗟に思いつかない愚かさが自分で苛立たしかったが、彼の方はそれで更に機嫌を損ねてリィザに構わず一人だけの世界に籠もってしまった。

悲しいと思い、今謝りたいと思うのはそのことだ。彼が何かによってひどく打ちのめされて傷から血を流しながらのたうち回っているのは分かる。それは既に理屈などで納得するようなことではないのだ。

だから尚更悲しい。彼が一人で自分を慰撫しようとしたこと、自分の中の世界とその幻想の中に引きこもり、その幻想に現実を無理矢理合わせようとしたこと。何よりも、彼がリィザを側に置きながら孤独に易々と身を委ねてしまったことが、とてつもなく悲しいのだ。

一人でいる孤独よりも、他人を側に置いた孤独の方が、数段悲しく、辛く、切なく苦しい。

それは誰にも頼るよすがが無いということだ。外で傷ついた身体を癒すようにして女に依存して一時の安息を得ることをリィザは決して否定しない。誰かのために自分が頼りない糸のようなものにでもなれるなら、肉体的な苦痛はじっと甘受しながらでもいいと思う。

けれど彼はそれさえしなかった。何か話せ、という言葉が自分と世界を切り離そうとする言葉で、もういいと苛々と呟いたのはリィザのことをその場所にさえ認めなかったという意味だ。

あるいは、彼が寝転がっているときにふと手を伸ばした、あの指先を掴まえば良かったのかもしれない。その仕草が何かを必死で探しているように見えて、余りに痛々しくて動けなかった。

その後の急な衝動も、乱暴で唐突な手管も、ただ辛い。俺を見ろと言った時、彼の表情があまりにも静かで何も浮かんでいなかったことが。ひどく辛くて辛くて死にそうだというような目をしているのに、表情は凍ったように薄かったことが。

その辛さが彼を見つめる仕草で自分の中に雪崩れ込んできそうだったから少しでも何かに触れればと手を伸ばしたリィザを振り払ったことが。——彼の美しく華やかな光を放っていたような面差しが、無惨なまでに輝きを失っていることが。

彼に何をしてあげたら良かっただろうとリィザは考えている。少なくとも、単純な性的接触で

ないことははっきりしている。彼が欲しがっているのはもっと違うものだ。

何を求め探していたのか、宙を攪拌するように伸ばしていた手が遂に何も掴めないのだと彼が知ってしまう前に、あの指を掴まれば良かった。私がここにいますと言ってあげれば良かった。怪我をした獣は慣れないと知っていても、強く胸に抱いて大丈夫と言ってあげれば良かった。大丈夫。大丈夫。

今は辛くても、きっといつかいい未来がくるから、大丈夫よ——と。

リィザは視線を格子の町の外へ流し、そして待っていた機会に近いものを見つけて声を上げた。彼の名前は知らない。けれど、確かに彼はこの妓楼の常連といえたから、顔は知っていた。「待って、待ってお願いします！　お願い、待って！」

大きな声を出すことなど滅多になくて、それだけで心臓が破裂しそうだ。雑踏の人々が一瞬何事かと足を止める。その中にその少年の姿もある。一所懸命にそちらへ視線をやってどうにかかち合わせると、少年が意外そうな表情で俺？　と自分を指した。

リィザが頷くと、少し首を傾げたままで格子の前に立つ。彼はすらりと背が高く、手足がほっそり長い。笑顔がほどよく明るくて、嫌味がなかった。

どうしたの、と聞かれてリィザは彼の袖を掴み、私、と言った。

「この前の……あの、……」

リィザは言いかけながら、「彼」の名前を知らないことに気付く。あの人が、と言ったきり言いよどんでいると、少年の方が先に承知したらしい。ああ、と軽く声を上げて頷いた。

「奴ね、うん、奴がどうかしたの」

「この前……私、何も出来なくて、謝りたくて、それで」

少年はゆるく笑った。気にしないでいいよ、となだらかに言われてリィザは首を振る。最初の時、ただ見つめるだけで言葉さえ殆どかわさなかった。そして次の時には彼の言葉に一筋も触れられなかった。

「お願い、私が謝りたいと言っていると、伝えて欲しいんです。——お礼なら、何でもしますから……」

「何でもする、なんて簡単に言っちゃ駄目だよ」

少年は苦笑し、奴のことは気にしないでよ、と付け加えた。

「あいつはちょっと苛々している。君に当たったなら済まなかったというのはこっちの方だと思うよ……色々あってね、今ちょっと荒れてるから」

少年は肩をすくめる。でも、とリィザは強く言い募った。

「お願いします。この前は何一つ言えなかったから、今度はきちんとしたいんです。お願いします、お願い、あの人にもう一度会わせてください、お願い……」

彼の袖を掴んだまま、リィザは項垂れるようにする。少年は困ったように溜息をついた。何かを思案しているのだろう、亜麻色の髪に手を入れてひたすらかき回しながら宙を睨んでいたが、やがて頷いた。

「一応伝えるだけ伝えておくけど、保障はしないよ。それでいいだろ？ ……ねえ、それともし、奴と話が出来たら……そうしたら彼に優しくしてやってくれないか。女の子が気にかけてくれたらもうちょっとましだと……」

そこまできて少年はふと口をつぐみ、照れ笑いになった。そんな事を他人に頼む愚かしさを思い出したらしい。リィザはそれでも分かりましたと頷いた。優しくしてやって欲しいという言葉にちりばめられた、少年の気世話が良く分かったのだ。

リィザの生真面目な態度に少年は少し顔をほころばせ、頼むよ、と今度は小さく呟いた。

「……あんた、奴がこの前別れたばかりの女とちょっと似てるのさ。だからってわけじゃないんだけど、なるべく親切にしてやって欲しいんだよ……俺が頼むのも変な話だけどさ、奴が来たらそうしてやって。金は奴に持たせておくから、頼むよ」

少年は念を押して雑踏に消えた。リィザはほんと溜息になって格子から離れる。

ともかく賽は投げた。これがどんな目を出すかはまだ分からないが、彼は……来るだろうか。そんなことをちらりと思い、リィザはじっと床を見つめ、深く頷いた。

来る、という確信に近いものがひたひたとわき起こってくる。あの少年もそのつもりがあるのだろう。保障はしないといいながら、揚げ代の話まで口にした。

リィザは待合いから離れ、裏階段から自室へ戻った。大抵部屋の中は片づいている……という

よりは乱雑にしておく程の広さもないのだが、それを一度ざっと点検して髪を丁寧にとかした。そっと鏡台の引き出しを開ける。

中にはいつか大切な人から貰った硝子の小鳥があった。若様、と呟いてそれに触れる。硝子の透明でさやかな質感が指にくる。若主人を恋していた頃、彼を思うだけで幸福だった。

あの気持ちがあってよかった。リィザは微笑む。恋があって、その薄い悲観があって、それでも喜びがあって絶望があって、最後に希望があった。その形がまだはっきりしないことが自分にも辛かったし、それで見失ってしまったような思いもあったけれど、希望の光感を知っていればそれを思い出すことが出来るはずだから。

じっと鏡の中の自分と向き合っていると、不意に表廊下の扉が叩かれた。小間使いの少女が客の来訪を告げている。

リィザはゆっくりと扉に歩み寄って内側に開いた。静かにあらわになる面輪は彼だった。リィザと目線さえ合わせないで、ただむっつりと押し黙って立ちつくしている。その腕をそっと取ろうとすると、やはり拒絶だった。乱暴に振り払い、何だよ、とかすれた声を出す。

リィザは中へ、と身体をずらす。仕方なさそうに部屋に踏み込んでくる彼の背後で扉を閉めて、リィザはありがとうございますと小さく言った。

少年は振り返り、やはり目は合わせないまま、だから何だよ、と低い声を出した。

リィザは少しだけ笑う。こんな声を知っている。いつか怪我をした狐が農場に紛れ込んだ時にこんな声で鳴いていた。自分に近づくものは敵だという威嚇、痛みがあって血を流しているからこそ、全身で抗う空気。

だからこんな時にどうしたらいいのかは知っていた。リィザは微笑み、彼の方に迷いなく近付いていく。怯えたように彼が後じさる。じりじりと微妙な距離を残して彼が部屋の中へ後退するのをリィザは脅かさないように歩みよっていく。

「――やめろ」

彼が不意に唸った。

「何の用だ、さっさと言えよ。俺は奴が約束をしたって言うから、それだけで」

「私、この前言い忘れたことがあって」

リィザはじっと彼の目を見る。彼がリィザの視線から逃れるように目を閉じて在らぬ方向を向いた。

それがやはり、痛々しくて胸に響く。可哀想だという声が耳の奥から、脳の底から、身体に流れる全ての記憶からわき上がってくる。

何だよ、と彼が喘ぐように言った。リィザはそうっと手を伸ばし、彼の手を取ろうとした。少年がそれを振り払い、触るな、と怒鳴る。リィザはもう一度同じ事をする。再び少年がそれを叩き返す。更に同じ事をする。

彼はぴくりと指先を痙攣させただけで、もう打ち返そうとはしなかった。

リィザは彼の手を取り、あの晩出来なかったことを償うようにゆっくり、強く、柔らかく握りしめた。

やめ……と言いかけて、彼が黙り込む。リィザを見なかった瞳がようやく正面に来て、ああやはり彼は美しいのだと感じる。

リィザはじっと彼の目を覗き込むようにする。彼が微かに震えながら目を合わせてくる。

最初の晩のように何の負荷も気負いもない視線ではない。あれから彼に何か決定的なことがあったのは本当だろう。けれど今、あの晩と同じようにリィザを見ている。最前の全く触れられなかった夜のようにでなく、まっすぐにではないけれど、リィザを見ようとしている。

リィザは瞳をそらさないままで彼の手に指を絡め、もう片方の手で彼の頬を撫でた。びくりと彼が反応する。震えが来ている。だからリィザはそっと笑い、目を合わせたままで大丈夫よ、と言った。

——不意に彼が呻いた。顔が歪む。

それまで投げやりで虚脱したような気配が残っていた表情からそれが波引いていく。

彼は微かに何かを呟き、首を振った。

「違う、俺は……お前は、彼女じゃない」

リィザは頷き、違います、とはっきり言った。

「でも、私はここにいます。あなたの近くに。そして私はあなたの敵じゃありません。ただ、あなたに謝らなくてはいけないと思ったんです。この前、あなたに大丈夫だって言ってあげられなかったから」

それを言うと、彼は首を振った。その仕草は否定ではなく、否定を偽装したもっと、という欲求であることは分かった気がしたから、リィザは更に強く言った。

「大丈夫よ、大丈夫。ゆっくり息をして、ゆっくり眠れば、いつか朝が来るみたいに希望が戻ってくるから」

彼が何かを喘いで首を振り、そして希望、と唇をそよがせた。そう、とリィザは深く頷いて、彼の頬を両手で挟むようにしてゆっくり愛撫する。

大丈夫、と言いながら撫でてやると、不意に彼がリィザの肩に触れ、一瞬迷って抱きしめた。それは殆ど縋り付くような形であった。

微かに耳の側で震える吐息が聞こえる。泣いているのだ。

リィザは彼の男にしては華奢な肩を抱き、ゆっくりと背中を撫でながら、大丈夫よ、と繰り返した。

「大丈夫、大丈夫。今は辛くても、きっといつかいい未来がくるから、大丈夫よ……」

リィザが呟く言葉に彼が呻き、やがてずるずると跪いた。

床に座り込んでリィザの肩に額を押しつけ、彼が泣いている。それをいたわるために彼の頭を抱きしめてやると、丁度リィザの胸の辺りに彼が頬を押しつけるようになった。

母性というのはこういう気持ちなのかもしれないとリィザは肩を震わせて泣いている彼を胸に抱きながら思う。彼はしきりとエミリアと呟いていて、それがきっと彼が失ってしまった恋の名前なのだろうと悟った。

むせび泣く彼の声に紛れて、遠く鐘が聞こえた。リィザは視線を上げる。もうタリアの日が落ちる時間だ。ふっと周囲が闇へ戻っていくのに彼も気付いたのか、怪訝に顔を上げる。リィザは火を消す時間なんです、と告げてこの部屋の明かりも落とした。

その途端、世界は青い闇に沈んだ。こんな光景は初めてなのだろう、彼が不思議そうに天窓を

見上げ、お前、と不意に言った。

「——この前は、済まなかった」

声は涙の余韻で震えていたが、落ち着いて静かだった。リィザはじっと月明かりの中で彼を見る。彼もリィザを見ている。彼がリィザを抱いて寝台に倒れ込んだ。

その瞬間、リィザは再び息が止まりそうになる。どんなに感情があったとしても、やはり身体が反射的に強張るのだ。本当は彼を抱きしめなくてはいけないと思うのに、いつもの苦役、ひどい苦痛の記憶が悪夢として目裏に蘇ってきてどうにもならない。

リィザは喘ぎ、ぎゅっと目を閉じた。相手が誰でも苦痛であるならば、これにはもう期待は抱かないと胸に呟いた時、彼が手を、と言った。

「……手を、握ってて……離さないで、そのままにしておいて……」

リィザは言われた通りにする。彼はそれで安堵したような吐息を漏らし、リィザに身を寄せて静かに目を閉じた。彼が自分を今抱く気がないことを知り、リィザは悲しくなるほど安堵を覚える。遊女としてはまったく有能でないことを彼に教えたいとは思わなかった。

リィザも彼と同じように身を寄せ合い、目を閉じる。月の下で眠りに落ちていこうとするその間際、彼の呟きがありがとうといったのが聞こえた気がした。

リューズはうんざりしながら唇を開いた。

「彼は私を助けてくれたのです。守護が遅れたのは私が両親と話があるために彼を遠ざけていたからで、彼が不首尾だったわけではない——同じ話を何度すれば彼を解放してくださるんです。彼は、私の大切な……」

言いかけた先を、少し離れた高い位置に座っている魔導士が手を挙げて制した。リューズはむっと黙り込む。彼は他人に制御されることになれていなかった。

「殿下のご主張は最前からよくよく承知しておりますとも」

話す魔導士の衣は通常の黒または暗灰色ではなく、長老会の一員であることを示すための鼠色だ。銀の仮面の額には魔導士たちの最高位を示す人面鳥の型どりがある。

「しかし、魔導士としての規範は必ず優先されるべきものです。殿下は彼の顔を見ていないと仰るが、それを我々がどう信じるかは別の話です」

「私が嘘をついていると言うのですか？」

リューズは次第に不機嫌になるのを隠せない。苛立ちばかりが募る。

「私は本当に動けなかった。彼が私の瞼を閉じたらもう自分で開けることは出来なかったのです、毒性の判別にいつまでかけるつもりなのですか」

つい強い口調になったことをリューズはすぐに自分で恥じ、俯いた。長老会の魔導士たちがゆるやかな吐息を漏らす。

「ともかくも殿下。彼が殿下をお守り申し上げるのは彼の義務です。絶対の服務です。なるほど刺客は取り押さえましたが殿下に構っている間に自決を許してしまった、それに殿下は見ておられなかったと仰いますが自室でない場所で仮面を外している。これは審議に値する重大なことなのです」

そうですが、とリューズは頬を厳しくして溜息になった。

薔薇の庭園で襲われた。刺客は一人であったようだが、よく覚えていない。首筋をかすった刃に何かが塗りつけてあったらしく、それでリューズは危うく命を落とすところだったのだ。

マルエスの不首尾だ、という長老会の主張には理もある。マルエスが咄嗟に自決を阻止する手段をとらず、リューズの怪我に手を取られている間に呆気なくそれを許してしまった。

何よりも高位の魔導士達が言うように、仮面を外すことは重要な違反だ。見られていたかどうかは考慮には入るが重要な項目ではない。マルエスが仮面を外したのは自分の首筋につけられた痕跡からの毒を吸い出すためで、その感触がうっすらそこにあったような記憶はある。確か四度までは数えたはずだ。けれど、それは重要では無いというのが長老会の見解であった。

それに彼はリューズの護衛魔導士であったから、護衛が義務という言葉は正しい。本来は主人に退去を命じられても隠遁して同行するのだという内部サービスはこの一件で初めて聞いたのだが、ではこれまでマルエスが下がってくれていたのはリューズの心を考慮してくれたという逆の証明であった。

けれどマルエスがいないとどうにもならないことが多い。「彼」の搜索もそのうちの一つだが、日常や学問の全てに置いて、彼は良き相談者であった。実際の所殆どをリューズが一人で語っているのを聞かせている形ではあるが、それがいないのとはまるで違うのだ。

服務規令違反であるという長老会の主張は間違っていない。けれどリュースにはマルエスが必要だったし、結局事なきを得たのも彼の功績であるのは本当だった。

治癒の魔導は解毒であるならまず、その毒の種類から判定し、それによって化学式を書いた後に魔導言語に直してゆかなくてははいけない。つまり、その場では最も原始的な、傷口から吸い出すという行為がもっとも有効であった。

マルエスは今すぐに処置をしないと間に合わないと言った。事実リュースは身体の麻痺で呼吸さえ出来なくなりかけていたのだ。マルエスとて仮面のことを考えなかったとは思わない。けれど、それを捨てても自分を救おうとしてくれたことがリュースの心象の大きい部分を占めていた。

.....と長老会には何度もマルエスの身柄を戻すように申請しているのだが、一向に許可が下りない。魔導士の審議には時間がかかると言われているが、半月も一人でいるのにはさすがに滅入りそうだった。

毒物の判定が出来ればリュースの身体が動かなかった、という証言にも裏付けが出来る。マルエスの拘束はなるべく早く解きたかった。

この事件のことは父が非公開に指定したから既に解決の糸口は断たれている。非公開にしたのはリュースへ刺客の手が伸びたことで、もう一人の皇太子候補であるカルアへ意味のない侮蔑が向くのを怖れたためだ。それはリュースも構わない。

随従の魔導士が頻繁に立ち替わる中、それが自分との適正の試験であることは察していた。だがマルエスほどに馴染めそうな者はいない。彼とは長いな、とリュースは改めて思った。

「では、審議はいつ頃終わるのです。私はあのことでそう打撃を受けなかった。これはマルエスがいたからこそだと考えています。今後の安全のためにもう一人か二人申請を出しますが、私のことは彼が一番良く知っている」

「無論、存じております、殿下」

言葉だけでかわされてリュースは苛々としている。毒素の抜けたあとの反動で微熱が続く体調をおして魔導の塔にまで出向いてきたというのに、結局面会さえ許されないのだ。

マルエスは必ず返してください、とリュースは強く言った。「彼」の搜索のこともあって、やはり彼でなくてはならないことが多いのだ。考慮いたしましょうと魔導士達が言って、席を立とうとした。リュースはそれを呼び止め、もう一つと切り出す。

マルエスを最終的に取り戻すのは別にして、長老会に要請することがあったのだった。

「それと、新しい魔導士の申請なのですが、一人希望があります」

魔導士たちが頷き、席に座り直した。

誰をご所望ですかと促されてリュースはカノンをと、言った。それが長老会の議場にほわんと反射して消えた瞬間、高位の魔導士たちが一斉に何かに撲たれたように身を固め、そして身構えたのが分かった。

リュースはその空気に僅かに眉根を寄せる。カノン、と呟いている長老会の魔導士たちは一様にひどく狼狽しているらしいのだ。

「カノンで不都合がありますか」

長老会の仕業にすでに倦んでいたリュースは自分の声が尖っているのを自覚したがあまり訂正

する気にもならなかった。魔導士たちが机の下でリユースから見えないように手の無音会話を行っている気配がする。リユースがその時間に再び焦れてくる頃に、ようやく一人が口を開いた。「了解いたしました、殿下。では後日、魔導斑紋の判定をト占版にて行いますので結果をふまえて回答をいたします」

リユースはじっと魔導士たちを見る。この至極当然の回答がでるまでの時間の早さには何かが潜んでいるような気配だった。だからお待ちなさい、と声をあげる。

「ト占版の斑紋判定なら済んでいます——マルエスにさせました。非常によい結果が出ております、問題はありません」

事実、斑紋の合致はマルエスよりもよく揃ったのだ。魔導士たちが微かに唸ったのが聞こえた。これは何か特別のことらしいとリユースは気づき、上段の魔導士たちを見据えた。

「魔導士カノンを私の護衛魔導士に申請します。本人と話も済んでおりますので、長老会の追認を頂ければそれで発効します」

魔導士たちが困惑のうなりを發した。マルエスのことを散々引き延ばされてきたことの溜飲を僅かばかり下げ、リユースはよろしくどうぞと姿勢を正した。

と、中央にいた最高位の魔導士が分かりました、と低く言った。

「ではこれより同志カノンの転任について長老会で決を採りましょう——同志レガデラからどうぞ」

リユースははっとする。この先が読めたのだ。レガデラという魔導士が否、と言うのが聞こえた。つまり五人全員の総意をもって否決の結論に至るということになる。その通りに五回の否が聞こえた後、長老会の結論は否決ですので申請は却下いたしますという決まり文句が振った。

何故、とリユースは声を荒げた。途端にまだ万全でない体調が眩暈を訴えてくる。それを押し殺してリユースは何故ですかと問い直した。

「魔導士カノンはとても優秀な若手の魔導士である旨を聞いております。事実論文も良く書いておりましたし、術式も構成も非常に才能豊かです。私は私の今後の魔導学の研鑽のためにも彼を側に置いて相談を……」

「殿下、魔導士は殿下の玩具でも、魔導学の顧問でも、実験台でもありません」

リユースはそれは、と言ったきり絶句した。最後の一言は魔導士たちの彼に対する怒りの代弁なのかもしれない。

——時間生成理論。あの「彼」がひねり出した新機軸の魔導理論。

理屈としては確かに面白かった。最初にそれを懸賞論文として王宮内で読んだ時にはそれを書いた少女の指先と想念が作り出す、新しい世界の姿を見た気がしたのだ。

けれどそれはまさに机上論であった。それに気付かずに「彼」も自分も、まったく危機感などなくそれと戯れていた。紙の上でならどんな想像も体系化できるのだということに気付かなかったのだ。

リユースは項垂れ、あれは本当に申し訳ないことをしました、と呟いた。実験の失敗はそれが新理論の検証実験である時には起こりやすい。元々最後に発動の起爆を置く構成が多いために、失敗した時には通常何も起こらない。

だが、時間生成理論は違っていた。魔導理論に他からいじりまわした数字を入れて一見意味のある数値にすることなど、何故しようと思ったのかさえ、今となっては分かりたくない。

生成理論の実験は失敗した。引き歪んだ空間に実験に参加した魔導士を飲み込み、引き裂いてまったく違う場所へそれぞれ放り出したのだ。死体の回収には結局二ヶ月を要し、まだどこへ行ってしまったのか分からない部分が多い。結局それは人の身体では負担に耐えられないということだけが示された。

あの実験に従事してくれた魔導士は長老会の予備要員を務めていた優秀な者であったと後で聞いた。今現在の長老会にもしかしたら入っていたかもしれない。

魔導士は人ではありませんので生命に関してはお気になさらないくださいと彼らは口を揃えて言ったが、それが本心だと思ったことはなかった。そしてそれは今証明されたような形になる。

実験が停止され、理論の発展が凍結扱いになってもリユースはその論文を書いていた。致命的な欠点は何であったのかを解明すれば再びそれは新理論としての輝きを取り戻すはずで、そうになった時にまるで初期から考察が進んでいないことなど耐えられなかったのだ。

同じ事を考えるのはやはり研究者で、魔導学の研鑽を積んだものは一様にこの新理論に興味を示した。実験の何がいけなかったのか、原因は何だったのか、そしてその他の予備事項の小さな実験からの開始。それがいつか重大な部分が解明されていく過程で役に立つはずだと信じている。

けれどそれに対する非難は曖昧に提示された。リユースは分かりました、と顔を上げて長老会の魔導士たちを見つめた。

「魔導士カノンの申請と、私の護衛魔導士マルエスをお返し下さるなら、時間生成理論についての追求は私個人として放棄します」

この理論の旗手が今や自分であることは承知している。つまり理論の発展の頓挫だ。けれどこれは新しく誰かがこれからも書くだらう論文を眺めることで宥めてゆくことも出来る。魔導学と縁を切るわけでもない。

それよりもマルエスの返還とカノンの着任が優先だ。刺客などということも護衛魔導士が複数つくことで殆ど無に近いところまで可能性を下げることになる。両親の意向で皇太子の候補を降りかどうかはともかく、将来にはこの国を支えるための要人となることは決まっているのだ。

魔導士たちは彼にゆるゆると首を振り、多少哀れむような声を出した。

「残念ながら殿下、同志カノンの件についてはそれでも承認いたしかねます。何故か、ということについては我々の禁忌に触れるためお答えできません」

「……禁忌」

リユースは呟いた。魔導士の禁忌は三つしかない。個人情報秘匿、主命への絶対服従、長老会決定への絶対服従。主命と長老会決定の服従の内容が相反する時には長老会が優先される。これ皆全て、魔導の塔という特殊な組織が誕生した時から受け継がれている規則である。

主命とは関係がないはずだ。彼は今変声期の預かりで魔導の塔へ多く身を置いているが、タリア王の元への出向になにか禁忌が絡むなど考えにくい。では個人情報と長老会決定のどちらかにカノンの何かが抵触するということだ。長老会決定はこの代だけでなく、大綱を練る意味での判

例法のような使われ方もすることがある。その内容が極秘であるためにリユースでも見ることが出来ない。これを閲覧のために差し出せといえるのは、この国の皇帝だけであった。

リユースが俯いているのに魔導士たちは殿下と言った。

「しかし、時間生成のことを諦めてくださると仰ることに我々は深く感銘いたしました。ゆえに殿下のそのお優しい御心に免じ、同志マルエスにはなるべく早い時期に殿下の安寧を保つ役割に戻すことをお約束いたしましょう、それでよろしいですね」

取引にリユースは頷き、なるべく早く、と言った。

外へ出ると夕方近い時間であった。長い間長老会の面々と話していたことになる。道理で疲労が濃いのだとリユースは溜息をつき、魔導の塔の正門まで歩き出した。そこからは近衛のついた馬車が用意されている。

それに乗り込もうとした時、殿下という声が背後にうずくまったのを聞いた。リユースは振り返り、済まない、となるべく穏やかな声音で言った。

「お前の申請は撥ねられてしまった、済まないね、カノン。私にもっと力があれば良かったが……」

リユースは言いながら苦い顔になった。皇子であるという身分は魔導士の組織の前、そして刺客の向ける現実の刃の前にひどく無力であった。私はもっと大人にならなくてはいけない、とリユースは強く思う。

例えばマルエスを取り戻すのに取引にまでしなくてはならなかったり、カノンのことを命じる根拠が自分には何もなかったり、そんなことは一度経験すれば十分だ。

聞こえておりました、とカノンは淡々と言った。それから何かを一瞬思案したような沈黙の後、実は、と申し訳なさそうな声を出した。

「私は何度か申請を長老会に出し、全てを却下されて参りました。ライン殿下のお相手役も、身長が一番近いという理由で選ばれましたが、待機期間での限定だと最初から申し渡されてもおります。私は恐らく、何かのために早く死んで欲しい者なのだと思います」

「——そう。……でも、生きなくてはね。せめて自分が納得するほどまでには」

リユースはカノンの手を取ってやる。カノンがありがたいことです、と彼の手を押し包むようにし、膝をついて叩頭した。

「いつか殿下に時機が参りましたら、私を呼んで頂きたいのです。長老会の決定に優先されるのは最後には皇帝陛下のご意志のみです。どうか殿下、お約束は結構ですが、これを私が申し上げたことをどうか、どうかお心の隅に置いていただけたら望外の幸福です」

リユースは自分の足下に額をつける、少年魔導士を痛ましく見やった。彼は恐らく、自分とあまり年齢が変わらないはずだ。自分にも力が無く思い知ることばかりだが、彼の方が自分よりも沢山の制約がある中で生きている。魔導士の禁忌は破れば即ち死であることが多い。

リユースはそれを慎重に避けながら懇願する少年に胸の痛むような憐憫を覚えた。これはいつか「彼」に感じた憐れみと同じ種類であるように思われた。

カノンには才能があり、可能性がある。それが何らかの理由のために全てねじ曲げてゆかなければならないとしたら辛かったし、それを本人が辛いと思っているならば切なかった。

——彼は今、どうしているだろう。不意にリユースはそれを思い、カノンを見つめた。彼がカノンということはないはずだ……恐らく。けれど境遇や環境が似ている。彼に手を伸べるのと同じ気持ちで皇子はカノンを助けたかった。

皇子は分かったよ、と優しく言った。カノンが殿下、と深く頭を下げた。

「論文、読んで下さってありがとうございました」

リユースは曖昧に笑い、カノンの手を握った。

「また、その日に。それまで君も強くながらえておくれ」

はい、とカノンの声が微かに潤む。

リユースは遠い約束の為に微笑むと、近衛騎士が促すままに馬車に乗り込んだ。

水泡の夢 / Part1.赤い格子の町 / 上

<http://p.booklog.jp/book/32452>

著者：名嘉つぐみ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/birdcage123/profile>

サイト：<http://birdcage.main.jp/water/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32452>

ブックログのパバー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32452>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.